富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第34集

任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ

── 公害防除特別土地改良事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ ──

第二分冊

２００７年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第34集

任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ

―― 公害防除特別土地改良事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ ――

第二分冊

２００７年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

目　次

第Ⅰ章　まとめ …… 1

1　古代出土土器 …… 1

2　古代建物変遷 …… 13

3　中世建物変遷 …… 24

第Ⅱ章　考察 …… 47

1　古代の土器組成 …… 47

2　墨書土器について …… 89

3　古代の環状土錘について …… 107

4　製塩土器について …… 119

5　金属製品について …… 125

6　大型掘立柱建物について …… 133

7　土師器焼成遺構について …… 151

8　中世の土器組成 …… 157

第Ⅲ章　結語 …… 199

第Ⅰ章　まとめ

任海宮田遺跡のＢ地区からは古代～近世の遺構・遺物が確認され、当地で長期間にわたって集落が経営されたことが窺えた。主に古代～中世の建物群を検出したが、古代から中世へと連続して変遷するのではなく、10世紀前半頃に一度廃絶したあと、13世紀頃に再び集落が経営されたようである。第1分冊では任海宮田遺跡Ｂ地区の調査成果について概述した。ここではＢ地区の調査で検出された遺構と出土遺物の二点から簡単なまとめを試み、本調査の総括としたい。

1　古代出土土器

古代の遺構がＢ１・Ｂ６地区など限られた地区に分布しているのに対し、遺物は出土量に差こそあれ、調査区全域から出土している。出土遺物の大半が須恵器ないしは土師器であり、出土量は全体で破片数67302点を数える。そのうち、実測できたものは遺構出土のものを中心に3067点を数える。

a　胎土の分類

肉眼観察の結果、須恵器は７種類、土師器は５種類の胎土（巻末の写真１・２参照）に大別できる。以下に特徴を箇条書きにする。

（１）須恵器

Ⅰ群：胎土がやや粗く砂気が強い。断面の色は薄い灰色を呈し、出土量が最も多い。

Ⅱ群：胎土がきめ細かく、断面の色は青灰色、白色細粒が混じる。

Ⅲ群：胎土が非常にきめ細かく、断面の色は赤味をおびた褐色で、表面を黒褐色に仕上げる。大粒の白色粒が混じる場合もある。

Ⅳ群：生焼けの可能性もあるが、一定量出土する。断面白色を呈す。

Ⅴ群：胎土が練り込んだように層を成す。断面灰色もしくは赤味をおびる。やや大きめの白色粒と黒色粒が混じる。

Ⅵ群：胎土がやや砂ぽく、断面薄い灰色、黒班が目立ち、時に黒色粒の中央に穴があく場合もある。

Ⅶ群：胎土が非常に粗く、大粒の砂粒が混じる。

（２）土師器

Ⅰ群：胎土が粗く軟質で、断面の色は白黄色である。赤彩土師器・黒色土器にも多く認められる。

Ⅱ群：胎土が細かく、断面の色は黄白色を呈す。出土量が最も多い。赤彩土師器・黒色土器にも多く認められる。

Ⅲ群：胎土の特徴は２群に類似するが、黒色粒を多く含む。

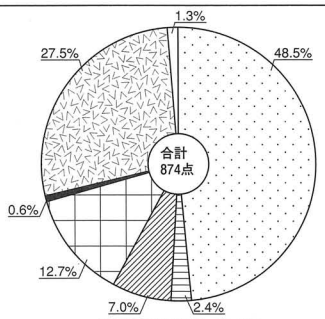
Ⅳ群：胎土がきめ細かく硬質で、断面の色は橙色を呈す。

Ⅴ群：胎土が粗く、断面の色が肌色で、赤色粒を多く含む。

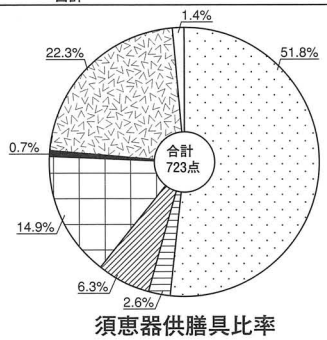
出土した須恵器の大半はⅠ・Ⅳ・Ⅵ群のもので、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ群は少量である。実測した遺物の内訳では、Ⅰ群（48.5％）Ⅱ群（2.4％）Ⅲ群（7.0％）Ⅳ群（12.7％）Ⅴ群（0.6％）Ⅵ群（27.5％）Ⅶ群（1.3％）となる。供膳具では半数がⅠ群のものであるが、貯蔵具ではⅥ群のものが半数以上を占め、筆記具ではⅠ群のものが多い。このうちⅡ・Ⅲ群のものは、調整に特徴があり、杯蓋や杯・Ⅲなどの調整が、他の須恵器に比べ回転ヘラ削りを丁寧に施し、ものによっては金属器的な光沢を備え

表1　胎土別組成表

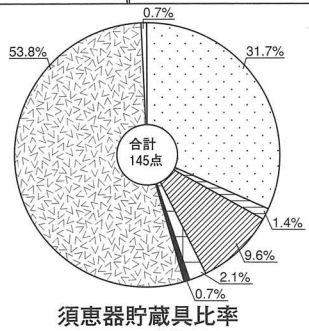
焼物種類	機種	用途	種類	数量 B1集計	B2集計	B6集計	B12集計	B13集計	集計		
須恵器	Ⅰ群	供膳具		83	11	180	21	79	374		424
		貯蔵具	甕	10		10			20	46	
			壺	11		14	1		26		
		筆記具				3		1	4		
	Ⅱ群	供膳具		5	1	9	1	3	19		21
		貯蔵具	甕						0	2	
			壺	1			1		2		
		筆記具							0		
	Ⅲ群	供膳具		17	2	21	2	4	46		61
		貯蔵具	甕	4		1			5	14	
			壺	5		4			9		
		筆記具		1					1		
	Ⅳ群	供膳具		26	8	39	8	27	108		111
		貯蔵具	甕	1		1			2	3	
			壺	1					1		
		筆記具							0		
	Ⅴ群	供膳具		1		3	1		5		6
		貯蔵具	甕						0	1	
			壺			1			1		
		筆記具							0		
	Ⅵ群	供膳具		45	6	71	6	33	161		240
		貯蔵具	甕	7	1	1			9	78	
			壺	39	5	16	1	6	67		
			横瓶			1		1	2		
		筆記具				1			1		
	Ⅶ群	供膳具		5		1	2	2	10		11
		貯蔵具	甕				1		1	1	
			壺						0		
		筆記具							0		
	小計			262	34	377	45	156			874
土師器	Ⅰ群	供膳具	土師器	91	3	62	3	4	163	347	432
			赤彩	20	3	108	2		133		
			黒色	36		14		1	51		
		煮炊具	甕	26	1		18	12	57	85	
			堝	23			2	3	28		
	Ⅱ群	供膳具	土師器	94	4	192		28	318	432	523
			赤彩	10		2			12		
			黒色	26	1	54		4	85		
		煮炊具	甕	21		44	5	10	80	108	
			堝	4		17	2	5	28		
	Ⅲ群	供膳具	土師器	70	6	64		3	143	166	186
			赤彩	12					12		
			黒色	7		4			11		
		煮炊具	甕	3	2	8			13	20	
			堝	4	1	2			7		
	Ⅳ群	供膳具	土師器	19		2		1	22	22	23
			赤彩						0		
			黒色						0		
		煮炊具	甕	1					1	1	
			堝						0		
	Ⅴ群	供膳具	土師器	128	4	109		6	247	253	263
			赤彩	1					1		
			黒色	4		1			5		
		煮炊具	甕	4		1			5	10	
			堝	5					5		
	小計			609	25	684	32	77			1427
合計											2301



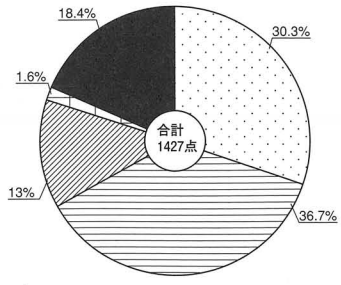
須恵器胎土比率



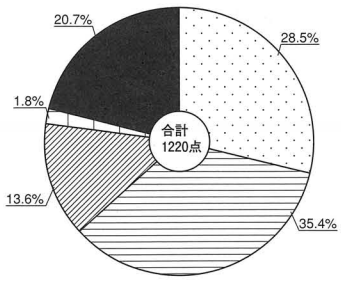
須恵器供膳具比率



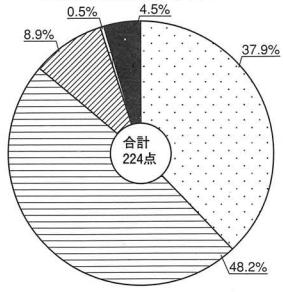
須恵器貯蔵具比率



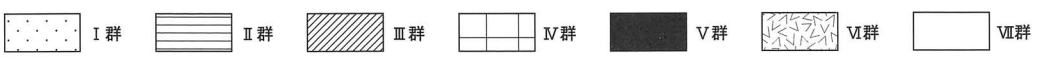
土師器胎土比率



土師器供膳具比率



土師器煮炊具比率



第1図　胎土別組成図

るものも見受けられる。Ⅱ・Ⅲ群の杯蓋は器形および調整の特徴から８世紀前半の杯蓋の特徴をもつものが多いが、杯Ｂに８世紀前半のものがないことや、同胎土の器種にⅢＢなどが含まれることから、９世紀後半のものと考えた。またⅡ・Ⅲ群の須恵器には後述する杯Ａｄや杯Ｂｃ・ⅢＢｂなどがあり、これらは体部の途中に稜をもつもので、他の胎土の須恵器では認められない器形のものが含まれる。

土師器ではⅣ群のものが少量で、他のものは一定量含まれる。実測した遺物の内訳では、Ⅰ群（30.3％）Ⅱ群（36.7％）Ⅲ群（13.0％）Ⅳ群（1.6％）Ⅴ群（18.4％）となる。胎土分析の結果（第４分冊第１章参照）では、Ｂ６地区の土師器焼成遺構の製品について、供膳具を中心に任海宮田遺跡特有の胎土をもつ一群があることが指摘されている。第１図が示す傾向では、Ⅰ群とⅡ群が煮炊具の大半を占めることや、赤彩土師器や黒色土器の胎土の大半がこの群に含まれること。土師器焼成遺構周辺の同時期の建物が分布するＢ１・Ｂ２・Ｂ６地区で、Ⅲ群・Ⅴ群の占める割合が高いことから、Ⅰ・Ⅱ群については外部からの搬入品である可能性が高く、Ⅲ群・Ⅴ群の土師器が焼成遺構で製作された製品の可能性が高い。Ⅲ群・Ⅴ群の土師器が焼成遺構で製作されたものと考えると、実測した遺物に限られるが、供膳具では35％、煮炊具では13％を占め、Ｂ地区全体の1/3程度を供給していたと考えられる。

ｂ　器種の分類（第２・３図）

Ｂ地区で出土した土器には、須恵器・土師器・黒色土器・赤彩土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・製塩土器などがある。用途による分類については、供膳具・煮炊具・貯蔵具・生産用具・筆記用具が出土しており、ここでは供膳具・煮炊具・貯蔵具について器種の分類を行なった。製塩土器については生産地から塩を入れる容器として持ち込まれたものと考えたため、ここでは貯蔵具として扱っている。

（１）　須恵器

（供膳具

－杯蓋－（１～３）主に杯Ｂとセットになる蓋で、杯蓋ａ・ｂが出土量の主体を成す。

杯蓋ａ（１）：天井部に鈕の付くもので、鈕や体部、口縁端部に様々な形態のものがある。

杯蓋ｂ（２）：天井部が無鈕のもの。

杯蓋ｃ（３）：口径の大きなもので、大型杯類の蓋と考えられるもの。

－杯－　（４～11）無高台のもの（杯Ａ）と有高台のもの（杯Ｂ）がある。

杯Ｂａ（４）：高台の取り付け位置や高台の形態に違いがある。

杯Ｂｂ（５）：杯Ｂａと同器形であるが、法量が大きく身の深いもの。

杯Ｂｃ（６）：体部が中途で屈曲し稜をなすもの。

杯Ｂｄ（７）：法量が大きく、体部の途中で沈線を引くもの。

杯Ａａ（８）：身の浅いもので、底部や体部の立ち上がりの形態に違いがある。

杯Ａｂ（９）：杯Ａａよりもやや深身のもの。

杯Ａｃ（10）：椀型のもの。

杯Ａｄ（11）：平坦な底部に体部が中途で屈曲し稜をなすもの。

－皿－　（12～16）杯よりも体部の立ち上がりが浅い。無高台のもの（皿Ａ）と有高台のもの（皿Ｂ）がある。出土量は杯に比べ僅かである。

皿Ａａ（12）：杯Ａと同器形だが、底径が大きく体部の立ち上がりの浅いもの。

皿Ａｂ（13）：底径が小さく、体部が浅く外側へ開くもの。

皿Ｂａ（14）：平坦な底部に高台が付く。底径が小さく、体部は外方へ浅く開くもの。高台の長いもの、短いものがある。

皿Ｂｂ（15）：やや尖底の底部に高台の付くもので、体部は中途で屈曲し稜を成す。立ち上がりは短く外側へ外反する。

盤Ａ　（16）：皿Ａａと同器形の大型のもので、底部から体部下半にかけて、外面に丁寧なヘラケズリを施す。

（貯蔵具

－壺－　（17～28）貯蔵具のうち、底部が平坦および高台をもつものを壺とした。

壺蓋　（17）：平坦な頂部から直角に体部が垂下するもの。短頸壺の蓋とみられる。

短頸壺（18・19）：体部が張り、短い口縁をもつ有台のもので、壺蓋とセットになるものとみられる。

直口壺（21・22）：体部が張り、口縁が上方に短く延び、底部が平底のもの。

広口壷（26）：大きく開く口縁部がつくもので、底部も含めた器形全体が分かるものは調査地からは出土していない。双耳壺の口縁の可能性も高い。

長頸壺（25）：細く長い口縁部をもつもの。広口壺と同様、器形全体が把握できるものは出土していない。

双耳壺（27・28）：長胴の平底の壺で、左右両側に耳をもつもの。大型のものが多い。

小型壺（20・23・24）：小型壺の出土量は少なく、器種では広口壺（20）と徳利形壺（24）が認められる。

横瓶　（29）：出土量は僅かで、側面に閉塞円盤痕跡が認められる。

－甕－（30～32）貯蔵具のうち、底部が丸底および尖低を呈するものを甕としたが、器形の全体を把握できるものは出土しておらず、口縁形態から判断した。法量から大甕・中甕・小甕に分離可能である。

甕Ａ　（30・31）：口縁部が無文を基調とし短頸のもの。

甕Ｂ　（32）：口縁部が装飾性をもち長頸のもの。

（２）　土師器

（食膳具

－椀－　（33～35）：須恵器杯の系譜をひく無高台のもの（椀Ａ）と瓷器の系譜をひく有高台のもの（椀Ｂ）がある。両者とも器の内外面に赤彩を施すものがある。椀Ａは本遺跡の出土量の主体となる土器で、一方椀Ｂは極少量確認できる。

椀Ａａ（33）：口径18㎝前後の法量の小さなもの。

椀Ａｂ（34）：椀Ａａと同器形で、口径20㎝前後の法量の大きなもの。

椀Ｂ　（35）：全体像の把握できる遺物は出土しておらず、底部破片のみ確認できた。

－皿－　（36～38）無高台のもの（皿Ａ）と有高台のもの（皿Ｂ）がある。両者とも器の内外面に赤彩を施すものがある。

皿Ａ　（36）：底径が小さく、浅く外へ開く体部をもつ。

皿Ｂ　（37）：皿Ａの器形に高台がつくもので、低短な高台と長い高台をもつものがある。

耳皿　（38）：皿Ａの左右両端を上方に折り曲げたもので、平底の底部に糸切り痕を残す。

高坏　（39）：中空で末広がりの低平な脚部をもつ。出土量は少ない。

(煮炊具

小型甕（40）：平底の底部をもち体部下半にケズリを施すものが多い。

長胴甕（41・42）：丸底の底部に砲弾形の体部をもつ。

鍋　　（43）：半球形の体部に外傾する口縁部がつく。

羽釜　（44）：長胴砲弾形の羽釜である。底部は未確認で、この個体のみの出土である。

台　　（45）：体部は口縁に向かってやや外反し、円筒状を呈す。底は抜けており、底端に方形の切り込みを3箇所もつ。

（3）　黒色土器

(食膳具

椀Ａａ（46）：無高台で深身の椀である。

椀Ａｂ（47）：椀Ａａよりも口径20cm前後を測る法量の大きなもの。

椀Ｂａ（48）：広く平らな底部に、器壁の薄い体部が延びる畿内系のもの。体部外面にまでヘラケズリが施される。

皿Ｂ　（49）：有高台の皿。出土量は少ない。

鉢Ａ　（50）：椀Ａｂと同器形で更に大型のもの、体部外面下半から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整がを施される。

鉢Ｂ　（51）：鉢Ａに高台がつくもの。

（4）　製塩土器

製塩土器Ａ（52）：短脚尖底のもので、丸底ないし平底風の底部を呈し底部径が狭く、体部との立上がりに段をもつもの。

製塩土器Ｂ（53）：口縁部と体部の間に細くしまった頸部をもつもの。

製塩土器Ｃ（54）：丸平底の甕型土器で、内面に横および斜位のハケメ、外面に縦位のハケメを施し、器壁が薄く平滑に調整されているもの。

（5）　緑釉陶器

椀Ａａ（55）：軟質のもので、円盤状の削り出し高台をもつもの。

椀Ａｂ（56）：硬質のもので、体部が内湾し、円盤状の削り出し高台をもつもの。

（6）　灰釉陶器

椀（57）：有高台の椀である。口縁部や体部、高台の形態に違いがある。

皿（58）：有高台の皿である。体部や高台の形態に違いがある。

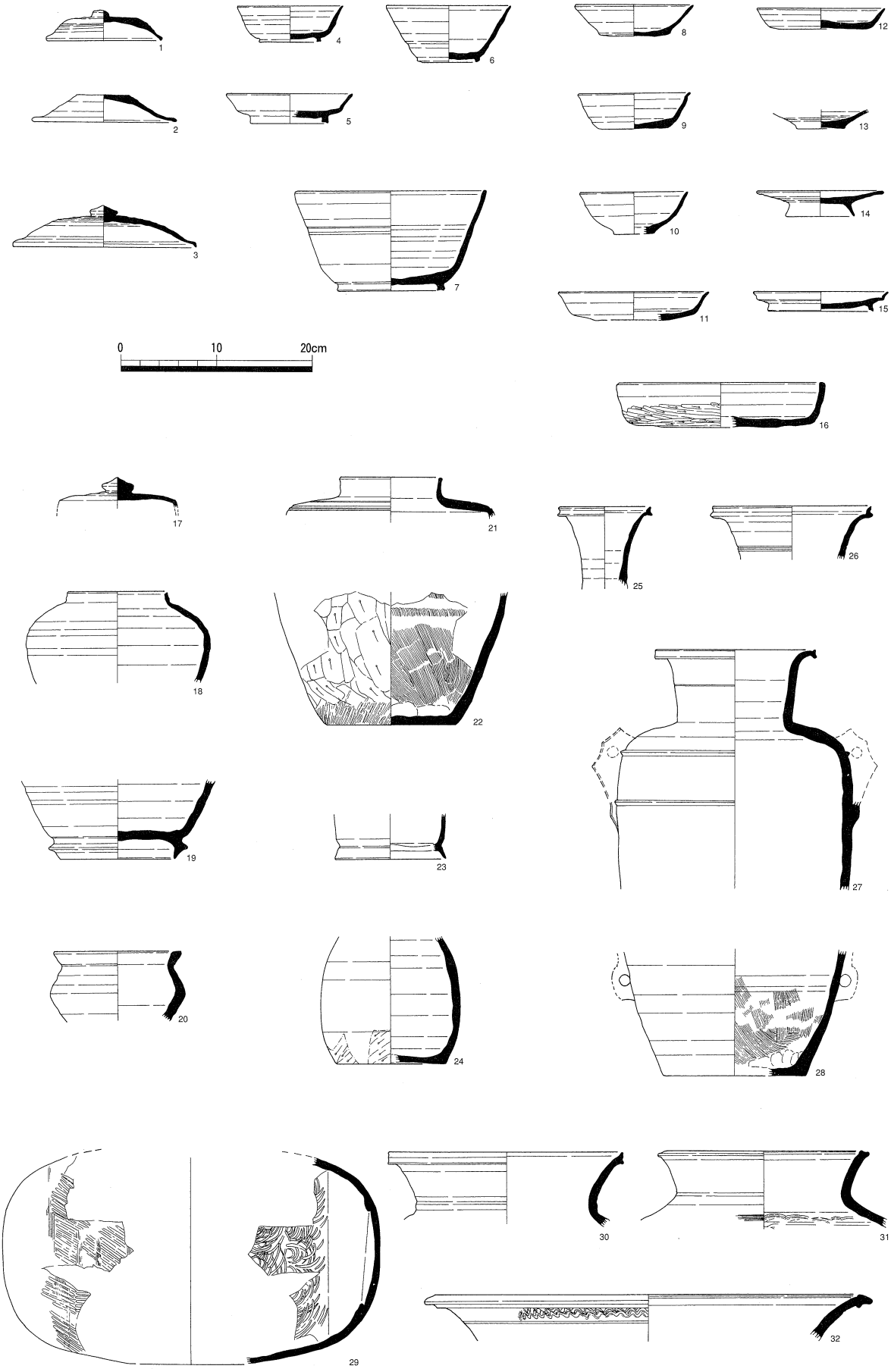
広口壺（59）大きく開く口縁部がつくもの

長頸壺（60）細く長い口縁部をもつもの。

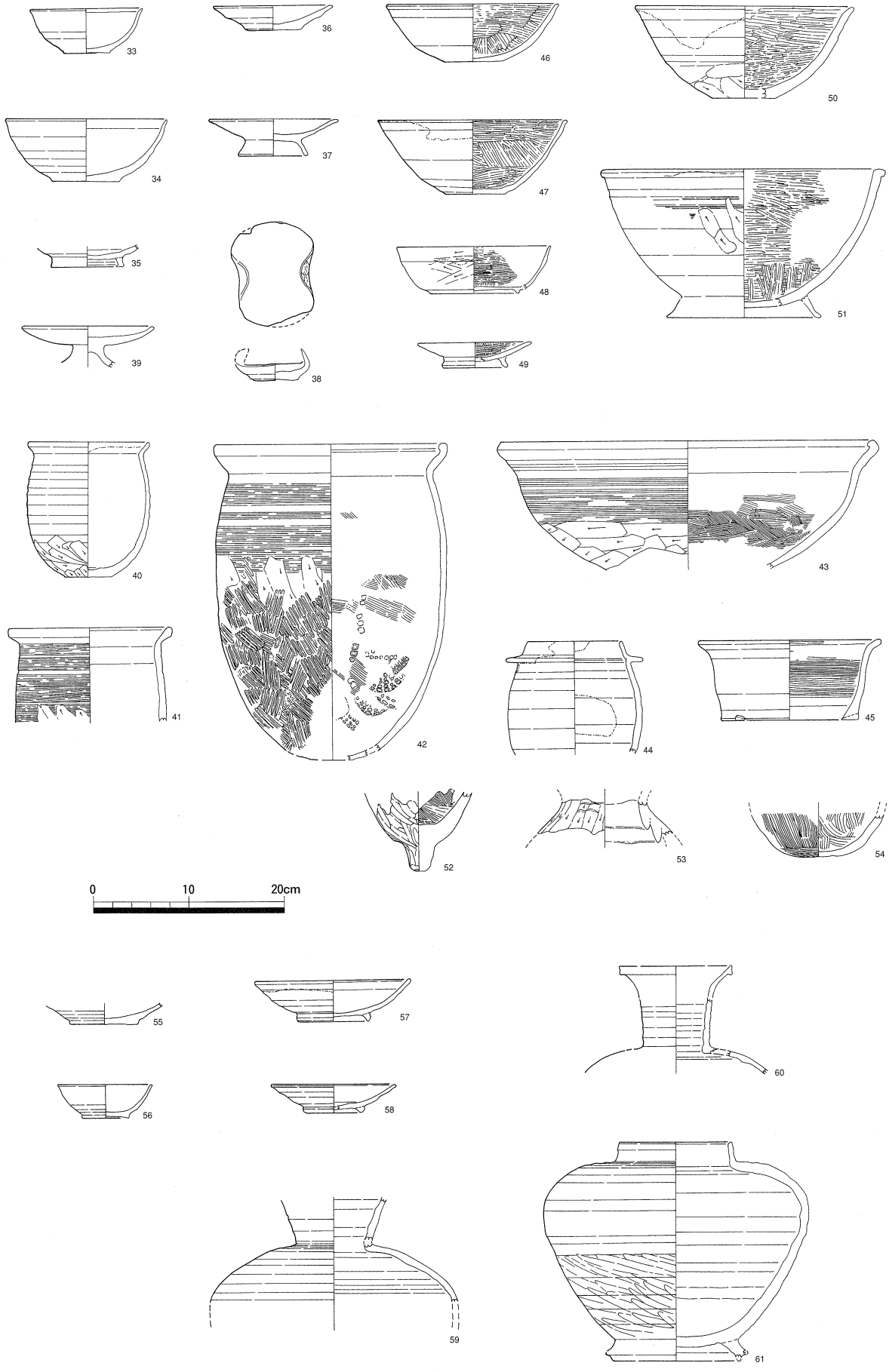
短頸壺（61）体部が張り、短い口縁をもつ有台のもの

c　土器の変遷（第４～６図）

任海宮田遺跡で出土した土器の概要及び器種については、第1分冊の各遺構および遺物の項で述べており、ここでは土器を５期に分類し、その変遷を時期毎に掌握して建物群等の時期変遷に援用する。分類に際しては、竪穴住居床面直上付近の出土遺物を中心に図示したが、補完的に床面以外の遺物についても選別して図示している。但し竪穴住居出土遺物のため、上記の分類案よりも図示できた器種構成は少ない。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
10
20cm
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

第2図　器種の分類（1）


33
36
46
50
34
37
47
35
48
51
39
38
49
40
43
41
42
44
45
52
53
54
0
10
20cm
55
57
60
56
58
59
61

第3図　器種の分類（2）

Ⅰ期の土器群（第４図上段）

東側建物群（Ｂ12・13地区）が形成された時期で、ＳＩ32～34の土器が該当する。須恵器は供膳具の杯蓋ａ、杯Ａａ・杯Ｂａ・杯Ｂｂが認められる。蓋は疑宝珠状のツマミが付き、口縁端部は下方へ垂下し、先端の尖りの鈍い三角ないしは内側に稜をもつ方形に近い形状に仕上げる。頂部外面にヘラケズリを施すものがみられる。杯Ａは口径11cm～13cmのものがあり、体部と底部の境界に丸みをもつ。体部の立ち上がりは５期を通じて最も強い。杯Ｂは器壁が厚く、体部と底部の境界に丸みをもつ。境界よりも内側に高台がつき、高台は水平もしくは内端で接地し、方形もしくは踏張りの弱い形態のものである。

土師器は煮炊具の甕・小型甕・鍋が認められる。甕は体部上方が張る器形で、口縁は肩部との境で稜をもって外傾する。口縁端部は単純に丸く収めるもの、面取りして方形に仕上げるもの、上端を軽く引上げるものがある。調整は内外面ハケメを基調とし、外面下方にケズリを施す。小型甕は口縁端部を丸く収め、外面下方にヘラケズリを施す。鍋は体部上半が張る器形で、口縁端部は面取りして方形に仕上げる。

Ⅱ期の土器群（第４図下段）

西側建物群（Ｂ１・6地区）で掘立柱建物が出現する時期で、東側建物群も継続して経営される。ＳＩ14・31の土器が該当する。須恵器は供膳具の杯蓋ａ・杯Ａａ・杯Ｂｂが認められる。蓋はボタン状のつまみが付き、端部は内側に稜をもち方形に近い形状のものが多くなる。杯Ａは11cm台が主体となり小型化する。底部径が小さく、体部の立上がりが弱くなり、器壁はⅠ期と比べ薄くなる。杯ＢはⅠ期に比べ器壁が薄く、体部と底部の境界に丸みをもつ。境界よりも内側に高台がつき、高台は水平もしくは内端で接地し、形状は方形である。

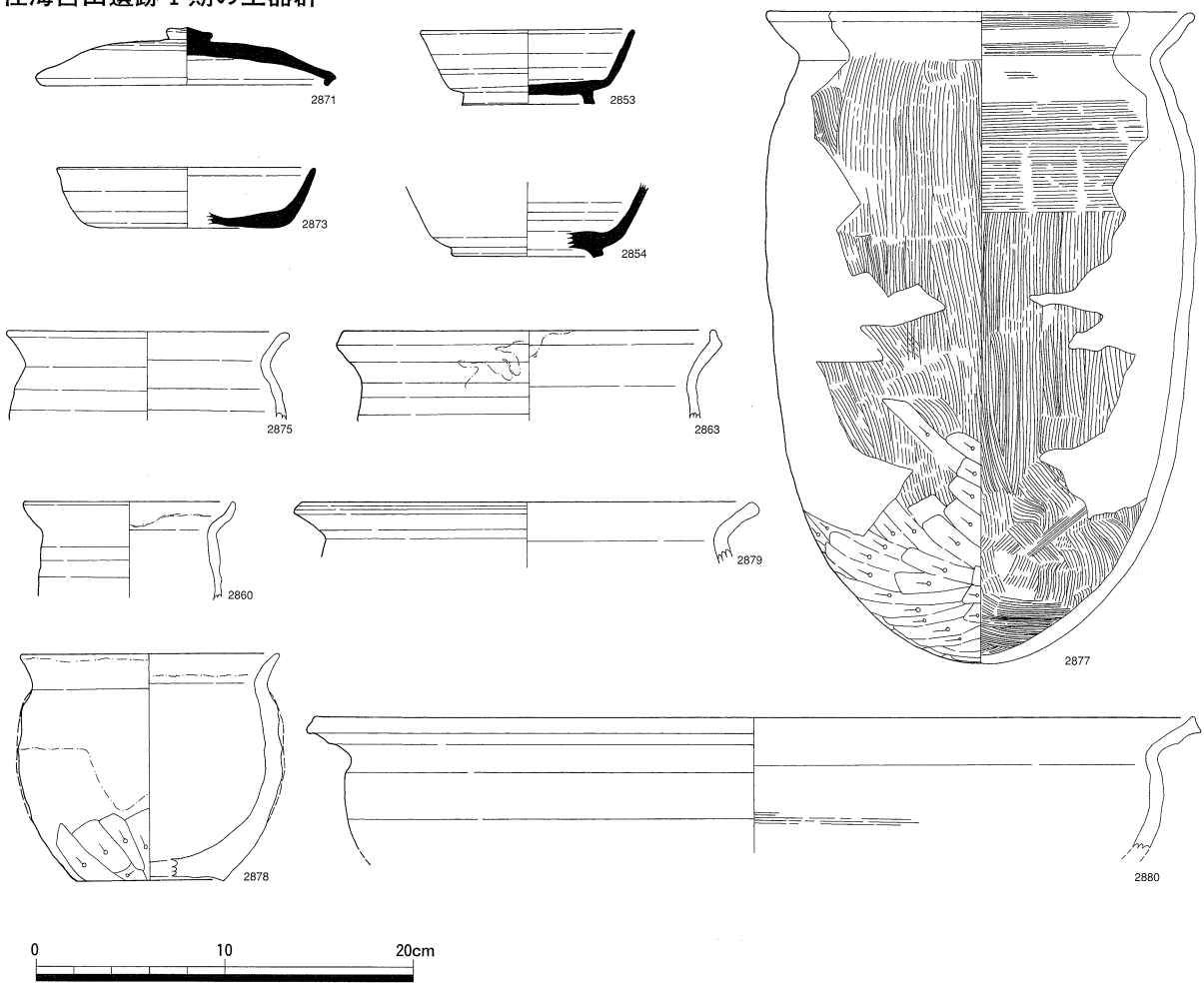
土師器は供膳具と煮炊き具が認められる。供膳具の椀Ａは体部が内湾して立上がり、体部外面下端および外底面にケズリが施される。土師器と同形態の黒色土器の椀Ａも認められる。煮炊具では甕・小型甕・鍋が認められる。甕の体部の張りはⅠ期に比べやや下方に下がる。口縁端部は上端を軽く引上げるものや、端部が肥厚し上下に拡張するものがある。調整は体部外面の中位まで上下方向のヘラケズリを施すものも認められる。鍋は体部上半がやや張る器形で、口縁上端を軽く引上げる。この他、西側建物群の建物群３ではⅡ期の掘立柱建物があり、包含層中から灰釉陶器（Ｋ14）や軟質の緑釉陶器が少量だが認められる。

Ⅲ期の土器群（第５図上段）

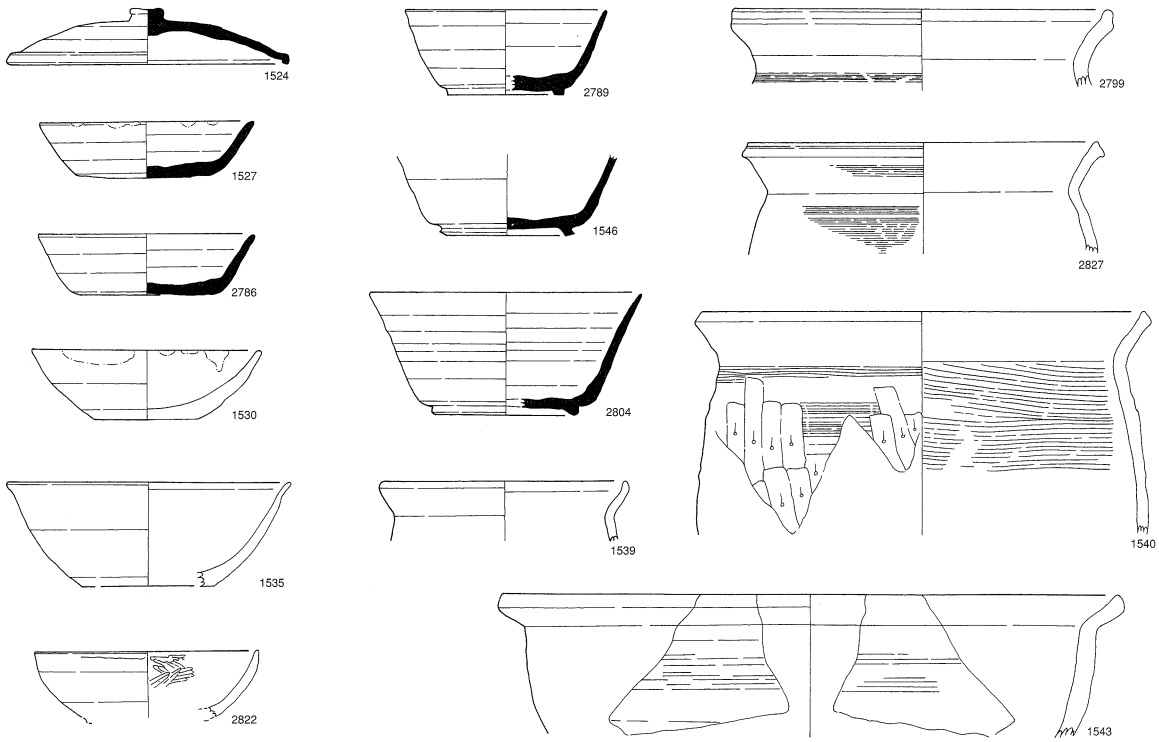
東西両建物群で最も建物頭数が増加する時期で、Ｂ１地区の建物群１では廂をもつ大型掘立柱建物（ＳＢ202）が出現する。ＳＩ11・12・15・17の土器が該当する。須恵器は供膳具の杯蓋ａ・杯蓋ｂ・杯Ａａ・杯Ｂａ・杯Ｂｄが認められる。蓋はつまみの付くものと無鈕のものがあり、口縁端部は内側に巻き込む形状となる。杯Ａは口径11cm～13cm台で、体部の立上がりがⅡ期よりも更に弱くなる。杯Ｂは体部と底部の境界に稜をもち、境界付近に高台が付く。高台形状は方形で、水平に接地する。ＳＩ15では、床面直上遺物ではないが、体部に二条の沈線を施す大型の杯Ｂｄが認められる。

土師器では供膳具と煮炊具が認められる。椀Ａは口径12cm～13cm台のものが主体となる。Ⅱ期よりも底部径が小さく、器高が高くなる。器壁は薄く、底部および体部下半のケズリは省略される。Ⅲ期にはⅢＡが認められるようになり、器壁は薄く底部に回転糸切り痕が認められる。黒色土器では11

任海宮田遺跡Ⅰ期の土器群



任海宮田遺跡Ⅱ期の土器群



第4図　竪穴住居出土の土器群（1）

cm台の小型の椀と16cm台の大型の椀が認められ、大型のものについては底体部の手持ちヘラケズリが施される。甕の体部の張りは体部中位にあり、口縁端部は方形または丸形に短く巻込むようになる。体部下端のケズリが省略されタタキメが残るものがある。小型甕は受け口状の口縁となり、体部の内外面に回転ナデが施される。鍋の口縁端部は甕と同様で、体部の張りがⅡ期と比べて弱い。この他、西側建物群の建物群1ではⅢ期の大型掘立柱建物があり、包含層中から灰釉陶器（K90）が多量に認められる。

Ⅳ期の土器群（第5図下段）

西側建物群では、建物群1で建物規模が最大のＳＢ201が出現し最盛期をむかえ、東側建物群は途絶える時期である。ＳＩ13・16・19の土器が該当する。須恵器は供膳具の杯蓋ｂ・杯Ａａ・杯Ｂａ・皿Ｂが認められる。蓋はつまみの付かないもので、天井部ヘラ切りでなだらかに体部がのびるものと、天井部糸切りで、天井部と体部に稜をなすものがある。両者とも口縁端部を丸く仕上げる。杯Ａは体部の立上がりが弱く外に開く器形となる。杯Ｂは体部と底部の境界に高台が付く。高台形状は方形で、水平に接地する。皿Ｂは脚の長い高台の付くものがあり、高台内部の切離し痕跡はナデ消しである。

土師器は供膳具と煮炊具が認められる。椀Ａは口径11cm～12cm台のものが主体で、Ⅲ期のものに比べ器壁が厚く、底径が大きくなり、器高が低くなる。底部には明瞭に回転糸切り痕が残る。皿は高台の付くものと付かないものがあり、Ⅲ期に比べ器壁が厚くなる。黒色土器では口径11cm台の小型の椀と20cm台の大型の椀が認められ、底体部に手持ちヘラケズリが施される。甕の体部の張りはⅢ期よりも下がり、口縁端部は内側に丸型に長く仕上げるようになる。体部の内外面に回転ナデが施される。小型甕は受け口状の口縁で、体部の内外面に回転ナデが施される。鍋の口縁端部は甕と同様で、体部の張りが弱く、体部下方にタタキメが残る。この他、建物群1ではⅣ期の大型掘立柱建物があり、包含層中から灰釉陶器（K90・O53）や畿内系の黒色土器椀（Ⅲ類）が認められる。

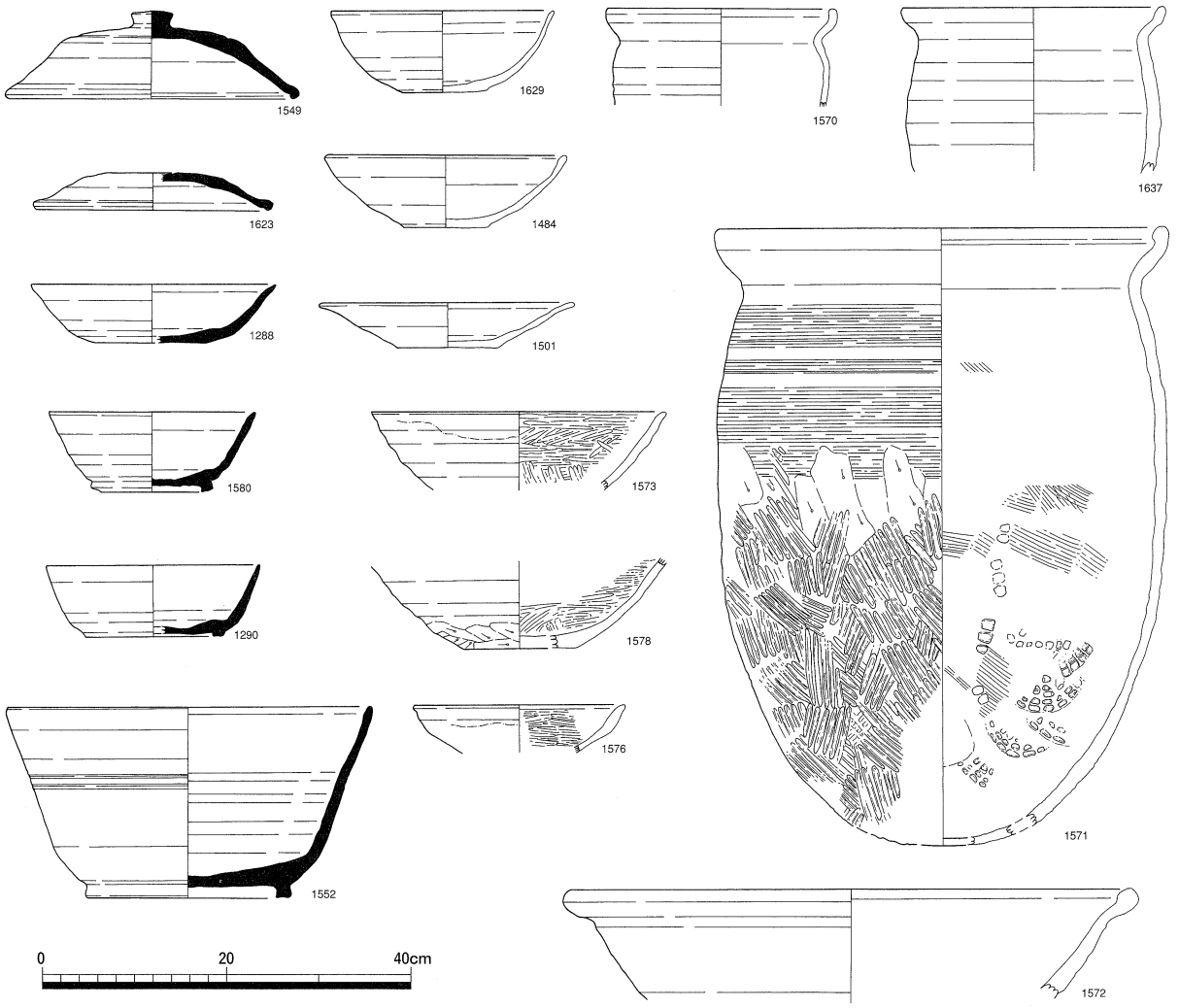
Ⅴ期の土器群（第6図上段）

建物群1では大型掘立柱建物が無くなり、竪穴住居のみで集落が構成される時期である。ＳＩ01・04・21・22の土器群が該当する。須恵器は供膳具の杯Ａａ・杯Ｂａが認められる。杯Ａは体部が外に開く器形で、底部は無調整である。杯Ｂは底部外端に高台が付き、器形が椀に近似する。土師器は供膳具と煮炊具があるが塝は認められない。椀ＡはⅣ期と同様、器壁が厚く、底部に明瞭に回転糸切り痕が残る。Ⅳ期に比べ器高が低いものが多くなる。法量は口径12cm～13cm台の小型のものと、17cm台の大型のものが認められる。甕は体部の張りが下方にあり、口縁端部は外側が丸く肥厚する。体部は内外面に回転ナデが施され、外面下方にタタキメの残るものがある。小型甕も甕と同様の口縁端部で、体部の内外面に回転ナデが施される。

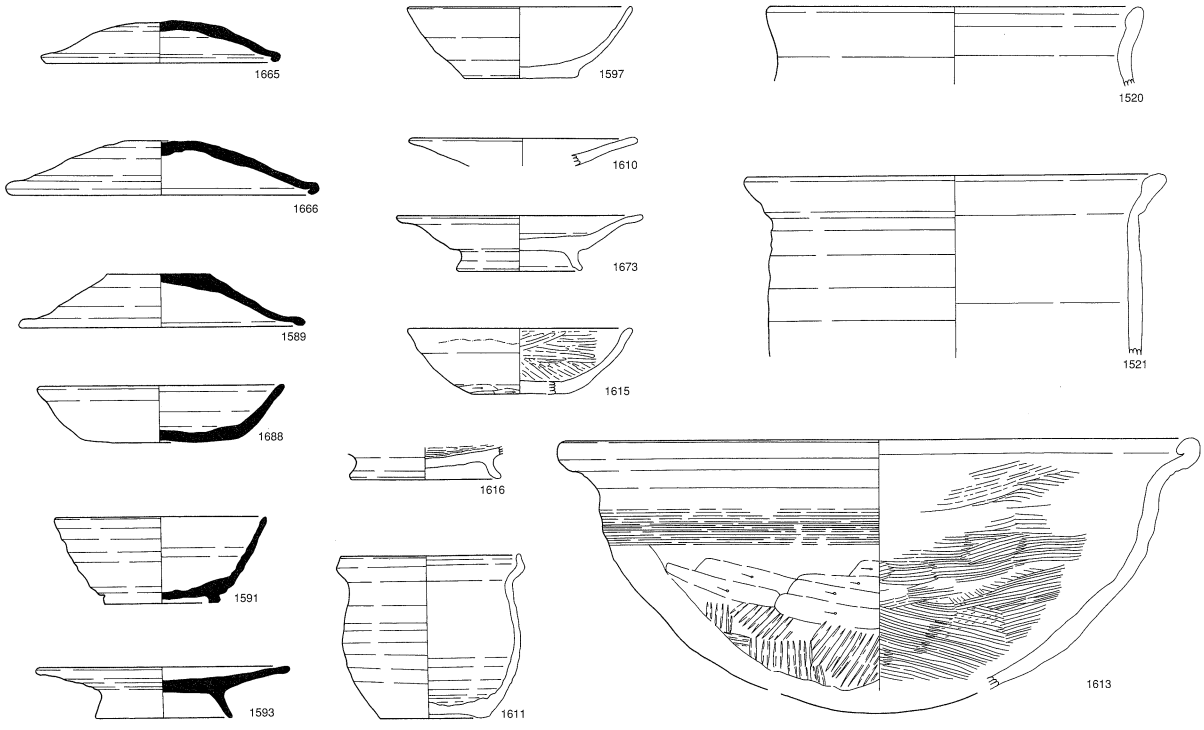
ＳＩ08の土器群（第6図下段）

ＳＩ08はⅤ期の中でも、より新しい時期のもので10世紀中頃を想定している。須恵器は含まず、土師器のみの構成となる。椀は底径がⅤ期の中でも更に大きくなり、器高が低くなる。甕は口縁端部が嘴状に外へのび、体部の調整が省略され上方までタタキメと当て具痕が内外面に残る。

任海宮田遺跡Ⅲ期の土器群

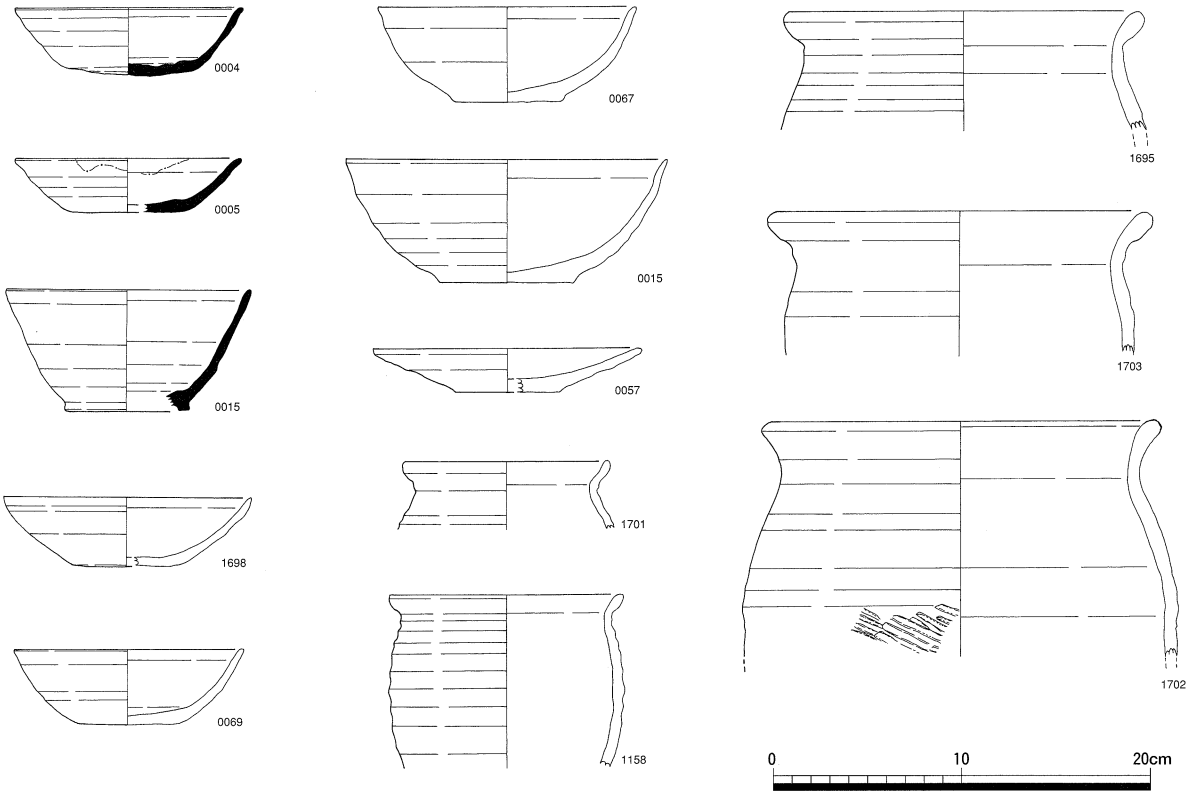


任海宮田遺跡Ⅳ期の土器群

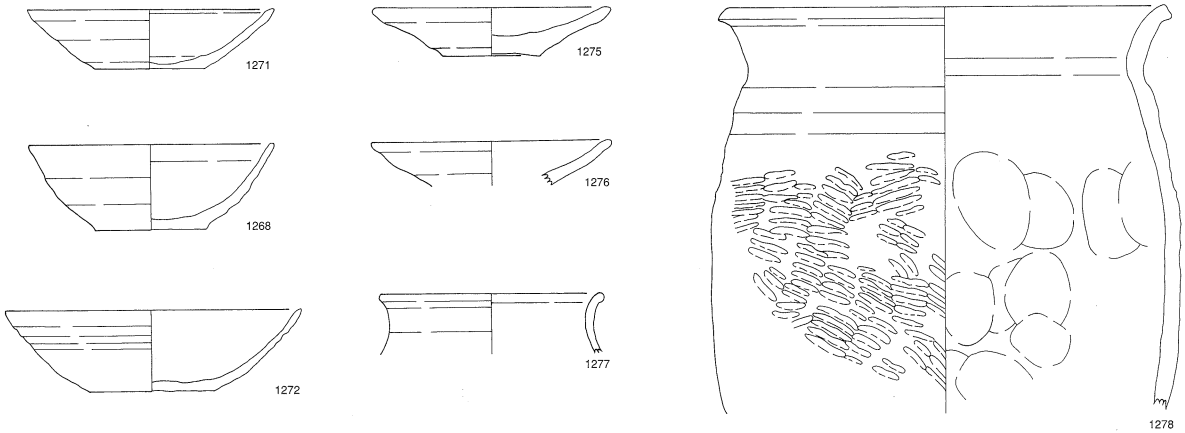


第5図　竪穴住居出土の土器群（2）

任海宮田遺跡Ⅴ期(古)の土器群



任海宮田遺跡Ⅴ期(新)の土器群



第6図　竪穴住居出土の土器群（3）

2　古代建物変遷

a　建物変遷について

任海宮田遺跡は扇状地に位置し、この周辺一帯は利水に不便な地域であったためか弥生時代以降古墳時代にかけて非常に遺跡の希薄な地域である。周辺では扇状地の扇端部寄りに立地する友杉遺跡で、弥生時代後期後半の竪穴住居が１棟確認されている。また背後の台地上では古墳時代中期の福居古墳、古墳時代後期の伊豆宮古墳が認められ、集落の出現が古墳時代以前に遡る可能性もあるが、現時点では古代と古墳時代以前の集落様相にはかなりの格差があったようである。

任海宮田遺跡における古代の耕地開発を目的とする集落は８世紀前半頃に形成され始め、本格的に竪穴住居や掘立柱建物が増加するのは８世紀後半以降となる。当地区で検出された建物群は、上記の建物群が著しく増加した８世紀後半以降の建物群であり、扇状地の開発がどの様に着手し、発展していったのか経過を窺う資料として注目される。また任海宮田遺跡と同様に、この周辺では吉倉Ｂ遺跡や南中田Ｄ遺跡などの集落が奈良・平安時代に形成され10世紀前半まで存続するものが多く、この地域周辺が古代に活発に開発されたことが窺える。そして、この様な動きのなかで当遺跡の建物群の出現も把握することができる。

Ｂ地区で検出した古代の遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、礎石建物、土師器焼成遺構、土坑、谷、溝などである。遺物では須恵器、土師器、赤彩土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、金属製品、石製品などが出土している。集落は掘立柱建物・礎石建物・竪穴住居で構成され、掘立柱建物12棟、礎石建物１棟、竪穴住居36棟が確認されている。建物群は、位置関係や遺物の出土傾向から東西２グループに大別できる。西側建物群はＢ１・Ｂ２・Ｂ６地区で検出された建物で、掘立柱建物、礎石建物、竪穴住居で構成される。一方東側建物群はＢ12・Ｂ13地区で検出された建物で、竪穴住居だけで構成された建物群である。それらは更に、建物の位置関係から西側建物群で３群、東側建物群で２群に分離することが可能であり、Ｂ地区の建物群は全体で、５群に細分することができる。

建物群の変遷を考えるに際し、竪穴住居については、床面直上付近やカマドの出土遺物、各遺構の重複関係を参考に変遷を考えた。掘立柱建物については、柱穴からの出土遺物がＳＰ2043のように建物廃絶時の一括資料として出土した例も窺えるが、遺物の出土しない柱穴も多い。また遺物の出土した柱穴でも、大半が破片資料であるため、建物構築時や廃絶後の柱穴埋没過程で混入したものと考えられるものも多い。掘立柱建物の変遷に関しては、柱穴出土遺物だけでなく、包含層出土遺物の分布傾向や、建物方位および遺構の重複関係も含め、変遷を考える目安とした。

上記の検討方法を参考に、西側建物で４時期、東側建物群で３時期の建物変遷が窺えた。Ｂ地区全体では５時期（８世紀後半～10世紀前半）の遺構変遷が想定できる。以下それらの建物群ごとに詳細を記述する。

建物群１：西側建物群のひとつで、Ｂ１地区およびＢ２地区の東側に位置する。掘立柱建物（ＳＢ201～206）および竪穴住居（ＳＩ01～07）で構成される建物群である。Ⅱ期に出現し、Ⅴ期まで存続する建物群である。

Ⅱ期では掘立柱建物（ＳＢ203）１棟がある。ＳＢ203の柱穴出土遺物は、Ⅴ期の破片資料を含むが、重複関係や建物方位・面積規模や包含層出土遺物の上限から、建物群１の出現期の建物と想定し

た。Ⅲ期には掘立柱建物が２棟配置される。Ⅲ期の主屋と考えられるＳＢ202は、ＳＢ203と重複する位置に配置され、建物規模は２間×５間の側柱建物で身舎北側に一面の廂が付き、建物占有面積が約110㎡を測る。ＳＢ202の北側約20ｍの位置にＳＢ206がある。建物の一部しか確認出来ていないが、後続の建物群の配置から倉庫であろう。またＳＢ202と206の間は遺構の希薄な空間が広がり、南北に２棟並列に配置される。この建物配置はⅣ期の建物配置にも踏襲され規模を拡大する。Ⅳ期の主屋建物ＳＢ201は、前代のＳＢ202と重複する位置に建ち、南北両面に廂をもつ２間×８間の側柱建物である。建物占有面積が約189㎡を測り、当遺跡で最大規模を誇る。北側にはⅢ期と同様、空間を挟んで倉庫が２棟（ＳＢ204・205）並列に配置される。またＳＤ019の谷側にＳＢ207が配置される。Ⅴ期以降は中心建物としての機能を失ったのか、掘立柱建物に替わって竪穴住居だけで構成される建物群へと変化する。竪穴住居はＳＩ01～07の７棟あり、重複関係から前半の３棟（ＳＩ01・03・05）と後半の４棟（ＳＩ02・04・06・07）で構成される。両者とも一辺３ｍ前後の小型の竪穴住居である。

建物群１では廂付きの大型掘立柱建物（ＳＢ201・202）が２時期に亘って計画的に配置される。遺物では、主に包含層の出土であるが灰釉陶器が破片数254点と多量に出土し、緑釉陶器は１点だけである。灰釉陶器はＫ90号窯のものが大半で、Ｏ53号窯のものも若干認められる。灰釉陶器の分布傾向は、大型建物周辺に濃密に分布しており、恐らく大型建物の管理者によって使用[註1]されたものと考えられる。また、須恵器・土師器では供膳具の出土量が圧倒的に多く、土師器の耳皿や幾内系黒色土器・墨書土器・円面硯や風字硯・多量の土錘などが出土している。なお墨書土器では「平」「安」「上」などの特定の文字が集中して認められる。特に「平」については、大型掘立柱建物と同時期のものを含み、数量もＢ１地区で最も多く出土していることから、大型建物を管理していた集団と何らかの関連をもつシンボルとして使用されていた可能性が高い。建物群の西側30ｍの地点には幅約８ｍ程の谷（ＳＤ019）が南北に流れ、当遺跡の物流の拠点として機能していた可能性が高い。但し谷底からの古代の出土遺物は少量であり、当時の拠点的な建物の周辺の谷などから出土するであろう墨書土器などの祭祀的な遺物は見当たらない。恐らく谷の両岸には中世にも建物群が存在し、谷を継続利用したためであろう。

建物群２：西側建物群のひとつで、Ｂ２地区の南辺で検出されており、竪穴住居４棟（ＳＩ08～11）で構成される。建物群１の西側にある谷（ＳＤ019）を挟んで対岸に位置する。ＳＩ11がⅢ期に出現し、Ⅳ期のＳＩ10、Ⅴ期のＳＩ08・09と変遷する。Ⅴ期は２棟の竪穴住居が確認されているが、出土遺物からＳＩ08はⅤ期の中でも最後出の建物であり、10世紀中頃のものと考えられる。ＳＩ09からは出土遺物が無く判然としないが、重複関係からⅤ期の前半と考えたい。また建物群の南側が調査区外で詳細は不明であるが、各時期に数棟の竪穴住居で構成された建物群と想像できる。出土遺物については建物群１のような特殊な遺物は少なく、須恵器や土師器の供膳具や煮炊具・貯蔵具など一般的なもので構成される。

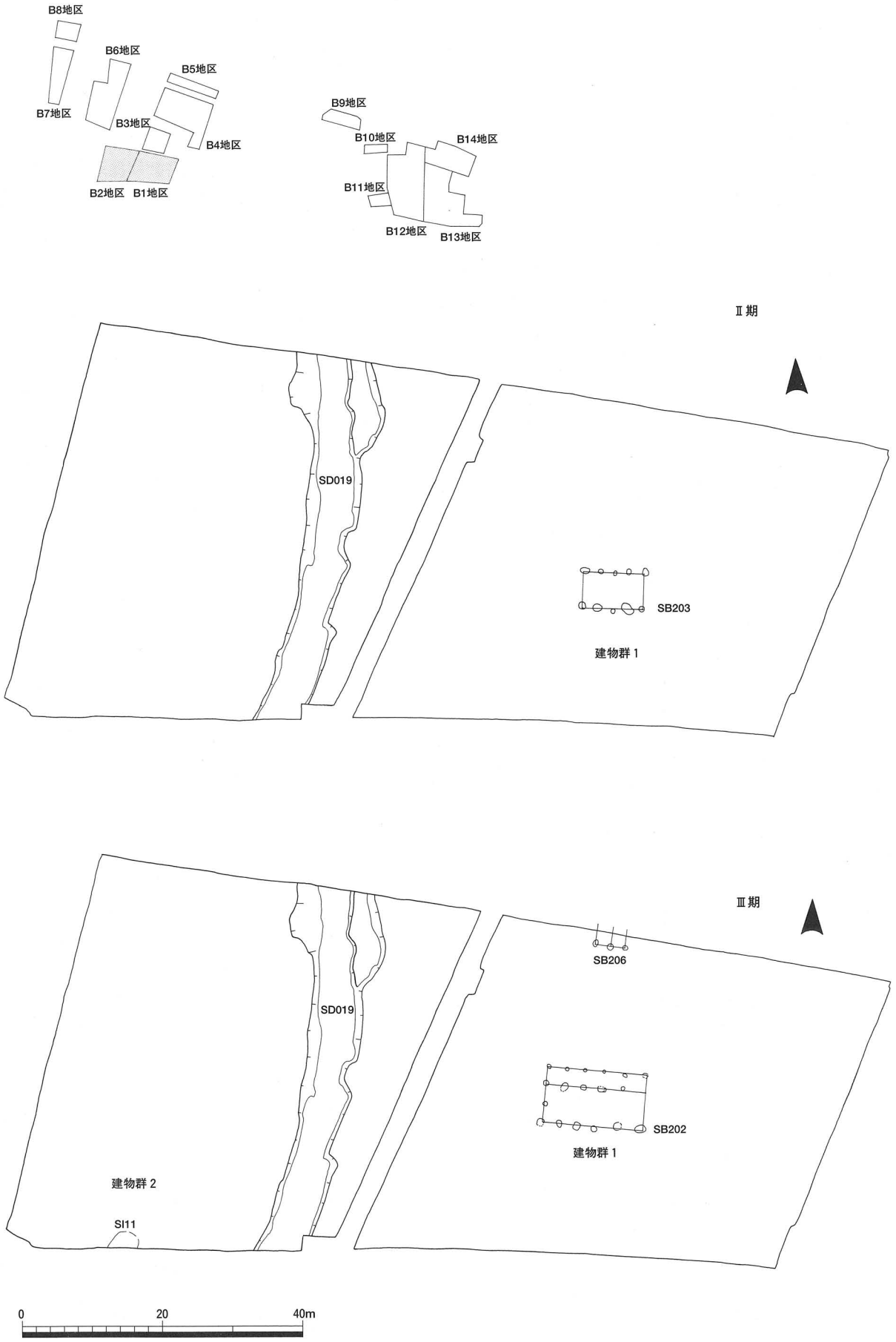
建物群３：西側建物群のひとつでＢ６地区に位置し、掘立柱建物（ＳＢ208～211・213）・礎石建物（212）・竪穴住居（ＳＩ13～22）で構成される。建物群３はⅡ期に出現した建物群であり、ＳＢ211・213・ＳＩ14で構成される。ＳＢ211は２×３間の総柱建物であり、ＳＢ213は２×３間以上の側柱建物である。両者はＬ字状に配置されており、ＳＢ211が南北棟、ＳＢ213が東西棟となる。緑釉

陶器（軟質陶洛北産）や灰釉陶器（K14）の分布傾向から、ＳＢ211が倉庫、ＳＢ213が主屋と考えられる。建物の東側には、恐らくＢ２地区で検出したＳＤ19が北流しており、建物群の東側が正面と考えられる。またＳＩ14は5.1m×4.4mの隅丸長方形を呈し、後続の竪穴住居よりも規模の大きいなもので、ＳＢ211の東側に隣接した位置にある。建物の正面という遺構配置から考えて、竪穴住居と掘立柱建物の同時併存の可能性は低いものと推測される。ここではⅡ期のなかでもＳＩ14の方がＳＢ211よりも更に先行していたものと考えたい。Ⅲ期には竪穴住居主体の建物群となり掘立柱建物１棟（ＳＢ210)、竪穴住居４棟（ＳＩ12・15・17・・18）で構成される。東側掘立柱建物は２×２間の総柱建物で、倉庫と考えられる。竪穴住居は倉庫の周囲に沿って５m間隔ほどで配置され、東側壁面にカマドをもつものが主体となる。またＳＩ12の西側には土師器焼成遺構１が配置される。Ⅳ期は、掘立柱建物１棟（ＳＢ208)、竪穴住居５棟（ＳＩ13・16・19・20）で構成される。ＳＢ208は２×３間の側柱建物であり、土師器焼成遺構２の北側５mに位置する。桁行きの柱間距離が1.6～1.7mと他の掘立柱建物よりも短い。竪穴住居は焼成遺構の南側に配置される。カマドは北側壁面に配置するものが主体となる。Ⅴ期は、礎石建物１棟（ＳＢ212）・掘立柱建物１棟（ＳＢ209）・竪穴住居２棟（ＳＩ21・22）で構成される。ＳＢ209・212は東西に並列に配置される。ＳＩ21・22はＳＢ209・212とは南側へ50mほど距離を隔てて配置される。出土遺物では、竪穴住居内から須恵器や土師器の供膳具・貯蔵具・煮炊具のほか、墨書土器や製塩土器、鉄滓などが認められる。また、その他の遺構や包含層からは、上記のもののほかに緑釉陶器・灰釉陶器・墨書土器や円面硯・鳥形須恵器や焼台・石帯の巡方や丸鞆など特殊なものが一定量出土する。墨書土器では「成」「大」「乾」などの特定の文字が集中して認められ、特に「成」の墨書が多い。なお須恵器・土師器の器種では貯蔵具や煮炊具に比べ食器類の出土量が高い。

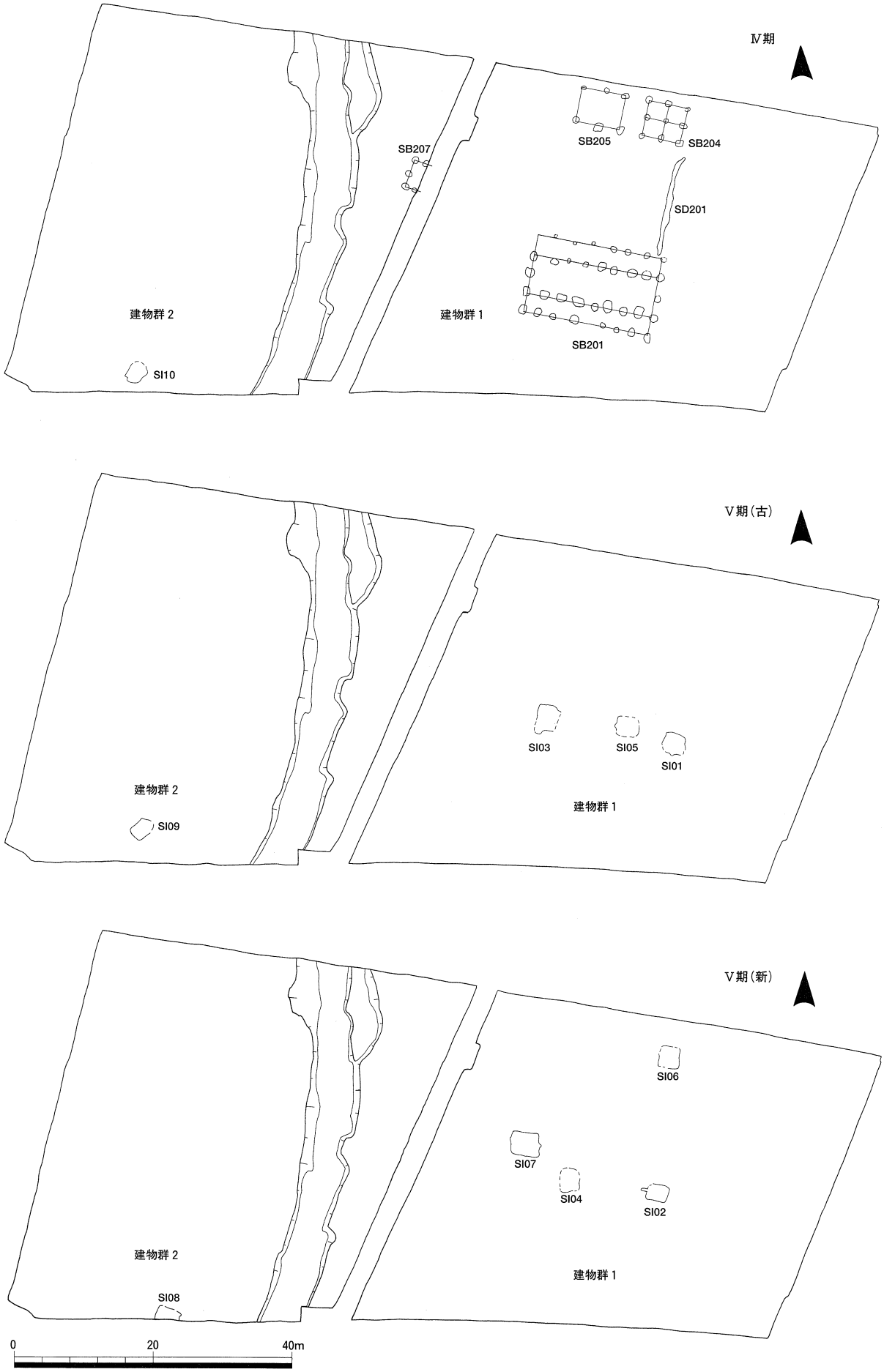
建物群４：東側建物群のひとつでＢ12地区の北側部分に位置し、竪穴住居３棟で構成される。Ⅰ期の建物群で西側壁面にカマドをもつ。当調査区では後続の竪穴住居を確認していないが，道路を挟んで北側約10mにあるＣ18地区から、後続の竪穴住居が２棟検出されており、建物群は更に存続したものと考えられる。出土遺物は須恵器の食器類や土師器の煮炊具が主体となる。

建物群５：東側建物群のひとつで、Ｂ13地区の南東隅に位置し、竪穴住居11棟で構成される。Ⅰ期は重複関係から、前半（ＳＩ34）と後半（ＳＩ27・32・33）に分かれる。後続のものに比べ、住居面積が広く、カマドは重複状況から東側壁面に設置されていた可能性が高い。Ⅱ期は竪穴住居３棟（ＳＩ26・31・35）で構成され、カマドは西側壁面に設置される。Ⅲ期は竪穴住居４棟（ＳＩ28・29・30・36）で構成される。カマドは南側壁面ないしは確認できないものがある。出土遺物では竪穴住居内から須恵器や土師器の供膳具・貯蔵具・煮炊具が認められ、墨書土器や蛇紋岩製の丸鞆なども出土している。その他の遺構や包含層からは、墨書土器や無脚硯が出土する。また墨書土器では「縄足」「貳」など特定の文字が一定量認められ、過去の調査でも同様の文字がこの建物群の周囲から多く出土している。

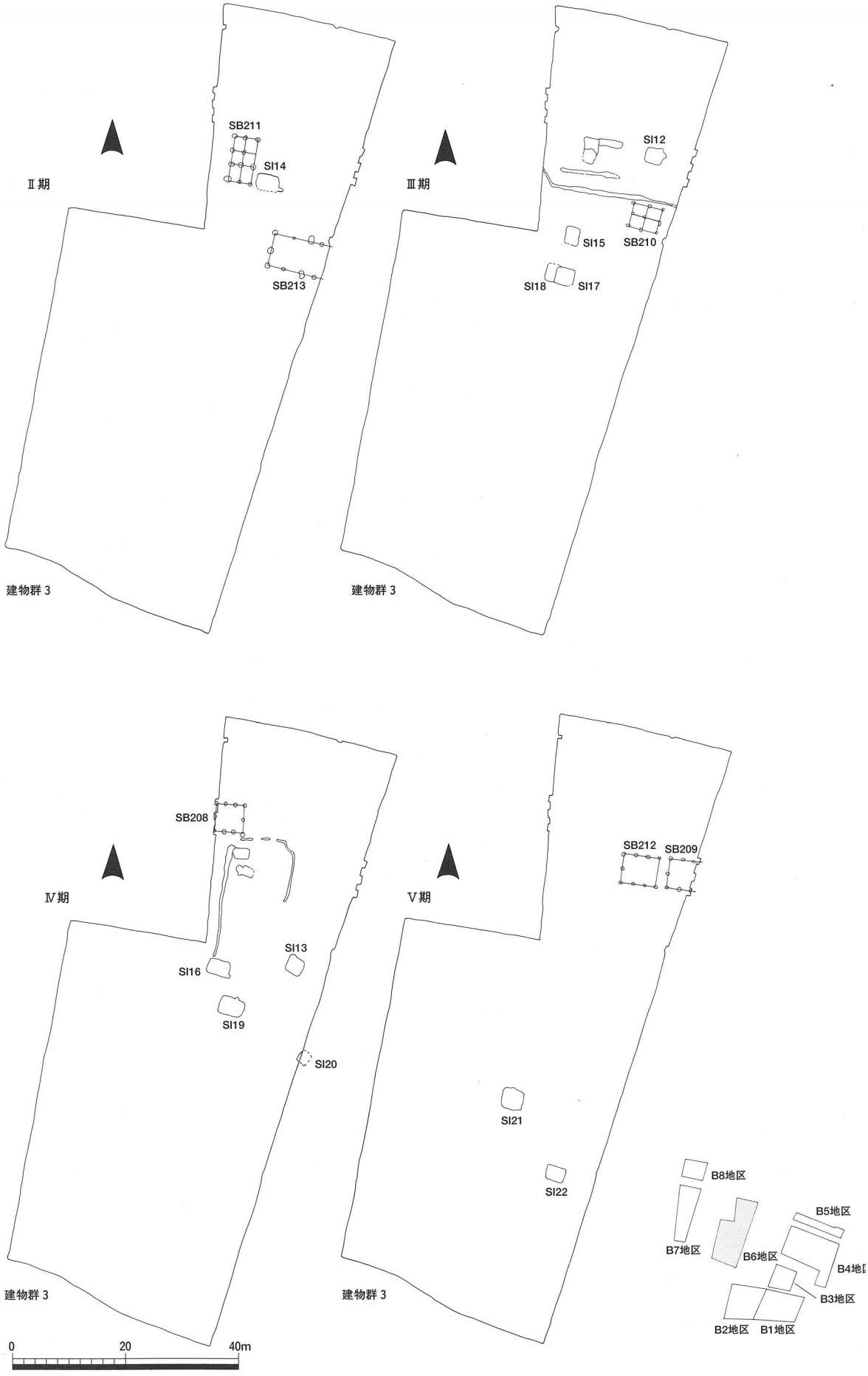
以上建物群ごとに変遷を記述した。建物群は①建物群３のように竪穴住居と掘立柱建物が混在するもの。②建物群１のⅤ期や建物群２・４・５のように竪穴住居のみで構成されるもの。③建物群１のⅡ～Ⅳ期のように掘立柱建物のみで構成されるものが認められる。①については、建物群３では、Ⅱ期からⅤ期まで認められる。Ⅱ期については上記の理由でＳＢ211・ＳＢ213と、ＳＩ14が同時併



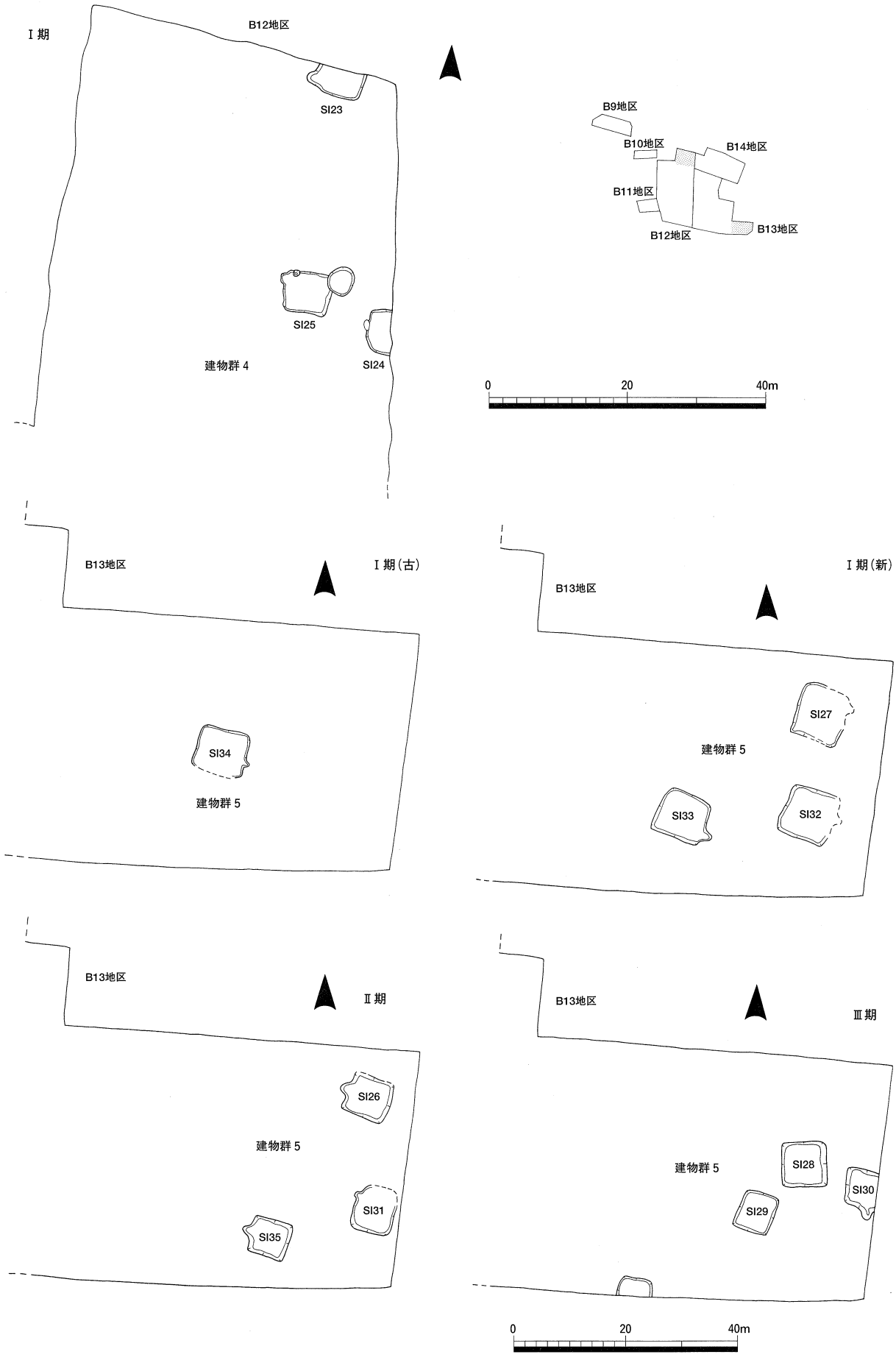
第7図　任海宮田遺跡B1・B2地区の古代建物変遷（1）



第8図　任海宮田遺跡B1・B2地区の古代建物変遷（2）



第9図　任海宮田遺跡B6地区の古代建物変遷



第10図　任海宮田遺跡B12・13地区の古代建物変遷

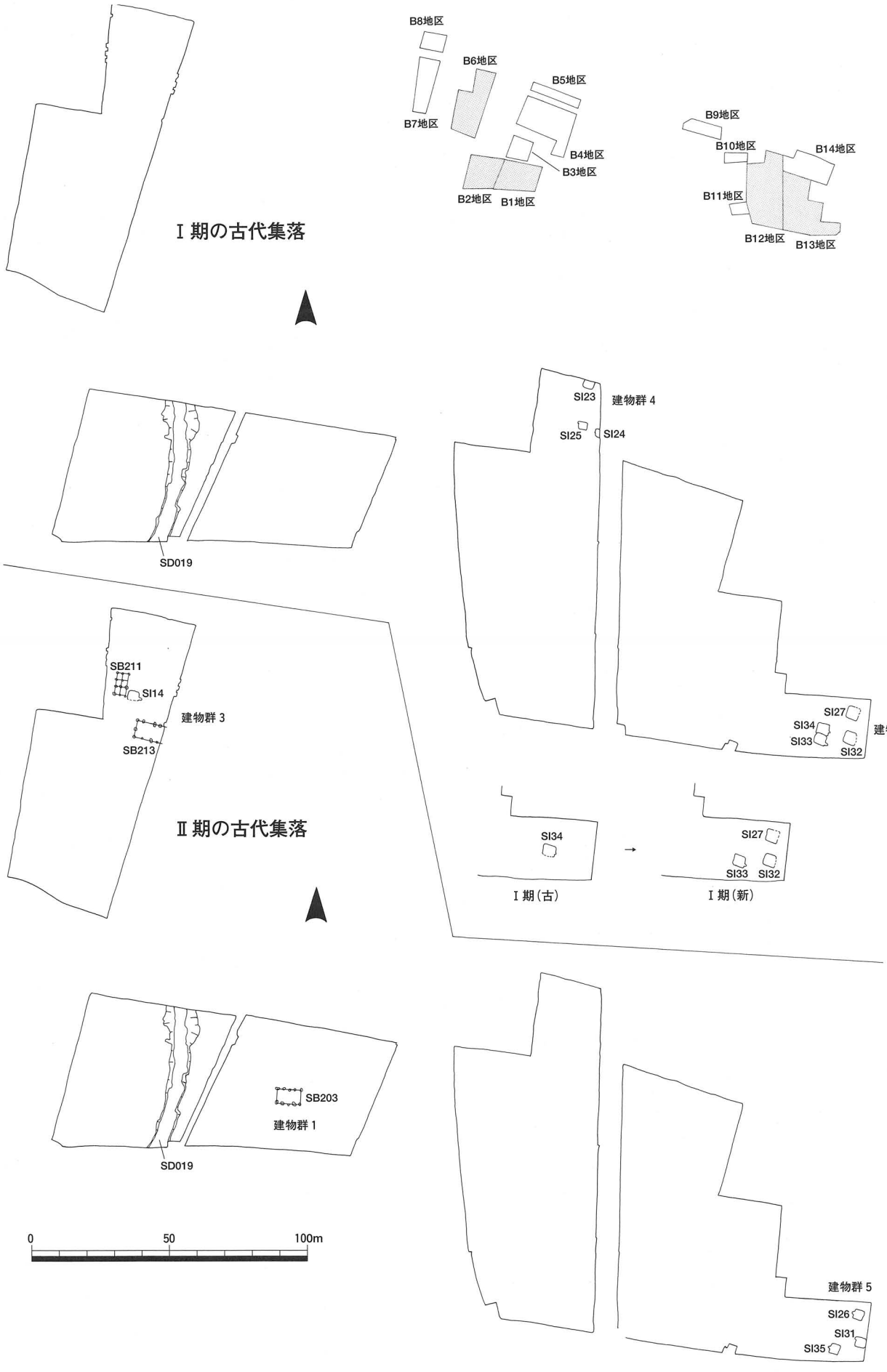
存していなかった可能性が高く③のタイプとすると、①のものは竪穴住居数棟に１棟程度の掘立柱建物で構成されるようである。①②を構成する竪穴住居は、１辺３ｍ前後の小型竪穴住居[註2]で、任海宮田遺跡周辺の古代建物群の様相を考察した森隆氏によると、任海宮田遺跡で典型的みられる小型竪穴住居が主体となる村落は、収容人数の低さや構造の簡素さから、冬期を除く農繁期のみの一時的住居棟の可能性が高く、居住者については使役等で駆り出された徴発労働者などを想定している。　また、それら①②タイプに居住する徴発労働者層の上位に位置するのが、恐らく③タイプの建物群の居住者であろう。③タイプの建物群は、１群のⅢ・Ⅳ期と３群のⅡ期が該当し、建物構造や配置、遺物の出土傾向から耕地開発を目的とする集落のなかでも、有力者の居住した中心施設と考えられる。　時期的には洛北産緑釉陶器や灰釉陶器Ｋ14が出土した建物群３の掘立柱建物２棟がⅡ期の中核域のひとつを形成する。建物群３はⅢ期以降に竪穴住居を主とする建物群に変わることや、Ⅲ期に土師器焼成遺構が出現することから、中心施設としての役割から手工業生産など中心施設に付属する建物群へと役割を変えるものと考えられる。Ⅲ・Ⅳ期の中心施設は、建物群１の灰釉陶器（Ｋ90～Ｏ53）が多量に出土した大型掘立柱建物２棟と考えられる。両者を経営した集団が、血族など同一意識をもった集団が建物群３から継続的に移動したのかどうか判然としないが、Ⅲ・Ⅳ期の墨書土器の文字が、建物群１では「平」と書かれたものが多数を占めるのに対して、建物群３では「成」と書かれたものが大半であり、両者で異なることや、３群の北側（Ｃ地区）で「成」が広範囲に分布していることから、別集団であった可能性が示唆される。また、吉倉Ｂ遺跡で同期の大型建物が存在することや、東地区でⅡ・Ⅲ・Ⅳ期の墨書土器「縄足」・「貳」・「城長」などの文字群が出土していることから、建物群１や３のような開発を管理・指導した有力者層の居住域が複数存在し、扇状地の開発を複数の勢力が群在して進めたものと考えられる。Ｂ地区の開発の中心は、西側建物群ではⅡ期～Ⅳ期が該当し、東側建物群ではⅠ期～Ⅲ期と考えられ、東西建物群間で存続時期に差異が認められる。なお、建物群からは大規模な倉庫群が確認されていないことから、収穫物については当地で管理されたのではなく有力者層の基盤となる本拠地に運ばれたものと考えられる。

ｂ　各期の実年代について

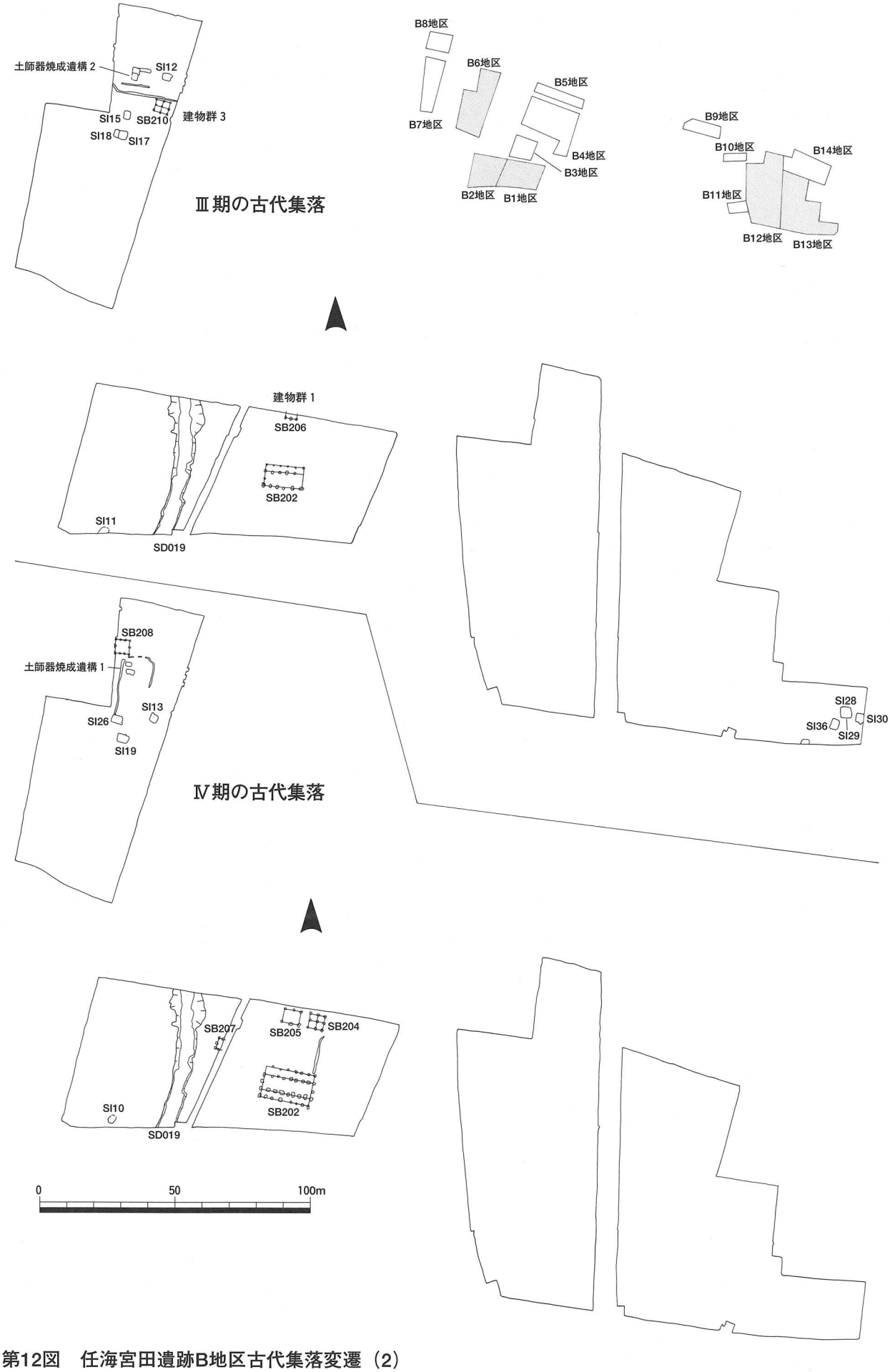
Ｂ地区の調査から実年代の根拠となるものは出土しておらず、北陸で研究されている須恵器・土師器の編年と対比して年代を推定する。対比に際し、須恵器については田島明人氏（1988）・岡本淳一郎氏（1991）・池野正男氏（2002）、土師器については岡本淳一郎氏（1991）・内田亜紀子氏（1997・2000・2003）の編年を参考に、須恵器では、杯蓋及び杯Ａ・Ｂの器形および調整の特徴と器種構成ならびに法量から、土師器では、椀類および煮炊具の器形や調整の特徴から各編年と対比した。

搬入品と考えられる緑釉陶器については百瀬正恒氏（1986）・高橋照彦氏（1995）、灰釉陶器については斉藤孝正氏（1981）・前川要氏（1984・1991）・山下峰司氏（1995）、畿内系黒色土器については森隆氏（1995）の研究を参考に年代を推定した。

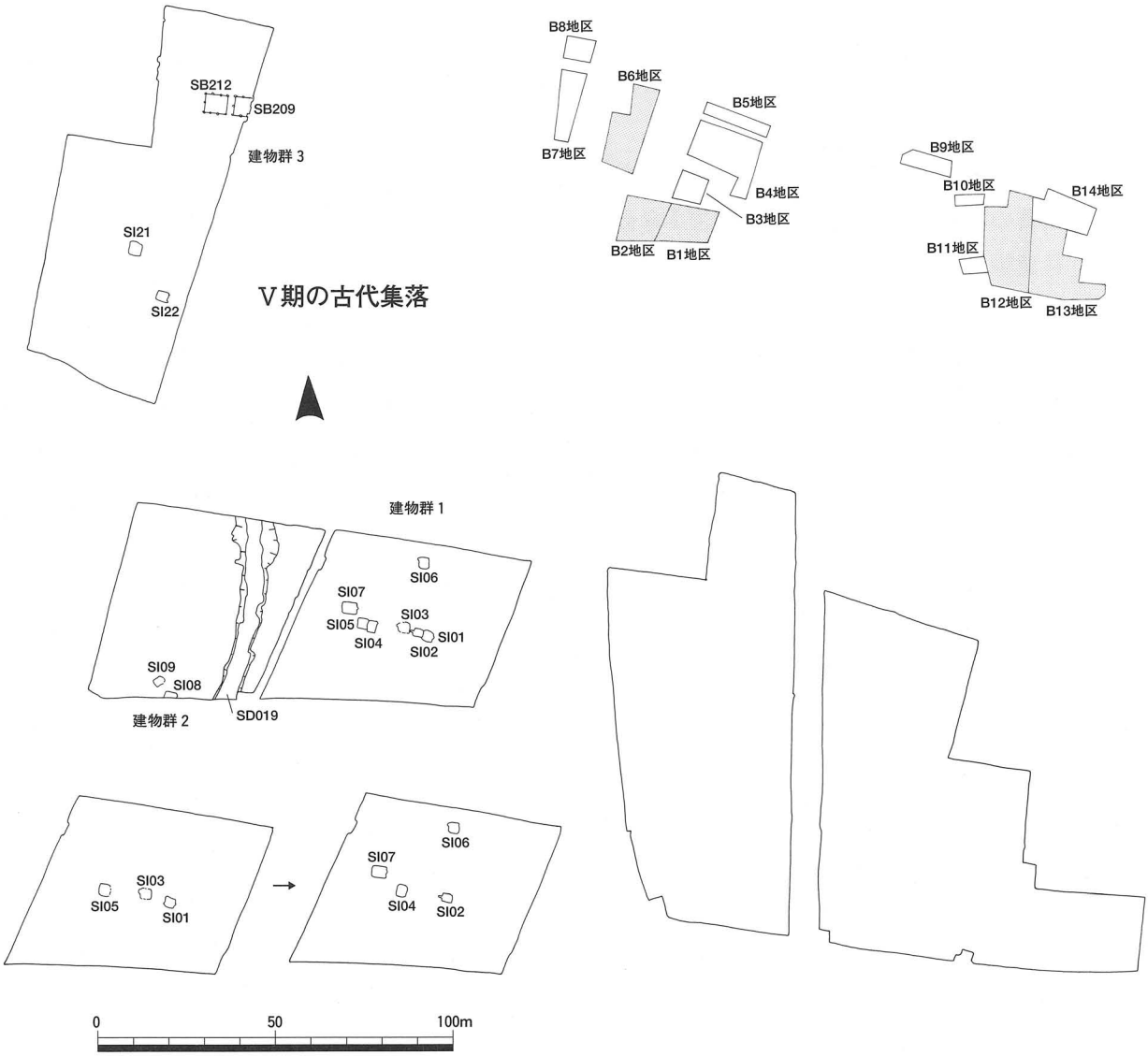
対比の結果、Ⅰ期については８世紀後半～９世紀前半、Ⅱ期は９世紀中頃、Ⅲ期は９世紀後半、Ⅳ期は9世紀末～10世紀初頭、Ⅴ期は10世紀前半以降と推定される。　（武田健次郎）



第11図　任海宮田遺跡B地区古代集落変遷（1）



第12図　任海宮田遺跡B地区古代集落変遷（2）



第13図　任海宮田遺跡B地区古代集落変遷（3）

表2　B地区の建物変遷

		西側建物群			東側建物群	
		建物群1	建物群2	建物群3	建物群4	建物群5
Ⅰ期（8c後半～9c前半）	掘立					
	竪穴				SI23・24・25	前半 SI34
						後半 SI27・32・33
Ⅱ期（9c中頃）	掘立	SB203		SB211・213		
	竪穴			SI14		SI26・31・35
Ⅲ期（9c後半）	掘立	SB202・206		SB210		
	竪穴		SI11	SI12・15・17・18		SI28・29・30・36
Ⅳ期（9c末～10c初）	掘立	SB201・204・205・207		SB208		
	竪穴		SI10	SI13・16・19・20		
Ⅴ期（10c前半～）	掘立			SB212・209		
	竪穴	前半 SI01・03・05	前半 SI09	SI21・22		
		後半 SI02・04・06・07	後半 SI08			

3　中世建物変遷

中近世の遺構面では掘立柱建物124棟、井戸８基の他、数多くの土坑・溝が検出されてる。ここでは、掘立柱建物・井戸・区画溝などを中心に遺構の変遷を示していきたい。

a　遺構時期比定の方法と時期区分

各遺構の時期を決め、それらの変遷を考える上では、当然のことながら出土遺物が手掛かりとなる。掘立柱建物については柱穴内からの出土遺物が重要となる。今回の調査では建物柱穴から完形の中世土師器が出土する事例がいくつかある。しかし、その他の出土遺物は破片資料で、建物構築時や廃絶後の柱穴埋没過程で混入したものとなる。柱穴以外の遺構についても同様の傾向がある。また、大型土坑や溝については、出土遺物の時期幅があるものが多い。また、遺物が出土しない遺構もあるため、各遺構の構築時期・存続期間・廃絶時期を特定することは難しい。こうした問題を踏まえ、遺構変遷を考えるにあたっては以下の方法に採った。まず各遺構・包含層出土遺物の示す時期から、各地区での遺構変遷が想定される時期幅を捉え、後述するⅠ～Ⅶ期の区分を設定した。そして、掘立柱建物や溝・土坑の出土遺物、および重複による前後関係を基にそれぞれの時期に遺構を当てはめた。加えて、基本層序から得られる知見として、黒褐色系の遺構覆土が古く、灰～灰黄褐色系の遺構覆土が新しい傾向がある。大まかに前者は中世前半、後者は中世後半に該当する。ただし、地区内での基本層序が一様でない場合もあり、出土遺物や遺構重複などがない場合の参考に止めた。また、建物の長軸方向の方位を棟方位とし、その値が近い、あるいは直交する際は、建物配置が一定の規制の下で行われたと想定し、同時期の建物群を考える上での目安とした。

各地区の遺構変遷が想定される時期幅は、報告書掲載遺物で時期が比定されたものから推定した。また、それらの数量から時期毎の多寡[註3]を把握し、遺構分布の濃淡を考える上での参考とした（表３）。それによると、古くは12世紀前半のものが認められる。しかし、そうした年代を示す遺物はほとんどが中国製磁器である。12世紀中頃～末の珠洲Ⅰ2・3期も出土するが少量である。珠洲や中世土師器は13世紀代以降のものの出土が中心となる。日常雑器類が早くて12世紀中頃、さらに13世紀以降の所産が主体となること踏まえれば、中世集落の形成開始時期も一部12世紀中頃に遡り、多くは12世紀

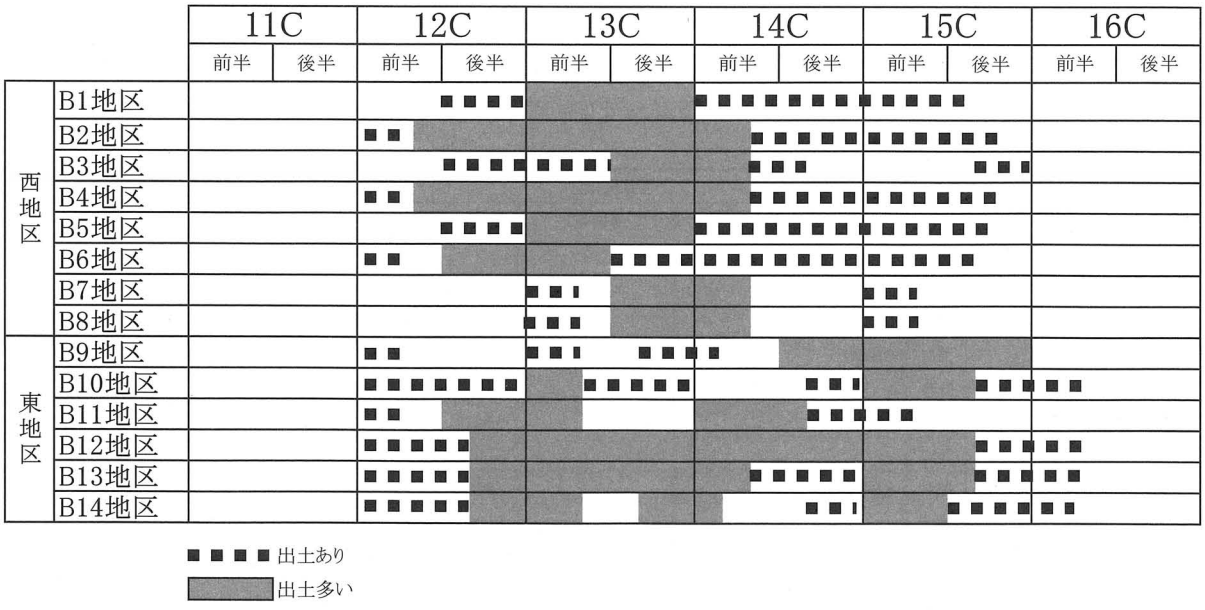


表3　任海宮田遺跡B地区遺物消長表

末～13世紀始めとしておくことが妥当と考えられる。逆に集落の終焉を示す遺物は、16世紀前半まで時期が降る。近世以降の遺物もあるが、明確な遺構は少ない。これらのことから、任海宮田遺跡Ｂ地区の中世集落は主に12世紀中頃から16世紀前半の期間で変遷することとなる。以上のような期間を、Ⅰ～Ⅶ期の七時期に分けた。各時期の年代観は、Ⅰ期：12世紀中頃～13世紀前半、Ⅱ期：13世紀後半、Ⅲ期：14世紀前半、Ⅳ期：14世紀後半、Ⅴ期：15世紀前半、Ⅵ期：15世紀後半、Ⅶ期：16世紀以降としている。

b　遺構変遷

調査地区はＢ１～14地区まである。その配置から、Ｂ１～８地区からなる西地区と、Ｂ９～14地区の東地区に大別した。遺構変遷はこの二つの地区毎に述べていく。

（１）西地区（第14～18図）

西地区ではＢ１～８地区で掘立柱建物が80棟確認される。自然流路ＳＤ019によりＢ１・３・４地区とＢ２地区、またＳＤ114からＢ２地区とＢ６地区は分断されていた。加えて、Ｂ６とＢ７・８地区の間にも谷状地形がある。南北方向に流れる自然流路や谷により形成された微高地上に集落が形成されていたことが分かる。よって、Ｂ１・３・４・５地区、Ｂ２地区、Ｂ６地区、Ｂ７・８地区のそれぞれが各建物群を構成するまとまりとなる。こうした状況は流路埋没の進行状況による変化はあるが、中世の段階では継続していたものと考えられる。なお、西地区ではⅥ期以降の遺物の出土が少なく、集落の痕跡は認められない。

Ⅰ期《23棟：ＳＢ001～003・005・006・008・012・014・028・029・034・040・042・043・047・050・057・060・067・071・074・076・080》

Ｂ１地区では建物の重複が認められ、少なくとも２時期の変遷がある。柱穴の重複からＳＢ001→ＳＢ003の順が分かる。ＳＢ005・006も建物位置が重複するが、前後関係は不明となる。また、ＳＢ012・014も同様である。Ｂ２地区ではＳＢ029に小型のＳＢ028が付随する。Ｂ２地区には古代から存続するＳＤ019がある。中世では徐々に埋没し、自然流路から浅い谷状地形へと変化しつつ存在していた。覆土最上層では近世の遺物が出土することから、最終的な埋没はその頃であろう。この緩くカーブする流路に沿ってＢ２地区の建物群は建物方位が決定されている。また、ＳＤ019の東岸には流路内に柵列ＳＡ001が検出される。桟橋状の構造物が想定され、流路を利用した物資の流通に関連すると考えられる。出土遺物もなく、中世のどの段階に存在していたかは不明である。ＳＤ019より東側の建物群と関連が深いと考えるならば、Ｂ１地区やＢ４地区の建物群に対応する。Ｂ３地区にはＳＢ034があり、位置や方位からＢ１地区ＳＢ012・014やＢ４地区の建物群と連動するものとみられる。Ｂ４地区は掘立柱建物が多く検出され、中世前半において経営の中心的な役割を果たしていたと考えられる。ＳＢ040・042・043・047・050・057・060が当期の建物となる。ＳＤ062により調査区北西と南東の建物群に分けられる。また、調査区北西にある畠と思われるさく状遺構はＳＢ043よりも先行する。Ｂ６地区ではＳＢ067・071があり、建物群の南側にはＳＤ111がある。ＳＤ111から西に向かって地形は低くなっていき、Ｂ７・８地区との間は谷状地形となる。また、調査区南東にはＳＤ114があり、東側の地区とも分断されていた。Ｂ７・８地区ではＳＢ074・076・080がある。Ｂ７地区北側のＳＢ074はＢ８地区ＳＢ080と建物群を形成する。前者と重複するＳＤ119は建物に先行す

る溝である。これらの地区の内、Ｂ２・４・６からは珠洲Ｉ2期の出土があり、一部の建物は12世紀中頃に構築された可能性がある。

Ⅱ期《20棟：ＳＢ004・007・021・025・027・038・041・044～046・049・053～055・058・059・068・070・077・079》

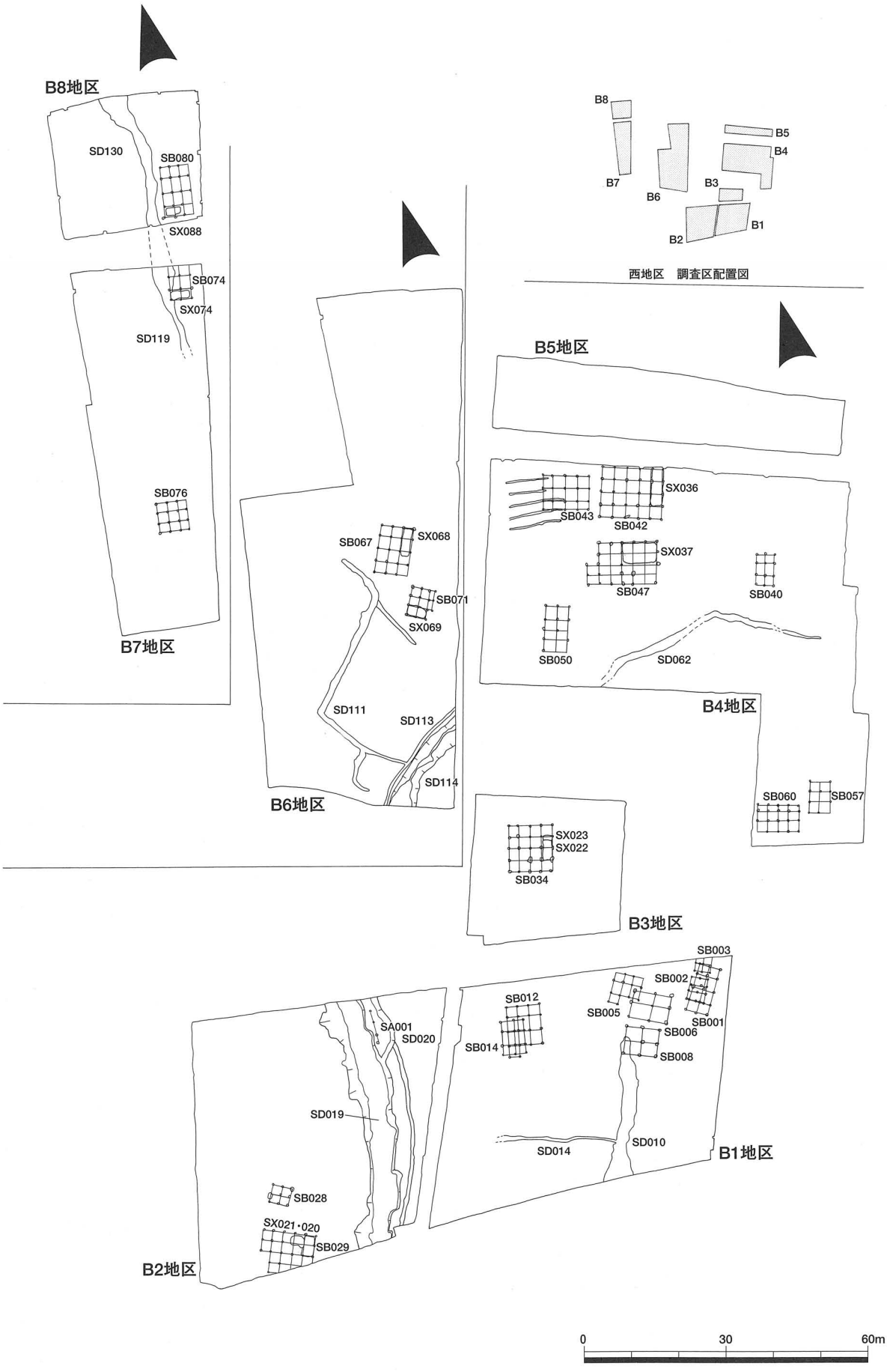
Ｂ１地区ではＳＢ004・007の２棟のみと建物数が減少する。北に隣接するＢ３地区も遺構分布が薄く、空閑地が広がる。Ｂ２地区ではＳＢ021が調査区北側にある。中央部にＳＢ025・027があり、後者にＳＸ016付随する。Ｂ３地区はＳＢ038があり、Ｂ１地区の建物群と方位を同じくするが、やや距離をおいて位置する。Ｂ４地区では10棟が検出される。ＳＤ066・067・071～073により調査区中央の建物群は東西に分断される。西側は柱穴の重複からＳＢ044→ＳＢ049の順が分かる。ＳＢ044は確認された建物の中で最大面積となる大型の建物である。調査区南東の建物群はＩ期からの方位を継承するＳＢ054・058・059が先行し、次いでＳＢ053・055になると考えておく。Ｂ６・７・８地区にはＩ期とほぼ方位を同じくしつつ、位置を変えた建物群が存続する。ＳＢ068・070・077・079がそれに当る。また、ＳＢ077には井戸の可能性もあるＳＸ086が付随する。

Ⅲ期《19棟：ＳＢ011・019・023・026・030～033・035・039・048・051・052・056・064・072・073・075・078》

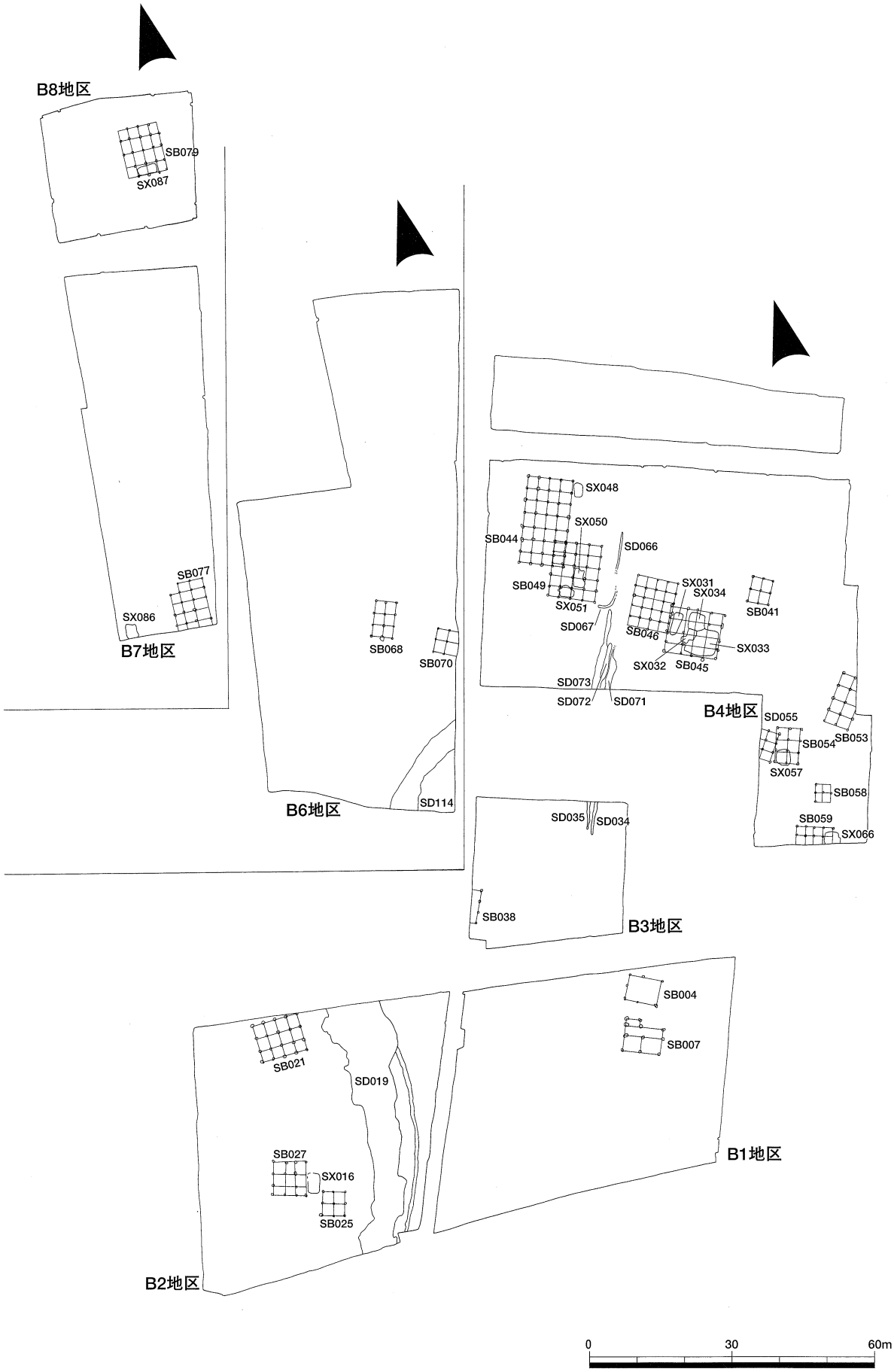
Ｂ１地区では方位を大きく変えたＳＢ011・019がある。この建物方位はⅣ・Ⅴ期へと継続していく。Ｂ２地区では調査区中央部のＳＢ023・026のみとなる。後者にはＳＸ015が伴う。Ｂ３地区では小型の側柱建物ＳＢ030～033・035がある。建物方位からＢ４地区との関連が強いと考えられる。Ｂ４地区ではＳＢ039・048・051・052・056がある。ＳＢ048にＳＥ02が付随する。ＳＢ051・052は前後関係不明である。ＳＢ039は小型の側柱建物で、調査区北東隅に位置し、調査区外に関連する建物群が存在する可能性がある。近接してＳＥ01があり、位置関係からＳＢ039に付随すると考え当期としておくが、出土遺物もなく時期は判然としない。ＳＢ056はＳＤ077の区画内に位置する。Ｂ５地区ではＳＢ064があり、Ｂ４地区と一連の建物群とみられる。Ｂ６地区ではＳＤ114埋没後、ＳＢ072・073が構築される。Ｂ７地区ではＳＢ075・078が調査区南側にまとまり、ＳＸ086がⅡ期より存続する。

Ⅳ期《11棟：ＳＢ015～018・022・036・037・061・063・065・066》

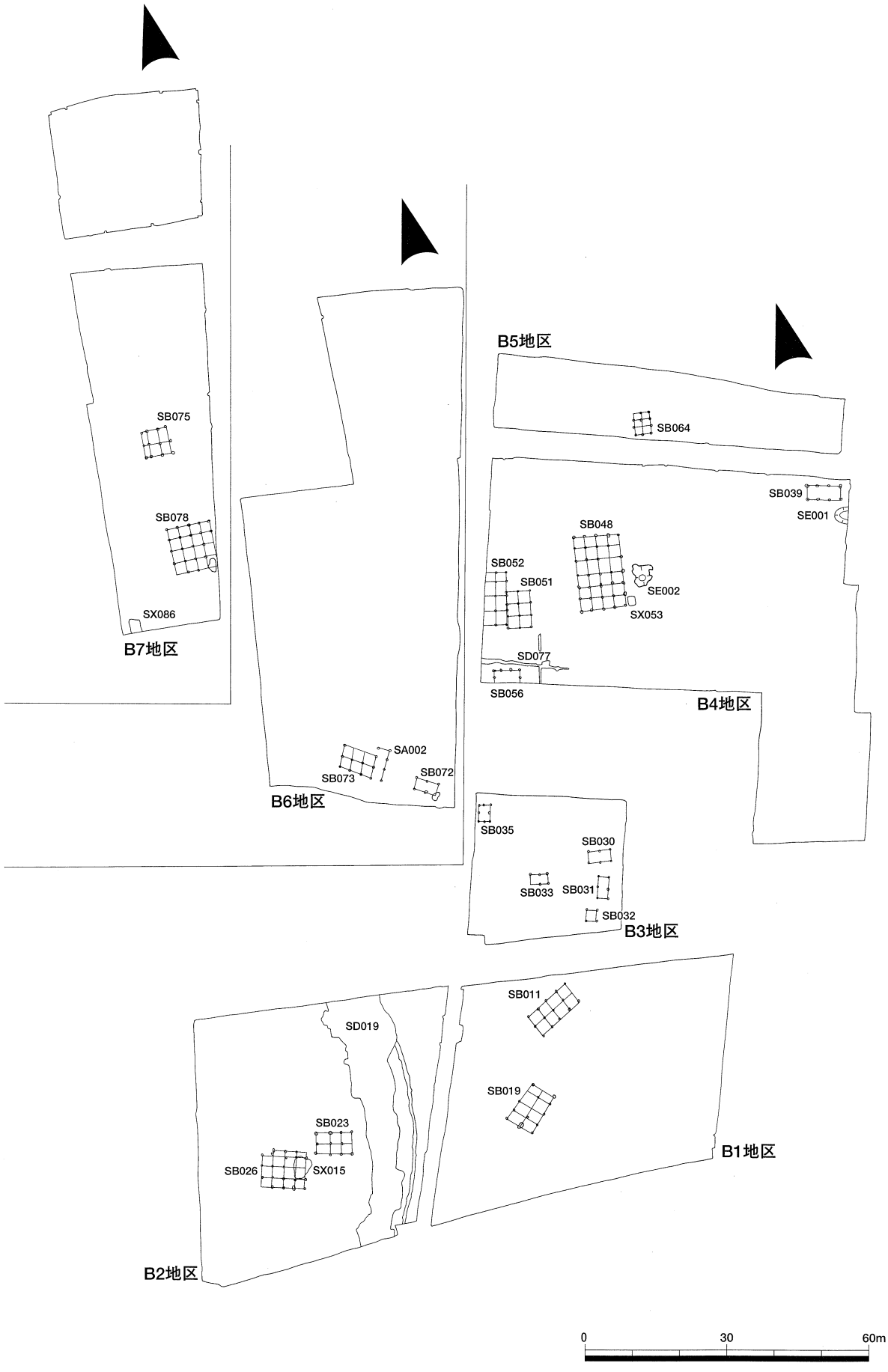
Ｂ１地区ではⅢ期と近い方位を維持しつつＳＢ015～018がある。Ｂ２地区ではＳＢ022があり、建物からやや離れた南側にＳＸ013・014がある。ＳＸ014からは白磁小椀Ｘ類が出土している。遺物としてはⅡ期に相当するが、破片資料であり他の出土遺物から遺構は当期にしている。なお、この白磁小椀は、器厚の薄い精巧な作りのもので、一般的な集落での出土はあまりないとされる。本来、Ⅱ期あるいはⅢ期の建物群に関連する遺物と考えられる。Ｂ３地区ではＢ１地区の建物群と方位を合わせてＳＢ036・037がある。これらの方位を示すＢ１・３地区の建物群もＳＤ019を意識している可能性がある。Ｂ５地区はＳＢ061・063がある。前後関係は不明。調査区西側には南北方向のさく状遺構が広がる。Ｂ６地区はⅢ期から建物方位を変えたＳＢ065・066がある。Ｂ地区には建物は認められないが、中規模の土坑が点在する景観が窺える。



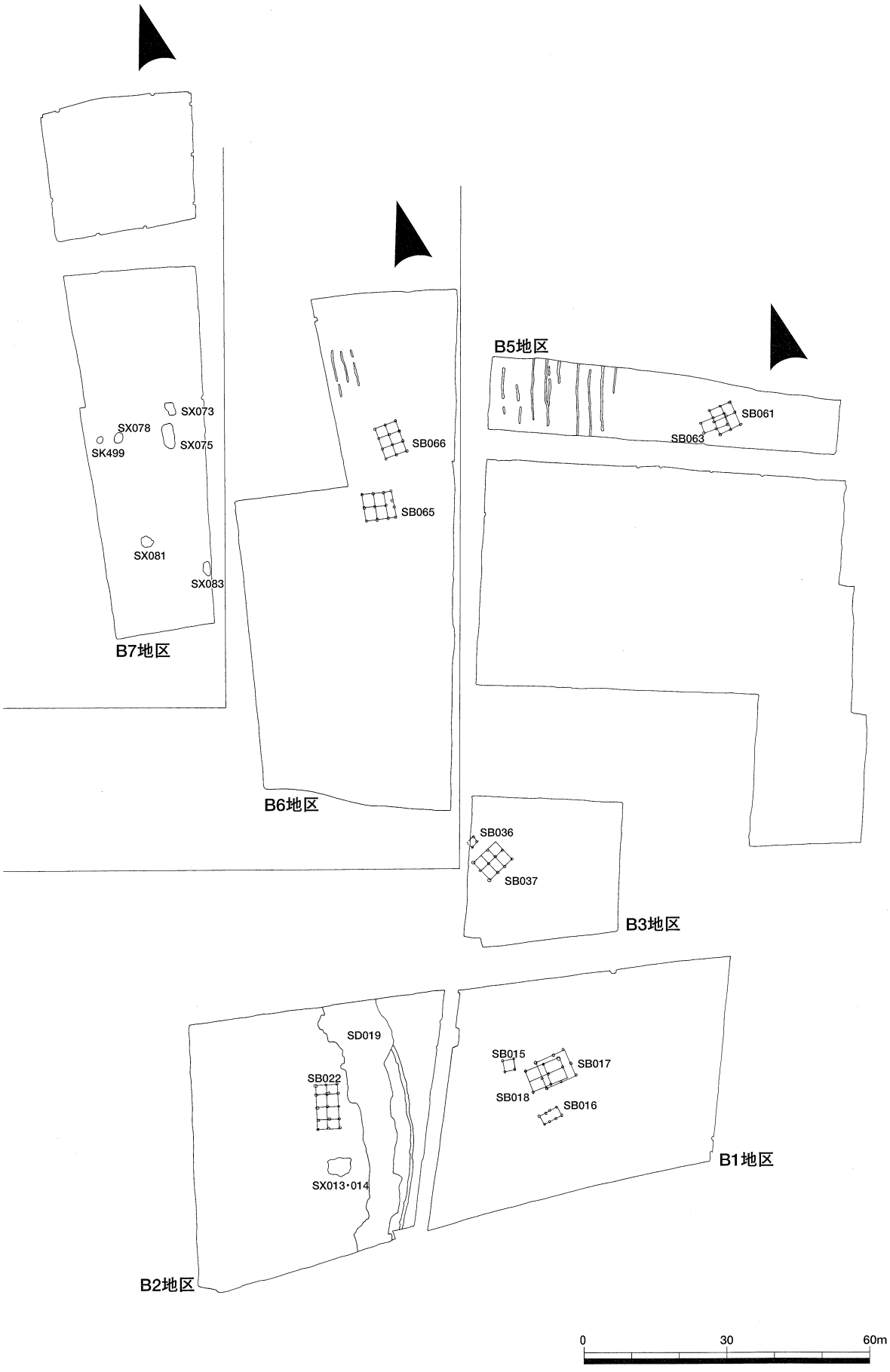
第14図　任海宮田遺跡西地区中世Ⅰ期の集落変遷



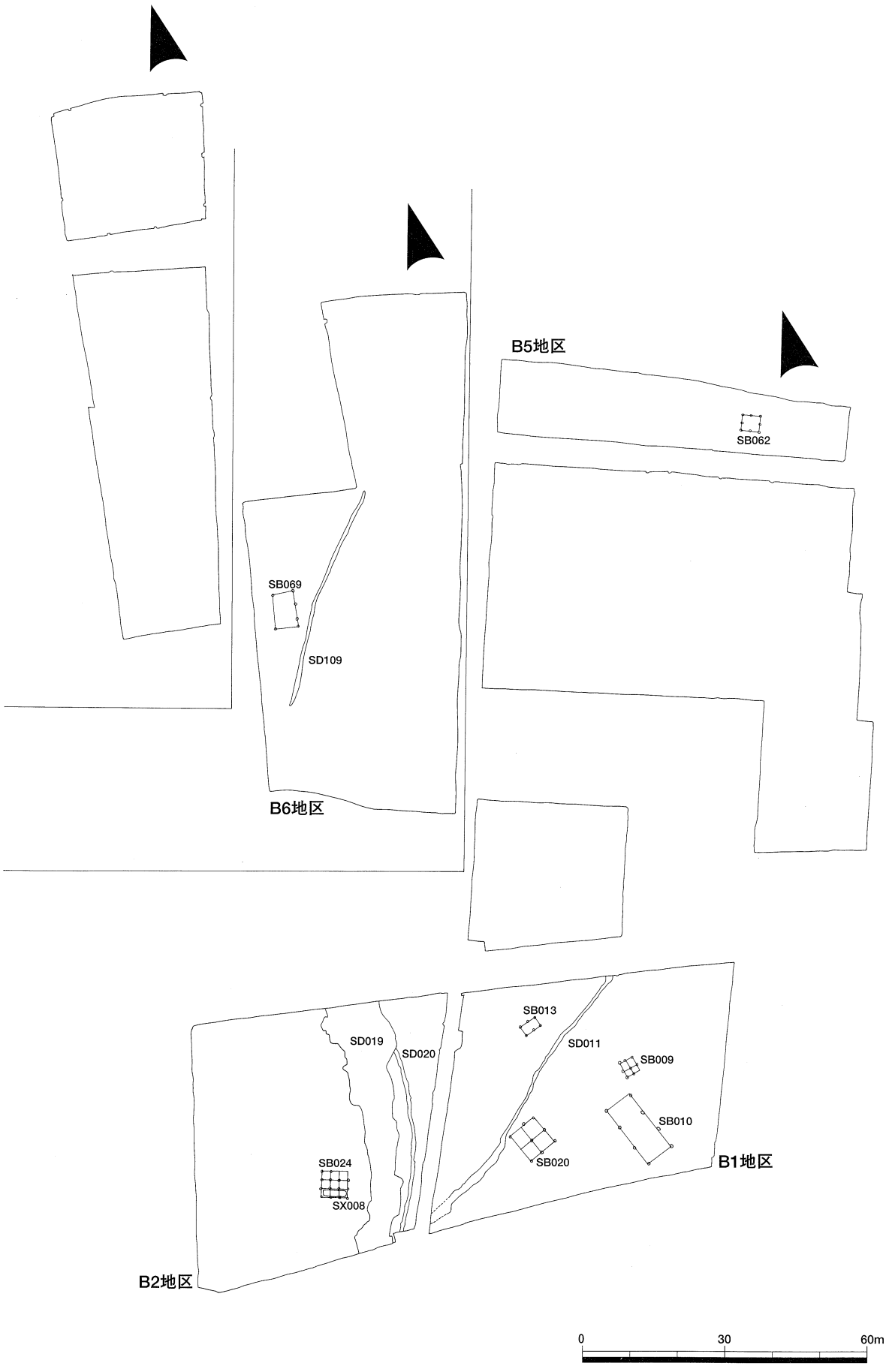
第15図　任海宮田遺跡西地区中世Ⅱ期の集落変遷



第16図　任海宮田遺跡西地区中世Ⅲ期の集落変遷



第17図　任海宮田遺跡西地区中世Ⅳ期の集落変遷



第18図　任海宮田遺跡西地区中世Ⅴ期の集落変遷

V期《7棟：SB009・010・013・020・024・062・069》

B1地区に4棟がまとまる他は、1棟の建物が点在する景観となる。また、B1地区ではSD011による区画からSB009・010・020の3棟が1単位となる。B2地区のSB024はSX008を伴う。Ⅱ期から継続的に建物が構築され続けた調査区中央部に位置している。

（2）東地区（第19～22図）

B9～14地区で構成される東地区では、B9～10地区、B12地区南側、B13地区西半および南東端を中心に計44棟検出された。地形はB12・13地区にかけて平坦面が広がり、隣接するB10・11・14地区に向かって低くなる。遺構はB9～11・14地区、およびB13地区の礫層隆起部分において希薄である他は、建物群周辺を中心に分布している。

Ⅰ期《11棟：SB082～085・099・101・103・107・113・122・123》

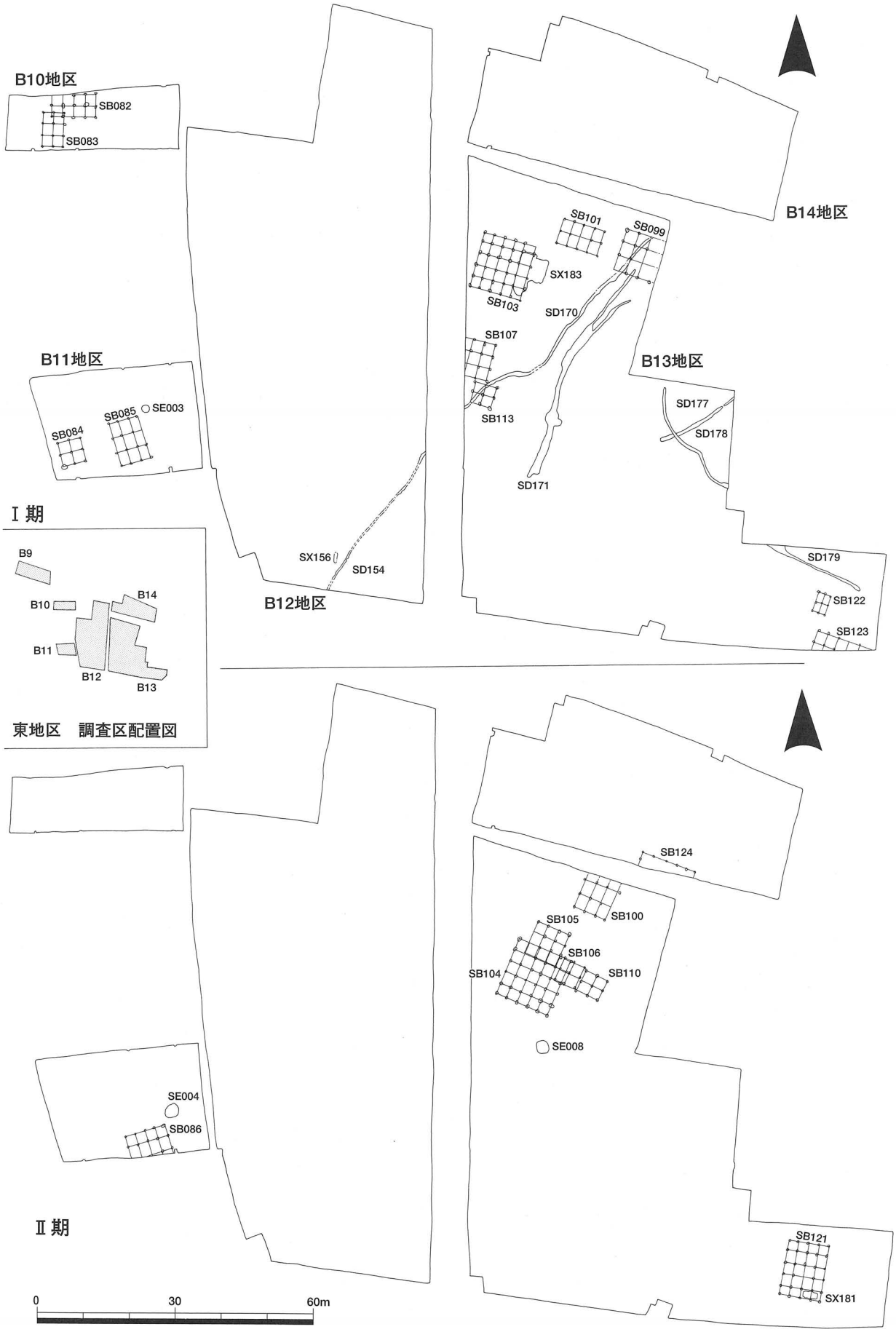
B10地区にはSB082・083の2棟が重複する。前後関係は不明で、いずれかが次段階へ降る可能性もある。しかし、調査区内の出土遺物ではⅡ期のものはごく少量であり、Ⅰ期内での変遷を想定しておく。B11地区にはSB084・085が方位を合わせて存在し、SE03が伴う。B13地区には調査区北西側にSB099・101・103・107・113、南東側にSB122・123がある。また、SD170～172・178の溝群が南西から北東に向かって延びる。SB099・113との重複関係は不明であるが、その他の遺構との重複では溝が古い場合が多く、建物よりも先行する可能性が高い。また、SD170はB12地区SD154から続くものである。SD177・179は南東から北西に向かって延びる。重複関係からSD178→177の順であり、ここからもSD170～172・178の溝群が古い傾向にあることが窺える。また、B10・13地区からは珠洲Ⅰ2期の出土があり、一部の建物は12世紀中頃まで遡る可能性がある。

Ⅱ期《8棟：SB086・100・104～106・110・121・124》

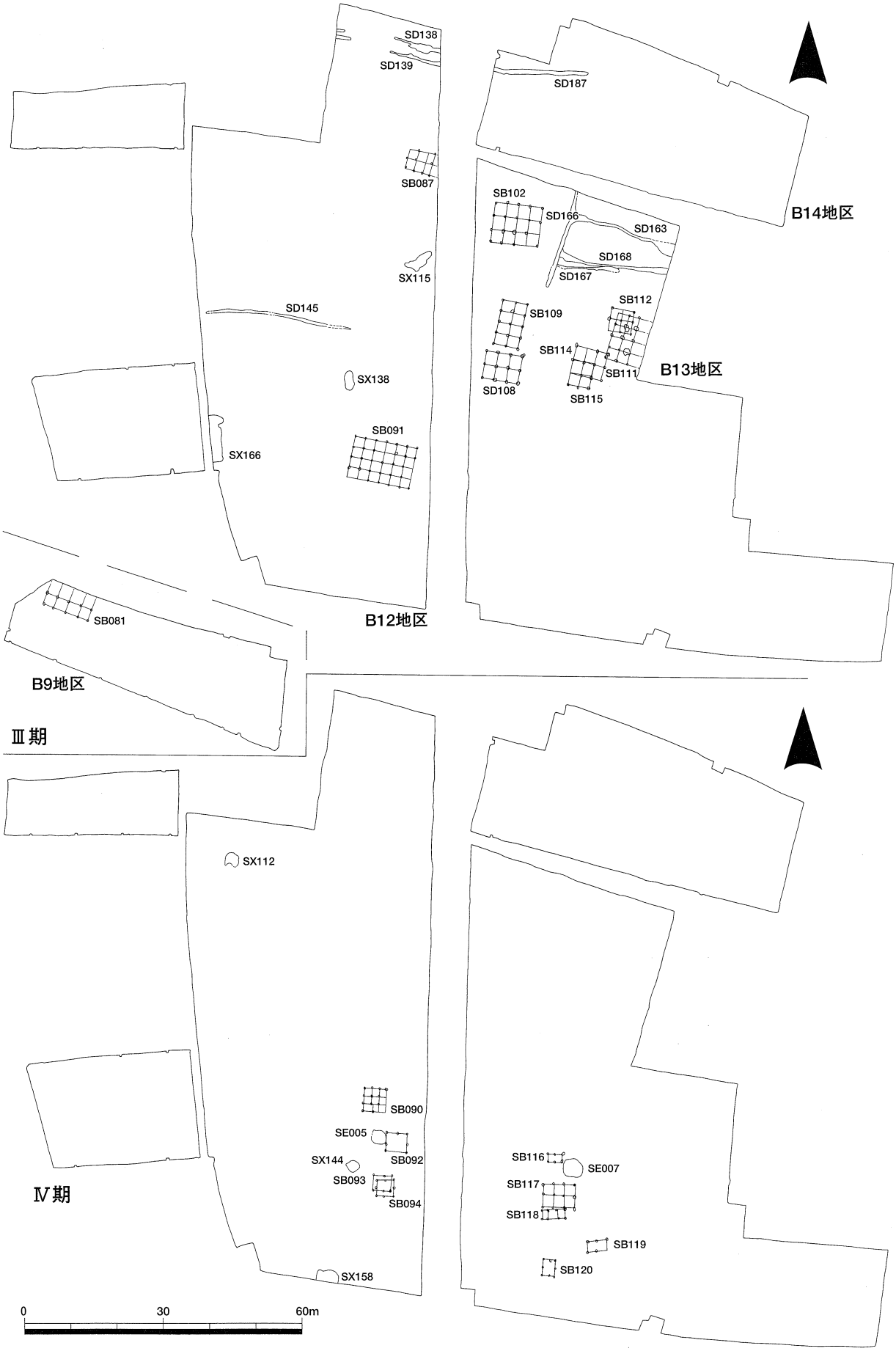
B11地区ではSB086があり、SE04を伴う。B12地区ではⅠ～Ⅱ期の遺物が出土するものの、当期に比定しうる建物は明かでない。B13地区では　調査区北西側にSB100・104～106・110がある。柱穴の切り合いからSB104→SB106の順が分かる。これらの建物群は方位を同じく揃えており、少なくとも1度の建て替えを行いつつ存続したと思われる。また、SE08はこの建物群に付随する。調査区南東にはSB121があり、重複関係によりⅠ期のSD179より新しいことが分かる。B14地区にはSB124があり、B12地区北西側の建物群と一連のものと考えられる。Ⅰ期ではB10・11地区とB13地区の二つの建物群で展開していた。前者は当期で廃絶し、後者のみが次期へと続いていく。

Ⅲ期《10棟：SB081・087・091・102・108・109・111・112・114・115》

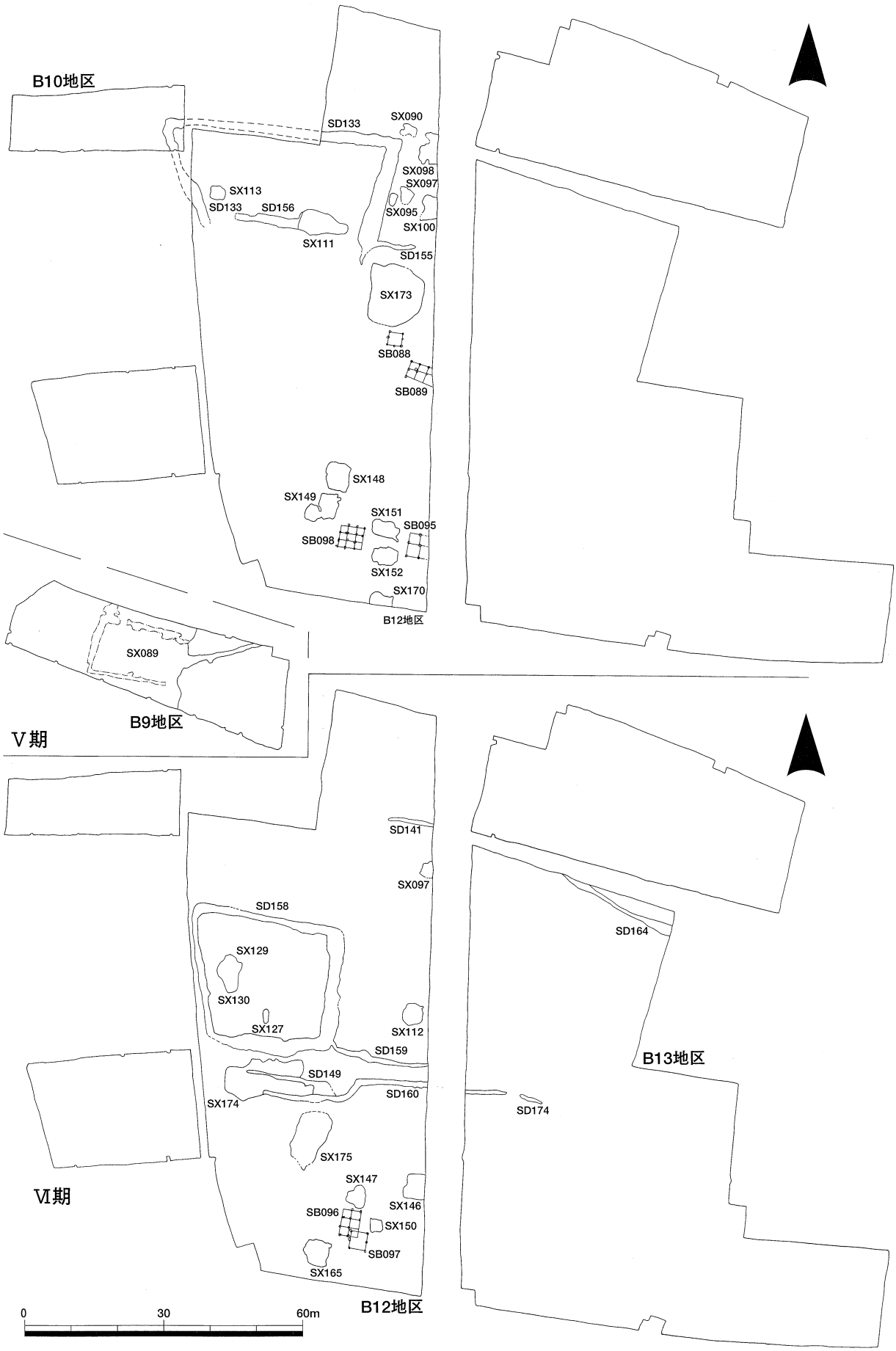
B9地区ではSB081がある。建物方位ではⅠ・Ⅱ期に近いが、調査区内の出土遺物ではⅢ期以降がほとんどを占めることから当期としておく。建物の東側は谷地形となり、さらに礫層が隆起しているため他の遺構の広がりもあまりない。建物群が広がるならば、北・南・西側へ連なると思われる。B12地区ではSB087・091、B13地区ではSB102・108・109・111・112・114・115がある。建物方位を合わせ、建物群を形成している。SB111・112・114・115は建物位置が重複している。切り合い関係は不明であるが、少なくとも1度の建て替えはあったようである。また、B12地区にはSD138・139・145、B13地区にはSD165～168がある。明確な囲繞ではないが、区画溝と考える。



第19図　任海宮田遺跡東地区中世Ⅰ・Ⅱ期の集落変遷



第20図　任海宮田遺跡東地区中世Ⅲ・Ⅳ期の集落変遷



第21図　任海宮田遺跡東地区中世Ⅴ・Ⅵ期の集落変遷

Ⅳ期《９棟：ＳＢ090・092～094・116～120》

Ｂ12・13地区共に調査区の南側に建物群が構築される。Ｂ12ではＳＥ05、Ｂ13ではＳＥ07が伴う。また、ＳＢ093とＳＢ094、およびＳＢ117とＳＢ118はそれぞれ重複関係があるが、前後関係は不明である。Ⅰ～Ⅲ期において大型の建物が構築されていた範囲には建物が認められず、当期以降も同様のあり方を示す。こうした傾向は西地区でも認められ、Ⅲ期からⅣ期の間で集落景観が大きく変化すると言えよう。

Ⅴ期《４棟：ＳＢ088・089・095・098》

建物群はＢ12地区の中央部東側と南部東側にのみ確認される。Ｂ12地区北側にはＳＤ133による区画が行われる。SD133の南側にはⅥ期のＳＤ158が重複しており、南辺が存在していたかは不明である。溝の南東端はＳＤ155と合流して途切れている。仮に南辺があったとしても、南東の一部が開放してたものと考えられる。ＳＤ133底面の標高は西辺で29.8m、北辺で29.7m、東辺で29.6mを測り、東側が低くなる。幅も東側で広くなる。区画溝の東辺がやや幅が広く、深くなる状態であったと言えよう。区画内側の面積は少なくとも約818㎡ある。建物や区画溝周辺の大型土坑群も当期とする。Ｂ９地区ではＳＸ089がある。谷地形を東西方向の石列により区切り、水田として利用していた可能性がある。

第22図　任海宮田遺跡東地区中世Ⅶ期の集落変遷

Ⅵ期《２棟：ＳＢ096・097》

Ｂ12地区の南側のみに建物が構築される。建物周辺には大型土坑ＳＸ146・147・150・154・165・175がある。調査区中央にはＳＤ158による区画が出現する。東辺中央付近に土橋を設け、出入口としていた。区画内側の面積は約643㎡である。区画内部にはＳＸ127・130が存在したと考えられるが、概して遺構分布が希薄である。ＳＤ158の南東隅からはＳＤ159がつながる。それらに沿ってＳＤ149・160があり、ＳＤ160はＢ13地区まで延びている。調査区北側にも東西方向のＳＤ141がありＢ13地区のＳＤ164まで続く可能性がある。ＳＤ158底面の標高は西辺で30.5ｍで、それ以外はほぼ30.0ｍを測る。溝幅は東辺と南辺で広くなる。また、ＳＤ149・159・160底面の標高は30.5～30.7ｍで、ＳＤ158より浅い。

Ⅶ期

掘立柱建物は存在しない。Ｂ12地区の南西部で遺構が検出される。長軸方向を東西方位に合わせた長楕円の大型土坑がある。これらの土坑群に近接して石組井戸ＳＥ06がある。一部の遺構からは伊万里や唐津の出土があり、近世以降の所産のものが含まれる。

Ｃ　掘立柱建物について

遺構変遷の中で、各建物を中心とした遺構の時期を設定した。ここでは、掘立柱建物の規模や構造等の様相を示し、時期毎や調査区域ごとに変化や特徴がないのか確認していきたい。

（１）建物密度

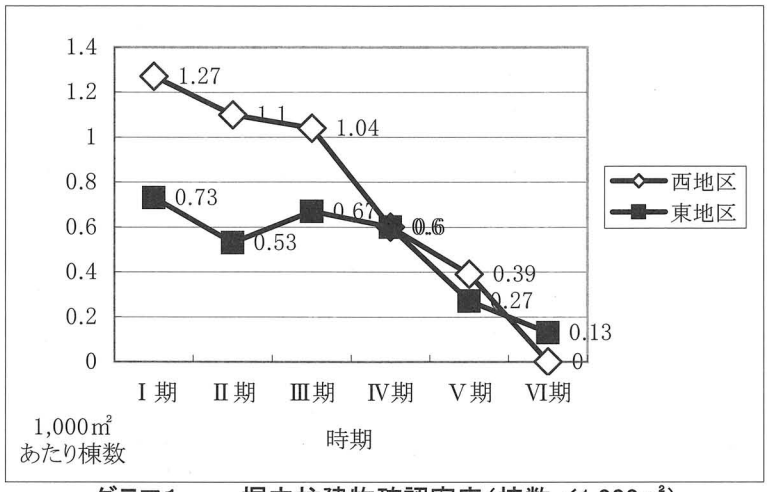
1,000㎡あたりの建物棟数を、東西区域別に時期毎の変化を示す（グラフ１）。西地区ではⅠ期：1.27棟、Ⅱ期：1.1棟、Ⅲ期1.04棟と緩やかに減少し、Ⅳ期：0.6棟とⅠ期に比べ半減する。Ⅴ期には0.39棟まで減少する。東地区ではⅠ期：0.73棟、Ⅱ期：0.53棟、Ⅲ期：0.63棟と推移し、Ⅳ期で0.6棟となる。続くⅤ期では0.27棟、Ⅵ期で0.13棟となる。

以上のように、Ⅰ期からⅢ期にかけては西地区の密度が高く、中世集落の形成当初からしばらくは西地区に建物群が多くある景観が認められる。その後、Ⅳ期において東西地区は同様の傾向を示すようになる。Ⅴ期ではさらに減少するものの、東西地区は近い値を示すようになる。

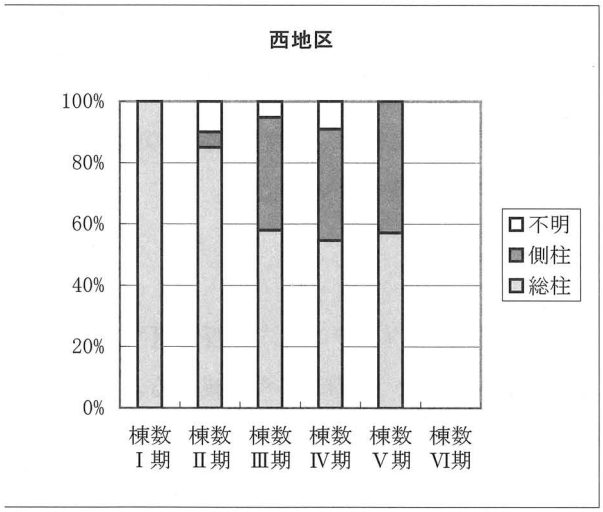
（２）建物構造・面積

建物の構造を総柱・側柱構造として分け、東西区域別に時期毎の変化を示す（グラフ２・３）。また、面積については25㎡未満（小型建物）、25㎡以上～50㎡未満・50㎡以上～100㎡未満（中型建物）、100㎡以上（大型建物）として分けて示した（グラフ４・５）。間数についても桁行２～７間毎に分けて示す（グラフ６・７）。

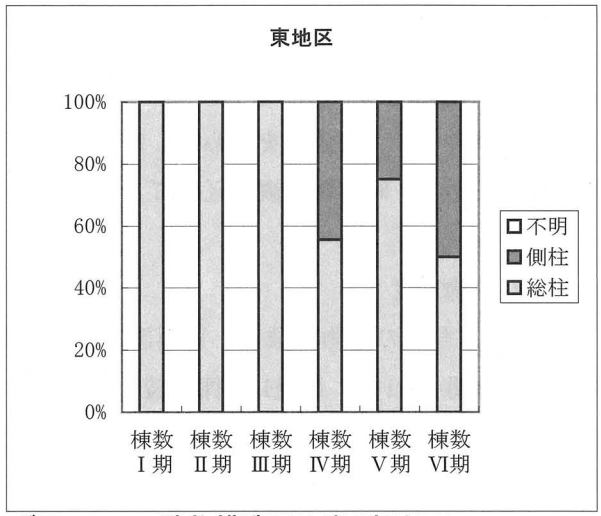
西地区のⅠ期では総柱建物のみで構成され、Ⅱ期から側柱建物が出現するが、５％と少ない。Ⅲ期以降は４割前後が側柱建物となる。Ⅰ期からⅢ期にかけての面積は、50㎡未満の建物が６割前後を占める。３×３間以下の建物も同様の割合を示す。Ⅲ期以降、約４割が側柱建物の掘立柱建物となる。面積はほぼ50㎡未満となり、３×３間以下の建物が約９割を占める。Ⅳ期では総柱・側柱建物共に50㎡未満となる。その中でも約15㎡を境として、それ未満の面積が側柱建物となる。ただし、Ｂ１地区ＳＢ017のみ、２間×２間の側柱建物ながら、39.9㎡の規模を示す。Ⅴ期では最大面積の掘立柱建物



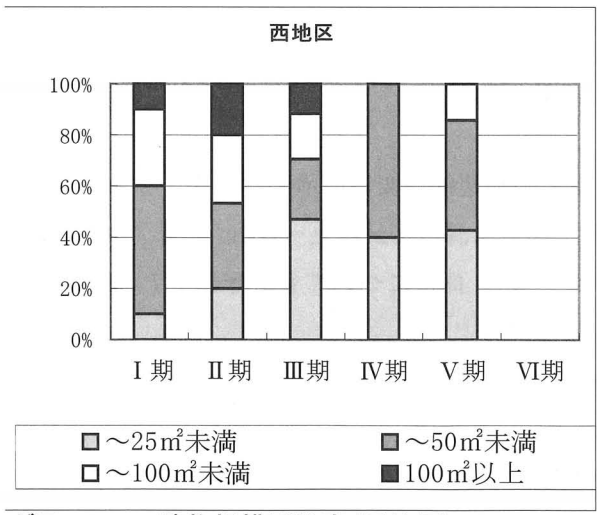
グラフ1　　掘立柱建物確認密度（棟数／1,000㎡）



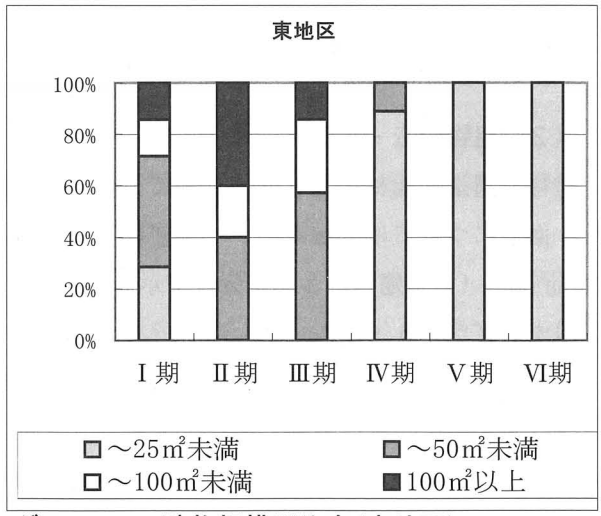
グラフ2　　建物構造別比率（西地区）



グラフ3　　建物構造別比率（東地区）



グラフ4　　建物規模別比率（西地区）

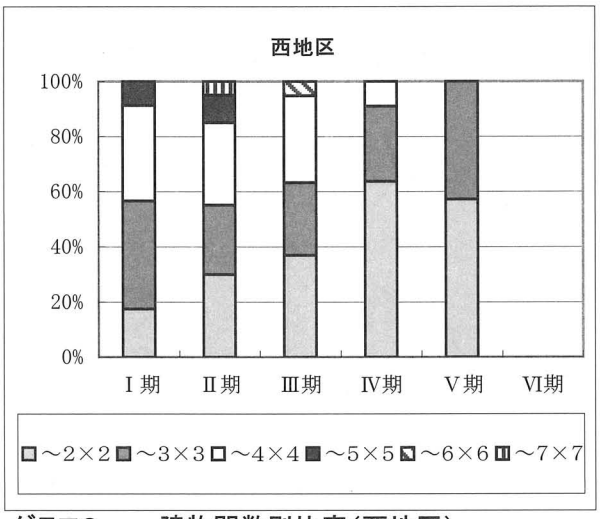


グラフ5　　建物規模別比率（東地区）

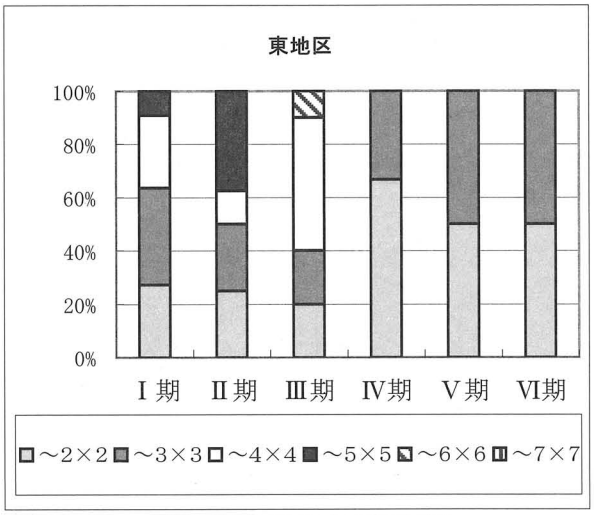
であるＢ１地区ＳＢ010が側柱建物となり、規模による構造の違いは不明瞭となる。

東地区では、Ⅰ期からⅢ期にかけて総柱建物のみで建物群が構成されている。面積は50㎡以上の建物がⅠ期では28％と少ないが、Ⅱ期には60％に達する。Ⅲ期には43％まで減少する。間数では桁行４間以上の建物がⅠ～Ⅲ期にかけて増加する。また、Ⅱ・Ⅲ期では25㎡未満の建物がなく、小型建物が建物群構成に含まれないことが分かる。Ⅳ期では一転し、25㎡未満の建物がほとんどを占める。側柱建物も現われ44％を占め、３×３間以下の建物のみで構成されるようになる。Ⅴ期以降も同様の傾向にあるが、面積は25㎡未満のみとなる。

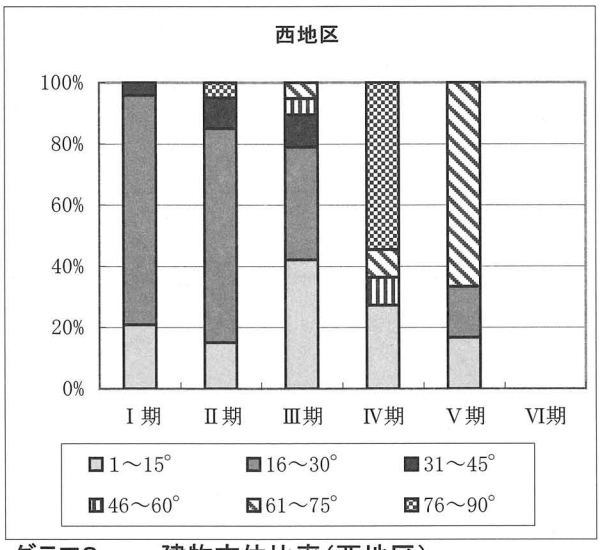
このように、中世集落の開始段階では総柱建物のみであったものが、時期を降るに従い側柱建物の比率を高めていく様相が認められた。側柱建物は東地区のⅥ期において50％を占めるようになるが、依然として総柱建物も存続する。ただし、Ⅴ期以降では、面積による構造の違いは明瞭ではなくなる。面積では東西地区共にⅢ期まで100㎡以上の大型建物が認められるが、Ⅳ期では50㎡未満の建物で占められ、西地区では25㎡未満となる小型建物の割合が高く特徴的である。また、Ⅴ期以降は、西地区で50㎡以上～100㎡未満の中型建物が認められるが割合は少なく、50㎡未満で中型・小型建物に分れる。東地区では小型建物のみとなる。



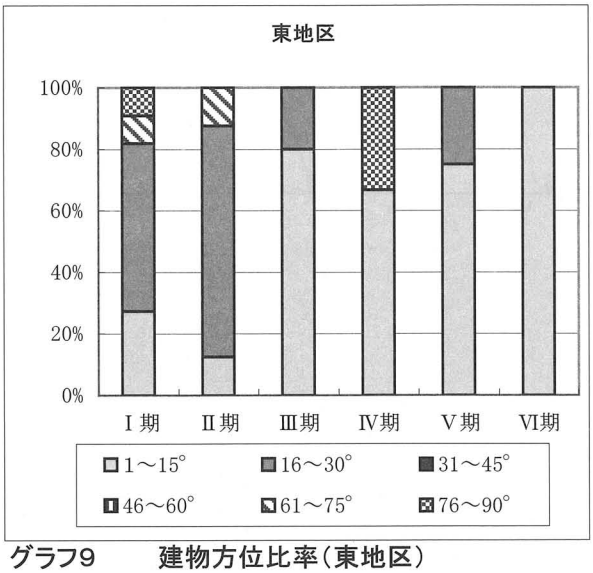
グラフ6　　建物間数別比率（西地区）



グラフ7　　建物間数別比率（東地区）

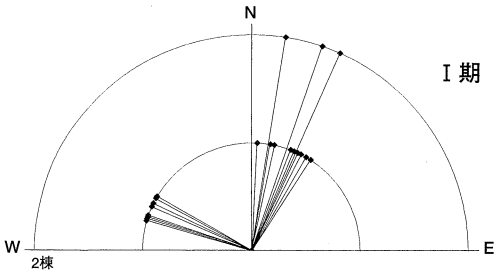


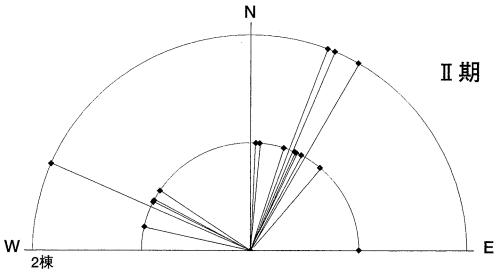
グラフ8　　建物方位比率（西地区）

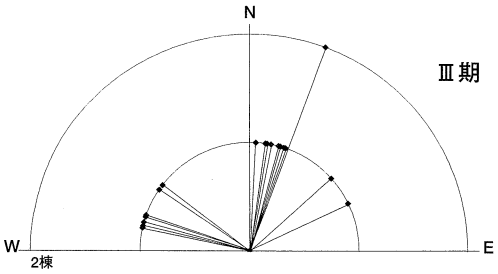


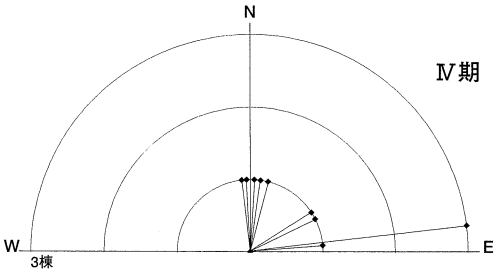
グラフ9　　建物方位比率（東地区）

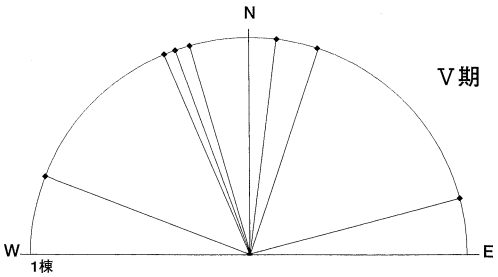
西地区



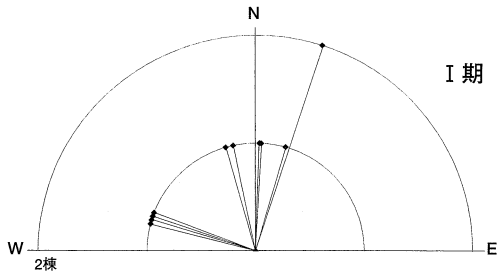


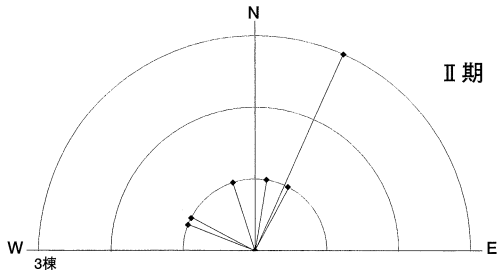


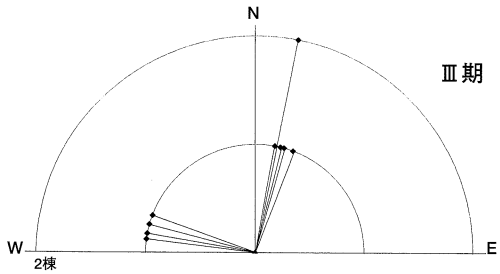


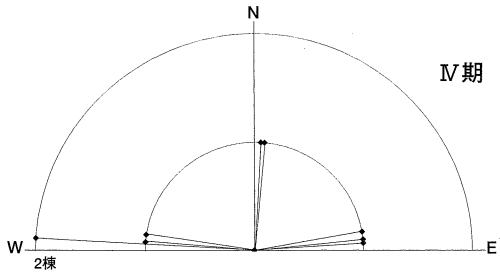


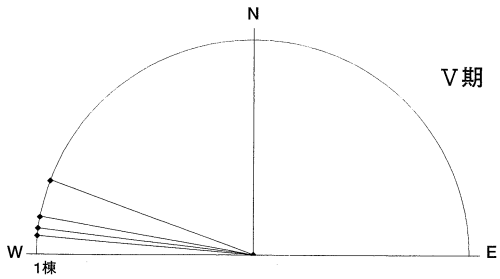
東地区

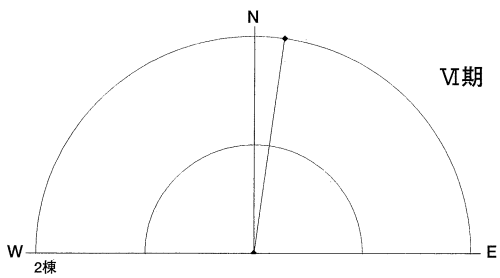












第23図　建物方位

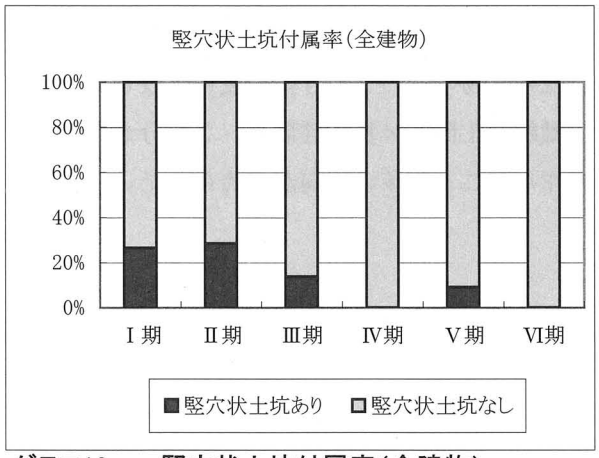
（３）建物方位

各時期の建物方位について、北からの東西方向への振幅を東西地区に分けて示した（第23図）。東西地区共にⅠ～Ⅳ期にかけて２～３方位に分かれている。Ⅴ期では西地区が３方位、東地区が１方位となる。西地区ではＢ１・２・６地区に分散して建物が構築されているのに対し、東地区ではＢ12地区のみにあることに起因するのであろう。Ⅵ期では東地区の１方位になる。

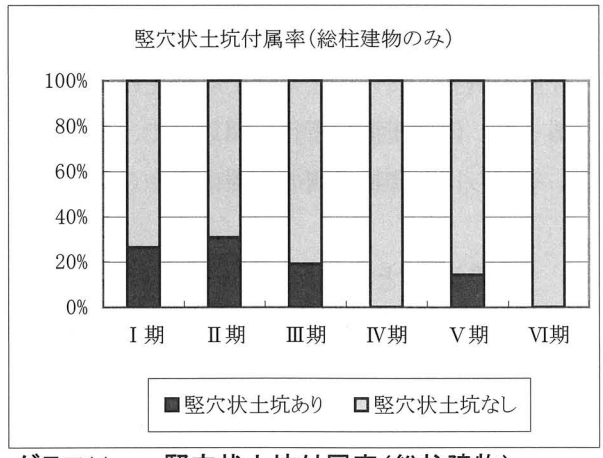
また、東西棟で北から西へ傾く方位角に90°を加え、北から東方向への振幅として扱い、15°毎に区分して、各時期における比率を示した（グラフ８・９）。それによると、東西地区共にⅠ～Ⅲ期では30°までに多くが収まる。その内、Ⅱ期までは16～30°が東西地区共に多い。南北棟ならば北北東、東西棟ならば西北西となる傾向が強いと言える。西地区ではⅣ期以降、東地区ではⅢ期以降に１～15°や76～90°が主体となり、南北や東西の方位を指向する。さらに、東地区では各期を通じ、31～60°がなく、北東や北西方位が採用されていないことが分かる。建物方位を集落内における規制とするならば、Ⅰ～Ⅲ期にかけて北北東・西北西が強く意識されたが、Ⅳ期以降は南北・東西へと変化した状況が読みとれよう。また、東地区ではその切り替わりが早く、Ⅲ期であったこととなる。

（４）竪穴状土坑

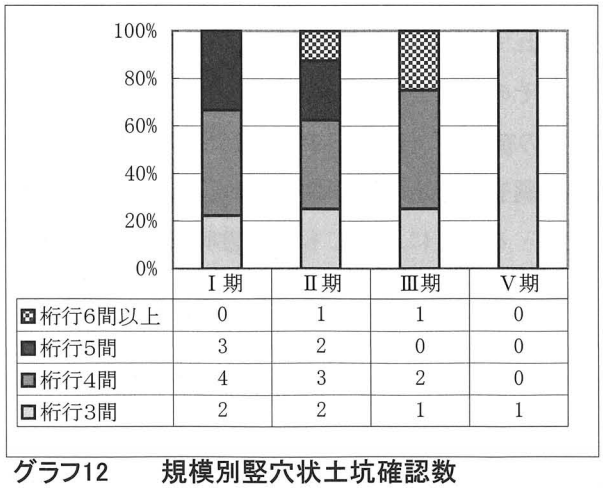
掘立柱建物に付随する施設として竪穴状土坑があり、今回の報告で大型土坑として示している内の一部が該当する。掘立柱建物の内側あるいは、外側に隣接して構築されている。ただし、前者が19棟



グラフ10　竪穴状土坑付属率(全建物)

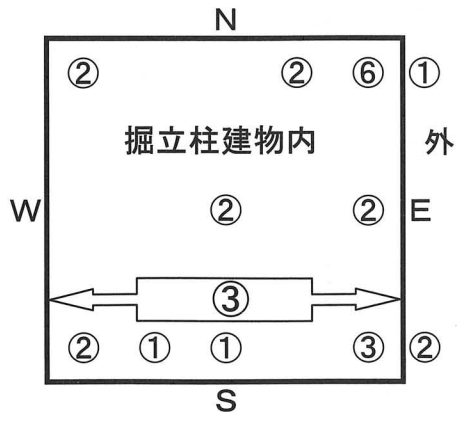


グラフ11　竪穴状土坑付属率(総柱建物)



	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅴ期
桁行6間以上	0	1	1	0
桁行5間	3	2	0	0
桁行4間	4	3	2	0
桁行3間	2	2	1	1

グラフ12　規模別竪穴状土坑確認数



第24図　竪穴状土坑　構築位置

あるのに対し、後者は３棟と少ない。これら竪穴状土坑は総柱建物のみに確認された。

全建物数での竪穴状土坑付属の割合を示す（グラフ10）。Ⅰ期：26％、Ⅱ期：29％、Ⅲ期14％、Ⅴ期：９％となる。また、総柱建物数での割合を示す（グラフ11）。Ⅰ期は総柱建物のみであるため、変わらずに26％になる。Ⅱ期：32％、Ⅲ期：19％、Ⅴ期：17％で推移する。この様に建物群全体において、Ⅰ～Ⅱ期では３割前後に付随する。Ⅲ期で半減し、Ⅴ期には１割に満たなくなる。ただし、総柱建物に限ればⅢ期以降も２割弱の割合で竪穴状土坑を付属させていたことが分かる。

竪穴状土坑が確認される建物の規模を時期別に示す（グラフ12）。Ⅰ・Ⅱ期ともに桁行５間と３間がそれぞれ２～３割程度、残りを桁行４間が占める。Ⅲ期では桁行４間が50％となる。また、Ⅱ期には４×７間のＳＢ044、Ⅲ期には４×６間のＳＢ48があるため、桁行６間以上が存在する。この２棟には建物内でなく、外側に竪穴状土坑が隣接する。Ⅴ期では桁行３間のみに確認された。

竪穴状土坑の構築される位置の傾向を示す（第24図）。建物の南辺から東辺にかけて確認される場合が多い。また、建物の一辺全体を竪穴状土坑が占める事例は、南辺のみに認められた。

竪穴状土坑自体の規模は、短軸が建物の柱間１間分、長軸は１～３間分となるものが24基と多い。その他にＳＸ37が２×３間分となり、ＳＸ032～035は合わせて３×４間分を占める。また、構造は10～30cm程度掘り込まれた単純な形態を基本とする。覆土は単層あるいは複数層の堆積であるが、炭化物層や焼土の形成はない。SX087には最下層に酸化鉄が沈着し、土坑底面が硬化していたことを窺わせる。この他に、土坑内に礫を配置した一群があるが、そのあり方はそれぞれ異なる。ＳＸ015は土坑内の四方に石積みを巡らす。ＳＸ021には一部に石列が作られている。ＳＸ033には礫が敷き詰められているが、その上面は平坦に整えられていない。

今回の調査において竪穴状土坑は主にⅠ～Ⅲ期に、総柱建物の内の２～３割程度に付設される傾向があった。建物規模は桁行４間以上で、土坑規模は短軸柱間１間分×長軸柱間１～３間分が中心となる。それらは、建物内側の外周南辺から東辺に沿って作らることが多い傾向が認められた。

ｄ　周辺遺跡との比較

ここでは、任海宮田遺跡および近接する遺跡群における既存の調査報告事例を簡単に振り返り、Ｂ地区での様相と比較しておきたい。

（１）任海宮田遺跡Ａ地区（富山県文化振興財団2006）

本報告のB地区南側に隣接する調査区域で、当事務所が平成12・13年度に調査した。13世紀中頃から中世集落が形成され、17世紀代までの遺構変遷が示されている。それによると、13世紀中頃から15世紀後半において、中世集落の形成・展開が認められ、その後は規模が縮小していく。最大面積の建物はA3地区ＳＢ08で、約143㎡を測る。報告書時期区分の前Ⅱ期（14世紀中頃～15世紀後半）とされ、今回のⅣ期に該当させておく。Ｂ12地区から約30ｍ南の調査区であり、Ⅳ期に東地区南側で展開する中・小型の建物群と関連する可能性もある。また、Ａ１・４地区においても報告書時期区分の前Ⅰ期（13世紀中頃から14世紀前半）に中・小規模の建物が確認されている。今回のⅡ～Ⅲ期に該当し、Ｂ13地区南東のＳＢ121を含めた建物群の動きを想起させる。

このようにⅡ～Ⅳ期にかけて、本報告の東地区建物群と連動した動態を垣間見ることが出来よう。

（２）任海宮田遺跡Ｂ～Ｄ、Ｌ１・２、Ｎ中地区（富山県埋蔵文化財センター1996・1997・1998）
本報告のＢ地区北側、約150ｍ程の距離をおいて位置する。国際健康プラザ建設に伴い、富山県埋蔵文化財センターによる調査が平成７～９年度に行われた。熊野川左岸に沿ったＢ・Ｃ・Ｄ・Ｌ１・Ｌ２地区に建物群が展開する。Ｂ地区では12世紀代、その他では13世紀代となる。また後者では３期の遺構変遷が示される。その中のＬ１地区にはＳＢ01：162㎡、ＳＢ05：143㎡と大型建物が存在する。両者ともに13世紀前半とされ、今回のⅠ期に該当する。建物群の最終段階は13世紀後半とされ、Ⅰ・Ⅱ期に展開する建物群と言える。また、これらの建物群から西に約250ｍとやや距離をおいて位置するＮ中地区では、13世紀後半～14世紀前半の建物群が確認されている。今回のⅡ・Ⅲ期に当る。

本報告の建物群とは距離が離れているため、関連する建物群の動きとして把握することは難しい。今後本報告が行われる当事務所調査のＣ地区も含めて整理する必要があろう。ただし、Ⅰ～Ⅲ期にかけて大型建物を含んだ建物群の形成があり、Ⅳ期までに縮小・断絶する傾向にあることは、今回示した遺構変遷の中でも見ることができた共通の事象と言えよう。

（３）総合運動公園内遺跡群（富山県埋蔵文化財センター1990・1991・1993・1994）
任海宮田遺跡の南に位置する遺跡群で、南中田Ａ・Ｃ・Ｄ遺跡、吉倉Ａ・Ｂ遺跡、任海鎌倉遺跡、栗山楮原遺跡において中世の集落が検出されている。主に12世紀後半～14世紀代の集落である。南中田Ｄ遺跡では13世紀代で途絶し、再び15世紀以降の建物群が検出されている。また、南中田D遺跡では竪穴状土坑が建物に付随する比率が高いとされる。13世紀代までを中心に、３間×２間以上の規模に伴うようである。大型建物は南中田Ａ・Ｄ遺跡、吉倉Ｂ遺跡において検出されている。いずれも12後半～13世紀代の範疇におさまり、今回のⅠ・Ⅱ期に該当する。この時期に主体を持ち、その後Ⅲ・Ⅳ期と展開した後、多くの建物群は途絶する。一部にⅤ期以降も集落が認められる。

以上の様に、任海宮田遺跡Ｂ地区周辺の中世集落について概観してみた。Ⅰ期に開始された中世集落がⅡ・Ⅲ期と展開する。Ⅰ～Ⅲ期ではそれぞれ100㎡以上の大型建物を有する。最大面積は今回報告した任海宮田遺跡Ｂ４地区ＳＢ044の171.1㎡となり、次いで富山県埋蔵文化財センター調査の任海宮田遺跡Ｌ１地区ＳＢ01が162㎡となる。また、140㎡前後の規模の建物は各遺跡に点在する。Ⅳ期以降は一様に集落規模は縮小、あるいは途絶する傾向にあった。一部には存続する建物群もあるが、建物が確認できるのはⅥ期までであった。Ⅶ期以降、つまり16世紀以降の集落構造は不明瞭となる。

ｅ　結び

これまで、遺構変遷を示した後、掘立柱建物の規模・構造や近隣の調査事例などについて見てきた。最後にそれらを基に集落変遷をⅠ～Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ・Ⅵ、Ⅶ期にまとめ直して、結びとしておきたい。

Ⅰ期において総柱建物からなる集落が、西・東地区で開始される。Ⅱ期以降では側柱建物が加わって建物群を構成していく。建物方位は自然流路や谷状地形により建物群が分断されるためそれぞれ違いはあるが、概ね北北東・西北西への指向が強い。また、竪穴状土坑はⅠ～Ⅲ期では、建物群の２～３割に付随する。先述した南中田Ｄ遺跡までには及ばないが、比較的高い率で確認された。建物密度ではⅠ～Ⅲ期にかけて西地区の方が高く、50㎡以上の建物数も多い。特にＢ４地区では最大面積の建物がⅠ～Ⅳ期を通じて検出され、経営の中心的な役割を担っていた可能性が高い。西地区では側柱建物の小型建物が徐々に増加してくる。大型建物を中心に、中型・小型建物が付随している。一方、東地区では小型建物がなく、大型・中型の総柱建物で集落が構成される傾向がある。このように、東西

地区では集落景観にやや相違が認められる。東地区では母屋：大型建物、副屋・倉庫：中型建物により建物群をなしていたと見なす。これに対し、西地区では小型建物が加わる。それらは、Ⅰ～Ⅱ期では２×２間の総柱建物、Ⅲ期では１×２間の側柱建物となる。前者は倉庫、後者は簡易な小屋的な建物が想定される。つまり西地区では母屋：大型建物、副屋：中型建物、倉庫：小型建物の構成の他に、母屋：中型建物、副屋・倉庫：小型建物という組み合わせも想定される。有力層のＢ４地区建物群の周辺に、それよりも規模の劣る建物群が随伴するように展開していた見ることもできよう。

Ⅳ期からは東西地区共に４割ほどが側柱建物となり、建物密度も同じとなる。中型・小型建物による構成になるが、面積は50㎡未満のみとなる。このような側柱構造の増加や建物規模の縮小は、富山県内の調査事例からも指摘されている（高梨2004）。建物方位は南北・東西方向が多くを占めるようになる。特に東地区ではほとんどが小型建物となり、景観が一変する。Ⅰ～Ⅲ期までの集落構造から、新たなそれへと変わる転換期にあたると言えよう。

Ⅴ期以降は建物構造・密度ともに東西地区に大きな隔たりはなくなる。また、Ⅵ期に至ると西地区の集落は断絶し、東地区のみとなる。東地区はＳＤ133・158による区画が継続して作られる。区画外に小型建物が散在し、建物や溝周辺に大型土坑が作られていく。その内側に建物は確認されず、他の遺構や遺物の分布も希薄である。こうしたあり方から、日常的な居住空間とは考えにくい。

Ⅶ期には東地区のＢ12地区に不整形の土坑などが認められるのみである。Ⅶ期以降は居住域として積極的に利用されず、耕地化が進んだものと考えられる。他の地区も含め近世の遺物が出土することから、調査区域外に居住域が移動し存続していた可能性がある。

以上のように、Ⅰ期に成立した集落が、Ⅱ・Ⅲ期と東西地区において展開した。こうしたあり方は周辺の調査区や遺跡とも符合する動きであった。大型建物に居住する有力層が主体となり、開発を進めたものと思われる。その中でも、Ｂ４地区では近接する遺跡群を含めても最大面積となる建物が存在することが注目される。こうして、Ⅰ～Ⅲ期と営まれてきた集落は、Ⅳ期を転換期として規模を縮小していく。続くⅤ・Ⅵ期は熊野川寄りの東地区に中心をおく。当該期の建物群は周辺の調査区や遺跡においても少ない。ただし、Ｂ12地区では建物の検出は少ないものの、遺物の出土は比較的多く認められる[註4]。また、溝による区画が継続して作られていることから、この区画された空間を必要とした人々の存在が窺われる。具体的な内容は不明であるが、何らかの活動・行為を目的としたものと思われる。いずれにせよ、建物構造の変化や居住域の移動も踏まえ、Ⅴ期以降の集落構造は再検討される必要があろう。Ⅶ期には集落は断絶、あるいは移動する新たな転換期をむかえたと考えられる。

さて、任海宮田遺跡の報告はＡ・Ｂ地区と行われてきた。今後、残るＣ地区について報告される予定である。その成果も踏まえ、任海宮田遺跡における中世集落の動態をとらえていく必要があろう。

（青山　晃）

註１　大型掘立柱建物（ＳＢ201・202）に関して武田健次郎（2001）では、須恵器胎土Ⅱ・Ⅲ群の杯蓋の形態から出土遺物の上限を８世紀前半と捉え、建物変遷から大型掘立柱建物の時期を８世紀後半～９世紀前半の時期と暫定的に年代観を与えた。また灰釉陶器については大半が包含層から小片で出土したため、建物廃絶後に近隣建物群の捨場として利用されたものと推測した。しかしながら次年度の周辺地区の調査状況や出土遺物の組成および分布状況から、当建物群で利用されたことが分かった。また須恵器胎土Ⅱ・Ⅲ群の解釈からⅢ・Ⅳ期の建物群と灰釉陶器の使用時期が同じと判断したため拙稿の解釈とは異なる結果となった。

註２　任海宮田遺跡で典型的に認められる竪穴住居が、当時の建物において小型であるという理由については森　隆（2000）で詳細に述べられている。

註３　まず、報告書に掲載され、時期が比定された遺物の数量を地区毎に把握した。該当する時期とした遺物の数量が、地区内で１割以上の比率となる場合、「出土多い」として扱った。

註４　Ｂ12地区においては、ＳＤ133・158による区画内には遺物の分布は少ないものの、調査区南側を中心に出土する傾向が強く、出土点数も地区毎で比べると最も多く出土している。多くの掘立柱建物を確認したＢ４地区の２倍弱の出土量があり、Ｂ12地区でⅣ・Ⅴ期の遺物も一定量出土していることが要因であると思われる。詳しい組成や分布については第Ⅱ章第８節「中世の土器組成」を参照されたい。

＜参考文献＞

青山　晃　「古代北陸におけるカマドについて－富山県の造り付けカマドを中心として－」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団　2001

池野　正男　「古代の遺物」『石名田木舟遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団　2002

上田　秀夫　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究NO2』1982

内田亜紀子　「越中における古代土師器の編年予察」『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』富山県文化振興財団　1997

内田亜紀子　「越中婦負郡の古代土師器煮炊具－婦中町中名Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ遺跡の竪穴住居出土資料を中心に－」『富山考古学研究第３号』富山県文化振興財団　2000

内田亜紀子　「任海宮田遺跡出土の灰釉陶器」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団　2001

内田亜紀子　「富山県の黒色土器（２）－９～11世紀の県内資料を中心として」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団　2003

宇野　隆夫　『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』2001

宇野　隆夫　『荘園の考古学』青木書店　2001

岡本淳一郎　「古代土器について」『富山県富山市南中田Ｄ遺跡発掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター　1991

斉藤　孝正　「猿投窯・尾北窯・美濃窯における灰釉陶器の変遷」『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会　1981

高梨清志　　「越中（富山県）の様相」『掘立柱建物から礎石建物へ』北陸中世考古学研究会　2004

高橋照彦　「3.緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

武田健次郎　「任海宮田遺跡の大型建物について－富山・石川県の事例との比較から－」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団　2001

太宰府市教育委員会　『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』2000

田島明人　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題報告編』北陸古代土器研究会・石川考古学研究会　1988

富山県文化振興財団　『埋蔵文化財調査概要－平成12年度－』2001

富山県文化振興財団　『埋蔵文化財調査概要－平成12年度－』2002

富山県文化振興財団　『埋蔵文化財調査概要－平成12年度－』2003

富山県文化振興財団　『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告』2003

富山県文化振興財団　『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』2005

富山県文化振興財団　『吉倉Ｂ遺跡発掘調査報告』2005
富山県埋蔵文化財センター　『栗山楮原遺跡　南中田遺跡　任海鎌倉遺跡　南中田Ｃ遺跡』1990
富山県埋蔵文化財センター　『富山県富山市　南中田Ｄ遺跡発掘調査報告書』1991
富山県埋蔵文化財センター　『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告（３）任海遺跡　吉倉Ａ遺跡　吉倉Ｂ遺跡』1993
富山県埋蔵文化財センター　『吉倉Ｂ遺跡』1994
富山県埋蔵文化財センター　『富山市　任海宮田遺跡発掘調査報告書』1996
富山県埋蔵文化財センター　『富山県富山市　任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1997
富山県埋蔵文化財センター　『富山県　任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』1998
富山市教育委員会　『富山市上新保遺跡発掘調査報告』2000
富山市教育委員会　『富山市任海宮田遺跡試掘調査概要』1998
中野由紀子　「任海宮田遺跡の墨書土器について－Ｂ１地区出土資料の紹介－」『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団　2001
中野由紀子　「任海宮田遺跡の墨書土器（2）－平成13年度出土資料の紹介－」『富山考古学研究第5号』富山県文化振興財団　2002
藤澤　良祐　「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁第８号』1982
藤澤　良祐　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｘ』1991
藤澤　良祐　「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『(財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第３輯』1995
北陸中世土器研究会　『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』1993
細辻　真澄　「任海宮田遺跡出土の土錘について」　『富山考古学研究第４号』富山県文化振興財団　2001
前川　要　「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相－瀬戸市百代寺窯出土遺物を中心として」『研究紀要Ⅲ』瀬戸市歴史民俗資料館　1984
前川　要　「北陸出土古代施釉陶磁器について」『北陸古代土器研究創刊号』北陸古代土器研究会　1991
百瀬　正恒　「平安時代の緑釉陶器－平安京近郊の生産窯について－」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会　1986
森　　隆　「2.黒色土器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995
森　　隆　「越中の古代掘立柱建物に関する一考察」『埋蔵文化財調査概要－平成8年度-』富山県文化振興財団　1997
森　　隆　「任海遺跡群の古代建物群構成－南中田Ｄ遺跡の事例より－」『富山考古学研究－紀要創刊号－』富山県文化振興財団　1998
森　　隆　「任海遺跡群の古代建物群構成（３）－吉倉Ｂ遺跡・任海宮田遺跡の事例より－」『富山考古学研究第２号』富山県文化振興財団　1990
森　　隆　「任海遺跡群の古代建物群構成（３）－個別事象の検討より－」『富山考古学研究第３号』富山県文化振興財団　2000
森田　勉　「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究№２』　1982
森田　利枝　「任海宮田遺跡の墨書土器－平成14年度出土資料の紹介－」『富山考古学研究第6号』富山県文化振興財団　2003
八尾町教育委員会　『富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰古窯跡緊急調査概要』1985
山下　峰司　「4.灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995
吉岡　康暢　『中世須恵器の研究』吉川弘文館　1994

第Ⅱ章　考察

1　任海宮田遺跡Ｂ地区出土の古代土器組成

はじめに

任海宮田遺跡では、Ｂ１・Ｂ６地区やＢ12・13地区を中心に古代の集落遺構の分布が確認された。とりわけＢ１地区では竪穴住居以外に大型の掘立柱建物が検出され、一帯をまとめていた在地有力層の建物と推定されている。また、大型掘立柱建物の周辺からは多量の土師器・須恵器の他に、破片で260点の灰釉陶器や127点の墨書土器などがみられ、任海宮田遺跡の中でも中核的な状況が確認されている。また、Ｂ６地区では、９世紀後半の土師器焼成遺構が確認されており、土師器生産の場として機能していたことが判明している。一般に集落遺跡から出土する多くの土器類は集落から離れた場所から流通によってもたらされたものである。出土した土器の中には猿投産の灰釉陶器や洛北産の緑釉陶器など遠隔地からもたらされたものがあり、当時としては価値の高い品物の一つとして扱われていた。その一方で、須恵器はおよそ郡単位内で生産されたとみられ、土師器についてはより在地色の強いものである。製塩土器は沿岸部周辺で製塩生産を目的としてのみ焼かれた土器である。このような土器類については何らかの方法や手段を経て当地までもたらされ、利用されたものばかりである。これらの土器類を種類毎に分類・計数を行い、その内容や組成について検討を加えていくことは、土器類を保有・利用した人々の経済的地位、階層、生業などを解き明かしていく上で、必要不可欠な作業であると考えられる。そこで、今回はＢ地区で古代の遺構が確認されたＢ１地区・Ｂ2地区・Ｂ６地区・Ｂ12地区・Ｂ13地区の５地区について出土した古代の土器類すべてを対象に土器組成について分析していくことにする。

1　分析方法

分析の対象とした土器類はＢ１地区、Ｂ２地区、Ｂ６地区、Ｂ12地区、Ｂ13地区から出土した古代の土器のすべてである。土器は各種類別に分類し、計数は破片数で行った。また、杯や椀などの供膳具については口縁部・体部・底部といった部位別ごとに表し、最低個体数の推定として底部を大(2/3以上残存のもの)、中（1/2以上残存のもの)、小（1/2未満残存のもの）に細分した。更に便宜的に大が１点で１個体、中が２点で１個体、小が８点で１個体として最低個体数を求めた。分布図は出土地点と数量を２ｍメッシュ内で破片数を計数した。分布図に示したドットは●■などの記号を使い、数量をその大きさをもって表した。ただし須恵器の杯と土師器の椀については口縁部や体部、底部といった破片のすべてをドットすると膨大な量のために、傾向が出にくくなることが予想されたため、底部のみの分布とした。また、用途別組成に分けた場合、供膳具（杯・椀・鉢・皿・高杯・蓋・盤など)、貯蔵具（須恵器甕・壺・横瓶)、煮炊具（土師器甕・堝)、硯（円面硯)、製塩（製塩土器)、土錘、その他（器形が判別できないもの）に分類した。

2　各地区における傾向

今回取り扱った地区は古代の遺構が確認されているＢ１・Ｂ２・Ｂ６・Ｂ12・Ｂ13地区の５地区である。これらの地区で確認されている建物は、掘立柱建物12棟、礎石建物１棟、竪穴住居36棟が検出

されている。まず、任海宮田遺跡Ｂ地区全体の出現率を概観し、順次各地区毎に述べていく。更に、Ｂ2地区・Ｂ12地区・Ｂ13地区の建物群のような竪穴住居で構成されているような一般的な集落と、Ｂ１地区やＢ６地区の建物群のような大型掘立柱建物や礎石建物を伴うような一般集落とはやや異にする地区とに分けても傾向をみていくことにする。

Ｂ１地区の遺構としては、主として９世紀代を中心に大型掘立柱建物を含む掘立柱建物７棟で構成されており、次に10世紀前半頃になると竪穴住居７棟で構成されるようになる。これらの建物群は、報告書本文中のまとめで建物群１として扱っているものである。特に大型掘立柱建物は在地有力層の建物と考えられている建物で、建物群の周囲からは多量の灰釉陶器・墨書土器・土錘・鉄製品などが確認されている。このため、建物群１は任海宮田遺跡の中でも重要な場所として考えられている。Ｂ２地区はＢ１地区と隣接した地区で西南端に竪穴住居４棟（建物群２）が確認されている。Ｂ６地区では礎石建物１棟、掘立柱建物５棟、竪穴住居11棟（建物群３）で構成されている。稀少な遺構としては土師器焼成遺構が検出されている。Ｂ12地区では竪穴住居３棟（建物群４）、Ｂ13地区では竪穴住居が11棟（建物群５）確認されている。建物群２・建物群４・建物群５は竪穴住居を中心とした一般的な集落であると考えられている。

これら５地区から出土した土器類の総点数は67302点にのぼる。種類としては土師器・須恵器・黒色土器・赤彩土師器・墨書土器・灰釉陶器・緑釉陶器・陶硯類・製塩土器・土製品（土錘・羽口）などがある。５地区で土器破片点数が最も多く出土した地区は、Ｂ１とＢ６地区であり、ほぼ同数でそれぞれ27362点、27264点であった（表１）。次に多いのがＢ13地区で7125点を数え、他にＢ12地区の3880点、Ｂ２地区の1671点となっている。こうしてみると、Ｂ１地区とＢ６地区の出土破片点数が他地区に比べて突出していると言うことができる。また、単純に調査平面積で割って、１㎡単位あたりの出土破片数を算出した場合、Ｂ１地区で10点/㎡、Ｂ６地区で７点/㎡、Ｂ13地区で1.2点/㎡、Ｂ２地区で0.6点/㎡、Ｂ12地区で0.6点/㎡となり、Ｂ１・６地区が他地区に比べ出土密度も高いことが分かる。種類別組成では最も多く出土したのが土師器で42603点出土している。これは総破片点数の63.3％に相当する比率である（第１図）。次に多いのが須恵器で19493点で総破片点数の28.9％を占めている。赤彩土師器の2297点（3.4％）、黒色土器の1458点（2.2％）となっている。他に、灰釉陶器・緑釉陶器の326点（0.5％）、土錘・羽口などの土製品で456点（0.7％）、製塩土器の227点（0.3％）などがある。最も多く出土した土師器の中で特に多いのが椀皿類で29944点であり、全体の総破片点数の45％、土師器の中では実に70％と高い出現率を占めている。須恵器の中では杯皿類と壷瓶類がそれぞれ9354点と10080点でほぼ50％づつ占めており、貯蔵具の占める割合の高さがうかがえる。また、過去に分析した任海宮田遺跡Ａ地区[註1]に比べて、赤彩土師器・黒色土器・灰釉・緑釉陶器の占める割合が高いといえる。

用途別組成でみると最も多く出土しているのは供膳具で43672点である。これは総点数に占める割合の64.9％にあたる（第１図）。次に多いのが煮炊具で12561点（18.6％）、貯蔵具で10211点（15.2％）であり、煮炊具と貯蔵具はほぼ似たような出現率を示している。他に土錘や羽口などの土製品で456点（0.7％）、製塩土器で227点（0.3％）、陶硯類（円面硯や風字硯など）で19点（0.1％）、その他で156点（0.2％）である。このようにみると煮炊具の18.6％はやや低率であり、貯蔵具の15.2％は任海宮田遺跡Ａ地区と比較した場合やや高い比率であることが分かる。

供膳具の個体数の推定については、墨書土器土器を含めた須恵器の杯類で685個体、皿類で39個体、蓋（つまみのみの個体数）で158個体、土師器の椀類で2371個体、皿類で139個体となっている（表２）。

また、黒色土器の椀類で116個体、鉢類で21個体、皿類14個体で、赤彩土師器の椀類で247個体、皿類で40個体となっている。灰釉陶器では椀30個体、皿で17個体となる。須恵器の杯類と土師器の椀類を比較すると、２：８の割合となり、いかに土師器椀の占める割合が高いかが分かる。また、墨書土器については杯の数が47個体となり、杯全体の685個体を割ると、およそ15個に１個の割合で墨書されている計算になり、椀についてはおよそ20個に１個の割合で墨書されていることになる。このようにみると、墨書される杯や椀が割と少ないことが分かる。

（１）Ｂ１地区（表１・第１～６図）

Ｂ１地区についてみると、種類別組成では破片点数27362点の中で最も多く出土したのは土師器で17610点を数える。これはＢ１地区出土の破片点数の64.3％に相当する出現率である。次に多いのが須恵器で8120点であり29.7％を占めている。赤彩土師器の493点（1.8％）、黒色土器の358点（1.3％）、土錘・羽口の319点（1.2％）がつづく。他に、灰釉陶器・緑釉陶器の261点（0.9％）、墨書土器の127点（0.5％）、製塩土器の72点（0.3％）などがある。緑釉陶器は１点のみの出土である。灰釉陶器は猿投産の黒笹90号窯式が主体であるが、中には尾北産のものも少量含まれる。墨書土器では「平」が最も多く、「安」「上」なども含まれる。灰釉陶器、墨書土器ともに出現比率では全体の１％にも満たないが、絶対数では他の地区より突出していることが特記できる。また、須恵器の中には陶硯類が含まれており、識字層の存在がうかがえる。上記以外にも漁労に使用される土錘が303点みられ、製塩土器も72点出土している。また、土器類以外では鉄製品の出土が39点ある。

器種別組成でみると、須恵器の杯Ａと杯Ｂの底部のみの比率は杯Ａで39.2％、杯Ｂで60.8％で有高台の杯Ｂが比率が高い。また、皿の底部のみの比率は皿Ａで43.9％、皿Ｂで56.1％で皿Ｂがやや高い。また、甕類と壷類の比率をみると59％と41％で甕類がやや優占している。壷の中で出現率をみると壷類・小壷で61.0％、広口壷・長頸壷・双耳壷・細頸壷で32.9％、短頸壷・蓋・直口壷で4.6％、横瓶・平瓶で1.5％となっている。このうち、壷類・小壷としたものは体部で器形の判別ができなかったものであり、これらの壷類を除いた場合、広口壷・長頸壷・双耳壷・細頸壷がかなりの出現率であることがわかる。土師器の椀と皿の比率は椀で96.5％、皿で0.5％と椀が著しく優占している。椀については無高台の椀Ａで93.5％、有高台の椀Ｂで6.5％であり、椀Ａの割合が卓越している。皿については皿Ａで60.4％、皿Ｂで39.6％と無高台の皿Ａの占める割合が高い。黒色土器については椀と皿の比率は椀で97.1％、皿で2.9％と椀が著しく優占している。さらに、椀の中では無高台のＡが89.2、有高台の椀Ｂが10.8％と椀Ａが優占している。赤彩土師器についても椀と皿の比率は椀で82.0％、皿で18.0％で椀が高い比率を占める。皿については有高台の皿Ｂが76.5％で皿Ａは23.5％に過ぎない。墨書土器については須恵器と土師器の比率は須恵器が23.6％、土師器が76.4％と土師器の比率が高い。須恵器杯につてみると杯Ａで65％、杯Ｂで35％で杯Ａの比率が高い。土師器椀は椀Ａで86.1％、椀Ｂで13.9％で椀Ａの比率が高い。これは、墨書土器が無高台の土器のものの比率が高いといえる。

用途別組成では最も多く出土しているのは供膳具で19714点である。これは総点数に占める割合の72.0％にあたる。次に多いのが貯蔵具で6108点（22.3％）であり、これは今回分析した５地区の中で最も高い出現率と言える。煮炊具は1133点（4.1％）であり、これは貯蔵具と対照的で５地区の中で最も少ない出現率となっている。他に土錘や羽口などの土製品で319点（1.1％）、製塩土器で72点（0.3％）、円面硯や風字硯などの陶硯類で４点（0.1％）、その他で12点（0.1％）となっている。こうしてみると供膳具の占める割合が大部分を占め、煮炊具が著しく少ないことがみてとれる。

分布をみると全体的に大型掘立柱建物を中心に北西から南東にかけて帯状に分布している。個別に

みると須恵器杯・蓋は概ね大型掘立柱建物周辺を中心に分布していることが分かる。皿・鉢に関しては、大型掘立柱建物周辺を中心に分布しているのに加え、東南にある谷の落ち際に分布している。壷類や甕類については大型掘立柱建物から北東周辺を中心に密布している。土師器・黒色土器・赤彩土器の椀皿類については大型掘立柱建物周辺を中心に分布している。土師器の甕・堝は竪穴住居を中心に出土し、小型甕は大型掘立柱建物周辺に分布している。灰釉陶器は大型掘立柱建物から北東周辺を中心に分布している。墨書土器は竪穴住居を中心としながらも、散在傾向にある。

（2）Ｂ2地区（表1、第1・7～9図）

Ｂ2地区についてみると、破片点数1671点である。このうち最も多く出土したのは土師器で1117点を数える。これはＢ2地区出土の破片点数の66.8％に相当する出現率である。次に多いのが須恵器で466点であり土器点数の27.9％を占めている。赤彩土師器の65点（3.9％）、黒色土器の4点（0.2％）、土錘・羽口の1点（0.1％）がつづく。他に、灰釉陶器・緑釉陶器の2点（0.1％）、墨書土器の16点（1.0％）などがある。用途別組成で最も多く出土しているのは供膳具で785点である。これは総点数に占める割合の47.0％にあたる。次に多いのが煮炊具で588点（35.2％）、貯蔵具で260点（15.5％）であった。他に土錘や羽口などの土製品で1点（0.1％）、その他で37点（2.2％）となっている。こうしてみると、Ｂ1地区やＢ6地区に比べて種類別組成で土師器の占める割合はさほど差はないが、用途別組成で椀皿類の供膳具が47％で、煮炊などに使用された甕や堝などの煮炊具の占める割合が35.2％とやや高くなっているのがみてとれる。

分布については須恵器杯・蓋や墨書土器については竪穴住居群と南北に走る溝を中心に出土している。須恵器壷・甕類については溝を中心に分布傾向にある。土師器や赤彩土師器の椀皿類は竪穴住居群とその周辺で出土している。土師器の甕・堝類は竪穴住居群を中心に出土している。このようにみていくと、椀皿類などの供膳具や甕・堝などの煮炊具は竪穴住居群（建物群2）を中心に出土していることがいえる。

（3）Ｂ6地区（表1、第1・10～16図）

Ｂ6地区については、土器点数27255点の中で最も多く出土したのは土師器で16217点を数える。これはＢ6地区出土の土器点数の59.5％に相当する出現率である。次に多いのが須恵器で7743点であり土器点数の28.4％を占めている。赤彩土師器の1673点（6.1％）、黒色土器の1053点（3.9％）、土錘・羽口の109点（0.4％）がつづく。他に、灰釉陶器・緑釉陶器の60点（0.3％）、墨書土器の254点（0.9％）、製塩土器の146点（0.5％）などがある。概ねＢ1地区と類似した組成で、土師器（椀類）の出現率が高く、また黒色土器・赤彩土師器・墨書土器がやや多い傾向にあることが窺える。また、土製品でフイゴの羽口が63点と他地区に比べて多い出土量である。灰釉陶器は黒笹14号窯式が出土しており、緑釉陶器は洛北産の軟質のものが出土している。墨書土器については「成」が最も多く出土しており、他に「礼」「安」「上」などがみられた。また、陶硯類としては円面硯が、特殊な須恵器としては鳥形須恵器もみられる。また、土器類ではないが石製品として石帯が建物群3から2点出土している。

器種別組成でみると、須恵器の杯Ａと杯Ｂの底部のみの比率は杯Ａで64.2％、杯Ｂで35.8％で無高台の杯Ａの方が比率が高いことが分かる。また、皿では底部のみの比率が皿Ａで29.5％、皿Ｂで70.5％で皿Ｂの比率が高い。また、甕類と壷類の比率をみると67.9％と32.1％で甕類が高い比率を占めている。壷の中で出現率をみると広口壷・長頸壷・双耳壷・細頸壷で56.9％、壷類・小壷で31.5％、短頸壷・蓋・直口壷で7.5％、横瓶・平瓶で4.1％となっている。このうち、壷類・小壷としたものは

体部などで器形が判別できなかったものであり、これらの壷類を除いた場合、広口壷・長頸壷・双耳壷・細頸壷が比較的高い出現率であることがわかる。土師器の椀と皿の比率は椀で94.6%、皿で5.4%と椀が著しく優占していることが分かる。椀については椀Aで91.3%、椀Bで8.7%であり、無高台の椀Aの割合が著しく高い。皿については皿Aが9.2%、皿Bで90.8%と有高台の皿Bが高い比率で出現している。黒色土器については椀と皿の比率が椀で99.5%、皿で0.5%とほとんど椀で占められている。さらに、椀の中でも無高台の椀Aが97.6%、椀Bが2.4%と椀Aが優占している。赤彩土師器については椀と皿の比率は椀で90.2%、皿で9.8%で椀が高い比率を占めている。皿では有高台の皿Bが85.7%で皿Aは14.3%に過ぎない。墨書土器では須恵器と土師器では須恵器が35.4%、土師器が64.6%と土師器の比率が高い。須恵器杯は杯Aで66.1%、杯Bで33.9%で杯Aの比率が高い。土師器椀は杯Aで96%、杯Bで4%で杯Aの比率が高い。墨書については無高台のものの方が比率が高いといえる。灰釉陶器では椀と壷類でみた場合、椀で46.7%、壷類で53.3%であった。また緑釉陶器では椀で88.9%、皿で11.1%となっている。

用途別組成では最も多く出土しているのは供膳具で19028点である。これは総点数に占める割合の69.8%にあたり、B1地区と同様に高い出現率となっている。次に多いのが煮炊具で5188点（19.0%）であり、貯蔵具で2686点（9.8%）であった。他に土錘や羽口などの土製品で109点（0.4%）、製塩土器で146点（0.5%）、円面硯や風字硯などで13点（0.1%）、その他で85点（0.3%）となっている。B1地区では出現率が低い煮炊具がB6地区では19%を占めている。その一方で、B1地区では22%であった貯蔵具は、B6地区では低く9.8%となっている。こうしてみると椀皿類などの供膳具が多いのは、実際に使用されたもの以外に、土師器焼成遺構で焼かれた椀類の失敗した破片が多く含まれていることが一要因と考えられる。このことは後述する分布で、土師器焼成遺構周辺に密布していることからもうかがえよう。

分布をみると全体としては北北東から南南西にかけて帯状に分布しているが、集中的に出土しているのはやはり建物群が分布している範囲である。個別にみていくと須恵器杯・皿・蓋については掘立柱建物群や竪穴住居群を中心に分布しており、須恵器の双耳瓶・広口壷・長頸壷を除く壷や横瓶についてもほとんど粗密なく建物群を中心に散在している。双耳瓶・広口壷・長頸壷や甕類に関してはどちらかというと土師器焼成遺構周辺を中心にやや集中している傾向が見て取れる。土師器の椀や赤彩土師器、黒色土器の椀類は掘立柱建物群や竪穴住居群を中心に分布しており、特に土師器焼成遺構周辺に出土量が多い傾向にある。また、堝や甕類については掘立柱建物や竪穴住居群を中心に出土していることがみてとれる。緑釉陶器や灰釉陶器については掘立柱建物などの建物群周辺を中心に出土している。土錘についてはやや建物群から離れたところに散在している。羽口は土師器焼成遺構周辺で分布が確認されている。製塩土器は建物群の周辺に分布している傾向にある。墨書土器については建物群周辺からの出土傾向が見てとれる。陶硯類については散在傾向で、建物群からやや離れたところから確認され、鳥形須恵器は礎石建物の南側から出土している。

（4）B12地区（表1、第1・17～21図）

B12地区についてみると、破片点数3880点の中で最も多く出土したのは土師器で2925点を数える。これはB12地区出土の破片点数の75.3%に相当する出現率である。次に多いのが須恵器で907点であり、23.3%を占めている。他に赤彩土師器の32点（3.2%）、黒色土器の5点（0.1%）、土錘・羽口の2点（0.1%）がある。灰釉陶器・緑釉陶器の1点（0.1%）、墨書土器の2点（0.1%）、製塩土器の6点（0.2%）なども確認されている。用途別組成では最も多く出土しているのは煮炊具で2573点であ

り、これは総点数に占める割合の66.3％にあたる。次に多いのが供膳具で1038点（26.7％）である。他に貯蔵具で245点（6.3％）、土錘や羽口などの土製品で２点（0.1％）、製塩土器で６点（0.2％）、その他で16点（0.4％）となっている。このようにみていくと、煮炊用の甕・堝類などの煮炊具の多さが指摘できる。

Ｂ12地区の建物群は調査区北端に集中して立地している。全体の遺物分布をみると、遺構周辺でも分布しているのだが、全体としては散在的で、あまり傾向が現れていない。須恵器杯・蓋・壷・甕や土師器・赤彩土師器椀皿については遺構周辺に特に集中することはなく、漠然とした分布で、甕や小型甕については、やや竪穴住居内から出土していることがみてとれる。灰釉陶器・土錘・製塩土器・墨書土器については散在傾向で、遺構との整合性もみられない。

（５）Ｂ13地区（表１、第１・22～27図）

Ｂ13地区についてみると、破片点数7125点の中で最も多く出土したのは土師器で4729点を数える。これはＢ13地区出土の破片点数の66.3％に相当する出現率である。次に多いのが須恵器で2255点であり土器点数の31.6％を占めている。赤彩土師器の34点（0.5％）、黒色土器の34点（0.5％）、土錘・羽口の25点（0.3％）がつづく。他に、灰釉陶器・緑釉陶器の２点（0.1％）、墨書土器の43点（0.6％）、製塩土器の３点（0.1％）などがある。墨書土器としては「貳」「縄足」と判読できるものがみられた。また、土器類ではないが、石帯で透孔の入る丸鞆が１点出土している。用途別組成において最も多く出土しているのは供膳具と煮炊具でそれぞれ3097点と3078点であり、これは総点数に占める割合の43.4％、43.2％にそれぞれ相当する。次に多いのが貯蔵具で913点（12.8％）、土錘や羽口などの土製品で25点（0.3％）、製塩土器で３点（0.1％）、円面硯や風字硯などで２点（0.1％）、その他で６点（0.1％）となっている。

Ｂ13地区の古代の遺構は調査区全体に分布しているわけではなく、南東端に竪穴住居群が集中している。そのため、遺物全体の分布も竪穴住居群の分布とほぼ一致し整合性がみてとれる。須恵器杯・蓋は調査区全体に分布しているものの、竪穴住居群にやや集中している。須恵器の壷類と甕類は建物群周辺からの出土が多く、横瓶は散在傾向にある。土師器椀類や堝甕類は調査区全体に散在しているものの竪穴住居群の周辺から高い密度で出土している。土錘や羽口といった土製品については概ね竪穴住居群の周辺に多くみられる。墨書土器については４割程度が竪穴住居から出土している。

３　比較分析

ここでは、各地区における建物群の様相をふまえて、一般的な集落とやや異なる集落との比較を試みる。ここで言う一般的な集落とは竪穴住居を主体とした建物群であり、Ｂ２地区の建物群２、Ｂ12地区の建物群４、Ｂ13地区の建物群５がこれに相当する。これらの建物構成は、建物群２で竪穴住居４棟、建物群４で竪穴住居３棟、建物群５で竪穴住居11棟であり、合計18棟からなっている。その一方で、一般的な集落とはやや異なる建物群としては在地有力層の建物と推定されている大型掘立柱建物が確認されているＢ１地区の建物群１と礎石建物や生産の場である土師器焼成遺構などが検出されたＢ６地区の建物群３である。建物群１は掘立柱建物７棟、竪穴住居７棟で構成されており、建物群３は掘立柱建物５棟、礎石建物１棟、竪穴住居11棟で構成されている。

一般的な集落に相当するＢ２・12・13地区の種類別土器組成では、土師器が69.2％で優占している。次に多いのが須恵器で28.6％を占めている。他に赤彩土師器の1.0％、墨書土器の0.5％、黒色土器の0.3％、土錘・羽口の0.2％がある。灰釉陶器・緑釉陶器（0.1％）や、製塩土器（0.1％）も確認され

ている。用途別組成では最も多いのが煮炊具で49.2％を占めている。次に多いのが供膳具で38.8％である。他に貯蔵具11.2％、土錘や羽口などの土製品で0.2％がある。また、陶硯類・製塩土器で各0.1％づつ出現している。器種別組成でみると、須恵器の杯Ａと杯Ｂの底部のみの比率は杯Ａで59.5％、杯Ｂで40.5％で無高台の杯Ａの比率が高いことが分かる。また、皿では底部のみの比率が皿Ａで35.7％、皿Ｂで64.3％となり、皿Ｂの比率が高い。また、甕類と壷類の比率をみると67.7％と32.3％で甕類が高い比率を占めている。壷の中で出現率をみると壷類・小壷で45.3％、広口壷・長頸壷・双耳壷・細頸壷で34.1％、短頸壷・蓋・直口壷で10.5％、横瓶・平瓶で10.1％となっている。このうち、壷類・小壷としたものは体部などで器形が判別できなかったものであり、これらの壷類を除いた場合、広口壷・長頸壷・双耳壷・細頸壷がやや高い出現率であることがわかる。土師器の椀と皿の比率は椀で97.4％、皿で2.6％と椀が著しく優占している。椀については無高台のＡで88.6％、有高台のＢで11.4％であり、椀Ａの割合が著しく高い。皿については皿Ａが44％、皿Ｂで56％であり、皿Ａと皿Ｂとの間に10％程度の差がある。黒色土器の椀は、無高台の椀Ａで83％、椀Ｂで17％と椀Ａが優占している。赤彩土師器については椀と皿の比率がそれぞれ92.6％と7.4％となり、椀の比率が著しく高い。椀は椀Ａで68.4％、椀Ｂで31.6％となり、椀Ａの占める割合が高い、皿では有高台のＢが20％で無高台のＡは80％となっている。墨書土器では須恵器と土師器の比率をみると須恵器で67.2％、土師器で32.8％となり、須恵器の占める割合が高い。須恵器杯では杯Ａで88.6％、杯Ｂで11.4％となり杯Ａの比率が高い。土師器椀は椀Ａで70％、椀Ｂで30％で椀Ａの比率が高い。墨書については無高台のものの比率が高いといえる。

このようにしてみると、Ｂ１地区・Ｂ６地区とＢ２地区・Ｂ12地区・Ｂ13地区を比較した場合、種類別組成においては土師器が60～70％、須恵器が30％でさほど差はみられない。しかし、土師器の用途別組成をみると、Ｂ２地区・Ｂ12地区・Ｂ13地区では煮炊具が49.2％と出現率で最も高い。それとは対照的に、Ｂ１・Ｂ６地区では椀類の供膳具が優占していることが一般集落との最も大きな相違点である。また、黒色土器・赤彩土師器・灰釉陶器・緑釉陶器については、出現率においては、Ｂ２・Ｂ12・Ｂ13地区の２～７倍の出現率を示している。また、黒色土器についていえば、４～13倍という高い出現率を示している。このようにみると、Ｂ１地区とＢ６地区では煮炊用の甕堝が少なく、椀類の供膳具が多い傾向にある。また、緑釉陶器・灰釉陶器、黒色土器の出現率も一般集落よりも高いことがいえる。器種別組成でみると須恵器の杯については概ね杯Ａよりも杯Ｂが優占しているが、Ｂ１地区では杯Ｂが60.8％とＡよりも多く、他の地区と逆転した比率を示している。壷類と甕ではすべての地区において甕が約60～70％を占めていることがいえよう。土師器の椀と皿の比率はどこの地区でも90％以上が椀であり、椀Ａが90％以上を占めている。黒色土器の椀についてもよく似た傾向を示しており、椀と皿の比率は椀が90％以上を占めている。また、椀でもＡの方がＢより優占している。

４　竪穴住居における土器組成（表３・４、第28図）

一般に竪穴住居から出土する破片数でみた場合、土器類は日常生活で使用されたであろう土師器と須恵器で占められる。特に、土師器が７～８割ほどを占める場合が多く、これは煮炊具として甕堝などの大型のものが破片となり数が多くなることが主要因と考えられる。以下に破片点数が100点を上回る竪穴住居をピックアップし、時期ごとに竪穴住居の出現傾向をみてみる。

Ⅰ期の竪穴住居はＢ12・Ｂ13地区に立地しており、建物群４（ＳＩ23・24・25）、建物群５（ＳＩ27・32・33・34）の計７棟である。これらのうち破片点数が100点以上の竪穴住居はＳＩ23・ＳＩ

27・ＳＩ32・ＳＩ33であった。ＳＩ23をみると種類別組成では概ね土師器が80％以上と大半を占めている。用途別組成では煮炊具である甕堝類が80％を占めている。ＳＩ27・32・33についてもやはり土師器で60～75％ほどを占める。用途別では煮炊具が60％以上と優占している。供膳具についてはややばらつきがあるものの20～40％を占めている。ＳＩ27については貯蔵具が他の竪穴住居に比べて比率が高く10％を占めている。

Ⅱ期になると西側地区でも竪穴住居が確認されるようになる。竪穴住居が確認された地区はＢ６地区とＢ13地区で計４棟で構成されている。このうちＳＩ14・ＳＩ26・ＳＩ31の３棟で破片点数が100点以上確認されている。Ｂ６地区では建物群３に属するＳＩ14があり、竪穴住居以外としてはＢ１地区で掘立柱建物であるＳＢ203、Ｂ６地区で掘立柱建物ＳＢ211・213などがみられる。Ｂ13ではＳＩ26・31・35があり、３棟で構成されている。ＳＩ14・26・31の３棟ともに土師器の占める割合が高い。用途別組成でみるとＢ６地区のＳＩ14を除けば、概ね煮炊具で70％、供膳具で25％、貯蔵具で４％という出現率である。

Ⅲ期で竪穴住居が確認されているのはＢ２・Ｂ６・Ｂ13地区で計９棟で構成されている。Ｂ６地区では竪穴住居ＳＩ12・ＳＩ15・ＳＩ17・ＳＩ18の他に掘立柱建物のＳＢ210がある。これらのうちＳＩ12・ＳＩ15・ＳＩ17・ＳＩ30が100点以上確認されている。種類別組成をみると全体として土師器の占める割合が高いが、Ｂ６地区の竪穴住居では須恵器・土師器以外の焼物も一定量含まれる。Ｂ６地区の用途別組成をみると明らかに供膳具の多いことが指摘できる。70～80％の高い出現率であり、Ｂ13地区のＳＩ30の煮炊具が大半を占め、供膳具が30％前後である状況とは対照的である。Ｂ13地区については供膳具が優占することはなく、Ⅱ期と同様に煮炊具が大半を占めている。

Ⅳ期の竪穴住居は西側のＢ２・Ｂ６で検出されており、東側からは竪穴住居がみられなくなる。この時期はＢ１地区の建物群１を中心とするＳＢ202である大型掘立柱建物やそれに伴うＳＢ204・ＳＢ205が配置される時期でもある。また、Ｂ６地区の建物群３に伴う土師器焼成遺構と掘立柱建物ＳＢ208の時期に相当する。Ｂ2地区ではＳＩ10の１棟と、Ｂ６地区ではＳＩ13・ＳＩ16・ＳＩ19・ＳＩ20の４棟の計５棟が確認されている。これらのうち、破片点数が100個体以上の住居はＳＩ13・ＳＩ16・ＳＩ19の３棟である。全般に土師器が大半を占めており、用途別組成では供膳具が高い出現率を示しており、ＳＩ16では86.3％を占めている。

Ⅴ期はＢ１・Ｂ２・Ｂ６地区で確認されている。Ｂ１地区ではＳＩ01～ＳＩ07の７棟が、Ｂ2地区ではＳＩ08・09の２棟が、Ｂ６地区ではＳＩ21・ＳＩ22の２棟がそれぞれ確認されている。これらのうち、ＳＩ01・ＳＩ02・ＳＩ04・ＳＩ07・ＳＩ08・ＳＩ21の６棟が100点以上確認されている竪穴住居である。Ｂ６地区のＳＩ21を除けば、土師器が80～90％と高率で占めている状況がみてとれる。また、赤彩土師器や緑釉陶器・灰釉陶器なども少量含んでいる。また、ＳＩ02からは墨書土器が６点ほど確認されている。用途別組成ではＢ2地区のＳＩ08を除けば供膳具の占める割合が70％以上を占めており、その反面、煮炊具が占める割合は20％未満と低い出現率になっている。Ｂ2地区のＳＩ09では若干煮炊具が供膳具を上回るかたちとなっている。Ｂ６地区のＳＩ21では供膳具が70％と卓越しており、煮炊具は25％にとどまっている。この時期の竪穴住居の組成比率はＢ１・Ｂ６地区出土の土師器椀が多いことに起因してか、供膳具の占める割合が高いことがいえる。

以上、竪穴住居で時期ごとにみてきた。こうしてみると、まず種類別組成については須恵器の占める割合が時期が下ると共にやや減少傾向にあることがみてとれよう。また、黒色土器や赤彩土師器についてはⅢ期～Ⅳ期に占める割合が増加することがわかる。他に、竪穴住居の帰属時期が同じでも、

地区ごとに大きく傾向が異なることが確認された。一般的な集落であるB12地区やB13地区とそうでないB１地区やB６地区の竪穴住居では、B１地区やB６地区の竪穴住居の方が供膳具の占める割合が非常に高いということがあげられる。これについては、実際、竪穴住居における使用形態の違いによるものなのか、又は混ざり込みによるものかは判断し難い。

5　まとめ

以下に、B地区全体、B１地区、B６地区、B２・12・13地区に大きく分けて土器組成について箇条書きで示し、まとめとしたい。

（１）B地区全体の出土破片点数の出土量をみると、地区によって偏りがあり、B１・B６地区の両地区を合わせるとB地区全体の８割にものぼる。種類別組成をみると、土師器と須恵器の出現率は63.3%と28.9%となっている。他に赤彩土師器（3.4%）、黒色土器（2.2%）、灰釉・緑釉陶器（0.5%）、土製品（0.7%）、製塩土器（0.3%）である。このようにみると土師器の占める割合が高いことがいえる。また、過去に分析した任海宮田遺跡A地区と比べて、赤彩土師器・黒色土器・灰釉・緑釉陶器の占める割合が高い。また、用途別組成をみると、B地区全体では供膳具が64.9%と優占しており、中でも椀類の占める割合が高い。貯蔵具の占める割合も15.2%と任海宮田遺跡A地区に比べて高く、その一方で煮炊具の18.6%は低率であるといえる。地区（建物群）によっても種類別組成や用途別組成において違いがあり、竪穴住居を中心とする一般的な集落（B２・B12・B13地区）においては土師器の中でも甕堝などの煮炊具が優占している。その一方で、在地有力者の居宅とみられる大型掘立柱建物が位置するB１地区や、礎石建物や土師器焼成遺構が検出されているB６地区では、煮炊具の占める割合が低く、椀類が卓越している状況がうかがえる。B１地区やB６地区では緑釉陶器・灰釉陶器、黒色土器の占める割合が高く、出現率ではB２・B12・B13地区の２～７倍にのぼる。更に、黒色土器についていえば、B２・B12・B13地区の４～13倍ということが言える。また、一つの試みとして、供膳具の最低個体数を算出してみた。B地区全体の須恵器杯類で685個体、皿類で39個体、土師器椀類で2371個体、皿類で139個体となり、あらためて土師器椀を多用していたかが分かる。

（２）B１地区の出土破片点数は27362点であった。種類別組成で最も多く出土したのは土師器で64.3%、須恵器で29.7%、赤彩土師器で1.8%、黒色土器で1.3%、土錘・羽口で1.2%、灰釉陶器・緑釉陶器で0.9%、墨書土器で0.5%、製塩土器で0.3%の出現率であった。用途別組成では供膳具で72.0%、貯蔵具で22.3%、煮炊具で4.1%、土錘や羽口などの土製品で1.1%、製塩土器で0.3%、円面硯や風字硯などの陶硯類で0.1%、その他で0.1%となっている。供膳具が72.0%と優占しているし、貯蔵具も22.3%と他の地区に比べて高い比率である。その一方で煮炊具が4.1%と著しく低率であった。分布をみると調査区の北西から南東にかけて帯状に分布しつつ、概ね大型掘立柱建物などの建物群を中心に密布している状況であった。また、墨書土器土器は竪穴住居にやや集中していることがうかがえた。

（３）B６地区の出土破片点数は27255点であった。種類別組成で最も多く出土したのは土師器で59.5%の出現率であった。次に須恵器で28.4%、赤彩土師器で6.1%、黒色土器で3.9%、土錘・羽口などの土製品で0.4%、灰釉陶器・緑釉陶器で0.3%、墨書土器で0.9%、製塩土器で0.5%となっている。用途別組成では供膳具で69.8%、煮炊具で19.0%、貯蔵具で9.8%で、土錘や羽口などの土製品で0.4%、製塩土器で0.5%、陶硯類で0.1%、その他で0.3%となっている。B１地区では出現率が低くかった煮炊具がB６地区では19.0%を占め、その一方で、B１地区では22.3%であった貯蔵具は、B

6地区では低く9.8%となっている。分布をみると、概ね建物群に密布していることがうかがえた。土師器の椀や赤彩土師器・黒色土器は土師器焼成遺構を中心に出土しており、緑釉・灰釉陶器は掘立柱建物付近に密集している傾向にある。また、鳥形須恵器は礎石建物の南側に分布している。

（4）B2・12・13地区の出土破片点数は12676点であった。種類別組成では、土師器が69.2%で優占し、須恵器で28.6%、赤彩土師器で1.0%、墨書土器で0.5%、黒色土器で0.3%、土錘・羽口などの土製品で0.2%、灰釉陶器・緑釉陶器で0.1%、製塩土器で0.1%となっている。用途別組成では煮炊具で49.2%、供膳具で38.8%、貯蔵具11.2%、土錘や羽口などの土製品で0.2%、陶硯類・製塩土器で各0.1%づつ出現している。分布についてはB2地区で、概ね竪穴住居と南北にのびる溝を中心に分布している。B12地区は散在傾向にあるが、土師器の甕類については竪穴住居（建物群2）付近からややまとまって分布している。B13地区では竪穴住居群（建物群5）からまとまりをもって分布している。

（5）竪穴住居を時期ごとに種類別・用途別組成をみた場合、種類別組成については須恵器の占める割合が時期が下るにつれてやや減少傾向にあることがうかがえた。また、黒色土器や赤彩土師器はⅢ期～Ⅳ期に占める割合が増加している。

以上、任海宮田遺跡B地区の古代土器組成の様相を箇条書きで示した。今回はB地区の土器組成比率の基礎的データの提示に重点を置いた。そのため、他の遺跡との比較や検討といったことがらについては、ほとんど言及していない。今後とも同様な手法によりデータの蓄積をし、他の遺跡との比較検討を通じて総合的に任海宮田遺跡の位置づけを行っていく必要があろう。　　中村　亮仁

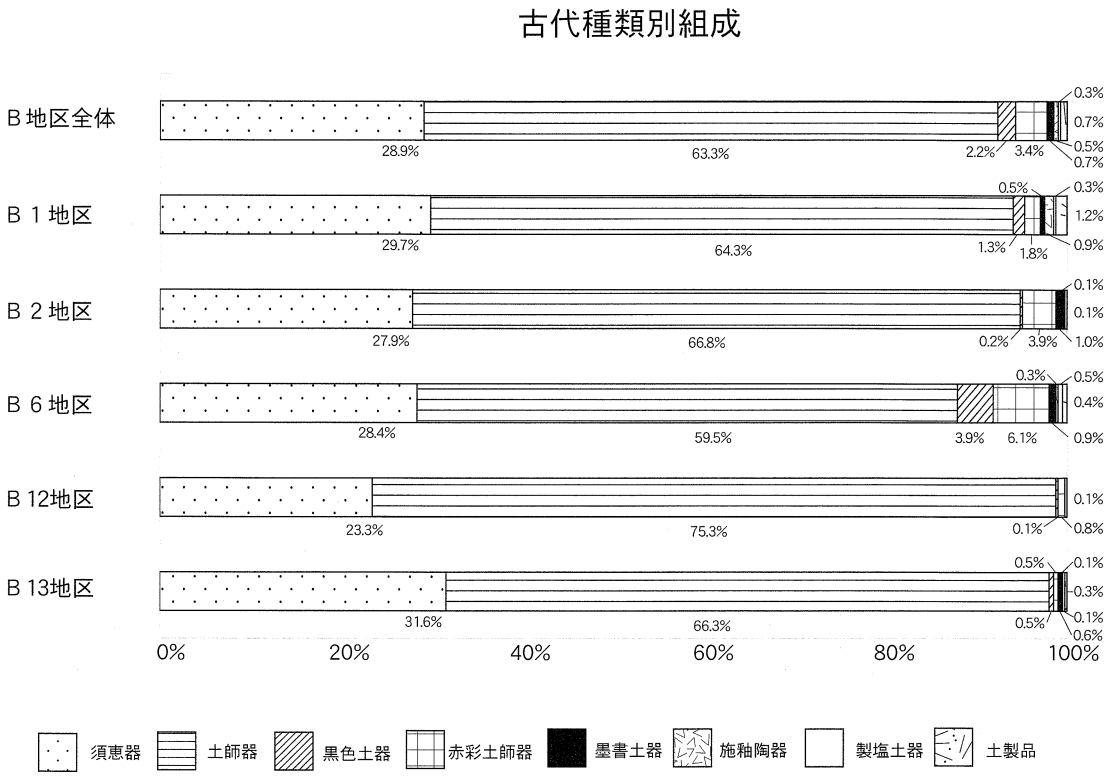
註1　中村亮仁「任海宮田遺跡A地区における古代の竪穴住居の土器組成について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2006

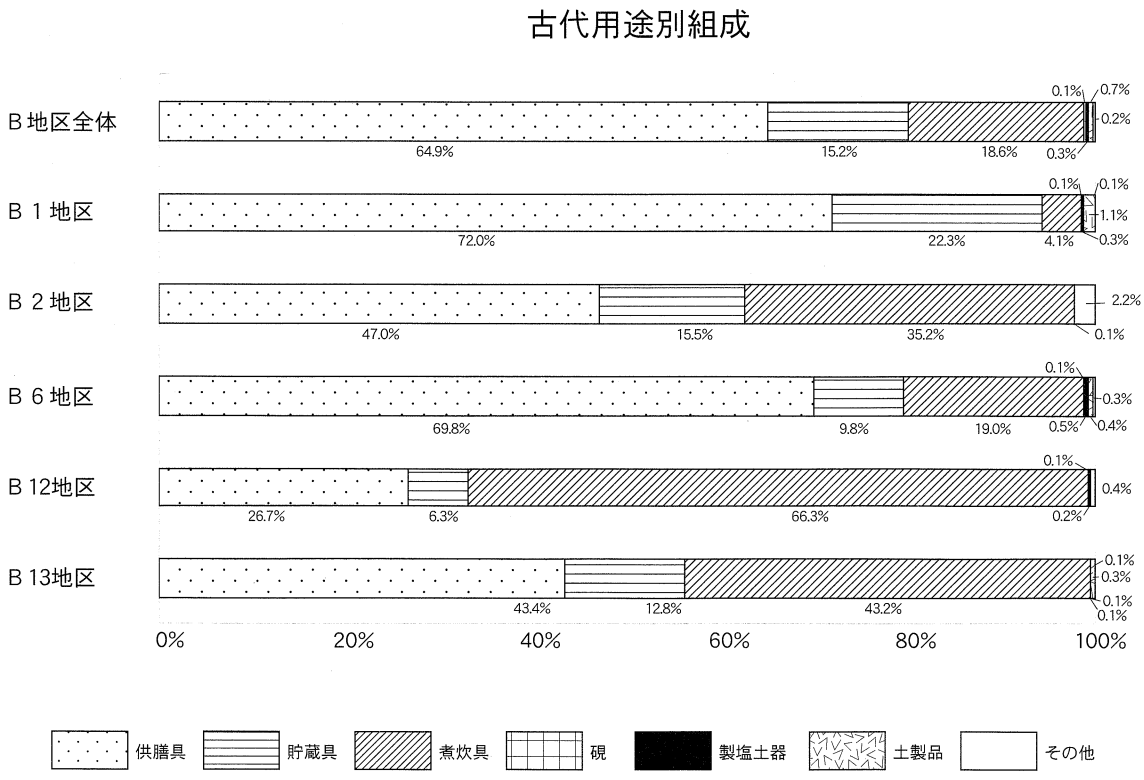
参考文献

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会「シンポジュウム　北陸の古代土器研究の研究と課題」報告編　1998
宇野隆夫「律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として」桂書房　1991
富山県教育委員会「富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」　1974
富山県埋蔵文化財センター「南中田D遺跡発掘調査報告書」　1991
中村亮仁「大野中遺跡A地区における古代の土器組成について」『富山考古学研究第9号』2006

表１　任海宮田遺跡B地区古代出土遺物破片数集計表

	焼物種類	器種	B1地区					B2地区					B6地区					B12地区					B13地区					合計			
			遺構	包含層	小計		合計	遺構	包含層	小計		合計	遺構	包含層	小計		合計	遺構	包含層	小計		合計	遺構	包含層	小計		合計	器種別	種類別	用途別	焼物別
		杯蓋	220	433	653	653		21	23	44	44		518	1007	1525	1525		32	127	159	159		61	237	298	298		2679	2679		
	須恵器	杯	292	390	682			27	50	77			693	1091	1784			65	154	219			151	222	373			3135			
		杯A	111	169	280	1397		25	22	47	156		340	666	1006	3351		39	119	158	498		154	243	397	1027		1888	6429		
		杯B	141	294	435			14	18	32			179	382	561			29	92	121			63	194	257			1406			
		鉢	1	10	11	11		0	0	0	0		2	2	4	4		0	0	0	0		1	1	2	2		17	17	9354	
		皿	9	12	21			1	0	1			30	61	91			0	1	1			2	1	3			117			
		皿A	2	16	18	62		0	0	0	4		1	12	13	135		0	1	1	2		0	4	4	13		36	216		
		皿B	8	15	23			0	3	3			10	21	31			0	0	0			0	6	6			63			
		高坏	0	2	2	2		0	0	0	0		0	0	0	0		0	1	1	1		0	0	0	0		3	3		
		盤	0	1	1	1		0	0	0	0		4	4	8	8		0	1	1	1		0	0	0	0		10	10		
		壺類	299	1198	1497	1499		34	38	72	72		39	226	265	271		4	18	22	25		9	99	108	110		1964	1977	10080	
		小壺類	0	2	2			0	0	0			4	2	6			1	2	3			1	1	2			13			
		壺蓋	4	9	13			0	2	2			6	9	15			0	0	0			0	5	5			35			
		短頸壺類	14	38	52	112	8122	1	1	2	4	466	16	33	49	64	7743	0	12	12	12	907	14	13	27	32	2255	142	224		19493
		直口壺類	10	37	47			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			47			
		広口・長頸・双耳壺	53	439	492			2	2	4			24	86	110			0	9	9			6	22	28			643			
		広口壺類	9	19	28			0	0	0			3	25	28			0	0	0			2	4	6			62			
		長頸壺類	5	23	28	810		0	0	0	17		29	68	97	489		7	9	16	29		5	45	50	110		191	1455		
		双耳壺類	164	81	245			5	8	13			29	224	253			0	4	4			4	22	26			541			
		細頸壺類	0	17	17			0	0	0			0	1	1			0	0	0			0	0	0			18			
		横瓶・平瓶類	12	24	36	36		0	0	0	0		12	23	35	35		1	5	6	6		5	35	40	40		117	117		
		甕	624	2239	2863	3532		80	74	154	165		382	1112	1494	1819		33	120	153	172		74	488	562	619		5226	6307		
		小甕	102	567	669			6	5	11			83	242	325			9	10	19			10	47	57			1081			
		円面硯・風字硯	0	4	4	4		0	0	0	0		7	6	13	13		0	0	0	0		1	1	2	2		19	19	19	
		その他	1	2	3	3		0	4	4	4		13	16	29	29		0	2	2	2		2	0	2	2		40	40	40	
	土師器	椀	4692	6353	11045			173	212	385			2896	4315	7211			85	135	220			169	603	772			19633			
		椀A	1553	2987	4540	15899		39	45	84	472		932	1953	2885	10372		41	76	117	343		119	609	728	1610		8354	28696		
		椀B	103	211	314			2	1	3			69	207	276			2	4	6			12	98	110			709			
		鉢	0	0	0	0		0	0	0	0		2	11	13	13		0	0	0	0		0	0	0	0		13	13	29944	
		皿	275	190	465			11	5	16			195	289	484			0	2	2			1	20	21			988			
		皿A	32	32	64	571		5	0	5	24		6	4	10	593		0	1	1	3		0	5	5	37		85	1228		
		皿B	14	28	42			0	3	3			37	62	99			0	0	0			1	10	11			155			
		高坏	0	1	1	1	17610	0	0	0	0	1117	1	4	5		16217	0	0	0	0	2925	0	1	1	1	4729	7	7		42603
		甕	13	38	51			135	216	351			1019	1867	2886			842	1252	2094			1139	1355	2494			7876			
		小甕	298	465	763			64	126	190			828	921	1749			253	167	420			280	258	538			3660			
		大甕	0	0	0	1133		0	0	0	588		8	11	19	5188		0	1	1	2573		0	0	0	3078		20	12560	12560	
		壺	166	153	319			4	43	47			179	336	515			16	32	48			11	34	45			974			
		壺・甕	0	0	0			0	0	0			11	8	19			7	3	10			0	1	1			30			
		その他	0	6	6	6		17	16	33	33		33	18	51	51		5	1	6	6		0	3	3	3		99	99	99	
古代	黒色土器	椀	104	130	234			2	2	4			321	418	739			1	2	3			15	13	28			1008			
		椀A	47	44	91	336		0	0	0	4		79	122	201	945		0	0	0	3		0	5	5	34		297	1322		
		椀B	8	3	11			0	0	0			2	3	5			0	0	0			0	1	1			17			
		鉢	10	0	10			0	0	0			15	48	63			2	0	2			0	0	0			75			
		鉢A	0	1	1	11		0	0	0	0		13	1	14	104		0	0	0	2		0	0	0	0		15	117		
		鉢B	0	0	0			0	0	0			15	12	27			0	0	0			0	0	0			27		1457	
		皿	4	3	7			0	0	0			1	2	3			0	0	0			0	0	0			10			
		皿A	0	2	2	10		0	0	0	0		1	0	1	4		0	0	0	0		0	0	0	0		3	14		
		皿B	1	0	1			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			1			
		高坏	0	0	0	0		0	0	0	0		0	4	4			0	0	0	0		0	0	0	0		4	4		
		その他	1	0	1	1	358	0	0	0	0	4	0	0	0	0	1053	0	0	0	0	5	0	0	0	0	34	1	1	1	1458
	赤彩土師器	椀	183	84	267			10	42	52			525	571	1096			7	13	20			7	15	22			1457			
		椀A	74	46	120	401		0	3	3	56		195	144	339	1481		1	2	3	25		1	6	7	32		472	1995		
		椀B	3	11	14			0	1	1			8	38	46			0	2	2			0	3	3			66			
		鉢	2	0	2	2		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		0	0	0	0		2	2		
		皿	50	21	71			3	1	4			64	76	140			0	0	0			0	0	0			215		2282	
		皿A	4	0	4	88		3	1	4	9		6	0	6	182		0	0	0	0		0	0	0	0		14	279		
		皿B	3	10	13			0	1	1			26	10	36			0	0	0			0	0	0			50			
		高坏	0	0	0	0		0	0	0	0		2	3	5	5		0	0	0	0		0	1	1	1		6	6		
		その他	0	2	2	2	493	0	0	0	0	65	2	3	5	5	1673	1	6	7	7	32	0	1	1	1	34	15	15	15	2297
	墨書土器	杯A	4	9	13			1	11	12			28	13	41			0	0	0			8	11	19			85			
		杯B	4	3	7	27		0	0	0	12		15	6	21	87		0	0	0	0		3	1	4	28		32	154		
		杯蓋	6	1	7			0	0	0			17	8	25			0	0	0			2	3	5			37			
		椀	6	7	13			0	1	1			7	10	17			0	0	0			0	0	0			31			
		椀A	44	24	68	92		0	3	3	4		81	39	120	142		0	1	1	1		5	3	8	14		200	253		
		椀B	8	3	11			0	0	0			1	4	5			0	0	0			0	6	6			22			
		皿（須恵器）	0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0		441	
		皿（土師器）	0	0	0			0	0	0			1	0	1			0	0	0			0	0	0			1			
		皿A（須恵器）	1	0	1	8		0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			1			
		皿A（土師器）	1	0	1			0	0	0	0		0	0	0	25		0	0	0	0		0	0	0	1		1	34		
		皿B（須恵器）	1	1	2			0	0	0			3	0	3			0	0	0			0	1	1			6			
		皿B（土師器）	3	1	4			0	0	0			20	1	21			0	0	0			0	0	0			25			
		甕（土師器）	0	0	0	0	127	0	0	0	0	16	0	0	0	0	254	0	1	1	1	2	0	0	0	0	43	1	1	1	442
	灰釉陶器	椀	13	87	100	100		0	0	0	0		1	5	6	6		0	0	0	0		0	0	0	0		106	106	148	
		皿	9	32	41	41		0	0	0	0		0	1	1	1		0	0	0	0		0	0	0	0		42	42		
		壺	4	22	26			0	2	2			0	7	7			0	0	0			0	2	2			37			
		広口壺類	9	1	10	119		0	0	0	2		0	0	0	8		0	0	0	0		0	0	0	2		10	131	131	
		短頸壺類	61	0	61			0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	0	0			61			
		長頸壺類	7	15	22			0	0	0			1	0	1			0	0	0			0	0	0			23			
		その他	0	0	0	0	260	0	0	0	0	2	0	0	0	0	15	0	1	1	1	1	0	0	0	0	2	1	1	1	280
	緑釉陶器	椀	0	1	1	1		0	0	0	0		29	11	40	40		0	0	0	0		0	0	0	0		41	41	46	
		皿	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	5	5	5	45	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5		46
	製塩土器		33	39	72	72	72	0	0	0	0	0	77	69	146	146	146	1	5	6	6	6	0	3	3	3	3	227	227	227	227
	土製品	土錘	39	264	303	303		1	0	1	1		4	34	38	38		0	2	2	2		3	15	18	18		362	362	362	
		羽口	3	13	16	16	319	0	0	0	0	1	47	16	63	63	109	0	0	0	0	2	2	3	5	5	25	84	84	84	456
		その他	0	0	0	0		0	0	0	0		6	2	8	8		0	0	0	0		0	2	2	2		10	10	10	
	合計		9757	16952	27362	27362	27362	665	962	1671	1671	1671	9735	16004	27264	27255	27255	1452	2269	3880	3880	3880	2282	4545	7125	7125	7125	67302	67302	67302	67302





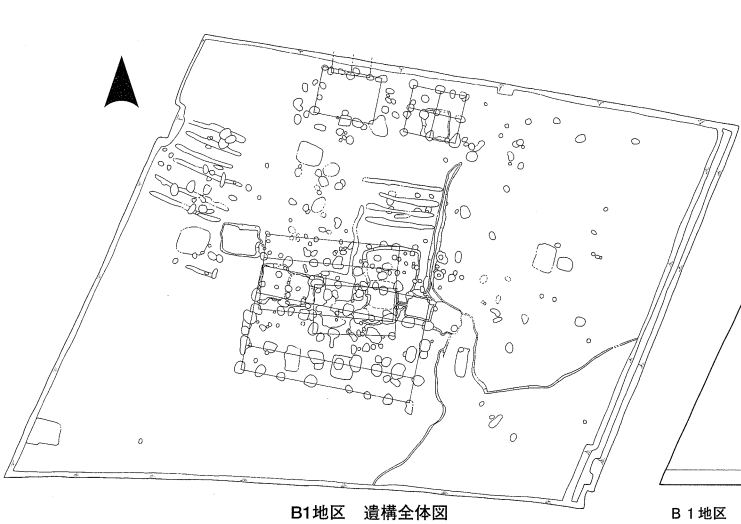
第１図　古代の土器組成比率

表2-1　供膳具の部位別破片数集計表

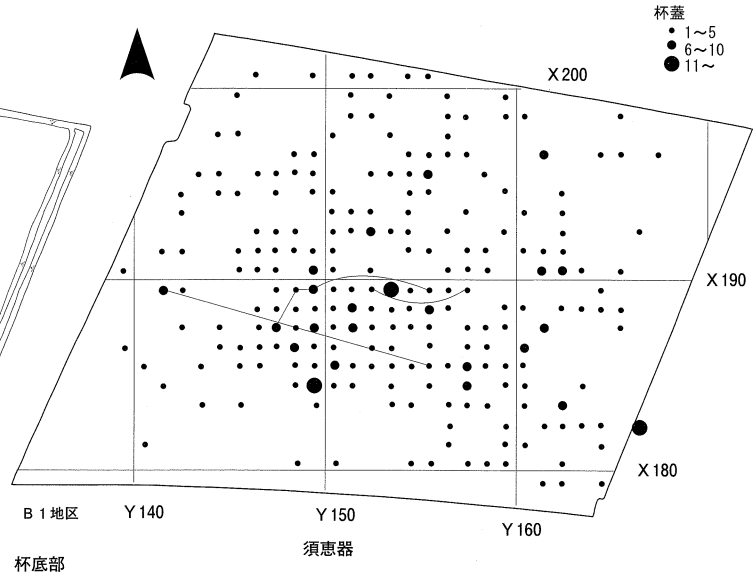
焼物種類	器種	部位	B1地区			B2地区			B6地区			B12地区			B13地区			集計			
			小計		合計	小計		合計	小計		合計	小計		合計	小計		合計	器種別		小計	種類別
須恵器	杯蓋	口縁部	364			18			987			92			161			1622			
		体部	257	653		19	44		464	1525		58	159		116	298		914	2679	2679	
		つまみ	32			7			74			9			21			143			
	杯	口縁部	335			41			1126			152			264			1918			
		体部	308	682		29	77		636	1784		67	219		107	373		1147	3135		
		底部(小)	39			7			22			0			1			69			
		底部(大)	0			0			0			0			1			1			
	杯A	口縁部	4			2			16			2			51			75			
		体部	7			1			8			4			5			25			
		底部(大)	17	280		0	47		61	1006		15	158		20	397		113	1888	6429	
		底部(中)	14			7			32			9			48			110			
		底部(小)	238			37			889			128			273			1565			
	杯B	口縁部	120			3			58			11			19			211			
		体部	54			1			66			4			4			129			
		底部(大)	25	435		1	32		46	561		13	121		23	257		108	1406		
		底部(中)	27			13			28			2			28			98			
		底部(小)	209			14			363			91			183			860			
	鉢	口縁部	5		2126	0		204	1		5023	0		661	1		1340	7		7	9354
		体部	5	11		0	0		3	4		0	0		1	2		9	17	17	
		底部(小)	1			0			0			0			0			1			
	皿	口縁部	20	21		1	1		72	91		1	1		0	3		94	117		
		体部	1			0			19			0			3			23			
	皿A	口縁部	1			0			0			0			0			1			
		底部(大)	0	18		0	0		8	13		0	1		0	4		8	36		
		底部(中)	0			0			3			0			0			3		216	
		底部(小)	17			0			2			1			4			24			
	皿B	口縁部	1			0			0			0			1			2			
		底部(大)	1	23		0	3		13	31		0	0		0	6		14	63		
		底部(中)	1			1			7			0			2			11			
		底部(小)	20			2			11			0			3			36			
	高坏	脚	2	2		0	0		0	0		1	1		0	0		3	3	3	
	盤	口縁部	0			0			1			1			0			2			
		体部	0	1		0	0		3	8		0	1		0	0		3	10	10	
		底部(中)	0			0			2			0			0			2			
		底部(小)	1			0			2			0			0			3			
土師器	椀	口縁部	3344			105			2818			53			200			6520			
		体部	7586			235			4323			165			569			12878			
		底部(大)	3	11045		0	385		3	7211		0	220		0	772		6	19633		
		底部(中)	6			5			9			0			0			20			
		底部(小)	106			40			58			2			3			209			
	椀A	口縁部	15			1			17			1			1			35			
		体部	51			0			5			0			8			64		28686	
		底部(大)	512	4540		12	84		308	2885		1	107		29	728		862	8344		
		底部(中)	392			14			272			1			30			709			
		底部(小)	3570			57			2283			104			660			6674			
	椀B	口縁部	0			0			5			0			1			6			
		底部(大)	21	314		0	3		25	276		0	6		4	110		50	709		
		底部(中)	34			2			22			0			3			61			
		底部(小)	259			1			224			6			102			592			
	鉢	口縁部	0			0			2			0			0			2			
		体部	0	0	16471	0	0	496	5	13	10983	0	0	336	0	0	1648	5	13	13	29934
		底部(小)	0			0			6			0			0			6			
	皿	口縁部	433			14			395			2			10			854			
		体部	27	465		2	16		80	484		0	2		10	21		119	988		
		底部(大)	3			0			0			0			0			3			
		底部(小)	2			0			9			0			1			12			
	皿A	口縁部	2			0			0			0			0			2			
		底部(大)	6	64		4	5		7	10		0	1		2	5		19	85	1228	
		底部(中)	10			0			0			0			1			11			
		底部(小)	46			1			3			1			2			53			
	皿B	口縁部	2			1			1			0			0			4			
		体部	1			0			6			0			0			7			
		底部(大)	9	42		0	3		39	99		0	0		5	11		53	155		
		底部(中)	6			2			16			0			1			25			
		底部(小)	24			0			37			0			5			66			
	高坏	脚部	1	1		0	0		5	5		0	0		0	1		6	7	7	
		体部	0			0			0			0			1			1			
黒色土器	椀	口縁部	106			1			317			2			11			437			
		体部	123			2			409			1			14			549			
		底部(大)	1	234		0	4		1	739		0	3		0	28		2	1008		
		底部(中)	0			0			3			0			0			3			
		底部(小)	4			1			9			0			3			17			
	椀A	口縁部	1			0			3			0			0			4			
		体部	1			0			0			0			0			1		1322	
		底部(大)	38	91		0	0		27	201		0	0		0	5		65	297		
		底部(中)	8			0			14			0			1			23			
		底部(小)	43			0			157			0			4			204			
	椀B	底部(大)	1			0			0			0			1			2			
		底部(中)	1	11	357	0	0	4	2	5	1057	0	0	5	0	1	34	3	17		1457
		底部(小)	9			0			3			0			0			12			
	鉢	口縁部	2			0			24			0			0			26			
		体部	8	10		0	0		35	63		2	2		0	0		45	75		
		底部(小)	0			0			4			0			0			4		117	
	鉢A	底部(小)	1	1		0	0		14	14		0	0		0	0		15	15		
	鉢B	底部(大)	0	0		0	0		15	27		0	0		0	0		15	27		
		底部(小)	0			0			12			0			0			12			
	皿	口縁部	7	7		0	0		3	3		0	0		0	0		10	10		
	皿A	口縁部	2	2		0	0		0	1		0	0		0	0		2	3	14	
		底部(小)	0			0			1			0			0			1			
	皿B	口縁部	1	1		0	0		0	0		0	0		0	0		1	1		
	高坏	脚部	0	0		0	0		4	4		0	0		0	0		4	4	4	

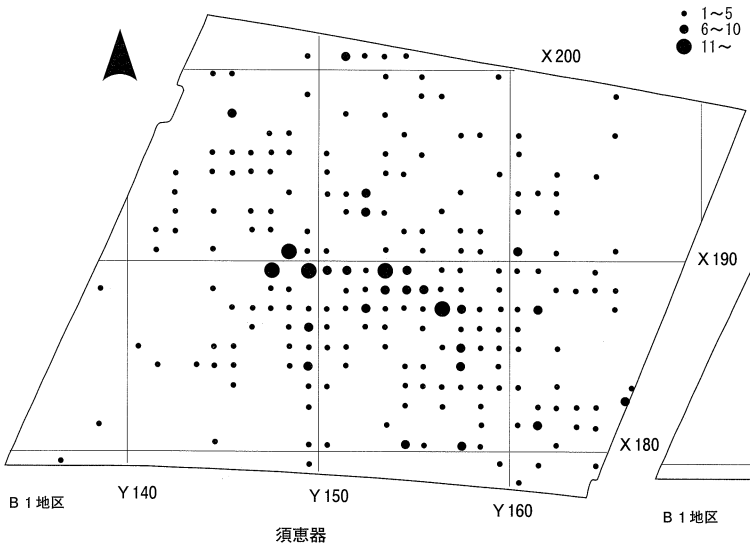
表2-2　供膳具の部位別破片数集計表

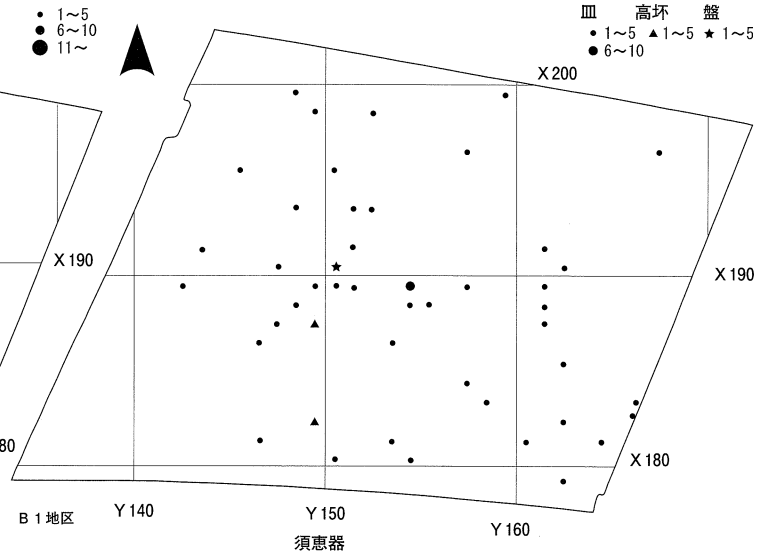
焼物種類	器種	部位	B1地区			B2地区			B6地区			B12地区			B13地区			集計			
			小計		合計	小計		合計	小計		合計	小計		合計	小計		合計	器種別		小計	種類別
赤彩土師器	椀	口縁部	163	267	491	27	52	65	575	1094	1663	10	20	25	11	22	33	786	1455	1990	2277
		体部	103			17			509			8			7			644			
		底部(大)	0			0			1			0			1			2			
		底部(小)	1			8			9			2			3			23			
	椀A	口縁部	5	120		0	3		7	336		0	3		0	7		12	469		
		底部(大)	55			0			121			0			1			177			
		底部(中)	10			0			16			0			0			26			
		底部(小)	50			3			192			3			6			254			
	椀B	体部	0	14		0	1		1	46		0	2		0	3		1	66		
		底部(大)	5			0			5			0			0			10			
		底部(中)	2			0			4			0			0			6			
		底部(小)	7			1			36			2			3			49			
	鉢	体部	2	2		0	0		0	0		0	0		0	0		2	2	2	
	皿	口縁部	57	71		3	4		117	140		0	0		0	0		177	215	279	
		体部	12			1			23			0			0			36			
		底部(小)	2			0			0			0			0			2			
	皿A	底部(大)	3	4		0	4		5	6		0	0		0	0		8	14		
		底部(小)	1			4			1			0			0			6			
	皿B	口縁部	1	13		0	1		3	36		0	0		0	0		4	50		
		体部	1			1			0			0			0			2			
		底部(大)	6			0			19			0			0			25			
		底部(中)	2			0			7			0			0			9			
		底部(小)	3			0			7			0			0			10			
	高坏	口縁部	0	0		0	0		2	5		0	0		0	1		2	6	6	
		体部	0			0			0			0			1			1			
		脚部	0			0			3			0			0			3			
墨書土器	杯A	底部(大)	3	13	127	7	12	16	10	41	254	0	0	1	0	19	43	20	85	117	441
		底部(中)	1			2			8			0			6			17			
		底部(小)	9			3			23			0			13			48			
	杯B	底部(大)	1	7		0	0		1	21		0	0		1	4		3	32		
		底部(中)	1			0			10			0			0			11			
		底部(小)	5			0			10			0			3			18			
	杯蓋	口縁部	1	7		0	0		10	25		0	0		3	5		14	37	37	
		つまみ	4			0			11			0			0			15			
		体部	2			0			4			0			2			8			
	椀	口縁部	11	13		0	1		10	17		0	0		0	0		21	31	253	
		体部	2			1			7			0			0			10			
	椀A	口縁部	0	68		0	3		1	120		0	1		0	8		1	200		
		底部(大)	22			3			67			0			1			93			
		底部(中)	7			0			11			0			0			18			
		底部(小)	39			0			41			1			7			88			
	椀B	底部(大)	0	11		0	0		1	5		0	0		5	6		6	22		
		底部(中)	0			0			0			0			1			1			
		底部(小)	11			0			4			0			0			15			
	皿	口縁部	0	0		0	0		1	1		0	0		0	0		1	1	34	
	皿A	底部(大)	1	2		0	0		0	0		0	0		0	0		1	2		
		底部(小)	1			0			0			0			0			1			
	皿B	底部(大)	2	6		0	0		23	24		0	0		0	1		25	31		
		底部(中)	1			0			1			0			0			2			
		底部(小)	3			0			0			0			1			4			
灰釉陶器	椀	口縁部	48	49	141	0	0	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	48	50	102	148
		体部	0			0			1			0			0			1			
		底部(小)	1			0			0			0			0			1			
	椀B	底部(大)	11	47		0	0		5	5		0	0		0	0		16	52		
		底部(中)	19			0			0			0			0			19			
		底部(小)	17			0			0			0			0			17			
	皿	口縁部	4	25		0	0		1	1		0	0		0	0		5	26	46	
		底部(中)	14			0			0			0			0			14			
		底部(小)	7			0			0			0			0			7			
	皿B	底部(大)	1	20		0	0		0	0		0	0		0	0		1	20		
		底部(中)	14			0			0			0			0			14			
		底部(小)	5			0			0			0			0			5			
緑釉陶器	椀	口縁部	0	0	1	0	0	0	25	29	45	0	0	0	0	0	0	25	29	41	46
		体部	0			0			4			0			0			4			
	椀A	底部(大)	0	1		0	0		7	11		0	0		0	0		7	12		
		底部(中)	0			0			1			0			0			1			
		底部(小)	1			0			3			0			0			4			
	皿	口縁部	0	0		0	0		4	4		0	0		0	0		4	4	5	
	皿A	底部(大)	0	0		0	0		1	1		0	0		0	0		1	1		
合計			19714	19714	19714	785	785	785	19032	19032	19032	1028	1028	1028	3098	3098	3098	43657	43657	43657	43657

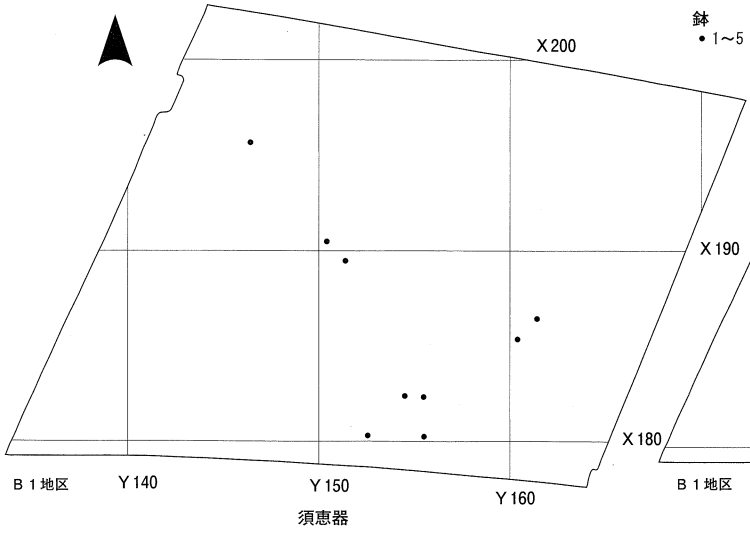


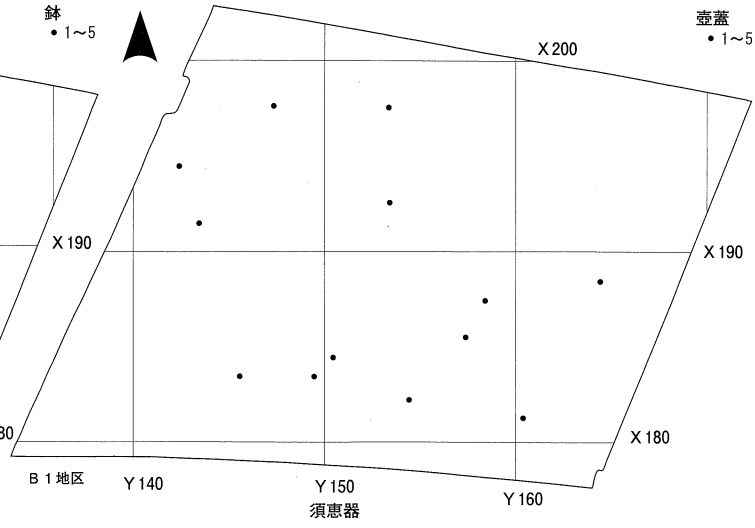
B1地区　遺構全体図

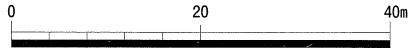




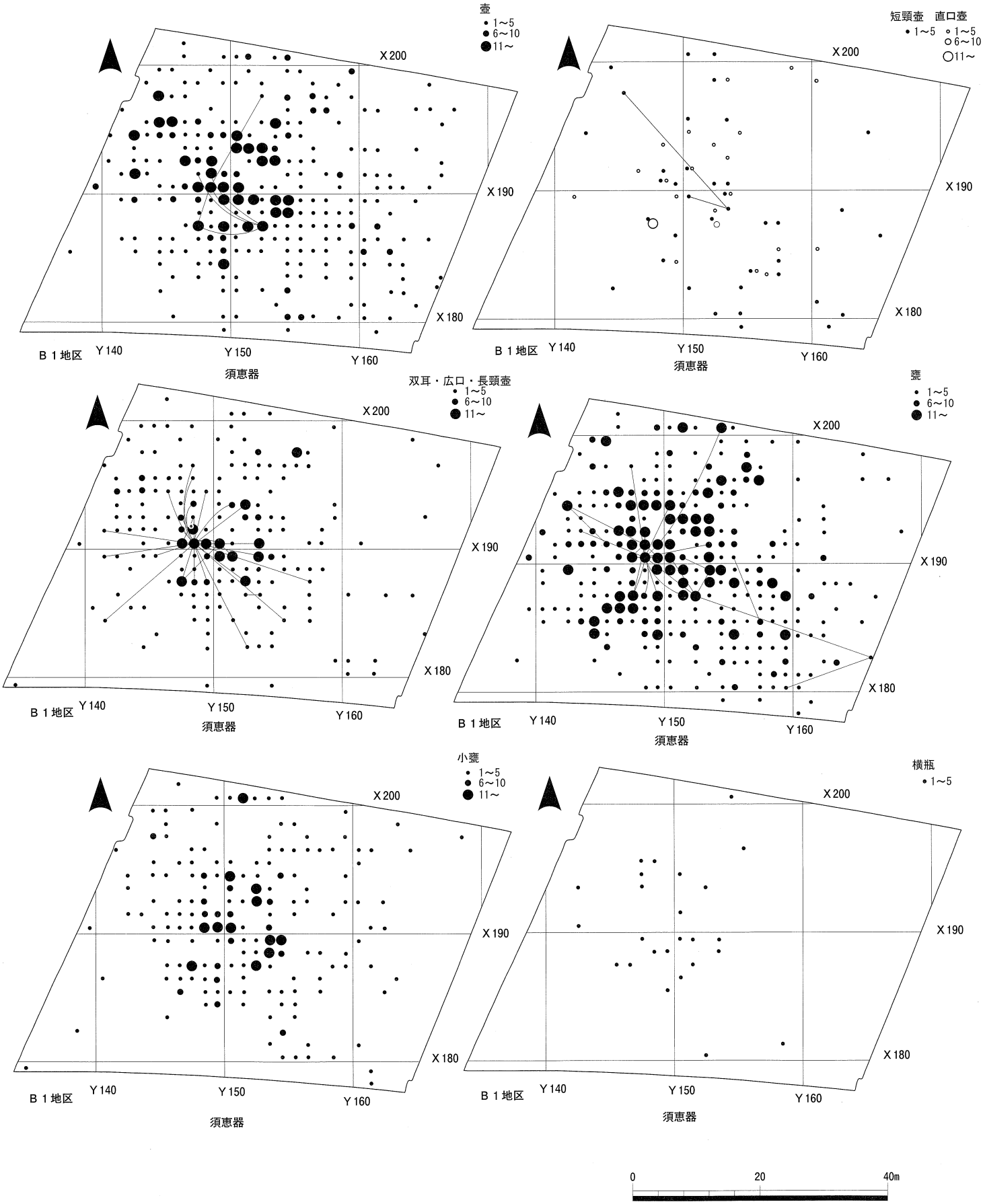




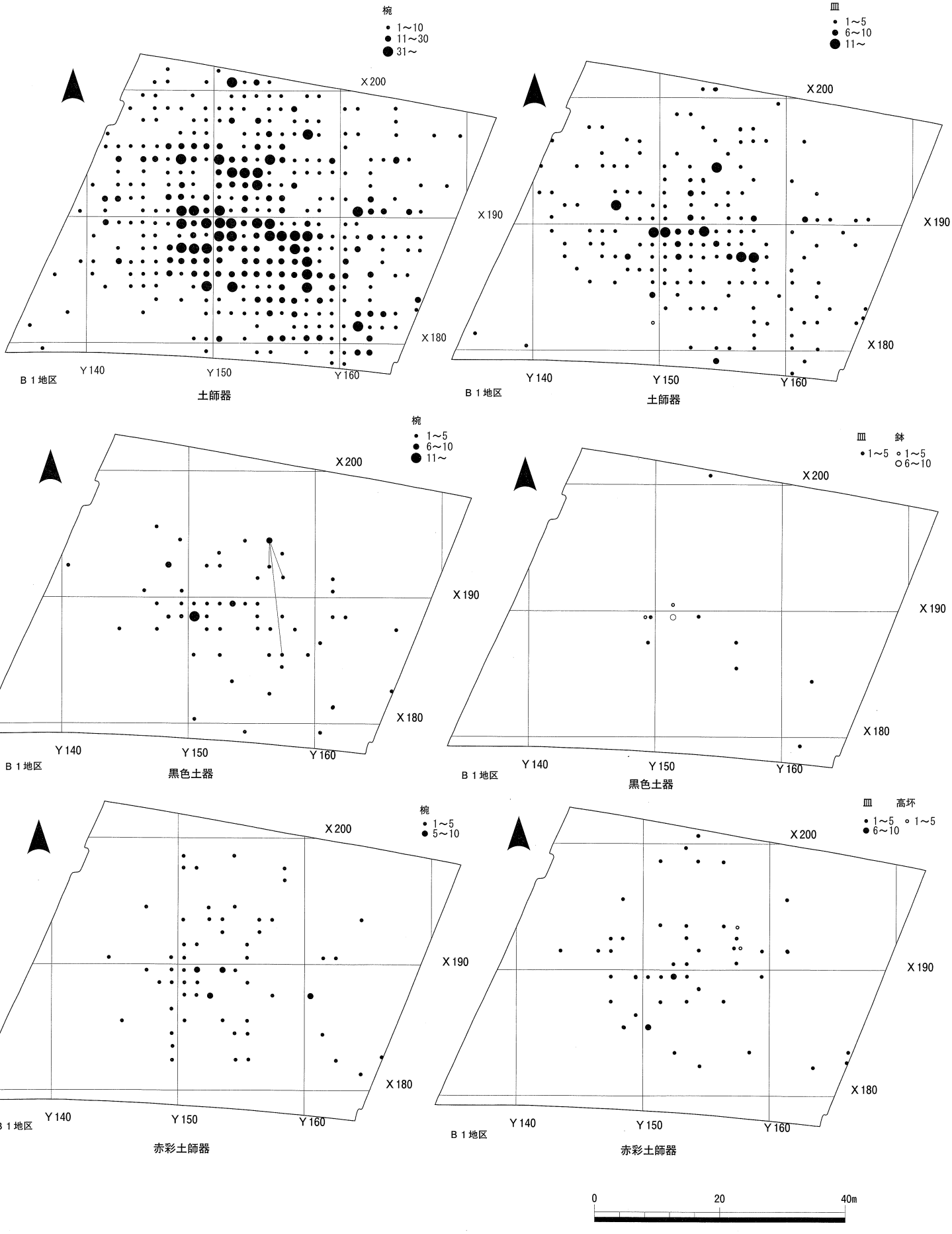




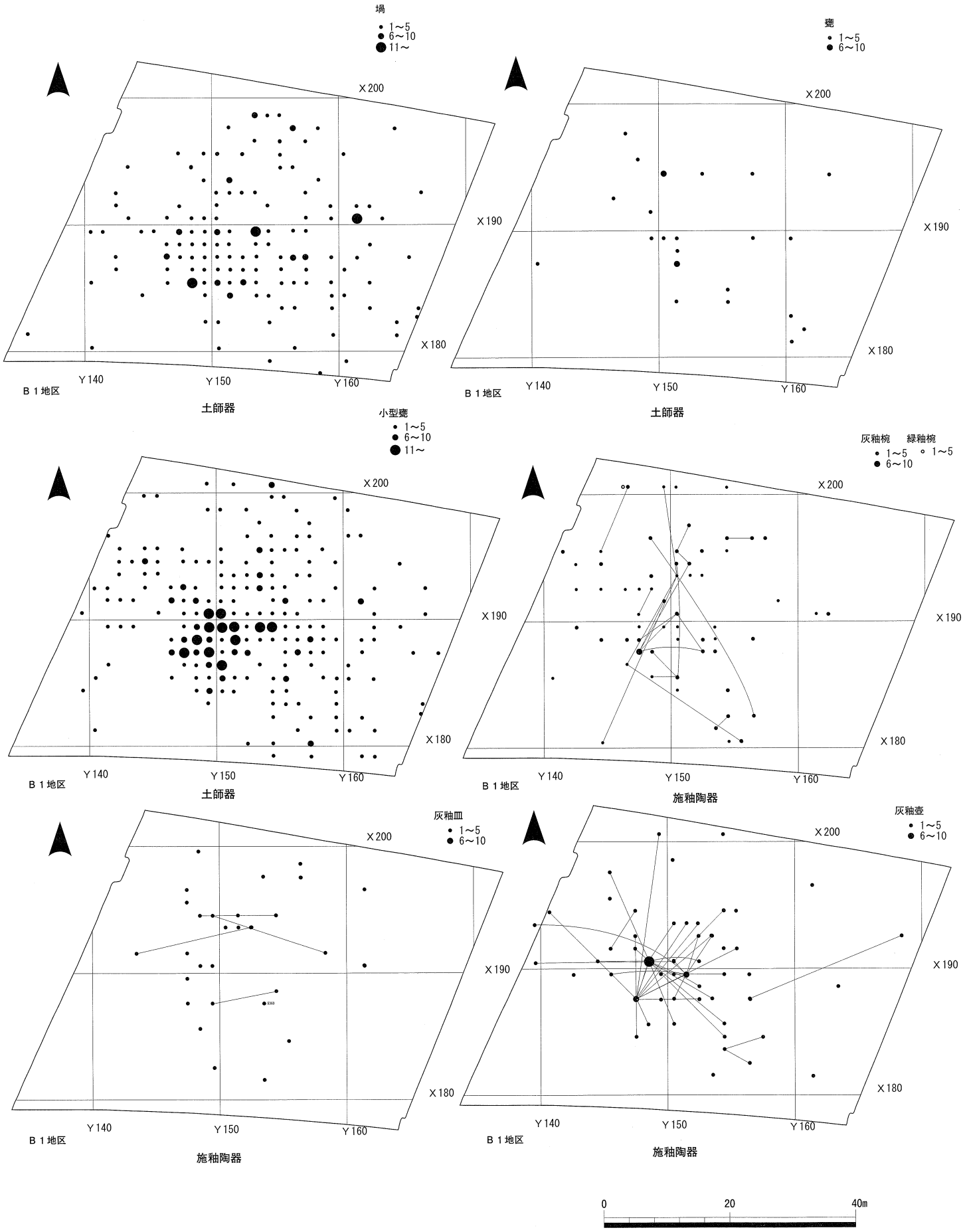
第２図　任海宮田遺跡Ｂ１地区古代出土遺物分布図（１）



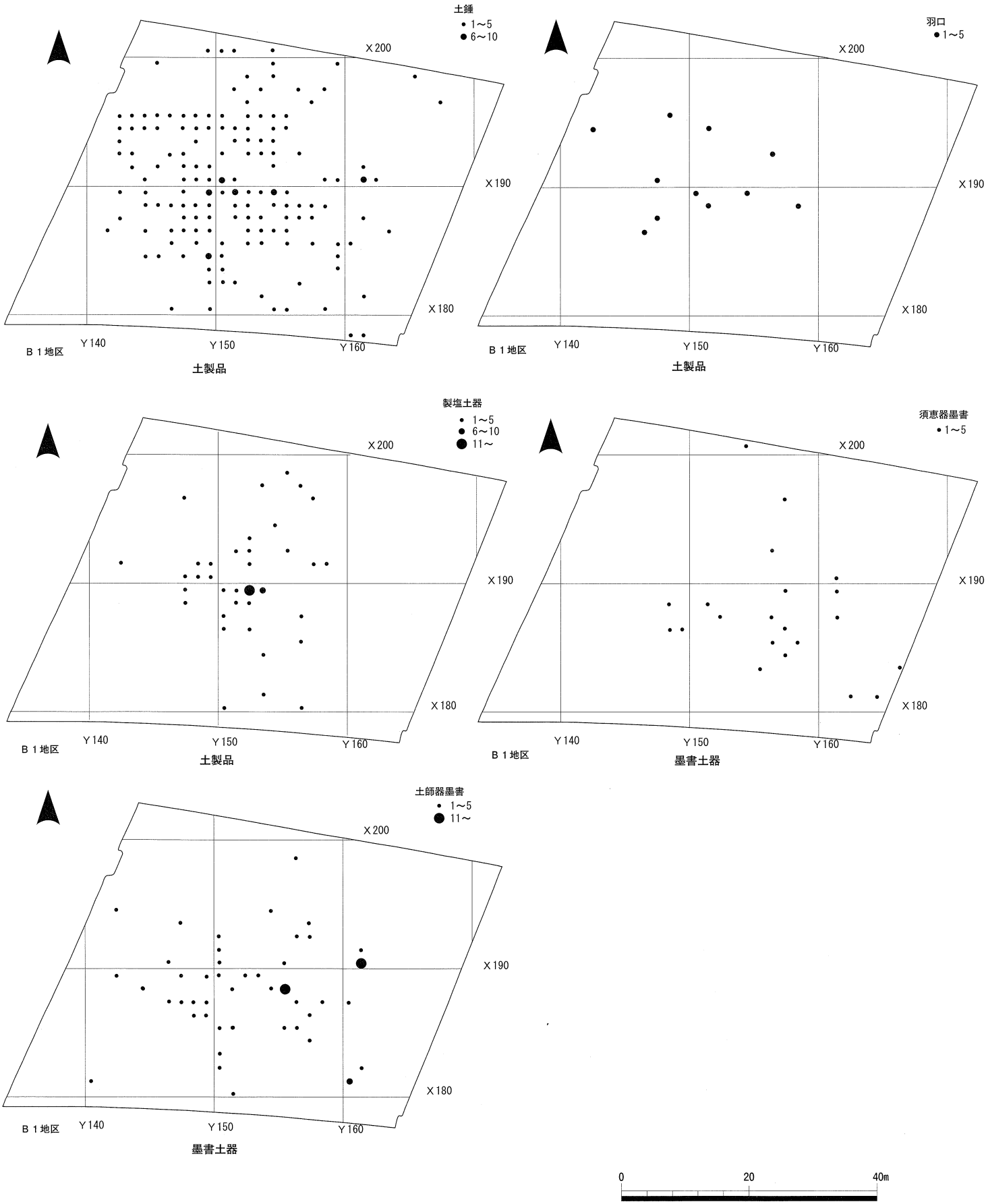
第３図　任海宮田遺跡B１地区古代出土遺物分布図（２）



第４図　任海宮田遺跡B１地区古代出土遺物分布図（３）

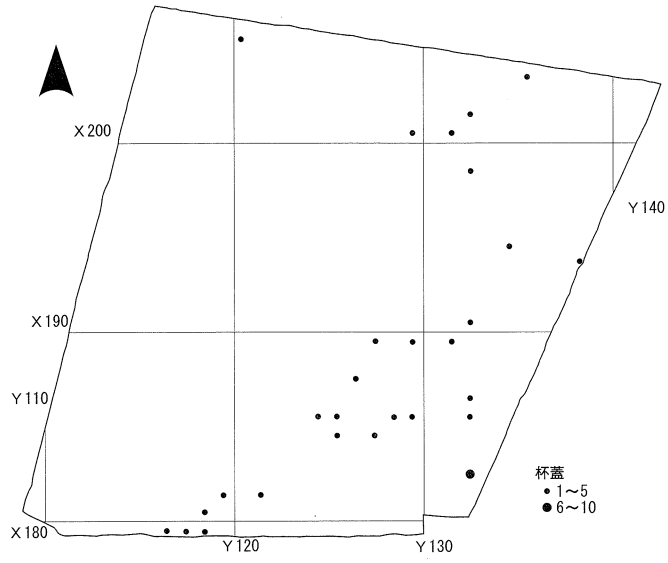


第５図　任海宮田遺跡B１地区古代出土遺物分布図（４）

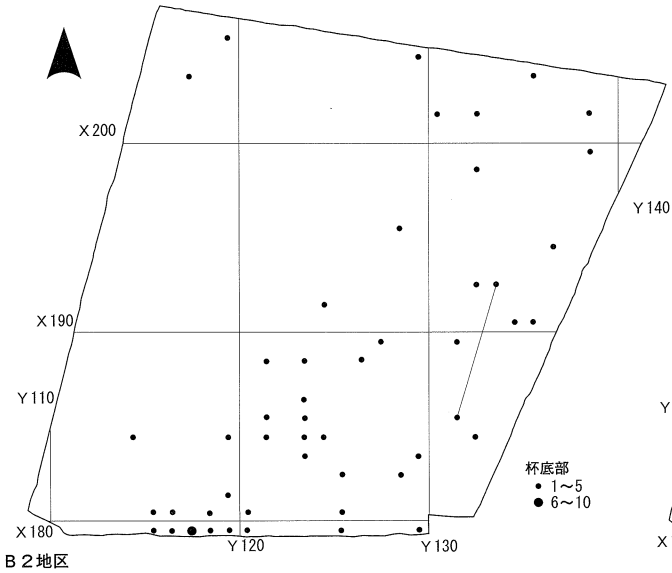


第６図　任海宮田遺跡Ｂ１地区古代出土遺物分布図（５）

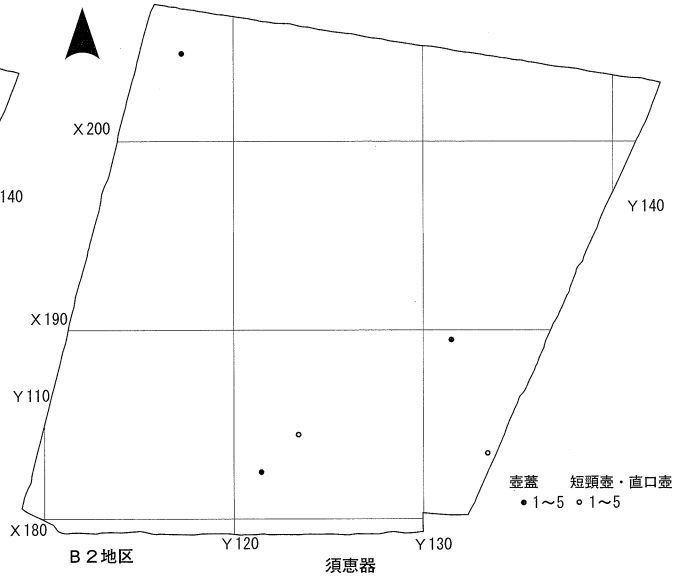
B2地区　遺構全体図



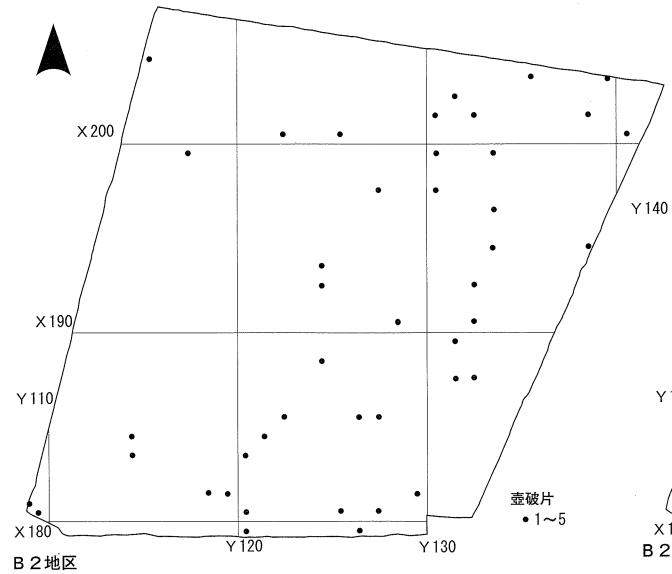
B２地区　須恵器



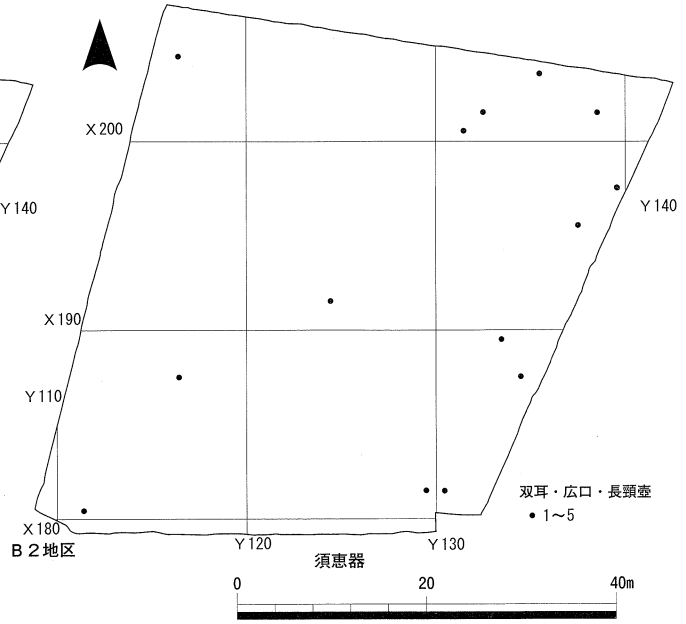
B２地区　須恵器



B２地区　須恵器

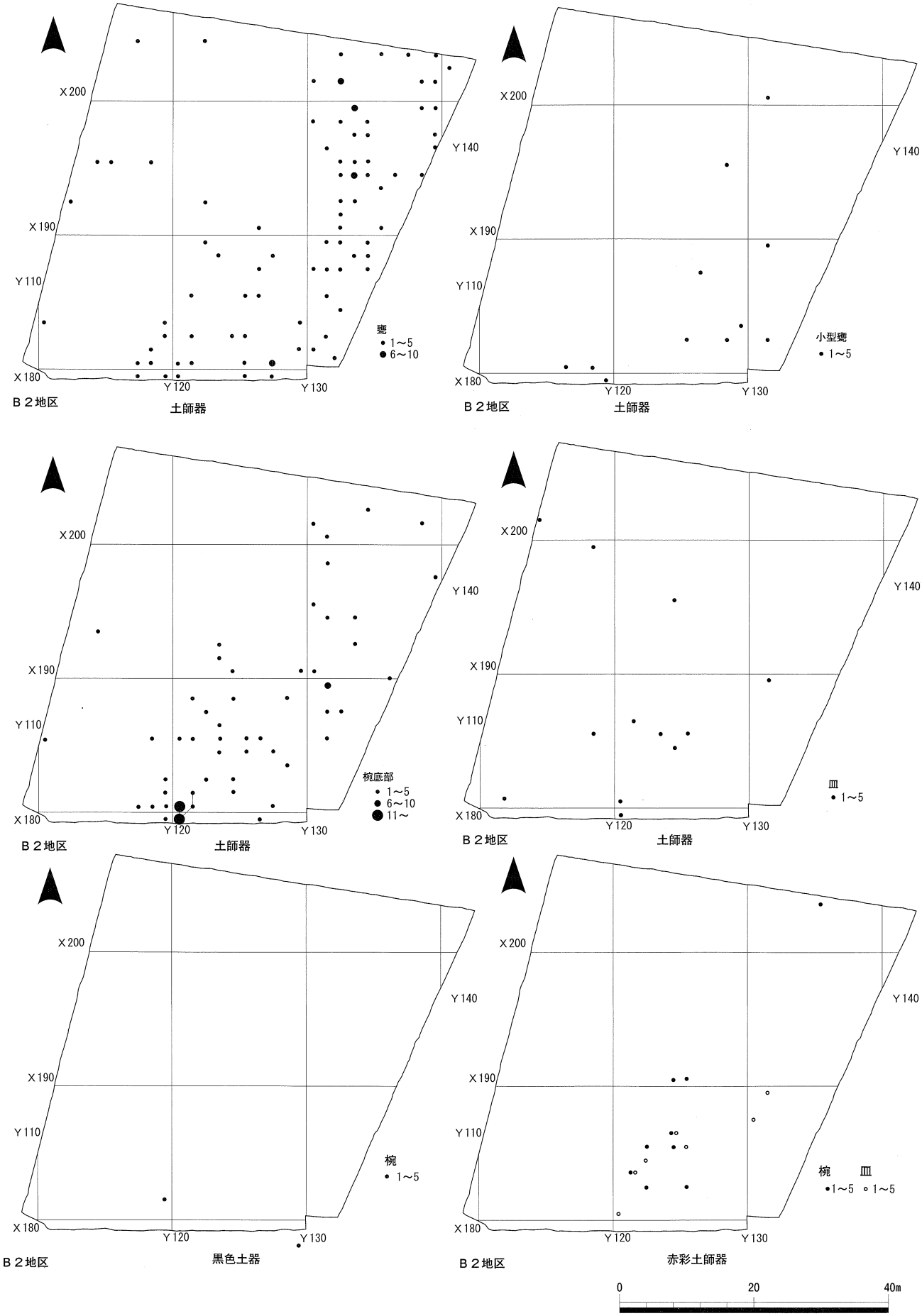


B２地区　須恵器

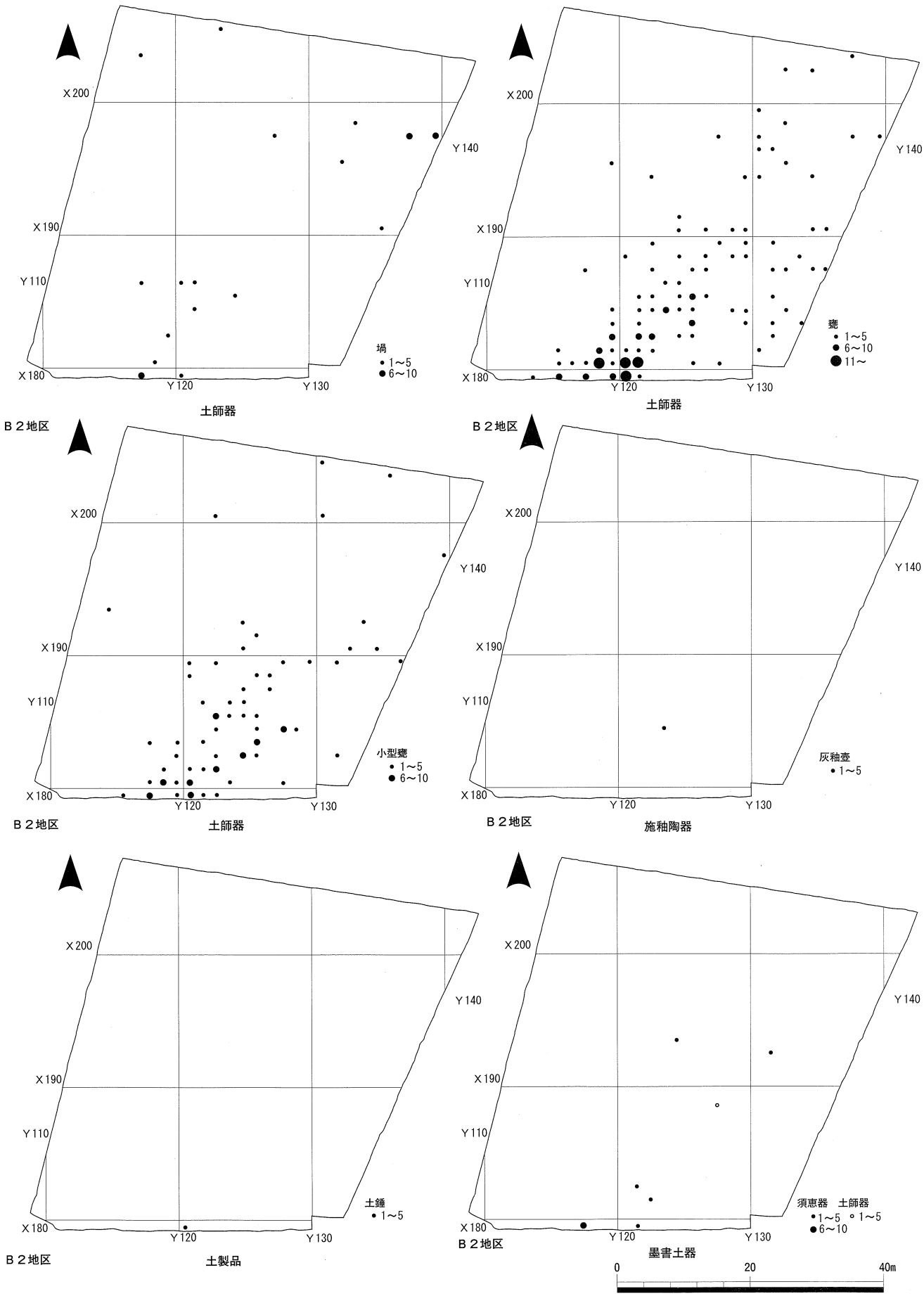


B２地区　須恵器

第７図　任海宮田遺跡B２地区古代出土遺物分布図（１）

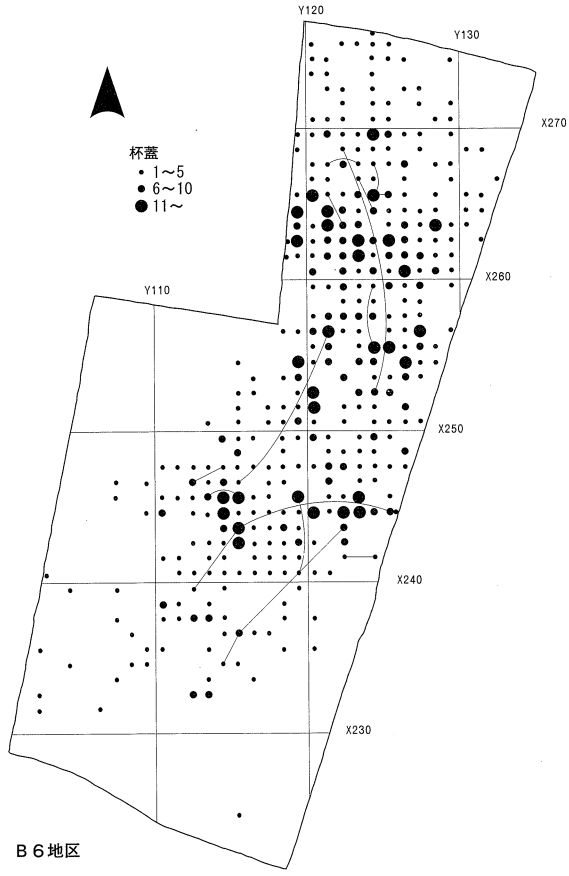


第８図　任海宮田遺跡B２地区古代出土遺物分布図（２）

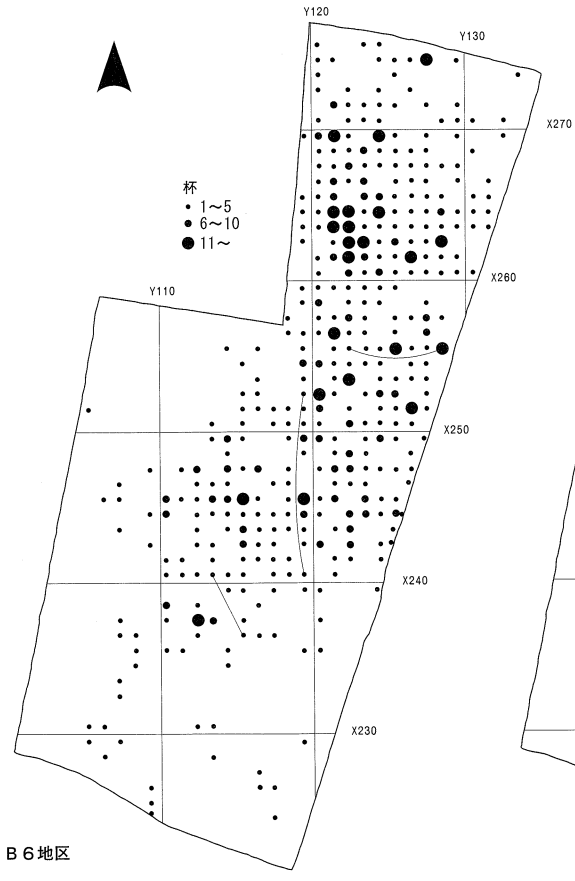


第９図　任海宮田遺跡Ｂ２地区古代出土遺物分布図（３）

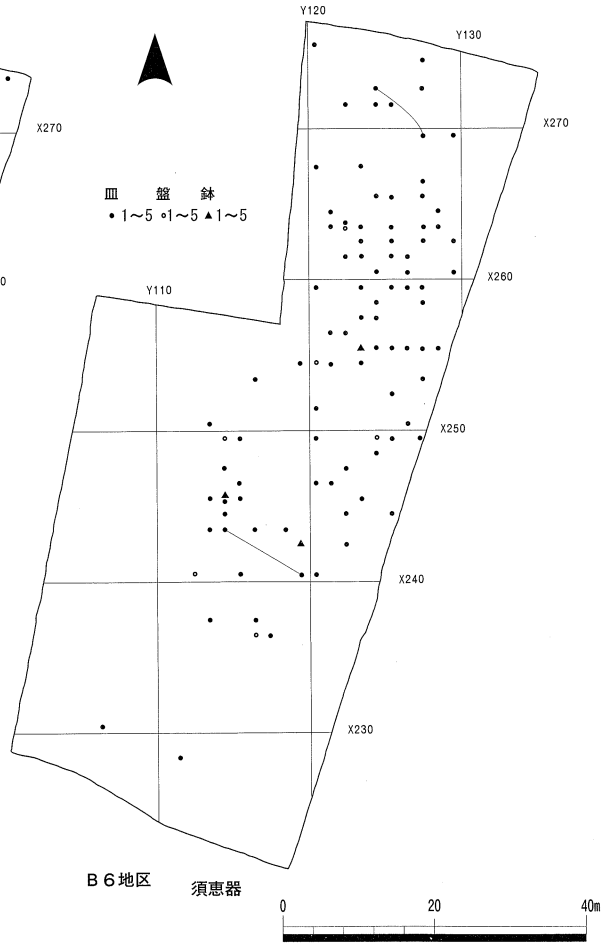
Ｂ６地区　遺構全体図



Ｂ６地区　須恵器

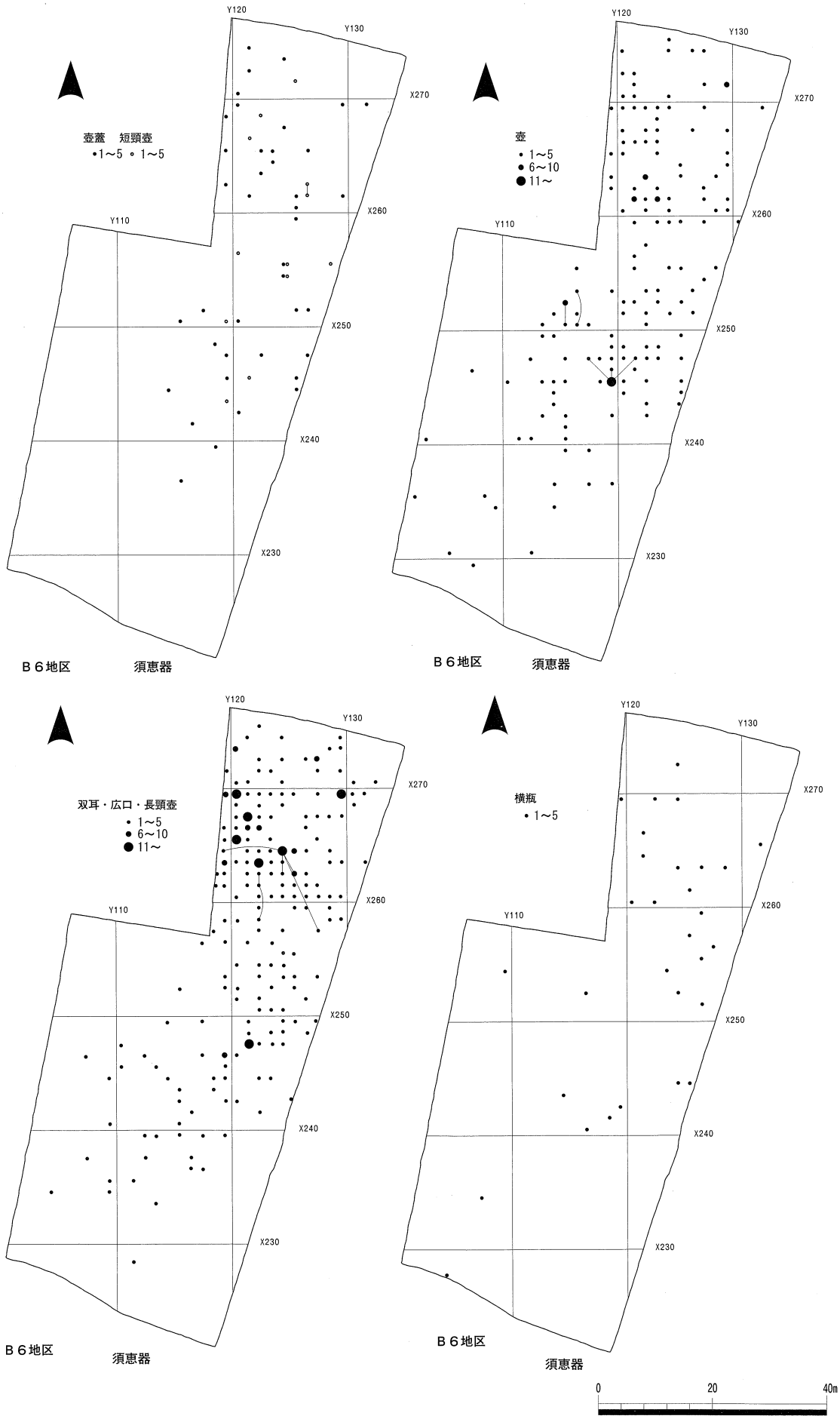


Ｂ６地区　須恵器

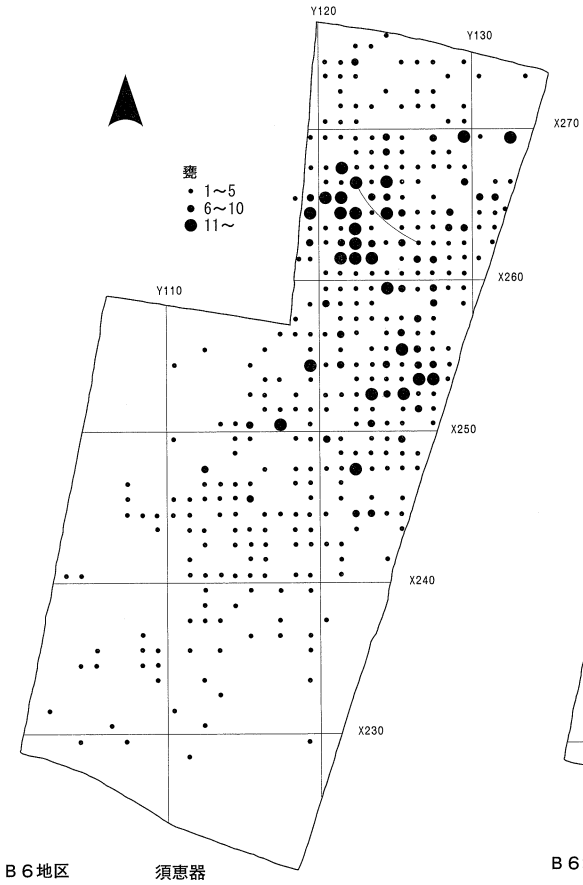


Ｂ６地区　須恵器

第10図　任海宮田遺跡Ｂ６地区古代出土遺物分布図（１）

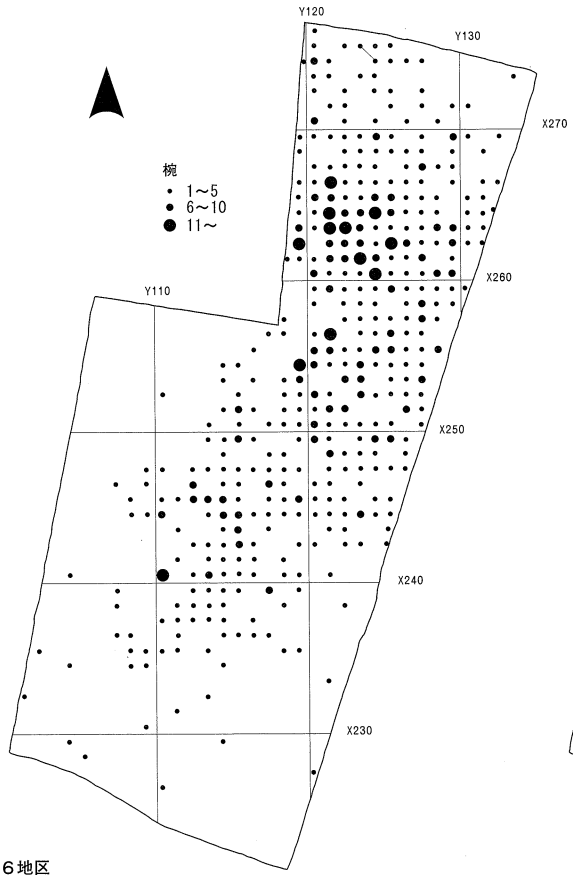


第11図　任海宮田遺跡B６地区古代出土遺物分布図（２）

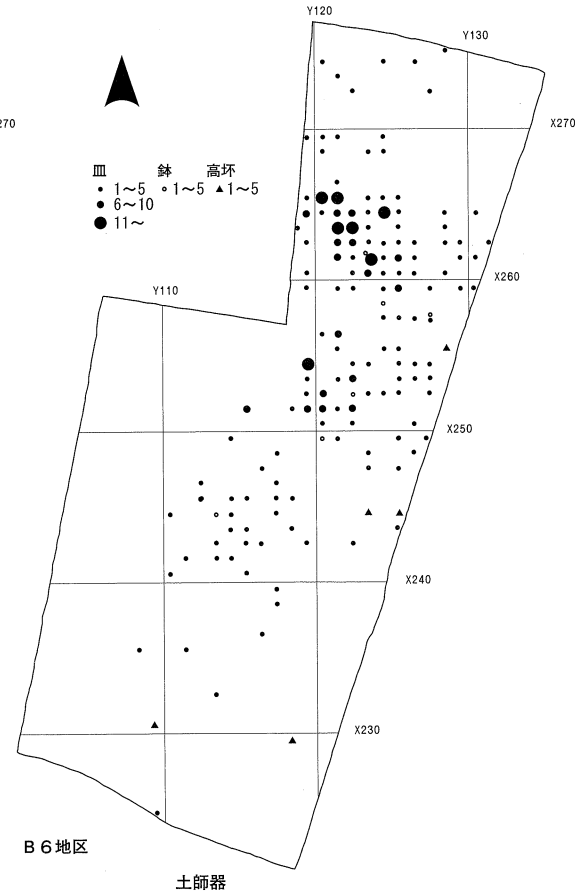


Ｂ６地区　須恵器

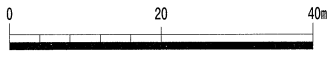
Ｂ６地区　須恵器



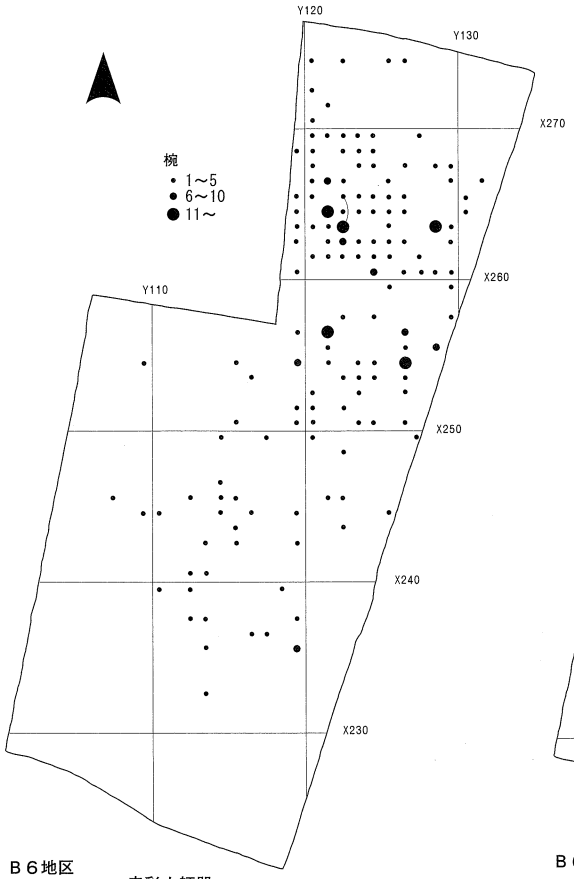
Ｂ６地区　土師器

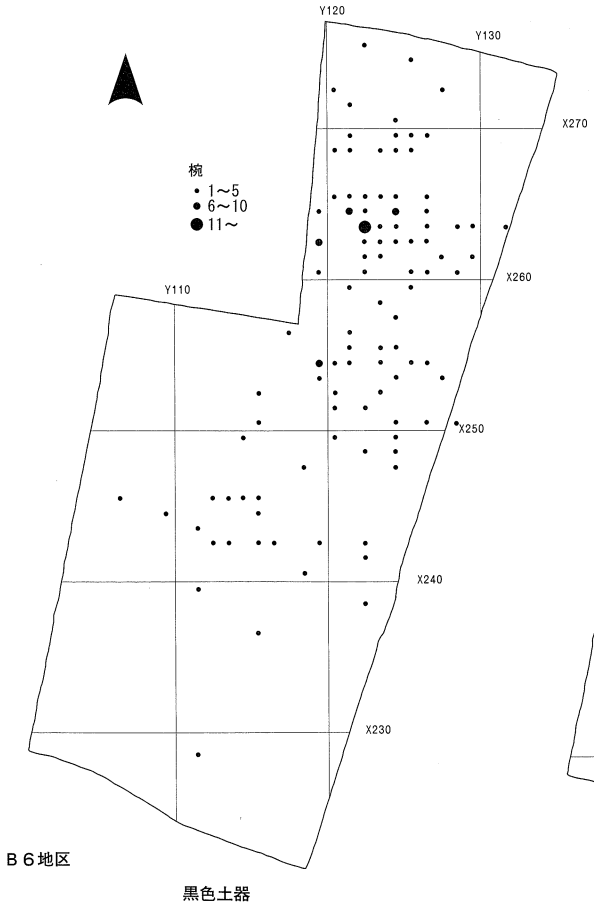


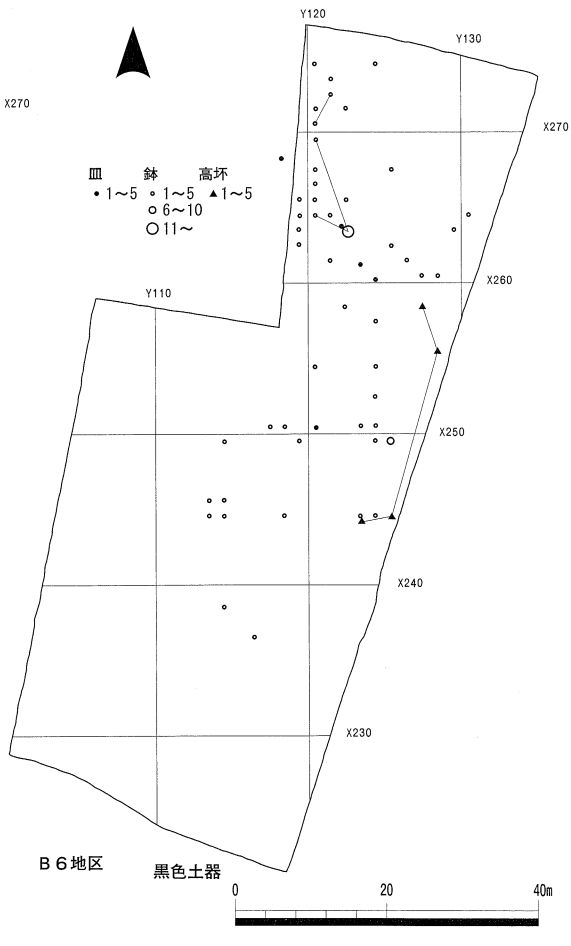
Ｂ６地区　土師器



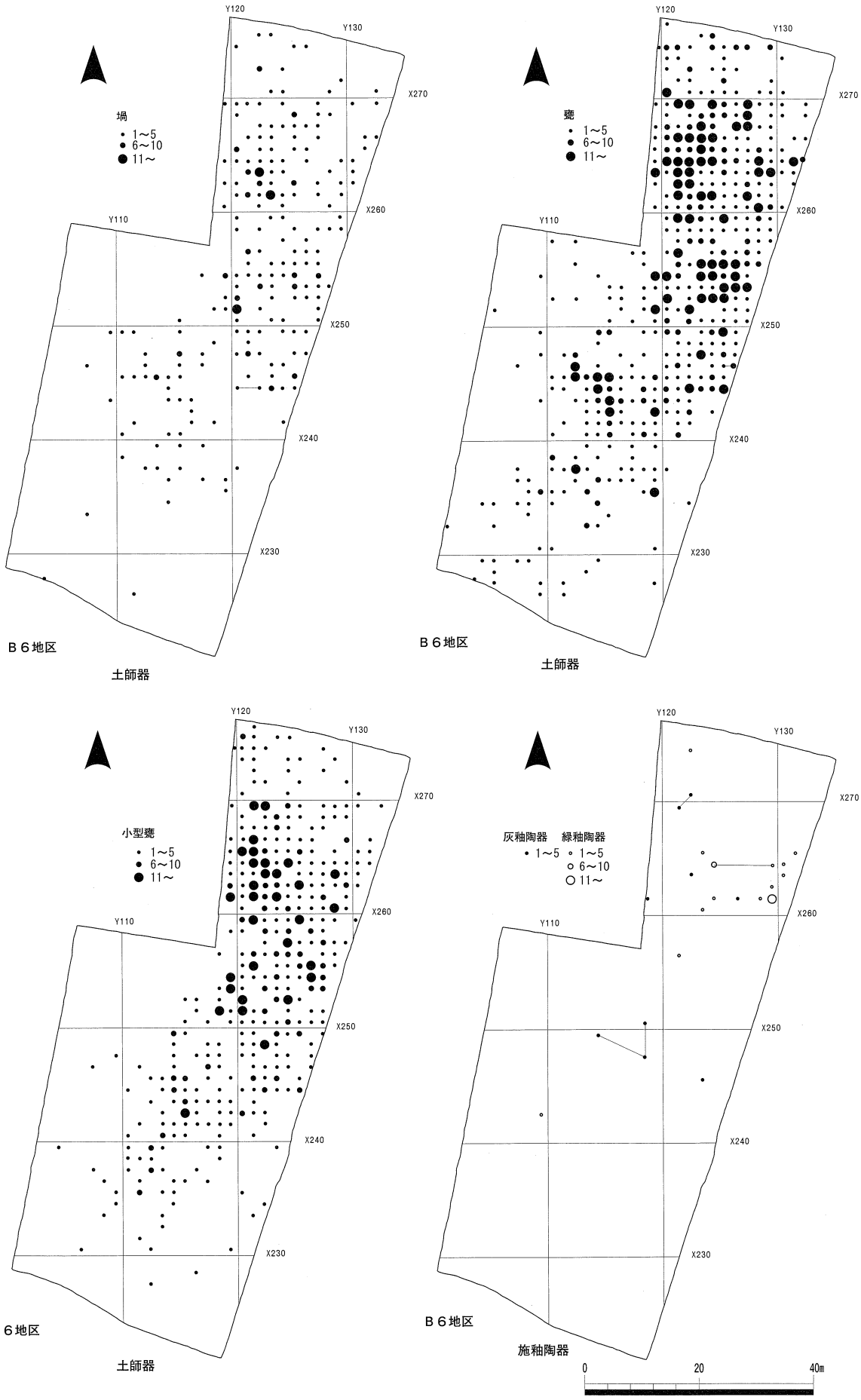
第12図　任海宮田遺跡Ｂ６地区古代出土遺物分布図（３）



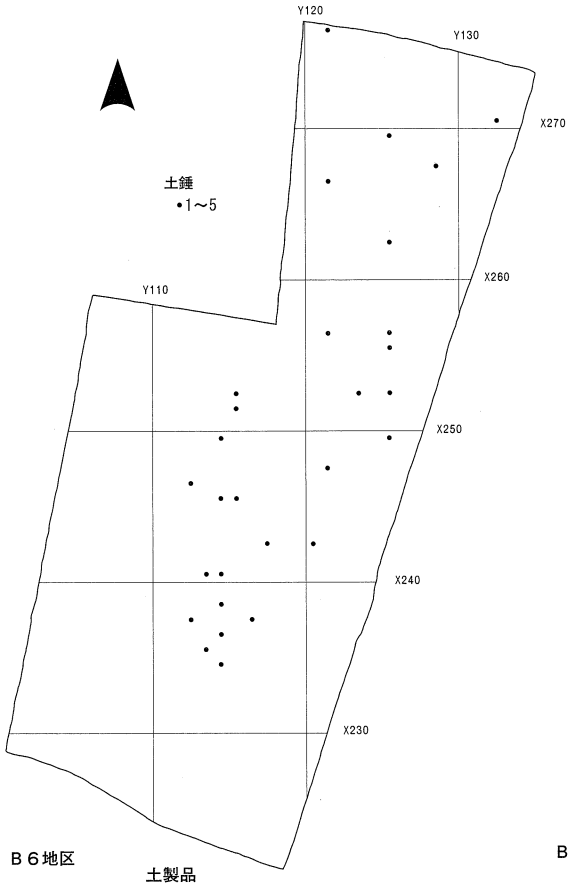


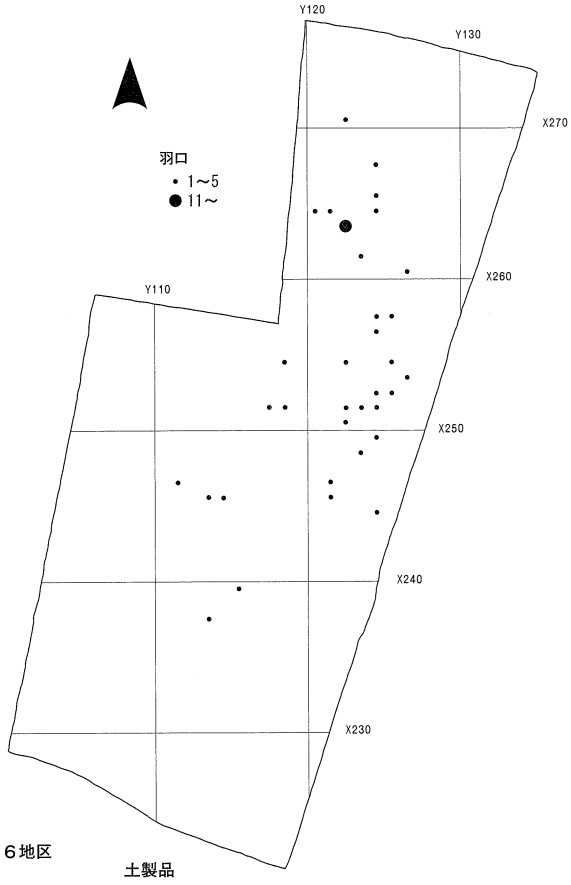


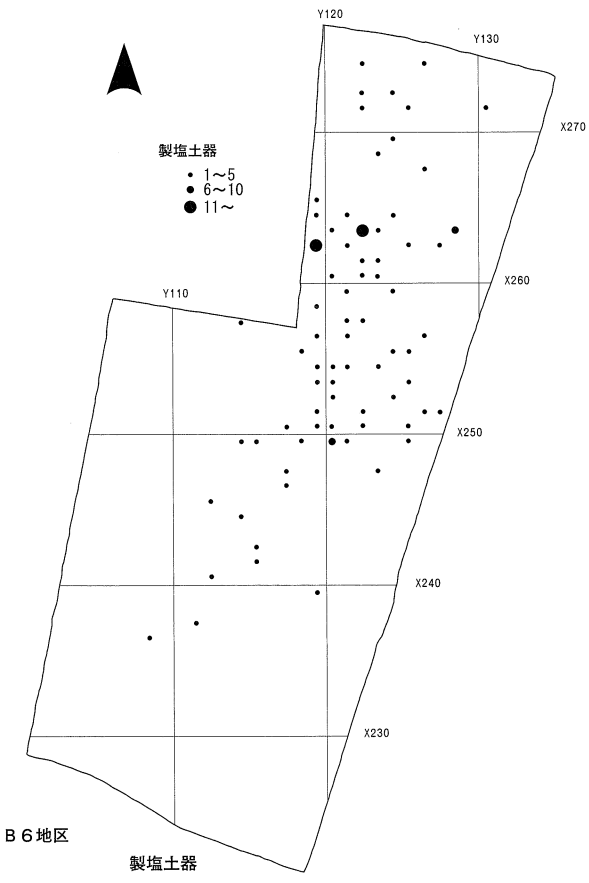
第13図　任海宮田遺跡B６地区古代出土遺物分布図（４）

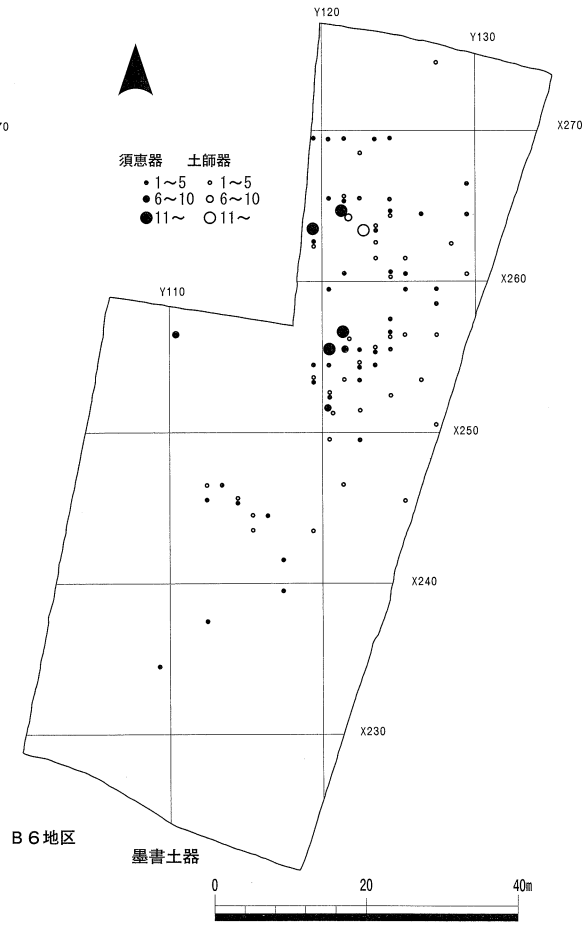


第14図　任海宮田遺跡B６地区古代出土遺物分布図（５）

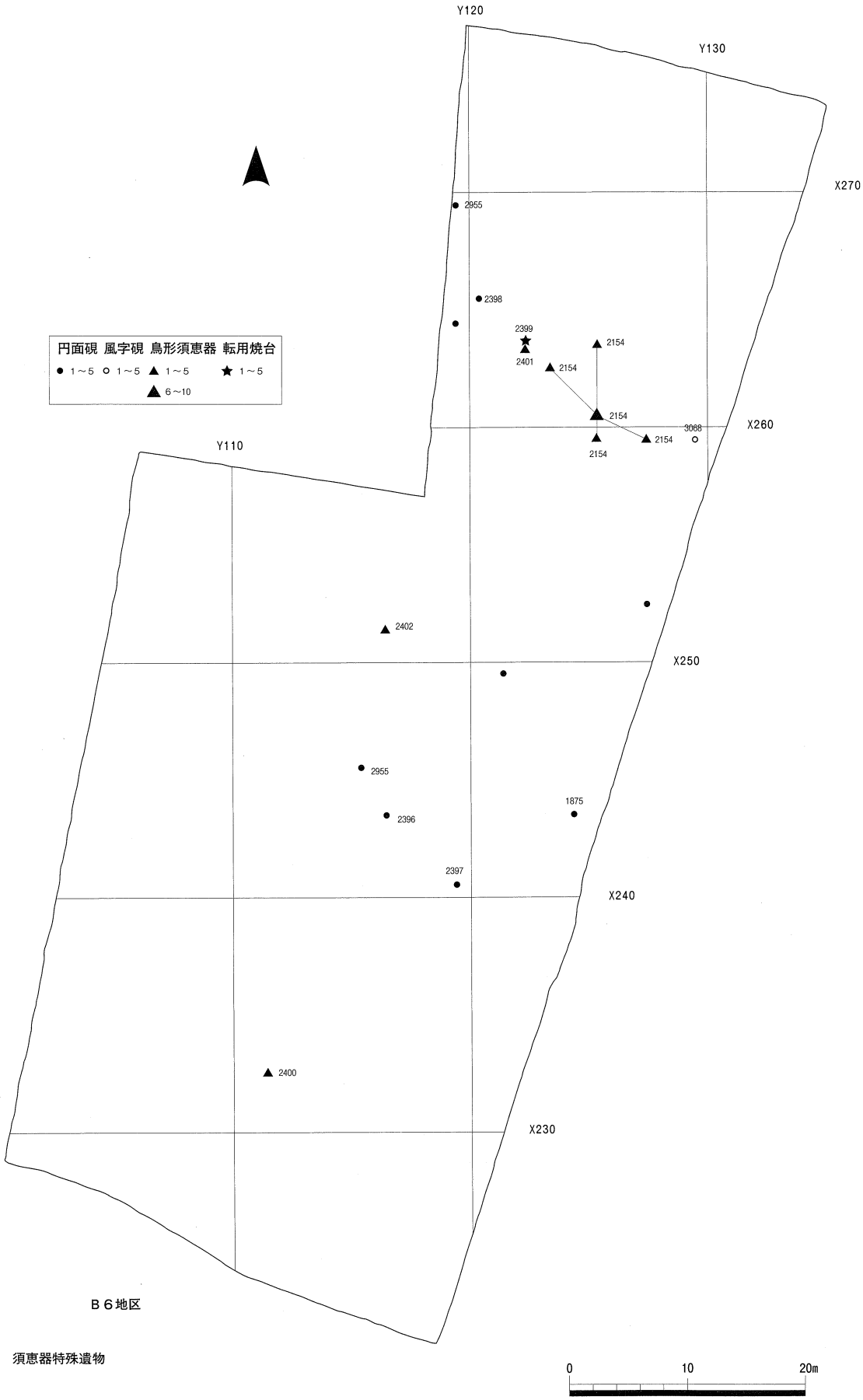




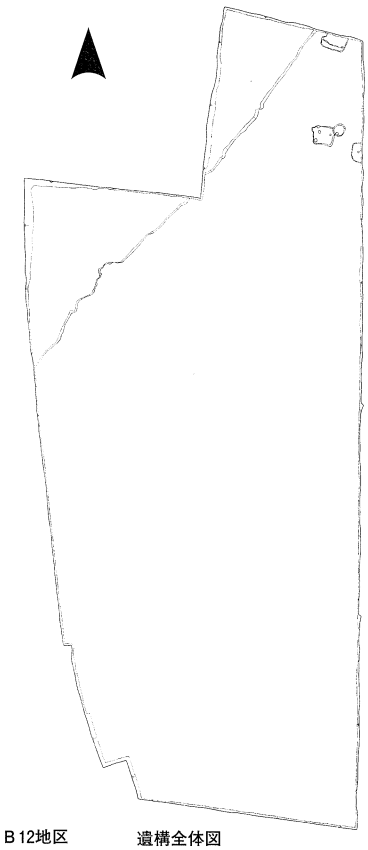




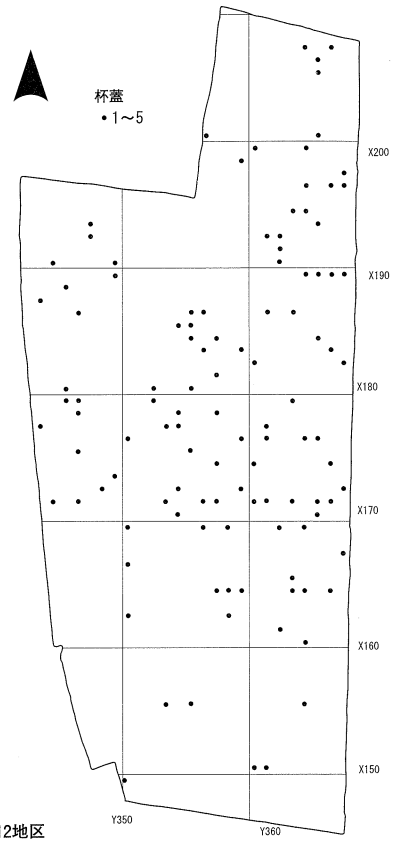
第15図　任海宮田遺跡B６地区古代出土遺物分布図（６）



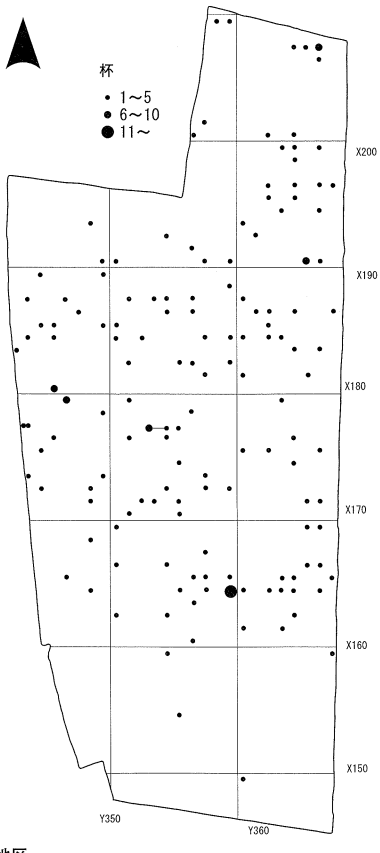
第16図　任海宮田遺跡B６地区古代出土遺物分布図（７）



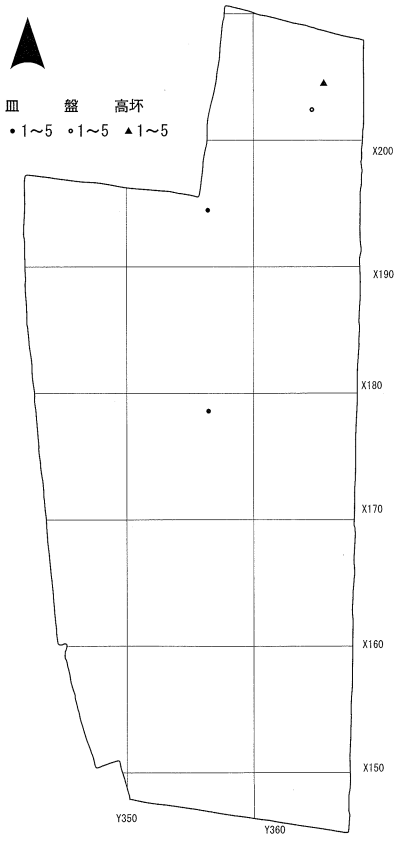
B12地区　遺構全体図



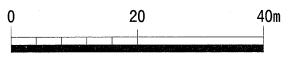
B12地区　須恵器



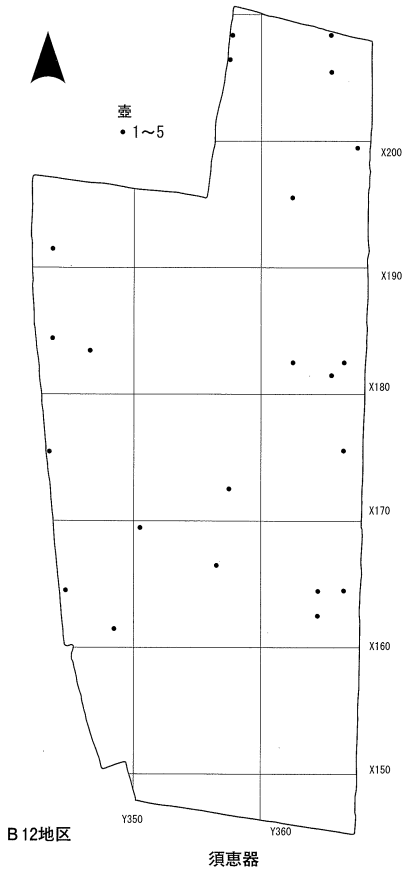
B12地区　須恵器

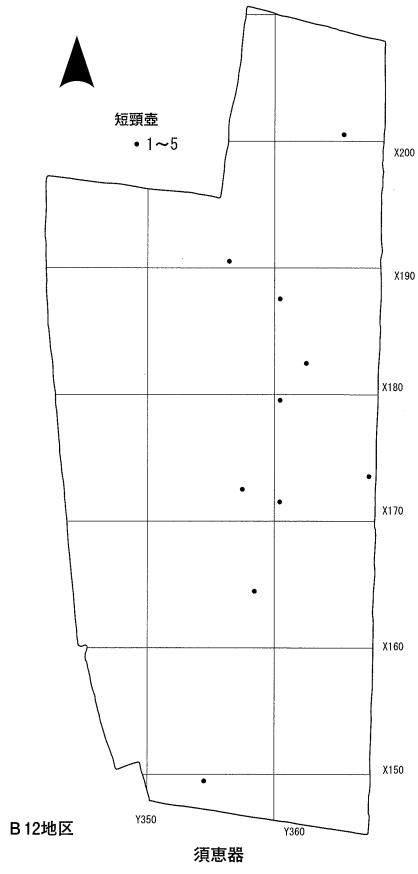


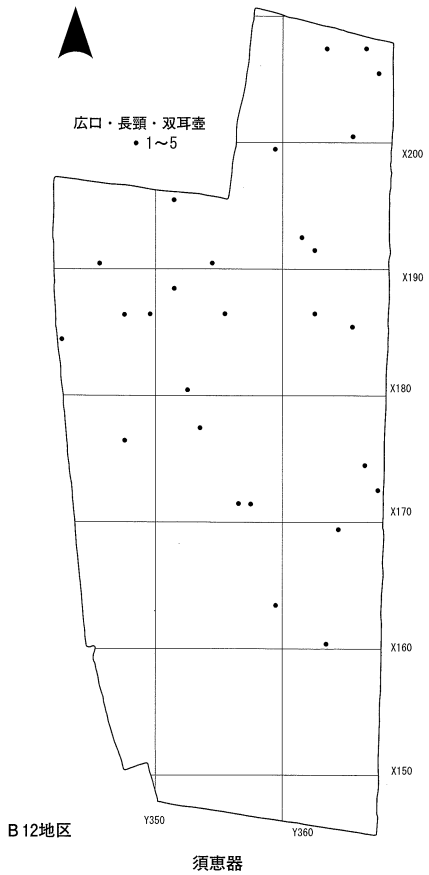
B12地区　須恵器

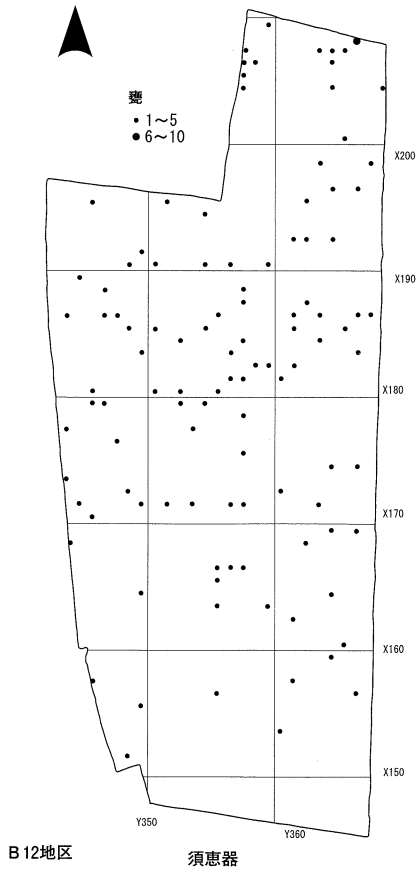


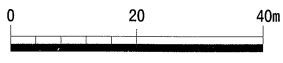
第17図　任海宮田遺跡B12地区古代出土遺物分布図（1）



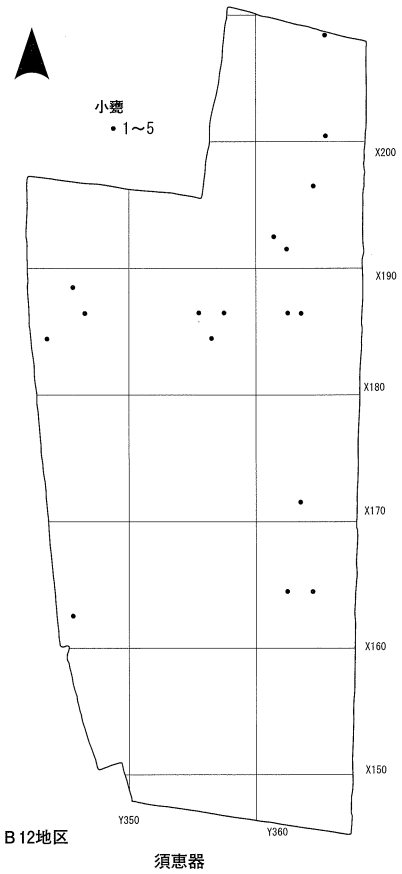


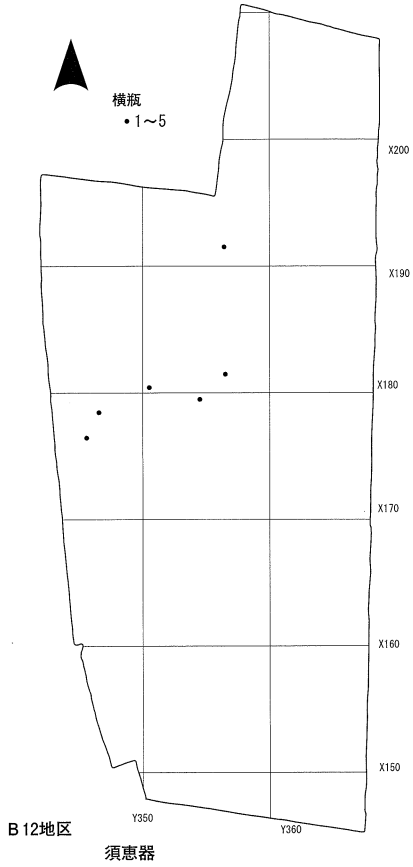


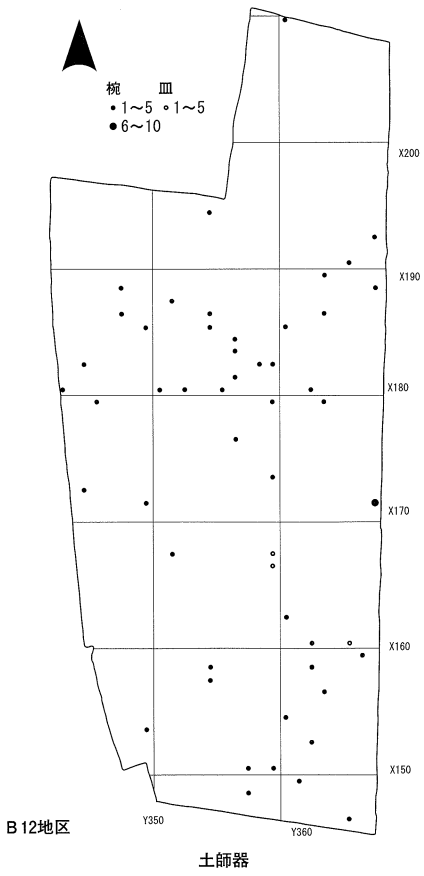


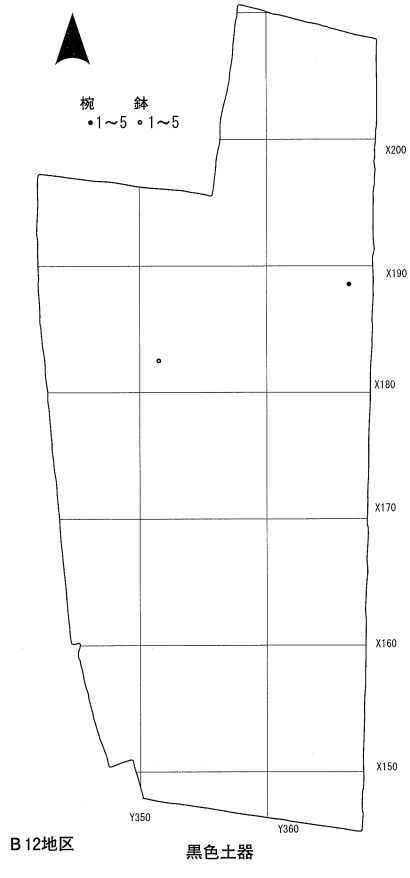


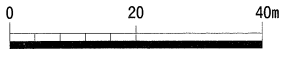
第18図　任海宮田遺跡B12地区古代出土遺物分布図（2）



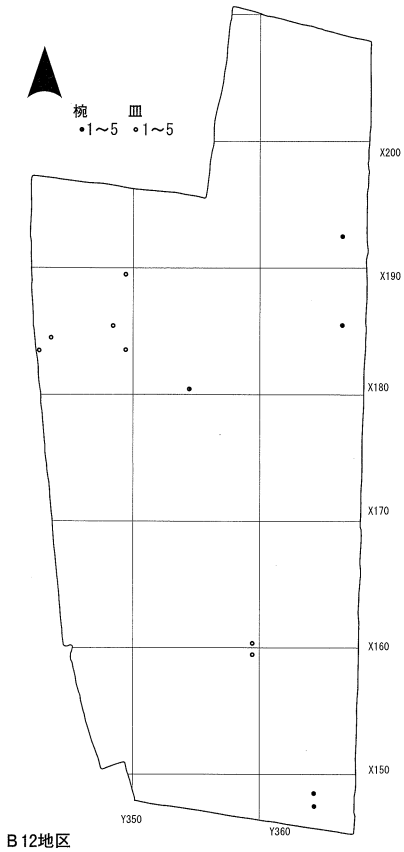






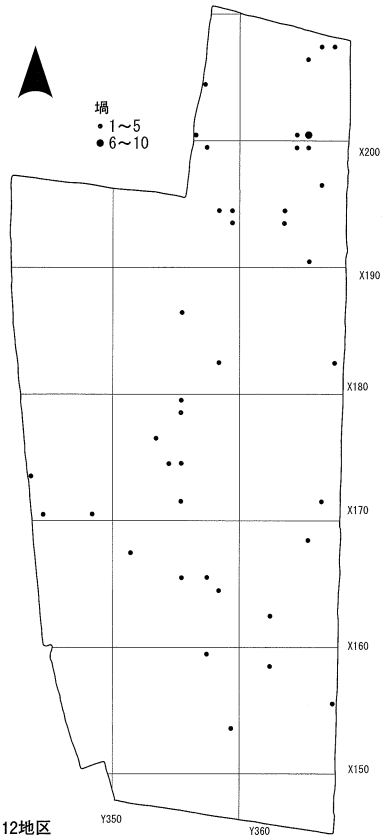


第19図　任海宮田遺跡B12地区古代出土遺物分布図（3）



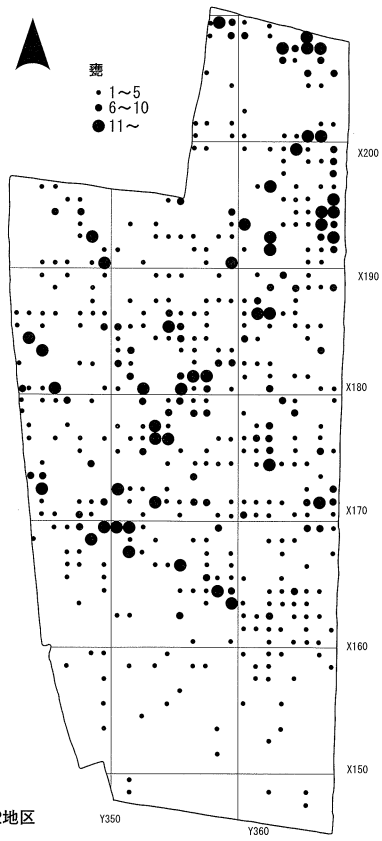
B12地区

赤彩土師器



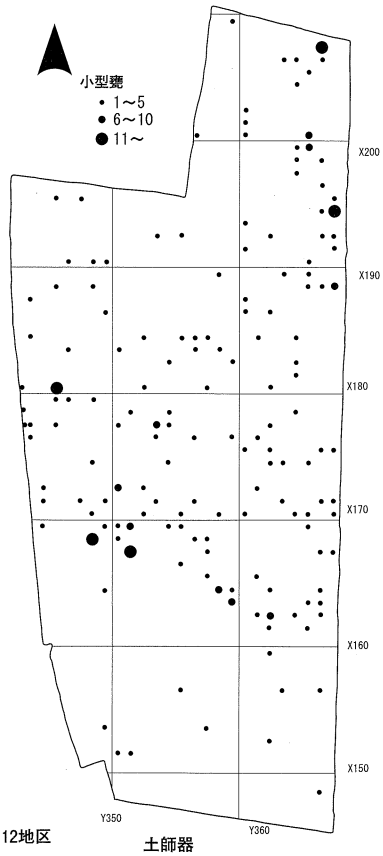
B12地区

土師器



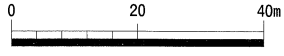
B12地区

土師器

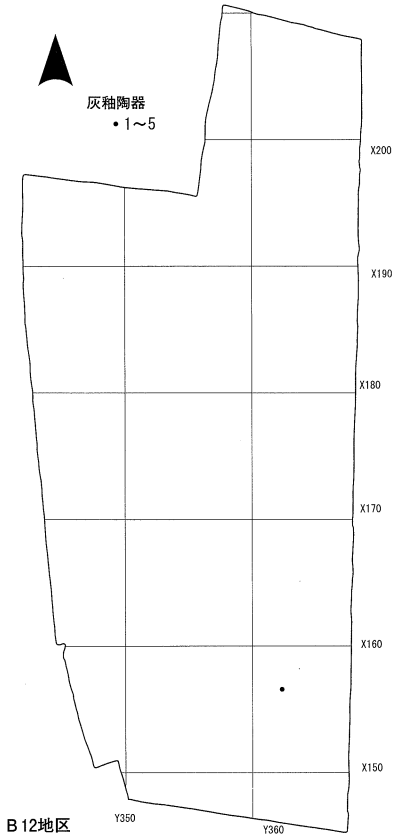


B12地区

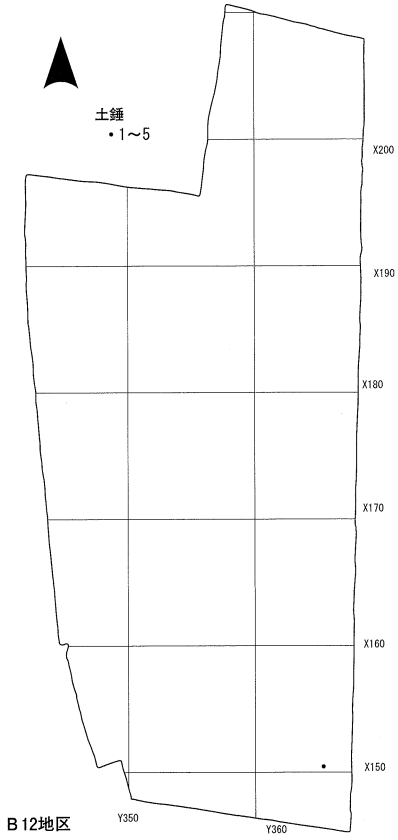
土師器



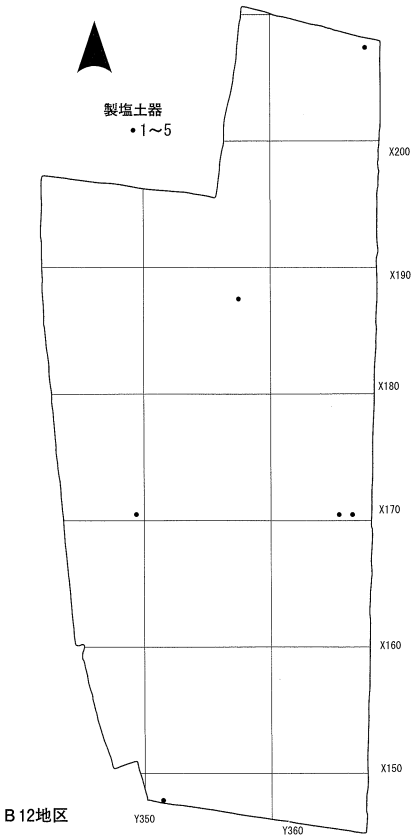
第20図　任海宮田遺跡B12地区古代出土遺物分布図（4）



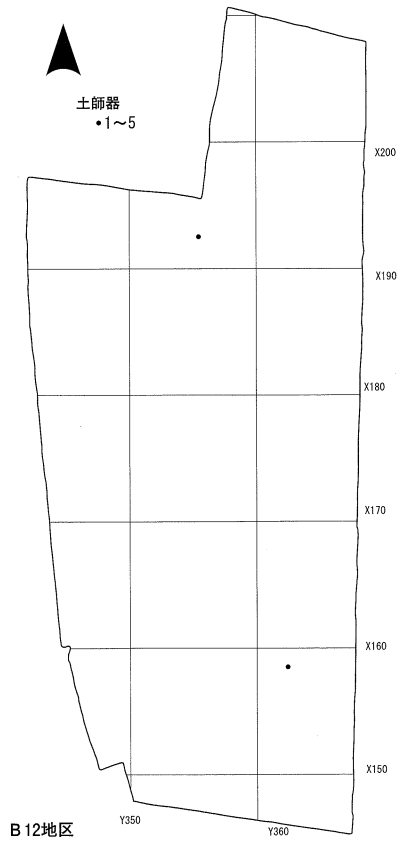
施釉陶器陶器



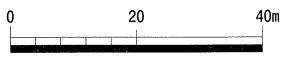
土製品



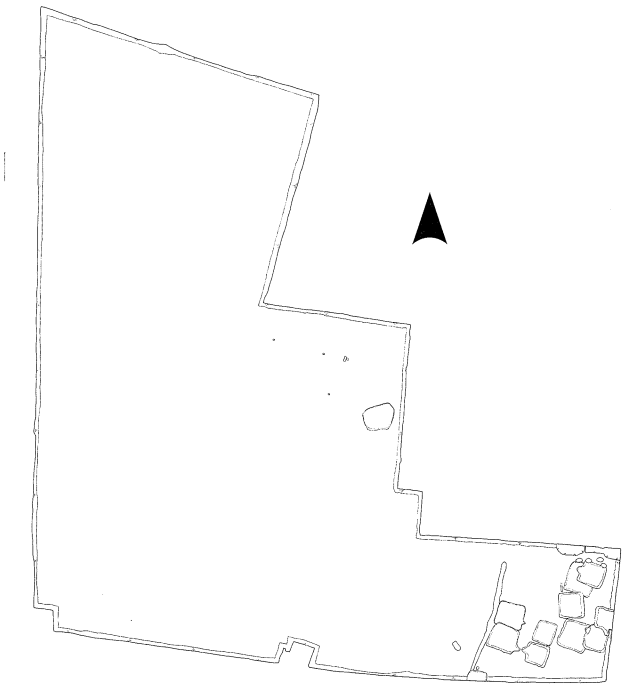
製塩土器



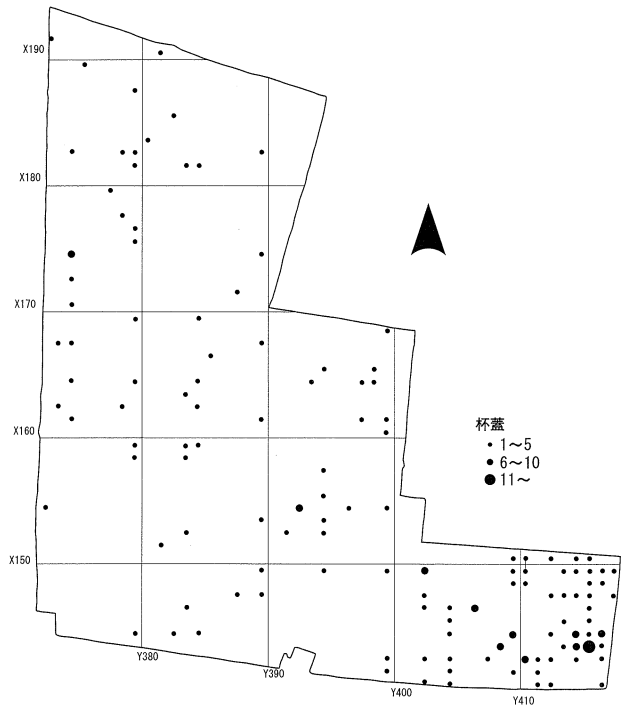
墨書土器



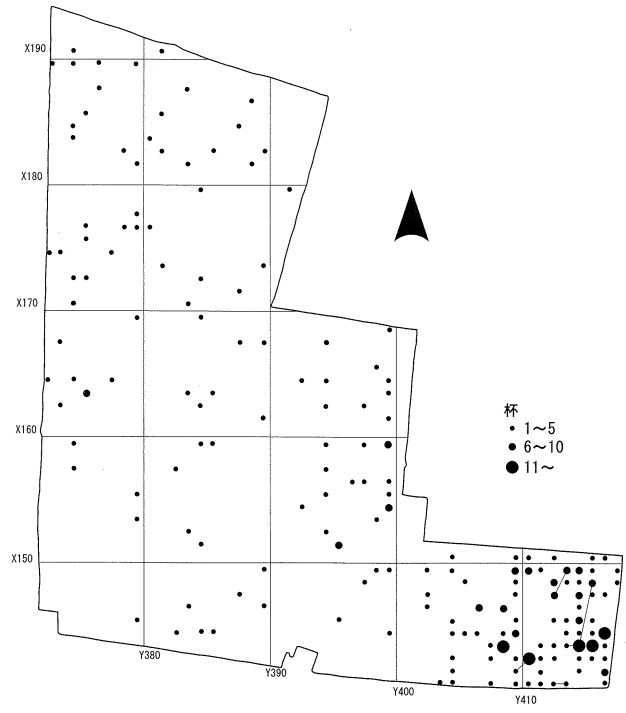
第21図　任海宮田遺跡B12地区古代出土遺物分布図（５）



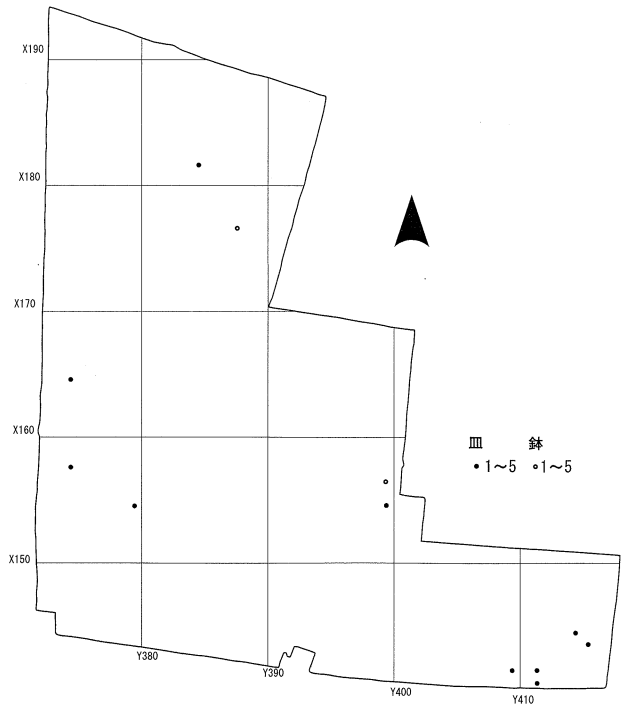
B13地区古代全体図



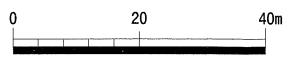
B13地区　　須恵器　杯蓋



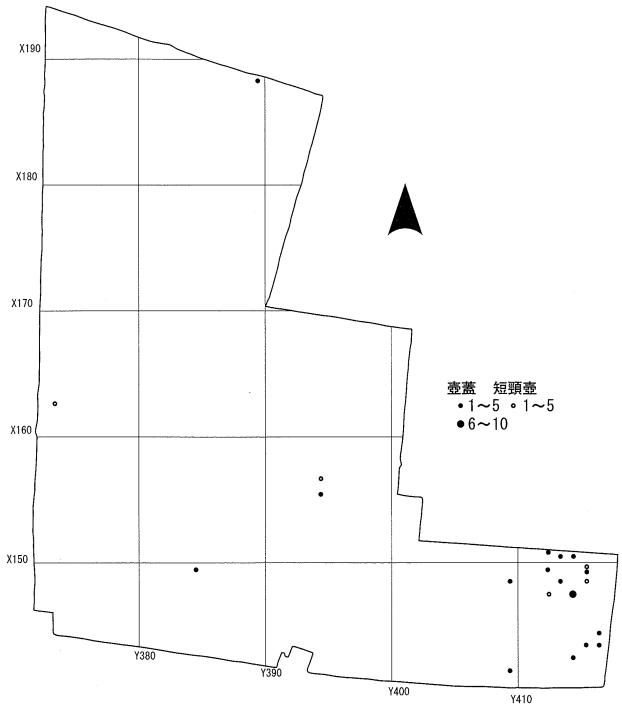
B13地区　　須恵器



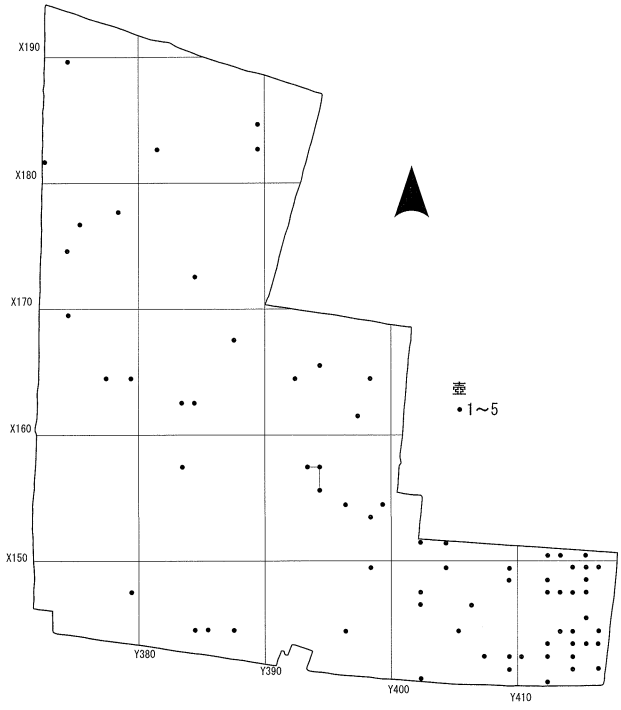
B13地区　　須恵器



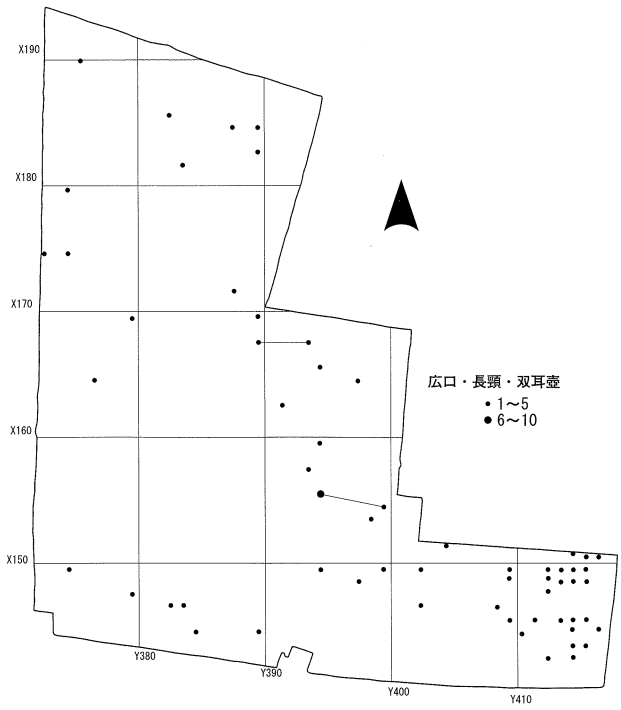
第22図　任海宮田遺跡B13地区古代出土遺物分布図（1）



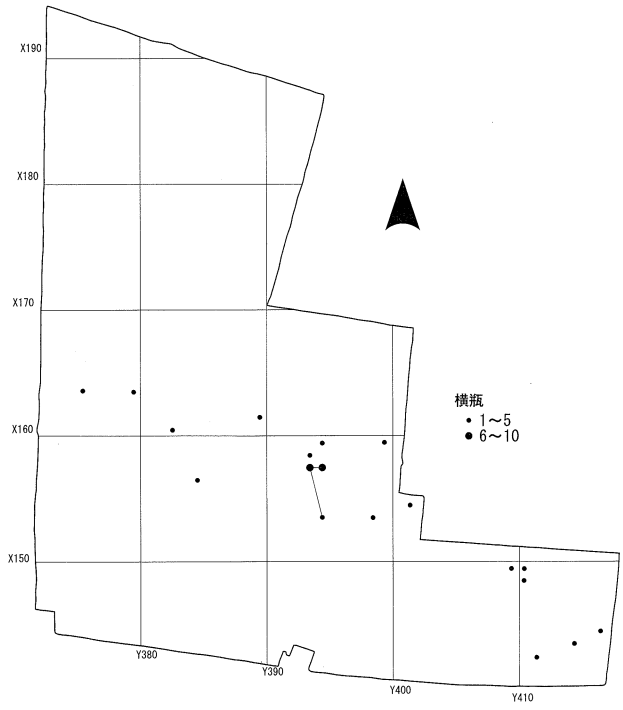
B13地区　須恵器



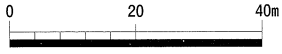
B13地区　須恵器



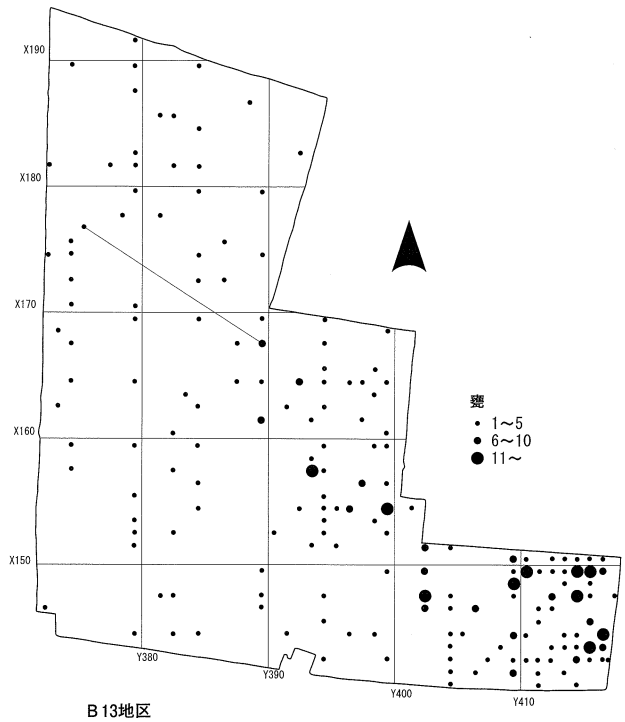
B13地区　須恵器



B13地区　須恵器

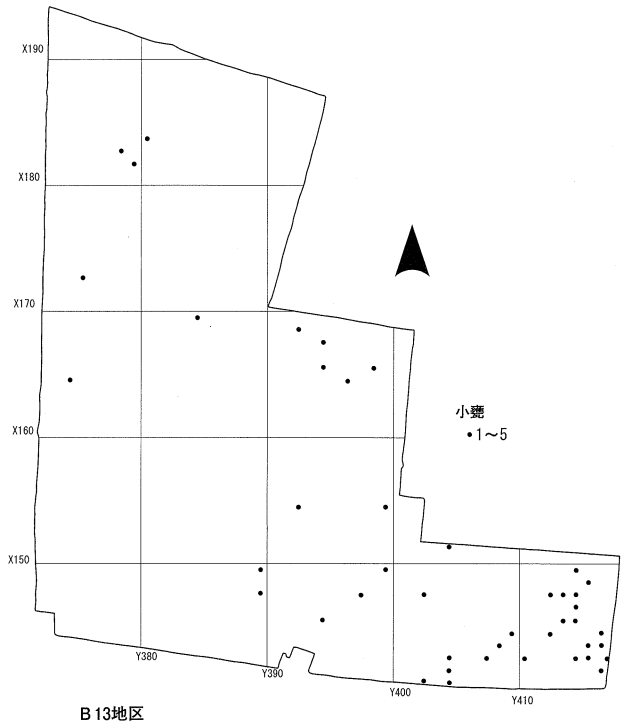


第23図　任海宮田遺跡B13地区古代出土遺物分布図（2）



B13地区

須恵器

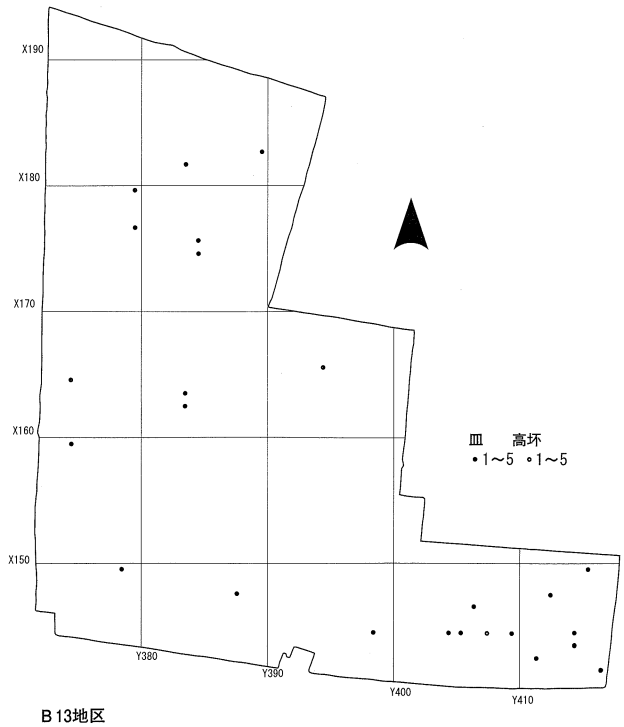


B13地区

須恵器

B13地区

土師器　椀（底部）

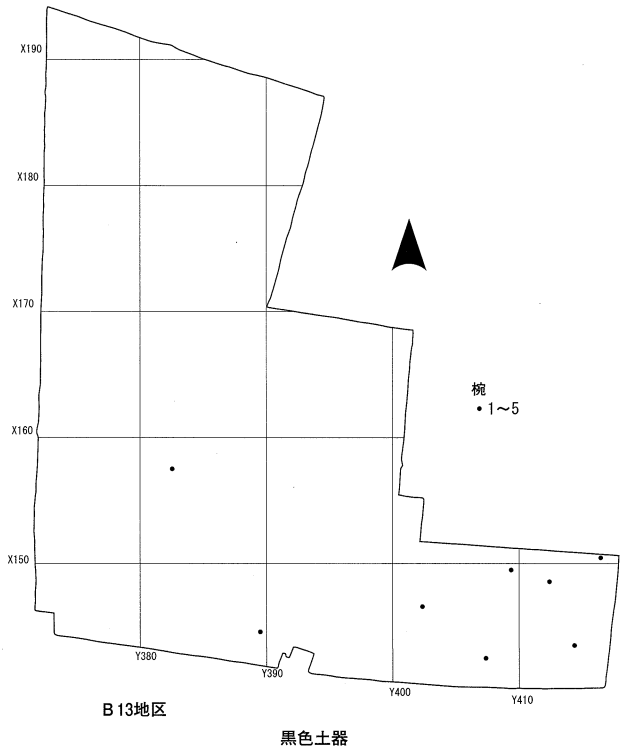


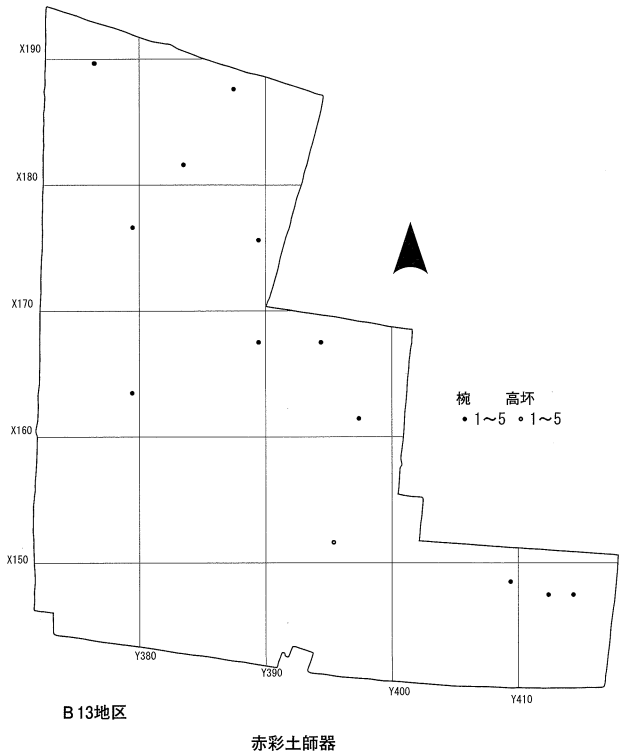
B13地区

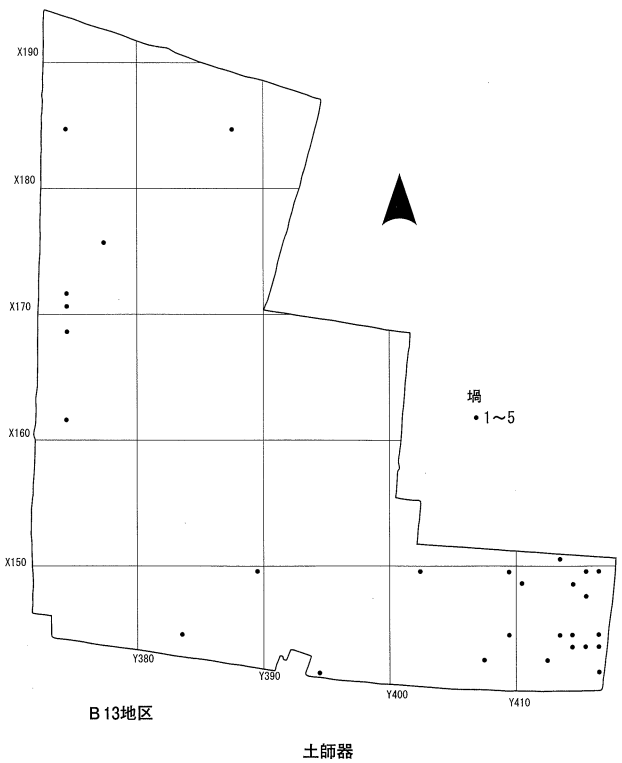
土師器　皿・高坏

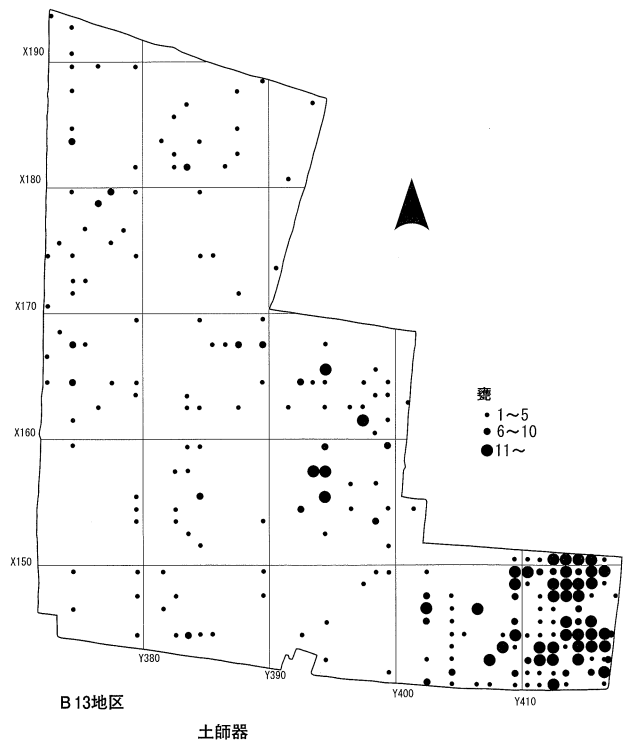
0　20　40m

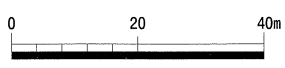
第24図　任海宮田遺跡B13地区古代出土遺物分布図（3）



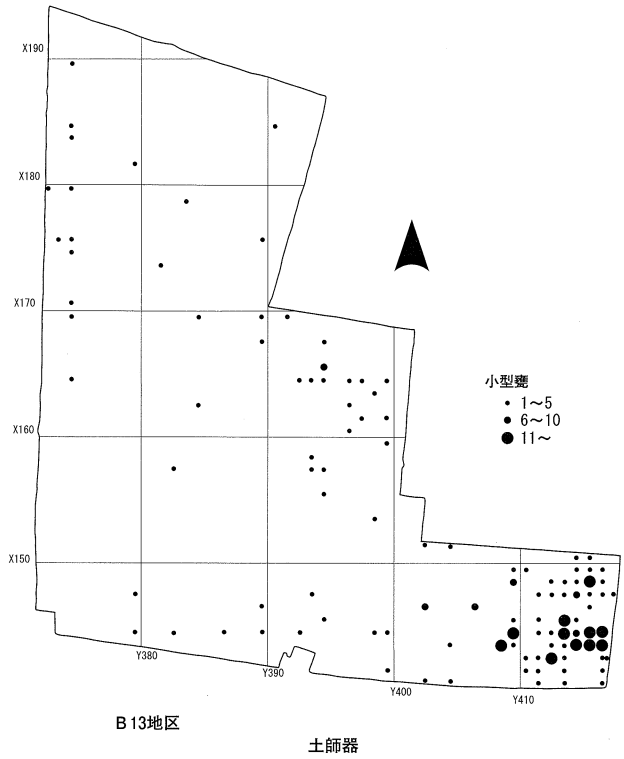


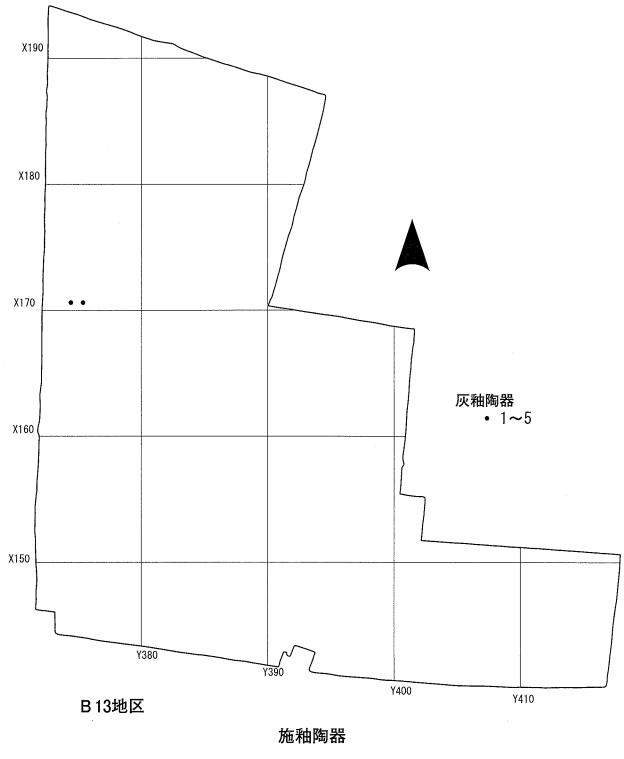


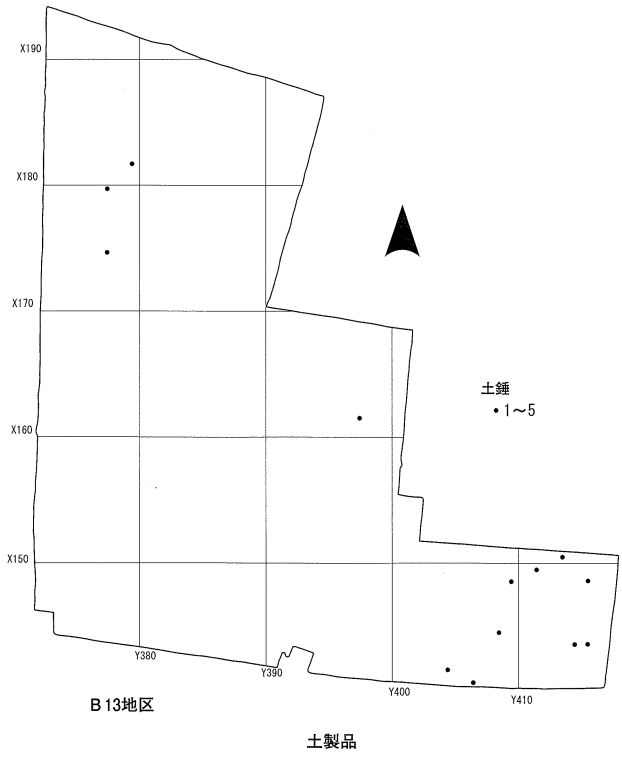


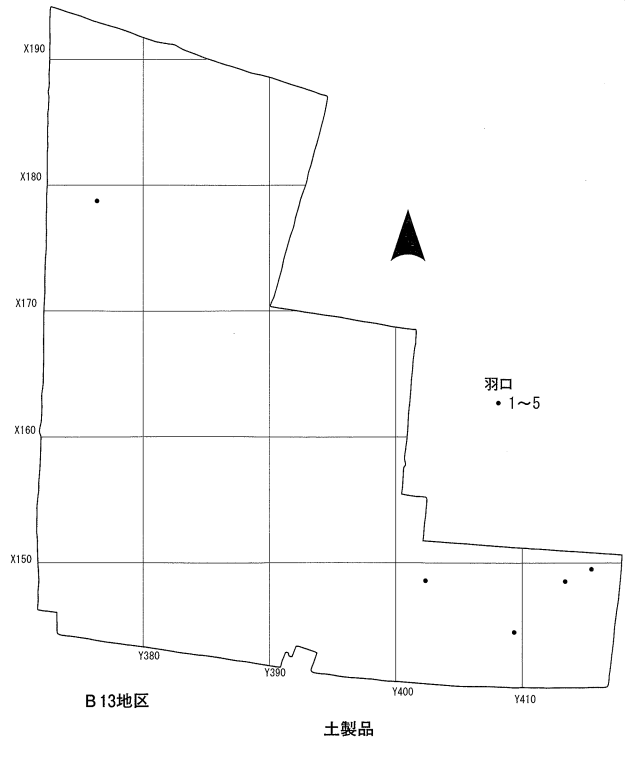


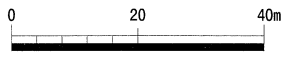
第25図　任海宮田遺跡B13地区古代出土遺物分布図（4）



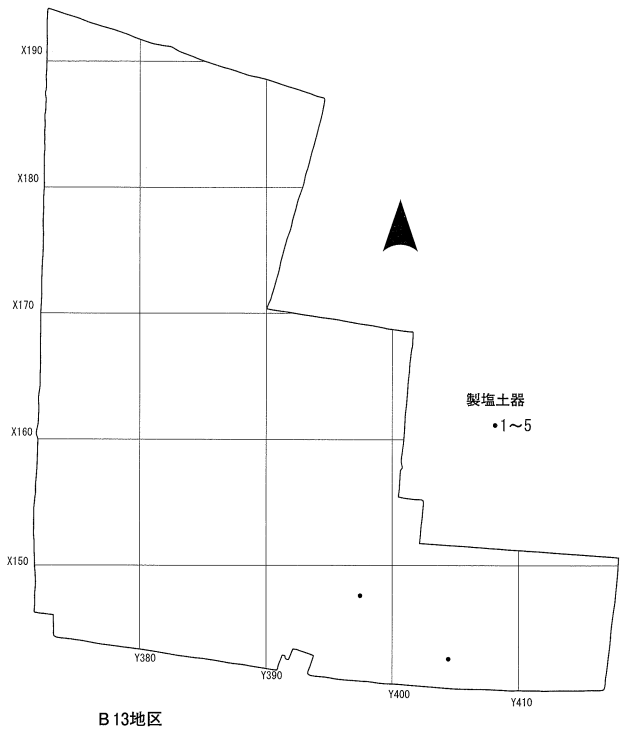


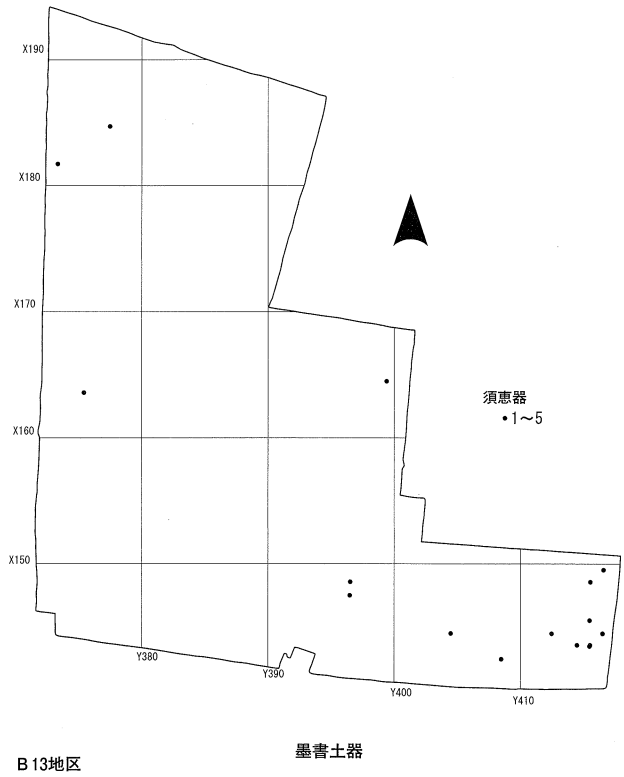


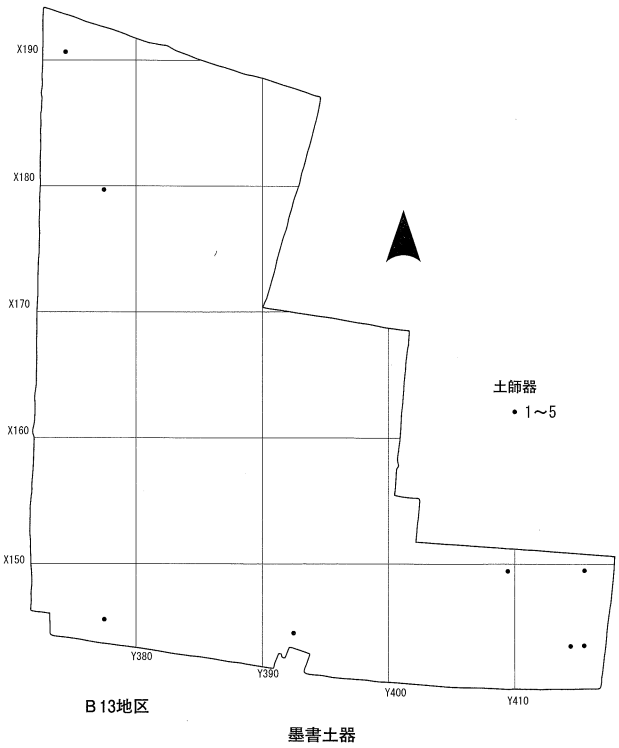


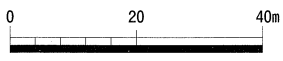


第26図　任海宮田遺跡B13地区古代出土遺物分布図（5）









第27図　任海宮田遺跡B13地区古代出土遺物分布図（6）

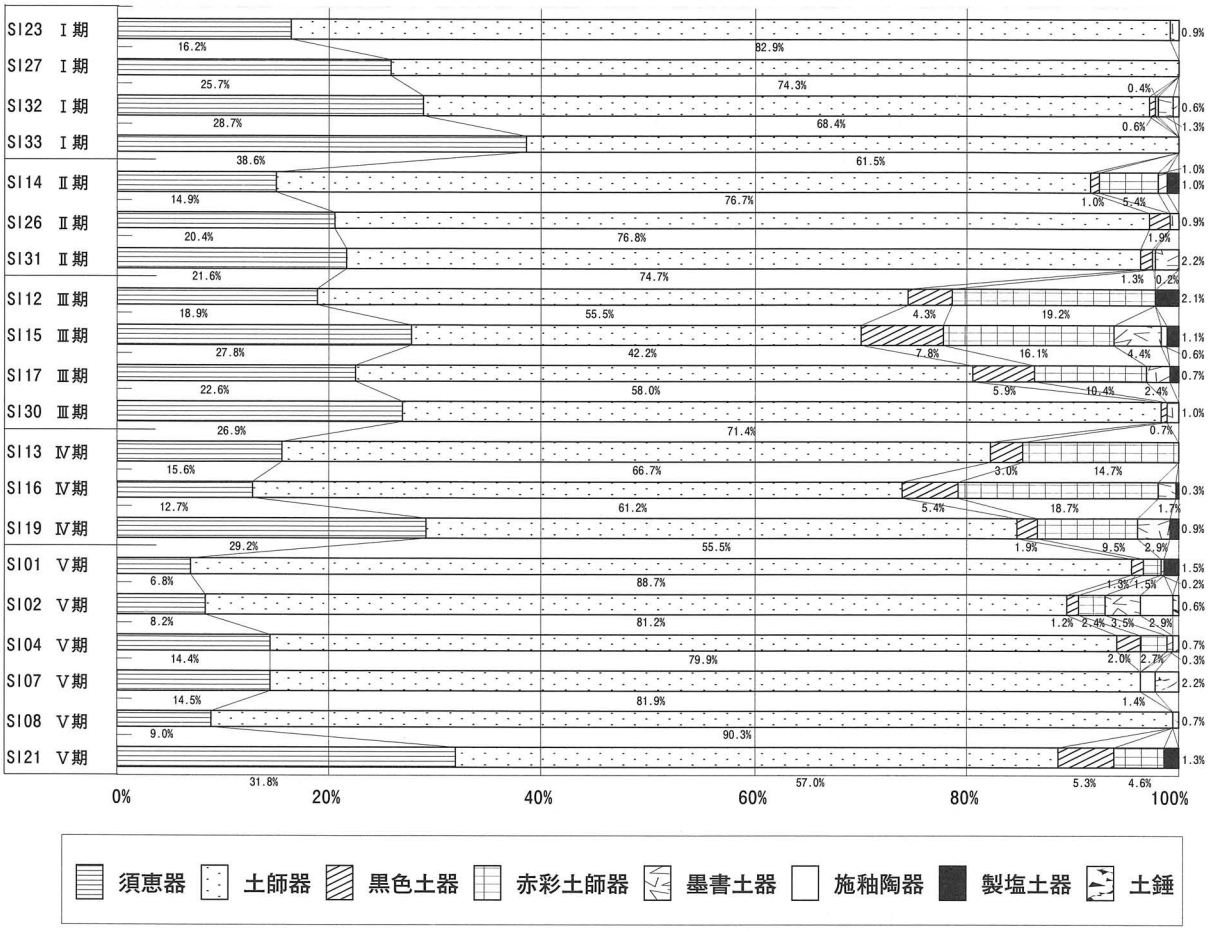
表３　竪穴住居の種類別土器組成

住居	時期	須恵器	土師器	黒色土器	赤彩土師器	墨書土器	施釉陶器	製塩土器	土錘	合計
SI23		19	97	0	0	1	0	0	0	117
SI24		0	5	0	0	0	0	0	0	5
SI25		2	37	0	0	0	0	0	0	39
SI27	Ⅰ期	27	78	0	0	0	0	0	0	105
SI32		89	212	2	1	4	0	0	2	310
SI33		45	72	0	0	0	0	0	0	117
SI34		1	49	1	0	0	0	0	0	51
SI14		30	155	2	11	2	0	2	0	202
SI26	Ⅱ期	22	83	2	0	1	0	0	0	108
SI31		99	342	6	1	10	0	0	0	458
SI35		2	6	0	0	0	0	0	0	8
SI11		23	29	0	2	0	0	0	0	54
SI12		53	156	12	54	0	0	6	0	281
SI15		50	76	14	29	8	1	2	0	180
SI17		65	167	17	30	7	0	2	0	288
SI18	Ⅲ期	15	59	4	8	4	0	1	0	91
SI28		11	74	0	0	0	0	0	0	85
SI29		1	5	0	0	0	0	0	0	6
SI30		81	215	2	0	3	0	0	0	301
SI36		0	2	0	0	0	0	0	1	3
SI10		11	7	0	0	0	0	0	0	18
SI13		36	154	7	34	0	0	0	0	231
SI16	Ⅳ期	38	183	16	56	5	0	1	0	299
SI19		61	116	4	20	6	0	2	0	209
SI20		0	20	0	0	0	0	0	0	20
SI01		36	470	7	8	1	0	8	0	530
SI02		14	138	2	4	6	5	0	1	170
SI03		23	24	4	2	5	1	0	0	59
SI04		43	238	6	8	1	0	0	2	298
SI05		6	29	0	1	0	0	0	0	36
SI06	Ⅴ期	15	52	0	3	0	1	0	0	71
SI07		20	113	0	0	0	2	0	3	138
SI08		13	131	0	0	0	0	0	1	145
SI09		0	1	0	0	0	0	0	0	1
SI21		48	86	8	7	0	0	2	0	151
SI22		4	32	0	3	0	0	1	0	40

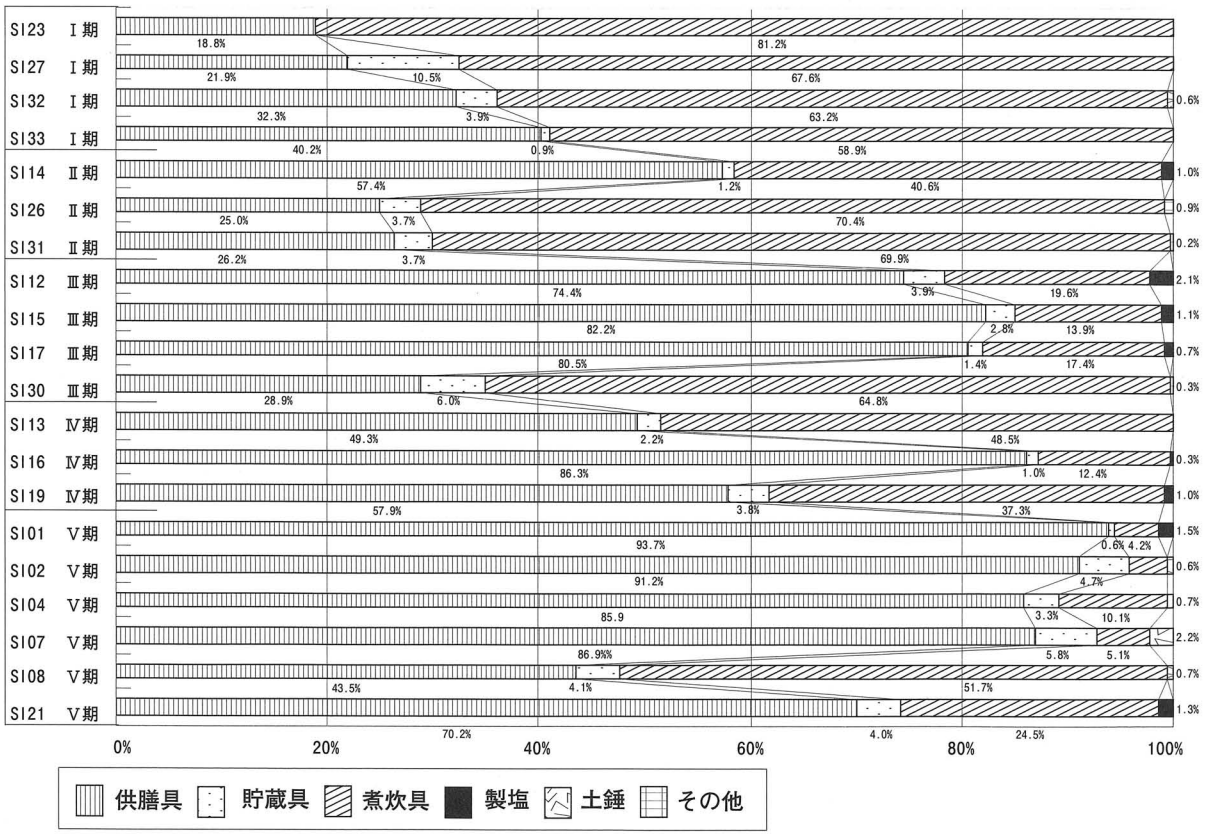
表４　竪穴住居の用途別土器組成

住居	時期	供膳具	貯蔵具	煮炊具	製塩	土錘	その他	合計
SI23		22	0	95	0	0	0	117
SI24		1	0	4	0	0	0	5
SI25		2	0	37	0	0	0	39
SI27	Ⅰ期	23	11	71	0	0	0	105
SI32		100	12	196	0	2	0	310
SI33		47	1	69	0	0	0	117
SI34		6	0	45	0	0	0	51
SI14		116	2	82	2	0	0	202
SI26	Ⅱ期	27	4	76	0	0	1	108
SI31		120	17	320	0	0	1	458
SI35		2	1	5	0	0	0	8
SI11		22	3	16	0	0	13	54
SI12		209	11	55	6	0	0	281
SI15		148	5	25	2	0	0	180
SI17		232	4	50	2	0	0	288
SI18	Ⅲ期	77	1	12	1	0	0	91
SI28		14	1	70	0	0	0	85
SI29		1	0	5	0	0	0	6
SI30		87	18	195	0	0	1	301
SI36		1	0	1	0	0	0	2
SI10		10	1	7	0	0	0	18
SI13		114	5	112	0	0	0	231
SI16	Ⅳ期	258	3	37	1	0	0	299
SI19		121	8	78	2	0	0	209
SI20		0	0	100	0	0	0	100
SI01		497	3	22	8	0	0	530
SI02		155	8	6	0	1	0	170
SI03		50	4	5	0	0	0	59
SI04		256	10	30	0	2	0	298
SI05		25	5	6	0	0	0	36
SI06	Ⅴ期	59	8	4	0	0	0	71
SI07		120	8	7	0	3	0	138
SI08		63	6	75	0	1	0	145
SI09		0	0	1	0	0	0	1
SI21		106	6	37	2	0	0	151
SI22		15	1	23	1	0	0	40

竪穴住居の種類別組成



竪穴住居の用途別組成



第28図　竪穴住居出土の土器組成比率

2　墨書土器について

はじめに

任海宮田遺跡は、当財団によって平成12～14年度にかけて調査が実施された。年度順にＡ～Ｃ地区に大別される。地区割については第１図で示した。Ｂ地区は、Ｂ１～Ｂ14地区まであり、墨書土器はＢ地区全体で335点確認されている。その内識字できたものは185点となる。識字した文字には「平」「成」「貳」「上」「凩」「安」「大」「田」「万」「□成」「城長」「縄足」「西家」などがある。

Ｂ地区では、建物群が５箇所あり、集落の中心の1つと考えられる西側のＢ１・Ｂ６地区の建物群と竪穴住居で構成されたＢ２・12・13地区では出土遺物の傾向に顕著な差が窺える。このため墨書土器についても集団間の差が窺えるのではないかと考えた。

Ｂ地区の墨書土器は、それぞれの建物群で同一文字が集中する傾向にあり、その帰属集団を象徴するものとして中野由紀子氏（2001・2002）は指摘している。また、富山県埋蔵文化財センターや富山市教育委員会の過去の調査でも、任海宮田遺跡や、その周辺に位置する吉倉Ｂ遺跡・南中田Ｄ遺跡・栗山楮原遺跡においても、「◎」「貳」「城長」「柴」「真」「小林」「□林」などの特定の文字が一定量纏まって出土している。これら当遺跡付近一帯の集落は、古代に出現し、10世紀まで著しく成長を遂げた集落であり、この付近一帯の開墾に携わった集団として、同様の目的で経営された集落と考えられる。ここではＢ地区で出土した墨書土器の分布状況や文字、胎土・器種構成を比較し、この一帯の耕地開発に携わった集団の様相の一端を窺いたい。

a　墨書土器の分類

３点以上出土した同一文字は「平」「上」「安」「成」「大」「凩」「貳」「城長」の８文字がある。そのうち「平」「上」「成」「貳」については文字の書き方に違いが窺える。それぞれ２～３程度に分類することが出来た。分類文字は第３図に図示した。以下に内訳を記述する。

・「平」は楷書で書かれたもの（分類１）と草書で書かれたもの（分類２）の２種類に大別できる。識字総数は44点あり、そのうち分類１は11点、分類２は23点認められる。

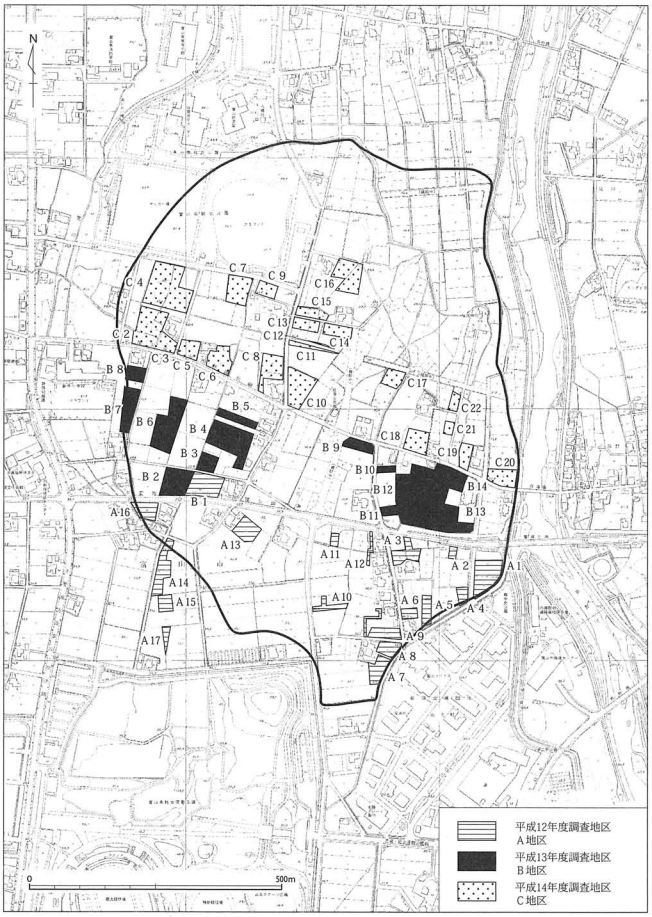
・「上」は２画目と３画目を続けて書かないもの（分類１）と２画目と３画目を続けて書くもの（分類２）の２種に大別できる。識字総数は５点あり、そのうち分類１は３点、分類２は２点である。

・「成」は楷書で書かれたもの（分類１）と草書で書かれたもの（分類２）、３画目が楕円形に書かれやや記号化したもの（分類３）の３種に大別できる。識字総数は95点あり、そのうち分類１は８点、分類２は44点、分類３は29点認められる。また「成」については「□成」や「成□」と２文字で墨書されたものが２点出土している。

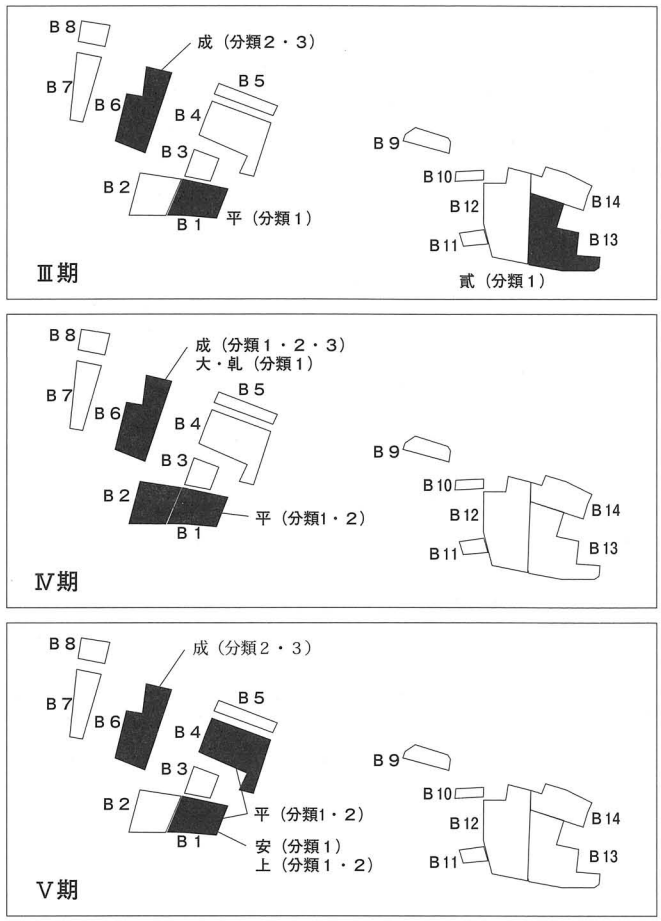
・「貳」は楷書で書かれたもの（分類１）と草書で書かれたもの（分類２）の２種類に大別でき、識字総数は７点ある。そのうち分類１は２点、分類２は２点認められる。

b　墨書土器の組成

Ｂ地区で出土した文字毎の数量については表１に示した。墨痕を含めた墨書土器全体の組成比率は、須恵器38％・土師器62％となり、土師器の比率が多い。須恵器は、杯類80％・杯蓋15％・皿５％で、土師器は、椀88％・皿９％・甕0.5％・堝0.5％となり、須恵器では杯類、土師器では椀類が多数を



第1図　任海宮田遺跡調査地区位置図



第2図　B地区墨書文字分布図

第3図　墨書文字分類図

第4図　文字の測定位置

表1　文字別数量表

文字種類	数量	小計	須恵器			土師器				黒色土器		赤彩土師器		判別	文字の大きさ	
	個体数		杯蓋	杯	皿	椀	皿	甕	鍋	椀	皿	椀	皿	不可	最小～最大(cm)	平均(cm)
「平」分類1	11	44	1	2		7	1								1.7～4.0	2.9
「平」分類2	23		2	3	1	11	1					3	1	1	2.6～7.3	3.1
「平」分類不可	10		1	4		4					1					
「成」分類1	8	95		2		3						2	1		1.2～3.2	2.5
「成」分類2	43		5	12	2	14	1			2		5	2		1.2～3.8	2.7
「成」分類3	30		3	13		5				4	1		3	1	1.7～3.2	2.4
「成」分類不可	14			7		4	1					2				
「貳」分類1	2			1		1									3.0	
「貳」分類2	2		1	1											3.1	
「貳」分類不可	5		1	2								2				
「上」分類1	3	5				2						1			1.1～1.7	1.3
「上」分類2	2					2									2.2	
「安」	4	4				2				2					1.9～3.4	2.7
「大」	4	4		2								1	1		2.5～3.0	2.8
「軋」	3	3				1				2					2.2	
「城長」	3	3	1	1								1			4.4～5.6	4.9
「廣」	2	2		1		1									2.1～3.2	2.7
少数の文字又は記号	16	16		7	1	8										
墨痕等	150	150	4	44	2	83	1	1	1	7		3	1	3		
合計	335		19	102	6	148	5	1	1	17	2	20	9	5		

占める。土師器では更に、土師器76％・黒色土器９％・赤彩土師器15％の割合となる。

これまでの任海宮田遺跡の調査やその周辺の遺跡（吉倉Ｂ遺跡や南中田Ｄ遺跡）の墨書土器の組成について考察した越前慶祐氏（1994）の研究がある。その結果と比較すると、吉倉Ｂ遺跡では組成比率が、須恵器51％・土師器が49％となり、器種ごとでは、須恵器が杯類78％・杯蓋22％、土師器が椀95％・皿５％となり、土師器では更に、土師器73％・黒色土器５％・赤彩土師器22％の割合となる。また、この吉倉Ｂ遺跡の傾向は、近隣の南中田Ｄ遺跡やこれまでの任海宮田遺跡の組成比率も同様の傾向を示すようである。Ｂ地区の場合、須恵器と土師器の比率が吉倉Ｂ遺跡と異なるが、器種ごとの比率や土師器のうち黒色土器や赤彩土師器の占める割合はほぼ同等である。このことは、９世紀後半～10世紀初頭のⅢ・Ⅳ期の建物群１・３が集落の中でも中核的な領域を形成する建物群であり、それらの位置するＢ１・Ｂ６地区で多量に墨書土器が出土したことに起因すると考えられる。北陸では須恵器供膳具に対し、土師器供膳具の生産が９世紀後半から増加することが指摘されており、建物群１・３で土師器供膳具を多量に消費したため吉倉Ｂ遺跡よりも、土師器の割合が須恵器に比べ高い比率になったと考えられる。しかし、器種や黒色土器、赤彩土師器に対する墨書の選別については同様の方針が働いていたものと考えられる。

表１を参考に文字ごとの組成を比較すると、「成」や「貳」では須恵器と土師器がほぼ同数で、「平」では土師器の割合が高く、「上」「安」「𠙵」ではすべて土師器となる。文字別墨書土器の時期別分布帯を示す表２をみると、Ⅲ期に中心をもつ「成」「貳」とⅣ・Ⅴ期に中心をもつ「平」「上」「安」「礼」とで差が認められることから、上記の結果は、墨書土器の時期差が反映しているものと考えられる。

c　墨書土器の分布について

墨書土器の出土位置は、建物を検出したＢ１・２・６・12・13地区について第５図～第14図にドットで表示し、ドットの横に報告書番号を明示した。またドットについては、第１節の古代土器の分布と同様の方法で図示している。但し、数量については個体数でカウントした。第５～11図までは墨痕の付着した破片も含めて図示し、第12～14図は地区別に文字の分類ごとに出土位置を表示した。

Ｂ１地区：出土した墨書土器の個体数は101点で、そのうち識字できたものが「平」「上」「安」など59点ある。須恵器は25点あり、建物群１の場所もしくはそのやや東側に分布する。土師器は76点あり、そのうち黒色土器６点、赤彩土師器５点を数える。土師器においても須恵器と同様、建物群の場所もしくはそのやや東側から墨書土器が出土している。墨書土器以外の遺物が建物群を中心に広く分布する（第１節参照）のに対して、墨書土器が建物群のやや東寄りに分布することは、土砂の堆積過程で東寄りに遺物が流れ込むのではなく、墨書土器の廃棄のされ方が他の遺物と異なる可能性がある。河川ＳＤ019が西側のＢ２地区に存在したものと考えられるが、建物を挟んで反対側に廃棄されているようである。河川を利用した祭祀とは関係のない利用のされ方であったと推測される。文字では「平」が最も多く、Ｂ地区全体で出土した「平」44点中41点がＢ１地区で出土しており、93％がＢ１地区から出土したことになる。また他の３点もＢ１地区周辺のＢ２・Ｂ４地区からの出土であり、建物群１と関係の深い文字と考えられる。この他「上」「安」もＢ１地区で認められる文字群である。「上」「安」については、文字が体部に書かれている。

Ｂ２地区：出土した墨書土器の個体数は10点で、そのうち識字できたものが「平」「大」など８点を数える。須恵器が６点、土師器が４点出土しており、建物群２の竪穴住居周辺で多く確認されている。建物群１や３とは明らかに出土数量に差が認められることや、「平」が２点出土しているのに対

し、「成」が認められていないことから、建物群１との関係が示唆される。「大」については、西側建物群全体に少数認められることから、「平」「成」とは異なる性格の利用のされ方をした可能性がある。

Ｂ６地区：出土した墨書土器の個体数は174点で、そのうち識字できたものが「成」「𠙵」など102点ある。須恵器は67点あり、建物群３の建物の位置から多く出土している。土師器は107点あり、黒色土器13点、赤彩土師器９点を数える。須恵器と同様、建物群の配置と同じように分布しており、建物群１とは分布状況が異なる。文字では「成」がもっとも出土量が多く、Ｂ地区全体で出土した「成」95点のうち91点がＢ６地区から出土しており、全体の96％を占める。他の４点もＢ６地区周辺のＢ１・Ｂ４地区で出土しており、建物群３と関係の深い文字と考えられる。また「𠙵」と書かれた文字がＢ６地区で一定量認められる。建物群１の「安」や「上」と同様、文字が体部に書かれる。このほか「□成」の墨書や、一個体しか認められないが「西家」や「城長」が確認されている。「成」については、次年度調査のＣ地区でも多く確認されており、分布域は更に北側に広がっていたようである。またＣ地区では「家成」や「斐家成」などの人物名と考えられる文字群が確認されている。Ｃ地区では「成」の分布域が人物名の分布域と重なることなどから、それらの人物名を省略した意味など何らかの関連を示している可能性が高い。「西家」については、Ｂ６地区の南側であるがＡ14地区でも、「北家」が出土している。「城長」についてはＢ14地区でも確認されており、過去の調査[註1]でもＢ13・14地区の周辺で集中して出土しいる。また周辺遺跡の吉倉Ｂ遺跡でもみつかっていることから、「城長」については、県内の研究者によって様々な説が述べられている。

Ｂ12地区：出土した墨書土器は個体数で、３点を数える。すべて判読不明で、須恵器１点、赤彩土師器２点である。建物群４とは分布域と時期が異なることから、流れ込みと考えられる。

Ｂ13地区：出土した墨書土器は個体数で、32点を数える。そのうち識字できたものが「貳」など10点ある。須恵器は23点あり、土師器は９点で、そのうち赤彩土師器が３点ある。須恵器・土師器ともに、建物群５の建物群の配置と分布が重なるものも多いが、流れ込みと考えられる遺物も認められる。文字では「貳」が９点出土しており、「貳」と識字できた墨書土器は、建物群５の竪穴住居とほぼ配置が重なることから、建物群５と関係の深い文字と考えられる。そのほか「縄足」の墨書が１点認められており、人物名と考えられる。「縄足」は前述した周辺の過去の調査やＣ地区の東側でも分布の集中が確認できることから、建物群５に関連する可能性が高い。

d　施文字位置等の検討

文字の施された位置については表２～４にまとめた。墨書土器は、ほぼ共膳具に限定して墨書されており、蓋以外の容器の内面には墨書されない。須恵器杯蓋以外の施文字位置については、各建物群と関連性が高いと考えられる「平」「成」「貳」などの文字は底部外面に書かれるものが多い。一方各建物群ごとに集中が認められるものの出土量が少ない「上」「安」「𠙵」については体部中央に書かれる。また建物群ごとに集中が認められず、建物群全域で少数認められる「大」「廣」については底部外面に施される傾向にある。

文字の大きさは、図４で示した長さと幅を測定し表２～４にまとめた。表１では、文字ごとの長さについて最小・最大の範囲と平均の大きさを示し、図15・16には分類ごとの時期別分布と「平」「成」の大きさの分布を示した。文字の大きさは、長さの平均が2.5㎝前後のものが多い。時期別に文字の大きさに顕著な差は認められないが、「貳」などのⅢ期のものに比べ、Ⅴ期の「上」はやや小さい傾向が窺える。また「平」では、分類１が横長に墨書されたのに対し、分類２では縦長に墨書される傾

向が窺える。「成」については分類ごとに顕著な差は窺えない。

墨書土器の胎土は、須恵器では文字に関係なく肉眼観察１群または４群が主体であり、両者はＢ地区において普遍的に認められるものである。集落内で一般的な様相をもつ１群や４群の器が墨書の対象とされる一方で、仏器模倣と考えられる丁寧な作りの２・３群土器や緑釉・灰釉陶器には墨書が施されないことなど、墨書の利用形態に傾向が窺えた。土師器については土師器焼成遺構の製品と考えられる３・５群のものが、「平」「成」に多く含まれるのに対し、「貳」は３・５群が含まれない。

ｅ　まとめ

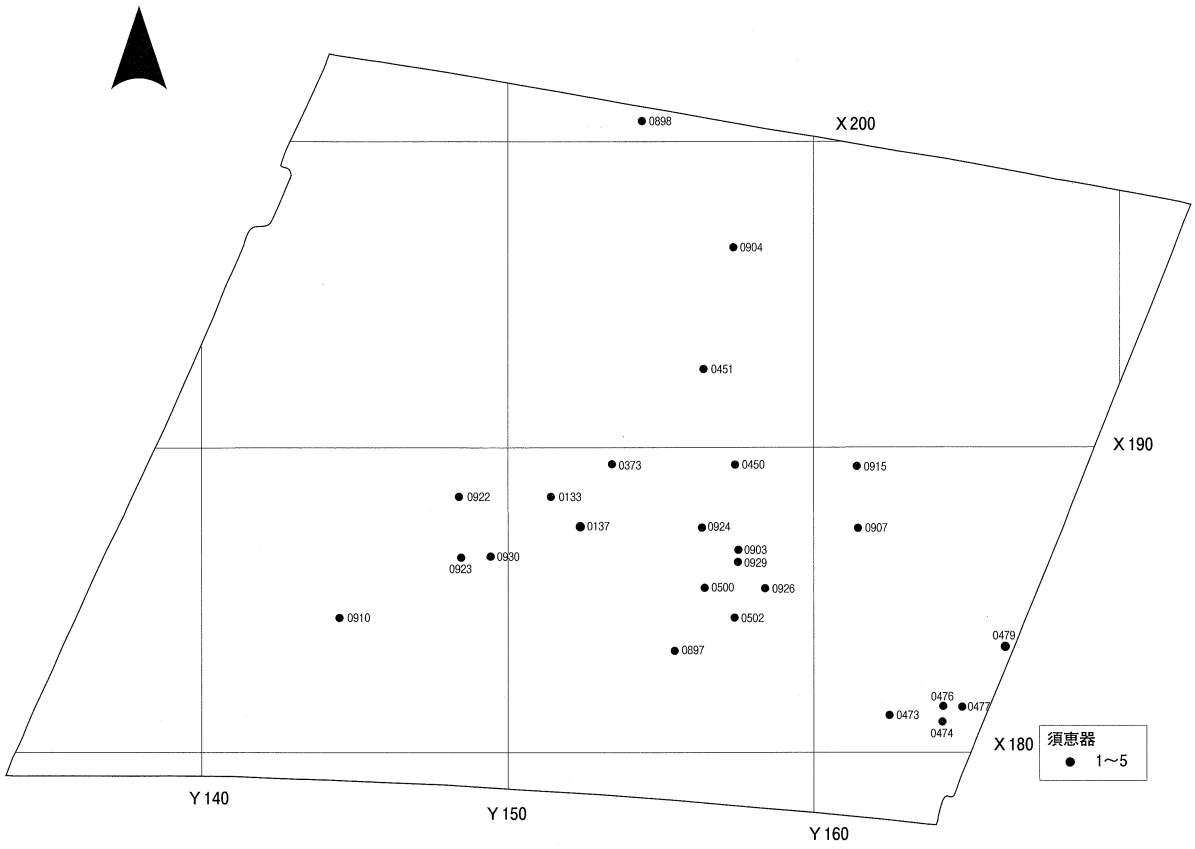
文字群ごとの分布傾向では、建物群１・２では「平」、建物群３では「成」、建物群５では「貳」が、建物群を経営した集団を象徴する文字と考えられる。建物群２は「平」の数量が少量であり、建物の構成や他の出土遺物の傾向から、恐らく建物群１の集団に従属していたものと推定される。文字群の分布から、Ｂ地区では最盛期のⅢ期の段階で、少なくとも３つの集団が集落の運営に携わっていたものと考えらる。その中では、管理する側とされる側が存在し、Ｂ１地区のⅢ・Ⅳ期の建物群１は管理する側の典型であり、Ｂ２地区の建物群２は管理される側の典型であろう。Ｂ６地区の建物群２については、「成」の分布範囲から集団規模が更に北側に広がる可能性や、遺構や出土遺物の傾向から手工業生産に携わっていた可能性があり、Ⅲ・Ⅳ期の段階では管理集団の一部と考えられるが、その中核域は別であったと思われる。Ｂ13地区の建物群５は、「貳」の分布範囲が東や北に更に広がることや、建物構成や出土遺物の傾向から、Ⅲ期では建物群２と同様の管理される側の集団であったと考えられる。なお管理側の建物群１や建物群３に収穫物を保管しておく大規模な倉庫群が形成されていないことから、収穫物は管理者の本拠地か、あるいは更に上位の支配者層に速やかに納入されていた可能性が考えられる。管理者の本拠地あるいは上位の支配者が、平野の東西どちらの方面の勢力か検証するため、須恵器の墨書土器について文字ごとに胎土分析（資料数54点）を行なった。分析の結果（第４分冊第１章参照）、須恵器の大半が平野東部の釜谷窯の製品であり、平野西部の古沢窯と産地不明のＸ領域のものが若干確認されている。文字ごとに産地の傾向は窺えず、肉眼観察でも偏りは認められないことから、製品の大半が平野東部であるものの時期的な傾向の可能性もあり、集団の帰属は不明である。また、これらの墨書土器が器の所有を示すのか、祭祀などに利用されたのか、あるいは生産地から運搬する際の識別のために利用されたのか判然としないが、使用痕の著しい灰釉陶器や緑釉陶器などには墨書が認められない一方で、須恵器・土師器などの一般的な供膳具が墨書の対象となっている。これらは管理側と考えられる建物群１・３で多量に出土し、管理されている側でも少量出土することから、「平」「成」「貳」については、管理側が貸与したものを識別できるように施したものの可能性がある。また管理側の集団では灰釉陶器や緑釉陶器などを使用していた可能性が高い。

（武田　健次郎）

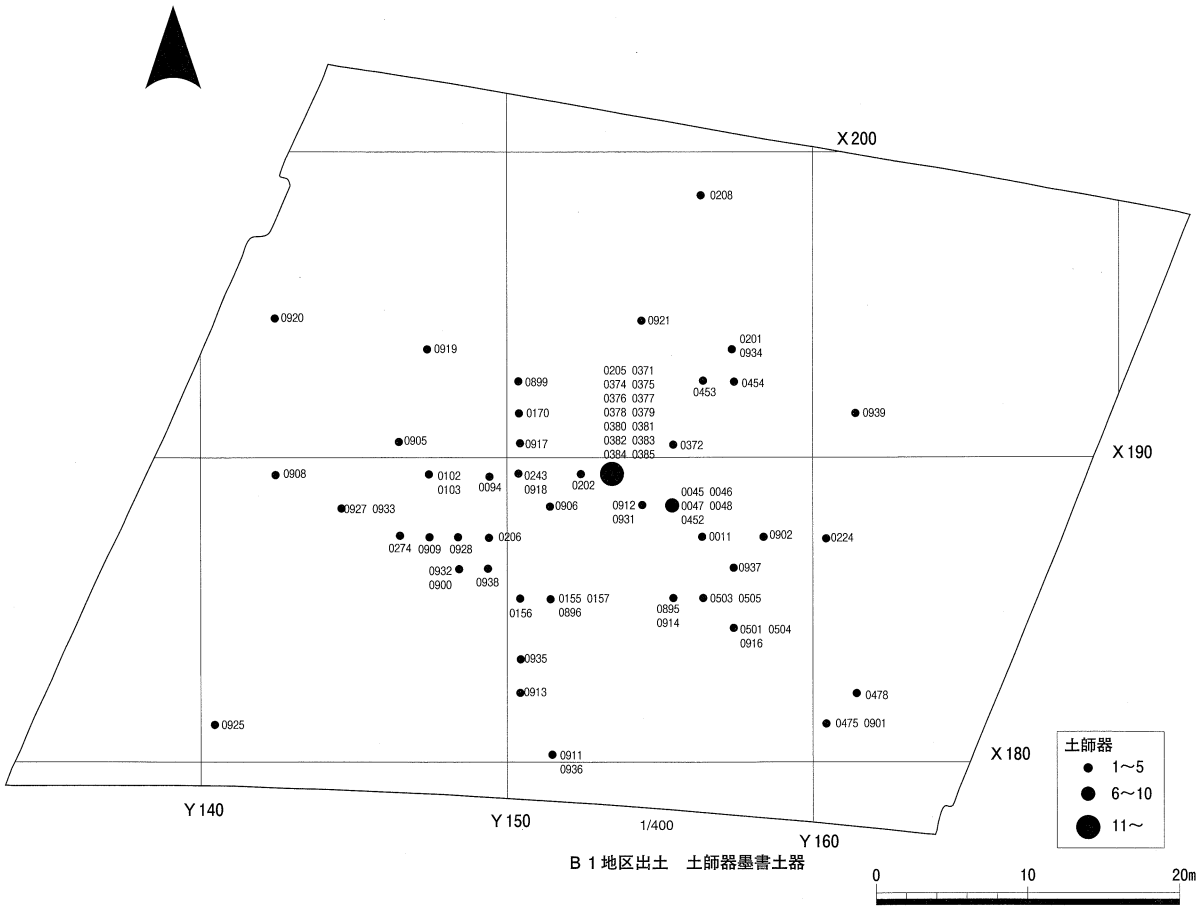
註１　富山市教育委員会　『富山県総合運動公園内遺跡群試掘調査概要Ⅱ』1989

〈参考文献〉

越前慶祐氏　「（２）墨書土器について」『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター　1994
中野由紀子　「任海宮田遺跡の墨書土器について－Ｂ１地区出土資料の紹介－」『富山考古学研究第４号』富山県文化新興財団　2001
中野由紀子　「任海宮田遺跡の墨書土器（2）－平成13年度出土資料の紹介－」『富山考古学研究第5号』富山県文化新興財団　2002
森田利枝　「任海宮田遺跡の墨書土器－平成14年度出土資料の紹介－」『富山考古学研究第6号』富山県文化新興財団　2003

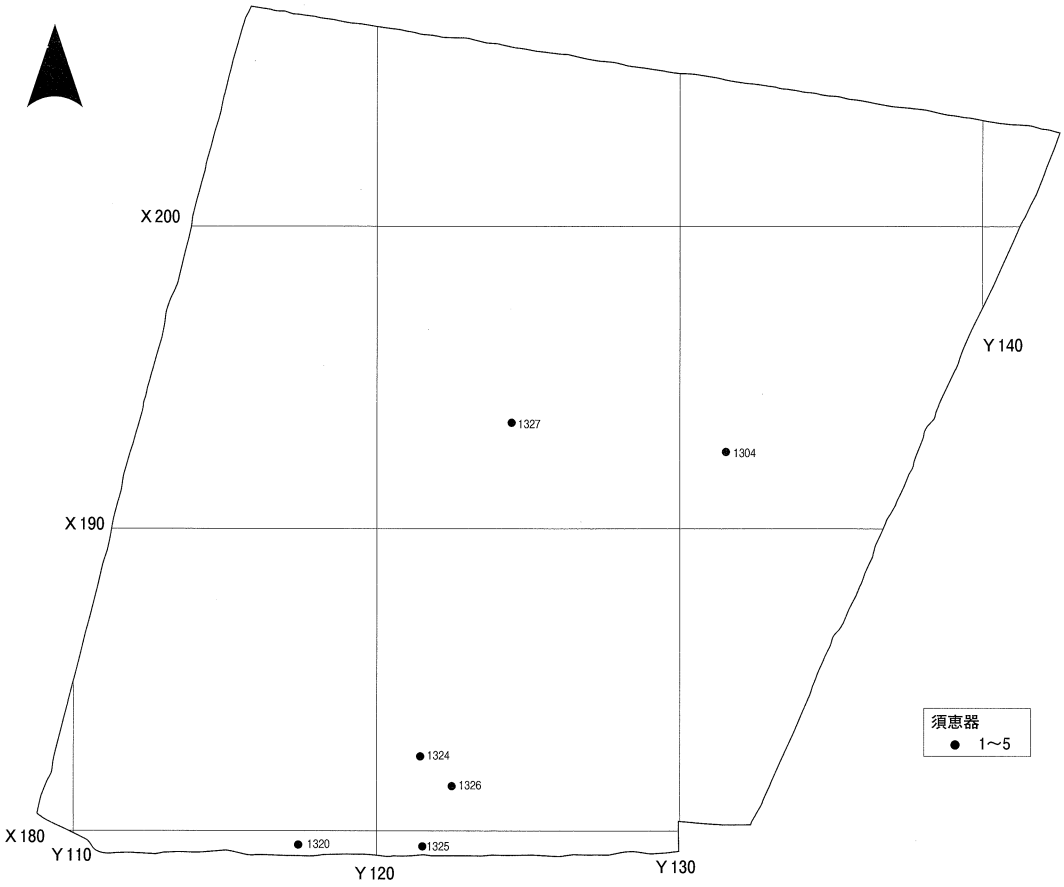


B１地区出土　須恵器墨書土器

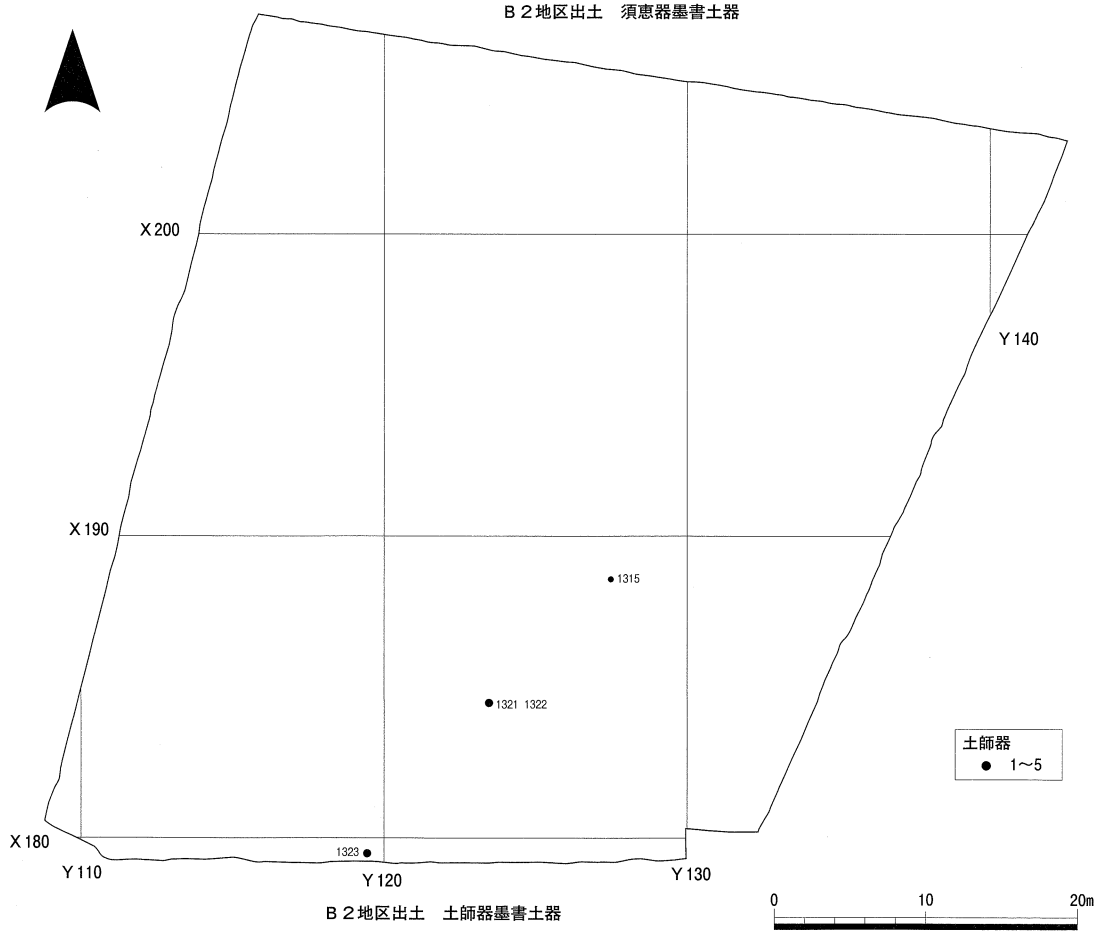


B１地区出土　土師器墨書土器

第５図　墨書土器の分布（１）

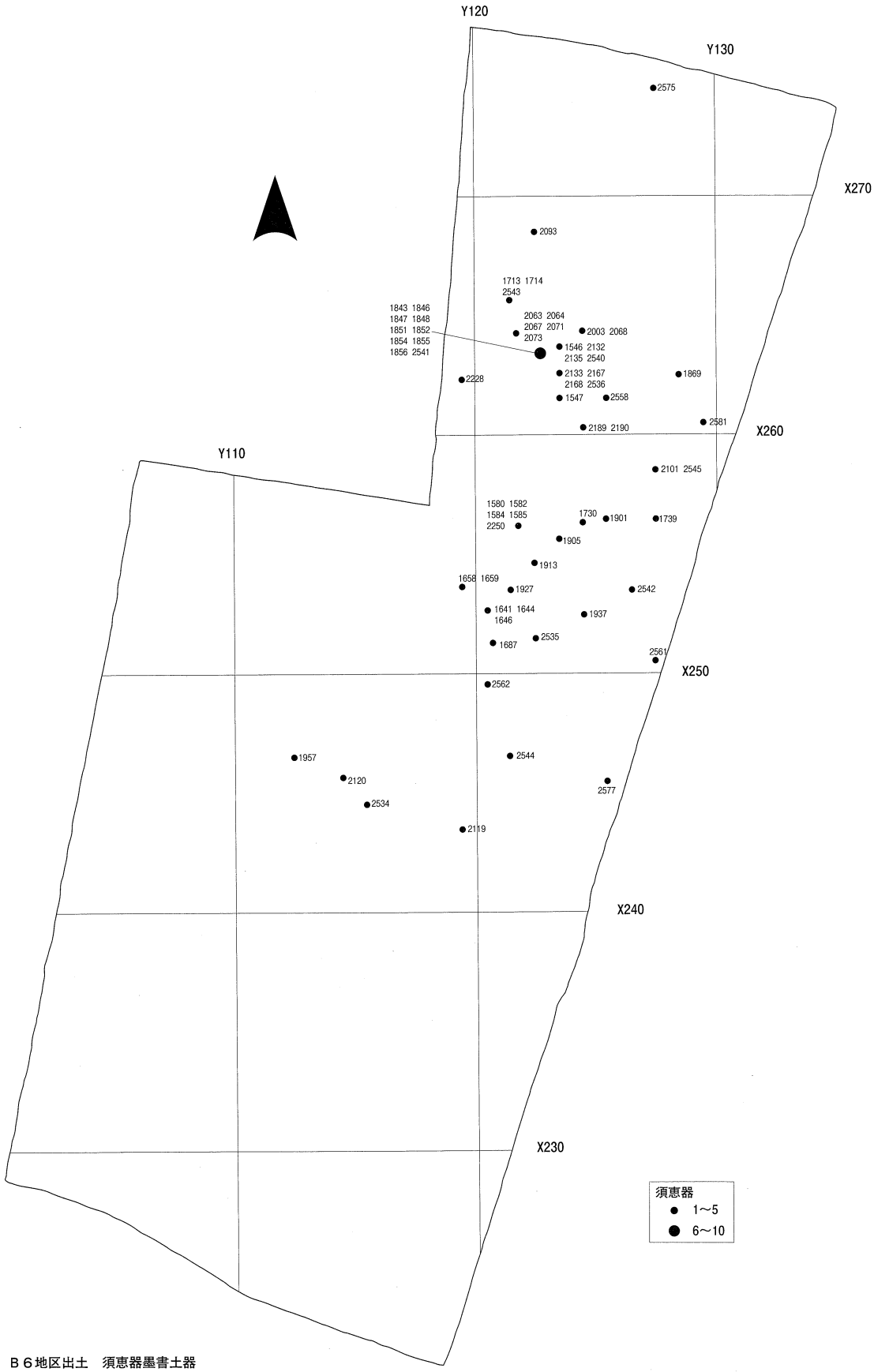


B２地区出土　須恵器墨書土器



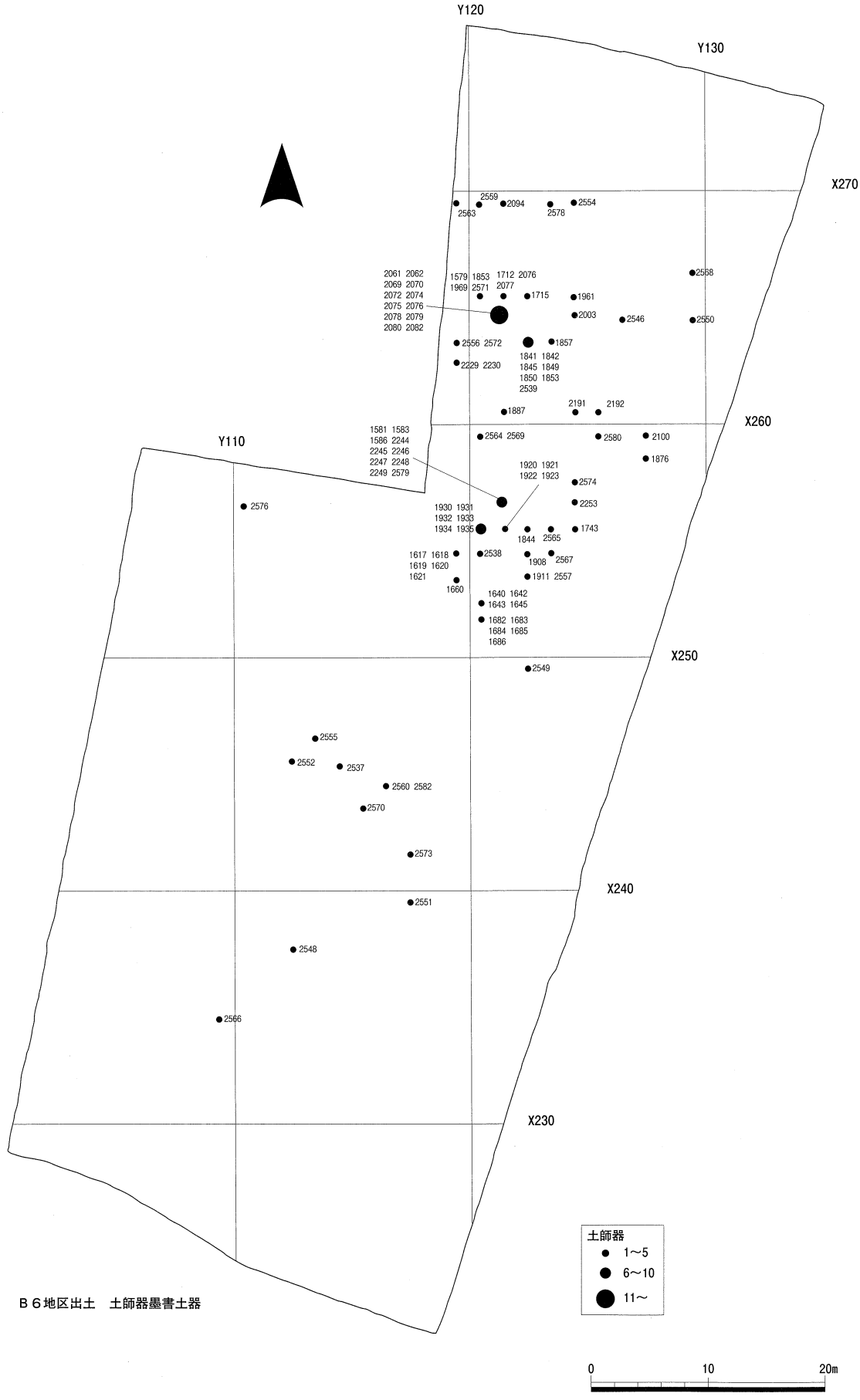
B２地区出土　土師器墨書土器

第６図　墨書土器の分布（２）



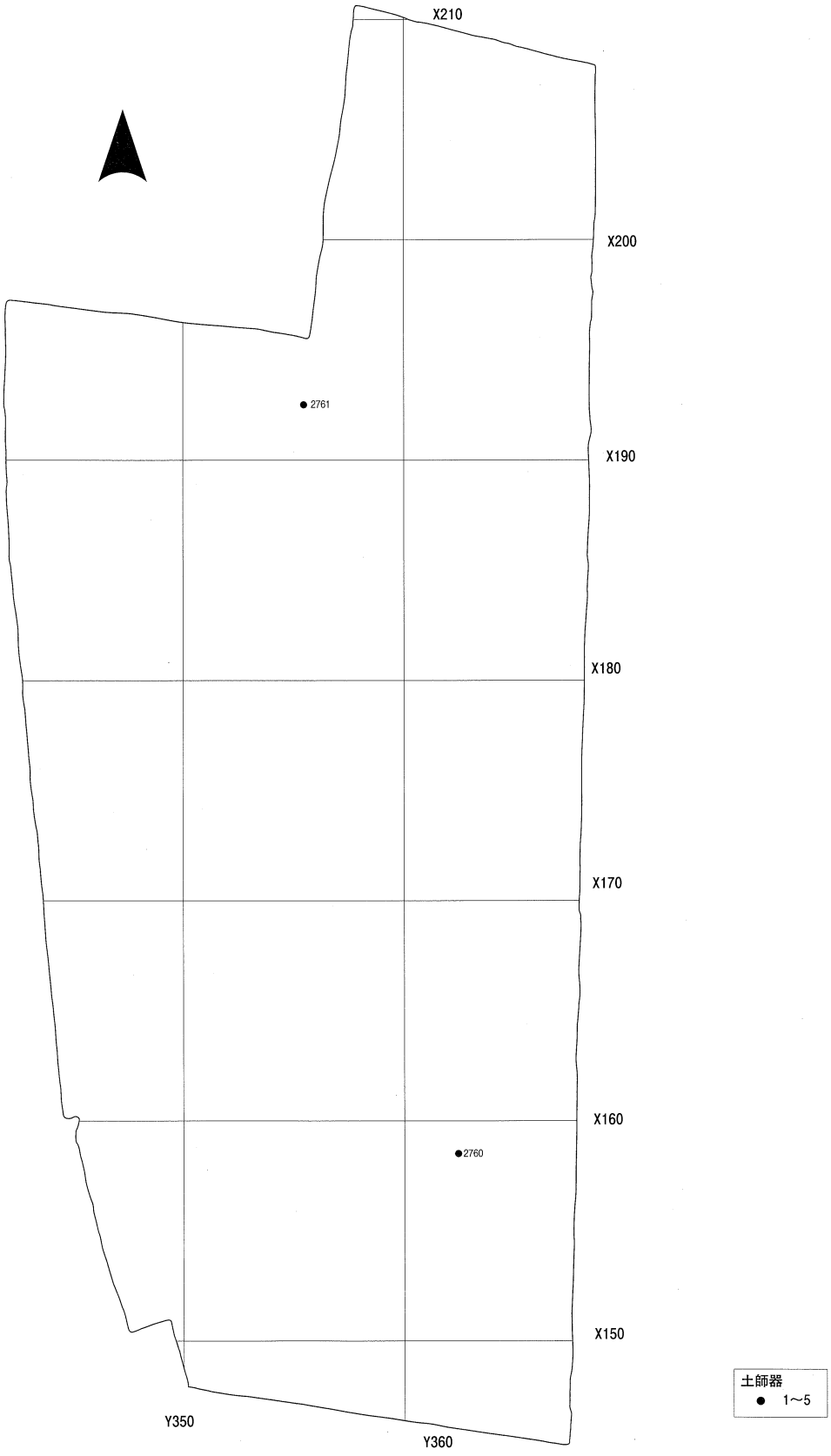
B６地区出土　須恵器墨書土器

第７図　墨書土器の分布（３）



B６地区出土　土師器墨書土器

第８図　墨書土器の分布（４）



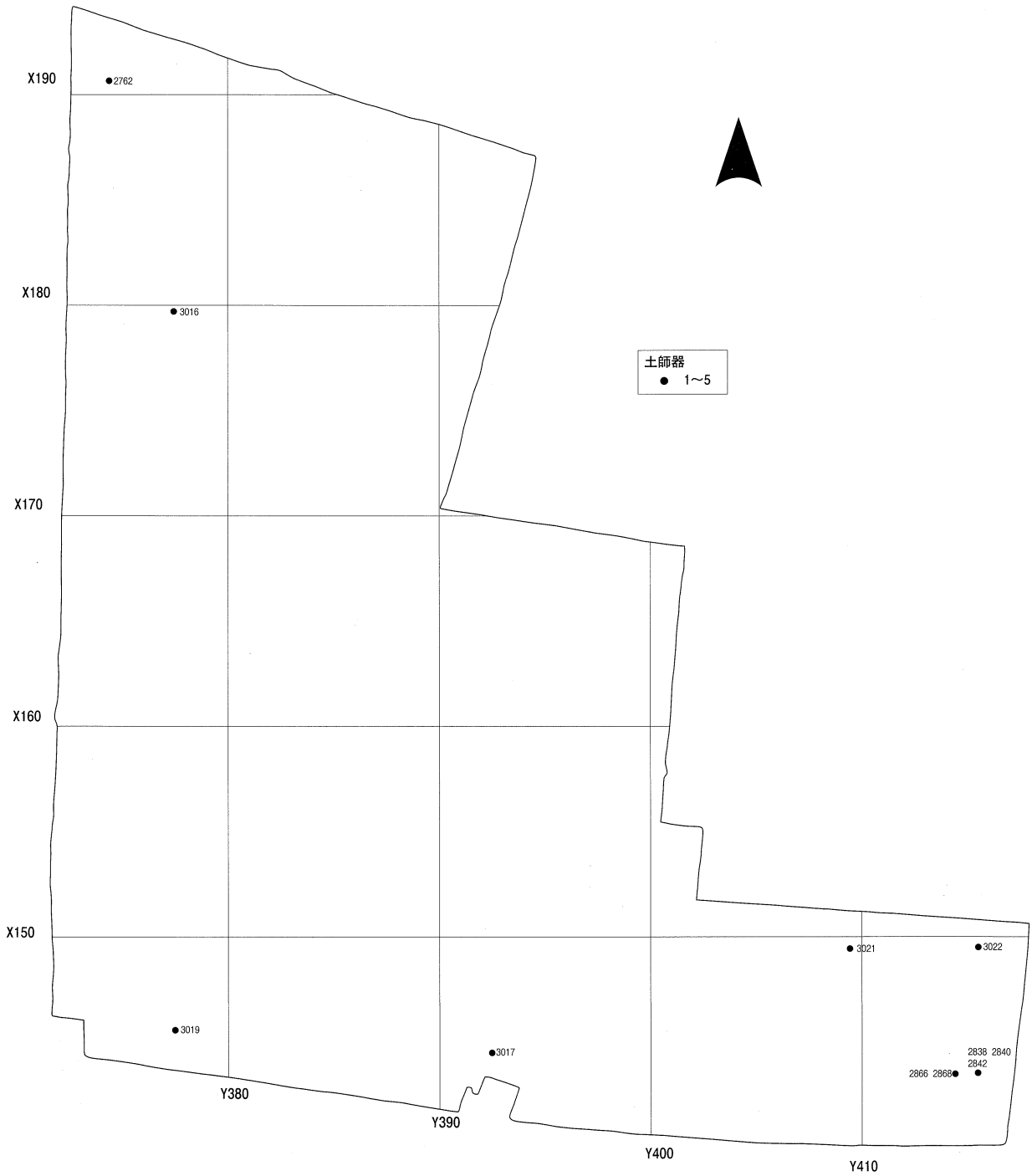
B12地区出土　土師器墨書土器

第９図　墨書土器の分布（５）

B13地区出土　須恵器墨書土器

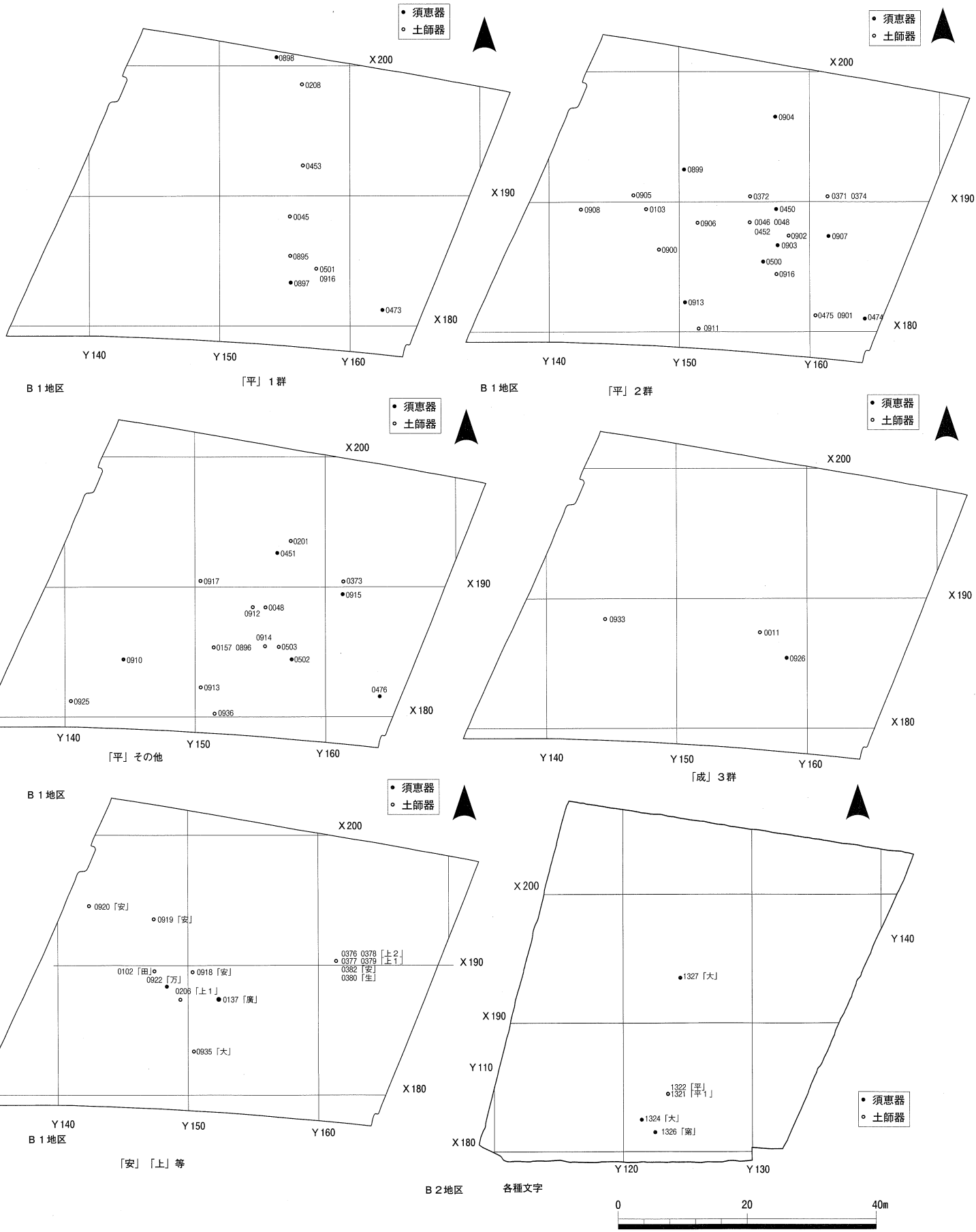
0　10　20m

第10図　墨書土器の分布（6）

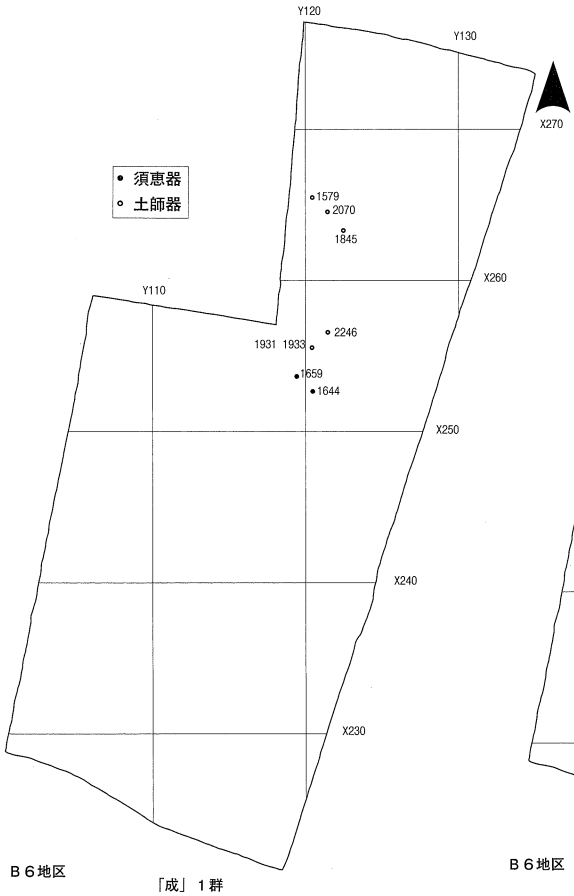


B13地区出土　土師器墨書土器

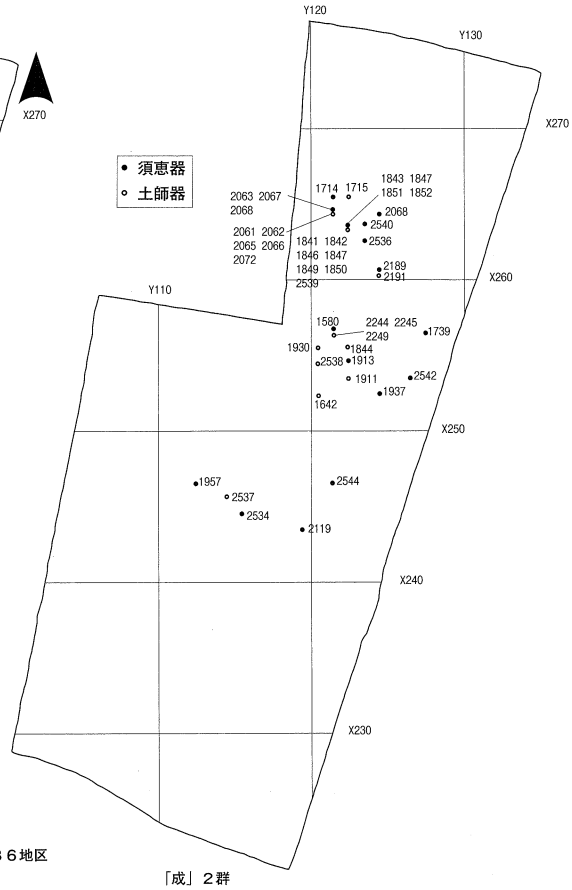
第11図　墨書土器の分布（7）



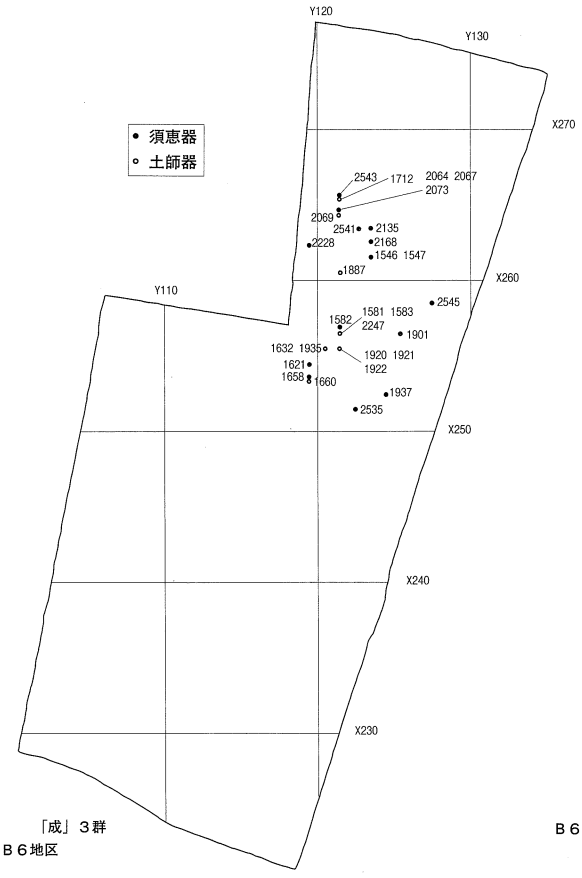
第12図　文字群の分布（１）



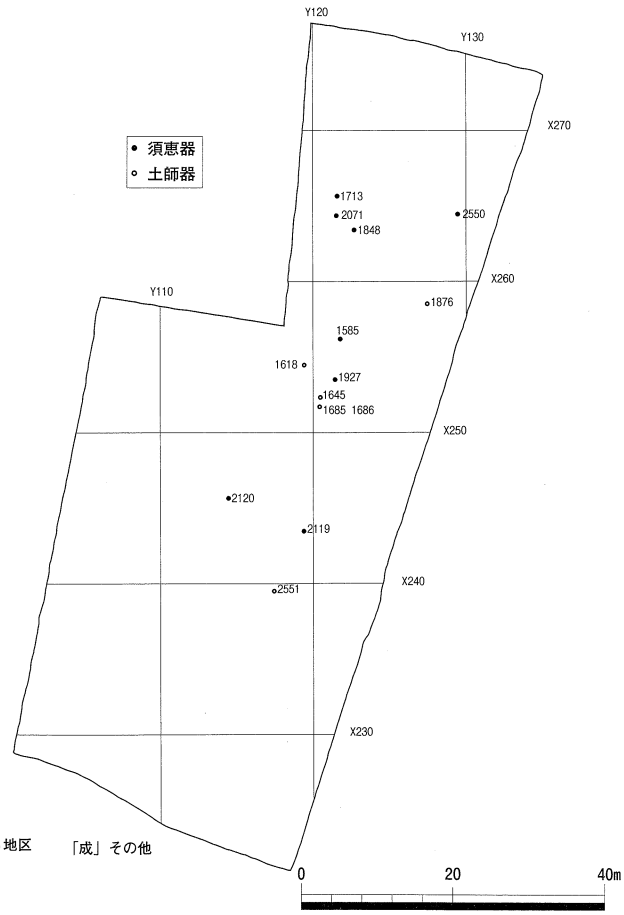
B６地区　「成」１群



B６地区　「成」２群

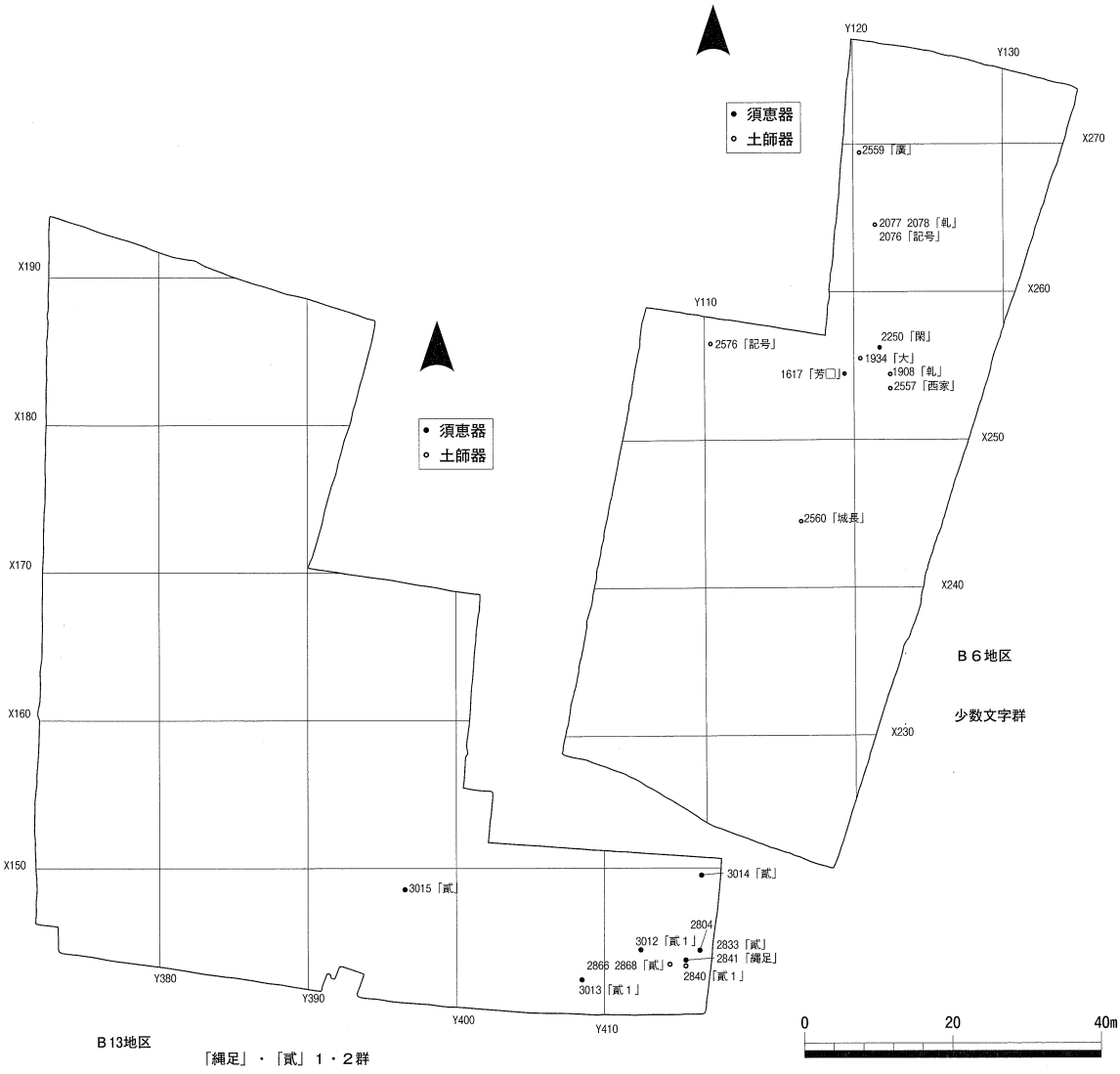


「成」３群
B６地区



B６地区　「成」その他

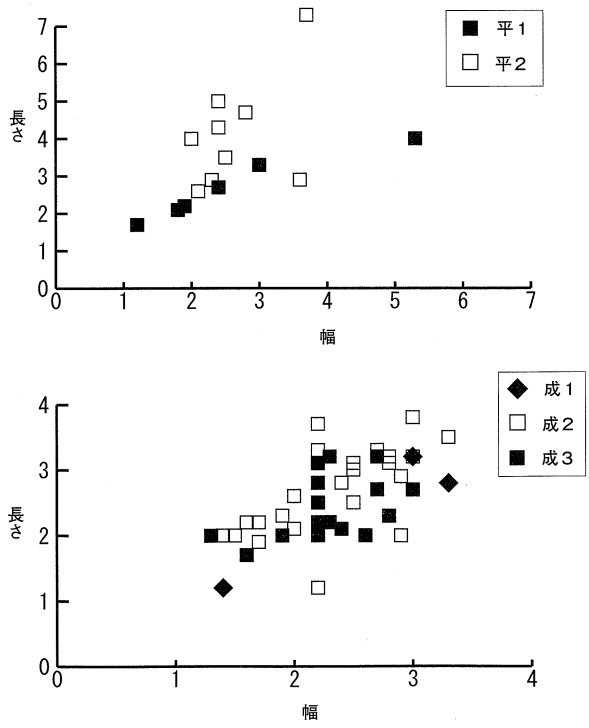
第13図　文字群の分布（２）



第14図　文字群の分布（３）

			Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期
西地区	平	分類１					
		分類２					
	上	分類１					
		分類２					
	安	分類１					
	成	分類１					
		分類２					
		分類３					
	大	分類１					
	乾	分類１					
東地区	貳	分類１					
		分類２					

第15図　時期別文字分布



第16図　文字別大きさ分布

表2　墨書文字一覧(1)

遺物番号	図面番号	文字写真	出土位置	種類	器種	文字	文字分類	文字の大きさ		施文字位置		胎土
								長さ	幅			
11	320	317	B1-SI01	土師器	椀A	成	2	3.3	2.2	外底・中央		5群
45	320	315	B1-SI02	土師器	椀A	平	1	3.3	3	外底・中央		5群
46	320	315	B1-SI02	土師器	椀A	平	2	2.9	3.6	外底・中央		5群
48	320	315	B1-SI02	土師器	椀A	平	2	4.3	−	外底・中央		2群
102	322	322	B1-SI03	土師器	椀A	田		1.5	2.4	体部・中央	正位	1群
103	322	315	B1-SI03	土師器	椀A	平	2	2.6	2.1	外底・中央		2群
137	323		B1-SP2013	須恵器	杯A	廣		3.2	3	外底・下方		4群
157	323	315	B1-SP2022	黒色土器	皿B	平	不明	−	−	外底・中央		1群
202	325		B1-SP2055	土師器	椀A	記号?		1.3	2.8	体部・中央		1群
206	325	320	B1-SP2058	土師器	椀	上	1	1.7	3.3	体部・中央	正位	1群
208	325	315	B1-SP2066	土師器	皿A	平	1	−	−	外底・上半		2群
371	329	315	B1-SX001	土師器	椀A	平	2	−	−	外底・中央		2群
372	329	315	B1-SX001	土師器	皿B	平	2	3.5	2.5	外底・中央		3群
373	329		B1-SX001	須恵器	杯蓋	平	不明	4.7	3	外天井・中央		1群
374	329	315	B1-SX001	土師器	椀A	平	2	−	−	外底・中央		5群
376	329	320	B1-SX001	土師器	椀	上	2	−	−	体部・中央	正位	1群
377	329	320	B1-SX001	土師器	椀A	上	1	1.2	1.8	外底・中央		5群
378	329	320	B1-SX001	土師器	椀	上	2	2.2	−	体部・中央	正位	3群
379	329		B1-SX001	赤彩土師器	椀A	上	1	1.1	2.5	体部・中央	正位	1群
380	329	321	B1-SX001	土師器	椀A	生		1.6	2	外底・中央		5群
382	329	320	B1-SX001	黒色土器	椀	安		−	−	体部・中央	横位	2群
450	331	315	B1-SD201	須恵器	杯A	平	2	7.3	3.7	外底・中央		1群
451	331		B1-SD201	須恵器	杯B	平	不明	3	−	外底・中央		4群
452	331	315	B1-SD201	赤彩土師器	椀A	平	2	4.7	2.8	外底・中央		1群
453	331	315	B1-SD201	土師器	椀A	平	1	1.7	1.2	外底・上半		5群
473	332		B1-SD217	須恵器	杯蓋	平	1	4	−	外底・右方		4群
474	332	315	B1-SD217	須恵器	皿B	平	2	−	2.6	外底・中央		3群
475	332	315	B1-SD217	赤彩土器	椀B	平	2	2.9	2.3	外底・中央		1群
476	332		B1-SD217	須恵器	杯A	平	不明	−	−	外底・中央		4群
500	332	316	B1-SD218	須恵器	杯蓋	平	2	−	−	外天井・中央		1群
501	332	316	B1-SD218	土師器	椀A	平	1	2.2	1.9	外底・中央		5群
895	344	316	B1	土師器	椀A	平	1	3.7	−	外底・中央		5群
896	344		B1	土師器	椀A	平	不明	−	−	外底・中央		5群
897	344		B1	須恵器	杯A	平	1	2.1	−	外底・下方		1群
898	344	315	B1	須恵器	杯B	平	1	4	5.3	外底・中央		1群
899	344		B1	土師器	椀A	平	2	−	−	外底・中央		5群
900	344	316	B1	土師器	椀A	平	2	−	−	外底・中央		5群
901	344	316	B1	土師器	椀A	平	2	−	−	外底・中央		3群
902	344		B1	土師器	?	平	2	−	−	体部・中央	横位	5群
903	344	316	B1	須恵器	杯B	平	2	−	−	外底・中央		1群
904	344	316	B1	須恵器	杯蓋	平	2	5	2.4	内天井・中央		4群
905	344	316	B1	赤彩土師器	皿B	平	2	4	2	外底・中央		1群
906	344	316	B1	赤彩土師器	椀B	平	2	4.3	2.4	外底・中央		1群
907	344	316	B1	須恵器	杯B	平	2	−	−	外底・中央		4群
908	344		B1	土師器	椀B	平	2	−	−	外底・中央		5群
910	344	316	B1	須恵器	杯A	平	不明	2.7	2.2	外底・中央		6群
911	345	316	B1	土師器	椀A	平	2	−	−	外底・中央		5群
912	345	316	B1	土師器	椀A	平	不明	−	−	外底・中央		3群
913	345		B1	土師器	椀A	平	2	3.1	−	外底・中央		5群
914	345	316	B1	土師器	椀A	平	不明	−	−	外底・中央		5群
915	345		B1	須恵器	杯A	平	不明	−	−	外底・左方		4群
916	345	315	B1	土師器	椀B	平	1	−	−	外底・中央		2群
918	345	320	B1	土師器	椀A	安		1.9	−	体部・中央	正位	5群
919	345	320	B1	土師器	椀	安		3.4	3.3	体部・中央	正位	1群
920	345	320	B1	黒色土器	椀	安		−	−	体部・中央	横位	5群
922	345	322	B1	須恵器	杯A	万		2.8	2.1	体部・中央	横位	1群
926	345	319	B1	須恵器	杯A	成	3					1群
933	345	317	B1	黒色土器	椀A	成	2	2	2.9	外底・中央		2群
935	345	320	B1	赤彩土師器	椀A	大		2.5	2.9	外底・中央		1群
1320	353		B2	須恵器	杯A	記号						4群
1321	353	316	B2	土師器	椀A	平	1	2.1	1.8	外底・中央		1群
1322	353	316	B2	土師器	椀A	平	不明					3群
1323	353	321	B2	土師器	椀A	生or千						2群
1324	353	320	B2	須恵器	杯A	大				外底・中央		4群

表3　墨書文字一覧(2)

遺物番号	図面番号	文字写真	出土位置	種類	器種	文字	文字分類	文字の大きさ		施文字位置		胎土
								長さ	幅			
1325	353	321	B2	須恵器	杯A	余		−	−	外底･左方		4群
1326	353	321	B2	須恵器	杯A	弟		2.8	2.4	外底･中央		4群
1327	353	320	B2	須恵器	杯A	大		−	−	外底･上方		1群
1454	356		B4	土師器	椀A	平	1	2.7	2.4	外底･中央		5群
1455	356	321	B4	土師器	椀	千		−	−	体部･中央	正位	1群
1457	356	319	B4	土師器	椀A	成	3	2	1.3	外底･上方		5群
1546	358		B6-SI14	須恵器	杯B	成	3	1.7	1.6	外底･左方		4群
1547	358		B6-SI14	須恵器	杯A	成	3	−	−	外底･上方		1群
1579	359		B6-SI15	赤彩土師器	椀A	成	1	−	−	外底･中央		1群
1580	359	317	B6-SI15	須恵器	杯B	成	2	−	−	外底･上方		6群
1581	359	319	B6-SI15	黒色土器	椀A	成	3	2	2.6	外底･中央		1群
1582	359		B6-SI15	須恵器	杯蓋	成	3	−	−	外天井･中央		1群
1583	359		B6-SI15	黒色土器	Ⅲ	成	3	−	−	体部･中央	逆位	2群
1585	359		B6-SI15	須恵器	杯A	成	不明	−	−	外底･中央		6群
1617	360	322	B6-SI16	土師器	ⅢB	芳□		−	1.4	外底･上方		5群
1618	360	319	B6-SI16	土師器	椀A	成	不明	3	1.7	外底･中央		3群
1621	360		B6-SI16	土師器	椀A	成	3	−	−	外底･中央		2群
1641	360	322	B6-SI17	須恵器	杯B	□成		−	−	外底･中央		4群
1642	360	317	B6-SI17	土師器	椀A	成	2	3.7	2.2	外底･中央		5群
1643	360	317	B6-SI17	土師器	椀A	成	2	3.2	3	外底･上方		5群
1644	360	317	B6-SI17	須恵器	杯A	成	1	−	−	外底･中央		1群
1645	360		B6-SI17	土師器	椀A	成	不明	−	−	外底･中央		2群
1658	361	317	B6-SI18	須恵器	杯蓋	成	3	2.3	2.8	外底･中央		1群
1659	361	317	B6-SI18	須恵器	杯A	成	1	2.7	−	外底･左方		1群
1660	361	319	B6-SI18	土師器	椀A	成	3	−	−	外底･中央		3群
1685	361		B6-SI19	土師器	椀A	成	不明	−	−	外底･中央		3群
1686	361		B6-SI19	土師器	ⅢB	成	不明	−	−	外底･中央		2群
1712	362		B6-SP2113	黒色土器	椀A	成	3	−	2.4	外底･中央		1群
1713	362		B6-SP2113	須恵器	杯A	成	不明	−	−	外底･中央		6群
1714	362		B6-SP2113	須恵器	杯A	成	2	1.4	−	外底･下方		4群
1715	362		B6-SP2114	赤彩土師器	椀A	成	2	−	−	外底･中央		1群
1739	363		B6-SP2134	須恵器	杯A	成	2	−	−	外底･中央		1群
1841	365		B6-焼成遺構	土師器	椀A	成	2	2.9	−	外底･右方		2群
1842	365		B6-焼成遺構	赤彩土師器	椀A	成	2	1.9	1.7	外底･左方		1群
1843	365	317	B6-焼成遺構	須恵器	杯A	成	2	3.1	2.8	外底･中央		6群
1844	367		B6-SK1259	土師器	椀A	成	2	3.3	2.7	外底･中央		3群
1845	365	317	B6-焼成遺構	赤彩土師器	ⅢB	成	1	3.2	3	外底･中央		1群
1846	365	319	B6-焼成遺構	須恵器	杯蓋	成	2	2.3	1.9	外天井･下方		4群
1847	365		B6-焼成遺構	須恵器	ⅢB	成	2	2.5	2.5	外底･中央		4群
1848	365		B6-焼成遺構	須恵器	杯A	成	不明	−	−	外底･中央		1群
1849	365	317	B6-焼成遺構	赤彩土師器	椀A	成	2	−	−	外底･中央		1群
1850	365	317	B6-焼成遺構	土師器	椀A	成	2	2.2	1.7	外底･右方		5群
1851	365		B6-焼成遺構	須恵器	杯A	成	2	−	−	外底･上方		1群
1852	365		B6-焼成遺構	須恵器	杯蓋	成	2	2.5	−	内天井･左方		1群
1876	366		B6-SK1175	赤彩土師器	椀A	成	不明	−	−	外底･中央		1群
1887	366		B6-SK1212	黒色土器	椀A	成	3	−	−	外底･中央		1群
1901	365		B6-SK1235	須恵器	杯A	成	3	2.2	−	外底･中央		1群
1905	367	322	B6-SK1249	須恵器	杯A	成□						6群
1908	367	321	B6-SK1253	土師器	椀	臥		−	−	体部･中央	正位	2群
1911	367	317	B6-SK1257	土師器	椀A	成	2	3	2.5	外底･中央		3群
1913	367	318	B6-SK1260	須恵器	杯蓋	成	2	2	1.5	内天井･左方		4群
1920	367	319	B6-SK1263	土師器	椀A	成	3	2.7	3	外底･中央		3群
1921	367	319	B6-SK1263	赤彩土師器	ⅢB	成	3	3.2	2.7	外底･中央		1群
1922	367	319	B6-SK1263	赤彩土師器	ⅢB	成	3	3.2	2.3	外底･中央		1群
1927	367		B6-SK1268	須恵器	杯A	成	不明	−	−			4群
1930	367	318	B6-SK1270	赤彩土師器	椀A	成	2	2	1.4	外底･中央		1群
1931	367	317	B6-SK1270	土師器	椀A	成	1	2.8	3.3	外底･中央		2群
1932	367	319	B6-SK1270	土師器	椀A	成	3	2.1	2.4	外底･中央		5群
1933	367		B6-SK1270	土師器	椀A	成	1	−	−	外底･中央		5群
1934	367	320	B6-SK1270	赤彩土師器	ⅢB	大		3	4.6	外底･中央		1群
1935	368		B6-SK1270	黒色土器	椀A	成	3	2.2	2.3	外底･中央		2群
1937	368	319	B6-SK1276	須恵器	杯B	成	3	1.9	−	外底･左方		1群
1957	368	318	B6-SK1321	須恵器	杯B	成	2	−	−	外底･中央		4群
2061	371	318	B6-SX211	土師器	椀A	成	2	2.6	2	外底･上方		2群

表4　墨書文字一覧(3)

遺物番号	図面番号	文字写真	出土位置	種類	器種	文字	文字分類	文字の大きさ		施文字位置		胎土
								長さ	幅			
2062	371	318	B6-SX211	土師器	杯A	成	2	3.1	2.5	外底・左方		4群
2063	371		B6-SX211	須恵器	皿B	成	2	2.9	2.9	外底・上方		6群
2064	371	319	B6-SX211	須恵器	杯A	成	3	2	2.2	外底・中央		6群
2065	371	318	B6-SX211	赤彩土師器	椀A	成	2	2.8	2.4	外底・中央		1群
2066	371	318	B6-SX211	赤彩土師器	皿B	成	2	3.2	3	外底・中央		1群
2067	371	318	B6-SX211	須恵器	杯B	成	2	−	−	外底・中央		4群
2068	371	318	B6-SX211	須恵器	杯A	成	2	3.8	3	外底・右方		6群
2069	371		B6-SX211	赤彩土師器	皿B	成	3	2	1.9	外底・中央		1群
2070	371	317	B6-SX211	土師器	椀	成	1	1.2	1.4	体部・中央	正位	2群
2071	371		B6-SX211	須恵器	杯B	成	不明	−	−	外底・中央		1群
2072	371	318	B6-SX211	土師器	椀A	成	2	−	−	体部・中央	横位	3群
2073	371		B6-SX211	須恵器	杯A	成	3	−	−	外底・中央		6群
2077	371	321	B6-SX211	黒色土器	椀	凩		−	−	体部・中央	正位	1群
2078	371	321	B6-SX211	黒色土器	椀	凩		2.2	2.4	体部・中央	正位	1群
2119	372		B6-SD284	須恵器	杯A	成	不明	−	−	外底・中央		1群
2120	372		B6-SD293	須恵器	杯B	成	不明	−	−	外底・中央		1群
2135	372		B6-SD310	須恵器	杯A	成	3	−	1.8	外底・左方		4群
2168	373		B6-SD317	須恵器	杯A	成	3	2.5	2.2	外底・中央		1群
2189	374	318	B6-SD318	須恵器	杯蓋	成	2	−	−	内天井・中央		1群
2191	374	318	B6-SD318	土師器	皿B	成	2	3.2	2.8	外底・中央		1群
2228	375		B6-SD322	須恵器	杯蓋	成	3	2.6	−	外天井・中央		6群
2244	375	318	B6-SD325	土師器	椀A	成	2	3.5	3.3	外底・右方		5群
2245	375		B6-SD325	土師器	椀A	成	2	2.2	1.6	外底・中央		5群
2246	375	317	B6-SD325	赤彩土師器	椀A	成	1	−	2.3	外底・左方		1群
2247	375	319	B6-SD325	赤彩土師器	皿B	成	3	2.8	2.2	外底・中央		1群
2249	375	318	B6-SD325	土師器	椀A	成	2	2.1	2	外底・中央		5群
2250	375		B6-SD325	須恵器	皿B	閑		3	2.5	外底・中央		6群
2534	381		B6	須恵器	杯A	成	2	−	−	外底・中央		1群
2535	381		B6	須恵器	杯B	成	3	2.7	2.7	外底・中央		1群
2536	382	318	B6	須恵器	杯B	成	2	−	−	外底・中央		4群
2537	382	318	B6	土師器	椀A	成	2	1.2	2.2	外底・中央		1群
2538	382	319	B6	黒色土器	椀A	成	2	3	−	外底・中央		2群
2539	382		B6	赤彩土師器	皿B	成	2	2.8	2.2	外底・中央		1群
2540	382		B6	須恵器	杯蓋	成	2	−	3	内天井・中央		1群
2541	382	319	B6	須恵器	杯蓋	成	3	2.2	2.2	外天井・下方		4群
2542	382		B6	須恵器	杯B	成	2	−	−	外底・中央		4群
2543	382	319	B6	須恵器	杯A	成	3	−	−	外底・中央		1群
2544	382		B6	須恵器	杯A	成	2	−	−	外底・中央		4群
2545	382	320	B6	須恵器	杯A	成	3	3.1	2.2	外底・中央		4群
2550	382		B6	土師器	椀A	成	不明	−	−	外底・中央		2群
2551	382		B6	赤彩土師器	椀A	成	不明	−	−	外底・中央		1群
2557	382	322	B6	土師器	椀A	西家		3.8	−	外底・中央		2群
2559	382	322	B6	土師器	椀A	廣		2.1	−	外底・中央		2群
2576	382		B6	土師器	椀	記号		−	−	体部・中央		2群
2803	387	321	B13-SI30	須恵器	杯蓋	貳	2	3.1	2.2	外天井・右方		1群
2833	388	321	B13-SI31	須恵器	杯蓋	貳	不明	−	−	内天井・中央		1群
2840	388	321	B13-SI31	土師器	椀A	貳	1	3	−	外底・左方		2群
2841	388	322	B13-SI31	須恵器	杯A	縄足		−	−	外底・中央		1群
2866	389		B13-SI32	赤彩土師器	椀A	貳	不明	2.8	−	外底・中央		2群
2868	389		B13-SI32	赤彩土師器	椀A	貳	不明	−	−	外底・中央		2群
3012	392		B13	須恵器	杯A	貳	1	−	−	外底・中央		1群
3013	392		B13	須恵器	杯A	貳	2	−	−	外底・中央		1群
3014	392		B13	須恵器	杯A	貳	不明	−	−	外底・中央		1群
3015	392		B13	須恵器	杯A	貳	不明	−	−	外底・右方		4群
3062	393	322	B14	須恵器	杯蓋	城長		4.4	2.8	外天井・下方		1群
3063	393		B14	赤彩土師器	椀A	城長		4.6	2	外底・中央		1群
3064	393	322	B14	須恵器	杯A	城長		5.6	−	外底・中央		1群

3　古代の環状土錘について

はじめに

人間は常に、「食欲」を追い求めるものである。その為に連動していく行動力は並大抵のことではない。そこで土錘を観察することによって、漁業の一端を垣間見れたらと思う。

任海宮田遺跡は、神通川と熊野川が合流する地点の南方約４kmに位置し、これらの河川により形成された複合扇状地上に存在している。この周辺環境は漁業が人々の生活にとって、重要な生業になっていたことが容易に想像できる。

特に食糧の多くを自然採取に頼っていた時代においてはなおさらであったはずである。現行民俗例や文献からはこのことが容易に想定できるのであるが、発掘調査による資料からは漁具の材質上の制約から、なかなかその実像が浮かび上って来ない。しかしその中で漁業の存在を裏付ける資料として最も残りが良く、研究可能なものが土錘である。

古代の土錘の出土については、県内でも約100数件遺跡で報告例があるが、各遺跡での出土点数が少ない為、特に注目されずに看過されてきた。しかし、古代における産業史および生活史の視点からも重要な遺物であり、古代漁業を研究する上で欠くことの出来ない資料である。

今回は古代の土錘の分類と、分布状況、計測値の法則性について検討していきたい。尚、土錘については平成12年度当初から筆者が注目していた遺物であり、本稿では古代の土錘について若干の考察を加え、今後の研究素材としたい。

a　出土傾向

平成12年度～14年度に任海宮田遺跡から出土した古代に属する土錘は、総点数は破片数で374点である。出土点数の内訳はＢ１地区で303点、Ｂ２地区１点、Ｂ４地区８点、Ｂ６地区38点、Ｂ８地区１点、Ｂ11地区３点、Ｂ12地区２点、Ｂ13地区18点を検出した。点数は圧倒的にＢ１地区の出土量が多く、このことは遺構の性格を考えるうえで興味深い傾向であろう。ただ、Ｂ１地区の遺構出土は39点に過ぎず、残りの264点が包含層出土である。一番多く出土した遺構はＳＸ201からの10点である。ＳＸ201は古代から中世にかけて存続しており、出土遺物も多種みられ比較的規模の大きい遺構である。包含層出土の遺物は出土地点にバラツキがみられる。またＢ１地区の総出土点数のうち77点が欠損品である。欠損の仕方はデーターとしては取っていないが、端部の欠損・真二つに縦に割れたものが多い。

b　形態分類

土錘の形態分類については、山本直人氏の形態分類を参考に作成した筆者の分類（紀要 第４号 2001・紀要 第６号 2003考）を基準にしていきたい。（形態分類図参考）

寸胴型・・・側縁部が直線的で円柱状をなし、平面形態が隅丸方形・隅丸長方形をなすもの。

樽型・・・側縁部がふくらむ形態のもの。　卵型・・・球状を呈するもの。

提灯型・・・両端部がすぼまり、胴部にかけてふくらんでいるもの。

a類・・・長さが幅の倍以上のもの。　　b類・・・長さが幅の３倍より短いもの。

c類・・・長さが幅の２倍より短いもの。　d類・・・長さが幅とほぼ等しいもの。

分類可能な土錘242点の中でみてみると、その形態の内訳は寸胴型b類６点（2.5％）、寸胴型c類28点（12％）、寸胴型d類２点（0.8％）、樽型a類１点（0.4％）、樽型b類30点（12％）、樽型c類164点（68％）、卵型b類２点（0.8％）、卵型c類７点（2.9％）、卵型d類１点（0.4％）、提灯型a類１点（0.4％）であり、樽型が195点で全体の80％を占めている。ついで寸胴型が36点で15％を占める。これらのことから古代の土錘では樽型を呈するものが大多数である傾向がみられる。Ｂ１地区の中で見ると樽型c類が144点と、圧倒的に多い。これは巻き網の漁法が主流かと思われる。巻き網とは、網の下辺を強く接地させるため重い重量の魚網錘を必要とする漁法で、主に流水域で用いられている。

c　重量と孔径

漁網の実態を知る為には、土錘の重量の具体的数値化が必要である。357点について集計したが、357点のうち完形品は55点である。完形品に限って土錘分布の傾向をみてみると50gを境に、重くなると数量が多くなり、130gを越えるものは極端に少なくなるという傾向がみられる。また、100gを越える土錘が出土している遺跡としては、報告書中に重量等を明記しているものが少ない為、県内では砂子田Ｉ遺跡、栗山楮原遺跡、打出遺跡、朝日貝塚、本江東遺跡となる。これらの遺跡の時期などから100gを越える土錘が出現するのは、平安時代以降と思われる。

土錘の孔径は、その属性のなかで重量についで重要な要素であり、漁網に装着される際その太さと密接な関係があると考えられる。孔径の測定部位を示したものが孔径測定部位図である。孔径cは半欠しているもので両端のうち一方しか測れないものについての測定部位である。孔径は0.4～1.7cmの範囲に分布し、重量が重くなるにつれて孔径も大きくなるという傾向が認められた。漁網の繊維の質と緊密にかかわっていたことが推測できる。

d　製作方法

製作方法は、粘土を芯になる棒材に巻き付けて引き抜いている。その際に、そのまま引き抜くか回転させて抜いているかは半割品の孔面に多くの細かな条痕が残るので、それを観察することによって判明できる。長軸方向は66点、短軸方向は126点であった。２つの製作方法を使用しているが、回転させて抜く方法が主流であったと思われる。一種類の魚網用の土錘を製作しようとした場合、網の下辺のロープの太さに合わせて芯になる棒材が選定される。同一の棒材を芯にして土錘を作れば、少なくとも内径は同一規格になる。多数出土したc類の孔径は約1.5mm～1.1mmで、焼き縮みを考慮すれば２cm前後の丸棒工具を芯にして、粘土を巻き付けて成形したことになる。また、軟質の段階で芯の棒が引き抜かれると孔面に波状の粘土のずれを生じ、引き抜かれた側の孔径は反対側に比してやや大きくなったり楕円形を呈するようになる。今回は孔径a・bの計測値に、２mm以上の差があるものはほとんどなかったので、比較的丁寧に製作されていたと考えられる。

e　数値的な法則性

これらの土錘について、孔径と重量の関係、幅と重量の関係、幅と長さの関係、個数と重量の関係について計測した。計測の目的は、数値的な法則性があるか否かを知るためである。各グラフとも点が集中するほど、近似した形状のものが多いことを示す。計測した結果、各計測値とも非常に似通った傾向を持っていることがうかがえる。全体の形状に関しても規格性の高い土錘が作られていた事になる。

おわりに

任海宮田遺跡で出土した土錘は規格性が高く、比較的丁寧に製作されていた。尚、本地域では確実なところ網漁業の本格的発展は、奈良・平安時代になって始まるものと考えられる。

今回は終始土錘の分類と分布について述べるに留まってしまい、不完全なものとなってしまった。今後は漁と密接にからみ合う漁場環境も視野に入れて、検討していきたい。

土錘は地味な資料であるが、生産・生活と密接に関連する重要遺物としての認識をもって発掘調査に当たっていきたい。　（細辻　真澄）

〈参考文献〉

大沼芳幸　1990「6　正伝寺南遺跡出土の魚網錘について」『一般国道161号線（高島バイパス）建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ―正伝寺南遺跡―（本文編）』滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大沼芳幸　1992「5　人はそれでもタンパクシツを欲した―土錘出土量から見た近江における網漁の展開・特に中世―」『紀要　第5号』財団法人　滋賀県文化財保護協会

大沼芳幸　1992「魚にみる古代人の食文化」『湖の国の歴史を読む』

関　雅之　1990「古代細型管状土錘考」『北越考古学　第3号』北越考古学研究会

新湊市教育委員会　2000　『本江東遺跡発掘調査概要』

富山県埋蔵文化財センター　1990　『栗山楮原遺跡・南中田A遺跡・任海鎌倉遺跡・南中田C遺跡』

富山県埋蔵文化財センター　1991　『南中田D遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター　1993　『任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡』

富山県埋蔵文化財センター　1994　『吉倉B遺跡』

富山県埋蔵文化財センター　1996　『任海宮田遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター　1997　『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

富山市教育委員会　1996　『富山市任海宮田遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会　2004　『富山市打出遺跡発掘調査報告書』

氷見市教育委員会　1996　『朝日貝塚Ⅱ』

氷見市教育委員会　1997　『朝日貝塚Ⅲ』

婦中町教育委員会　1995　『中名Ⅱ遺跡発掘調査報告』

婦中町教育委員会　2004　『富山県婦中町砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』

婦中町教育委員会　2005　『富山県婦中町砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』

松井　章　1986　「古代日本海沿岸地方と『サケ・マス論』」『季刊　考古学　第15号』

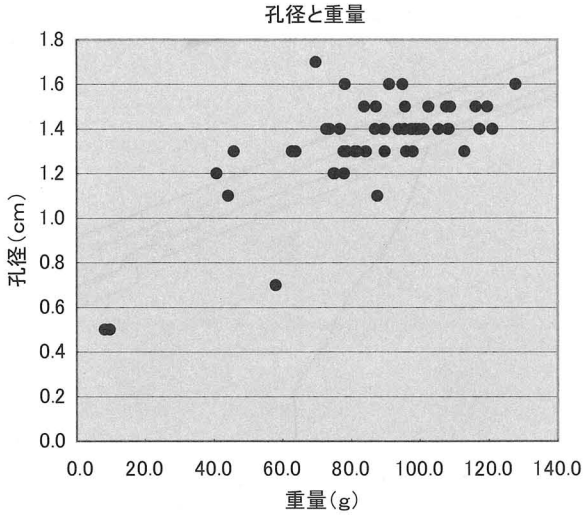
山本直人　1986　「石川県における古代中世の網漁業の展開」『石川考古学研究会々誌　第29号』石川考古学研究会

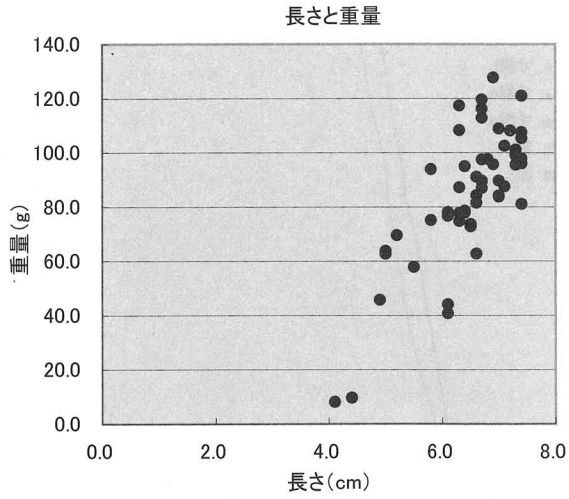
山本直人　1988　「北陸地方の漁網錘」『季刊　考古学　第25号』

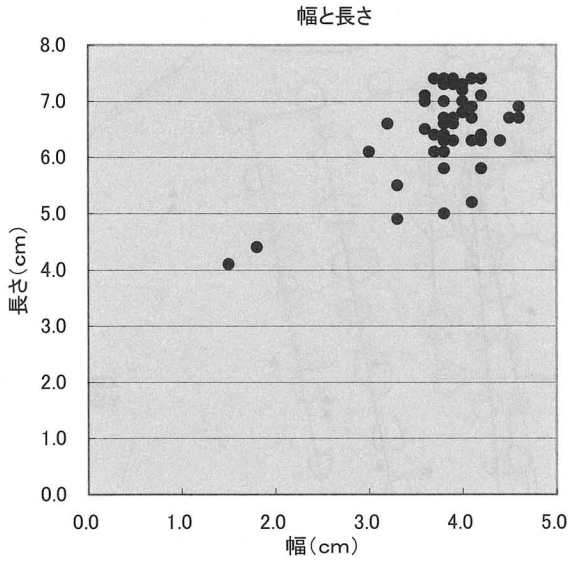
和田晴吾　1982　「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』　小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会

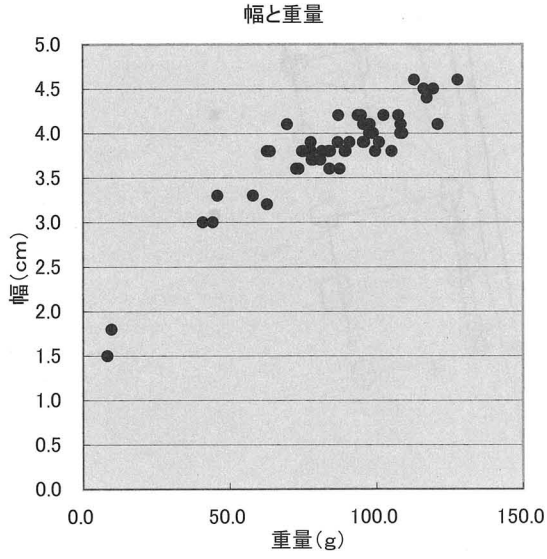
第1図　B1地区出土土錘分布図（1）

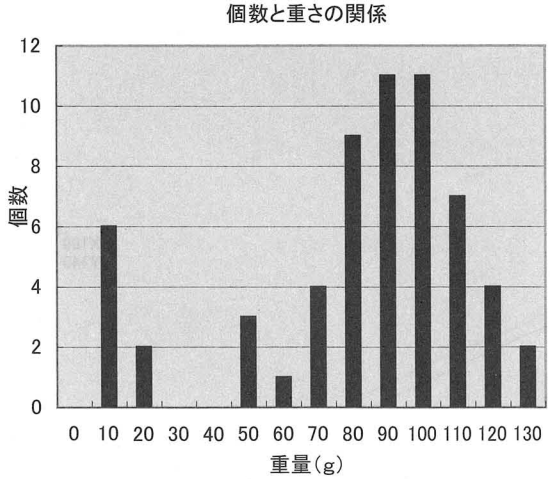
第2図　B1地区出土土錘分布図（2）

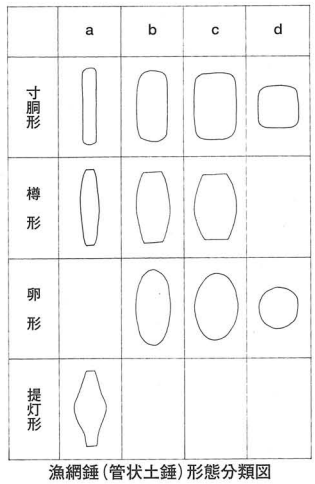




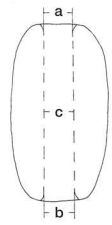








漁網錘(管状土錘)形態分類図



孔径測定部位図

表1　土錘一覧表(1)

遺物番号	遺構番号	出土地点	孔径 a·b·c(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	残存	分類	内面調整	備考
50	B1-SI02		1.5 1.5 (1.4)	7.0	3.6	(77.8)	9/10	樽c	横	
95	B1-SI04		(1.3) 1.3 1.3	4.6	2.8	(33.0)	2/3	寸胴c	横	
96	B1-SI04		1.4 - 1.5	(3.8)	3.7	(28.9)	1/2	寸胴d	横	
112	B1-SI07		1.2 1.2 (1.2)	7.3	4.1	(101.5)	14/15	樽c	横	
113	B1-SI07		- - (1.0)	(2.6)	(2.2)	(4.7)	1/4	不明	不明	
114	B1-SI07		- - (0.9)	(5.5)	2.8	(12.8)	1/2	不明	縦	
122	B1-SP2001		(1.1) (1.6) 1.4	(6.4)	4.1	(73.5)	7/8	樽c	横	
124	B1-SP2003		(1.4) (1.3) (1.4)	6.6	4.0	(47.8)	1/2	樽c	横	
126	B1-SP2004		1.3 1.3 (1.3)	4.8	2.9	(33.2)	9/10	寸胴c	縦	
135	B1-SP2012		1.3 1.3 (1.2)	6.9	3.6	(76.2)	19/20	樽c	不明	
141	B1-SP2019		1.4 1.4 (1.4)	5.8	4.2	93.8	完形	樽c	横	
142	B1-SP2019		(1.3) 1.3 (1.3)	5.9	3.2	(48.0)	9/10	寸胴c	不明	
159	B1-SP2024		(1.4) 1.3 (1.4)	7.4	3.8	(85.5)	19/20	樽c	横	
196	B1-SP2049		1.5 1.5 (1.5)	6.7	4.1	(96.7)	9/10	樽c	不明	
197	B1-SP2049		1.4 1.4 (1.3)	7.4	3.8	105.3	完形	樽c	不明	
203	B1-SP2055		1.4 1.4 (1.3)	6.5	3.6	73.6	完形	樽c	不明	
204	B1-SP2055		(1.1) (1.1) (1.1)	7.4	3.6	(68.2)	7/8	樽b	横	
234	B1-SK1044		1.2 (1.2) 1.3	6.2	3.9	(56.2)	5/6	樽c	不明	
237	B1-SK1049		(1.2) 1.2 (1.2)	5.8	4.0	(71.5)	7/8	樽c	縦	
238	B1-SK1052		- - (1.0)	7.0	3.3	(30.3)	1/2	樽b	縦	
244	B1-SP2056		1.5 (1.4) (1.4)	5.8	3.6	(49.5)	9/10	寸胴c	不明	
248	B1-SK1057		1.3 - (1.3)	6.2	3.7	(62.3)	9/10	樽c	横	
249	B1-SK1057		1.5 1.6 (1.4)	6.9	4.1	95.6	完形	樽c	横	
253	B1-SK1061		1.3 (1.2) 1.3	6.2	3.7	(62.3)	1/2	樽c?	不明	
269	B1-SK1085		0.4 0.4 (0.4)	3.9	2.6	(30.4)	19/20	寸胴c	不明	
395	B1-SX201		1.4 1.4 (1.4)	6.7	4.1	97.5	完形	樽c	不明	
396	B1-SX201		1.4 1.3 (1.4)	6.8	4.0	97.7	完形	樽c	不明	
397	B1-SX201		1.1 1.1 (0.9)	7.1	3.6	87.6	完形	樽c	横	体部外面に煤付着·摩擦痕有
398	B1-SX201		(0.9) (0.9) (0.9)	5.5	2.1	(22.6)	9/10	寸胴b	不明	
399	B1-SX201		(1.2) (1.1) 1.3	6.7	3.3	(35.1)	1/2	樽b	縦	
400	B1-SX201		1.3 - (1.3)	(4.3)	3.2	(31.9)	9/10	樽c	不明	
401	B1-SX201		(1.1) 1.3 (1.2)	7.6	4.1	(106.7)	19/20	樽c	横	
402	B1-SX201		1.5 1.4 (1.4)	7.4	4.1	121.1	完形	樽c	横	
403	B1-SX201		- - 1.3	(6.2)	3.9	(48.1)	1/2	卵c	縦	体部外面に縦方向の摩擦痕有
404	B1-SX201		- - (1.2)	(6.6)	3.3	(44.4)	7/8	樽b	不明	
408	B1-SX203		(1.4) 1.4 (1.4)	7.1	3.6	(79.8)	7/8	樽c	不明	
430	B1-SX204		- 1.3 (1.3)	7.0	3.5	(57.3)	9/10	樽c	不明	
456	B1-SD205		(0.9) - -	(4.4)	(2.5)	(9.6)	1/4	不明	不明	
480	B1-SD217		- 1.3 (1.2)	(4.2)	2.7	(25.2)	9/10	寸胴c	不明	
1010	B1	X197Y158	(1.2) (1.2) 1.2	(5.3)	(2.4)	(15.4)	1/3	寸胴b	縦	
1011	B1	X198Y157	1.3 (1.1) (1.2)	5.1	2.5	(22.8)	6/7	寸胴b	不明	
1012	B1	X198Y157	(1.2) (1.2) (1.2)	6.3	3.0	(28.0)	1/2	樽b	縦	
1013	B1	X181Y156	- (1.4) (1.3)	7.0	2.9	(43.9)	7/8	寸胴b	不明	
1014	B1	X185Y148	1.4 - (1.4)	7.5	3.4	(63.4)	9/10	寸胴b	横	
1015	B1	X185Y151	1.3 1.4 (1.3)	7.0	3.4	(66.8)	9/10	寸胴b	横	
1016	B1	X201Y152	- - 1.0	4.7	2.2	(11.5)	1/3	樽b	不明	
1017	B1	X189Y158	(1.0) - (0.9)	5.2	(2.2)	(11.1)	1/4	寸胴b?	不明	
1018	B1	X194Y154	0.4 - 0.5	4.8	2.1	(18.5)	19/20	樽b	不明	体部外面に縦方向の摩擦痕有
1019	B1	X201Y155	1.1 1.2 (1.2)	6.1	3.0	44.2	完形	樽b	不明	
1020	B1	X201Y151	1.2 1.2 (1.2)	6.1	3.0	40.8	完形	樽b	不明	
1021	B1	X193Y144	- (1.4) 1.3	(5.7)	3.2	(34.6)	1/2	卵b?	縦	
1022	B1	X192Y149	- (1.3) 1.3	(6.5)	3.4	(34.0)	1/3	樽c	横	
1023	B1	X196Y143	1.2 - (1.2)	(6.6)	2.5	(36.4)	6/7	樽b	不明	
1024	B1	X196Y154	1.3 (1.1) (1.1)	7.2	2.9	(42.4)	6/7	樽b	不明	
1025	B1	X190Y152	1.3 1.3 (1.3)	6.6	3.2	62.7	完形	樽b	不明	
1026	B1	X192Y148	1.2 - 1.2	6.7	2.9	(24.8)	1/3	樽c	縦	
1027	B1	X195Y145	1.4 1.3 (1.3)	6.6	3.2	(63.9)	8/9	樽b	不明	
1028	B1	X198Y154	(1.4) (1.3) (1.3)	6.8	3.3	(39.3)	7/8	樽b	不明	
1029	B1	X196Y156	(1.2) - (1.2)	(6.9)	3.2	(38.3)	6/7	樽b	縦	
1030	B1	X195Y149	1.5 - (1.4)	(6.5)	3.5	(52.6)	6/7	樽c?	横	

表2　土錘一覧表(2)

遺物番号	遺構番号	出土地点	孔径 a·b·c(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	残存	分類	内面調整	備考
1031	B1	X187Y149	1.2 (1.2) (1.1)	7.1	3.2	(51.5)	9/10	樽b	不明	
1032	B1	X189Y155	1.3 (1.2) (1.3)	7.3	3.6	(69.6)	9/10	樽b	不明	
1033	B1	X195Y143	1.3 (1.2) (1.2)	7.1	3.4	(58.6)	7/8	樽b	不明	
1034	B1	X196Y146	- - (1.1)	7.4	3.3	(40.5)	1/3	樽b?	縦	
1035	B1	X190Y151	1.3 1.4 (1.3)	7.4	3.5	(84.6)	8/9	樽b	横	
1036	B1	X187Y145	1.6 1.4 (1.4)	7.5	3.7	(80.4)	8/9	樽b	不明	
1037	B1	X196Y146	1.6 - (1.5)	7.5	3.4	(58.2)	7/8	樽b	横	
1038	B1	X190Y150	1.3 1.2 (1.2)	7.2	3.4	(72.7)	7/8	樽b	不明	
1039	B1	X201Y155	- (1.5) 1.6	8.2	3.6	(66.6)	6/7	樽b	不明	
1040	B1	X195Y146	(1.2) - 1.3	6.3	3.0	(28.6)	1/2	樽b	縦	
1041	B1	X195Y156	- - (1.1)	5.1	(2.5)	(18.4)	1/8	不明	不明	
1042	B1	X188Y162	0.8 0.7 (0.7)	4.6	2.1	(19.5)	8/9	卵b	不明	
1043	B1	X188Y162	1.2 1.2 (1.2)	5.3	2.7	(26.2)	7/8	寸胴c	不明	
1044	B1	X193Y153	- (1.3) (1.3)	(5.0)	3.0	(29.7)	7/8	寸胴c	不明	
1045	B1	X189Y152	1.3 1.3 (1.3)	4.9	3.3	45.8	完形	寸胴c	横	
1046	B1	X189Y158	1.4 (1.3) (1.3)	5.3	3.9	(76.7)	9/10	寸胴c	不明	
1047	B1	X182Y154	1.3 - (1.3)	6.3	3.5	(73.0)	7/8	寸胴c	横	
1048	B1	X185Y150	1.4 1.4 (1.5)	6.4	3.5	(49.3)	9/10	寸胴c	横	
1049	B1	X186Y151	1.4 (1.5) (1.4)	6.6	3.5	(49.8)	7/8	寸胴c	不明	
1050	B1	X185Y150	1.5 1.4 (1.3)	6.1	3.4	(59.5)	9/10	寸胴c	不明	
1051	B1	X189Y159	1.5 1.5 (1.6)	6.3	3.8	(76.3)	9/10	寸胴c	横	
1052	B1	X188Y158	1.4 1.4 (1.4)	6.6	3.6	(81.9)	9/10	寸胴c	横	体部外面一部焼けて、剥離している
1053	B1	X193Y153	(1.3) 1.2 (1.3)	6.6	3.4	(73.6)	9/10	寸胴c	不明	
1054	B1	X187Y156	1.3 - (1.2)	5.8	3.8	(67.7)	7/8	寸胴c	不明	
1055	B1	X195Y160	1.7 1.6 (1.6)	6.1	3.7	78.1	完形	樽c	不明	
1056	B1	X193Y153	(1.0) 1.2 (1.1)	5.9	3.9	(79.8)	9/10	寸胴c	不明	
1057	B1	X196Y144	(1.3) (1.4) (1.4)	6.6	3.8	(34.9)	1/3	樽c	縦	
1058	B1	X189Y148	1.4 1.4 (1.4)	6.3	4.1	108.3	完形	寸胴c	横	
1059	B1	X185Y160	1.4 1.4 (1.4)	6.7	3.9	86.9	完形	樽c	横	
1060	B1	X186Y149	1.4 1.5 (1.4)	6.8	3.9	(84.6)	7/8	寸胴c	横	
1061	B1	X190Y148	1.6 1.6 (1.6)	6.6	3.9	91.0	完形	寸胴c	横	
1062	B1	X182Y154	1.4 1.5 (1.4)	7.3	4.0	(93.2)	9/10	寸胴c	横	
1063	B1	X188Y154	1.5 (1.3) 1.3	7.3	3.8	(83.6)	4/5	寸胴c	横	
1064	B1	X189Y155	1.4 1.6 (1.5)	7.3	3.9	101.1	完形	寸胴c	不明	
1065	B1	X188Y156	1.5 1.5 (1.5)	7.4	4.2	107.6	完形	樽c	横	
1066	B1	X189Y148	1.4 1.5 (1.3)	7.2	4.0	108.2	完形	寸胴c	横	体部外面に紐を巻いた痕有。
1067	B1	X193Y143	- - 0.9	3.9	2.2	(10.9)	1/4	寸胴c	不明	
1068	B1	X179Y162	1.3 1.3 (1.3)	7.5	3.8	(89.6)	7/8	樽c	不明	
1069	B1	X186Y156	1.2 - (1.2)	5.0	3.0	(32.4)	7/8	樽c	横	
1070	B1	X190Y155	1.3 1.4 (1.3)	5.3	3.0	(35.3)	9/10	樽c	横	
1071	B1	X190Y150	1.4 - (1.3)	4.6	3.3	(36.2)	3/4	樽c	不明	
1072	B1	X190Y150	1.2 1.2 (1.2)	4.6	2.9	(29.8)	7/8	樽c	不明	
1073	B1	X194Y153	1.4 - 1.3	5.1	3.2	(28.5)	1/2	樽c	不明	
1074	B1	X194Y154	(1.7) 1.7 (1.6)	5.0	3.6	(52.9)	9/10	樽c	横	体部外面に縦·横方向の摩擦痕有
1075	B1	X190Y155	1.5 - 1.3	4.9	3.0	(28.7)	1/3	樽c	不明	
1076	B1	X191Y163	- 1.4 1.4	5.3	3.0	(39.3)	7/8	樽c	不明	
1077	B1	X196Y151	1.5 - (1.5)	5.1	3.8	(56.1)	7/8	樽c	横	
1078	B1	X188Y152	1.3 1.3 (1.2)	5.0	3.8	63.8	完形	樽c	横	
1079	B1	X190Y155	1.5 - (1.4)	5.4	3.3	(38.4)	7/8	樽c	横	
1080	B1	X187Y148	1.4 - (1.2)	(5.7)	3.2	(28.4)	1/3	樽c?	横	
1081	B1	X201Y155	- 1.1 (1.1)	(5.6)	3.1	(36.5)	6/7	樽c	縦	
1082	B1	表採	1.3 - (1.3)	(5.6)	3.5	(43.7)	6/7	樽c	不明	
1083	B1	X189Y153	1.4 (1.5) (1.4)	5.6	3.2	(48.8)	9/10	樽c	不明	
1084	B1	X189Y155	(1.2) 1.4 (1.3)	6.1	3.1	(55.3)	9/10	樽c	横	
1085	B1	X190Y145	1.3 1.3 (1.2)	5.7	3.4	(48.4)	9/10	樽c	不明	
1086	B1	X201Y155	- 1.3 (1.2)	6.2	3.3	(52.2)	7/8	樽c	横	
1087	B1	X188Y150	1.4 (1.3) 1.4	6.2	3.3	(37.9)	2/3	樽c	不明	
1088	B1	X183Y150	1.6 - (1.4)	5.3	3.9	(51.2)	1/2	樽c	横	
1089	B1	X190Y150	1.4 1.3 (1.4)	6.1	3.5	(44.9)	7/8	樽c	不明	
1090	B1	X195Y145	(1.5) - (1.4)	5.9	3.8	(59.7)	7/8	樽c	不明	

表3　土錘一覧表(3)

遺物番号	遺構番号	出土地点	孔径 a·b·c(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	残存	分類	内面調整	備考
1091	B1	X191Y149	1.2 1.4 (1.1)	6.0	3.5	(48.0)	8/9	樽c	横	
1092	B1	X196Y151	- 1.3 (1.3)	6.7	3.5	(64.4)	8/9	樽c	横	
1093	B1	X196Y154	1.3 (1.3) (1.2)	6.1	3.4	(49.7)	7/8	樽c	横	
1094	B1	X191Y151	(1.5) - (1.4)	6.3	3.6	(49.1)	5/6	樽c	不明	
1095	B1	X191Y151	1.5 - (1.4)	7.2	3.9	(88.8)	8/9	樽c	不明	
1096	B1	X191Y151	1.5 1.4 (1.4)	6.7	3.9	(91.1)	9/10	樽c	横	
1097	B1	X191Y151	1.7 (1.3) (1.5)	6.4	3.4	(54.9)	8/9	樽c	横	
1098	B1	X198Y154	(1.3) - (1.4)	6.8	3.7	(61.5)	6/7	樽c	不明	
1099	B1	X197Y158	1.5 1.5 (1.5)	6.5	3.6	(77.3)	7/8	樽c	横	
1100	B1	X193Y157	1.5 - (1.4)	6.3	3.7	(56.9)	7/8	樽c	横	
1101	B1	X195Y155	(1.3) - 1.3	5.8	4.0	(32.4)	1/3	樽c	縦	
1102	B1	X198Y152	1.3 (1.3) (1.3)	6.9	3.5	(69.0)	6/7	樽c	横	
1103	B1	X201Y150	1.5 1.6 (1.6)	6.3	4.2	87.2	完形	樽c	不明	
1104	B1	X200Y160	1.4 1.3 (1.4)	5.4	3.8	(68.9)	8/9	樽c	不明	
1105	B1	X199Y166	1.3 1.4 (1.3)	5.9	3.2	(43.1)	8/9	樽c	不明	
1106	B1	X183Y151	- 1.3 1.3	6.8	3.5	(65.1)	8/9	樽c	不明	
1107	B1	X194Y153	- - 1.4	6.5	4.3	(47.1)	1/3	樽c	縦	
1108	B1	X188Y152	(1.4) 1.5 (1.5)	6.8	3.6	(69.8)	6/7	樽c	横	
1109	B1	X188Y150	1.3 1.3 (1.4)	6.6	3.8	84.3	完形	樽c	横	
1110	B1	X181Y150	1.2 1.3 (1.3)	6.8	3.4	(68.3)	8/9	樽c	不明	
1111	B1	X197Y158	1.4 1.4 (1.4)	5.7	3.7	(57.6)	9/10	樽c	不明	
1112	B1	X197Y158	1.5 - (1.5)	6.6	3.8	(58.7)	7/8	樽c	不明	
1113	B1	X190Y150	1.6 (1.4) (1.5)	6.6	3.5	(54.1)	7/8	樽c	横	
1114	B1	X193Y155	1.4 - (1.3)	6.5	3.8	(65.3)	7/8	樽c	横	
1115	B1	X183Y150	1.6 1.4 (1.5)	6.1	3.8	76.7	完形	樽c	横	
1116	B1	X187Y164	1.4 1.4 (1.4)	5.4	3.8	(66.5)	8/9	樽c	横	
1117	B1	X188Y148	1.5 - (1.5)	5.9	3.5	(54.9)	7/8	樽c	不明	
1118	B1	X184Y160	- 1.3 (1.2)	6.3	3.7	(69.2)	7/8	樽c	不明	
1119	B1	X186Y146	1.5 (1.4) 1.5	6.7	3.6	(67.9)	6/7	樽c	横	
1120	B1	X188Y148	1.4 1.4 (1.3)	5.4	3.8	(54.4)	7/8	樽c	横	
1121	B1	X189Y157	1.4 1.4 (1.6)	5.8	4.0	(85.0)	9/10	樽c	横	
1122	B1	X185Y150	1.3 (1.3) (1.3)	6.6	3.6	(71.0)	9/10	樽c	横	
1123	B1	X187Y150	1.6 (1.4) (1.5)	5.7	3.1	(50.3)	7/8	樽c	不明	
1124	B1	X181Y155	1.2 1.2 (1.2)	6.4	3.8	77.9	完形	樽c	横	
1125	B1	X185Y150	(1.5) 1.4 1.4	6.7	3.5	(47.2)	7/8	樽c	縦	
1126	B1	X185Y151	1.4 1.4 (1.4)	6.7	3.8	89.3	完形	樽c	横	
1127	B1	X186Y154	1.2 1.2 (1.2)	5.8	3.8	75.2	完形	樽c	不明	
1128	B1	X189Y153	1.3 (1.4) (1.4)	6.2	3.9	(60.9)	9/10	樽c	横	
1129	B1	X194Y154	(1.4) 1.3 (1.3)	6.6	3.6	(84.9)	19/20	樽c	不明	
1130	B1	排土	1.7 1.6 (1.6)	6.4	4.2	94.9	完形	樽c	不明	
1131	B1	X193Y155	(1.3) 1.4 (1.3)	7.1	3.7	(77.1)	9/10	樽c	横	体部外面に煤付着
1132	B1	X190Y150	1.3 1.3 (1.3)	6.6	3.8	81.6	完形	樽c	横	
1133	B1	X195Y150	1.4 1.4 (1.4)	6.7	3.8	(89.8)	9/10	樽c	不明	
1134	B1	X189Y146	1.4 1.4 (1.4)	6.5	3.6	72.7	完形	樽c	横	
1135	B1	X189Y148	1.3 1.4 (1.3)	7.0	3.8	89.7	完形	樽c	横	
1136	B1	X185Y145	1.4 (1.3) (1.4)	6.7	3.6	(64.8)	7/8	樽c	横	
1137	B1	X195Y148	1.5 (1.3) 1.3	6.8	3.6	(46.3)	6/7	樽c	横	
1138	B1	X195Y153	1.3 (1.2) (1.2)	6.5	3.7	(51.9)	3/4	樽c	不明	
1139	B1	X190Y155	1.3 - (1.2)	(6.8)	3.6	(60.7)	7/8	樽c	横	
1140	B1	X190Y150	- (1.3) (1.3)	6.7	3.7	(67.0)	9/10	樽c	不明	
1141	B1	X186Y160	1.4 1.5 (1.5)	7.1	3.6	(65.9)	7/8	樽c	横	
1142	B1	X181Y155	- (1.5) (1.4)	7.3	3.8	(68.1)	6/7	樽c	横	
1143	B1	X192Y162	1.5 1.4 (1.4)	6.6	4.1	(77.8)	9/10	樽c	横	
1144	B1	X185Y160	1.1 - (1.0)	6.8	3.5	(75.6)	7/8	樽c	不明	
1145	B1	X183Y150	- - 1.4	(6.0)	4.5	(80.3)	1/2	樽c	横	
1146	B1	X190Y148	1.3 1.3 (1.2)	6.3	3.9	77.8	完形	樽c	横	
1147	B1	X190Y148	1.4 1.4 (1.4)	6.7	3.8	(84.7)	9/10	樽c	不明	
1148	B1	X194Y143	1.5 1.5 (1.4)	6.9	3.7	(82.2)	8/9	樽c	横	
1149	B1	X192Y148	1.4 1.4 (1.5)	7.3	3.9	95.5	完形	樽c	横	
1150	B1	X190Y148	1.4 1.4 (1.4)	6.7	3.8	89.6	完形	樽c	不明	

表4　土錘一覧表(4)

遺物番号	遺構番号	出土地点	孔径 a·b·c(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	残存	分類	内面調整	備考
1151	B1	X190Y148	1.5 1.5 (1.4)	7.0	3.8	83.8	完形	樽c	不明	
1152	B1	X198Y157	1.4 1.4 (1.3)	6.8	3.8	(90.5)	8/9	樽c	横	
1153	B1	X196Y154	(1.3) (1.2) (1.2)	7.1	4.0	(90.0)	7/8	樽c	横	
1154	B1	X190Y150	1.3 1.3 (1.3)	7.4	4.1	97.9	完形	樽c	横	
1155	B1	X190Y156	1.4 1.3 (1.4)	6.9	4.2	(86.2)	7/8	樽c	横	
1156	B1	X179Y161	1.4 1.4 (1.4)	7.3	4.0	99.0	完形	樽c	横	
1157	B1	表採	1.4 1.4 (1.4)	7.3	3.8	99.7	完形	樽c	横	
1158	B1	X191Y151	1.5 1.6 (1.6)	7.1	4.2	102.5	完形	樽c	横	
1159	B1	X190Y150	1.4 1.3 (1.4)	6.8	3.5	(70.3)	9/10	樽c	横	
1160	B1	X193Y154	1.3 1.3 (1.4)	7.4	3.7	81.0	完形	樽c	不明	
1161	B1	X190Y155	1.5 1.4 (1.4)	7.0	4.0	108.9	完形	樽c	不明	
1162	B1	X186Y149	(1.2) (1.2) (1.2)	6.6	3.9	(36.7)	1/3	樽c	縦	
1163	B1	X181Y156	(1.4) - 1.3	6.3	4.3	(46.5)	1/2	樽c	不明	
1164	B1	X190Y150	1.3 - (1.3)	7.4	4.0	(91.9)	9/10	樽c	不明	
1165	B1	X196Y146	1.3 (1.4) 1.3	6.6	4.4	(90.9)	2/3	樽c	不明	
1166	B1	X189Y156	- - (1.3)	7.3	3.8	(76.6)	9/10	樽c	横	
1167	B1	X181Y156	- 1.4 (1.3)	6.7	3.6	(80.0)	7/8	樽c	不明	
1169	B1	X188Y154	1.5 1.5 (1.5)	6.7	4.5	116.2	完形	樽c	横	
1170	B1	X184Y150	1.3 1.3 (1.3)	7.4	3.9	96.0	完形	樽c	横	
1171	B1	X185Y150	1.3 1.5 (1.4)	6.8	4.6	(123.2)	9/10	樽c	不明	
1172	B1	X196Y146	1.6 1.6 (1.7)	6.9	4.6	127.8	完形	樽c	横	
1173	B1	X191Y151	1.1 1.2 (1.2)	7.2	4.3	(114.4)	7/8	樽c	横	体部外面に紐を巻いた痕有。
1174	B1	X190Y150	1.5 1.5 (1.5)	6.7	4.5	119.5	完形	樽c	不明	体部外面に紐を巻いた痕有。
1175	B1	X190Y150	- 1.2 1.1	(6.1)	4.4	(103.7)	2/3	樽c	横	体部外面と底部に摩擦痕有
1176	B1	X190Y151	- - (1.3)	7.0	3.5	(52.9)	6/7	樽c?	不明	
1177	B1	X195Y153	(1.4) - (1.4)	6.2	3.4	(34.8)	1/4	樽b?	不明	
1178	B1	X193Y145	- - (1.4)	6.7	4.2	(76.0)	2/3	樽c?	横	
1179	B1	X193Y147	1.2 (1.1) 1.1	(4.7)	3.8	(23.4)	1/3	卵c	不明	
1180	B1	X195Y152	(1.4) - 1.4	(5.2)	3.6	(36.5)	2/3	樽c	不明	
1181	B1	X186Y147	1.4 - (1.3)	5.8	3.1	(46.5)	2/3	樽c?	不明	
1182	B1	X187Y142	- - (1.3)	(5.3)	3.5	(38.0)	1/2	寸胴c?	不明	
1183	B1	X193Y148	1.4 - (1.3)	(5.5)	3.4	(43.7)	7/8	樽c?	横	
1184	B1	X189Y145	1.3 1.3 (1.2)	5.0	3.8	62.7	完形	卵c	横	
1185	B1	X185Y155	(1.6) (1.5) (1.5)	6.1	4.1	(68.6)	6/7	樽c	横	
1186	B1	X196Y154	(1.3) - (1.3)	5.6	4.1	(70.7)	6/7	卵c	横	
1187	B1	X187Y149	1.3 (1.2) (1.1)	3.7	3.6	(34.5)	9/10	寸胴d	横	
1188	B1	X195Y145	- 1.2 (1.1)	(3.6)	4.1	(50.4)	9/10	卵d	横	
1189	B1	X190Y154	1.1 - 1.0	(4.7)	2.8	(16.9)	1/3	樽c	横	
1190	B1	X192Y155	- - 1.4	(5.7)	4.1	(44.4)	1/3	樽c?	縦	
1191	B1	X185Y150	- 1.5 (1.3)	(6.3)	3.6	(58.6)	7/8	樽c?	横	
1192	B1	X185Y145	- - (1.3)	6.5	3.2	(39.0)	2/3	樽c?	不明	
1193	B1	X188Y156	(0.8) - (0.8)	(7.2)	(3.5)	(31.2)	1/3	不明	縦	体部外面に紐を巻いた痕有。
1194	B1	X190Y145	(1.4) (1.3) 1.4	(7.1)	3.7	(57.3)	1/2	卵b	不明	
1195	B1	X196Y156	- (1.5) 1.5	7.5	4.5	(63.5)	1/3	卵c	縦	
1199	B1	X195Y143	- - 1.4	4.4	3.8	(33.3)	1/3	樽c?	縦	
1200	B1	X196Y145	- 1.4 (1.3)	5.3	3.7	(42.1)	2/3	樽c	不明	
1201	B1	X201Y152	- - 1.2	(5.4)	3.3	(24.9)	1/3	樽c?	縦	
1202	B1	X197Y168	- - 1.2	(3.4)	3.1	(15.9)	1/3	不明	縦	
1203	B1	X196Y144	1.5 - 1.5	(4.5)	3.7	(41.8)	1/2	樽c?	横	
1204	B1	X183Y152	1.4 - (1.3)	(5.3)	(3.2)	(18.9)	1/4	不明	不明	
1205	B1	X190Y143	- - (1.3)	6.5	3.6	(54.8)	6/7	樽c?	不明	
1206	B1	X199Y155	- - 1.3	5.1	3.4	(24.5)	1/4	樽c?	縦	
1207	B1	X199Y153	- - 1.2	(5.3)	2.6	(17.0)	1/3	樽c?	縦	
1208	B1	X195Y151	- - 1.2	5.9	2.0	(14.7)	1/3	樽b?	縦	
1209	B1	X186Y147	1.4 - 1.4	4.1	3.7	(43.9)	1/2	樽c?	不明	
1210	B1	X189Y157	- - 1.2	5.4	2.8	(17.9)	2/3	樽c	縦	
1211	B1	X200Y155	- - 1.0	(4.3)	2.8	(13.5)	1/6	樽c?	縦	
1212	B1	X190Y155	- - 1.5	(3.7)	3.7	(20.1)	1/3	樽c?	横	
1213	B1	X190Y150	- - 1.2	(4.8)	3.6	(28.4)	1/3	樽c	不明	
1214	B1	X196Y153	1.3 - 1.3	4.8	3.5	(49.5)	2/3	樽c	不明	

表5　土錘一覧表(5)

遺物番号	遺構番号	出土地点	孔径 a·b·c(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	残存	分類	内面調整	備考
1215	B1	X192Y149	- - 1.3	5.6	2.9	(17.8)	1/3	樽c?	縦	
1216	B1	X186Y147	- - (1.4)	(5.3)	3.5	(41.2)	2/3	樽c?	横	
1217	B1	X196Y147	1.3 - (1.2)	(4.8)	3.0	(29.7)	7/8	卵b?	横	
1218	B1	X194Y153	- - 1.1	5.7	2.5	(15.8)	1/3	樽b?	縦	
1219	B1	X187Y155	- - 1.0	(4.0)	2.4	(8.9)	1/6	不明	不明	
1220	B1	X194Y152	- - 1.2	3.9	3.1	(15.1)	1/4	樽c?	縦	
1221	B1	X194Y153	- - 1.2	(4.9)	2.8	(16.0)	1/3	樽c	縦	
1222	B1	X197Y153	- - (1.4)	(3.1)	3.4	(21.3)	1/3	不明	横	
1223	B1	X195Y143	- - (1.1)	(4.5)	(3.0)	(15.7)	1/3	不明	不明	
1224	B1	X196Y155	1.3 - 1.3	(3.5)	3.9	(21.8)	1/3	樽c?	縦	
1225	B1	X186Y160	- - -	(5.0)	(2.5)	(12.9)	1/5	不明	不明	
1226	B1	X198Y157	- - (1.2)	(3.2)	(3.2)	(15.2)	1/3	不明	不明	
1227	B1	X185Y150	- - (1.0)	(4.0)	(2.0)	(8.6)	1/3	不明	不明	
1228	B1	X196Y150	(1.3) - 1.3	(4.2)	(2.3)	(9.2)	1/4	樽b?	不明	
1229	B1	X186Y156	- - (0.8)	(4.7)	(3.0)	(16.6)	1/3	不明	縦	
1230	B1	X185Y150	- - 1.3	(4.8)	2.9	(14.6)	1/4	樽c?	縦	
1231	B1	X193Y143	1.5 - 1.4	(4.7)	3.0	(21.1)	1/3	樽c?	縦	
1232	B1	X199Y166	- - (0.9)	(5.0)	(2.6)	(14.0)	1/3	不明	不明	
1233	B1	X184Y151	1.2 - (1.2)	(4.4)	2.7	(23.4)	7/8	寸胴c	不明	
1234	B1	X194Y143	- 1.3 1.3	(3.8)	3.2	(31.9)	1/2	樽c?	縦	
1235	B1	X187Y155	- - 1.2	(4.2)	2.8	(12.9)	1/6	樽c?	不明	
1236	B1	X189Y155	- - -	(3.9)	(3.2)	(14.0)	1/6	不明	不明	
1237	B1	X196Y148	1.3 - 1.3	(3.5)	3.1	(12.9)	1/5	不明	不明	
1238	B1	X195Y143	- - -	(4.7)	(2.6)	(16.7)	1/5	不明	不明	
1239	B1	X183Y157	- - 1.2	(3.5)	3.0	(10.1)	1/4	樽c?	不明	
1240	B1	X190Y150	- - (0.7)	(3.6)	2.5	(7.1)	1/4	不明	不明	
1241	B1	X201Y151	- - 1.2	(3.3)	3.3	(15.1)	1/5	樽c?	不明	
1242	B1	X196Y149	- - 1.2	(3.1)	(2.1)	(6.7)	1/6	不明	不明	
1243	B1	X196Y148	- - -	(2.8)	(2.2)	(5.7)	1/15	不明	不明	
1244	B1	X190Y152	- - (1.0)	(4.4)	(1.7)	(4.8)	1/5	樽b?	縦	
1245	B1	X187Y148	- - -	(4.4)	(2.0)	(8.5)	1/5	不明	縦	
1246	B1	X191Y145	- - (1.1)	(4.4)	2.9	(14.1)	1/4	不明	不明	
1247	B1	X188Y154	- - -	(4.0)	(2.5)	(9.0)	1/6	不明	不明	
1248	B1	X182Y154	- - 1.0	(3.4)	(2.5)	(13.4)	1/5	不明	不明	
1249	B1	X188Y148	(1.0) (1.0) (1.0)	4.5	2.8	(13.1)	1/3	樽c?	縦	
1250	B1	X189Y148	- - (1.1)	4.1	2.1	(11.8)	1/4	不明	縦	
1251	B1	X195Y143	- - (1.0)	(3.2)	2.2	(6.1)	1/10	不明	縦	
1252	B1	X196Y143	- - -	(2.2)	1.4	(1.0)	1/15	不明	不明	
1253	B1	X181Y159	- - -	(2.5)	(1.3)	(2.5)	1/8	不明	縦	
1254	B1	X190Y152	- - (1.0)	(3.4)	(2.3)	(8.0)	1/8	不明	不明	
1255	B1	X195Y160	(1.2) (1.2) (1.2)	(3.6)	(1.9)	(6.6)	1/4	不明	縦	
1256	B1	X189Y155	(1.0) - (1.0)	(3.6)	(2.1)	(7.7)	1/6	不明	縦	
1257	B1	X190Y155	- - -	(2.5)	(1.7)	(4.0)	1/15	不明	不明	
1258	B1	X189Y156	- - -	(2.5)	(2.1)	(5.3)	1/8	不明	不明	
1259	B1	X196Y146	- - -	(2.6)	(1.8)	(5.2)	1/10	不明	不明	
1260	B1	X190Y155	- - -	(3.0)	(2.0)	(4.2)	1/15	不明	不明	
1261	B1	X195Y150	- - -	(2.2)	(1.9)	(4.2)	1/8	不明	不明	
1262	B1	X183Y150	- - -	(1.9)	(2.3)	(5.3)	1/9	不明	不明	
1279	B2-SI08		1.3 1.4 (1.4)	6.7	4.6	112.9	完形	樽c	横	体部外面に紐を巻いた痕有。
1473	B4	X237Y168	1.4 1.4 (1.4)	6.7	4.0	(80.4)	9/10	樽b	横	
1474	B4	X244Y161	1.7 1.6 (1.6)	6.9	4.5	(106.3)	9/10	樽c	横	
1475	B4	X210Y187	1.2 1.2 (1.2)	5.7	3.5	(51.0)	9/10	樽c	不明	
1476	B4	X231Y169	(1.2) (1.2) 1.2	(5.3)	3.7	(28.8)	1/3	樽c	縦	
1477	B4	X216Y183	1.4 1.3 (1.3)	6.3	4.4	117.4	完形	樽c	横	
1478	B4	X248Y161	- - 1.4	(5.3)	4.1	(66.4)	1/2	不明	横	
1479	B4	X245Y160	1.4 - 1.4	5.5	3.1	(33.0)	1/3	不明	不明	
1480	B4	X248Y167	- - -	(4.6)	3.4	(13.5)	1/5	不明	不明	
1939	B6-SK1279		- - -	5.2	(2.3)	(13.3)	1/5	不明	縦	
2122	B6-SD301		- - (1.2)	4.9	3.6	(25.9)	1/3	不明	縦	
2251	B6-SD325		1.3 1.3 (1.3)	7.0	3.6	84.1	完形	樽c	横	

表6　土錘一覧表(6)

遺物番号	遺構番号	出土地点	孔径 a·b·c(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	残存	分類	内面調整	備考
2603	B1	X197Y158	- - (1.2)	6.8	2.9	(43.1)	6/7	樽b?	横	
2604	B6	X263Y126	1.3 1.2 (1.3)	6.4	3.8	(88.4)	9/10	樽c	不明	
2605	B6	X252Y116	1.3 1.2 (1.3)	6.4	3.7	78.6	完形	樽c	不明	
2606	B6	X256Y126	1.2 1.3 (1.2)	6.3	3.8	74.8	完形	樽c	横	
2607	B6	X253Y126	1.3 1.2 (1.3)	7.1	3.8	(76.9)	7/8	樽c	横	
2608	B6	X253Y116	1.3 1.4 (1.4)	5.5	3.5	(52.3)	19/20	樽c	不明	
2609	B6	X245·246Y115	1.2 - (1.2)	5.5	3.3	(26.7)	1/3	樽c	横	
2610	B6	X238Y117	1.2 1.2 (1.2)	5.8	3.3	(44.1)	7/8	樽c	不明	
2611	B6	X241Y115	1.3 1.3 (1.2)	5.5	3.0	(37.6)	8/9	樽c	不明	
2612	B6	X241Y114	1.3 1.3 (1.3)	5.5	2.9	(3.6)	8/9	樽c	横	
2613	B6	X247Y113	1.2 1.2 (1.2)	6.1	3.5	(67.0)	19/20	樽c	横	
2614	B6	X250Y126	1.7 1.7 (1.7)	5.2	4.1	69.6	完形	樽c	横	
2615	B6	X250Y126	1.4 1.4 (1.4)	5.6	4.9	(101.9)	19/20	卵c	横	
2616	B6	X237Y115	- 1.3 1.3	(5.0)	3.8	(52.6)	1/2	樽c	不明	
2617	B6	X253Y116	1.4 - 1.4	(4.3)	3.6	(43.2)	1/2	樽c?	不明	
2618	B6	X242Y120	0.9 - (0.9)	(2.8)	2.3	(10.8)	9/10	卵c	不明	
2619	B6	X238Y113	- - -	(3.8)	(2.4)	(9.1)	1/5	不明	縦	
2620	B6	X241Y115	- - 1.0	(4.6)	(2.4)	(8.1)	小片体部	不明	不明	
2621	B6	X277Y122	- - -	(3.3)	(3.0)	(9.7)	1/6	不明	不明	
2622	B6	X241Y115	1.3 - 1.2	(4.5)	3.5	(35.2)	1/2	不明	不明	
2623	B6	X257Y126	- - (1.4)	(4.0)	2.8	(8.9)	1/5	不明	不明	
2624	B6	X246Y116	- - -	(5.9)	3.3	(24.6)	1/3	不明	縦	
2625	B6	X267Y122	- - -	(4.4)	(2.8)	(16.2)	1/5	不明	縦	
2626	B6	X237Y115	1.4 - (1.4)	(5.7)	3.7	(51.9)	3/4	樽c?	横	
2627	B6	X241Y115	(1.0) (1.0) (1.0)	(5.8)	3.0	(24.5)	1/2	樽c?	縦	
2628	B6	X250Y115	- - 1.1	(5.8)	(3.7)	(29.4)	1/3	不明	縦	
2629	B6	X235Y115	- - -	(4.8)	(2.4)	(8.3)	1/10	不明	不明	
2630	B6	X268Y129	- - (1.2)	(5.2)	3.2	(23.5)	1/3	不明	縦	
2631	B6	X236Y114	(1.2) (1.2) (1.2)	(5.4)	2.8	(22.1)	1/3	不明	横	
2637	B6	X271Y133	- - -	(4.4)	(2.9)	(16.3)		不明	不明	
2656	B8	X294Y86	- - 1.3	(5.7)	2.8	(23.4)	1/2	樽b?	不明	
2764	B12	X188Y346	0.5 0.5 (0.5)	4.4	1.8	9.6	完形	樽b	不明	
2869	B13-SI32		- 0.2 (0.3)	3.4	1.6	(6.9)	9/10	樽b	不明	
2870	B13-SI32		- - (0.4)	(3.8)	1.5	(5.8)	9/10	提灯a	不明	
2881	B13-SI36		- - 0.8	(6.7)	(2.6)	(17.2)	1/5	不明	縦	
3028	B13	X150Y412	0.9 0.9 (1.0)	7.7	3.6	(78.2)	5/6	樽b	不明	体部外面に紐を巻いた痕有。
3029	B13	X150Y412	- 0.9 0.9	7.2	3.2	(39.2)	1/3	樽b	縦	
3030	B13	X180Y378	- - (0.5)	(4.5)	1.8	(10.9)	8/9	樽b?	不明	
3031	B13	X162Y398	1.8 1.7 (1.7)	4.7	2.9	(33.9)	3/4	樽c	横	
3032	B13	X175Y378	0.5 0.4 (0.5)	4.1	1.5	8.2	完形	樽b	縦	
3033	B13	X150Y412	- 0.8 (0.9)	(5.4)	1.8	(22.8)	1/4	不明	縦	
3034	B13	X149Y416	- - -	(5.7)	(2.9)	(21.7)	1/5	不明	不明	
3035	B13	X142Y405	- - (0.8)	(4.7)	(2.1)	(12.2)	1/6	不明	縦	
3036	B13	X145Y409	1.0 - 1.0	(4.6)	(2.5)	(23.3)	1/4	不明	縦	
3037	B13	X150Y412	0.8 - 0.8	(5.4)	(2.9)	(19.3)	1/5	不明	縦	
3038	B13	X150Y412	0.9 - 0.9	(4.8)	(2.6)	(14.7)	1/5	不明	縦	
3039	B13	X149Y410	- - -	(5.4)	2.3	(15.6)	1/6	不明	縦	
3040	B13	X151Y415	- - -	(3.5)	(1.8)	(6.6)	1/20	不明	縦	
3070	B6	X243Y114	1.2 - (1.2)	5.5	3.4	(45.1)	8/9	樽c	横	
3071	B6	X238Y113	1.3 1.2 (1.2)	5.9	3.5	(52.0)	9/10	樽c	横	
3072	B11	X166Y333	0.3 - (0.3)	2.9	1	(3.0)	1/2	樽a?	不明	
3073	B11	X163Y338	0.8 0.8 (0.8)	5.6	3	(48.3)	8/9	樽c?	横	
3074	B11	X160Y330	0.7 0.7 (0.7)	5.5	3.3	58.0	完形	樽c	不明	
3075	B12-SK752		0.4 0.4 -	5.6	1.4	8.2	完形	樽a	不明	
3076	B12	X151Y366	(0.8) - (0.8)	3.5	1.3	(3.0)	小片体部	不明	不明	

4　製塩土器について

はじめに

任海宮田遺跡は海岸から離れた扇状地上に立地する遺跡であるにも関わらず、製塩土器が棒状尖底のものも含め破片数で227点出土している。このように海岸から離れた内陸部の集落遺跡で製塩土器が出土したのは、1979年の北陸自動車道の建設に伴う発掘調査で、立山町辻坂の上遺跡・上市町東江上遺跡から棒状尖底の能登型製塩土器が少量出土したのが県下で初例となる。その後出土例は増加し、岸本雅敏氏は県下の製塩土器出土遺跡を集成し、海浜部からの距離と立地条件からＡ～Ｄの４群に分類した。そして内陸型のＢ・Ｃ群について、出土量が少量であることから製塩土器が運搬容器として利用され、内陸型の遺跡を塩の供給・消費地であったと考えた。恐らく任海宮田遺跡の製塩土器も破片数は多いが、胎土に含まれる砂粒が概して粗く海綿骨針を含み、他の土師器と胎土が異なるものが多いことから、運搬容器として外部から持込まれたものと考えられる。また、この様な胎土を含め、器形および調整の特徴から土師器とは別に製塩土器として破片の数量を集計した。集計の結果、特に建物群１が検出されたＢ１地区と、建物群３が検出されたＢ６地区に集中することが分かった。その他の地区でも少量検出されており、ここでは製塩土器の分布状況を検討し、内陸型遺跡での製塩土器のあり方について若干の考察を行ないたい。

a　製塩土器の分類

出土した製塩土器は体部細片が大半であるが、一部器形の推定できるものが出土しており、第１図に図示した。器形の分類についてはヤトン谷内遺跡出土製塩土器の下村分類を参考に３器形が確認できる。以下に箇条書きする。

製塩土器Ａ類：短脚尖底のもので、底部径が狭く、体部との立上がりに段をもつもので、下村分類の棒状尖底Ｃ２ａ類に相当する。2642を典型例とし、Ａ類と考えられる底部破片が少量出土している。胎土は細砂粒が混じり海綿骨針を少量含むものと、粗い赤色砂粒が多く混じり海綿骨針を多量に含むものがある。

製塩土器Ｂ類：細くしまった頸部をもつもので、下村分類の棒状尖底Ｅ１ｂ類に相当する。1263・1264の２点が認められる。胎土は粗い砂粒が多く混じり海綿骨針を少量含む。

製塩土器Ｃ類：丸平底の甕型土器である。内面に横および斜位のハケメ、外面に縦位のハケメを施し、器壁が薄く平滑に調整されている。Ｂ地区で出土した土師器の甕と胎土、器形、調整が異なり、ヤトン谷内遺跡の下村分類７群のものと類似することから、製塩土器と判断した。188・2655の２点が認められる。胎土は粗い砂粒が混じり、海綿骨針は含まれない。

また底部が出土しておらず断定できないが、粘土紐痕を残し、斜め上方に真っ直ぐ立ち上がる体部をもつ2646が出土しており、平底タイプの製塩土器と考えられる破片も出土している。

製塩土器Ａ類は、底部径が狭く短脚の付くもので四柳編年のＶ期（９世紀）に相当するものと考えられる。従来富山県では８世紀第１四半期のうちに棒状尖底の製塩土器から平底の製塩土器に転換したと推測されていた。当地区の建物群が８世紀後半から10世紀前半を中心とする建物群であることから、上記の見解とは矛盾するものとなる。しかし能登地域での昨今の製塩土器の研究から短脚尖底土器が９世紀後半まで出土し、当地区の器形と類似性があることから建物群と同様９世紀のものと考えられる。

b　塩土器の分布

建物群が検出されているＢ１・Ｂ２・Ｂ６・Ｂ12・Ｂ13地区について、製塩土器の出土点数を破片数で数えた。その結果、全体で227点を確認した。内訳はＢ１地区で72点、Ｂ２地区で０点、Ｂ６地区で146点、Ｂ12地区で６点、Ｂ13地区で３点となった。以下地区毎に詳細を述べる。

Ｂ１地区：建物群１が検出されたＢ１地区では72点が出土しており、分類可能なものは製塩土器Ｂ類の２点（1263・1264）がある。脚部の形状は不明であるが、棒状尖底の底部と考えられるものが図示していないものも含めて３点（209）あり、Ｃ類と考えられる体部下半も１点（188）出土している。他は体部破片である。分布状況（第３図）は建物群１の中心域と考えられる調査区中央に集中する。主な遺構ではＳＢ202とＳＢ204の柱穴であるＳＰ202・204やＳＩ01などから出土しており、包含層からは39点が出土している。その他、羽口や土錘など手工業生産に関わる遺物が出土しており、特に土錘については、他の建物群に比べ303点と多量の樽型土錘が製塩土器と同様、調査区中央から集中して出土している。

Ｂ２地区：建物群２が検出されたＢ２地区では製塩土器が出土しておらず、羽口・土錘などの手工業生産に関わる遺物も殆ど出土していない。

Ｂ６地区：建物群３が検出されたＢ６地区では146点が出土しており、分類可能なものは製塩土器Ａ類が２点（2642・2645）で、脚部の形状は不明であるが、棒状尖底の底部と考えられるものが他に３点（2643・2644・2956）出土している。他は体部および口縁部破片である。分布状況は建物群３の中心域および土師器焼成遺構の周辺と考えられるＸ260付近に多く分布する。主な遺構ではⅡ・Ⅲ・Ⅳ期の竪穴住居やＳＸ219・ＳＤ122から出土し、包含層からは69点が出土している。建物群３の領域からは製塩土器のほか、土錘38点、羽口63点や鉄滓が竪穴住居から出土しており、土師器焼成遺構と併せ手工業生産に従事した可能性のある集団が利用したものと考えられる。

Ｂ12地区：建物群４が検出されたＢ12地区では体部破片が６点出土している。分布状況は建物群４と離れた調査区中央および南側の包含層や、中世の遺構から散在的に出土しており、建物群との関連性は薄く、流れ込みと考えられる。

Ｂ13地区：建物群５が検出されたＢ13地区では体部破片が３点出土している。分布状況は建物群５の竪穴住居が集中する調査区南東部分から離れた位置の包含層から少数出土しており、建物群との関連性は薄く、流れ込みと考えられる。

表１および第２図の円グラフは上記の結果をまとめたものであり、全体遺物量と製塩土器の各地区間の差を比較したものである。傾向としては、大筋で両者は同様の結果を示し、遺物量の差がそのまま製塩土器の差に反映しているようであるが、その格差は製塩土器の方が更に著しいものとなる。Ｂ６地区は特に出土量が多いことが分かる。1000㎡あたりの出土量で比較しても同様にＢ１・Ｂ６地区の出土量が他地区を圧倒する。

以上のことから、Ｂ地区の製塩土器は建物群１・３のように体部破片が主であるが、建物群の分布と重なるように集中して出土し、恐らくその建物群に帰属する集団によって利用されたと考えられる分布傾向を示すものと、一方建物群４・５の様に分布状況から極少量の製塩土器が持込まれたか、あるいは近隣の建物群で利用された製塩土器の破片が流れ込んだものと考えられる分布傾向を示すものとに２分できる。

c　まとめ

以上Ｂ地区で出土したⅡ～Ⅳ期（９世紀前半～10世紀初頭）の製塩土器について、分布状況を概観した。特徴としては耕地の開墾を目的とする集落内でも、中心的な建物群である建物群１・３に塩を入れる容器として搬入されたことが分かった。それらの建物群は集団漁撈行為や土師器生産、鍛冶関連など手工業生産に関わっていた可能性が高く、運ばれた塩も塩蔵などそれらの行為に関わった可能性がある。しかし製塩土器は体部破片数に比べ、底部破片が少なく10個体程度の数量の可能性もあることから、製塩土器によって運ばれた塩だけで賄いきれるものではない。塩蔵等の手工業生産に利用する塩なら、製塩土器によって運ばれたものだけでなく、別の容器でも運ばれてきたものと考えられる。あるいは運搬には適さない棒状尖底土器を敢えて運搬容器として内陸まで運搬されたことについては祭祀など別の用途に利用された特別な塩であった可能性もある。

近年の発掘調査例の増加から、岸本氏の指摘した内陸型の集落遺跡は、富山平野内でも増加（表２）している。管見に認められるこれらの内陸型遺跡から出土する製塩土器は、１～４点程度の製塩土器が図示されている。この様な傾向は一見建物群４・５の出土傾向と符合するようであるが、建物群１・３群から出土した製塩土器のうち、器形の分かるものが１地区あたり５～６点しか図示出来ていない状況であることから、体部破片数を含めれば他の内陸型遺跡でも同程度の出土点数となる可能性があり、建物群１・３群の状況が一般的であった可能性も十分にあり得る。最後に、今回のような内陸型の集落遺跡で出土する製塩土器については、実測可能なものだけでなく、体部破片等の分布状況も把握する必要性があると実感した。またそれらの状況と各遺跡がもつ性格とを詳細に比較し、資料を蓄積することによって消費地における製塩土器の利用形態に迫ることが可能ではないかと考えられる。

（武田　健次郎）

＜引用・参考文献＞

岸本雅敏　「富山県における製塩土器の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号　1983

立山町教育委員会　『利田横枕遺跡発掘調査報告』　2001

富山県教育委員会　『北陸自動車道遺跡調査報告－立山町土器・石器編－』　1982

富山県教育委員会　『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』　1982

富山県文化振興財団　『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告』2003

富山県文化振興財団　『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ遺跡発掘調査報告』　2002

富山県埋蔵文化財センター　『富山県埋蔵文化財センター年報』　2001

富山県埋蔵文化財センター　『富山県埋蔵文化財センター年報』　2003

富山県埋蔵文化財センター　『栗山楮原遺跡』　1990

富山県埋蔵文化財センター　『富山市任海砂田遺跡発掘調査概要』　1990

富山市教育委員会　『富山市上新保遺跡試掘調査報告』　1996

富山市教育委員会　『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』　2006

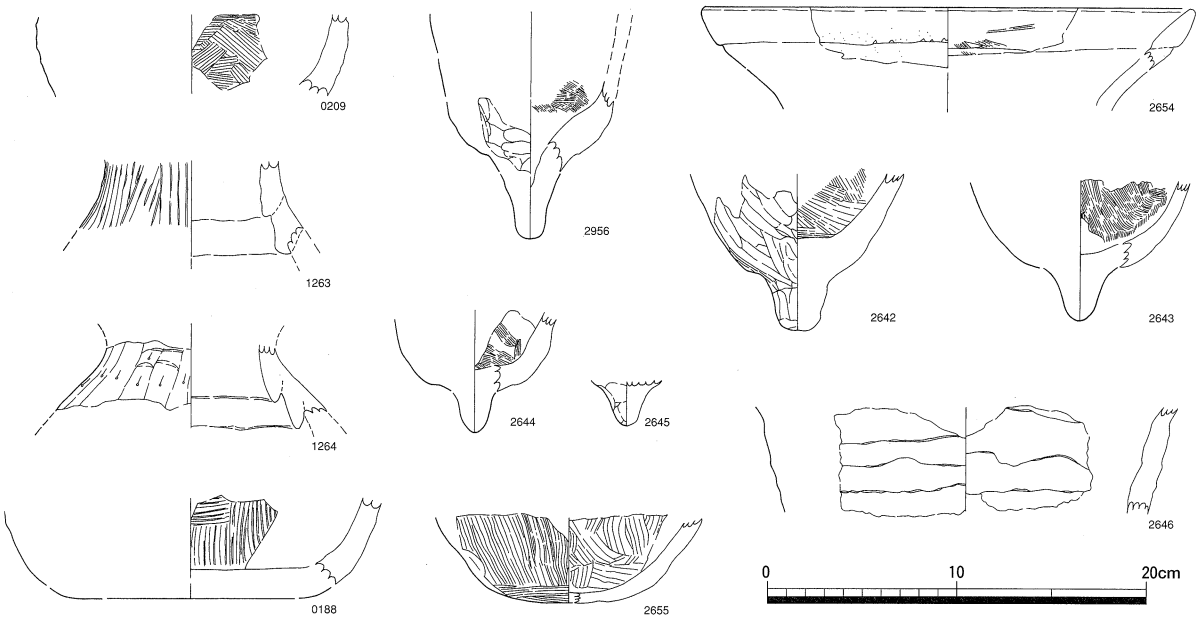
中島町教育委員会　『ヤトン谷内遺跡－能登における古代製塩遺跡の調査』　1995

婦中町教育委員会　『砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』　2004

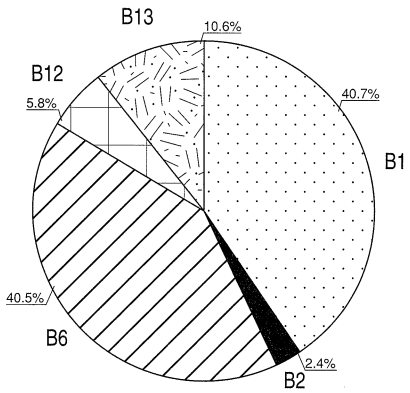
舟橋村教育委員会　『利田横枕遺跡発掘調査報告』　2001

舟橋村教育委員会　『富山県舟橋村古海老江遺跡発掘調査報告－宅地造成に伴う調査報告書』　2002

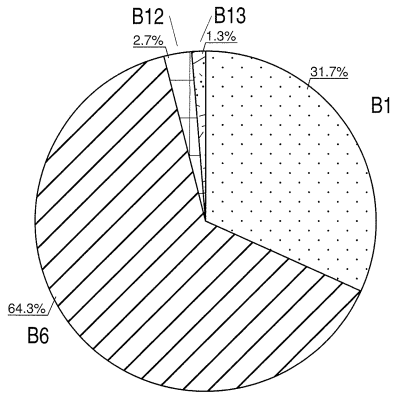
舟橋村教育委員会　『浦田遺跡発掘調査報告（３）』　2000



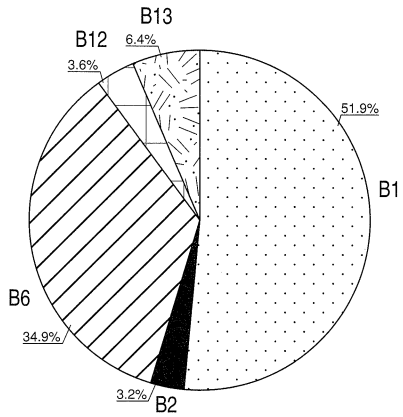
第1図　B地区出土製塩土器



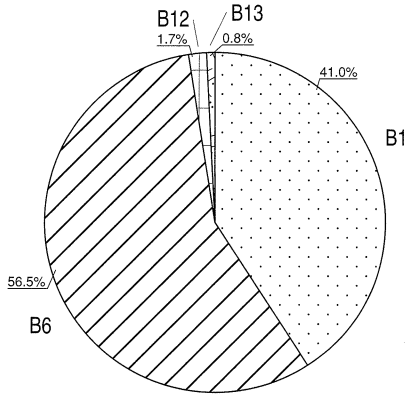
地区別遺物出土量比率



地区別製塩土器出土量比率



1000㎡あたりの地区別
遺物出土量比率



1000㎡あたりの地区別
製塩土器出土量比率

第2図　地区別製塩土器出土比率

表1　B地区出土の製塩土器破片数集計表

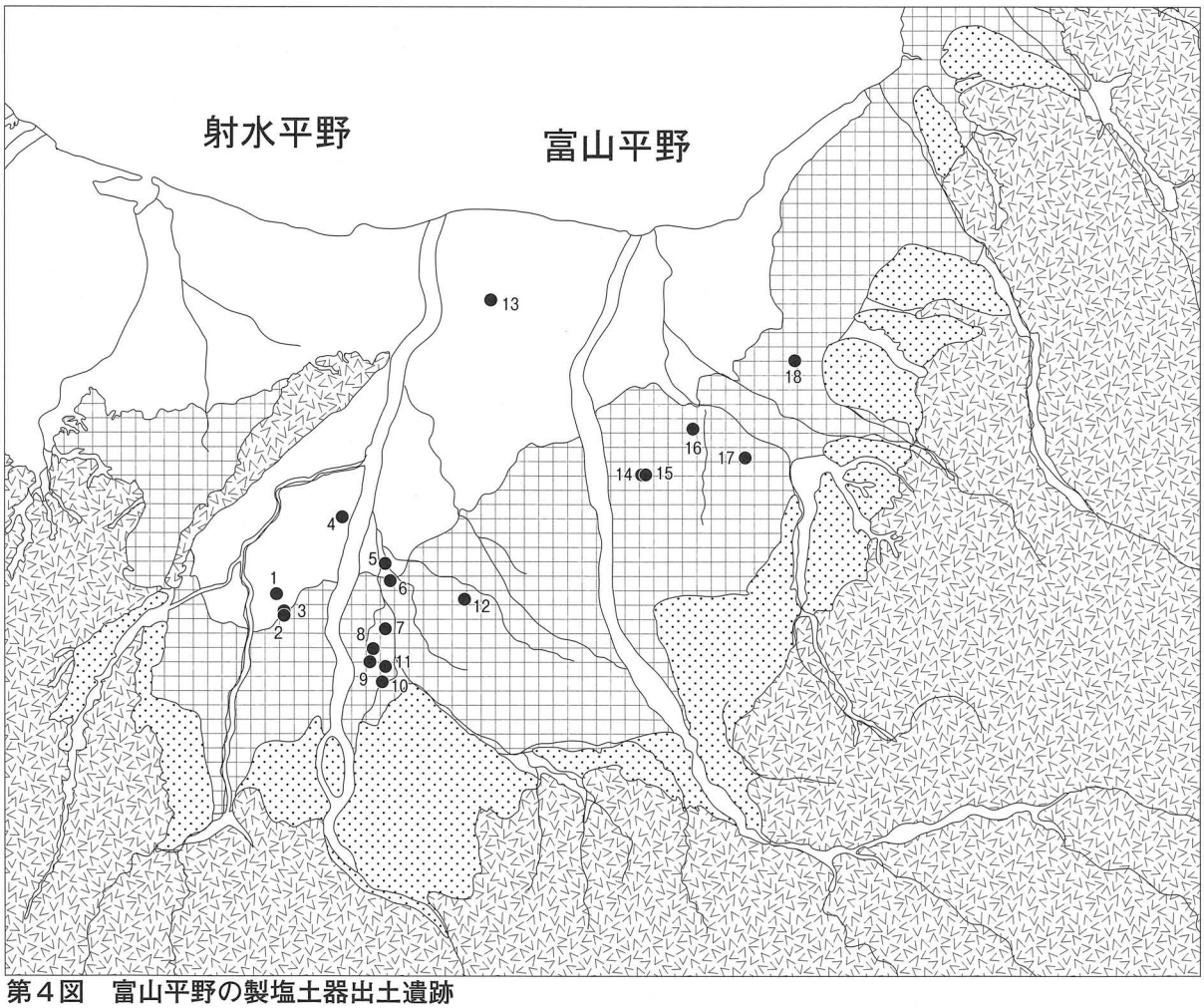
器種	B1地区			B2地区			B6地区			B12地区			B13地区			合計
	遺構	包含層	小計	遺構	包含層	小計	遺構	包含層	小計	遺構	包含層	小計	遺構	包含層	小計	
製塩土器	33	39	72	0	0	0	77	69	146	1	5	6	0	3	3	227

X200
0209
1264
0211
1263
0188
X190
X180
Y140
Y150
Y160
1～5
6～10
10～
B１地区
0
20
40m
Y120
Y130
X270
X260
Y110
2642
2643
5243
2646
2956
2644
X250
X240
X230
B６地区
1～5
X200
X190
X180
X170
X160
X150
Y350
Y360
B１２地区
X190
X180
X170
X160
X150
1～5
B１３地区
Y380
Y390
Y400
Y410
0
20
40m

第３図　製塩土器の分布

表２　富山平野の製塩土器出土遺跡

番号	遺跡名	集落の性格	型式	時期	点数	備考
1	砂子田Ⅰ遺跡		棒状尖底	7C後半～8C後半	1点	旧河道より出土。
2	中名Ⅰ・Ⅴ遺跡	内陸部の集落	棒状尖底	7C?	4点	
3	中名Ⅱ遺跡		平底			
4	鵜坂Ⅰ遺跡					試掘
5	黒瀬大家遺跡					試掘
6	黒崎種田遺跡					試掘
7	友杉遺跡	内陸部の集落		平安時代の製塩土器		試掘
8	任海宮田遺跡	内陸部の集落	短脚尖底等	9C～10C前半	12点	B地区内で出土破片数は227点
9	吉倉B遺跡		棒状尖底			
10	栗山楮原遺跡	内陸部の集落	尖底（能登式）	10C前半	2点	出土破片数は25点
11	任海砂田遺跡					
12	上新保遺跡					
13	米田大覚遺跡		棒状尖底			
14	利田横枕遺跡	内陸部の集落	尖底（能登式）	6C後半～7C前半	2点	
		内陸部の集落	尖底（能登式）	6C末～7C初	10点	素掘り井戸より多量に出土。
15	古海老江遺跡	内陸部の集落	尖底（能登式）	6C末～7C初	2点	利田横枕遺跡に隣接※小片の写真のみ掲載
16	浦田遺跡	内陸部の集落			1点	口縁部小片
17	辻坂の上遺跡	内陸部の集落	尖底（能登式）	6C後半	1点	二次的被熱を受けている。
18	東江上遺跡	「村落の長（里長クラス）の居住地」	尖底（能登式）	7C末～8C初	3点	掘立柱建物3棟、倉庫3棟が溝で区画される。円面硯なども出土している。



第４図　富山平野の製塩土器出土遺跡

5　金属製品について

はじめに

任海宮田遺跡は主に古代と中世を中心とした集落遺跡である。Ｂ地区ではＢ１・Ｂ６地区とＢ12・Ｂ13地区を中心に古代の集落が確認され、中世の集落はＢ地区全体から確認されている。任海宮田遺跡Ｂ地区では古代から中世の土器群と共に金属製品が多数出土している。とりわけ、古代の遺構が密布しているＢ１地区とＢ６地区からは古代の金属製品が多数出土している。金属製品は土器などとは異なり、腐食されやすく残らない場合が多いし、鋳直して再利用することも可能である。そのため金属製品がまとまって出土することは稀であり、組成などをまとめれるだけの出土例はほとんどないのが現状である。こうした状況の中で金属製品を集計し、組成を検討していくことは、遺跡の性格などを考える上での一つの視点を示すものと考えられる。そこで、今回は任海宮田遺跡Ｂ地区出土のすべての金属製品について集計し、その組成比率を示していくことにする。

a　分析方法

分析の対象とした金属製品は銅銭を除く任海宮田遺跡Ｂ地区から出土したもの全てであり、計数は破片数で行っている。Ｂ地区はＢ１～Ｂ14地区まであり、金属製品が出土している地区はＢ1～Ｂ7・Ｂ11～Ｂ13地区である。用途別としては大きく建具類（釘、釘-鉄鏃の茎、鏃、菱形金具、菱形金具付き釘、鉄製金具、鉄製滑車）、農具類（鍬・鋤先、又鍬状鉄製品、鎌、紡錘車）、武具類（雁股鏃、鉄鏃、小刀、小札）、生活道具類（刀子、包丁、小皿状鉄製品、火打金）、工具類（錐、鑿、鋸）の大きく５つに分類した。古代の金属製品についてはまとまって出土しているＢ１地区とＢ６地区の２地区を対象に、集計し組成を表した。また、出土地点が明確なものについては２ｍメッシュに出土ポイントをプロットし、分布図を示した。

b　各地区の組成比率（表１・第１図）

出土した金属製品の総点数は252点であった。これらのうち鉄製品は249点で、銅製品は３点である。他に製品ではないが鉄滓が141点確認されている。種数は34種類あり、これら34種類のうち建具類、農具類、武具類、生活道具類、工具類といった用途が判別できるものとしては24種類で、点数としては143点である。鉄滓を除く金属製品の地区別出土量が最も多いのがＢ６地区で93点、次に多いのがＢ12地区の61点、Ｂ１地区の54点となっている。鉄製品の種類でみると建具類で釘類（釘、鏃）、金具類（留金、菱形金具、菱形金具付き釘、鉄製金具）、鉄製滑車があり、農具類では鍬・鋤先、又鍬状鉄製品、鎌、紡錘車がある。武具類としては雁股鏃、鉄鏃、小刀、小札があり、生活道具類としては刀子、包丁、小皿状鉄製品、火打金があり、工具類としては錐・鑿・鋸などがある。その他としては、形状から棒状、板状、環状、Ｕ字状、Ｌ字状、半楕円状、管状、楔状などといった用途が限定できない製品であり、銅製品としてはバックル状、板状、不明銅製品などがある。金属製品で最も多いのが釘で78点（31.0%）、棒状鉄製品としたものが56点（22.2%）であった。次に多いのが刀子で30点（12.0%）、板状鉄製品の30点（12.0%）がつづく。他に金具類の７点（2.8%）、鎌の４点（1.6%）などがある。金属製品を用途別に建具類、農具類、武具類、生活道具類、工具類の５つに分けた場合、多いものから建具類の89点（35.2%）、生活道具類の34点（13.5%）、農具類の８点（3.2%）、武具類の７点（2.8%）工具類の５点（2.0%）となっている。その他（棒状・板状など）が40.5%を占めているのだが、それ

を除くと、全体としては釘などの建具類の比率が高いことがいえよう。

次に比較的まとまって金属製品が出土しているB1地区、B6地区、B12地区について詳しくみていくことにする。

（1）B1地区

B1地区からは54点の鉄製品が出土している。種数では形状から分類されたものを含めると11種類あり、用途が明確なものについては8種類40点が確認されている。種類別でみると釘が最も多く、24点（44.3%）である。次に多いのが棒状鉄製品の9点（16.6%）、刀子の6点（11.1%）がつづく。他に金具類が3点（5.6%）、鍬・鋤先や鎌でそれぞれ2点づつ（3.7%）、紡錘車や雁股鏃でそれぞれ1点（1.9%）となっている。用途別組成でみると建具類は27点（49.9%）、農具類で5点（9.3%）、武具類で1点（1.9%）、生活道具類で7点（13.0%）、その他で14点（25.9%）となっている。その他のなかで棒状鉄製品9点（16.6%）、板状鉄製品4点（7.4%）が含まれる。このようにしてみると、釘だけで全体の44.3%を占めており建具類としては49.9%と5割が建具類で占められていることになる。また、農具類や生活道具類はどちらも10%程度を占めており、一定量が確認されている。釘などについては、掘立柱建物や竪穴住居などの建物に使用されていたと考えられ、刀子などの生活道具類も日常生活で普通に使用されていたと考えられる。

（2）B6地区

B6地区では全体で93点の製品が出土している。種数では形状から分類されたものを含めると16種類あり、用途が明確なものについては10種類48点が確認されている。種類別でみると釘が最も多く27点（28.9%）である。次に多いのが棒状鉄製品の19点（20.4%）で、板状鉄製品の18点（19.3%）、刀子の12点（12.8%）がつづく。他には金具類3点（3.3%）、鎌2点（2.2%）、鉄鏃1点（1.1%）、錐1点（1.1%）、鋸1点（1.1%）、板状銅製品1点（1.1%）などがある。用途別でみると建具類は30点（32.2%）、農具類で2点（2.2%）、武具類で2点（1.1%）、生活道具類で13点（13.9%）、工具類で2点（2.2%）、その他で42点（45.1%）となっている。種数については16種類と多様であることが分かる。用途別組成では、その他としたものが45.1%あるものの、やはり建具類が32.2%と高い出現率といえよう。また、生活道具類では13.9%占められており、一定量出現していることがみてとれよう。工具類としては錐や鋸が出土しており、これらの工具を用いて製品などの加工を行っていたと考えられる。

（3）B12地区

B12地区では全体で61点の製品が出土している。これらの金属製品については概ね遺構の帰属時期から中世の所産とみられる。種数では形状から分類されたものを含めると15種類あり、用途が明確なものについては8種類25点が確認されている。種類別組成をみると棒状鉄製品の20点（32.8%）が最も多い。次に多いのが釘の17点（27.9%）があり、環状鉄製品の5点（8.2%）、刀子の3点（4.9%）、板状鉄製品の2点（3.4%）、小札2点（3.4%）がつづく。他には菱形金具1点（1.6%）、又鍬状鉄製品1点（1.6%）、包丁1点（1.6%）、小皿状鉄製品1点（1.6%）、鑿1点（1.6%）などがあり、銅製品ではバックル状銅製品1点（1.6%）や不明銅製品1点（1.6%）がある。用途別でみると建具類は18点（29.4%）、生活道具類で5点（8.2%）、武具類で2点（3.4%）、農具類で1点（1.6%）、工具類で1点（1.6%）、その他で30点（49.0%）、不明鉄製品で2点（3.4%）、銅製品で2点（3.4%）となっている。このようにみると用途不明やその他としたものの約50%を除くと、建具類が29.4%と高い比率を占めていることが分かる。また、刀子や包丁といった生活道具類も8.2%と一定量の出現が確認される。武具類の2点は鎧の一部とみられる小札であり、注目される。農具類はB1地区やB6地区に比べて低

い傾向となっている。

以上、Ｂ１地区・Ｂ６地区・12地区の様相をみてきた。ここで、種類別組成・用途別組成について若干比較してみることにする。種数についてはＢ６地区が17種類と多いが、これは出土点数も多いことに起因していると考えられる。また、用途が判明しているものについてはＢ６地区がやはり多く11種類である。Ｂ12地区の８種類についてはやや少ない傾向にあるのだが、用途不明の種類が多く、中世の段階になると形態的に多様になる傾向がある。詳細にみていくと、いずれの地区においても釘や棒状鉄製品としたものが多い傾向にある。用途別組成についてはその他を除いた場合、釘などの建具類が多く、Ｂ１地区では50％程度を占めている。これらの釘や金具類は、掘立柱建物や竪穴住居などの建物や丁度品類など幅広く利用されていたものが反映された結果と考えられる。次に一定の比率を占めている刀子などの生活道具類では、Ｂ１・Ｂ６地区で13～14％を占めているため、日常生活に必要なものの一つと考えられる。農具類なども数％ではあるが出現しているため、農業生産についても積極的に関与していたと考えられる。また、Ｂ６地区では鋸などの工具類で3.3％出現しており、農業以外の手工業生産についても行っていたと考えられる。

ｃ　古代の金属製品組成（表２・第２図）

古代の金属製品がまとまって出土した地区はＢ１地区とＢ６地区である。まず、Ｂ１地区をみると明確な古代包含層は確認されていない。金属製品の多くが包含層出土のものであり、また、明らかな古代の遺構出土のものは少ない。そうした中で、包含層からは中世の出土遺物は著しく少なく、須恵器や土師器、墨書土器、灰釉陶器など古代に帰属する遺物が多量に出土しており、一括投棄された様相を呈している。このため、金属製品の大半のものについても古代の土器類と共に一括投棄されたと考えられるため、今回は中世の遺構から出土したものを除く39点について古代の金属製品として検討していくことにする。次に、Ｂ６地区については古代の遺構出土のものに加えて、古代の包含層（Ⅲ層）出土のものも含めて検討していく。そのため中世包含層や中近世の遺構から出土したものについては除外してある。

以下に古代の金属製品組成を概観するために、Ｂ１地区とＢ６地区を合わせた組成を示し、その後Ｂ１地区とＢ６地区の２地区について個別に詳細をみていくことにする。

①Ｂ１地区とＢ６地区を合わせた点数は105点である。種類でみると15種類が確認されている。そのうち用途が判別できる種類としては、釘、留金、菱形金具付き釘、鎌、鍬・鍬先、鉄鏃、刀子、錐、鋸の９種類63点である。組成をみると釘が41点（39.0％）と最も多い。次に板状鉄製品の19点（18.0％）や板状鉄製品の16点（15.2％）、刀子の10点（9.4％）がつづく。他としては鎌４点（3.8％）、鍬・鍬先２点（1.9％）、錐１点（1.0％）、鋸１点（1.0％）などがある。用途別でみると建具類で44点（41.9％）、農具類で６点（5.7％）、武具類で１点（1.0％）生活道具類で10点（9.4％）、その他で39点（37.1％）などとなっている。こうしてみると釘や金具類などの建具類が41.9％と高い割合を占めている。また、刀子などの生活道具類が9.4％と一定量出現している。

②Ｂ１地区については39点が確認されている。種類でみると８種類が確認されている。それらのうち用途の判明している種類としては、釘、留金、鎌、鍬・鍬先、刀子の５種類25点がある。釘が最も多く17点（43.5％）である。次に多いのが棒状鉄製品の９点（23.1％）で、板状鉄製品の４点（10.3％）、刀子の３点（7.7％）がつづく。他には鍬・鍬先の２点（5.1％）、鎌２点（5.1％）、金具類１点（2.6％）、

L字状鉄製品1点（2.6%）などがある。用途別でみると建具類では18点（46.2%）、農具類で4点（10.2%）、生活道具類で3点（7.7%）、その他で14点（35.9%）となっている。このようにみていくと釘や金具類などの建具類が46.2%と高い出現率といえる。また、鎌や鍬・鍬先などの農具類も10.2%とやや高い出現率を示しており、注目される。刀子などの生活道具類についても7.7%であり一定量を占めている。

分布をみると、全体的に建物群1を中心に分布していることがわかる。用途別にみていくと釘や金具類などの建具類は建物群とやや重なる。SB201である大型掘立柱建物のSP2006やSI02・SI07からは釘が出土し、SP2043からは留金具が出土している。鎌や鍬・鍬先などの農具類は概ね大型掘立柱建物付近に集中している。刀子などの生活道具類はSI02やSX207などの竪穴住居や大型土坑などの建物から出土している。また、製品ではないが鉄滓についても大型掘立柱建物の周辺に分布している。このようにみると、包含層出土の一括投棄されたものについては概ね種類や用途に関係なく大型掘立柱建物周辺に分布していることがみてとれる。特に鍬・鍬先は農業において田や畑を耕す時に重要であり、また、鎌は収穫の時などのに必要不可欠である。竪穴住居などから出土した釘や金具類については、実際に建物で使用されていたと考えられるし、刀子などについても生活の場で大いに活用されていたと考えられよう。

③B6地区古代の製品としては66点が確認されている。種類でみると13種類が確認されている。そのうち用途の判別しているものとしては、釘、留金、菱形金具付き釘、鎌、鉄鏃、刀子、錐、鋸の8種類38点と多様である。種類別でみると釘が最も多く24点（36.4%）である。次に多いのが板状鉄製品の12点（18.2%）で、棒状鉄製品の10点（15.2%）、刀子の7点（10.6%）がつづく。他には金具類2点（3.0%）、鎌2点（3.0%）、鉄鏃1点（1.5%）、錐1点（1.5%）、鋸1点（1.5%）、板状銅製品1点（1.5%）などがある。用途別でみると建具類で26点（39.4%）、生活道具類で7点（10.7%）、工具類で2点（3.0%）、農具類で2点（3.0%）、武具類で1点（1.5%）、その他で24点（19.2%）などとなっている。こうしてみると建具類が39.4%と高い割合を占めていることが言える。また、生活道具類では10.7%を占めており、一定量出現している。また、鋸などの稀少な工具類の出土も注目されよう。県内の古代における鋸の出土例は任海宮田遺跡出土のものだけである。

分布をみると概ね建物群の配置と整合していることがわかる。用途別にみていくと釘や金具類などの建具類はB1地区と同様に建物群でややまとまりをもつ。竪穴住居であるSI13・SI19や方形土坑のSX001からは釘が出土し、SB212である礎石建物直上の包含層からは菱形金具や釘が出土している。また、SI12からは留金が出土している。鎌などの農具類については掘立柱建物のSB208の直上包含層から出土しており、SB213付近の土坑（SK1232）からも出土している。刀子などの生活道具類は竪穴住居からの出土はないが、その周辺から出土している。武具類としては鉄鏃が土坑（SK1136）から出土している。工具類は方形土坑であるSX219から鋸と錐が出土している。また、製品ではないが鉄滓についても方形土坑SX219から9点が集中して出土している。このようにみると、竪穴住居内や掘立柱建物群周辺に釘や金具類といった建具類が分布していることが分かる。また、SX219からは鋸や錐といった工具類や鉄滓9点が集中的に出土していることから、木材などの加工に関わる作業を行っていたと考えられる。

d　まとめ

任海宮田遺跡B地区出土の金属製品について、組成や分布について分析をしてきた。以下にまとめとして箇条書きで示していく。

①任海宮田遺跡Ｂ地区全体で出土した金属製品は252点で、このうち鉄製品は249点である。種数としては34種類あり、これらの中で用途が判別できるものは24種類である。また、種別組成をみた場合、釘が31％と最も高い比率を有している。次に多いのが棒状鉄製品で22.2％である。つづいて刀子で12.0％、板状鉄製品で12.0％となっている。他に金具類の2.8％、鎌の1.6％がある。用途別組成にみた場合、建具類で35.2％、生活道具類で13.5％、農具類で3.2％、武具類で2.8％、工具類で2.0％となっている。全体としては釘などの建具類の割合が高いことがうかがえよう。

②Ｂ１地区では54点の鉄製品が出土している。用途が判別しているもので８種類40点であった。種類別組成でみるとやはり釘が多く44.3％を占めている。他に刀子の11.1％、金具類で5.6％、鍬・鋤先で3.7％、鎌で3.7％、紡錘車で1.9％となっている。用途別組成でみると建具類で49.9％、農具類で9.3％、武具類で1.9％、生活道具類で13.0％となっており、建具類が高い比率を占めていることが看取できる。また、農具類や生活道具類がどちらも10％程度と一定量を占めている。

③Ｂ６地区では93点の金属製品が出土している。用途が明確な種類については10種類48点が確認されている。種類別組成でみると釘が最も多く28.9％である。他に刀子で12.8％、金具類で3.3％、鎌で2.2％、錐で1.1％、鋸で1.1％などがある。用途別組成では、その他としたものを除けば建具類が最も高い32.2％を占めており、生活道具類で13.9％、農具類で2.2％、工具類で2.2％、武具類で1.1％となっている。やはり建具類が32.2％と高い出現率といえよう。また、生活道具類では13.9％を占めており、一定量出現していることがみてとれる。

④Ｂ12地区からは61点の製品が出土しており、多くの製品が中世の所産とみられる。種数では用途が明確なものについては８種類25点が確認されている。種類別組成をみると用途が判別できたものとしては釘の27.9％があり、刀子の4.9％、小札の3.4％などがある。他には又鍬状鉄製品の1.6％、包丁の1.6％、鑿の1.6％などがあり、銅製品ではバックル状銅製品の1.6％も含まれている。用途別でみると建具類で29.4％、生活道具類で8.2％、武具類で3.4％、農具類で1.6％、工具類で1.6％となっている。その他に分類したおよそ50％を除くと、建具類が29.4％と高い比率で出現していることが分かる。また、刀子や包丁といった生活道具類も8.2％と一定量の出現が確認される。武具類の２点は鎧の一部とみられる小札である。

⑤古代の鉄製品がまとまって出土しているのはＢ１・Ｂ６地区の二地区であり、種類では15種類となっている。それらのうち、用途が判明しているのは９種類63点である。最も多く出土している種類は釘であり、39％の出現率である。刀子で9.4％、金具類で2.9％、鎌で3.8％、鍬・鋤先で1.9％などとなっている。また、Ｂ６地区では錐や鋸などの工具類が確認されている。用途別組成でみると、釘や金具類などの建具類で41.9％と最も高い比率であり、生活道具類の9.4％も一定量出現している。Ｂ１地区では農具類で９％が出現しており、工具類は確認されていない。その反面、Ｂ６地区では農具類と工具類でそれぞれ３％が確認されている。分布をみると釘や金具類などの建具類は、建物群を中心に出土している傾向がみてとれるため、掘立柱建物や竪穴住居などの建物や丁度品類などに幅広く利用されていたと考えられる。また、刀子などの生活道具類や農具類についても同じような分布を示している。また、Ｂ６地区のＳＸ219からは工具類である鋸と錐が出土していることから、木材などの加工場的な場所であったことが推定される。

最後に以前筆者がまとめた富山県内の古代の集落遺跡出土鉄製品組成と任海宮田遺跡Ｂ１・Ｂ６地区を比較してみることにする。県内の古代の集落遺跡では釘が最も高い出現率を示しており、34％を占めている。次に生活道具類の刀子が26％とつづく。他に鎌（４％）、紡錘車（４％）、鉄鏃（４％）、

刺突具（４％）、飾り金具（５％）などがみられる。用途別でみると釘などの建具類で40％と優占している。刀子などの生活道具類で27％を占めており、鎌や紡錘車などの農具類が９％を占めている。また、刺突具や生反などの工具類で６％占められている。任海宮田遺跡Ｂ１・Ｂ６地区と県内の集落遺跡の組成を比較すると、いずれも釘などの建具類が多いことが言える。これは、集落遺跡において普通にみられる傾向である。また、生活道具類については27％と9.4％であり、任海宮田遺跡の占める比率が低いことが分かる。農具類・工具類・武具類についても概ね任海宮田遺跡の占める比率が低い傾向にある。全体的に県内の集落出土の鉄製品組成と任海宮田遺跡Ｂ１・Ｂ６地区の組成とでは、建具類を除いては任海宮田遺跡Ｂ１・Ｂ６地区が出現率で低い傾向にある。これは任海宮田遺跡Ｂ１・Ｂ６地区のその他として棒状や板状などの用途不明製品が40％近く占めているためと考えられる。

今回は任海宮田遺跡Ｂ地区の金属製品組成を示すことに重点を置いたが、今後は任海宮田遺跡全体を総括して組成を示し、再度まとめていきたいと考えている。

（中村　亮仁）

註１　「古代における富山県出土の鉄製品－任海宮田遺跡Ａ１・Ａ４・Ｂ１地区出土の鉄製品について－」でまとめたときは、遺構から紡錘車（円盤部分と軸部分）が出土していたが、その後、この遺構が中世のものと判明したため今回は除外した。

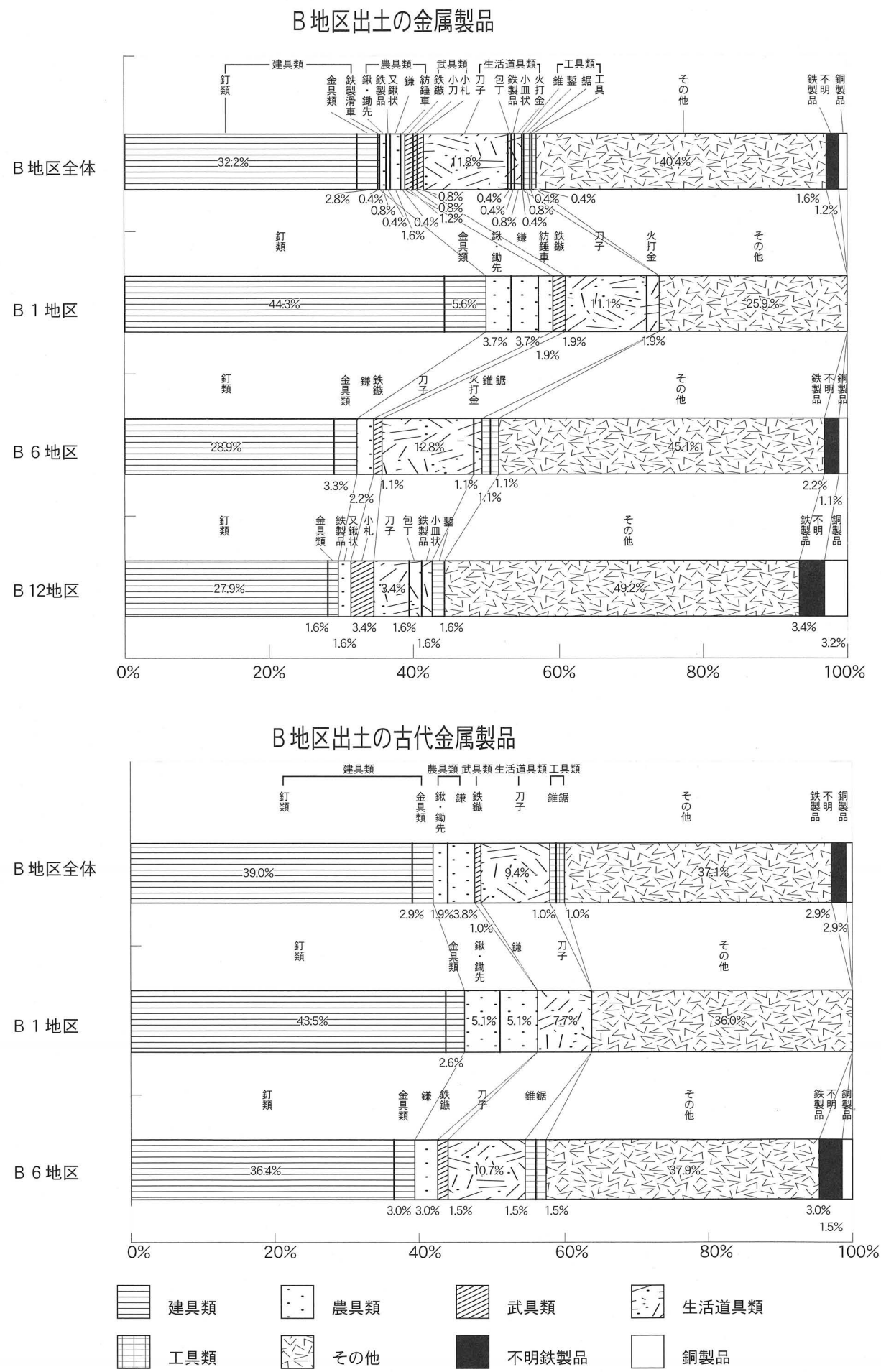
〈参考文献〉

富山県文化振興財団　『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』2006

中村亮仁　「古代における富山県出土の鉄製品－任海宮田遺跡Ａ１・Ａ４・Ｂ１地区出土の鉄製品について－」『富山考古学研究第５号』　富山県文化振興財団　2002

表１　任海宮田遺跡Ｂ地区出土金属製品一覧

用途	種類	地区											合計
		B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B11	B12	B13	B14	
建具類	釘	24			3	2	27		1	17	4		78
	釘or鏃の茎							1					1
	鏃							1			1		2
	留金	3					1						4
	菱形金具						1			1			2
	菱形金具付き釘						1						1
	鉄製滑車				1								1
	小計	27	0	0	4	2	30	2	1	18	5	0	89
農具類	鍬･鋤先	2											2
	又鍬状鉄製品									1			1
	鎌	2					2						4
	紡錘車	1											1
	小計	5	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	8
武具類	雁股鏃	1			1								2
	鉄鏃						1						1
	小刀							1			1		2
	小札									2			2
	小計	1	0	0	1	0	1	1	0	2	1	0	7
生活道具類	刀子	6	1		4		12			3	4		30
	包丁									1			1
	小皿状鉄製品									1			1
	火打金	1					1						2
	小計	7	1	0	4	0	13	0	0	5	4	0	34
工具類	錐						1						1
	鑿				1					1			2
	鋸						1						1
	工具				1								1
	小計	0	0	0	2	0	2	0	0	1	0	0	5
その他	棒状鉄製品	9	5				19			20	3		56
	板状鉄製品	4					18	1		2	5		30
	環状鉄製品						1			5			6
	U字状鉄製品						3						3
	L字状鉄製品	1			1					1			3
	三角板状鉄製品												0
	半楕円状鉄製品				1					1			2
	管状鉄製品									1			1
	楔状鉄製品						1						1
	小計	14	5	0	2	0	42	1	0	30	8	0	102
不明鉄製品							2			2			4
鉄製品小計		54	6	0	13	2	92	4	1	59	18	0	249
銅製品	バックル状銅製品									1			1
	板状銅製品						1						1
	不明銅製品									1			1
	小計	0	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	3
合計		54	6	0	13	2	93	4	1	61	18	0	252
鉄滓（椀形滓を含む）		22	0	1	1	2	98	1	2	6	5	3	141


B地区出土の金属製品
建具類
農具類
武具類
生活道具類
工具類
釘類
金具類
鉄製滑車
鍬・鋤先
鉄製品
又鍬状
鎌
紡錘車
鉄鏃
小刀
小札
刀子
包丁
鉄製品
小皿状
火打金
錐
鑿
鋸
工具
その他
不明鉄製品
銅製品
B地区全体
B１地区
B６地区
B12地区
32.2%
11.8%
40.4%
44.3%
5.6%
11.1%
25.9%
28.9%
12.8%
45.1%
27.9%
3.4%
49.2%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
B地区出土の古代金属製品
39.0%
9.4%
37.1%
43.5%
5.1%
5.1%
7.7%
36.0%
36.4%
10.7%
37.9%
建具類
農具類
武具類
生活道具類
工具類
その他
不明鉄製品
銅製品

第１図　金属製品の組成

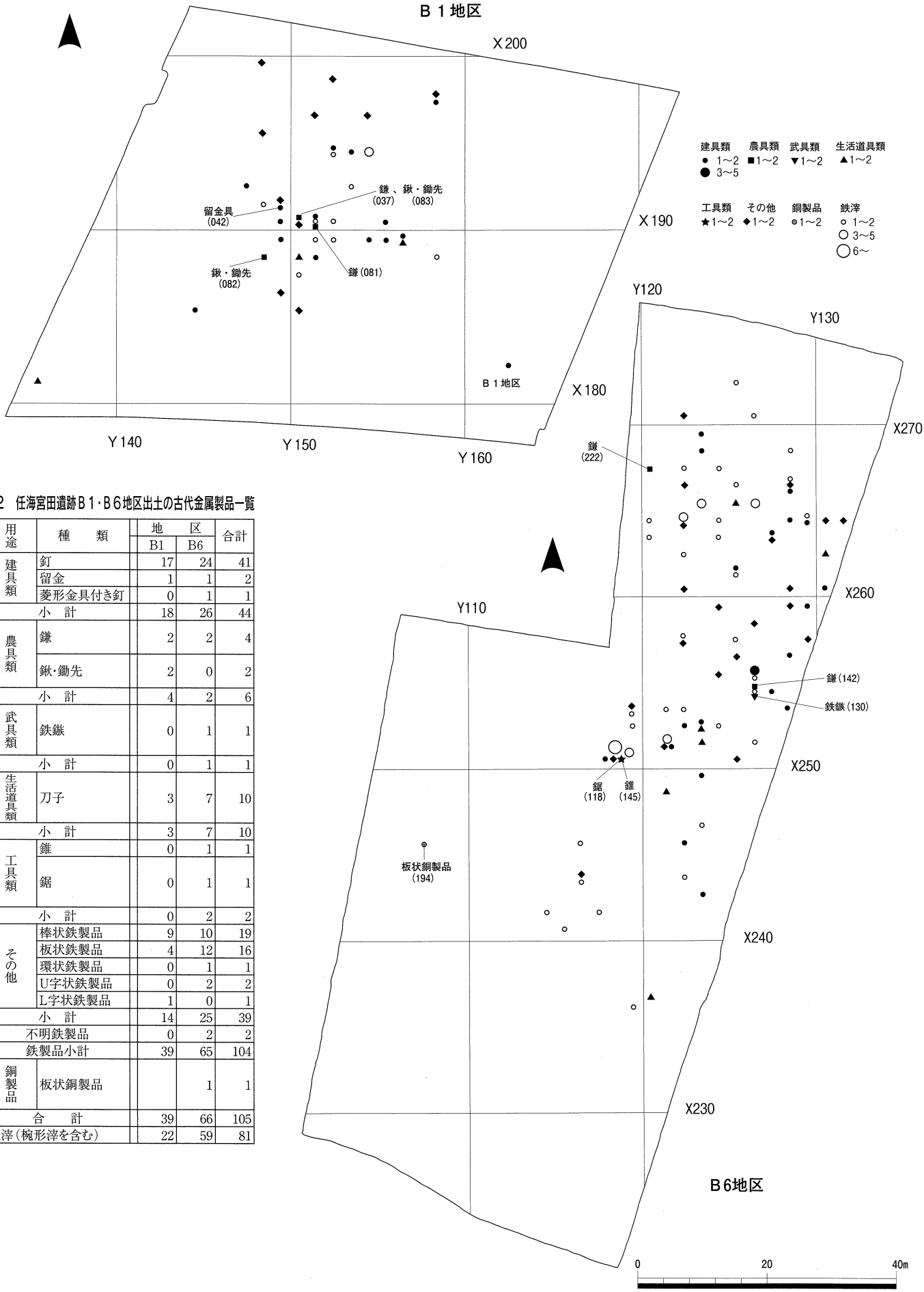


表2　任海宮田遺跡B１・B６地区出土の古代金属製品一覧

用途	種類	地区 B1	地区 B6	合計
建具類	釘	17	24	41
	留金	1	1	2
	菱形金具付き釘	0	1	1
	小計	18	26	44
農具類	鎌	2	2	4
	鍬･鋤先	2	0	2
	小計	4	2	6
武具類	鉄鏃	0	1	1
	小計	0	1	1
生活道具類	刀子	3	7	10
	小計	3	7	10
工具類	錐	0	1	1
	鋸	0	1	1
	小計	0	2	2
その他	棒状鉄製品	9	10	19
	板状鉄製品	4	12	16
	環状鉄製品	0	1	1
	U字状鉄製品	0	2	2
	L字状鉄製品	1	0	1
	小計	14	25	39
不明鉄製品		0	2	2
鉄製品小計		39	65	104
銅製品	板状銅製品		1	1
合計		39	66	105
鉄滓(椀形滓を含む)		22	59	81

第２図　古代の金属製品分布図

6　大型掘立柱建物について

はじめに

任海宮田遺跡は、主に小型竪穴住居で構成された集落で、この辺り一帯に展開する遺跡群は、奈良・平安時代では耕地開発を目的とする開墾集落とみられている。今回の調査でも、Ｂ地区全体で竪穴住居が36棟確認されている。Ｂ１地区では竪穴住居と共に、６棟の掘立柱建物が検出されており、そのうち２棟（ＳＢ201・202）は廂を含めた建物専有面積が100㎡を越す大型建物である。ＳＢ201は南北両面に廂をもち、ＳＢ202は北面に廂をもつ東西棟の建物である。また大型掘立柱建物の領域では、施釉陶器や畿内系の黒色土器など他地域からの搬入品や、前節で詳述した土錘、「平」と書かれた墨書土器の集中など、他地区とは異なる遺物の出土傾向が窺える。

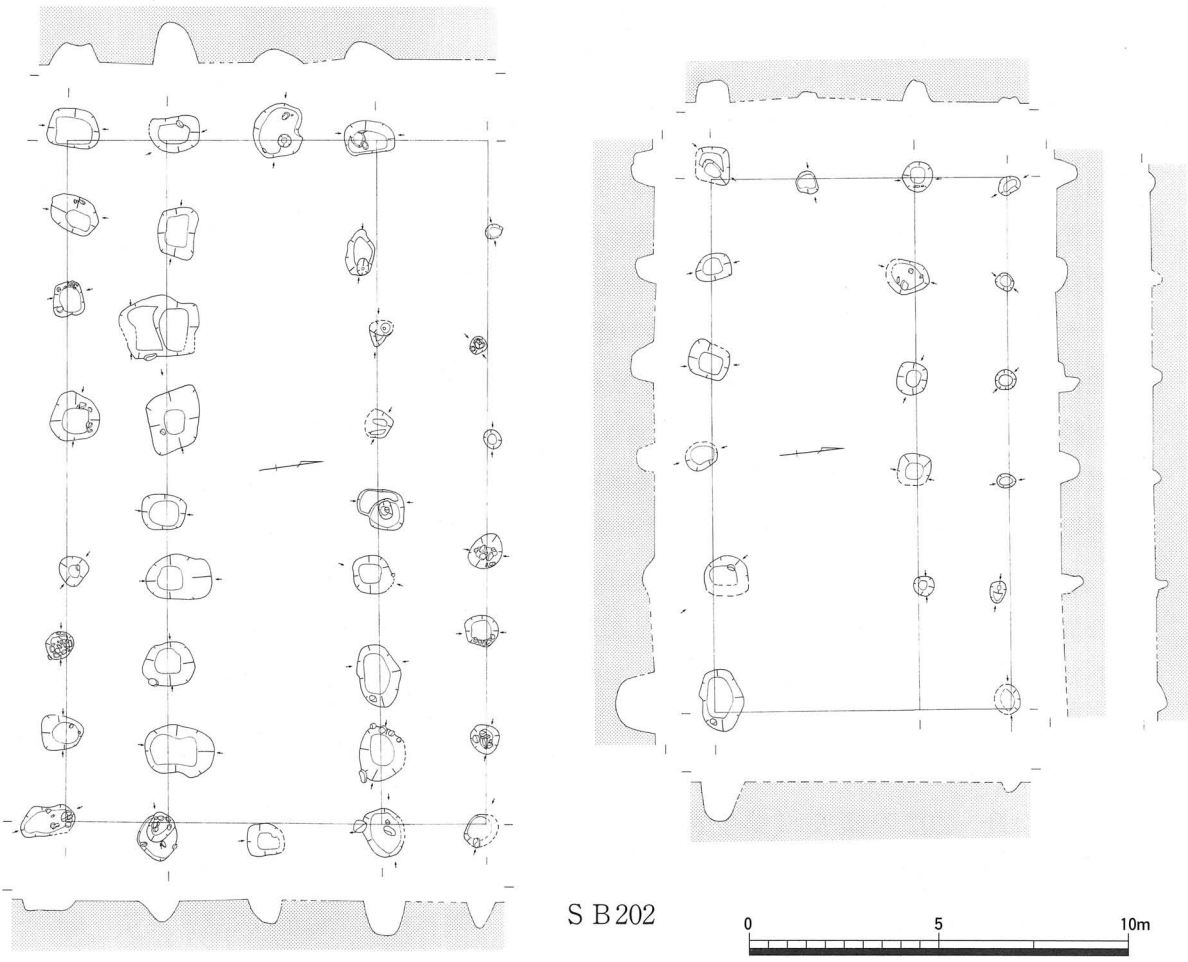
昨今県内でも建物占有面積が50㎡を越す大型掘立柱建物の検出例が増加している。ここではＳＢ201・202の建物の規模や配置、遺物の出土傾向から県内の事例と比較し、ＳＢ201・202が県内でどの様な位置付けになるのか検討したい。ＳＢ201・202は集落のなかでも管理運営など中心的な役割を果たしていたことは、出土遺物等の傾向からも確実であり、これらを整理・検討することは、当時の社会や開発状況の一端を窺ううえで有効と考えられる。

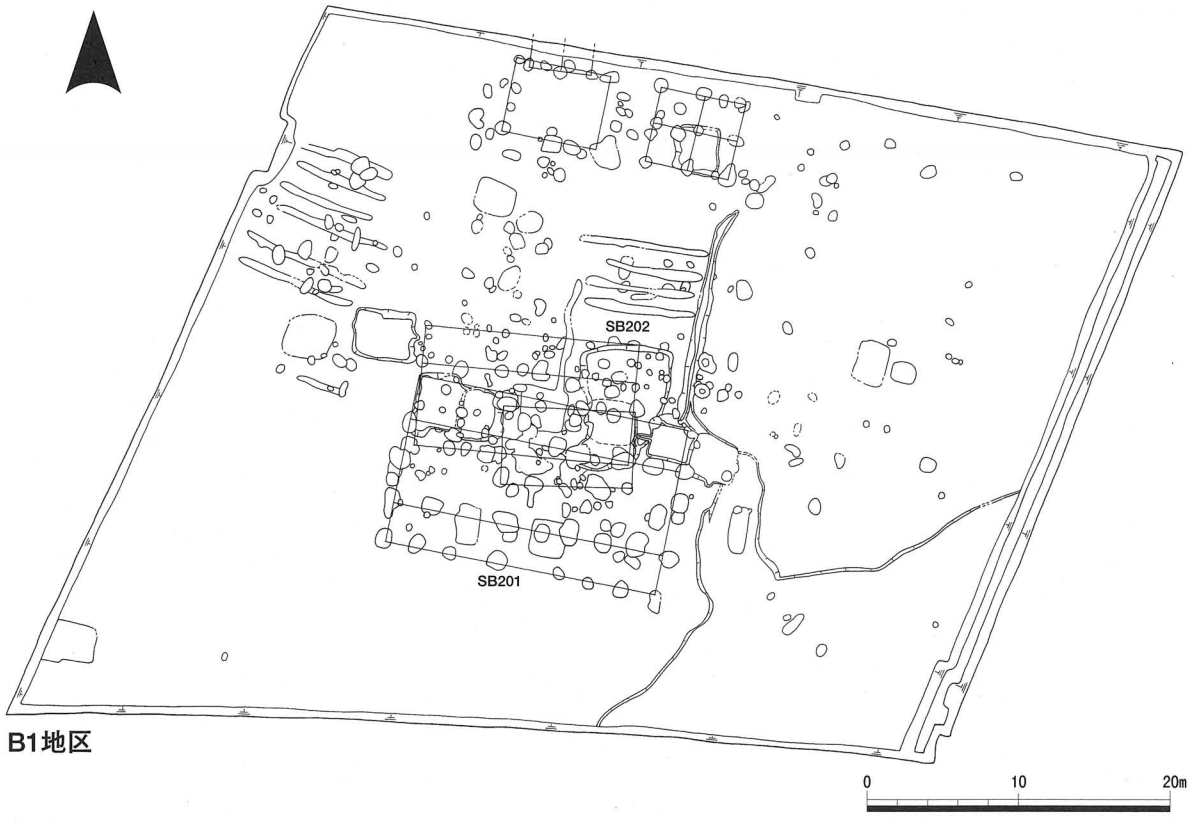
a　ＳＢ201・202の概要（第１図）

前章の古代建物群の変遷で前述したとおり、ＳＢ201・202はＢ１・Ｂ２地区の位置に展開した建物群１を構成する建物のひとつである。建物群１はⅡ期～Ⅴ期にかけて変遷した建物群で、Ⅱ期～Ⅳ期までは掘立柱建物、Ⅴ期は竪穴住居で構成される。ＳＢ202がⅢ期・ＳＢ201がⅣ期のものである。

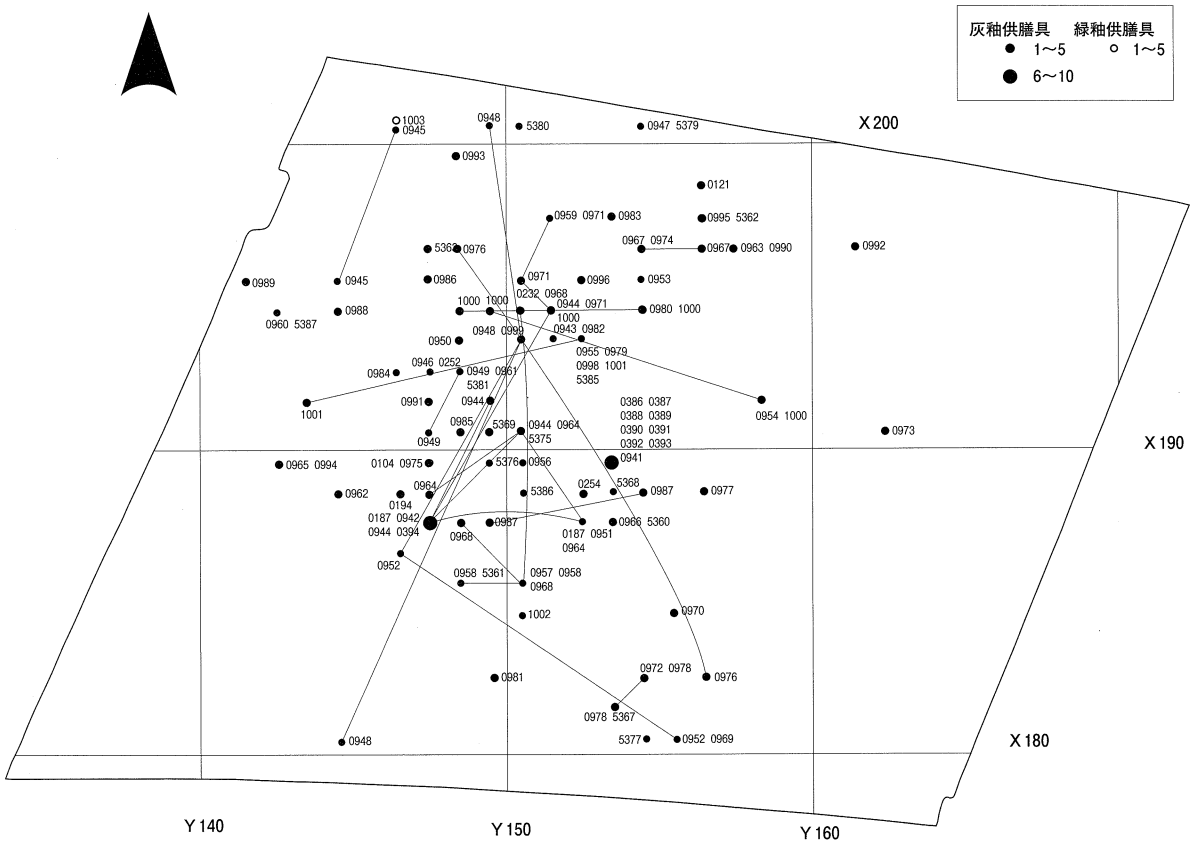
・ＳＢ202は遺構の重複が激しく、調査当初は２間×４間以上と推定したが、廂の配置等から２間×５間の側柱建物として復元した。身舎北側に一面の廂が付き、建物占有面積が廂を含めて110.6㎡を測る。柱穴は身舎部分が円形ないしは略方形を呈し、廂部分は円形を呈す。柱根痕跡は平面で確認出来ず、断面で数箇所認められた。柱穴の配置では、桁行き方向の柱穴間距離がやや不規則である。ＳＰ2043からは建物廃絶時に一括廃棄されたと考えられる須恵器（双耳壺・甕）、土師器・黒色土器（椀）、灰釉陶器（椀）、製塩土器などの遺物（171～188）が出土しており、Ⅲ期（９世紀後半）に廃絶した建物と考えられる。ＳＢ202の帰属するⅢ期の建物は掘立柱建物が２棟配置され、ＳＢ202の北側約20ｍにＳＢ206が位置する。建物の一部しか確認出来ていないが、後続の建物群の配置から倉庫と考えられる。またＳＢ202と206の間は遺構の希薄なスペースが広がり、南北に２棟並列に配置される。

・ＳＢ201は身舎が２間×８間で、南側と北側に廂をもつ二面廂の側柱建物である。廂は南北両面とも７間で、５番目の柱部分が身舎と対応しない。廂を含めた建物専有面積は189㎡を測り、柱穴は身舎・廂とも円形ないしは楕円形を呈す。柱穴掘り方の規模は、地山が砂地であったためか、直径約１～1.8ｍと大型で、深さも一定しない。柱穴の配置では、桁行き方向の柱穴間距離がやや不規則である。ＳＢ201は重複関係や出土遺物、建物規模や配置等からＳＢ202に後続するものと考え、Ⅳ期（９世紀末～10世紀初頭）の建物とした。Ⅳ期の建物配置はⅢ期の配置が踏襲されつつ規模を拡大する。ＳＢ201は、ＳＢ202と重複する位置にあり、主屋と考えられる。北側にはⅢ期と同様、遺構の希薄

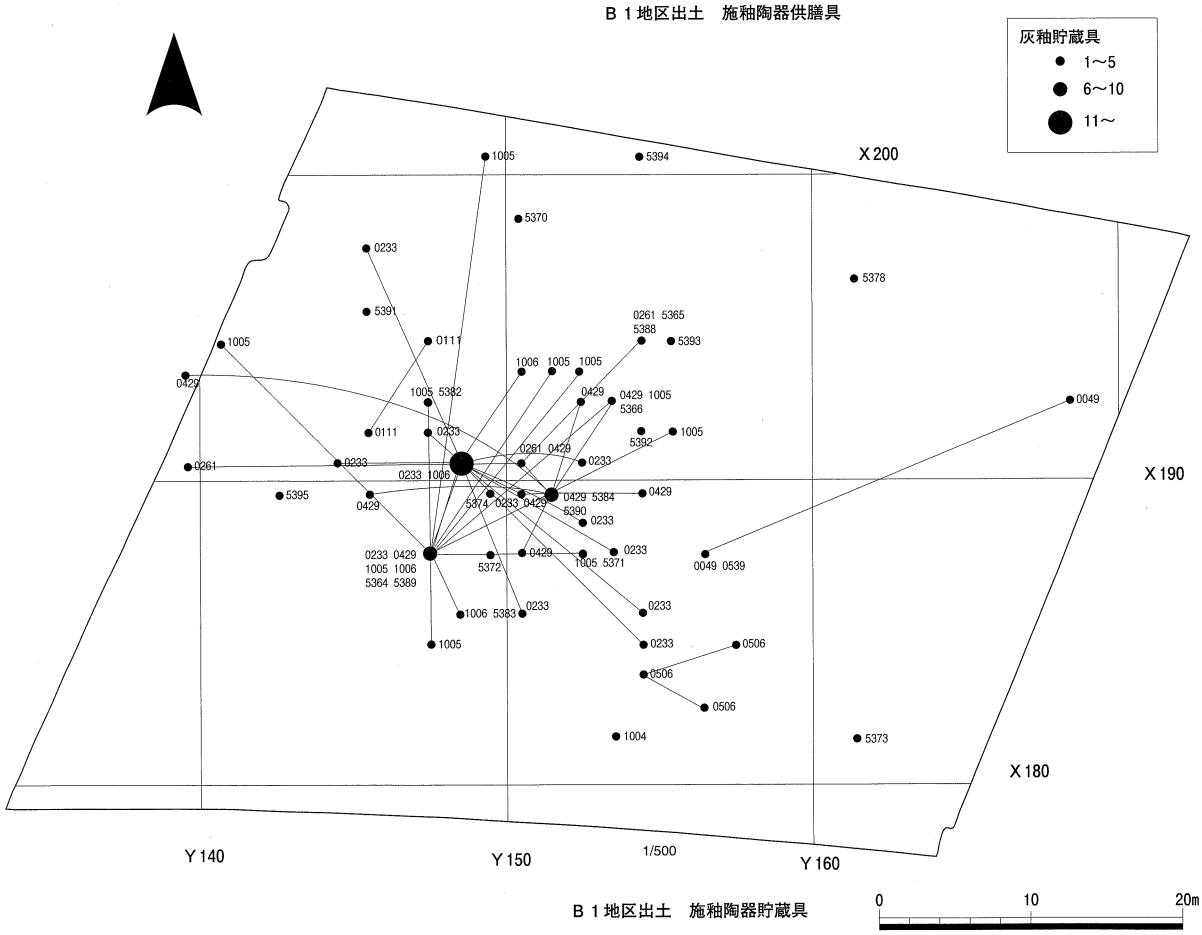




第１図　B1地区の大型建物配置図



B１地区出土　施釉陶器供膳具



B１地区出土　施釉陶器貯蔵具

第２図　Ｂ１地区における施釉陶器の分布

な部分を挟んで倉庫が２棟（ＳＢ204・205）並列に配置される。またＢ２地区のＳＤ019の東側にもＳＢ207が配置される。

建物群１は、Ⅴ期になると管理施設としての機能を失ったのか、掘立柱建物に替わって一辺３ｍ前後の竪穴住居だけで構成される建物群へと変化する。

ｂ　施釉陶器の分布について

Ｂ地区では緑釉陶器や灰釉陶器などの搬入品が出土しており、特にＢ１・Ｂ６地区に集中して出土する。施釉陶器の内訳は破片数で、Ｂ１地区261点、Ｂ６地区60点を数え、遺物の分布状況を第２・第４図で示した。分布については第２章第１節の分布図の手法に従いドットで表現した。出土量の多いＢ１地区については供膳具と貯蔵具に分けて図示した。実測図のあるものについてはドットの横に報告書番号を明記した。遺物の詳細については表１～２に記載した。

建物群１の領域であるＢ１地区では、施釉陶器261点のうち緑釉陶器は１点だけである。緑釉陶器は軟質陶で、京都洛北産の椀である。灰釉陶器は個体数で138点を数え椀、皿、小椀、短頸壺、、長頸壺、広口壺がある。産地は猿投産を中心に尾北産がわずかにあり、東濃産はみられない。灰釉陶器の時期は黒笹90号窯式のものが中心で、僅かに折戸53号窯式のものが認められる。

灰釉陶器の分布状況は、接合関係から小片となって原位置から散乱しているものも窺えるが、傾向としては、供膳具・貯蔵具ともに大型掘立柱建物を中心に分布している。一方、緑釉陶器は調査区の北西側に１点分布する。遺物の時期と分布状況から緑釉陶器は流れ込みの可能性が高い。

Ｂ１地区の灰釉陶器について検討した内田亜紀子氏（2001）によると、黒笹90号窯式のものが大半で、僅かに折戸53号窯式まで下るものがあることから、黒笹90号窯式の製品を一括して購入し、その後必要に応じて逐次補充されたものとされる。また、高級品とされる灰釉陶器の輪花椀・輪花皿・段皿などがみられず、出土した椀・皿等の食器類に使用痕が著しく認められることから、公的な祭祀に関連した使用と言うよりはむしろ私的な場における日常的な食器としての使用が想定されている。以上のことから、灰釉陶器はＳＢ202のⅢ期に一括で購入し、ＳＢ201のⅣ期まで必要に応じて補充しながら管理者層の日常的な食器として利用されたものと考えられる。なお、他地域の搬入品は施釉陶器だけでなく、幾内系黒色土器の椀や能登地方に類例をもつ製塩土器なども認められる。識字遺物では円面硯や転用硯が出土しており、墨書土器も前節で触れたような特徴のある出土傾向を示す。

建物群３の領域であるＢ６地区では、施釉陶器は個体数で20点が出土した。そのうち灰釉陶器が６点で、緑釉陶器は14点認められる。緑釉陶器は椀と皿で、2004のみ硬質のものであり、他は軟質のもので、京都洛北産のものである。灰釉陶器は椀、壺、長頸壺が出土している。産地は猿投産で、黒笹14号窯式の椀も出土している。緑釉陶器は供膳具、灰釉陶器は貯蔵具が中心となる。

緑釉陶器の分布状況は調査区北側に纏まって分布しており、灰釉陶器は調査区中央から北側にかけて分布している。遺物の時期と分布状況から、建物群３のⅡ期を中心に使用れたようである。建物群３のⅡ期は、ＳＢ211・213とＳＩ14で構成される建物群で、掘立柱建物がＬ字状に配置される。また、識字遺物では円面硯や風字硯・転用硯が出土し、特殊な遺物として、鳥形須恵器や焼台が出土する。建物群３では、大型掘立柱建物は認められないが、Ⅱ期では中核域のひとつと考えられており、Ⅲ・Ⅳ期も土師器焼成遺構など手工業生産に関わる特殊な領域と考えられる。建物群３では、他地域の搬入品が建物群１の前段階から当地にもたらされていた状況が窺える。

以上のことから、任海宮田遺跡ではＳＢ201・202の前段階であるⅡ期に緑釉陶器の椀・皿などを

中心に建物群３で他地域の製品が搬入されていたこと。またＳＢ202が出現するⅢ期の段階では、建物群１で灰釉陶器を中心に新たに一括搬入し、後続するＳＢ201のⅣ期まで補充しながら灰釉陶器が使用された状況が窺えた。使用状況については私的な日状の食器としての利用が考えられる。なお、建物群１のＳＢ202が出現するⅢ期に、新たに灰釉陶器を一括搬入している状況や、前節で述べた墨書土器の「平」「成」の分布状況から、その需要層は建物群３とは異なる集団が運営していた可能性があり、当地を管理した地方官人や在地豪族などの比較的富裕な階層と考えられる。収穫物については、倉庫群が認められないことから、その本拠地か、あるいは更に上位のクラスのもとに運ばれた可能性が高い。

c　県内の大型掘立柱建物ついて

北陸では、湯尻修平氏（1983）や田島明人氏（1983）の掘立柱建物の論考が基礎となり、楠正勝氏（1987）の大型建物に関する規格類別に関する論考、宇野隆夫氏（1991）の北陸古代村落に関する体系的な論考や川端誠氏（1995）の単体建物の分析論、宇野隆夫氏（2001）の私的所有地・経営拠点に関する分析など様々な視点の古代掘立柱建物を取り巻く研究が蓄積されている。富山県では、古くは高瀬・じょうべのま両遺跡での荘園建物の検討にはじまり、駒見和夫氏（1986）の建物構成による集落論、岸本雅敏氏（1986）・森秀典氏（1988）の掘立柱建物に関する論考、岡本淳一郎氏（1995）の集落構造論、河西健二氏（1996）の建物構造論、森隆氏（1997）単位建物群構成の検討などがある。ここでは先学の研究を参考に、任海宮田遺跡の大型掘立柱建物がどの様な位置づけになるのか検討したい。

検討にあたり、岸本・森秀典の両氏の分類基準である桁行き５間以上のものを大型建物とし、県内の類例を表２に示した。遺跡の位置および建物の配置や規格については第５～８図に示した。

大型掘立柱建物は、荘園庄所や官衙（駅、津、郷衙など）、古代寺院や有力者の居宅および拠点など様々な属性をもつと考えられる。その大型建物がどのような規格と配置を持ち、どのような性格の集落で採用されているのか分類することにより、より特徴的な傾向を抽出することが可能ではないかと考える。その為、ここでは各遺跡を立地条件や建物配置、墨書土器の傾向や特殊遺物の出土状況から、性格を分類したい。

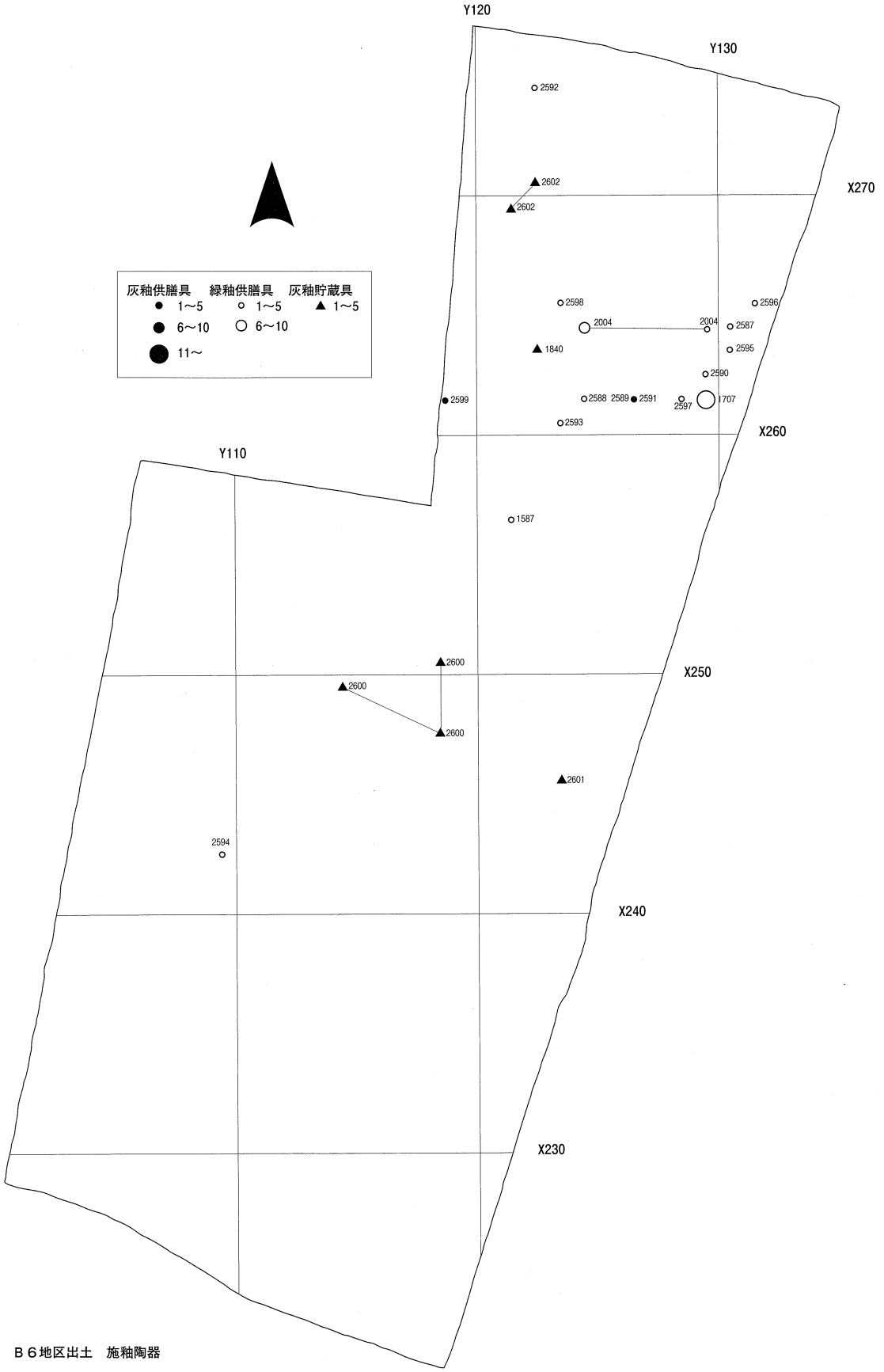
①　越中国府関連遺跡[勝興寺南接地区]（第７図）

伏木台地上に立地する当地区は、越中国庁跡の推定地と評価されている勝興寺境内の南側にある。この一帯は御亭角と呼ばれ、白鳳時代前期の瓦が出土することより、廃寺跡の存在が指摘されている。当地区からは建物跡と廊跡が確認されており、施釉陶器（緑釉・灰釉）、白磁、陶硯、製塩土器、瓦などが出土している。大型建物はＳＢ01（方形掘方）とＳＢ02（円形掘方）の２棟が確認されており、時期差があるようだ。方位はほぼ正方位を示す。

②　麻生谷遺跡（第７図）

古墳時代から中世に亘る複合遺跡であり、古代では８世紀後半～９世紀代の遺構が確認されている。建物は掘立柱建物で構成されており、９棟確認されている。建物群は重複関係から、最低２時期の変遷をもつ。遺物では施釉陶器（灰釉・緑釉）、「人長」などの墨書土器、土錘、斎串、扇子骨などがある。また遺跡が「川人（川合）」駅の推定地近辺にあり、墨書土器の「人長」が駅との関連を想起させることから、駅家の可能性も示唆されている。大型建物はＳＢ207・208がある。規模の確認できるＳＢ208は２間×７間の側柱建物で85.54㎡を測る。柱穴掘方は方形を基調とし、柱穴配置は綺

第 3 図　B6地区の遺構配置図



Ｂ６地区出土　施釉陶器

第４図　Ｂ６地区における施釉陶器の分布

表1　B地区出土の古代施柚陶器一覧(1)

報告書番号	地区名	遺構番号	産地	窯形式	写真番号	遺物	器種
49	B1	SI02	猿投	K90	320	灰釉陶器	広口壺
104	B1	SI03	尾北		322	灰釉陶器	Ⅲ
111	B1	SI07			322	灰釉陶器	壺
121	B1	SI06	猿投	K90	322	灰釉陶器	Ⅲ
187	B1	SP2043	猿投	K90新	325	灰釉陶器	椀
194	B1	SP2048	猿投	O53	325	灰釉陶器	椀orⅢ
232	B1	SK1040	猿投	K90	326	灰釉陶器	椀
233	B1	SK2043	猿投	K90	325	灰釉陶器	短頸壺
252	B1	SK1061	猿投	K90～O53	326	灰釉陶器	椀
254	B1	SK1062	猿投	K90～O53	326	灰釉陶器	椀orⅢ
261	B1	SK1068	猿投	K90	326	灰釉陶器	長頸壺
386	B1	SX001	猿投	K90	330	灰釉陶器	椀
387	B1	SX001	猿投	K90	330	灰釉陶器	椀
388	B1	SX001	猿投	K90	330	灰釉陶器	椀
389	B1	SX001	猿投	K90	330	灰釉陶器	Ⅲ
390	B1	SX001	猿投	K90	330	灰釉陶器	Ⅲ
391	B1	SX001	猿投	O53	330	灰釉陶器	Ⅲ
392	B1	SX001	尾北		330	灰釉陶器	Ⅲ
393	B1	SX001	猿投		330	灰釉陶器	Ⅲ
394	B1	SX001	猿投	K90	330	灰釉陶器	Ⅲ
429	B1	SX204	猿投	K90	330	灰釉陶器	短頸壺
506	B1	SD218	猿投	K90	332	灰釉陶器	長頸壺
941	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	椀
942	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	椀
943	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	椀
944	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	椀
945	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	椀
946	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	椀
947	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	小椀
948	B1		猿投		345	灰釉陶器	椀
949	B1		猿投		345	灰釉陶器	椀
950	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	椀
951	B1		猿投		345	灰釉陶器	椀
952	B1		猿投	K90	345	灰釉陶器	椀
953	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
954	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
955	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
956	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
957	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
958	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
959	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
960	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
961	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
962	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
963	B1		猿投	K90新	346	灰釉陶器	椀
964	B1		猿投	K90新	346	灰釉陶器	椀
965	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ?
966	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
967	B1		猿投	O53	346	灰釉陶器	椀
968	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
969	B1		猿投	K90新	346	灰釉陶器	椀
970	B1		猿投	O53	346	灰釉陶器	椀?
971	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
972	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
973	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
974	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
975	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
976	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
977	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
978	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀
979	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
980	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
981	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
982	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
983	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
984	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ

表2　B地区出土の古代施柚陶器一覧(2)

報告書番号	地区名	遺構番号	産地	窯形式	写真番号	遺物	器種
985	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
986	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
987	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
988	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
989	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀orⅢ
990	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀orⅢ
991	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
992	B1		猿投		346	灰釉陶器	Ⅲ
993	B1		猿投	O53	346	灰釉陶器	Ⅲ
994	B1		尾北		346	灰釉陶器	椀orⅢ
995	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
996	B1		尾北		346	灰釉陶器	椀
997	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	椀orⅢ
998	B1		尾北		346	灰釉陶器	Ⅲ
999	B1		尾北		346	灰釉陶器	Ⅲ
1000	B1		尾北	S4	346	灰釉陶器	Ⅲ
1001	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
1002	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	Ⅲ
1003	B1		洛北		346	緑釉陶器	椀
1004	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	広口壺
1005	B1		猿投	K90	346	灰釉陶器	広口壺
1006	B1				346	灰釉陶器	壺
1328	B2				353	灰釉陶器	壺
1336	B3				353	灰釉陶器	壺
1337	B3		猿投	K90	353	灰釉陶器	椀orⅢ
1338	B3		猿投	K90	353	灰釉陶器	椀orⅢ
1339	B3		猿投	K90	353	灰釉陶器	椀orⅢ
1459	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀
1460	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀
1461	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀
1462	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	Ⅲ
1463	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀　or Ⅲ
1464	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀
1465	B4		猿投	K90新?	356	灰釉陶器	椀
1466	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀　or Ⅲ
1467	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀　or Ⅲ
1468	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀　or Ⅲ
1469	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	椀　or Ⅲ
1470	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	壺
1471	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	壺
1472	B4		猿投	K90	356	灰釉陶器	壺
1587	B6	SI15	洛北		359	緑釉陶器	椀
1707	B6	SP2100	洛北		362	緑釉陶器	椀
1840	B6	焼成遺構	洛北		365	灰釉陶器	長頸壺
2004	B6	SX210	畿内		370	緑釉陶器	椀
2587	B6		洛北		383	緑釉陶器	椀
2588	B6		洛北		383	緑釉陶器	Ⅲ
2589	B6		洛北		383	緑釉陶器	Ⅲ
2590	B6		洛北		383	緑釉陶器	椀
2591	B6		猿投	K14	383	灰釉陶器	Ⅲ
2592	B6		洛北		383	緑釉陶器	Ⅲ?
2593	B6		洛北		383	緑釉陶器	Ⅲ
2594	B6		洛北		383	緑釉陶器	椀
2595	B6		洛北		383	緑釉陶器	椀 or Ⅲ
2596	B6		洛北		383	緑釉陶器	椀 or Ⅲ
2597	B6		洛北		383	緑釉陶器	Ⅲ
2598	B6		洛北		383	緑釉陶器	椀
2599	B6		猿投	K14	383	灰釉陶器	椀
2600	B6				383	灰釉陶器	壺
2601	B6				383	灰釉陶器	壺
2602	B6				383	灰釉陶器	壺
2647	B7				384	灰釉陶器	耳Ⅲ
3027	B13				392	灰釉陶器	壺
3061	B14		洛北		393	緑釉陶器	椀 or Ⅲ

麗に並ぶ。

③　中保Ｂ遺跡（第７図）

縄文後期から中世の遺構が確認される複合遺跡であり、古代では７世紀後半～11世紀代前半頃までの遺構が確認されている。古代の様相は概ね３期に細分され変遷する。１期は７世紀後半で３間４面廂のＳＢ50を中心に建物群が形成されており、その形態から豪族層の居宅の可能性が指摘されている。２期は８世紀中頃～９世紀中頃のものとされ、船着き場遺構の存在から水上交通の拠点としての機能が想定されている。建物群は調査地内で東と北の２箇所に別れており、水上交通の拠点であった東側建物群が活動の中心とされる。３期は水上交通の活動が停止した９世紀中頃以降のもので、北側建物群のみで運営されたようである。大型建物ＳＢ01・07もこの時期のものとされる。特筆される出土遺物としては、１期では暗文土器、２期では暗文土器や「案調」「案鳥」「津三」などの墨書土器、３期では灰釉陶器142点、緑釉陶器４点があり、「林□」「□家」「大家」などの墨書土器が出土している。建物群の性格としては、１期が豪族居宅に関連するもの。２期が出土遺物や周囲の地理的環境から官衙的な様相を示す物流の中継点ないしは出先機関、３期は官衙と理解されている。

大型掘立柱建物は、１期ではＳＢ50があり、３間４面廂の建物で、柱穴掘方は、身舎・廂とも円形である。３期ではＳＢ01・07がある。ＳＢ01は２間×６間で東面に廂をもち、建物専有面積106.88㎡を測る。桁行き方向の柱穴間距離がやや不規則で、柱穴掘方は身舎部分が方形、廂部分が円形で、３期の中心施設と考えられる。

④　常国遺跡

庄川扇状地扇端部付近の氾濫原上に立地する。古代では奈良・平安時代の掘立柱建物と竪穴住居からなる集落が確認されている。遺構は８世紀後半に中心をおく掘立柱建物群と９～10世紀の竪穴住居群とに大別される。遺物では瓦塔以外は一般集落の遺物と同様である。資料では８世紀後半の井戸や掘立柱建物が大型であることから、官衙的な施設としている。大型建物ＳＢ01は同一位置での建て替えが認められる。両者はＳＢ02とＬ字配置を呈し、廂側が広場となる。東大寺領石栗荘の荘所あるいは東大寺領荘園群の拠点との説[註1]もある。

⑤　久泉遺跡

現説資料のため詳細は不明であるが、８世紀後半～９世紀前半の荘園経営に関わる集落とされ、床面積約77㎡を測る大型建物（ＳＢ01）の他、時期の異なるＳＢ02や周囲に４棟からなる竪穴住居群が確認されている。建物群の東側では、時期の異なる人工的に造営された大溝（ＳＤ09）が検出されている。主な遺物としては土師器や須恵器など一般的な遺物が出土している。

⑥　高瀬遺跡

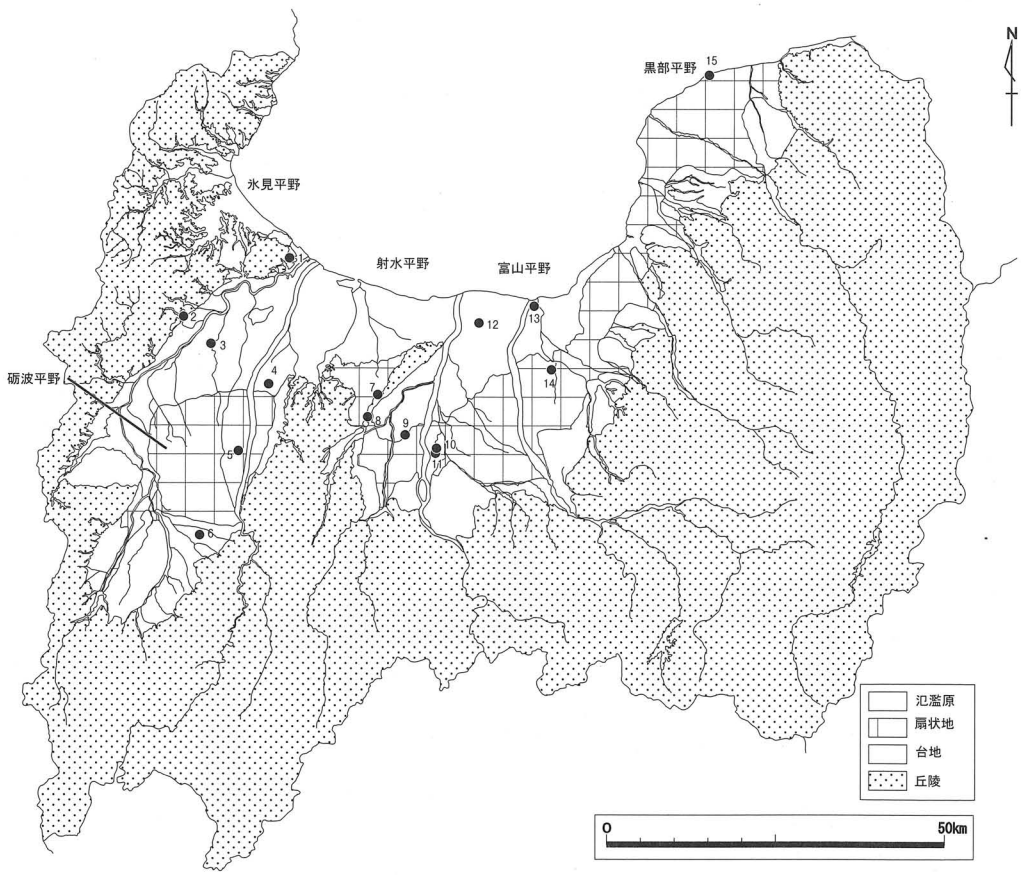
９世紀代の掘立柱建物群が確認されており、荘園遺跡として著名である。石仏地区と穴田地区の両地区が調査されており、石仏地区では大型建物３棟がコ字状に配置されている。また建物群の南側には大きく蛇行した旧河道が位置する。特殊遺物には鉄鉢、浄瓶、「家成」「衣」「衣□」「南□□」「几万呂□」「□丸」などの墨書土器[註2]や瓦塔、皇朝十二銭、「昔右支□易曹上人□難・・」と書かれた木簡などがある。石仏地区の大型建物がＳＢ10を中心にコ字状に配置されていることや、文献資料などから東大寺領の荘園荘所およびその関連施設とされる。

⑦　向野池遺跡（第７図）

ＳＢ03は南北東面に廂をもつ大型建物で、約５ｍ南西側にほぼ並行する方向でＳＢ05～07が配置される。同時併存かどうかは不明であるが、ＳＢ05～07が３回重複しており、同時併存していた可

表２　富山県の大型掘立柱建物一覧

番号	遺跡名	竪穴住居	建物番号	棟方向	規模		桁行×梁行(m)	面積(㎡)	掘方	時期
1	越中国府関連	×	SB01	東西	3+α×3	身舎	8.10 α × 7.20	58.32 α	長方形	8C～10C
			SB02	南北	5×2	身舎	12.00 × 4.80	57.60	長方形	
2	麻生谷	×	SB207	東西	4+α×2	身舎	9.20 α × 5.42	49.86 α	方	8C後～9C
			SB208	東西	7×2	身舎	16.20 × 5.28	85.54	方	
3	中保B	×	SB01	南北	6×2東廂1	身舎	13.36 × 5.30	70.81	方形	8C中～11C前半
					東廂	廂含む	13.36 × 8.00	106.88	円形	
			SB07	南北	4+α×2	身舎	12.45 α × 5.00	62.25	略方形	
			SB50	東西	3×2四面廂	身舎	7.80 × 4.60	35.88	円形	
					四面廂5×4	廂含む	12.45 × 8.90	110.81	円形	
4	常国	○	SB01古	南北	7×3東廂1	身舎	14.00 × 5.40	75.60	略方形	8C中～9C前
					東廂	廂含む	14.00 × 8.20	114.80	円形	
			SB01新	南北	6×3東廂1	身舎	12.00 × 5.40	64.80	略方形	
					東廂	廂含む	12.00 × 8.50	102.00	円形	
			SB02	東西	6×2南廂1	身舎	12.60 × 5.40	68.04	円形	
					南廂	廂含む	12.60 × 8.40	105.84	円形	
5	久泉	○	SB01	南北	5×2	身舎		77.00	楕円・隅丸方	8C後半～9C前半
6	高瀬(石仏地区)	×	SB01	南北	5×2東西廂2	身舎	10.50 × 4.60	48.30	楕円	9C前
					東西廂	廂含む	10.50 × 10.20	107.10	円形	
			SB02	東西	5×2南北廂2	身舎	9.90 × 3.70	36.63	楕円	
					南北廂	廂含む	9.90 × 7.60	75.24	円形	
			SB03	東西	6+α×1+α	身舎	11.20 α × 2.40 α	26.88 α	楕円	
7	向野池	×	SB03	東西	6東廂×2南北廂	身舎	14.00 × 4.90	68.60	円形	9C前半～10C初頭
					廂部分含む	廂含む	14.00 × 9.00	126.00	円形	
8	新町Ⅱ	×	SB01	南北	5×2	身舎	10.65 × 5.40	57.51	円	9C
9	中名Ⅰ・Ⅴ	○	SB16	東西	7×2	身舎	14.74 × 5.60	82.54	円形	8C後半～9C前半
10	任海宮田	○	SB202	東西	5×2北廂1	身舎	14.10 × 5.40	76.14	略方	9C後半
					北廂	廂含む	14.10 × 7.85	110.69	円	
			SB201	東西	8×2南北廂2	身舎	17.50 × 5.50	96.25	略方	9C後半～10C初頭
					南北廂	廂含む	17.50 × 10.80	189.00	略方・円	
11	吉倉B	○	SB50	東西	5東廂1×2	身舎	12.40 × 5.80	71.92	円	9C中～後
					東廂	廂含む	16.90 × 5.80	98.02	円	
			SB57	南北	6×1	身舎	11.20 × 4.00	44.80	円	8C後～9C前
12	米田大覚	×	SB02	東西	5×3南廂	身舎	9.00 × 6.00	54.00	略方	9C中頃
					南廂	廂含む	9.00 × 8.16	73.44		
			SB07	南北	10×2	身舎	22.00 × 4.80	105.60	略方	
			SB08	南北	8×2	身舎	16.20 × 4.80	77.76		
			SB10	南北	6×3	身舎	12.50 × 6.00	75.00	略方	
			SB16	東西	6×2	身舎	13.50 × 5.40	72.90	隅丸方形	
13	水橋荒町・辻ヶ堂	×		南北	5×3	身舎	×	69.40	?	8世紀前～9世紀初頭
14	浦田	×	建物05	東西	5×3	身舎	10.65 × 5.40	57.51	方形	9C
15	じょうべのま	×	SB001	東西	5×2南廂1	身舎	11.25 × 5.30	59.63	方形	9C～10C前
					南廂	廂含む	11.25 × 8.30	93.38	方形	
			SB05	南北	5×2	身舎	13.35 × 5.86	78.23	円	
			SB06	南北	5×2	身舎	13.35 × 5.70	76.10	円	
			SB016	南北	5南廂1×2東廂1	身舎	12.60 × 5.70	71.82	方形	
					廂部分含む	廂含む	12.70 × 8.84	112.27	方・円	
			SB017	南北	5×2東廂1	身舎	11.50 × 8.70	100.05	略方	
					東廂	廂含む	11.50 × 8.70	100.05	円	
			SB010	南北	10×2東西廂2	身舎	25.50 × 5.10	130.05	方形	
					東廂	廂含む	25.50 × 7.50	191.25	円	
					西廂	廂含む	7.30 × 2.60	210.23	略方	



第５図　県内の大型掘立柱建物位置図

能性が高い。出土遺物では土師器・須恵器・瓦塔・土錘・鉄滓などが出土しており、９世紀第２四半期～10世紀第１四半期にかけて土師器焼成の経営集団として存在したようである。

⑧　新町Ⅱ遺跡（第７図）

古代から中世の遺構が確認されているが、部分調査の為ほぼ単独棟に近い状況である。出土遺物は須恵器の蓋杯、壷、甕や土師器の甕、鍋などの一般的なものであり、特殊な遺物はない。報告では大型建物があることから、一般集落から卓越した中核集落である蓋然性が大きく、恐らく村落首長クラスの主導によって形成された計画村落とし、更に県内で８・９世紀以降に開発状況が著しくなる状況を踏まえ、開発拠点集落とされている。

⑨　中名Ｖ遺跡（第７図）

神通川扇状地上に立地し、古代から本格的に開発された様相を示す。初現は７世紀前半の竪穴住居が確認されており、集落は10世紀代まで存続する。大型建物を含む掘立柱建物群は８世紀後半～９世紀前半のものとされている。また９世紀代の竪穴住居が余り確認されておらず両者が混在していたのか判然としないが、10世紀の竪穴住居も確認されており、調査区も細長く未調査部分も多いことから両者が混在していた可能性がある。特殊な出土遺物には緑釉陶器、「稲」「稲束」「舟」「舟生」「□主」「泉」などの墨書土器や土錘がある。竪穴住居や立地条件などから開発拠点集落と考えられる。

⑩　任海宮田遺跡（第８図）

常願寺川扇状地上に立地し、古代までは遺跡の分布も希薄な地域である。７世紀の末頃から開発が行われた集落で、一辺３ｍ未満の小型竪穴住居が多数確認された。遺物には施釉陶器（緑釉・灰釉）、「城長」「城□」「□長」「貳」「墾田」「□音寺」「有成」「寅成」「寅」「富」「稲村」「村」「福」「家」「豊」「豊□」「酒杯」「八」「木」「廣」「平」「山」などの墨書土器 、瓦塔、石帯 があり、７Ｃ末から10Ｃに渡って扇状地の開発に従事した拠点集落とされる。

⑪　吉倉Ｂ遺跡（第８図）

奈良時代から近世に亘る遺跡で、常願寺川扇状地上に位置する。遺構は７世紀末に初現があり、８世紀中頃～９世紀末がピークである。竪穴住居が47棟、掘立柱建物が12棟と竪穴住居が大半を占める。これらは５時期の遺構変遷が想定されており、両者が混在していることや建物占有面積に格差があることから、階層差を窺うことが出来る。遺物は緑釉陶器、「城長」「柴」「柴土？」「柴家」「真」真中子」「中子」「山古万呂」「□子」「子」「林」などの墨書土器、製塩土器、土錘、円面硯が出土している。報文では東大寺などの荘園設定以前から集落形成が始まることや、この地域が中世では太田保と呼ばれ、もともとは国衙領であることから、国衙または郡衙主導で開発された開墾集落の開発拠点と位置づけられている。

⑫　米田大覚遺跡（第８図）

８世紀末～10世紀初頭の遺物が確認されており、９世紀中頃に中心をもつ。掘立柱建物は32棟確認されており、概ね４つの建物群に大別される。中心施設と考えられる１群は３時期以上の変遷が指摘されており、南面に廂をもつＳＢ02を中心に掘立柱建物が整然と配置される。Ｌ字や品字あるいはコの字状の配置が変遷の過程でたどれるようである。この他大型建物ではＳＢ02と同じ建物群にＳＢ07・08・10が確認されている。ＳＢ07・08は長舎建物とされ、この建物は国衙政庁・郡衙政庁・客院関連施設・官人級居宅・あるいは馬房などで多くの類例が認められることが指摘されている。ＳＢ10は東側の脇殿と想定される建物で、ＳＢ02・04と共にコの字状の配置をとる。ＳＢ16は１群から30mほど離れて位置する４群に所在する大型建物で、長舎建物との関連が指摘されている。遺

物では緑釉陶器や灰釉陶器、「田邊」「道公」「公麿」「公万呂」「富女」「人長」「室」「家」「井」「酒」「真」「柴」や則天文字の墨書土器がある。このほか石製帯飾り（巡方・丸鞆）、斎串や風字硯や陶製の升などが出土している。建物構造や配置・遺物の内容から９世紀中頃を中心に営まれた新川郡衙（群家）に関連する施設とされる。

⑬　水橋荒町・辻ヶ堂遺跡

縄文時代から近世に亘る集落が確認されており、特に古代の遺構が大半を占める。５×３間の大型建物から２×２間の倉庫まで約50棟の建物が確認されている。建物の大半は８世紀前半～９世紀初頭のもので、４回ほどの変遷を経る。建物は全体的に規模が大きく倉庫や井戸を伴い、また道路、溝、建物という計画性の強い配置構造が窺える。出土遺物では「竈神」などの墨書土器や転用硯、漆の付着した土器、石製帯飾り（丸鞆）があり、官衙的な性格をもつとされる。また水橋駅の候補として挙げられている。

⑭　浦田遺跡（第８図）

縄文時代から近世までの遺物が確認されており、特に弥生・古代が大半を占める。古代では平安時代の集落が確認されており、掘立柱建物が17棟検出されている。５×３間の大型建物は、調査区の関係や、他の建物と重複するものの、近辺に同一方位を示す建物がないことから同時期の建物配置は判然としない。遺物は９世紀代に主体をもち、須恵器・土師器等の一般的な器種構成であることや、立地条件から「大藪荘」の荘園管理の一端を担った集落とされる。

⑮　じょうべのま遺跡（第８図）

黒部川扇状地の末端に位置し、平安時代前期の荘園関連遺跡として高瀬遺跡と並んで著名である。建物群は概ね９世紀代のもので、５時期[註3]に区分される。廂付き建物ＳＢ001を中心に、コの字状を基調とする建物配置が窺える。出土遺物には施釉陶器（灰釉陶器・緑釉陶器）、「西」「西庄」「寺」「田中」「少黒」などの墨書土器と「・・□水可進上□・・」などの木簡がある。遺跡は出土遺物や建物配置から平安前期の荘園庄所とされる。また佐味駅の駅家[註4]に比定する意見もある。

ｄ　まとめ

ここでは森隆氏（1997）が、単位建物群を検討した際に用いた手法を参考に、県内の大型建物について、建物群を配置から検討した。検討の結果、５分類程度が認められる。

１類：越中国府関連遺跡（勝興寺南接地区）回廊等の囲繞施設を伴うもの。

２類：米田大覚遺跡やじょうべのま遺跡・高瀬遺跡などの大型建物を含む建物群がコの字や品字の配置を成し、中核域を形成するもの。

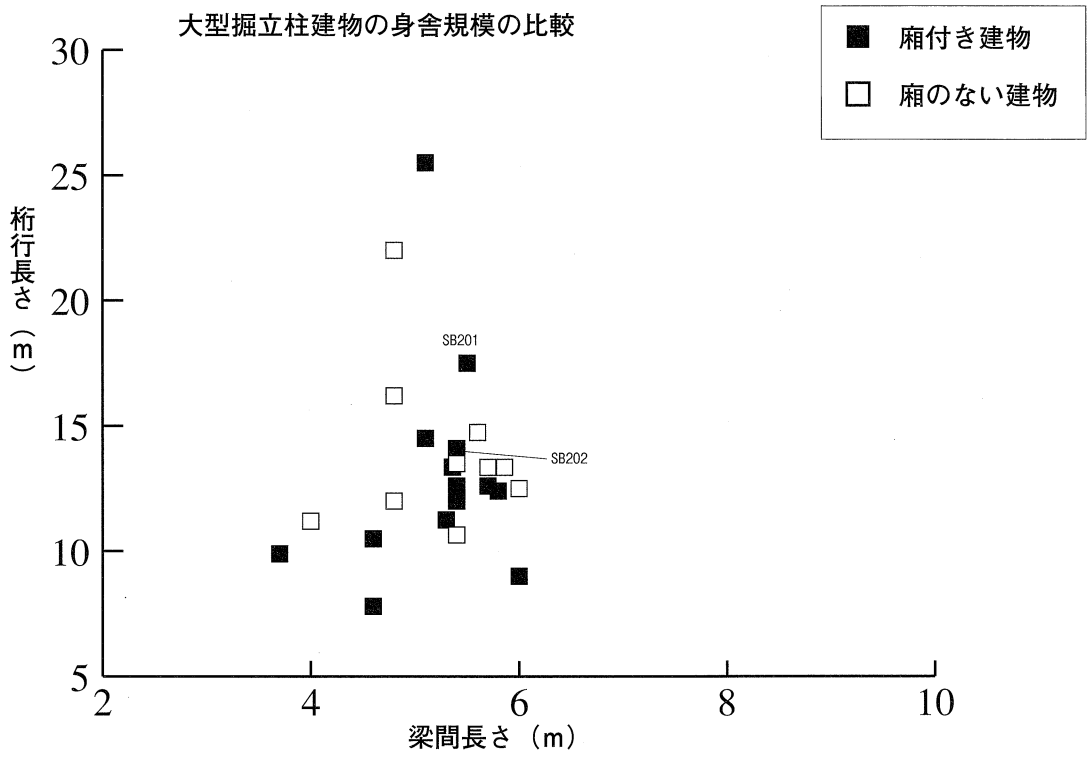
３類：中保Ｂ遺跡や吉倉Ｂ遺跡・麻生谷遺跡のように大型建物を中心に多くの建物群が集中し中核域を形成するもの。

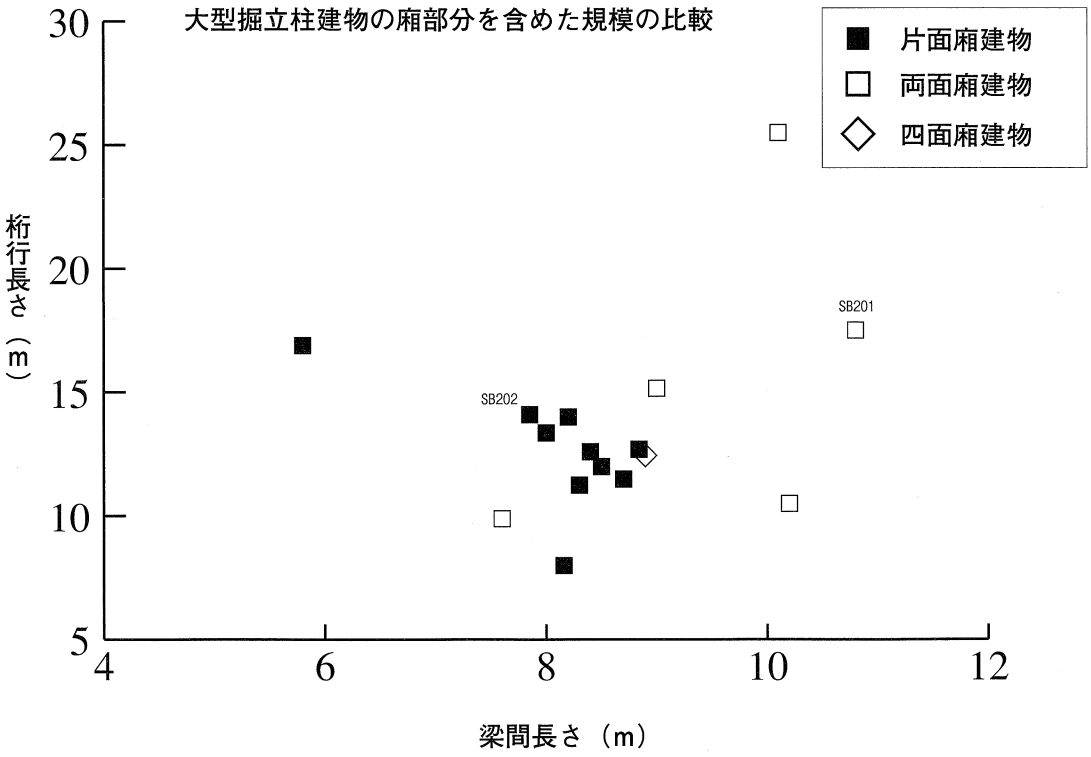
４類：中名Ⅴ遺跡・向野池遺跡のように大型建物の主屋に倉庫や雑舎が広場を挟んで並列に配置されるもの。

５類：新町Ⅱ遺跡・浦田遺跡・久泉遺跡のように大型掘立柱建物の周囲に建物が見当たらず、単独に近い形で検出されるもの。

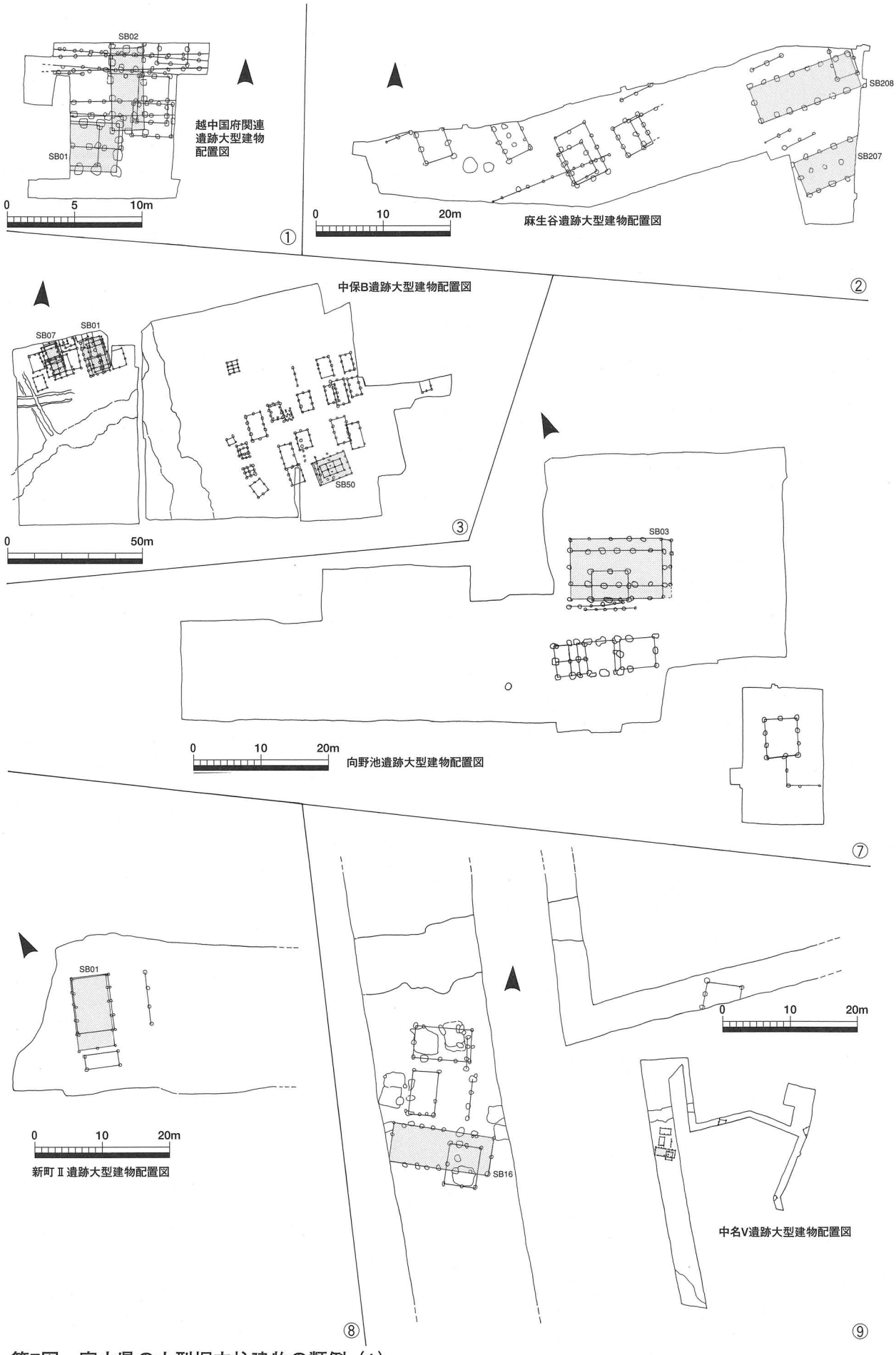
５類については、調査区の設定上周囲の状況が判然としないことから、４類や３類になる可能性があるが、ここでは分類のひとつとして設定した。

遺跡を性格別にみると、１類は国府や寺院に関連し、２類は郡衙あるいは荘園庄所に関連する。３

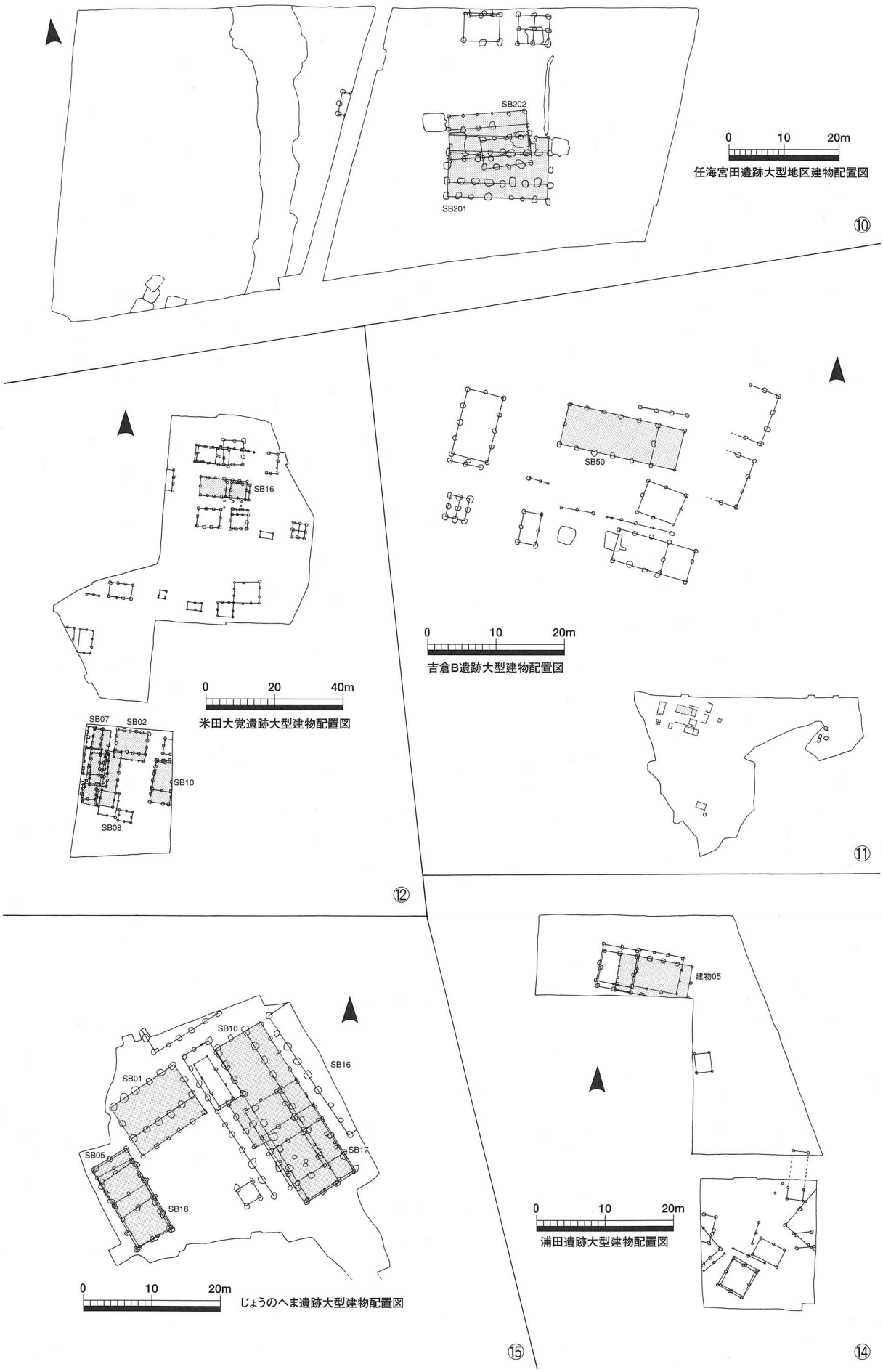




第６図　大型掘立柱建物の比較



第7図　富山県の大型掘立柱建物の類例（1）



第8図　富山県の大型掘立柱建物の類例（2）

類は官衙の出先や国衙あるいは郡衙主導の開発拠点とされ、４類は官衙の出先や開発拠点、５類は開発拠点や荘園経営の一端を担った集落とされる。廂の付かない大型建物が主屋として採用されるのは、３～５類に認められ、廂の付く建物は２～４類で認められる。

今回報告するＢ地区の大型建物の特徴を挙げると、梁間２間の身舎に廂をもつ大型建物が主屋として採用される。その柱穴形態はＳＢ202が略方形、ＳＢ201が円形および楕円形を呈し、桁行きの柱穴はやや不規則な配置をとる。また主屋は倉庫などの雑舎と空間を挟んで並列に配置され、囲繞施設のない開放景観で、周囲は１辺３ｍ程度の小型竪穴住居が配置される。遺物では、その建物群の領域から灰釉陶器などの搬入品や「平」の墨書土器、土錘などが集中して出土する。以上の条件から、ＳＢ201・202は４類に該当する。

第６図で示すように、ＳＢ202は県内の大型建物のなかで、身舎および廂を含めた建物面積および梁間や桁行きの長さは標準的なものとなる。ＳＢ201は廂を含めた建物面積が上位に位置し、梁行きでは最大となる。身舎では、桁行きの長い部類に入り、梁間はほぼ標準的な規格のものとなる。川端氏（1996）によると、建物形式的に古い様相[註5]を示す梁行３・４間タイプが妻方向への拡大意識を表し、屋根構造上の限界から廂を付けて妻方向へ拡大する方向性に転換し、梁行２間タイプの廂付きが増加するとのことである。この傾向は妻方向への拡大意識があり、細長い建物よりも正方形タイプのものの方が、当時の人々がより造営したい建物であったと考えられ、また身舎の梁行が長いものが構造上建てるのに困難な建物と考えられることから、梁行きの長いものがより格の高い建物とするなら、Ｂ地区のＳＢ201は面積的には巨大であるが、梁行長では標準よりやや上位の建物となる。

ＳＢ201・202のように廂を伴う建物は、荘園庄所や官衙などの公的な場所の主屋で採用されるものが多く、廂の無いものは官衙の脇屋や、耕地獲得を目的とする集落の経営拠点で主屋として多く認められる。任海宮田遺跡は立地や成立条件から耕地開発を目的とする開墾集落と考えられるが、ＳＢ201や202は、他の開墾集落と考えられる経営拠点の大型建物とは様相を異にすることが看取できる。３類～５類の開墾集落については、宇野隆夫氏（2001）の分類でみると民衆の経営拠点型あるいは在地有力層主導型の経営拠点にあてはまるものが多く、任海宮田遺跡の201・202は建物面積100㎡を越すもので、上記の分類に該当しない。しかし同じ４類の中名Ｖ遺跡で８世紀後半～９世紀前半の建物面積100㎡以下で廂をもたない大型建物が主屋として採用されていることや、向野池遺跡で南北両面廂で建物面積が100㎡を越える９世紀後半から10世紀前半の大型建物が生産を統括管理するための一管理施設に採用されていることから、９世紀後半以降の建物については、100㎡を越える規格の建物が、在地有力層主導型の経営拠点でも存在した可能性が考えられる。ここでは、在地有力層主導型の９世紀後半～10世紀初頭の経営拠点としてＢ１地区の大型建物を理解したい。

（武田　健次郎）

註１　宇野隆夫氏（2001）によると、８世紀後半の大型建物の配置や構造、また周囲に竪穴建物が広がる状況から、１町の区画内に存在する荘園経営拠点の中心部と推定し、有力寺社主導１型の経営拠点として例示している。

註２　墨書土器の大半が穴田地区より出土していることから、報文では正殿と脇殿を備える石仏地区に対し、穴田地区は裏方的な実務を担当する事務棟群ではないかと指摘している。

註３　報文では５時期とされるが、変遷が多いことや建物が「コ」字状配置など規格性の考慮から、森隆氏（1998）は３時期の変遷を提示している。

註４　森隆氏（1998）によると遺構の広がりが半町四方、せいぜい広くても一町四方に収まることや、氏の復元案に

よると中心建物の近隣に倉庫が付属すること、また脇殿と考えられる二正面構造の特異な建物群が旧河道に面することなど、高瀬遺跡や横江庄遺跡との異質さを指摘し、水陸両用の利便性を考慮した駅家の可能性を示唆している。

註5　川端誠氏（1995）によると氏は7世紀代までは建物の拡張に際し、梁行を延ばす方向で建てられたが、屋根構造の技術的限界から、8世紀代には梁行2間に庇を付与し建物面積の拡張を計る建物が増加し始める状況を指摘している。

〈参考文献〉

内田　亜紀子「任海宮田遺跡出土の灰釉陶器」『富山考古学研究　第4号』富山県文化振興財団2001

宇野　隆夫　『律令社会の考古学的研究』　1991

宇野　隆夫　『荘園の考古学』青木書店　2001

岡本　淳一郎『五社遺跡古代上層面の集落構造について』『埋蔵文化財調査年報（6）』富山県文振財団

河西　健二　「富山県の竪穴遺構と建物空間（その1）」『大境　第17号』富山考古学会1996

川端　誠　「石川県の古代建物に関する基礎的考察」『石川県埋蔵文化財保存協会年報6』1995

駒見　和夫　「富山県における竪穴住居と掘立柱建物住居」『大境　第10号』　富山考古学会1986

岸本　正敏　「Ⅴ新町Ⅱ遺跡の古代掘立柱建物群の性格」『新町Ⅱ遺跡の調査』婦中町教育委員会1986

楠　正勝　「第5章まとめ」『金沢市千木ヤシキダ遺跡』金沢市教育委員会1987

高岡市教育委員会　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅱ』1988

高岡市教育委員会　『中保B遺跡　調査報告』2002

高岡市教育委員会　『麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡調査報告』1997

田嶋　明人　「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡－加賀・能登の掘立柱建物群を中心とした覚え書－」（『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号）石川考古学研究会1983

立山町教育委員会　『浦田遺跡－第2次発掘調査報告－』1988

砺波市教育委員会　『久泉遺跡現地説明会資料』2005

富山県教育委員会　『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－井波町高瀬遺跡　入善町じょうべのま遺跡　発掘調査報告書』1974

富山県文化振興財団　『中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告』2003

富山県埋蔵文化財センター　『任海宮田遺跡発掘調査報告書』1996

富山県埋蔵文化財センター　『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1997

富山県埋蔵文化財センター　『任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1998

富山県埋蔵文化財センター　『吉倉B遺跡』1994

富山市教育委員会　『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書』2005

富山市教育委員会　『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』　2006

富山市教育委員会　『向野池遺跡現地説明会資料』　2006

婦中町教育委員会　『新町Ⅱ遺跡の調査』　1986

森　秀典　「古代の掘立柱建物について」『浦田遺跡－第2次発掘調査報告－』　立山町教育委員会　1988

森　隆　「越中の古代掘立柱建物群に関する一考察」『埋蔵文化財調査概要　平成8年度』富山県文化振興財団　1997

森　隆　「越中の古代居宅建物に関する覚書」『大境　第19号』富山考古学会　1998

山口　辰一　「常国住宅地内遺跡調査概要」『シンポジウム古代荘園遺跡が語るもの』　1993

湯尻　修平　「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江荘遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会1983

7　土師器焼成遺構について

はじめに

Ｂ６地区からＬ字状に広がる赤色硬化した焼土面を検出した。壁面が認められないものの、周囲の状況や出土遺物から考えて焼失住居や製鉄関連遺構というよりは、むしろ土師器焼成遺構の可能性が高い遺構であると判断した。土師器焼成遺構は、焼土面の分布状況から２基が確認されており、建物群３に帰属する。操業時期はⅢ期～Ⅳ期（９世紀後半～10世紀初頭）と考えられる。従来富山県では、８世紀中頃の小杉流通業務団地内遺跡群№18Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡などの土師器焼成坑が知られており、近年９世紀以降の土師器焼成遺構の例が増加している。特に富山市西部に位置する射水丘陵では、開ヶ丘ヤシキダ遺跡・ガメ山遺跡・向野池遺跡・開ヶ丘中遺跡で確認されている。新潟を除く北陸の土師器焼成遺構は、その殆どが須恵器の窯場の周辺ないしは須恵器工人集落の一角など、須恵器の生産に関連する遺跡で確認されている。これは一般に須恵器と土師器の生産が一元化した「北陸型」の生産体制を反映したものと捉えられている。実際、任海宮田遺跡以外の土師器焼成遺構が古代の越中における製陶・製鉄生産の中心である射水丘陵に立地し、須恵器窯の周辺ないし須恵器工人集落の一角でみつかっていることからもこの傾向が窺える。

任海宮田遺跡の土師器焼成遺構は、須恵器生産地から遠く離れた平野部に土師器焼成坑が所在することから北陸型生産体制の枠組みの中では例外的なものである。ここでは本遺跡の土師器焼成遺構が北陸型土器生産体制のなかでどのような位置を占めるものなのか検討する。

a　焼成遺構について

Ｌ字状に広がる焼土面には硬化面の激しい部分と緩い部分があり、切り合いを調べたところ、東西方向に広がるもの（焼成遺構１）と南北方向に広がるもの（焼成遺構２）が認められた。また重複関係から前者が新しく後者が古いことが確認できた。

焼成遺構１は北側部分を削平された可能性があり、焼成遺構２よりも規模が小さく、形態は長辺2.8m短辺1.5mのやや不整形な長方形で、床面積4.2㎡を測り、硬化面の厚さは10cmである。また硬化面の周囲にはあまり硬化せずややくすんだ赤色を呈する部分が幅10～20cmで帯状に巡っている。

焼成遺構２は焼成遺構１の東側に位置し、これと重複するものの残存状況は良好である。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈し、短辺2.3m長辺2.8mで、床面積6.4㎡を測る。焼成遺構１と同様に硬化面の三方（東西南）に硬化の緩い焼土層が帯状に巡る。但し北側については全体の３分の１程度の範囲にあまり火を受けず硬化していない面が広がる。

焼成遺構１・２はやや平面が不整形な長方形および隅丸方形の焼成面のみが検出され、掘り込み面などは確認できなかった。このことが削平を受けたために起因するのか、その様な形態をもつものであったためなのか本例だけでは判然としないが、他の遺構の掘削深度が焼成遺構よりも一定程度の深さをもつことから、ＳＫ60は掘り込み面がないか、あるいは相当浅い掘削深度であったことが予想される。この様な形態は望月分類のＡ類不整形タイプに近似するが、床面に強い被熱痕跡をもつことからＡ類床面強被熱タイプの可能性も高い。

b　関連遺構

本焼成遺構は周辺に付帯する遺構をいくつか伴っている。まず窯跡周辺を区画する溝がみられる。

これらの溝は、重複関係から2群に分離できる。焼成遺構の南側と西側を区画するＳＤ316～319・322が先行する一群である。また、それらに後出し焼成遺構を大きく隅丸方形に区画するＳＤ319～321の一群がある。このほか焼成遺構に隣接してＳＸ209～211などの大型土坑が配置される。ＳＫ209は重複関係から焼成遺構2に先行するものではあるが、遺構配置状況から区画内部での作業空間や製品用の粘土置き場などと関連する可能性が考えられる。なお焼成遺構の北側にＳＢ208が近接することも挙げられる。これらの様相から土師器焼成窯が本体のみ単独で存在したのではなく、排水や作業場、管理棟などの機能分担に応じた生産の場としての遺構配置をもっていた可能性が窺える。

c　関連遺物

焼土面の周囲からは土器の表面が薄皮を剥いだように円形に剥脱したものや底部と体部の継ぎ目から剥脱したものが土師器の食器類（写真251-1参照）で確認されている。これらは作陶の段階で、器壁内に空気の気泡を残したまま焼成した結果、内部の空気が膨張し破裂したもので、生産地特有の遺物と考えられる。その他、黒班のある土師器椀や須恵器製の焼台（2399）、鳥形須恵器（2154・2400～2402）などが出土している。鳥形須恵器（2154）については、区画溝（ＳＤ317）および周辺の包含層から出土したもので、水鳥を模倣したものと考えられ、羽根・胴部・尾に羽毛の文様が丁寧に描かれている。鳥形須恵器の類例を調べた植木氏（2002）によると、出土例は少ないが、北陸の8世紀代の須恵器生産関連遺跡で主に発見されることに言及している。

調査地周辺の地山は砂質土を主体とし、大型の礫が少ない地区であるが、この周囲からは10～20㎝大の円盤状の礫が多数出土している。これらの中には肉眼でも被熱痕跡が認められるものがあり、石の被熱判定（資料数10点）を行なった。判定の結果（第4分冊第1章参照）、焼成遺構に関連すると考えられる遺構（ＳＸ209・211、ＳＤ317）から出土した礫のうち400℃以上の熱で加熱されたもの2点と400℃以下の熱で加熱されたもの2点が認められた。全く被熱していないものや被熱温度が400℃以下の低いものもあり用途は様々と考えられるが、用途の1つとして窯詰めの際の充填材や覆い焼等の重しなどが考えられる。

この他、この土師器焼成遺構での焼成遺物および供給範囲を確認するため、焼成遺構周辺の遺物と各地区の竪穴住居出土遺物を中心に胎土分析（第4分冊第1章参照）を行なった。分析の結果43点のうち13点が、Ｋ（カリウム）量の高い領域に分布をもち、開ヶ丘遺跡や向野池遺跡と異なる胎土のもので、現在のところ任海宮田遺跡独特の胎土として分類されている。この一群は肉眼観察ではⅡ・Ⅲ・Ⅴ群の胎土が該当し椀や皿が主体で、煮炊具は殆ど含まれない。煮炊具はＳｒ量の多いものに偏りを示し、搬入品の可能性が考えられ、当焼成遺構では椀や皿などの食器類を中心に生産していた可能性が高い。また任海宮田遺跡独特の胎土をもつ13点の供給範囲は、建物群1～3の竪穴住居や、更にＡ・Ｃ地区の竪穴住居でも出土している。土師器焼成遺構のある建物群3は、墨書土器「成」の集中するグループであるが、製品は「成」の文字群の範囲を超えて流通していることが分かった。

焼土面もしくはその周辺から炭化物が出土しており、炭化材の同定（72点）を行なった。72点のうち焼成遺構に関連すると考えられるものは細片のものばかりで18点を数える。同定の結果（第4分冊第1章参照）、樹種はクリ5点・ブナ2点・コナラ属コナラ節2点・ヒサカキ属2点などが出土し、遺跡の周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種と考えられている。

以上の状況を考慮した結果、焼土遺構は焼失住居や製鉄関連遺構ではなく土師器焼成に関連した遺構であると判断した。なお他遺構の分布状況や西側が落ち込みという地形的な要因から、恐らくこの

焼成遺構のみの小規模な経営形態であったことが想像される。

焼成遺構の焼土からはほとんど遺物が出土しておらず、そのため土師器焼成遺構に関連する他遺構の出土遺物から時期を考えたい。遺物については焼成遺構周辺直上の包含層の遺物と粘土置き場や作業場と考えられるＳＸ209・210・211の遺物について第１図・第２図に報告書番号で図示した。大型土坑の遺物については、床面直上よりも埋土表面あるいは上層からの出土が多く、Ⅲ期～Ⅳ期の遺物が中心となる。器種的には須恵器の杯・杯蓋・土師器の椀・皿・小型甕・黒色土器が出土しており、土師器の椀が大半を占める。また様々な形状の礫も多く出土している。そのほか焼成遺構の周辺からは須恵器製の焼台が１点出土しており、須恵器窯から工人を招来した可能性が窺える。

ｄ　まとめ

富山市西部に位置する射水丘陵では、８世紀中頃の土師器焼成遺構が小杉流通業務団地№18Ａ遺跡で29基、同18Ｂ遺跡で５基、同18Ｃ遺跡で３基以上、同№20遺跡で２基確認されている。８世紀末葉～９世紀前葉のものでは開ヶ丘ヤシキダ遺跡で４基、ガメ山遺跡で１基、向野池遺跡で５基確認されており、これに後続する焼成坑２基が開ヶ丘中遺跡でも確認されている。これらの土師器焼成遺構が確認された射水丘陵は、古代の越中における製陶・製鉄生産の中心であり、焼成遺構は須恵器窯の周辺ないし須恵器工人集落の一角でみつかっている。一方任海宮田遺跡の焼成遺構は平野に立地し、須恵器窯とは隔絶した位置の集落で経営されるものである。この違いが北陸の土器生産体制のなかでどのように捉えられるのか以下にまとめたい。

北陸の土師器焼成遺構は、その殆どが須恵器の窯場の周辺ないしは須恵器工人集落の一角など、須恵器生産に関連する遺跡で確認されている。これは一般に須恵器と土師器の生産が一元化した「北陸型」の生産体制を反映したものと捉えられており、８世紀の県内の生産体制も同様である。９世紀代の越中の状況について、望月氏は土師器焼成坑の検出例がなく、須恵器窯においても土師器食膳具を出土するケースが少ないことから「須恵器窯場において土師器食膳具生産を行っていなかった可能性が高く、須恵器生産とは別の場所で生産されていた可能性をもち」また「在地須恵器窯製品と異なる胎土の食膳具が消費地で検出される状況であることから、基幹的窯場経営とは異なる単位での生産が主流であった可能性をもつ」（望月精司1996）と指摘しており、越中の土師器生産が「北陸型」生産体制の典型を示す加賀地方の生産体制と異なる可能性を指摘している。また９世紀代の土師器生産は中核的な須恵器基幹窯での須恵器主体の生産体制と土師器生産に比重を置くようになる補佐的須恵器基幹窯では、生産体制にズレがあり、後者では土師器焼成坑経営が須恵器窯から分散する傾向の動きが認められるようである。但し分散する傾向にあるものの生産の枠組みは基幹窯に属するものとされる。向野池遺跡や開ヶ丘中遺跡はこの様な動きと対応する可能性が高い。これに対し、任海宮田遺跡の土師器焼成遺構は、県下の須恵器生産地から遠く離れた平野部に所在する。このように須恵器窯と隔絶した平野の村落内で１～２基の小規模なものとはいえ、須恵器生産地から遠く離れた平野部に土師器焼成遺構が所在することは北陸型生産体制の枠組みの中では例外的なものである。以上のことから、富山県には９世紀において向野池遺跡や開ヶ丘中遺跡のように須恵器窯の近隣に所在する例と、任海宮田遺跡のように須恵器窯から隔絶した平野部で経営されるタイプの両者が存在することが窺える。そして、任海宮田遺跡の土師器焼成遺構が平野部で開始される背景には、北陸型土器生産体制の中で９世紀中頃以降から起こる須恵器窯からの分散化傾向の動きのなかで把握する事ができる。

なお、土師器焼成遺構の周辺には、建物群１や３にみられる計画的に配置された掘立柱建物群や大

型掘立柱建物が所在する。両建物群から出土する遺物に灰釉陶器や緑釉陶器、円面硯や風字硯など、一般的な集落では殆ど出土しない遺物が一定量出土することから、耕地獲得を目的とする開墾集落のなかでも中心的な機能をもつ領域であったと考えられる。この中心域では土錘や製塩土器が多量に出土しており、組織的な集団漁労行為と保存処理を行っていた可能性がある。その様な中心域での手工業および漁業関連について、宇野氏は「荘所[註1]付近から出土する生産関連資料の分野は，紡績，木・漆工，鍛錬鍛冶，網漁が代表的なものであり，金泥作り，精錬鍛冶・鋳造などの特殊・高度な技術分野も存在した」（宇野隆夫2001）とされ、その様な私的開発活動をおこなった勢力の中枢部では手工業および漁業活動が、民衆の経営拠点型よりも上のランクの拠点では盛んに活動していたようであると指摘している。集落内流通の可能性が高いとはいえ、地山が砂質土で本来粘土の産出をみない任海宮田遺跡で土師器生産を行なっていた要因は、上記の北陸型土器生産体制にみられる土師器生産の須恵器窯からの分離・分散傾向の動きと、開発拠点集落での手工業生産の活発化の動きのなかで捉えることができる。

（武田　健次郎）

〈註〉

註１　宇野隆夫氏は古代荘園について、８世紀中頃以降の私的所有地・経営拠点を荘園として一旦整理してから、考古学的に検証する立場をとっている。そして、上は有力寺社・王臣家から下は民衆までの私的開発活動を把握しようと試みられている、その立場からの理解においては任海宮田遺跡も荘園のひとつと理解できる。

〈引用・参考文献〉

内田亜紀子　2001「任海宮田遺跡出土の灰釉陶器」『富山考古学研究第４号』富山県文化新興財団

宇野　隆夫　2001『荘園の考古学』青木書店

関　　清　　1994　「越中におけるロクロ土師器の焼成」『北陸古代土器研究』第４号　北陸古代時研究会

武田健次郎　2001「任海宮田遺跡の大型建物について－富山・石川県の事例との比較から－」『富山考古学研究第４号』富山県文化新興財団

富山県教育委員会　1979『流通業務団地№20遺跡緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会　1982『小杉流通業務団地内遺跡群第３・４次緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会　1986『小杉流通業務団地内遺跡群第８次緊急発掘調査概要』

富山県埋蔵文化財センター　1993『小杉流通業務団地内遺跡群第10・11次発掘調査概要』

富山市教育委員会　2002『富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡　開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡　開ヶ丘ヤシキダ遺跡発掘調査報告書』

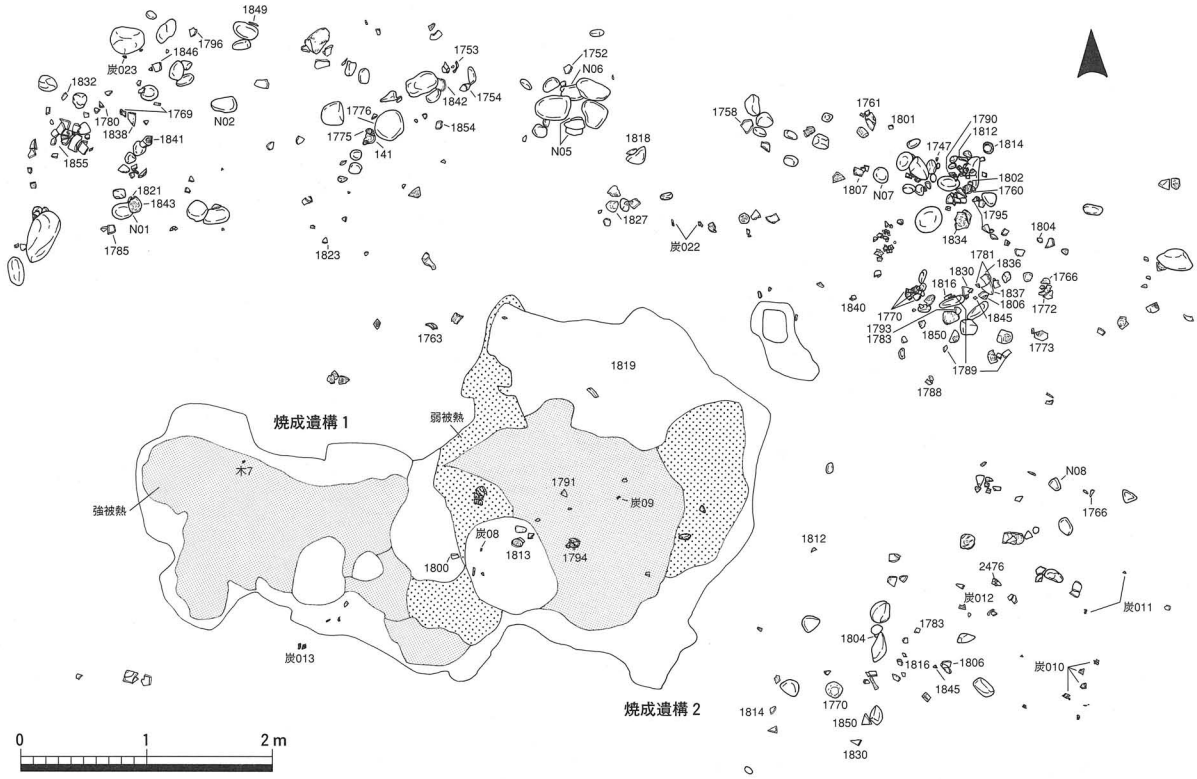
中野由紀子　2001「任海宮田遺跡の墨書土器について－Ｂ１地区出土資料の紹介－」『富山考古学研究第４号』富山県文化新興財団

細辻　真澄　2001「任海宮田遺跡出土の土錘について」『富山考古学研究第４号』富山県文化新興財団

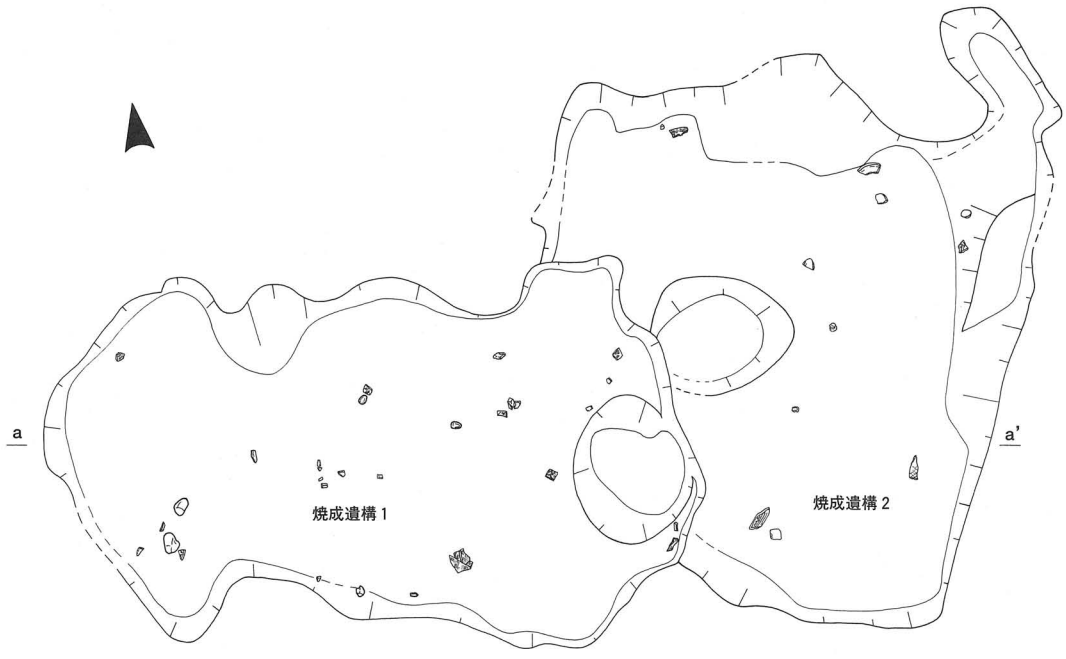
望月　精司　1997「土師器焼成窯の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

望月　精司　1997「第２章各地域の土師器生産と土師器焼成遺構　第４節北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

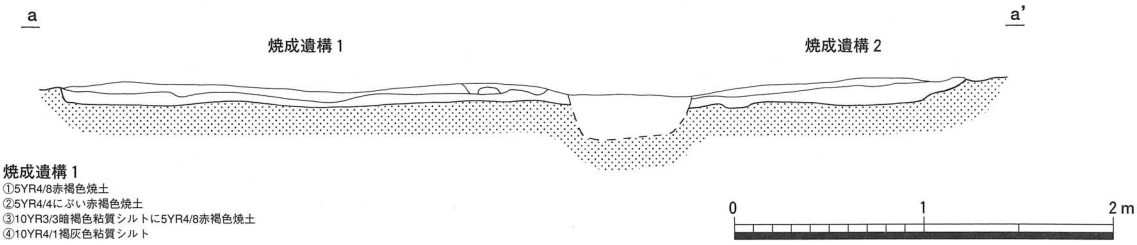
望月　精司　1996「北陸における古代土器生産体制の変質と展開」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会



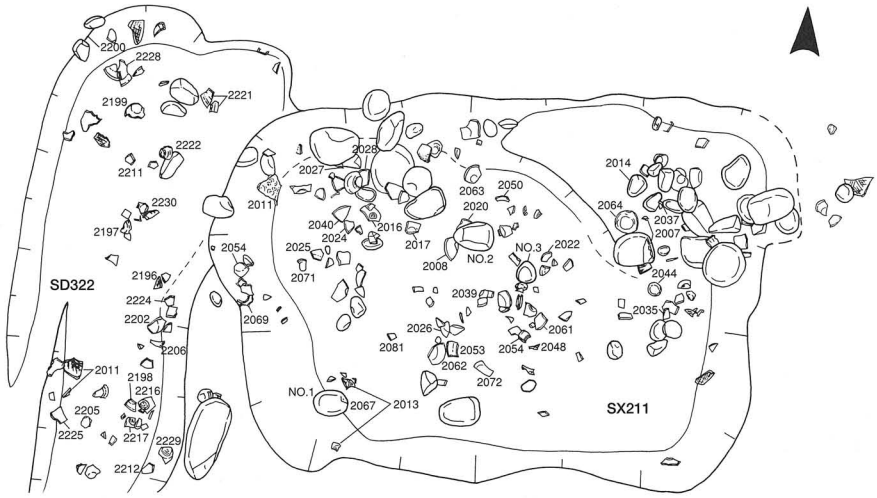
土師器焼成遺構周辺包含層遺物出土状況



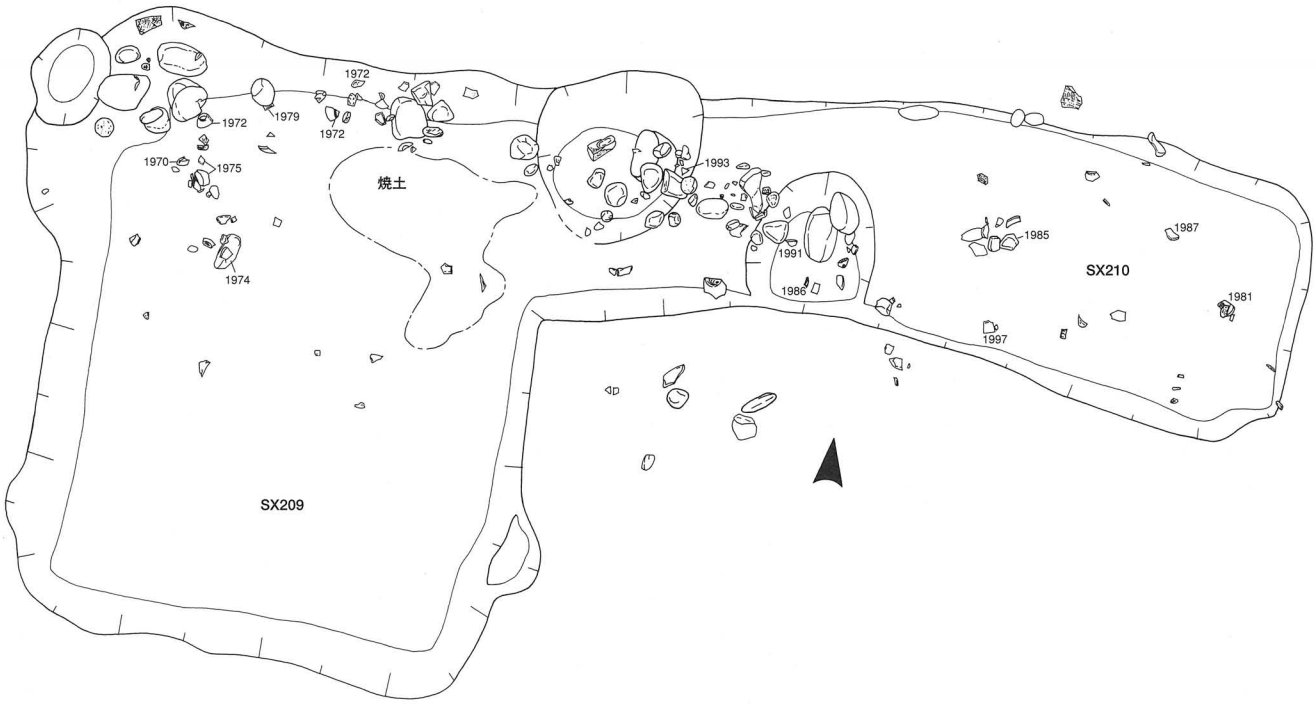
土師器焼成遺構完掘状況



第1図　土師器焼成遺構遺物出土状況



SX211遺物出土状況



SX209・210遺物出土状況

0 1 2m

第2図　土師器焼成遺構に関連する大型土抗出土状況図

8　中世の土器・陶磁器組成

はじめに

今回調査・報告した任海宮田遺跡B地区では、その全地区で中世の集落遺構がみつかっている。総調査平面積は約33,000㎡で、120棟を超える掘立柱建物が検出された。これらの建物群の存続時期は中世の全般に及ぶが、このように長期にわたって建物群が存続した結果、多数の土器・陶磁器が出土した。とくに公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査では、2004年刊行の道場Ⅰ遺跡の報告書ではじめて中世土器・陶磁器の組成を検討して以来、後続報告書でも継続して分析を行っている。土器組成の分析にはいくつかの方法があるが、重要なのはそれが個体識別であれ、単純な総破片数のカウントであれ、同じ基準で分析がなされ、その分析結果が複数の遺跡の比較を可能とするまで継続して集積されることにある。この点について、道場Ⅰ遺跡ではじめて組成分析を行って以来、中名Ⅴ・Ⅵ遺跡、任海宮田遺跡A地区と、継続して土器組成の分析資料が順調に集積されている。また本報告に後続する任海宮田遺跡C地区の報告書でも同様の分析が試みられる予定である。従ってその組成分析は、最終的には10数万㎡を超える遺跡調査地に及ぶ予定であり、分析結果の成果が今後当地での中世集落研究に際して重要な視点をもたらすものと期待される。

1　土器・陶磁器組成の分析方法

中世の出土遺物のうち、在地産の土師器皿と八尾以外の遺物は、基本的に遠隔の生産地から何らかの流通手段・経路を経て当地にもたらされている。中世は流通経済の発達が著しく伸展した時代であり、中国陶磁の定量出土からも明らかなように、商品が移動してくる距離も遠く海外にまで及ぶようになっている。その結果中世では古代に比べると焼物の種類・内容が格段に増加しており、組成自体もより複雑なものになっていく。従って出土した土器・陶磁器の詳細をリストアップし、その内容や組成について検討を加えることは、これらの土器・陶磁器を保有・使用した人々の嗜好や経済的地位、階層などを解き明かしていく上で、必要不可欠な作業となろう。そこでまず出土した土器・陶磁器の焼物・器種別のリストを作成し、次いで各種の焼物から構成される土器・陶磁器の組成について検討を加えた。組成分析は、B地区の全地区を対象とした。これらの調査地は面積にかなりの大小があるがあるものの、全ての調査地で中世の建物遺構が検出されている。とくに隣接する調査地区は相互に遺構が関連するものも多く、任意で設定された区画を一単位とすることが適切かどうかという問題もあるが、本報告書ではとりあえず調査地区単位での分析結果を示した。なお分析の対象であるが、出土状況・位置を問わず、原則出土した全ての土器・陶磁器を取り扱った。遺構出土のもの、包含層出土のものはもちろん、このなかには排土からの表面採取品、あるいはラベル記載不備で正確な出土位置は不明だが、出土地区は把握できる資料も含めている。このため組成に用いた資料数と、地点別出土状況に用いた資料数の両者は必ずしも一致していない。次にカウントの方法だが、カウントに先立ち当然ながら中世以外の時期の遺物（古代以前および近世以降）は選別し除外した。またカウントは基本的に破片数で行い、原則として個体識別や口縁部・底部残存比率による総計といった方法は行っていない。但し珠洲・八尾などについては、破片総数以外にも口縁部、体部、底部ごとの破片数のカウントを行い、これを総個体数把握のための参考とした。これらの手法は基本的に「道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告」以来のやり方を踏襲している。以下各地区ごとに分析結果を記す。

2　出土した土器・陶磁器の種類と数

最初に任海宮田遺跡B地区から出土した中世土器・陶磁器の種類と概数を記しておく。まず土器類

では土師器皿（4,573点）や土製品（43点）が挙げられる。次いで壷・甕・擂鉢などの貯蔵・調理器では珠洲（3,083点）、八尾（472点）、越前（１点）が出土している。中国陶磁では青磁（267点）、白磁（97点）、青白磁（24点）、黒釉陶器（５点）があり、総数は393点である。瀬戸美濃施釉陶器は115点、瓦質土器は20点である。以上の土器・陶磁器の総数は合計8,700点である。これをB地区全体の組成比率に組み直すと、土師器皿4,573点（52.6%）、珠洲3,083点（35.4%）、八尾472点（5.4%）越前１点（0.1%）、中国陶磁393点（4.5%）、瀬戸美濃115点（1.3%）、瓦質土器20点（0.2%）、土製品43点（0.5%）となる。

3　各地区別の土器・陶磁器の組成比率と出土状況

次に各地区出土の中世土器・陶磁器を対象に、その組成の比率や出土の様相、傾向などについて検討してみる。土器・陶磁器組成の分析では、建物群とセットで組成が復元できるのがベストであるが、残念ながらそこまで組成を細別して把握するには至っていない。従って漠然とした取り扱いであるが、とりあえず各調査地区毎でカウントを行った。また出土地点と数量のドットについては、各焼物別で作成した。図面は調査地内に設定した国土座標軸の地区割り（X軸、Y軸）を利用し、２m毎のメッシュ内で破片数をカウントした。このうち数量の多い土師器皿等の資料はその数量をドットの大小で表現し、出土の粗密を表現した。数の少ない中国陶磁や瀬戸美濃施釉陶器などの遺物は、実測図記載のあるものはその実測番号をドットの横に記した。また接合関係が確認できるものは、ドット間を線で結びその関係を表示した。なお詳細表示の内訳とその意味については、図面中に全て凡例で示している。以下に分析結果を各地区ごとに記しておく。

(1) B1地区

調査面積2,617m²で、20棟の掘立柱建物が検出されている。中・小規模の雑舎的な建物が主体である。存続時期幅は12世紀中頃から15世紀前半と長いが、出土遺物は13世紀代に中心がある。

B1地区でカウントした土器陶磁器の総数は225点である。内訳は、土師器皿15点（6.7%）、珠洲141点（62.7%）、八尾41点（18.2%）、瀬戸美濃７点（3.1%）、中国陶磁21点（9.3%）となる。一見して土師器皿の組成比率が低いのが目に付く。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は19：81。次に供膳容器内の比率、すなわち土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率を記すと、35：49：16となる（なお正確には中国陶磁・瀬戸美濃のなかにも貯蔵・調理器種が含まれているが、ここでは一括して扱う）
一方、調理・貯蔵容器のなかで珠洲に対する八尾の占める比率は77：23で、今回のB地区調査地の中で最も高い。施釉陶磁器類では、瀬戸美濃より中国陶磁の出土量が多い。中国陶磁は古手の龍泉窯系青磁（大宰府・山本分類Ⅰ・Ⅱb類）の他、同安窯系青磁碗や白磁Ⅷ・Ⅸ類、青白磁梅瓶の体部破片も出土している。瀬戸美濃施釉陶器では藤澤編年前Ⅳ期の瓶子類の破片がみられる。以上は13世紀代を中心とした様相であるが、新しいところでは龍泉窯系青磁Ⅳ類、古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期の製品も出土している。以上からも施釉陶磁器は瀬戸美濃ではなく中国陶磁が中心となっていることがわかる。

出土遺物の分布では各焼物ともドットが散在しており、特定場所に特定の遺物が集中する様相は希薄である。

(2) B2地区

調査面積2,605m²で、９棟の掘立柱建物が検出されている。規模の大きな総柱建物（主屋級）を含む。B1地区同様、存続時期幅は12世紀中頃から15世紀前半と長いが、出土遺物は13世紀後半～14世紀前半に中心がある。B2地区はB1地区の西側に隣接するが、間に東西方向の河道があり、B1地区とは別の建物群と捉えられる。

カウントした土器・陶磁器の総数は323点である。内訳は、土師器皿134点（41.5%）、珠洲135点（41.8%）、八尾23点（7.1%）、瀬戸美濃７点（2.2%）、中国陶磁23点（7.1%）、越前１点（0.3%）となる。B1地区と異なり土師器皿の比率が40%超えている点に特徴がある。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は51：49。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、82：14：４となる。調理・貯蔵容器では、珠洲・八尾の比率は85：15である。この比率は後述のようにB地区全体の平均値に近い。個別焼物では、まず中国陶磁のうち龍泉窯系青磁はⅠ類もあるが、Ⅱｂ類が多く目に付く。白磁はⅨ・Ｘ類および森田分類D群などがみえる。このうち白磁Ｘ類の碗は口禿げ口縁に、内面文様を浮き彫りするもので、一般集落での出土はあまり類例がないとされる。瀬戸美濃は時期比定できるものは少なく、後Ⅰ・Ⅳ期の製品が若干みられる程度である。このことからもやはり施釉陶磁器は瀬戸美濃より中国陶磁に比率が高いことがわかる。

出土遺物の分布では、土師器皿は建物群が密集する中心付近に集中する様相が明らかである。これに対し珠洲や八尾は建物群の西辺沿い、および東辺の旧河道から出土しているものが多い。施釉陶磁器は数も少なく散在して出土している。

(3) B3地区

調査面積は952㎡で、９棟の掘立柱建物が検出されている。このうち１棟は主屋級の総柱建物（12世紀中頃～13世紀前半）である。建物群全体の存続時期幅は12世紀中頃から14世紀後半であるが、出土遺物は13世紀後半から14世紀前半に中心がある。調査地区はちょうどB1地区と次のB4地区との中間にあるが、建物群は配置的にみても北側のB4地区と関わりが深いものと推断される。

カウントした土器・陶磁器の総数は177点である。内訳は、土師器皿25点（14.1%）、珠洲117点（66.1%）、八尾11点（6.2%）、瀬戸美濃２点（1.1%）、中国陶磁22点（12.5%）となる。土師器皿の比率はB1地区に次いで低い数値を示す。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は28：72。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、51：45：４となる。貯蔵・調理容器での珠洲と八尾の比率は91：9で、八尾が低い数値となっている。施釉陶磁器では中国陶磁が主体となる。とくにB3地区では青磁（10点）と白磁（９点）の数が拮抗している。内訳では龍泉窯系青磁Ⅰ類７点（うちⅠ-２類４点）、Ⅱｂ類２点、Ⅲ類１点などがある。白磁はⅢ類（四耳壷）・Ⅴ類・Ⅸ類などがみられる。青白磁は３点あり、うち１点は小壷の蓋である。瀬戸美濃は少なく、時期の判別できるのは大窯期のもの１点のみで、時期がかなり降る。珠洲は吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期が主流である。

出土地点分布は調査面積が狭いこともあり特定の場所に集中する様相はみられないが、しいていうと珠洲が主屋級建物群の周りで多く出土している。

(4) B4地区

調査面積は4,306㎡で、22棟の掘立柱建物が検出されている。大規模総柱建物が多数含まれており、B地区東側地区で検出された中世建物群の中核部を形成している。建物群全体の存続時期幅は12世紀中頃から14世紀前半で、面積が大きいにもかかわらずB1～B3地区より時期幅が短い。出土遺物も同様に12世紀中頃から14世紀前半に中心がある。

カウントした土器・陶磁器の総数は2,302点で、B12地区についで多い。内訳は、土師器皿1,210点（52.6%）、珠洲715点（31.1%）、八尾126点（5.5%）、瀬戸美濃19点（0.8%）、中国陶磁195点（8.5%）、瓦質土器１点（0.4%）、土製品36点（1.1%）となる。全体に占める土師器皿の比率は50%を超えており、高比率である。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は63：37。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、85：14：１となる。貯蔵・調理容器では珠洲と八尾の比率は85：15で、

B地区での平均的な様相を示す。中国陶磁は、青磁が龍泉窯系青磁144点、同安窯系青磁２点で計146点、白磁は39点、青白磁10点と、全体の４分の３が青磁で占められている。このうち分類が明らかなものの内訳では、まず龍泉窯系青磁では碗が過半を占める。型式分類では大宰府・山本分類のⅠ類が最も多く60点で、全青磁出土量の40％以上を占める。さらに詳しくみると、Ⅰ-2類が最も多く29点、Ⅰ-１類も８点がみられる。次いで多いのがⅡb類で、こちらは合計で34点となる。以下Ⅲ類が11点、Ⅳ類ないしはそれ以降が11点となる。従って龍泉窯系青磁ではⅠ類とⅡ類あわせて94点となり、判別できるものの65％以上をこれらが占めている。これに対し同安窯系青磁は少なく、Ⅰ-１類が２点みられるに過ぎない。白磁は中国陶磁に占める比率は20％である。器種の判別できるものでは、碗16点、皿５点、水注１点、壷13点となる。小破片が主体で詳細分類が困難なものが多いが、概ね龍泉窯系青磁Ⅰ・Ⅱ類と並行する時期のものと考えられ、14世紀以降に降る時期のものは少ない。青白磁では合子や小壷の蓋が多く出土している。一方瀬戸美濃施釉陶器19点のうち、時期の判別できるもの14点である。このうち古瀬戸前期に比定されものが２点、中期が３点、後期が９点みられる。前期では灰釉瓶子１点、中期では四耳壷ないしは瓶子２点が、後期では灰釉平椀、鉄釉天目茶椀、水注、瓶子などがある。中国陶磁の主流をなすⅠ・Ⅱ類の時期より新しい時期の瀬戸美濃が多く、14世紀以前の組成としては中国陶磁が圧倒的多数を占める様相が明らかである。また土製品であるが、土製品の多数を占めるのは土錘である。SX051より27点がまとまって出土するが、他の土錘も同じ環状土錘で、本来は一括使用・破棄されたものと考えてよいであろう。最後に瓦質土器であるが、火鉢の口縁部破片が１点みられる。中世後期に降る時期の所産であろう。以上の様相をまとめると、供膳容器類が全体の３分の２、調理・貯蔵容器が残りの３分の１を占め、さらに供膳容器の中では土師器皿が85％、中国陶磁が14％、瀬戸美濃が１％となる。B4地区で取り上げた資料にはやや時期幅は認められるものの、概ね13世紀代を中心とした土器・陶磁器組成と換言してもよい内容のものと考えている。

出土遺物の分布では、まず土師器皿については明らかに掘立柱建物群と重複する場所で多く出土しており、建物から離れるに従って出土量が減少する傾向が明らかである。B4地区の場合建物群は調査地の北西側と南東側の２カ所に分かれる。一方土師器皿の分布もまた二分されており、建物群の間に土師器皿の出土が認められないベルト部分が存在する。このことからも土師器皿が建物群毎で使用され、その場で破棄された可能性がきわめて高いことが想定される。次いで珠洲・八尾についても、ほぼ土師器皿の分布と同様の傾向を示す。すなわち各建物群を中心に２カ所に分布が分かれる。とくに接合関係が追える資料についても、それぞれの建物群の内部で接合関係が完結しており、群を超えて接合関係が確認できる遺物はほとんど認められない。これまでの事例検討では珠洲・八尾などの調理・貯蔵容器は建物群からやや離れて出土する場合が多かったが、B4地区においては土師器皿と同様に、建物群と重複して出土している。中国陶磁については建物群の規模の大きな北西側建物群の周辺での出土が、南東側建物群よりも圧倒的に多く認められる点が興味深い。建物グループ間の居住者の階層差を示すものと解釈できよう。なお土錘についても北西側建物群に分布が偏重しており、河川漁業の従事者ないしは管理者が、これらの建物群に居住していた可能性が高い。

(5) B5地区

B5地区はB4地区の北側に隣接しており、一連の調査区と考えてよい。調査面積は1,008㎡で、掘立柱建物は４棟検出されている。B4地区北西側建物群の一角を構成するものもあるが、建物群の存続時期は14世紀前半から15世紀前半で、B4地区の建物群よりやや後出する時期のものが多い。出土遺物の中心はB4地区と同様に13世紀代にあり、14世紀以降の出土遺物は少ない。

カウントした土器・陶磁器の総数は118点である。内訳は、土師器皿56点（47.5%）、珠洲48点（40.7%）、八尾２点（1.7%）、中国陶磁12点（10.1%）である。全体にサンプルの数が少ないが、各焼物の組成比率は、ほぼB4地区に近似したものとなっている。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は58：42。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁の比率）は82：18となる。珠洲と八尾の比率は96：４で珠洲が圧倒的に多い。

出土遺物の分布では、土師器皿、珠洲などは調査地の西側に分布が多いが、中国陶磁は逆に調査地の東側で多く出土する傾向がある。このことから、B3地区の北東側から東側に未確認の建物群が所在する可能性もあろう。

(6) B6地区

B6地区はB3～B5地区の西側60mほど離れて所在する。調査面積は3,864㎡と比較的広いが、検出した建物は９棟と少なく、中・小規模建物が主体である。建物群の存続時期は12世紀中頃から15世紀前半におよぶが、出土遺物は12世紀後半から13世紀前半のものが多い。

カウントした土器・陶磁器の総数は307点と、面積の割に少ない。内訳は、土師器皿116点（37.8%）、珠洲128点（41.7%）、八尾37点（12.1%）、瀬戸美濃５点（1.6%）、中国陶磁20点（6.5%）、瓦質土器１点（0.3%）で、これといって特徴のない組成である。土師器皿は多くもなく少なくもない。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は46：54。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、82：14：４で、B5地区と同じ比率となる。珠洲と八尾の比率は78：22でやや八尾が多いものの、卓越するほどでもない。中国陶磁のうち龍泉窯系青磁では、Ⅰ類が１点、Ⅱ類が多く11点（うちⅡｂが８点）、Ⅲ類１点、Ⅳ類１点となる。Ⅱｂ類が青磁の過半を占めている。白磁では玉縁状口縁を有するⅣ類が１点みられる。青白磁は無し。瀬戸美濃施釉陶器で時期のわかるものは２点（合子・柄付片口）で、いずれも古瀬戸後期様式に比定される。珠洲はⅠ～Ⅱ期が主体となる。総じて13世紀代の組成を示すものと考えられよう。

出土遺物の分布では、まず土師器皿は、概ね掘立柱建物の所在する地域と重複して出土する傾向が窺える。珠洲・八尾も同様であり、とくに珠洲甕は調査地の中央に位置する建物群付近にドットが集中している。中国陶磁も概ね調査地の中央付近に分布が濃い傾向が窺える。但し組成のうえではB6地区の場合、龍泉窯系青磁Ⅱｂ類が多く、Ⅰ類はわずかである。従ってB4地区の建物群の居住者とは青磁組成の内容に差があることから、両者の間に階層的な格差が存在する可能性が高い。

(7) B7地区

B7地区はB地区中最も西側に位置する。次に述べるB8地区とともに、南北に細長くのびる調査地区を構成する。調査面積は1,930㎡で、掘立柱建物は５棟が検出されるが、中規模建物が多い。建物群の存続時期は12世紀中頃～14世紀前半、出土遺物は13世紀後半～14世紀前半に中心がある。

カウントした土器・陶磁器の総数は180点である。内訳は、土師器皿93点（51.7%）、珠洲53点（29.4%）、八尾24点（13.3%）、瀬戸美濃４点（2.2%）、中国陶磁４点（2.2%）、土製品２点（0.2%）となる。土師器皿が全体組成の過半を超えていることに特徴がある。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は57：43。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、94：３：３となる。珠洲は時期の判別できるものでは、Ⅱ期が８点と最も多く、Ⅳ・Ⅴ期は４点となる。珠洲・八尾の比率は69：31で、調理・貯蔵容器に占める八尾の比率がB地区中最も高い。中国陶磁は、龍泉窯系青磁では、ⅠないしⅡ類が１点、Ⅲ類が１点みられる。これに青白磁壷の破片２点が加わる。瀬戸美濃は古瀬戸前期の灰釉卸皿２点、中期の卸皿が１点、後期の壷破片１点がみられる。土製品には分銅型のも

の１点と土鈴がある。カウント数は少ないが、組成の比率自体は、B4地区のそれに近似したものと考えられる。

出土遺物の分布では、まず土師器皿は、南北に３群に分かれる建物群の単位毎にドットがまとまる点に特徴がある。その他の焼物は数自体が少なく傾向を把握するまでは至らないが、しいて言えば八尾が調査地区の南端付近にドットが集まり、Ⅱ～Ⅲ期の建物群に伴い使用された可能性がある。

(8) B8地区

B7地区の北側に隣接する一連の調査地である。調査面積は851㎡と小さい。掘立柱建物は中規模の総柱建物２棟が検出されている。12世紀中頃から13世紀後半の存続時期が想定されている。出土遺物の中心時期も同じである。

カウントした土器・陶磁器の総数は56点と少ない。内訳は、土師器皿18点（32.1％）、珠洲30点（53.6％）、八尾７点（12.5％）、中国陶磁１点（1.8％）である。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は34：66。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁の比率）は、95：５となる。珠洲と八尾の比率は81：19である。全体の組成比率はB6地区に近いが、出土遺物の数自体が少ないため詳述できる内容ではない。

出土遺物の分布も資料自体が少なく、調査面積も小さいため、傾向を把握には至っていない。

(9) B9地区

B1～B8地区までが西地区で、B9地区以降が東地区となる。このうちB9地区は最も北西に位置する調査地区で、他の東地区調査地から一カ所だけやや離れた位置にある。調査面積は1,028㎡で、掘立柱建物１棟が検出される。14世紀前半頃に比定される。出土遺物の中心時期は13世紀後半から14世紀前半である。

カウントした土器・陶磁器の総数は138点である。内訳は、土師器皿109点（79％）、珠洲16点（11.6％）、八尾４点（2.9％）、瀬戸美濃４点（2.9％）、中国陶磁3点（2.2％）、瓦質土器２点（1.4％）となる。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は85：15。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、94：３：３となる。珠洲と八尾の比率は80：20である。サンプルの点数は少ないものの、土師器皿の組成比率は全地区中最も高い。検出した建物は１棟のみであるから、隣接した未調査地区（北側）に、さらに多数の建物群が所在する可能性が高い。中国陶磁では玉縁状口縁を有する白磁Ⅳ類の底部が出土している。龍泉窯系青磁２点はⅣ類ないしはそれ以降の時期である。瀬戸美濃は古瀬戸中期の瓶の破片があるが、残りは後期以降の時期に比定される。瓦質土器は火鉢の口縁部破片が１点出土している。

出土遺物の分布では、やはり土師器皿が掘立柱建物の周辺に集中して出土しているのがよくわかる。珠洲や施釉陶器や他の遺物も、数は少ないがほぼ土師器皿と同様の出土傾向を示す。

(10) B10地区

B10地区はB9地区とB12地区の間に位置し、B12地区の一部が接している。469㎡と小規模であるが、掘立柱建物２棟が検出される。またB12地区のⅣ期にみられる堀囲いの溝の一部がB10地区の東端で検出されている。建物の時期は12世紀中頃～13世紀前半と考えられる。出土遺物は13世紀前半と、堀の時期と重複する14世紀後半から15世紀代に二分される。

カウントした土器・陶磁器の総数は54点と少ない。内訳は、土師器皿25点（46.3％）、珠洲22点（40.7％）、瀬戸美濃３点（5.5％）、中国陶磁４点（7.4％）である。全体の組成比率は、欠落器種があるものの、B地区内の平均的様相を示す。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は59：41。供膳容器内の

比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、78：18：9となる。珠洲と八尾の比率は、珠洲100%となる。個別焼物では、中国陶磁では白磁のⅣ-1類やⅨ類の底部がある。瀬戸美濃は全て後Ⅱ期ないしはⅢ期の製品である。

出土遺物の分布は、点数が少なく傾向を絞り込めない。堀からの出土遺物も少ない。

(11) B11地区

B11地区はB12地区の西側に接して位置する。調査面積は749㎡で、掘立柱建物3棟が検出されている。建物群の存続時期は12世紀中頃から13世紀後半頃である。出土遺物の様相では12世紀中頃～13世紀後半頃と14世紀代にピークが二分される。

カウントした土器・陶磁器の総数は313点である。内訳は、土師器皿225点（71.9%）、珠洲57点（18.2%）、八尾9点（2.9%）、瀬戸美濃5点（1.6%）、中国陶磁16点（5.1%）、土製品1点（0.3%）となる。全体の組成比率では、B9地区に次いで土師器皿が高比率となっている。

供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は79：21。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、91：6：3となる。珠洲と八尾の比率は86：14で平均的な様相を示す。中国陶磁では、龍泉窯系青磁Ⅰ類碗が2点、Ⅱb類1点、Ⅳ類ないしはそれ以降が5点ある。白磁ではⅣ類皿底部1点、Ⅳ類ないしはⅧ類が3点、青白磁は小壷1点、これに黒釉陶器破片2点が加わる。瀬戸美濃では後Ⅰ～Ⅳ期の盤類、後Ⅳ期の香炉がある。

出土遺物の分布では、まず土師器皿は調査面積が狭いためか、調査地全体からバラバラと出土する状態である。珠洲・中国陶磁・瀬戸美濃などは、調査地の中央付近の建物周辺から出土するものが多い。全体に資料数が少なく、分布の粗密から出土傾向を把握するには至らない状況が窺える。

(12) B12地区

B12地区は調査面積が5,374㎡で、B13地区に次いで規模が大きい。掘立柱建物12棟の他、方形囲繞区画を有する中世後期の屋敷地が検出されている。建物群は14世紀前半から16世紀前後まで存続する。出土遺物の様相でも、12世紀後半から15世紀代の長期にわたる遺物がみられる。中世前期の規模の大きな総柱建物もみられるが、中世後期の囲繞施設を持つ屋敷地が検出された調査地区としては、B地区中唯一となる。

カウントした土器・陶磁器の総数は4,036点である。この点数はB4地区の2倍の数値であり、今回報告したB地区の出土総数の2分の1におよぶものである。内訳は、土師器皿2,318点（57.4%）、珠洲1,444点（35,8%）、八尾161点（4%）、瀬戸美濃49点（1.2%）、中国陶磁46点（1.1%）、瓦質土器13点（0.3%）、土製品5点（1.1%）となる。土師器皿の比率は60%弱で高く、B地区中第3位であるが、時期別に把握できない点が残念である。供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は60：40。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、96：2：2となる。調理・貯蔵容器では、珠洲の比率が八尾に対して9：1となる。但し時期の判別できる珠洲をカウントすると、Ⅰ～Ⅲ期までの製品とⅣ期以降の製品の数は概ね50：50で均衡している。このことから珠洲の総出土量の2分の1をⅠ～Ⅲ期と考えると、珠洲と八尾の比率はほぼ80：20程度となる。この数値はB地区の平均値に近く、12世紀～14世紀代における珠洲と八尾の、本来の組成数値である可能性が高い。なお八尾のなかには1点の陶錘を含む。中国陶磁では、まず龍泉窯系青磁では古い時期のⅠ類ないしはⅡb類が10点、Ⅲ類が1点、Ⅳ類ないしはⅣ類以降が16点と、14・15世紀代の青磁が多くみられる。白磁は細片が多く分類が明確な事例が少ないが、玉縁状口縁を有するⅣ類の口縁部やⅢ類の白磁水注の破片などがみられる。青白磁も明確なものが少ない。黒釉陶器碗の破片は2点が出土している。全体としてみた場合、

建物群の新・旧時期に関係なく、あまり潤沢に中国陶磁を保持していたような様相は、出土量や内容からは窺うことができない。一方瀬戸美濃では、古瀬戸前期の製品が２点、中期が12点、後期が18点、大窯期が２点で、中・後期の製品が中心となる。器種では前期では灰釉瓶子、卸皿が、中期では灰釉合子、四耳壷、瓶子、筒型香炉、柄付片口、平椀、卸皿などが、後期では灰釉直縁大皿、折縁深皿、瓶子、花瓶、平椀、筒型容器、小杯、盤類、鉄釉天目茶椀などが、大窯期では鉄釉天目茶椀や灰釉端反り皿が出土している。また瓦質土器では火鉢、風炉がみられるが、量的にはさほど多くない。

出土遺物の分布では、まず土師器皿は調査地の全体から出土するものの、南端付近に集中して出土する部分がみられる。付近にはⅢ期の大型総柱建物を含む中世前期の建物群が所在する。これに比べ中世後期の屋敷区画においては顕著に土師器皿の集中する地点はあまり見受けられない。土師器皿では接合関係が追えるものが２例あるが、うち一例は60m以上離れて接合している。同様の事例は珠洲でもみられることから、遺構面の広範囲な攪乱が想定される。ついで珠洲・八尾であるが、両者とも土師器皿と同様に調査地区全体にばらつく様相を示す。但し甕では集中する地点が２カ所にみられ、該当地域周辺での珠洲甕の使用の可能性が指摘できる。中国陶磁と瀬戸美濃は調査地南側で多く出土する傾向がみられる。瓦質土器は数も少なく調査地区内に点在するが、どちらかといえば中世後期の屋敷地区画周辺に多く分布する傾向が窺われる。

(13) B13地区

B12地区の東側に隣接し、調査面積は5,542㎡とB地区のなかで最大規模を有す。主に調査地の中央付近と東端付近の２カ所で大規模総柱建物を含む掘立柱建物群が検出されている。これらの建物群は12世紀中頃から14世紀後半頃の存続時期が想定されている。出土遺物の様相では、12世紀中頃から13世紀代と15世紀代にピークがみられる。検出遺構は中世前期の掘立柱建物群が主体で、B12地区のように中世後期の屋敷地区画はみつかっていない。

カウントした土器・陶磁器の総数は361点と、隣接するB12地区の10分の１以下である。内訳は、土師器皿185点（51.4％）、珠洲129点（35.7％）、八尾21点（5.8％）、瀬戸美濃６点（1.7％）、中国陶磁19点（5.2％）、瓦質土器１点（0.2％）である。土師器皿の比率は50％を超えている。

供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は58：42。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、88：９：３となる。珠洲と八尾の比率は86：14でB地区の平均的様相を示す。八尾のなかには６点の陶錘を含む。時期の判別できる珠洲では、29点中25点がⅠ～Ⅱ期、さらに２点がⅢ期に比定され、12～13世紀代の製品が主体となっている。これに対し後出するⅣ期の製品は２点と少ない。中国陶磁では、まず龍泉窯系青磁碗ではⅠ類が４点、Ⅱb類が４点、Ⅲ類が１点あり、Ⅳ類ないしはそれ以降の製品はみられない。一方白磁では、今回の調査では稀少なⅡ類碗２点の他に、玉縁状口縁を有するⅣ類碗、Ⅴ類碗２点、Ⅸ類の碗・皿４点、Ⅲ類の壷破片などが出土している。全体的に古い時期の白磁が主体をしめている。なお青白磁の出土はみられない。瀬戸美濃は数が少ないが、古瀬戸中期が２点、後期が２点、大窯期が２点みられ、13世紀に遡る古瀬戸前期の製品はみられない。瓦質土器は火鉢が１点みられる。以上の様相からも、B13地区で示された組成の数値は、概ね12～13世紀代の掘立柱建物に伴うものと考えてよいであろう。

出土遺物の分布では、まず土師器皿はほぼ建物群の周辺に限定して出土している様相が明らかで、建物群の所在しない空白地では、土師器皿の出土も少ない。珠洲もほぼ同様の傾向を示すが、とくに調査地北側の大型掘立柱建物周辺での出土が多い。比較的接合関係が多く把握されている擂鉢でも、北側建物群周辺のなかで接合関係が完結している。中国陶磁も同様の傾向を示す。瀬戸美濃は中期の

柄付片口１点が北側建物群付近で出土する他、残り５点のうちの４点は東端付近から出土している。

(14) B14地区

B14地区はB13地区の北側に隣接する。調査面積は1,856㎡。南壁付近でわずか１棟の掘立柱建物のみが検出されており、B13地区検出の建物群の北限を示す。建物は13世紀代と考えられている。出土遺物の様相では断続的に12世紀～15世紀の遺物がみられるが、出土量自体はさほど多くない。

カウントした土器・陶磁器の総数は110点である。内訳は、土師器皿44点（40％）、珠洲48点（43.6％）、八尾６点（5.4％）、瀬戸美濃４点（3.6％）、中国陶磁７点（6.4％）、瓦質土器１点（0.9％）である。土師器皿は50％を切るものの、それほど少ないわけではない。

供膳容器と調理・貯蔵容器の比率は51：49。供膳容器内の比率（土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率）は、80：13：７となる。珠洲と八尾の比率は89：11で、珠洲が９割近くを占め、数量的に圧倒する。中国陶磁は龍泉窯系青磁碗Ⅱｂ類１点がみられる他、白磁碗・皿類５点が出土する。瀬戸美濃は後Ⅲ期の灰釉平椀、大窯期の鉄釉天目茶椀など新しい時期のものが多い。瓦質土器は火鉢の口縁部破片が１点出土している。

出土遺物の分布では、数が少なく傾向をつかめるには至らない。土師器皿では、遺構が多く検出される調査地の東側に出土地点が点在している。珠洲や中国陶磁、瀬戸美濃などもほぼ同様の出土傾向を示している。

4　まとめ

以上任海宮田遺跡B地区出土の土器・陶磁器組成について、組成比率、個別出土遺物の特徴、出土遺物の分布状況の３点から分析を加えてきた。その結果各調査地間において共通する様相、あるいは異なる様相がみられることが明らかとなった。以下に気のついた点を箇条書きしてまとめにかえたい。

まずこれまで報告したB地区の組成数値と、他遺跡の組成の数値とを比較してみる。比較の対象は道場Ⅰ遺跡A地区、中名Ⅴ遺跡F1地区、中名Ⅵ遺跡A地区、任海宮田遺跡A地区である。まず供膳容器と調理・貯蔵容器とのおおざっぱな比率では、道場Ⅰ遺跡が50：50、中名Ⅴ遺跡F地区が80：20、中名Ⅵ遺跡A地区、任海宮田遺跡A地区、B地区が60：40となる。次に供膳容器内の比率、すなわち土師器皿・中国陶磁・瀬戸美濃の比率は、道場Ⅰ遺跡A地区93：３：４は、中名Ⅴ遺跡F1地区95：１：４、中名Ⅵ遺跡A地区91：７：２、任海宮田遺跡A地区83：13：４、任海宮田遺跡B地区90：８：２となる。さらに調理・貯蔵容器内での珠洲と八尾の比率は、道場Ⅰ遺跡A地区59：41、中名Ⅴ遺跡F1地区86：14、中名Ⅵ遺跡A地区75：25、任海宮田遺跡A地区83：17、任海宮田遺跡B地区87：13となる。

これらの数値から窺えるのは、まず供膳容器では圧倒的に土師器皿が卓越し、ほぼ９割以上を占める様相が明らかである。これに対し中国陶磁は10％程度、瀬戸美濃は２～４％となる。瀬戸美濃は各遺跡ともほぼ同じ数値であるが、中国陶磁は中名Ⅴ遺跡F1地区（1.2％）と道場Ⅰ遺跡A地区（３％）がかなり低い数値となる。一方供膳容器と貯蔵・調理容器の比率では、中名Ⅵ遺跡A地区、任海宮田遺跡A地区、任海宮田遺跡B地区では60：40で同じ数値を示すが、中名Ⅴ遺跡F1地区は80：20と八尾が少なく、道場Ⅰ遺跡A地区は50：50と逆に貯蔵・調理容器が過半数を占めている。

以上をまとめると、供膳容器のなかでの焼物比率は、遺跡に関係なく土師器皿が８～９割以上を占め、次いで瀬戸美濃が２～４％で共通する定率となり、中国陶磁は10％前後の遺跡と、ほんの数％の遺跡に分かれることになる。貯蔵・調理容器では珠洲が過半を占める。珠洲と八尾との比率は85：15前後が平均値といえそうである。このなかで道場Ⅰ遺跡の八尾の比率は隔絶しており、注目される。

他遺跡では貯蔵・調理容器内での八尾の比率は15%前後、全体組成に占める八尾の比率は５%前後となる。この数値が富山平野内の中世集落における八尾の平均的流通量であるか否かは、今後の周辺地域での検討事例を積み重ねて再検討する必要があろう。

次に各焼物別の出土状況であるが、まず中国陶磁では、B4地区の建物群では龍泉窯系青磁Ⅰ類が多く次いでⅡｂ類がみられるのに対し、Ｂ６地区ではⅡｂ類主体で構成されているなど、建物群の違いによって中国陶磁の保有状況に差があることが判明した。建物群間の階層格差を考える視点になろう。なお白磁では14世紀以降の森田分類A～D群に該当する製品や、龍泉窯系青磁ではⅣ類以降に位置づけられる製品が全体に少ないことが目に付いた。瀬戸美濃では灰釉平椀や卸皿といった他遺跡での出土が比較的多い器種や、鉄釉天目茶椀の類があまりみられず、全体に出土する器種自体が少ない様相が窺われた。瓦質土器についても同様で、出土量・内容ともあまり良好とはいえない状況であった。土錘資料では、B4地区などで建物群周辺でまとまって出土する事例があり興味深い。今後中世の河川漁業などに関する資料の蓄積が期待される。

最後に出土遺物の分布状況であるが、簡単に要約すると、供膳容器も調理・貯蔵容器も基本的には建物群と重複したエリアで出土しているということである。従って中名Ⅴ遺跡F1地区でみられたように、土師器皿は建物群の周辺、珠洲などの調理・貯蔵容器は建物群とはやや離れた外縁で出土するという傾向と、やや異なる結果となっている。B地区では、とくに接合関係のわかるものも、建物群単位のなかで接合関係が完結しており、遺物の帰属エリアが比較的はっきりと捉えられる事例が多い。

以上任海宮田遺跡B地区の中世土器・陶磁器組成と出土遺物の分布状況について若干の検討をおこなった。今後とも同様の検討を他遺跡でも繰り返し行っていく予定であり、新たな分析成果が明らかになることに期待したい。

（森　　隆）

(引用参考文献)

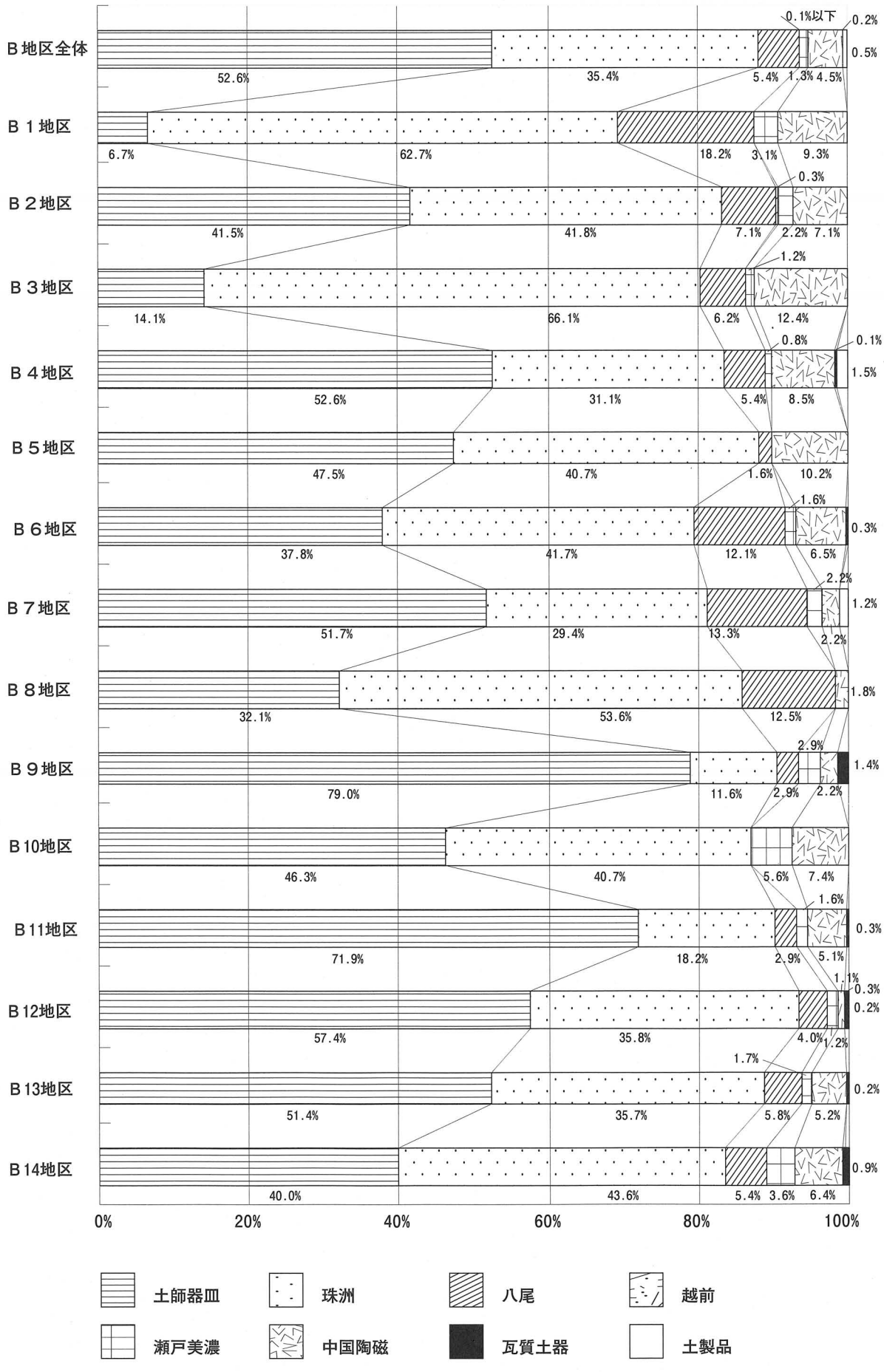
・横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』４）1978
・山本信夫他「大宰府条坊跡Ⅱ」(『太宰府町の文化財』第７集）太宰府市教育委員会1983
・山本信夫「中世前期の貿易陶磁器ーその分析視点ー」(『原遺跡七郎丸１地区・口寺田遺跡』）国東町教育委員会1999
・森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」(『貿易陶磁研究』NO2）1982
・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究』NO2）1982
・藤澤良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」(『東洋陶磁』第８号）1982
・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱー古瀬戸後期様式の編年ー」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ｘ）1991
・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅲー古瀬戸前期様式の編年ー」(『(財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第３輯）1995
・藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」(『(財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯）2002
・菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集）1989
・吉岡康暢『中世須恵器の研究』吉川弘文館　1994
・森隆「越中八尾窯の流通に関する一様相」(『陶磁器の社会史』）2006

表1　中世の土器・陶磁器組成（1）

焼物種類		中世土師器	珠洲					八尾					越前		瀬戸美濃				
器種		皿	スリ鉢	甕	壺	鉢	その他	スリ鉢	甕	壺	陶錘	その他	甕	その他	椀	皿	壺	杯	その他
B1地区	遺構	2	1	3	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	13	69	42	19	5	2	20	18	0	0	0	0	0	1	4	2	0	0
	小計	15	70	45	19	5	2	20	21	0	0	0	0	0	1	4	2	0	0
	合計	15	141					41					0		7				
B2地区	遺構	76	37	31	5	0	2	5	6	2	0	0	1	0	2	2	0	0	2
	包含層	58	24	28	7	1	0	2	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	小計	134	61	59	12	1	2	7	11	5	0	0	1	0	2	2	0	0	3
	合計	134	135					23					1		7				
B3地区	遺構	6	6	2	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	19	54	34	19	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
	小計	25	60	36	21	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
	合計	25	117					11					0		2				
B4地区	遺構	162	85	32	13	0	0	20	4	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1
	包含層	1048	277	226	82	0	0	39	50	13	0	0	0	0	7	3	4	0	2
	小計	1210	362	258	95	0	0	59	54	13	0	0	0	0	7	3	6	0	3
	合計	1210	715					126					0		19				
B5地区	遺構	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	55	22	19	7	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	56	22	19	7	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	56	48					2					0		0				
B6地区	遺構	14	2	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	102	33	69	22	1	0	6	25	3	0	0	0	0	3	0	0	0	2
	小計	116	35	70	22	1	0	9	25	3	0	0	0	0	3	0	0	0	2
	合計	116	128					37					0		5				
B7地区	遺構	27	7	2	1	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	66	28	13	2	0	0	4	14	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0
	小計	93	35	15	3	0	0	7	17	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0
	合計	93	53					24					0		4				
B8地区	遺構	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	18	10	16	3	0	0	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	18	10	17	3	0	0	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	合計	18	30					7					0		0				
B9地区	遺構	12	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	97	3	10	1	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	小計	109	4	11	1	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	合計	109	16					4					0		4				
B10地区	遺構	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	23	10	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1
	小計	25	11	8	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1
	合計	25	22					0					0		3				
B11地区	遺構	15	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	210	17	26	10	0	0	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	小計	225	21	26	10	0	0	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	合計	225	57					9					0		5				
B12地区	遺構	1405	209	640	139	1	0	14	84	4	0	0	0	0	8	4	12	1	4
	包含層	913	101	261	91	0	2	5	52	1	1	0	0	0	7	6	3	0	4
	小計	2318	310	901	230	1	2	19	136	5	1	0	0	0	15	10	15	1	8
	合計	2318	1444					161					0		49				
B13地区	遺構	32	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	153	109	0	0	0	0	15	0	0	6	0	0	0	3	2	1	0	0
	小計	185	129	0	0	0	0	15	0	0	6	0	0	0	3	2	1	0	0
	合計	185	129					21					0		6				
B14地区	遺構	2	2	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	42	19	18	6	0	0	4	1	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0
	小計	44	21	20	7	0	0	4	2	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0
	合計	44	48					6					0		4				
合計		4573	1151	1485	433	8	6	146	293	26	7	0	1	0	36	29	25	1	24
		4573	3083					472					1		115				

表2　中世の土器・陶磁器組成(2)

焼物種類		中国陶器														瓦質土器		土製品		合計
		青磁(同安)			青磁				白磁				青白磁	黒釉						
器種		椀	皿	その他	椀	皿	杯	その他	椀	皿	壺	その他			火鉢	その他	土錘	その他	
B1地区	遺構	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
	包含層	0	0	0	9	1	0	3	1	1	0	0	4	0	0	0	0	0	214
	小計	2	0	0	9	1	0	3	1	1	0	0	4	0	0	0	0	0	225
	合計	15							2				4	0	0		0		225
B2地区	遺構	0	0	0	4	1	1	1	1	2	0	0	1	0	0	0	0	0	182
	包含層	0	0	0	8	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	141
	小計	0	0	0	12	1	2	1	2	3	1	0	1	0	0	0	0	0	323
	合計	16							6				1	0	0		0		323
B3地区	遺構	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	22
	包含層	0	0	0	8	0	1	0	2	2	3	0	2	0	0	0	0	0	155
	小計	0	0	0	9	0	1	0	3	2	4	0	3	0	0	0	0	0	177
	合計	10							9				3	0	0		0		177
B4地区	遺構	0	0	0	30	0	0	0	5	0	2	1	2	0	0	0	27	0	386
	包含層	2	3	0	98	3	2	8	12	5	11	3	8	0	1	0	8	1	1916
	小計	2	3	0	128	3	2	8	17	5	13	4	10	0	1	0	35	1	2302
	合計	146							39				10	0	1		36		2302
B5地区	遺構	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	包含層	0	0	0	8	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	116
	小計	1	0	0	8	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	118
	合計	9							2				1	0	0		0		118
B6地区	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
	包含層	0	0	0	15	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	1	0	0	287
	小計	0	0	0	15	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	1	0	0	307
	合計	15							5				0	0	1		0		307
B7地区	遺構	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	45
	包含層	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	135
	小計	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	180
	合計	2							0				2	0	0		2		180
B8地区	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	包含層	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	55
	小計	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	56
	合計	1							0				0	0	0		0		56
B9地区	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
	包含層	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	124
	小計	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	138
	合計	2							1				0	0	2		0		138
B10地区	遺構	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	包含層	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	49
	小計	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	54
	合計	2							2				0	0	0		0		54
B11地区	遺構	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20
	包含層	0	0	0	5	0	0	2	4	1	0	0	1	2	0	1	0	0	293
	小計	0	0	0	6	0	0	2	4	1	0	0	1	2	0	1	0	0	313
	合計	8							5				1	2	1		0		313
B12地区	遺構	0	0	0	18	2	0	3	5	0	1	0	0	1	7	1	0	5	2568
	包含層	0	0	0	7	1	0	0	3	0	0	1	2	2	1	4	0	0	1468
	小計	0	0	0	25	3	0	3	8	0	1	1	2	3	8	5	0	5	4036
	合計	31							10				2	3	13		5		4036
B13地区	遺構	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	52
	包含層	0	0	0	9	0	0	0	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	309
	小計	0	0	0	9	0	0	0	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	361
	合計	9							10				0	0	1		0		361
B14地区	遺構	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
	包含層	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	1	0	0	1	0	0	0	101
	小計	0	0	0	1	0	0	0	2	3	0	1	0	0	1	0	0	0	110
	合計	1							6				0	0	1		0		110
合計		5	3	0	228	8	5	18	55	17	19	6	24	5	13	7	35	8	8700
		267							97				24	5	20		43		8700



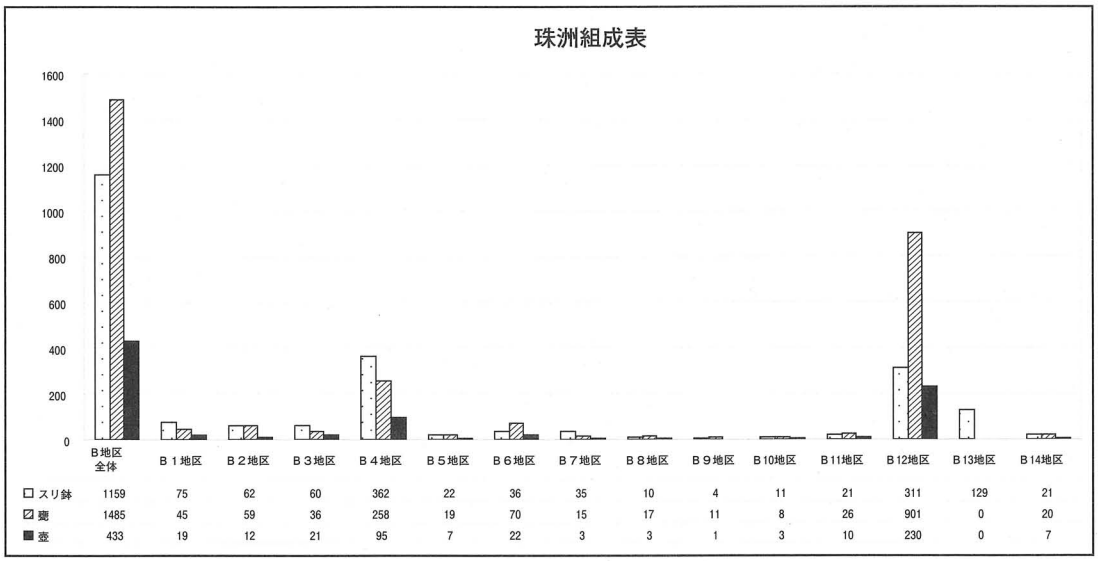
第１図　任海宮田遺跡B地区の土器・陶磁器組成表

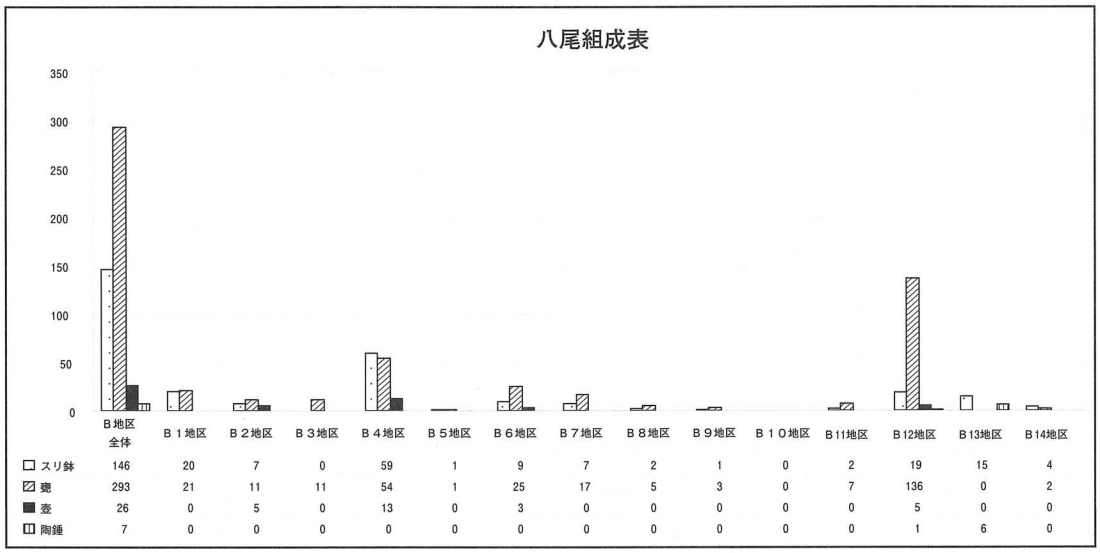
表３　中国陶磁・瀬戸美濃施釉陶器分類表

種別	窯	器種	分類	点数
青磁	龍泉窯系	碗	太宰府分類Ⅰ類	17
		碗	太宰府分類Ⅰ-1類	11
		碗	太宰府分類Ⅰ-1b類	2
		碗	太宰府分類Ⅰ-2類	24
		碗	太宰府分類Ⅰ-2b類	3
		碗	太宰府分類Ⅰ-2・3類	3
		碗	太宰府分類Ⅰ-2・4類	1
		碗	太宰府分類Ⅰ-2～4類	9
		碗	太宰府分類Ⅰ-3a類	1
		碗	太宰府分類Ⅰ-4類	5
		碗	太宰府分類Ⅰ-4d類	1
		碗	太宰府分類Ⅰ-6a類	1
		碗	太宰府分類Ⅰ-b類	1
		碗	太宰府分類ⅠorⅡ類	4
		碗	太宰府分類ⅠorⅡa類	3
		碗	太宰府分類ⅠorⅡb類	1
		碗	太宰府分類ⅠorⅣ類	1
		碗	太宰府分類Ⅰ類?orⅣ類～?	1
		碗	太宰府分類Ⅱ-a類	1
		碗	太宰府分類Ⅱ-b類	61
		碗	太宰府分類Ⅱ-b　orⅢ-2c類	1
		碗	太宰府分類Ⅱ-b　orⅣ類	1
		碗	太宰府分類Ⅱ-c類	3
		碗	太宰府分類Ⅱ～Ⅳ類	1
		碗	太宰府分類Ⅲ類	1
		碗	太宰府分類Ⅲ-2類	4
		碗	太宰府分類Ⅲ-2c類	5
		碗	太宰府分類Ⅲ-b　orⅢ-c類	1
		碗	太宰府分類Ⅲ-2　orⅣ類	1
		碗	太宰府分類Ⅲ類　or上田分類DⅡ類	1
		碗	太宰府分類Ⅳ類	2
		碗	太宰府分類Ⅳ類～	6
		碗	太宰府分類Ⅳ類～明代	8
		碗	太宰府分類Ⅳ類～上田分類Ⅱ類	2
		碗	太宰府分類Ⅳ類～上田分類B-Ⅱ類	1
		碗	太宰府分類Ⅳ類～上田分類B-Ⅲ類	1
		碗	太宰府分類Ⅳ類～上田分類C-Ⅱ類	1
		碗	太宰府分類Ⅳ類～上田分類D-Ⅱ類	2
		碗	太宰府分類Ⅳ類　or　上田分類D-Ⅱ類以降	2
		碗	上田分類B-Ⅲ～Ⅳ類	1
		碗	上田分類D-Ⅱ類	2
		碗	不明	1
		小碗	太宰府分類Ⅰ-2類	1
		小碗	太宰府分類Ⅱ-b類	2
		大杯	太宰府分類Ⅲ類	2
		大杯	太宰府分類Ⅲ-3類	1
		杯	太宰府分類Ⅲ類	1
		杯	13世紀後半～14世紀代	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅰ類	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅰ-1類	2
		Ⅲ	太宰府分類Ⅰ-2類	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅰ-2b類	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅳ類～明	2
		Ⅲ	明代	1
		Ⅲ	不明	1
		盤	明代以降	1
		盤	不明	1
		香炉	太宰府分類Ⅳ類以降	2
		香炉?or壺類	不明	1
		小壺?	太宰府分類Ⅳ類以降	4
		壺or瓶	太宰府分類Ⅳ類～明	1
		壺蓋?	太宰府分類Ⅳ類～明	1
		脚台	太宰府分類Ⅲ～Ⅳ類以降	1
		不明	太宰府分類Ⅰ-2～4類	2
		不明	太宰府分類Ⅱ-b類	1
		不明	太宰府分類Ⅳ類	1

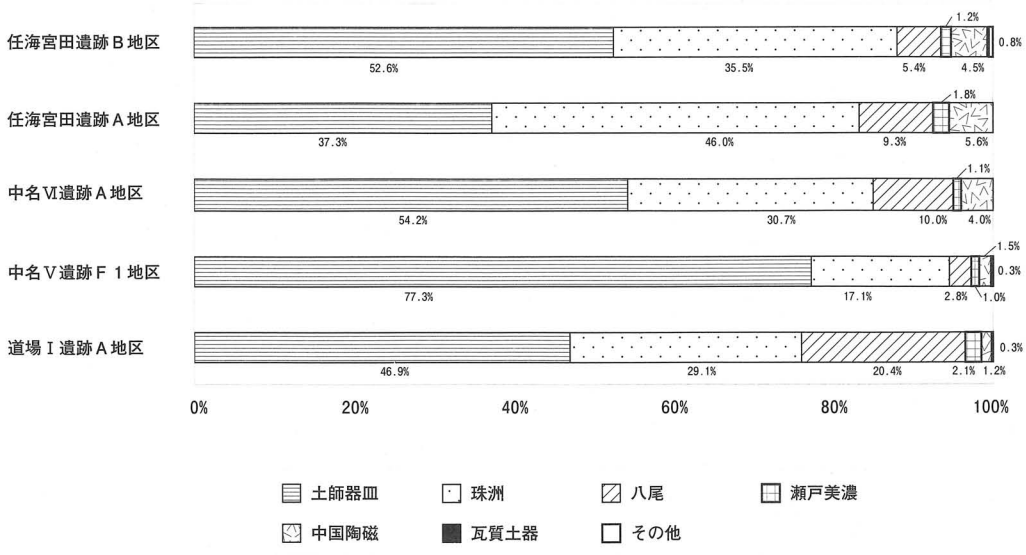
種別	窯	器種	分類	点数
青磁	同安窯系	碗	太宰府分類ⅢorⅣ類	1
	龍泉窯系or同安窯系	碗	太宰府分類Ⅰ類	1
		碗	龍泉:太宰府分類Ⅳ以降同安:太宰府分類ⅡorⅢ類	1
		碗	上田分類D類	3
		碗	上田分類D・E類	1
		碗?	太宰府分類Ⅳ類～上田分類D類?	1
青磁or白磁	龍泉窯系	碗	太宰府分類Ⅳ類～上田分類DⅡ類	1
	白磁		太宰府分類Ⅴ-2類?・森田C群?	
	同安窯系	碗	太宰府分類Ⅰ類	1
	白磁		太宰府分類Ⅳ～Ⅷ類	
	同安窯系	碗	C・D期	2
	白磁			
白磁		碗	太宰府分類Ⅱ類	1
		碗	太宰府分類Ⅱ-3・4類	1
		碗	太宰府分類Ⅲ-1類	1
		碗	太宰府分類Ⅳ類	4
		碗	太宰府分類Ⅳ-1類	2
		碗	太宰府分類Ⅳ～Ⅵ類	2
		碗	太宰府分類Ⅳ～Ⅷ類	11
		碗	太宰府分類Ⅳ-1orⅧ-1・3類	1
		碗	太宰府分類Ⅳ～Ⅶ類?	1
		碗	太宰府分類Ⅴ～Ⅷ類	1
		碗	太宰府分類Ⅴ～Ⅷ類	1
		碗	太宰府分類ⅤorⅧ類	2
		碗	太宰府分類Ⅴ-1orⅧ-2類	1
		碗	太宰府分類Ⅴ-2　orⅥorⅦ類	1
		碗	太宰府分類Ⅴ-4　orⅧ-1・3類	6
		碗	太宰府分類Ⅴ-2　orⅥ-1　orⅦ類	1
		碗	太宰府分類Ⅵ-4b類	1
		碗	太宰府分類Ⅷ-1・3類	1
		碗	太宰府分類Ⅷ-2類	1
		碗	太宰府分類Ⅸ類	6
		碗	太宰府分類Ⅸ-2類	1
		碗orⅢ	太宰府分類Ⅸ類	4
		小碗	太宰府分類Ⅹ類	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅳ類	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅳ類-2	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅵ-1a類	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅷ-1b類	1
		Ⅲ	太宰府分類Ⅸ類	7
		Ⅲ	太宰府分類Ⅸ-1類	4
		Ⅲ	太宰府分類Ⅸ-2類	1
		Ⅲ	森田D群	2
		壺	太宰府分類ⅡorⅢ類	2
		壺	太宰府分類Ⅲ類	10
		壺	11世紀～13世紀	1
		壺	不明	5
		四耳壺	太宰府分類Ⅲ類	1
		水注	太宰府分類Ⅲ類	1
		水注	不明	1
		小瓶	不明	1
		不明	太宰府分類Ⅸ類?	1
		不明	不明	3
青白磁		碗?		2
		Ⅲ		4
		合子蓋		3
		合子		3
		小型合子	C・D期	1
		壺		2
		小型壺		4
		梅瓶		1
黒釉陶器	建窯	天目茶碗		4
不明		大碗	太宰府分類Ⅱ類?	1

種別	施釉の種類	器種	分類	点数
瀬戸美濃	灰釉	卸皿	藤澤編年前Ⅲ期	2
	灰釉	卸皿	藤澤編年前Ⅲ～Ⅳ期	1
	灰釉	卸皿	藤澤編年中期	1
	灰釉	卸皿	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	卸皿	藤澤編年後Ⅰ期	1
	灰釉	卸皿	藤澤編年後Ⅱ期	1
	灰釉	卸皿	藤澤編年後Ⅳ期古	1
	灰釉	卸目付大皿	藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	折縁深皿	藤澤編年中Ⅳ期	1
	灰釉	折縁深皿	藤澤編年後Ⅱ期	1
	灰釉	縁釉小皿	藤澤編年後Ⅲ～Ⅳ期	1
	灰釉	縁釉小皿	藤澤編年後Ⅳ期新	1
	灰釉	縁釉挟皿	藤澤編年大窯Ⅰ期	1
	灰釉	端反皿	藤澤編年大窯Ⅰ期	1
	灰釉	端反皿or丸皿	藤澤編年大窯Ⅰ～Ⅱ期	2
	灰釉	端反皿or丸皿	藤澤編年大窯Ⅰ～Ⅲ期	1
	灰釉	丸皿	藤澤編年大窯Ⅲ～Ⅳ期	1
	灰釉	直縁大皿	藤澤編年後Ⅱ期	1
	灰釉	皿	藤澤編年中Ⅳ期	1
	灰釉	皿	不明	1
	灰釉	平碗	藤澤編年後Ⅰ期	1
	灰釉	平碗	藤澤編年後期	2
	灰釉	平碗	藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	平碗	藤澤編年後Ⅱ期	7
	灰釉	平碗	藤澤編年後Ⅱ～Ⅲ期	2
	灰釉	平碗	藤澤編年後Ⅲ期	2
	灰釉	平碗	藤澤編年後Ⅳ期	1
	灰釉	平碗	藤澤編年後Ⅳ期古	1
	鉄釉	天目茶碗	藤澤編年後Ⅱ期	1
	鉄釉	天目茶碗	藤澤編年後Ⅳ期	1
	鉄釉	天目茶碗	藤澤編年後期	2
	鉄釉	天目茶碗	藤澤編年大窯Ⅰ期	4
		ハケ目茶碗	幕末	1
	灰釉	丸碗	不明	1
	灰釉	瓶	藤澤編年中期	1
	灰釉	瓶子Ⅲ類	藤澤編年後期	2
	灰釉	瓶子	藤澤編年前Ⅱ～Ⅳ期	1
	灰釉	瓶子	藤澤編年前Ⅳ期	2
	灰釉	瓶子	藤澤編年中期	1
	灰釉	瓶子	藤澤編年中期Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	瓶子	藤澤編年中期Ⅲ期	1
	灰釉	四耳壺or瓶子	藤澤編年前Ⅳ期	1
	灰釉	四耳壺or瓶子	藤澤編年中期	1
	灰釉	四耳壺or瓶子	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	四耳壺	藤澤編年中Ⅲ～Ⅳ期	1
	灰釉	花瓶	藤澤編年後期	1
	灰釉	広口壺	藤澤編年中Ⅲ～Ⅳ期	1
	灰釉	水注	藤澤編年後期	1
	灰釉	小壺	藤澤編年後Ⅲ～Ⅳ期	1
	灰釉	壺・瓶類	藤澤編年前期	1
	灰釉	壺・瓶類	藤澤編年中期	3
	灰釉	壺・瓶類	不明	1
	灰釉	鉢	藤澤編年後Ⅱ～Ⅲ期	1
	灰釉	ねり鉢	不明	1
	灰釉	柄付片口	藤澤編年中期	1
	灰釉	柄付片口	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	柄付片口	藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	盤類	藤澤編年後Ⅰ～Ⅲ期	1
	灰釉	盤類	藤澤編年後Ⅱ～Ⅲ期	2
	灰釉	盤類	藤澤編年後Ⅳ期	1
	灰釉	香炉	藤澤編年後Ⅳ期	1
	灰釉	筒型香炉	藤澤編年中期	1
	灰釉	筒型香炉	藤澤編年後期	1
	灰釉	合子	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	合子	藤澤編年後期	1
	鉄釉	小杯	藤澤編年後期	1
		不明	藤澤編年後期	2
		不明	不明	12



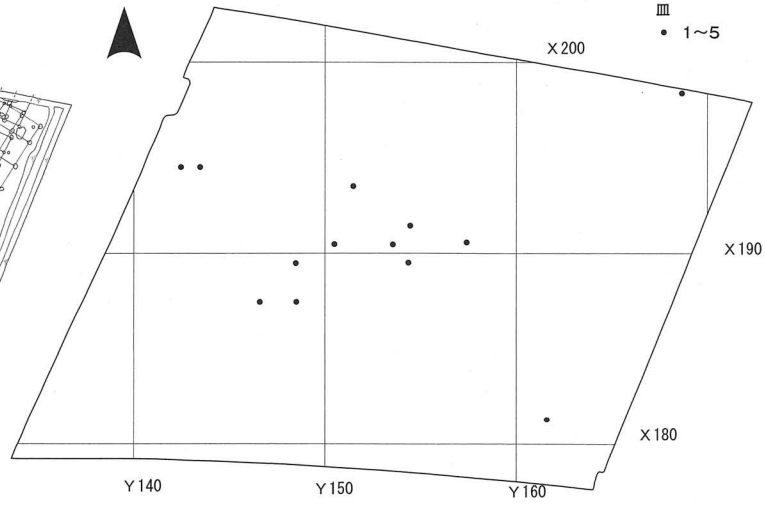


第２図　珠洲・八尾組成図

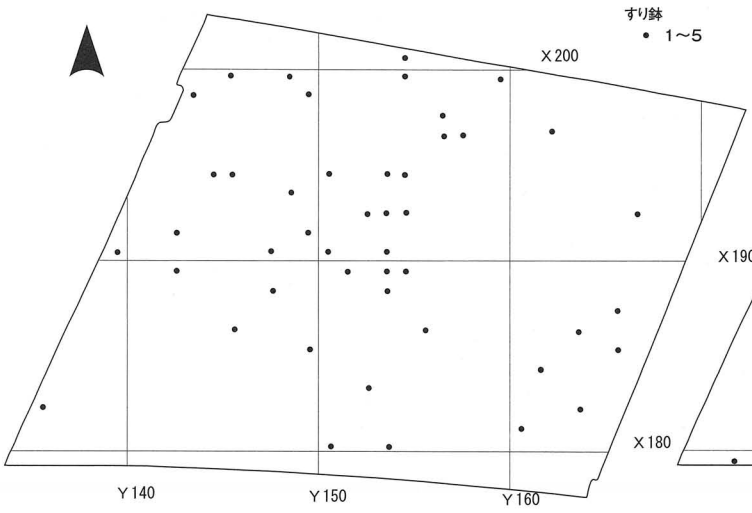


第３図　遺跡毎の中世土器・陶磁器組成比較

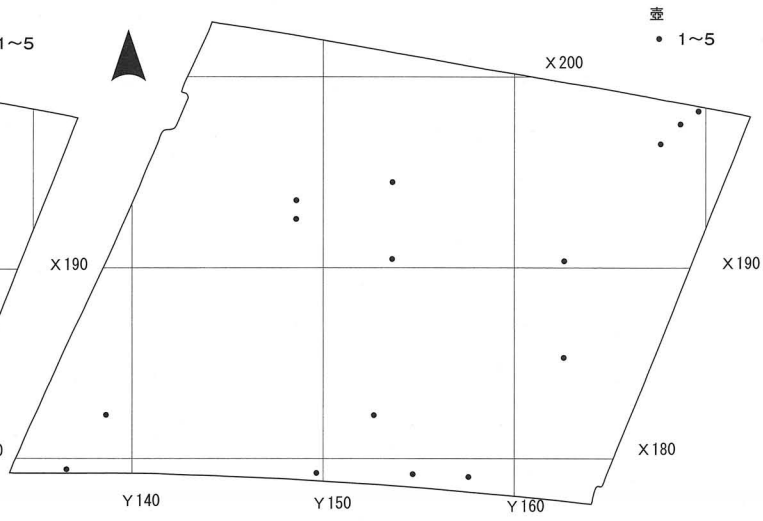
B1地区　遺構全体図



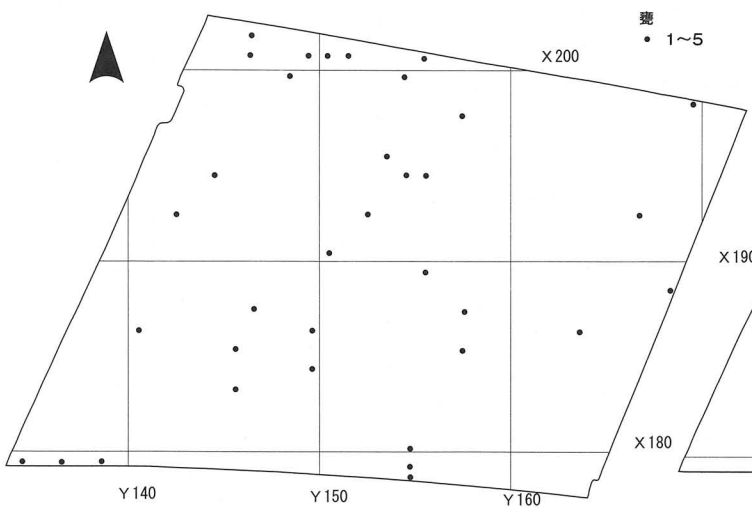
B1地区　中世土師器



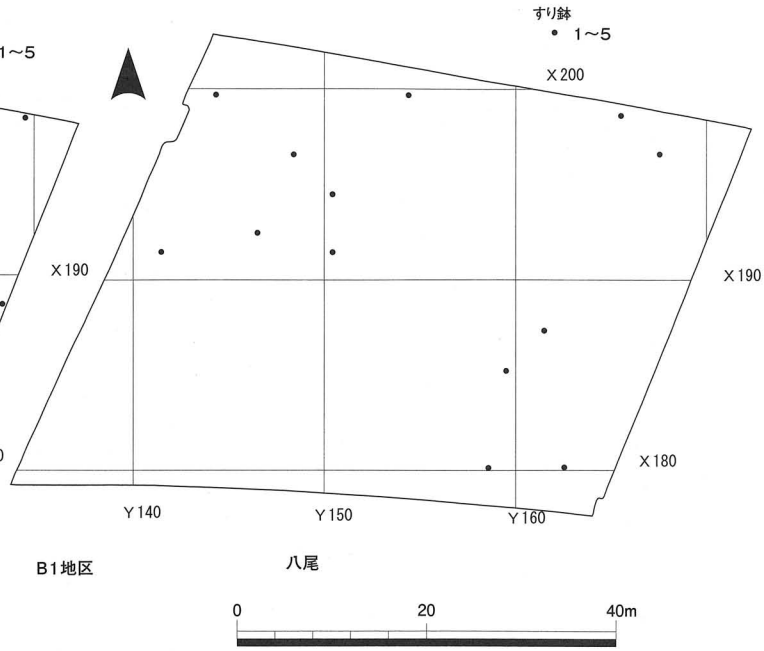
B1地区　珠洲



B1地区　珠洲

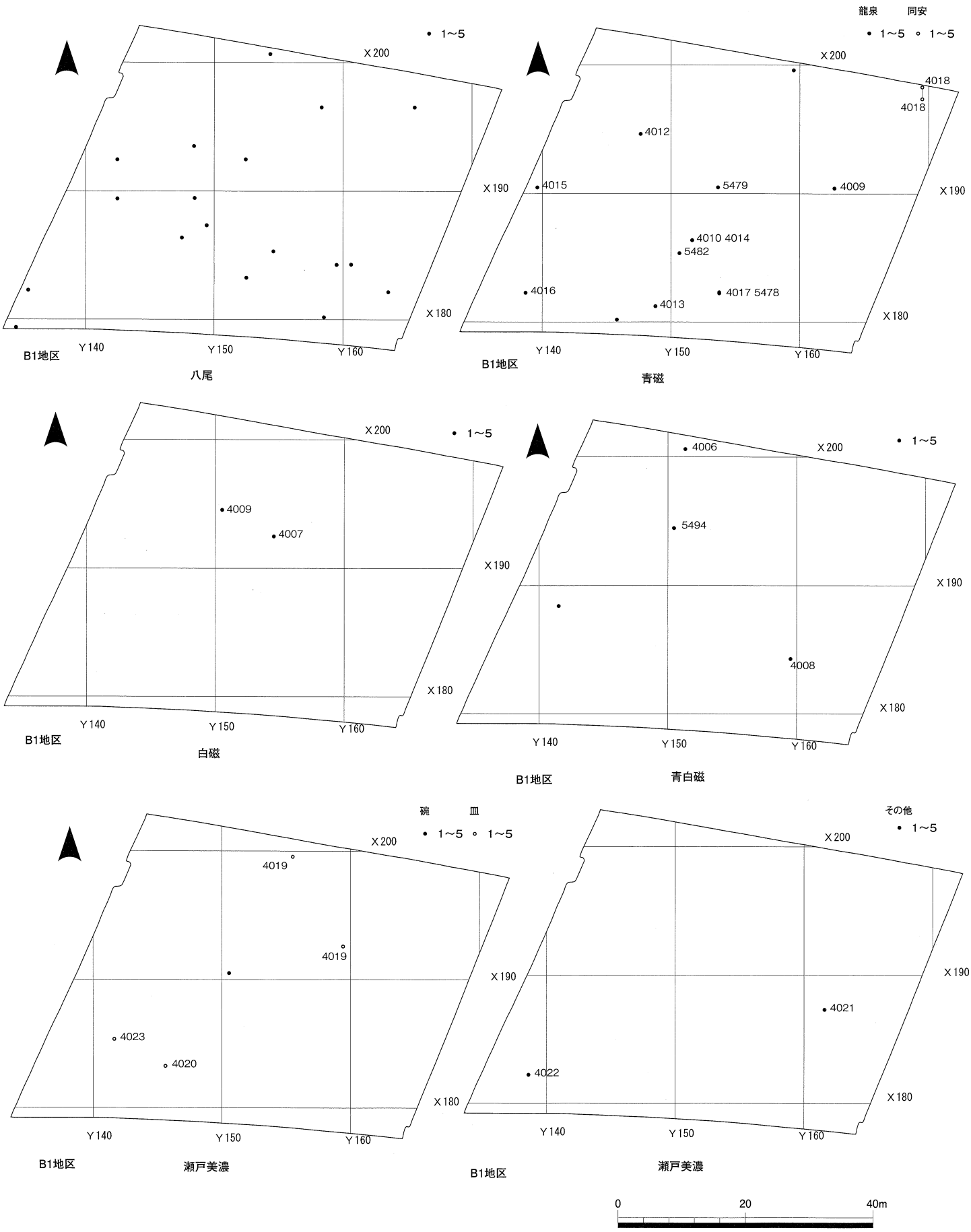


B1地区　珠洲



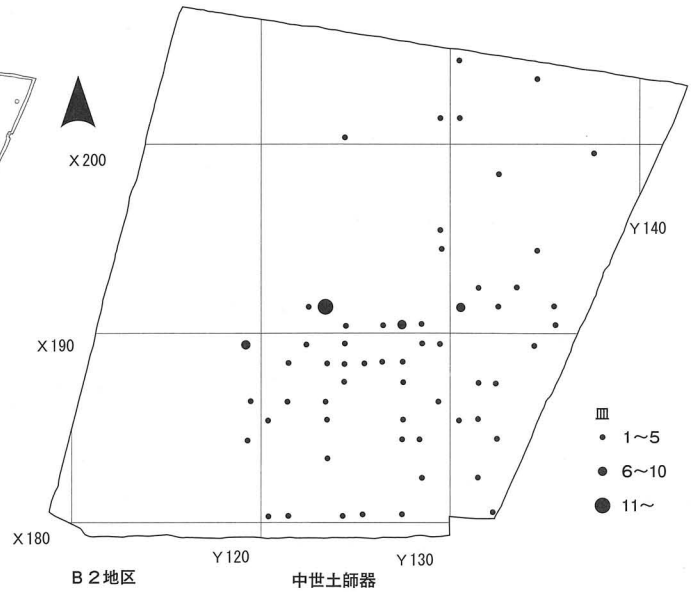
B1地区　八尾

第4図　任海宮田遺跡B1地区中世出土遺物分布図(1)

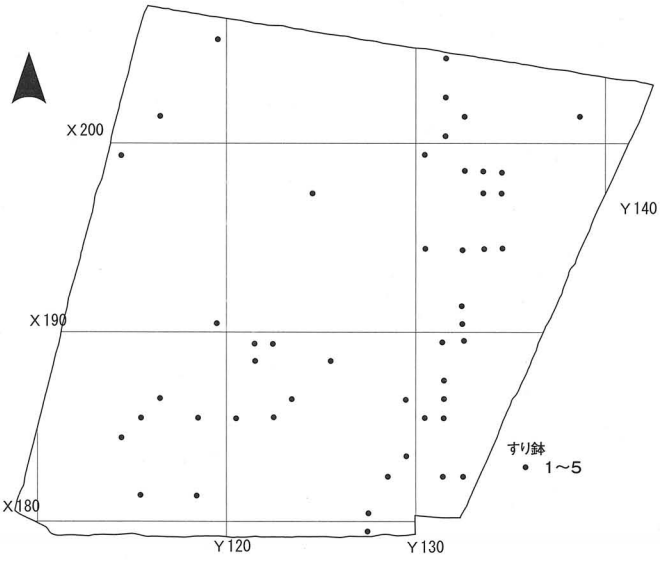


第5図　任海宮田遺跡B1地区中世出土遺物分布図(2)

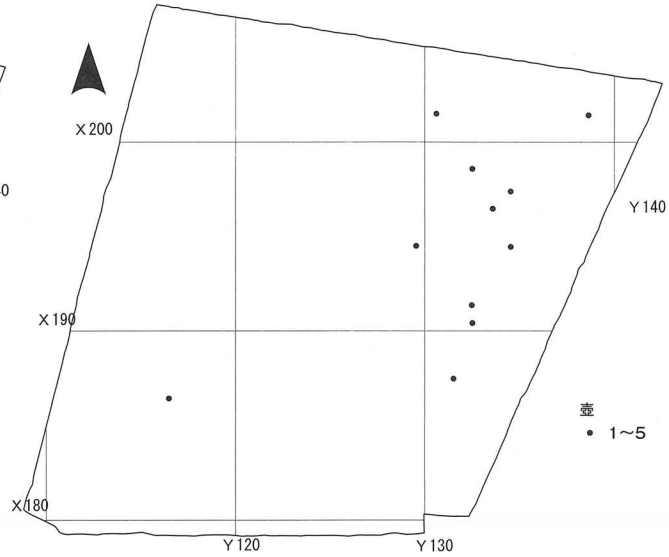
B2地区　遺構全体図



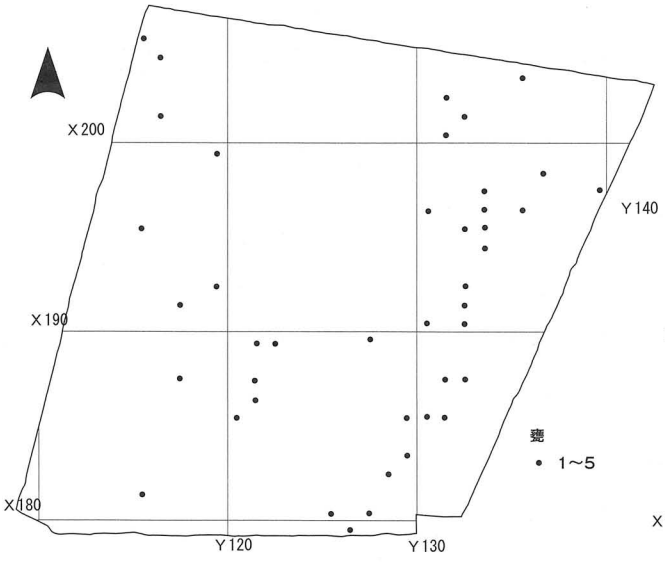
B２地区　中世土師器



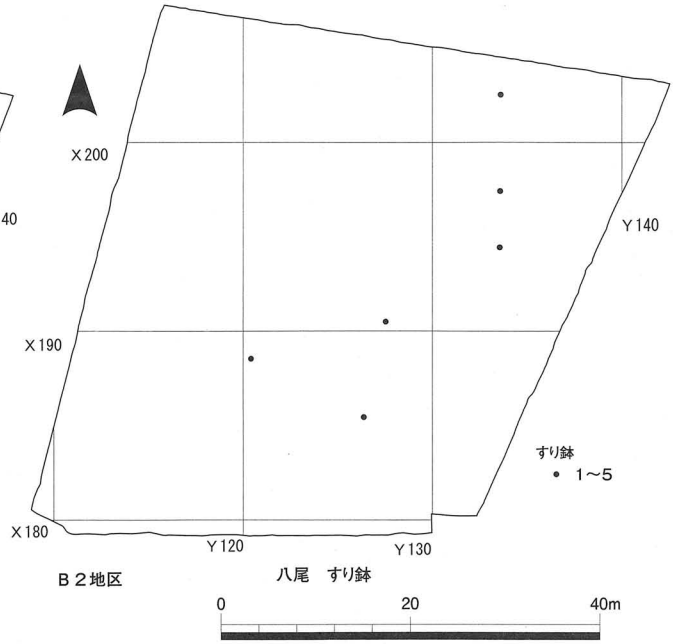
B２地区　珠洲



B２地区　珠洲　壺



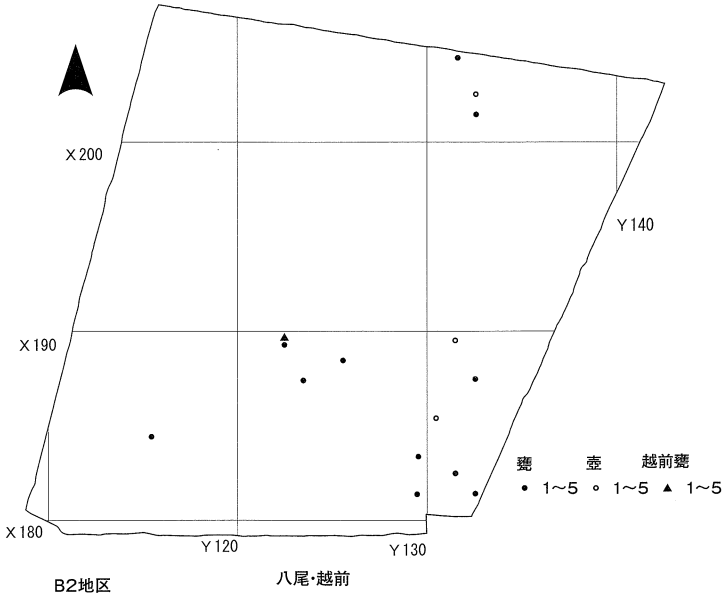
B２地区　珠洲

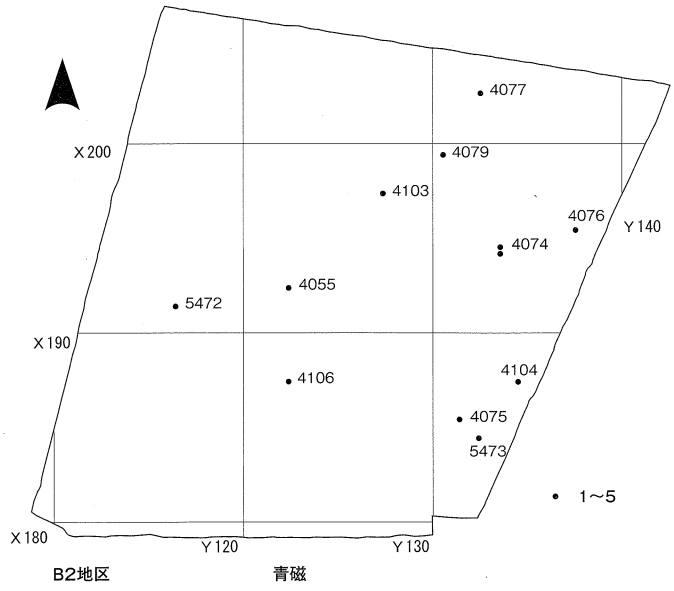


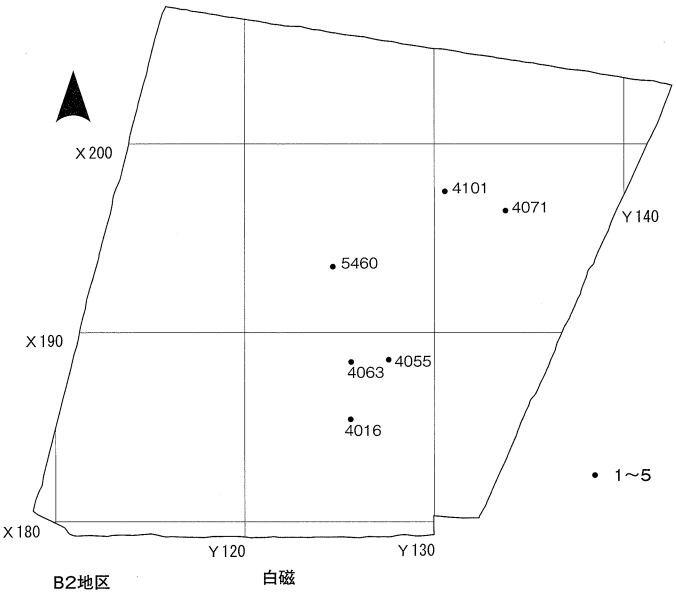
B２地区　八尾　すり鉢

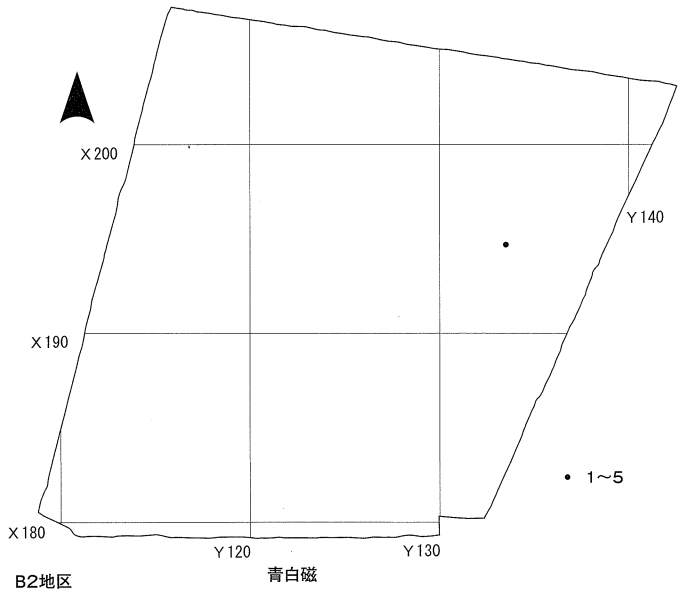
0　20　40m

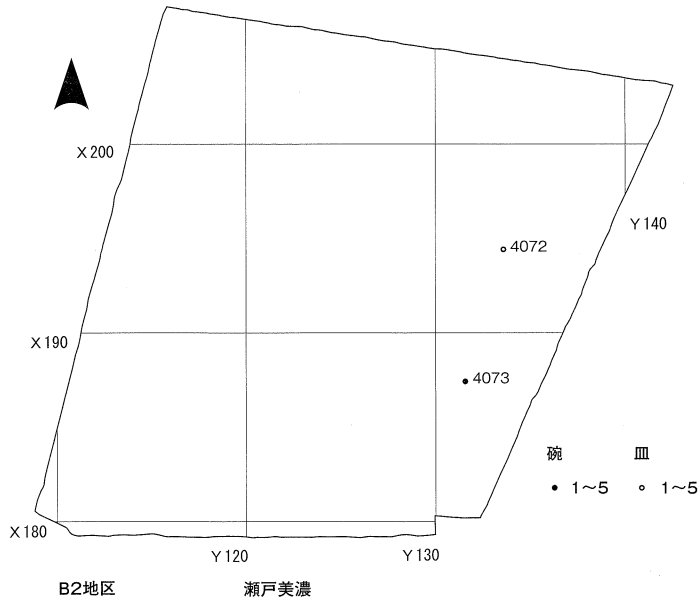
第6図　任海宮田遺跡B2地区中世出土遺物分布図(1)

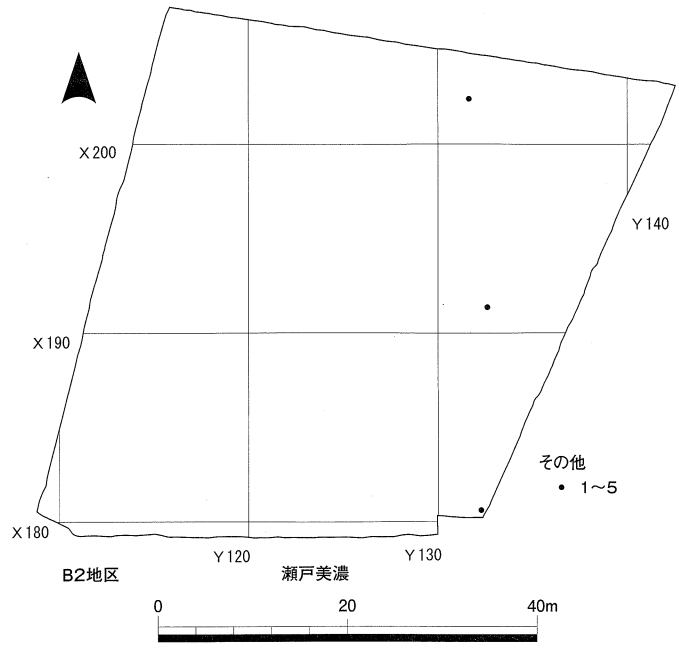




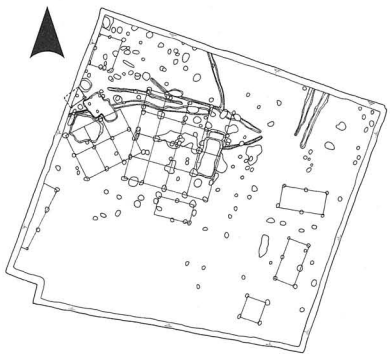




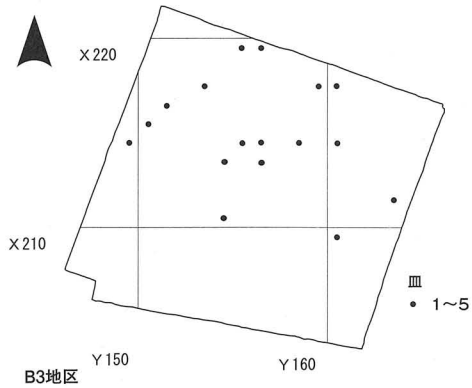




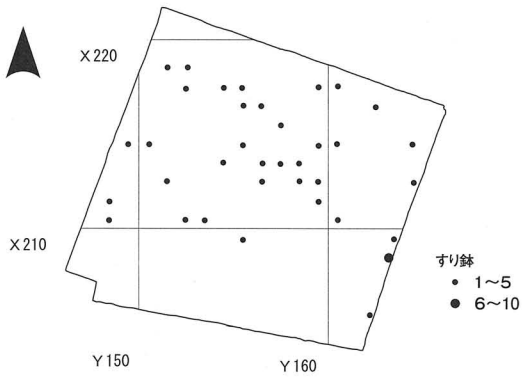
第7図　任海宮田遺跡B2地区中世出土遺物分布図(2)



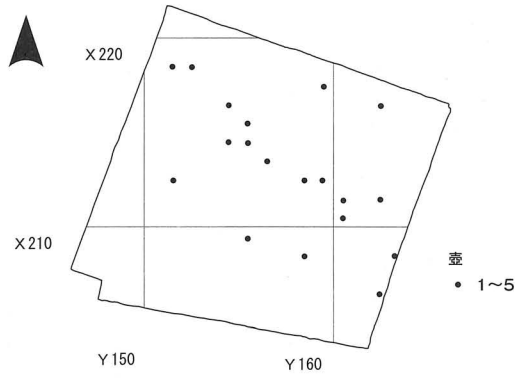
B3地区　遺構全体図



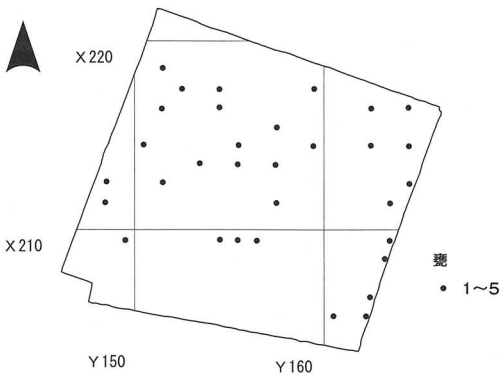
B3地区　中世土師器



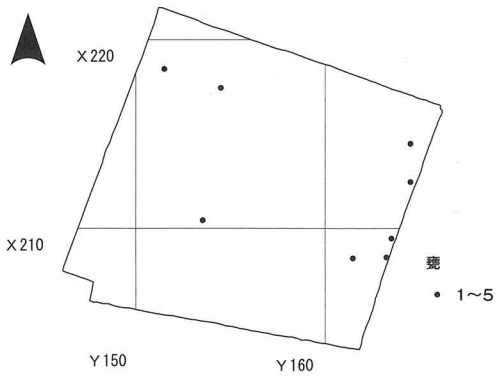
B3地区　珠洲



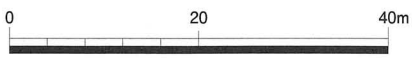
B3地区　珠洲



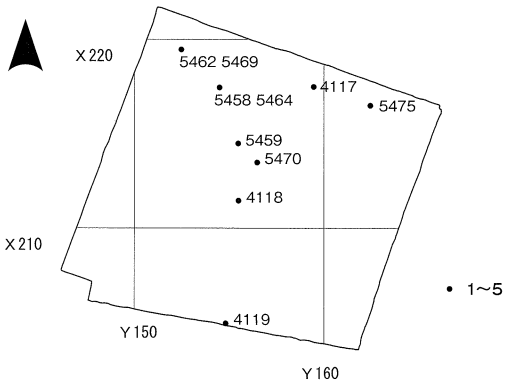
B3地区　珠洲



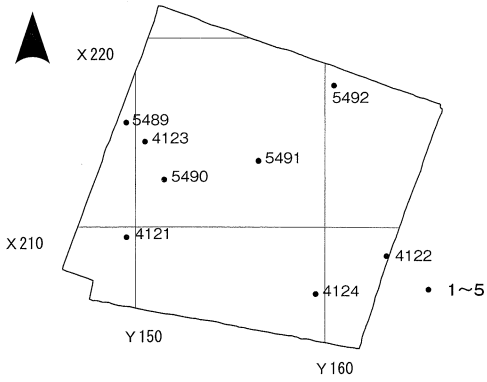
B3地区　八尾



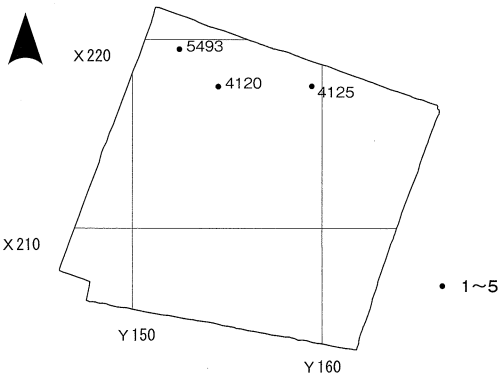
第8図　任海宮田遺跡B3地区中世出土遺物分布図(1)



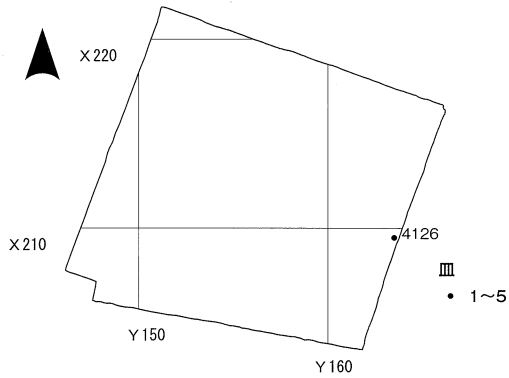
B3地区　青磁



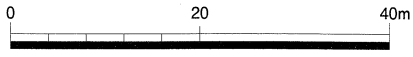
B3地区　白磁



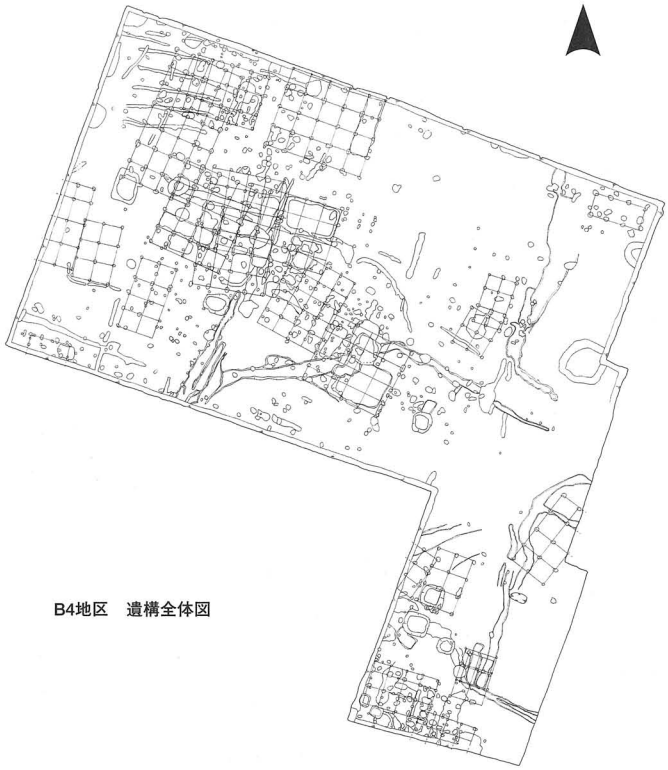
B3地区　青白磁



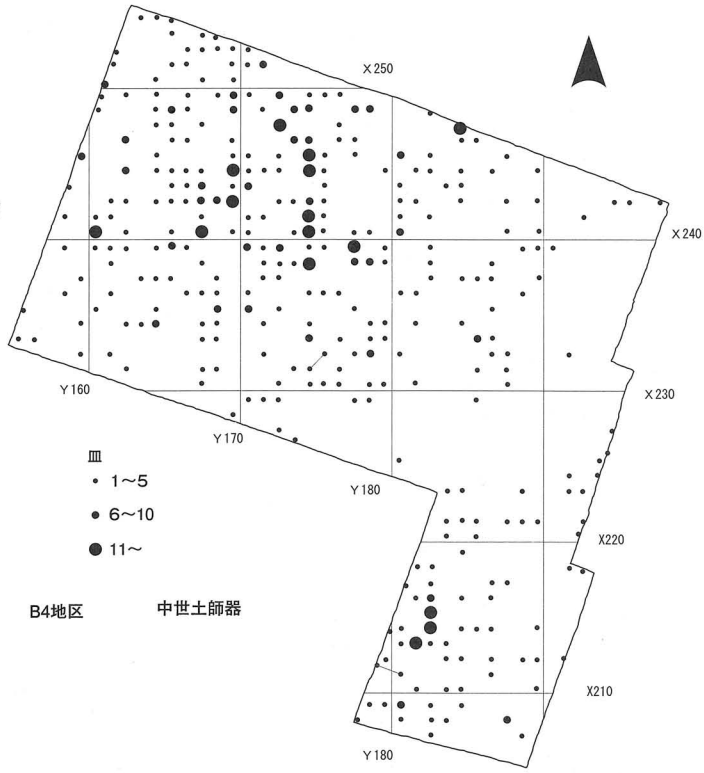
B3地区　瀬戸美濃　Ⅲ



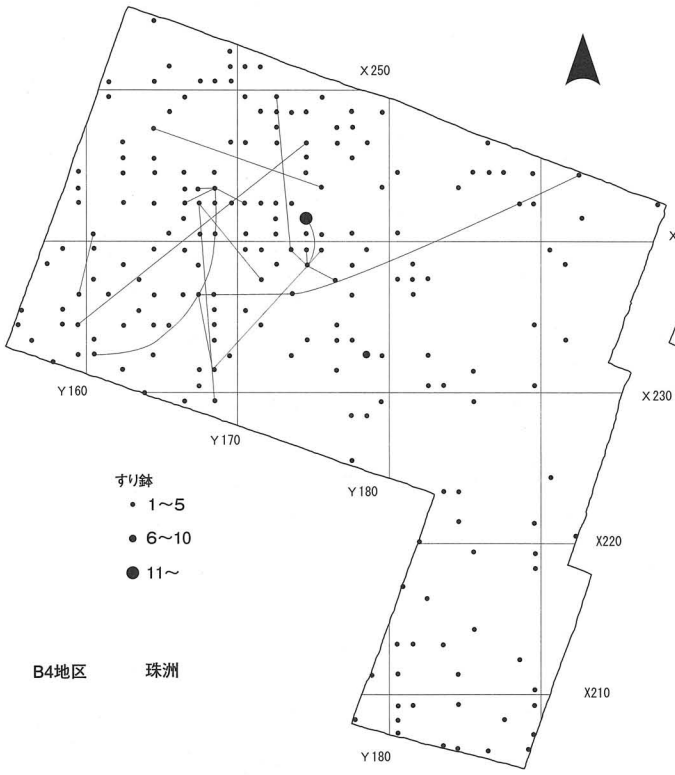
第9図　任海宮田遺跡B3地区中世出土遺物分布図(2)



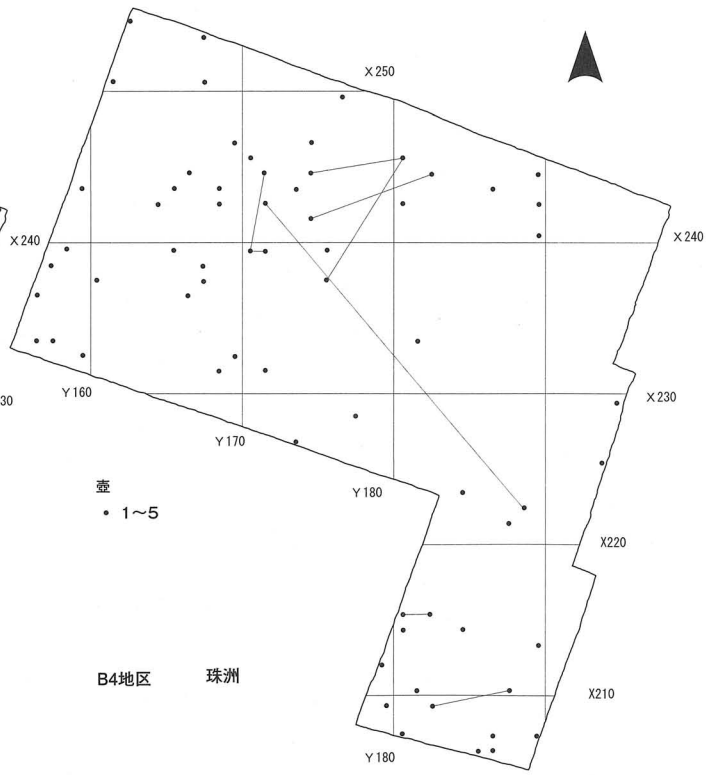
B4地区　遺構全体図



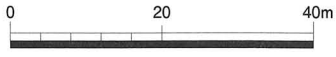
B4地区　中世土師器



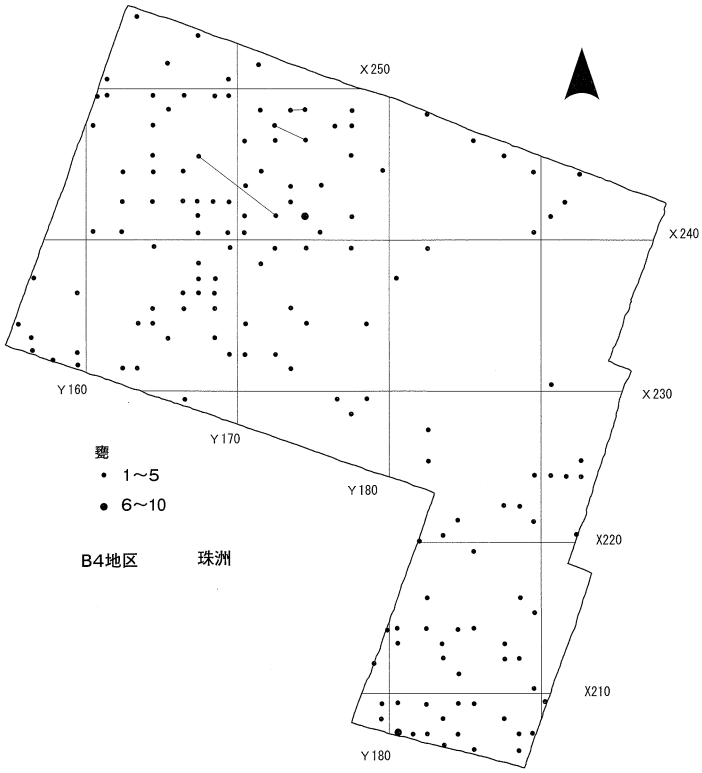
B4地区　珠洲

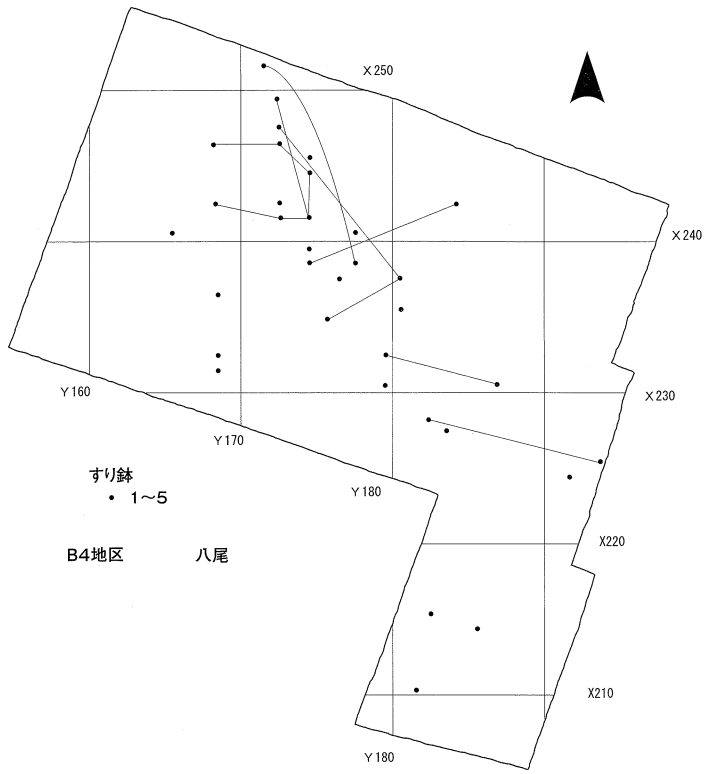


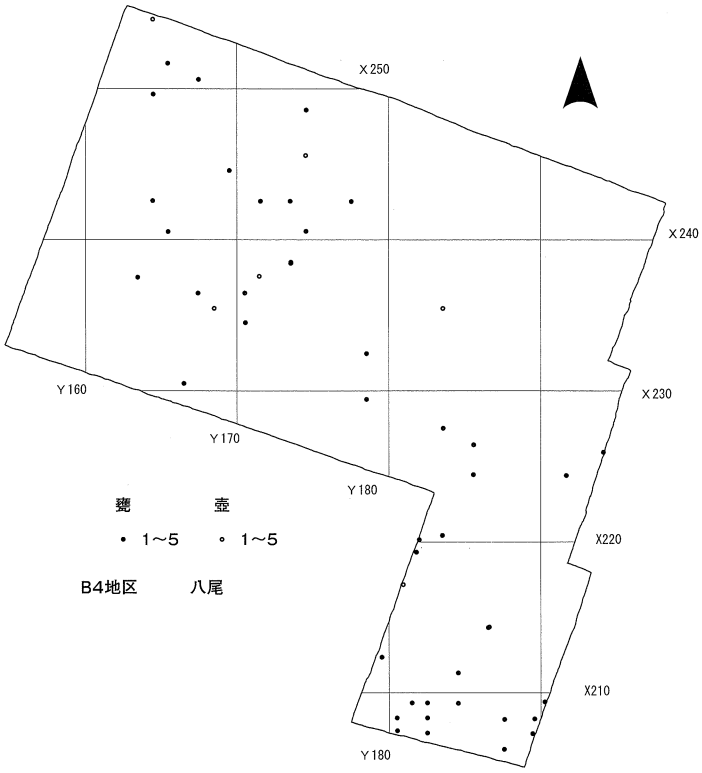
B4地区　珠洲

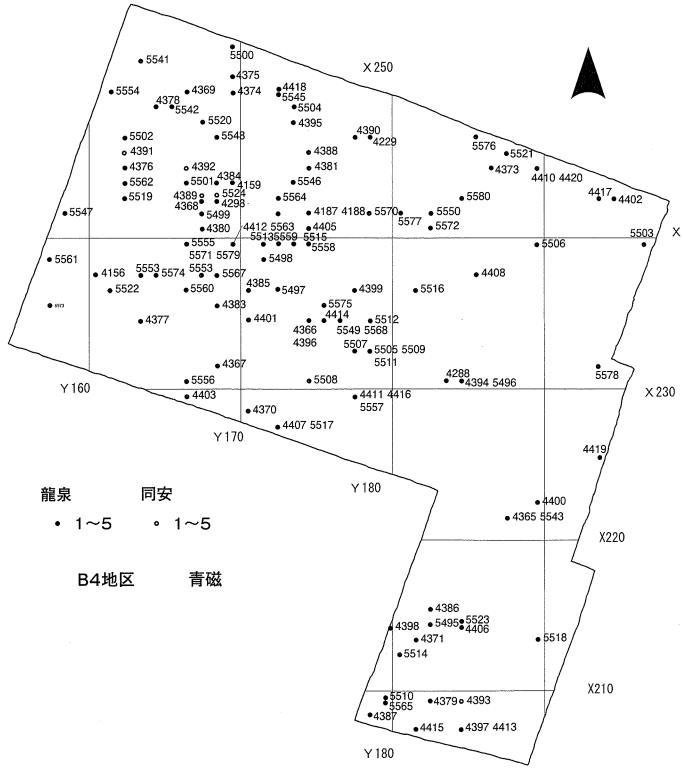


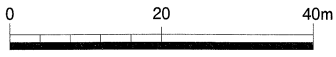
第10図　任海宮田遺跡B4地区中世出土遺物分布図(1)



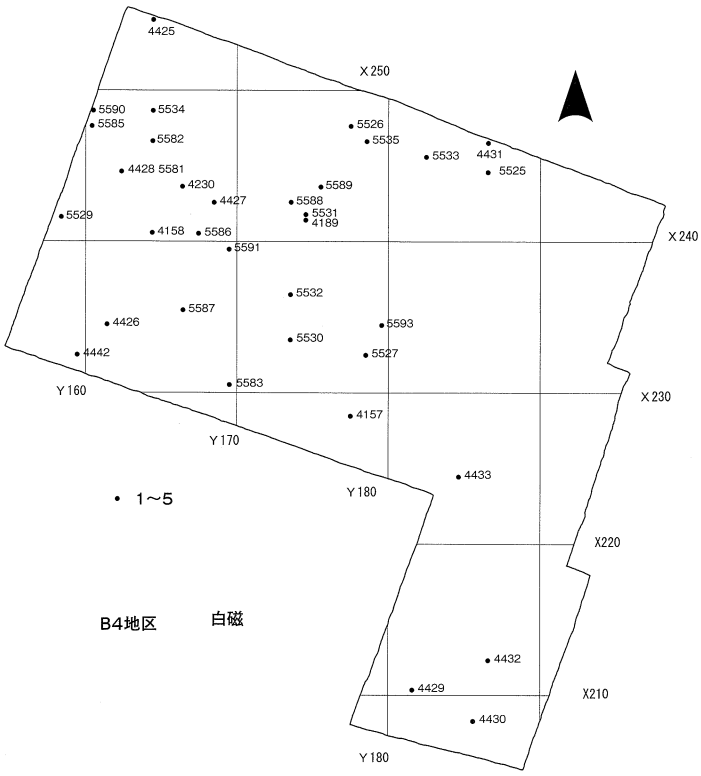


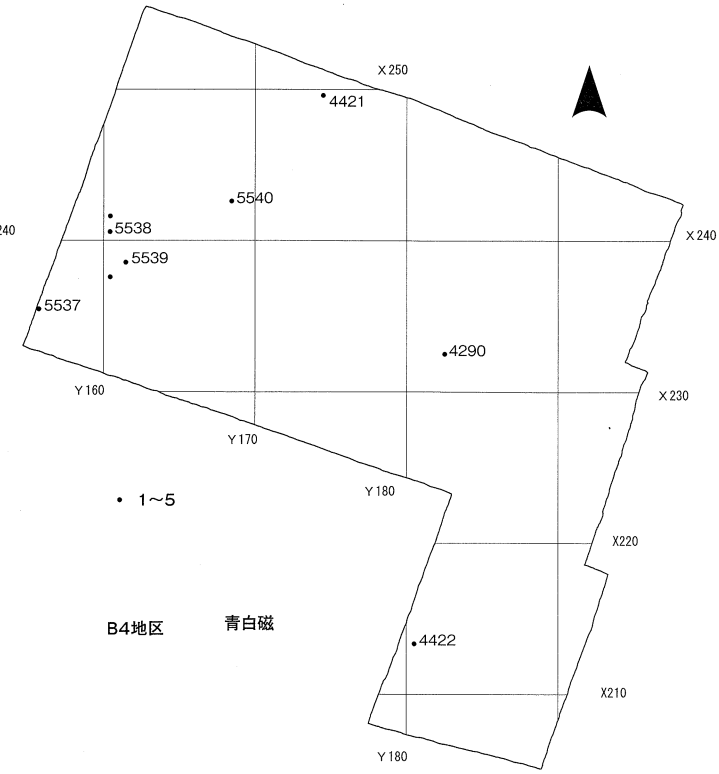


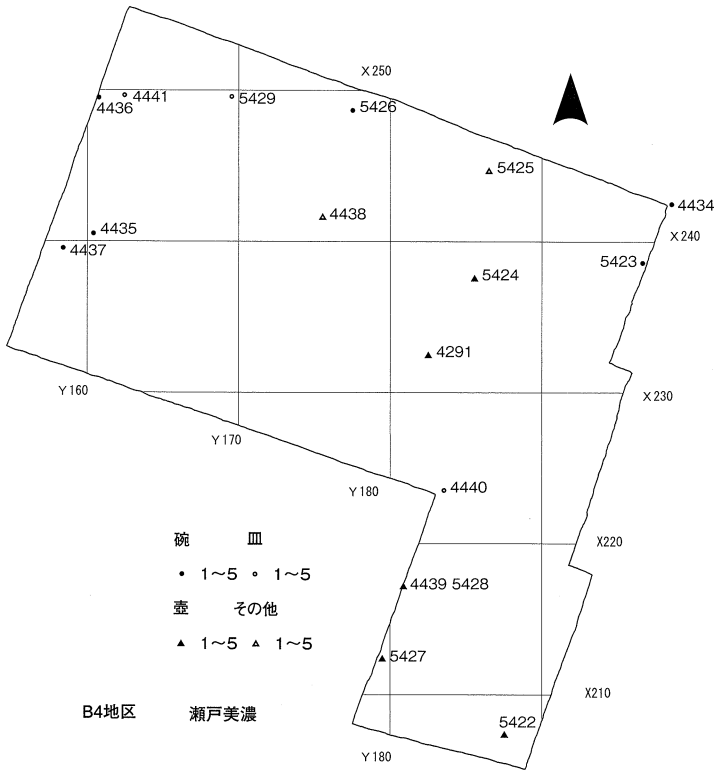


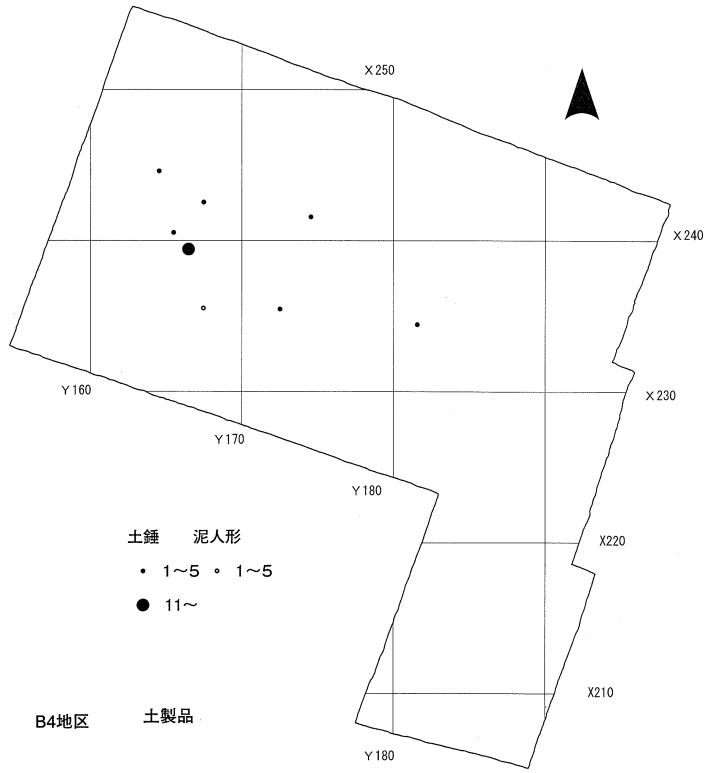


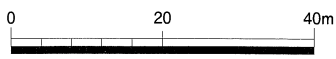
第11図　任海宮田遺跡B4地区中世出土遺物分布図(2)



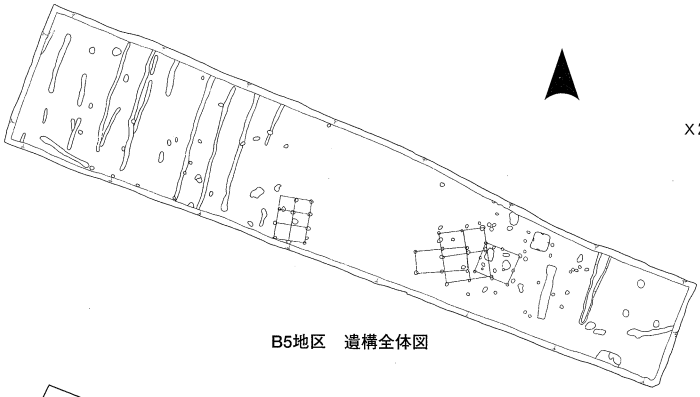




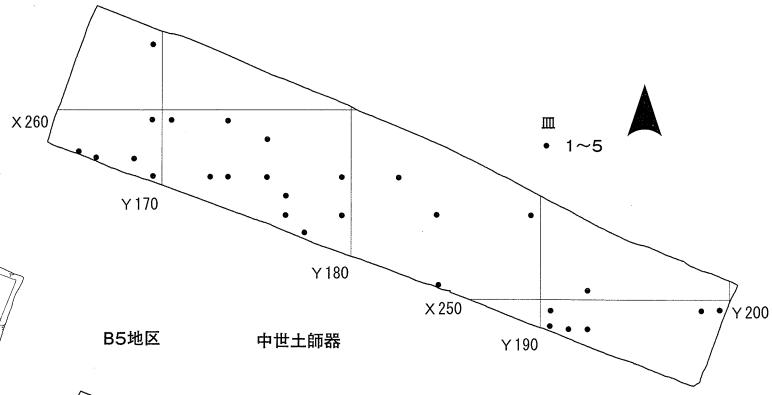




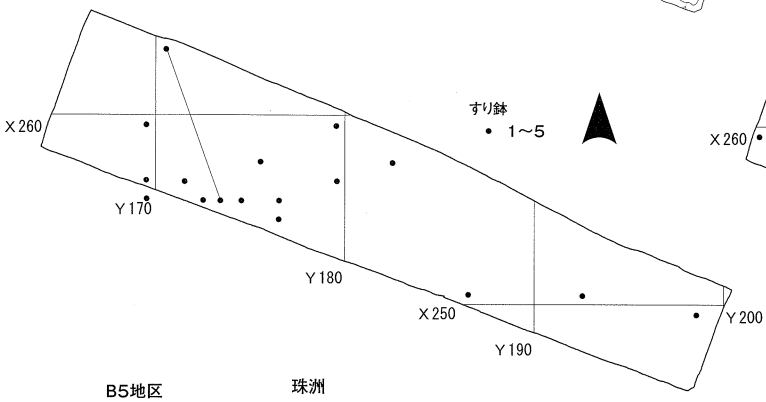
第12図　任海宮田遺跡B4地区中世出土遺物分布図(3)



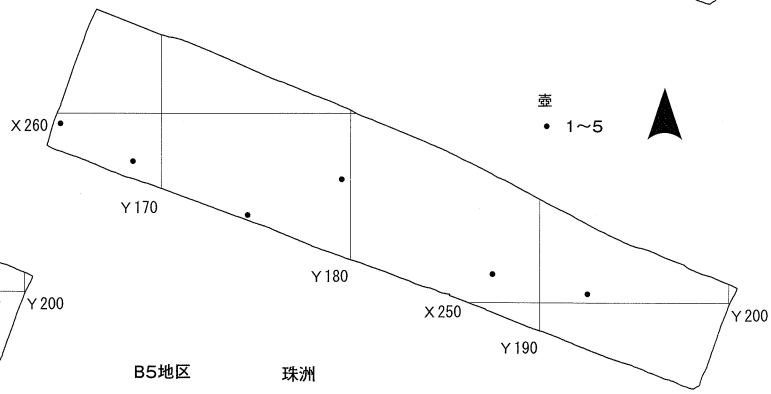
B5地区　遺構全体図



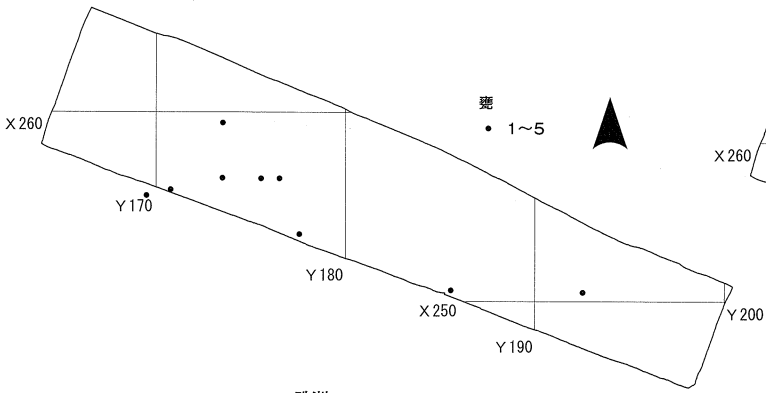
B5地区　中世土師器



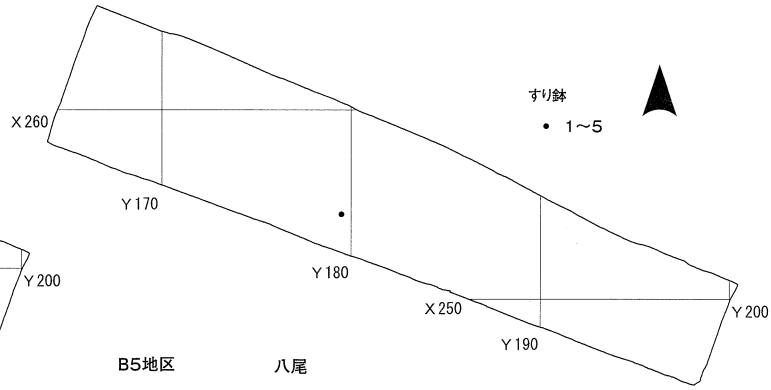
B5地区　珠洲



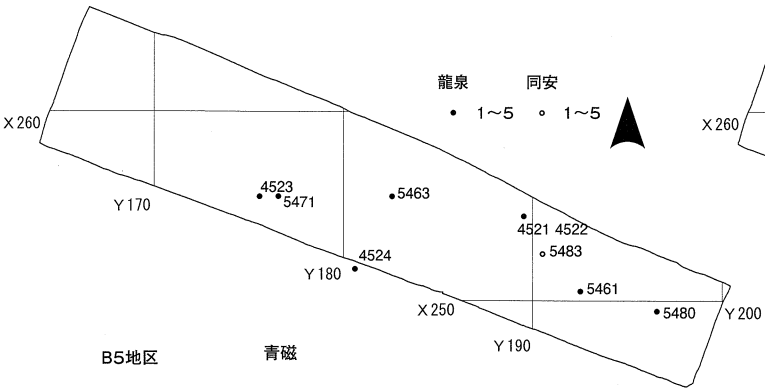
B5地区　珠洲



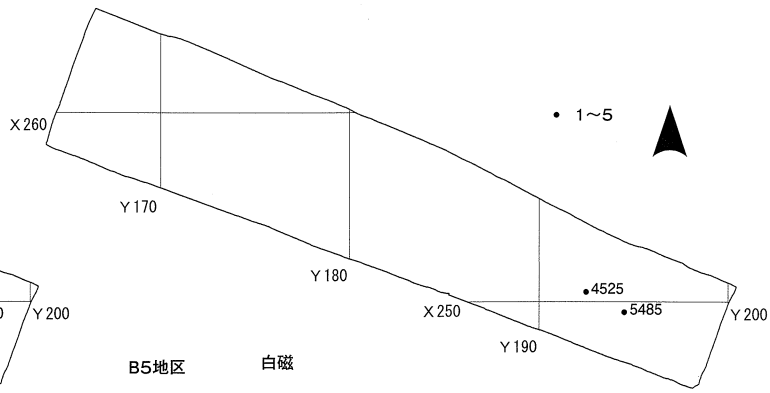
B5地区　珠洲



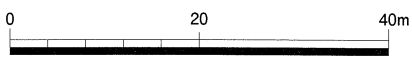
B5地区　八尾



B5地区　青磁

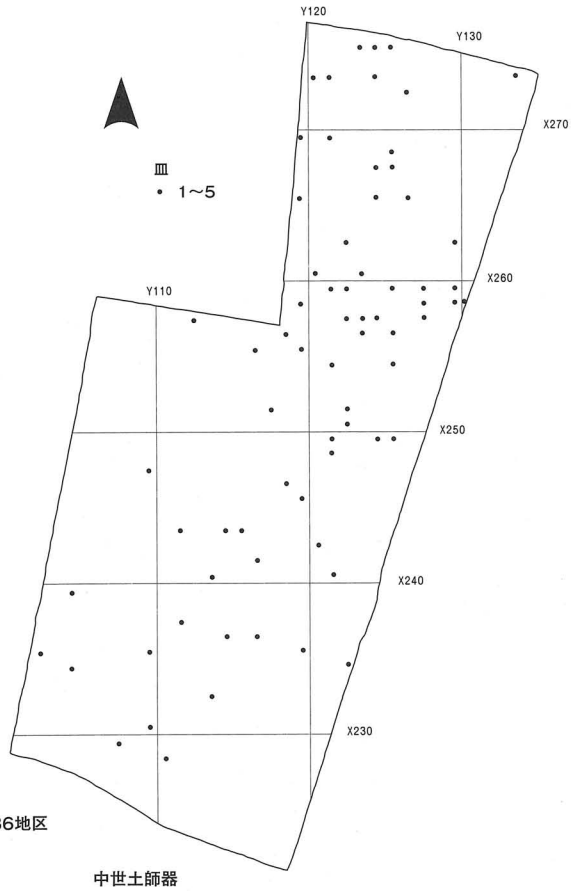


B5地区　白磁



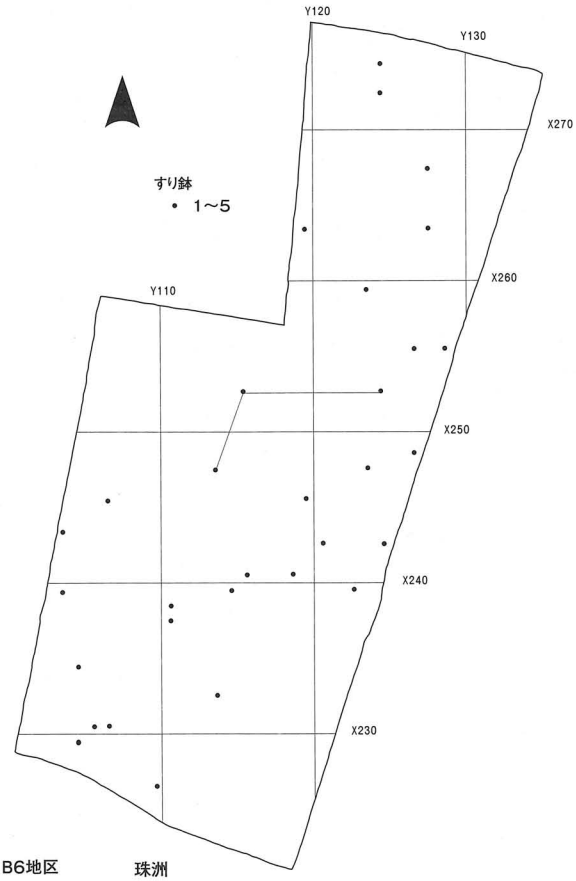
第13図　任海宮田遺跡B5地区中世出土遺物分布図

B6地区　遺構全体図

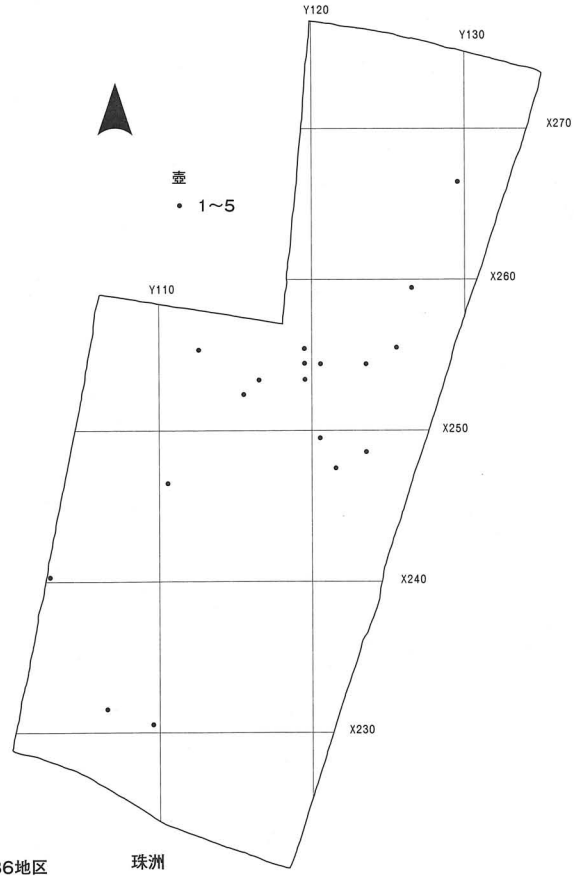


B6地区

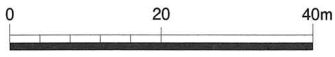
中世土師器



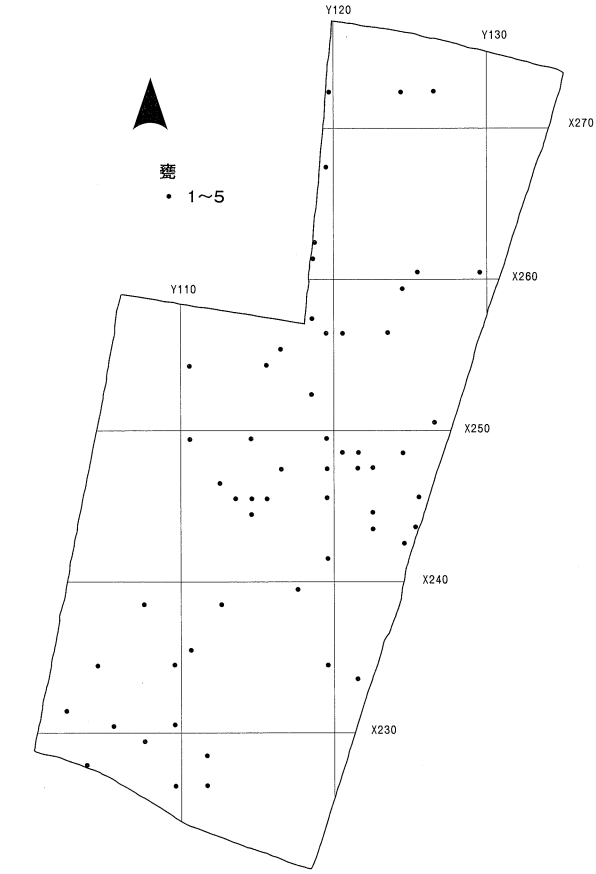
B6地区　　珠洲



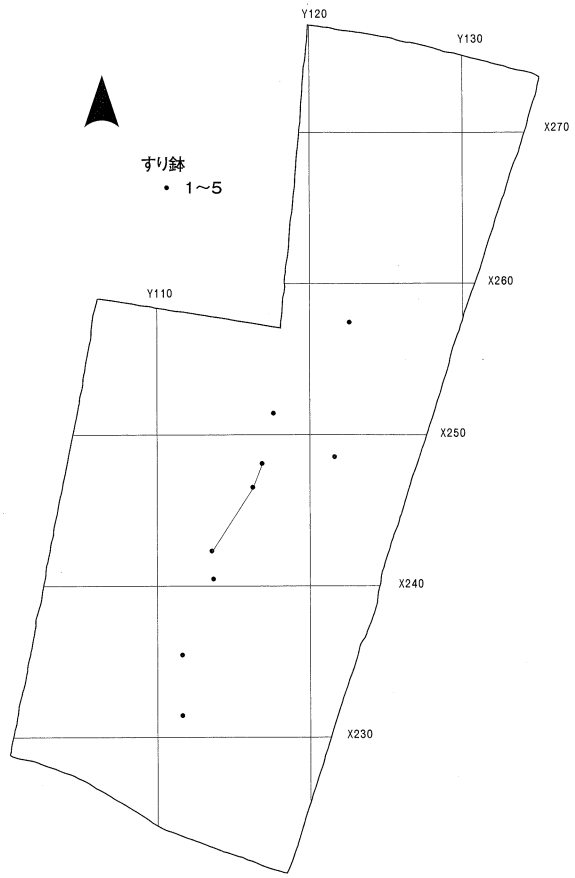
B6地区　　珠洲



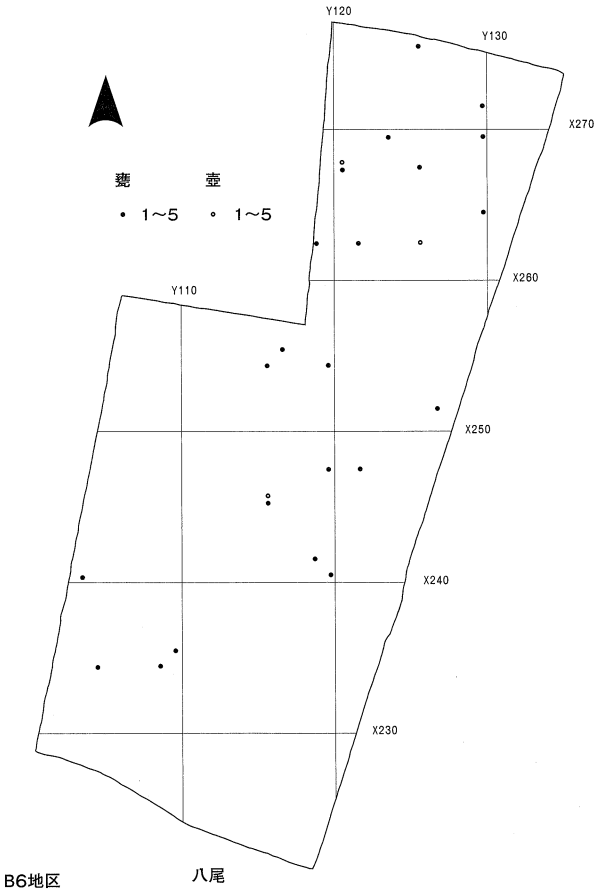
第14図　任海宮田遺跡B6地区中世出土遺物分布図(1)



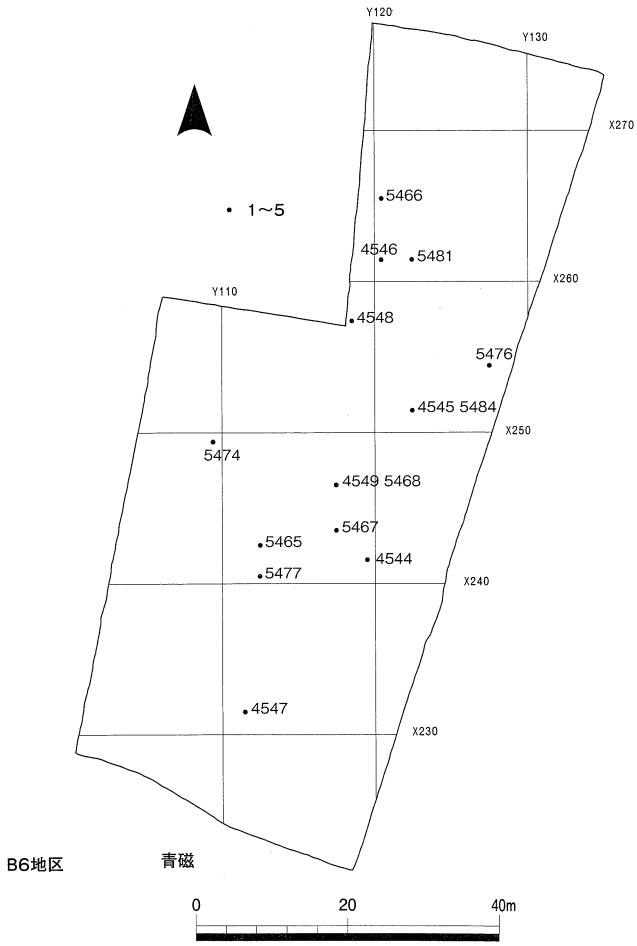
B6地区　珠洲



B6地区　八尾

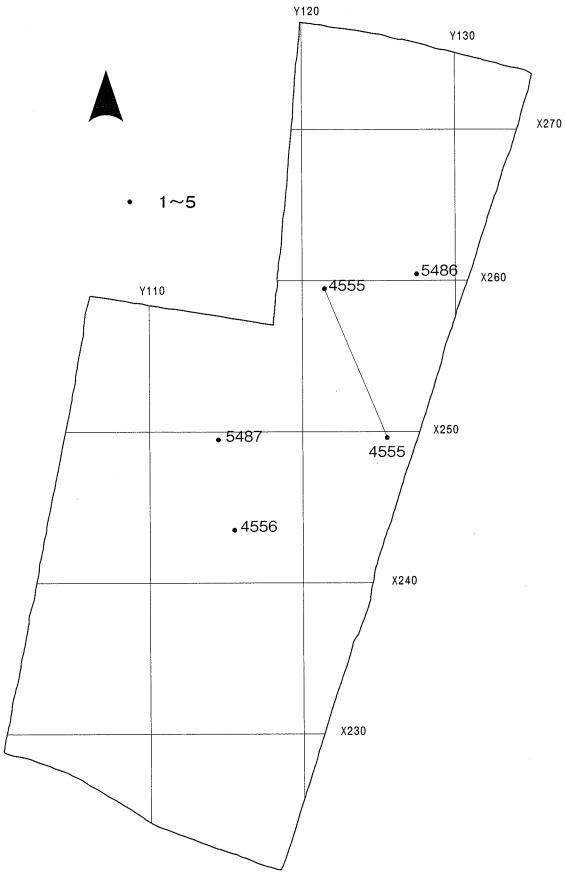


B6地区　八尾

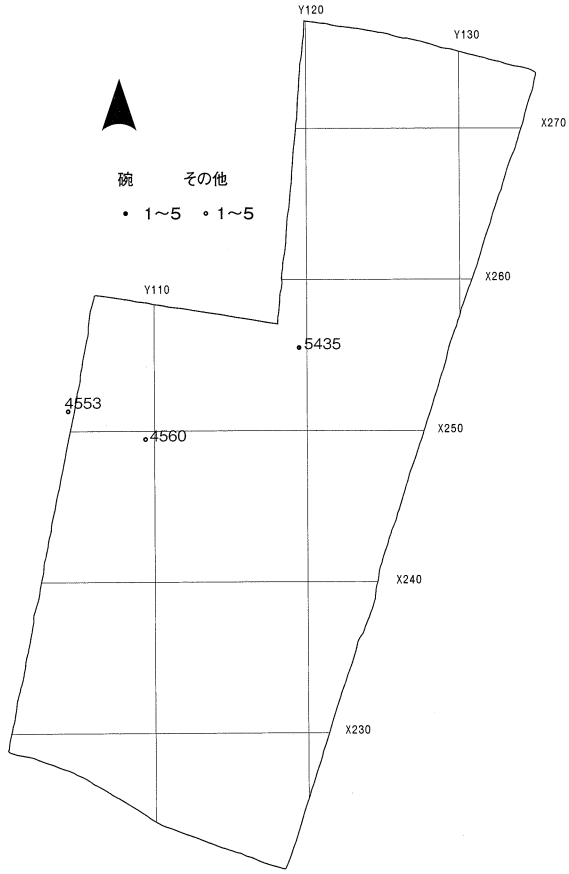


B6地区　青磁

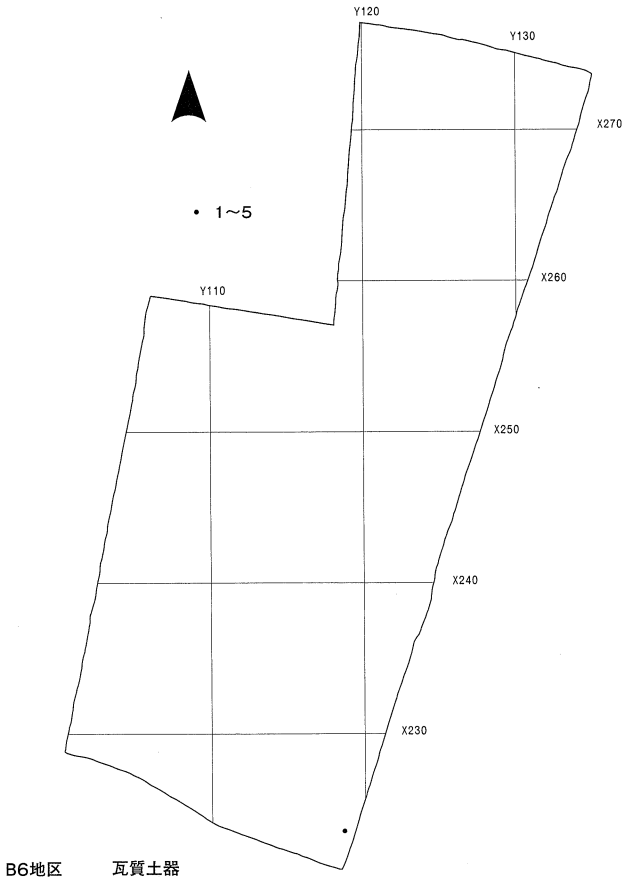
第15図　任海宮田遺跡B6地区中世出土遺物分布図(2)



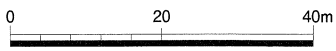
B6地区　白磁



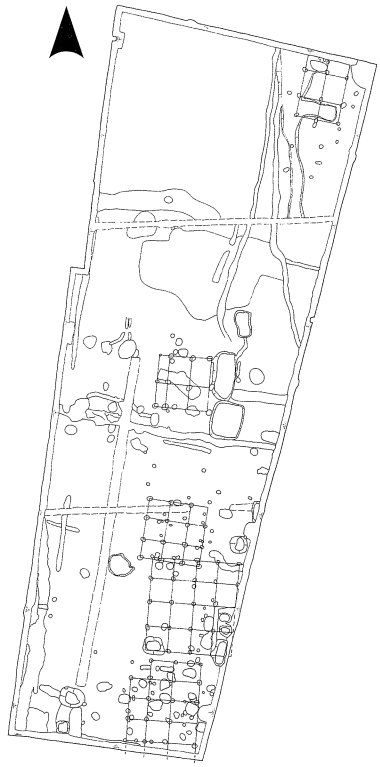
B6地区　瀬戸美濃



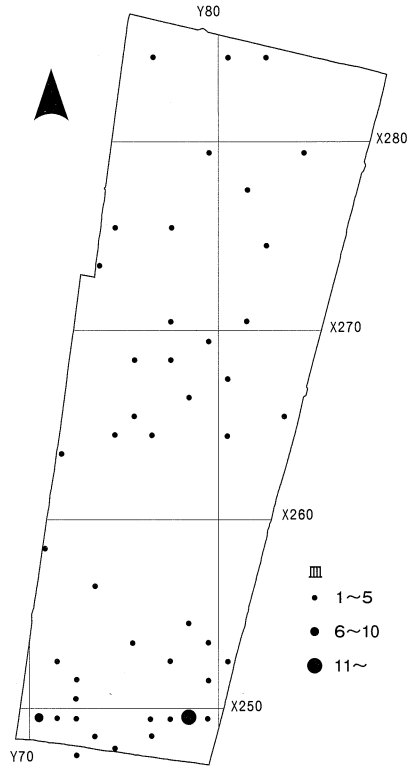
B6地区　瓦質土器



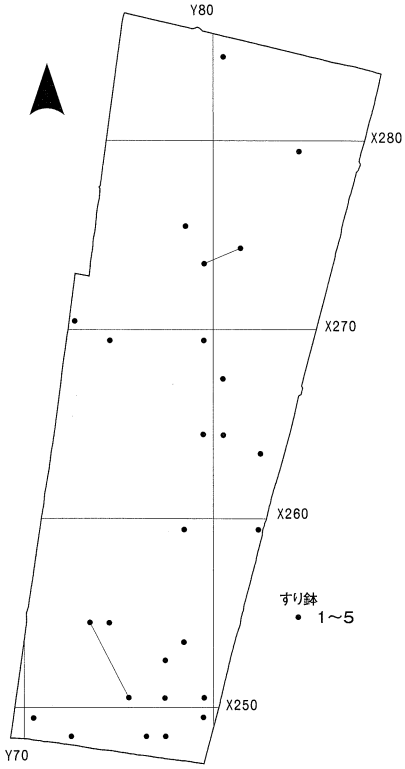
第16図　任海宮田遺跡B6地区中世出土遺物分布図(3)



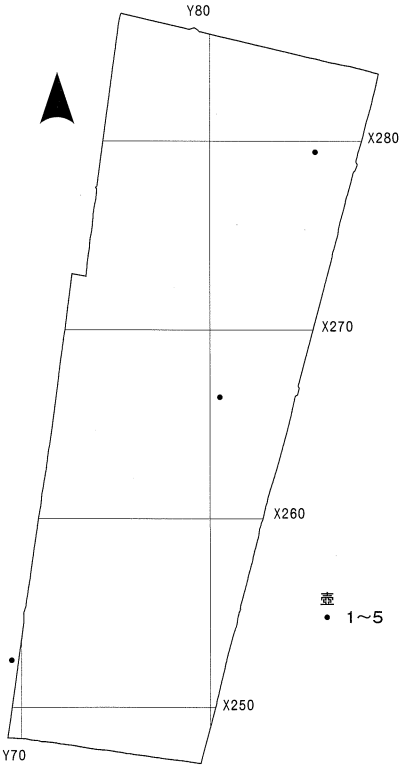
B7地区　遺構全体図



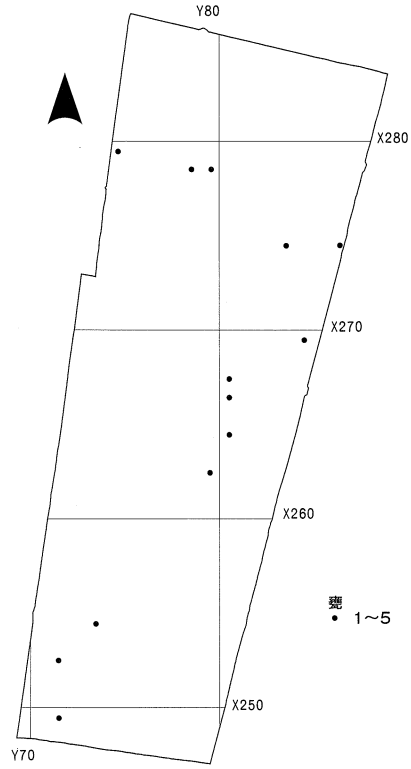
B7地区　中世土師器



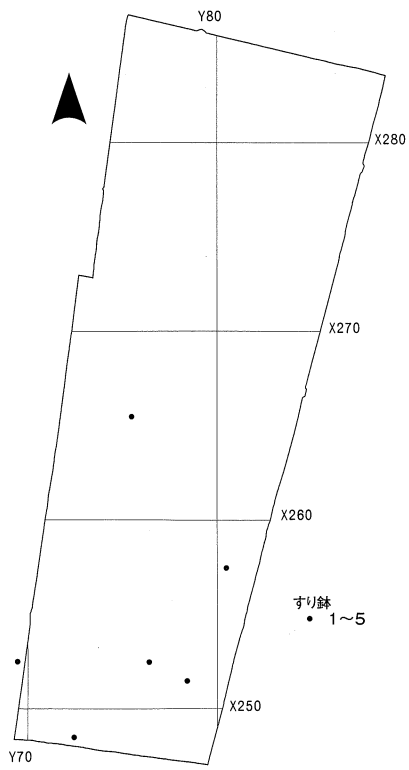
B7地区　珠洲



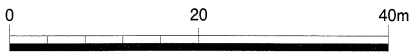
B7地区　珠洲



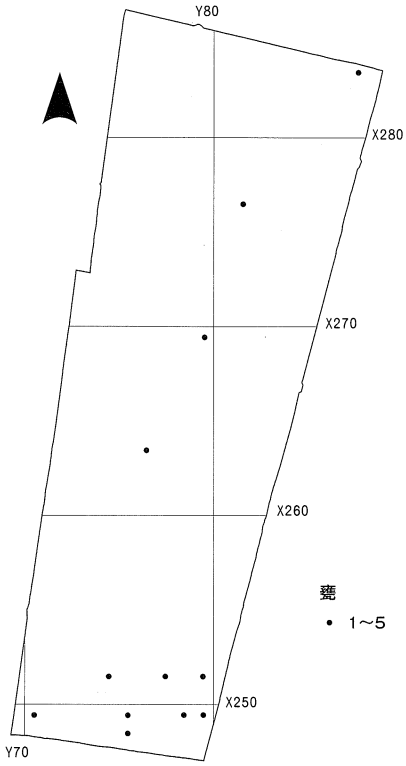
B7地区　珠洲



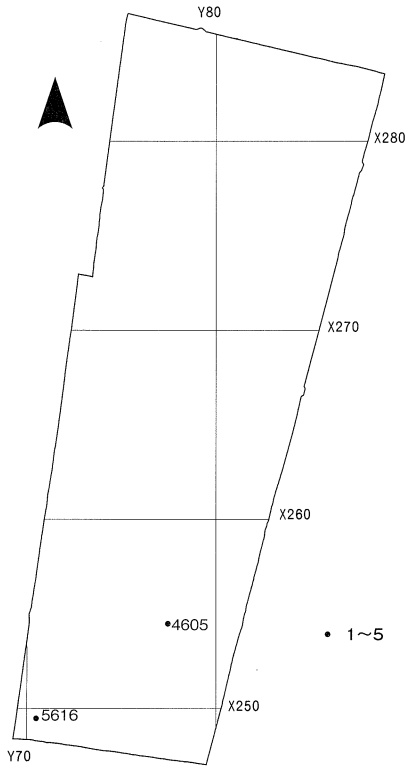
B7地区　八尾



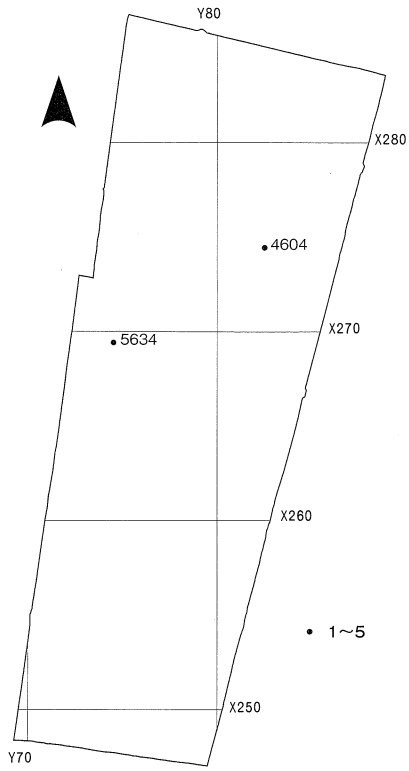
第17図　任海宮田遺跡B7地区中世出土遺物分布図(1)



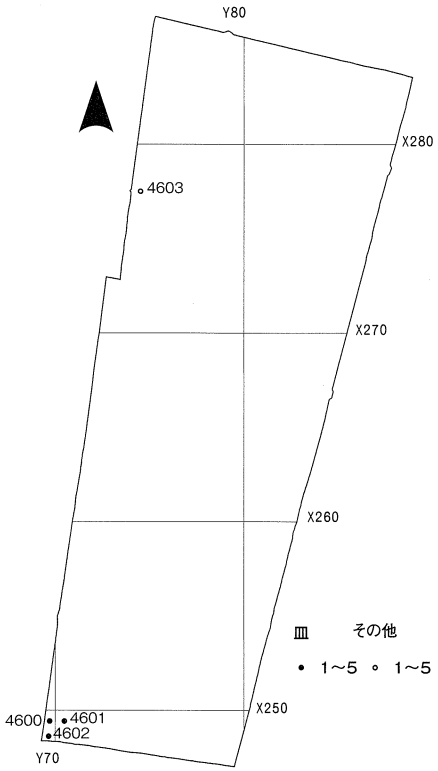
B7地区　八尾　甕



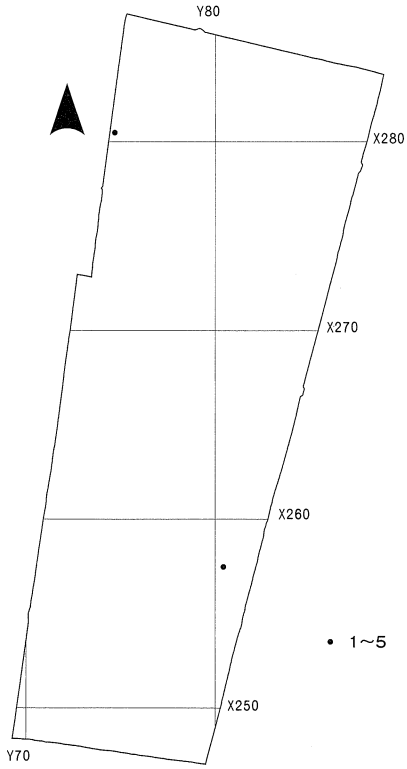
B7地区　青磁



B7地区　青白磁

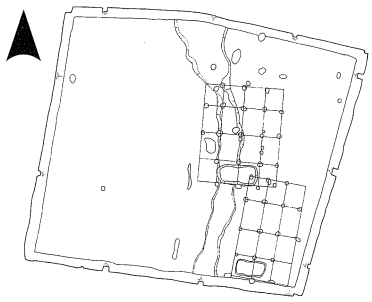


B7地区　瀬戸美濃

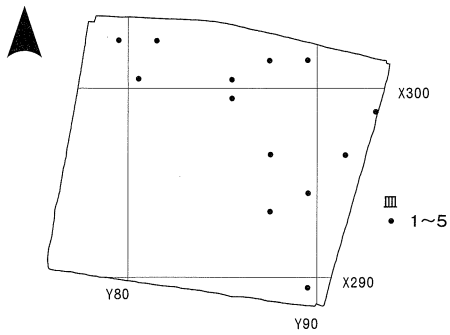


B7地区　土製品

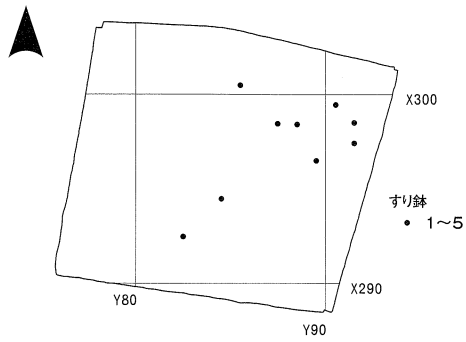
第18図　任海宮田遺跡B7地区中世出土遺物分布図(2)



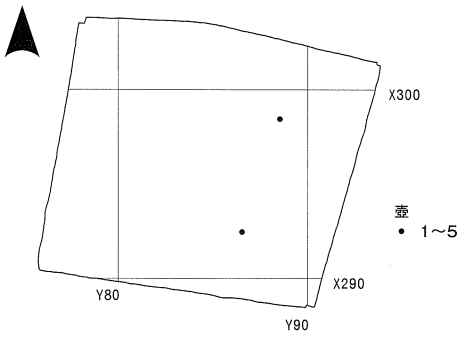
B8地区　遺構全体図



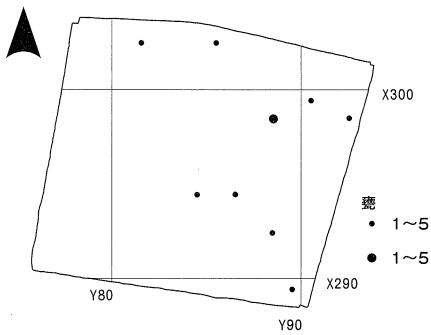
B8地区　　中世土師器



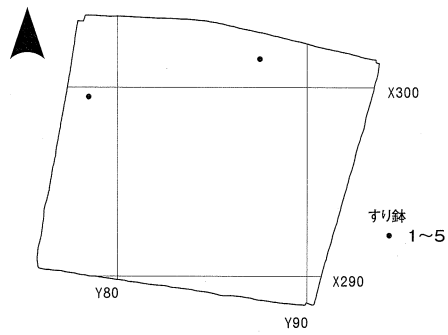
B8地区　　珠洲



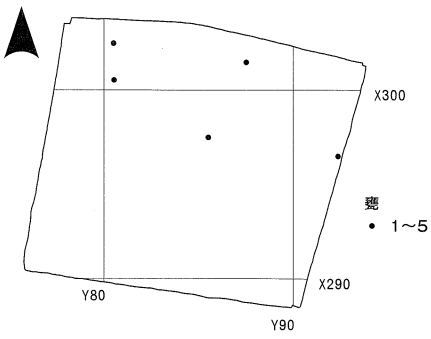
B8地区　　珠洲



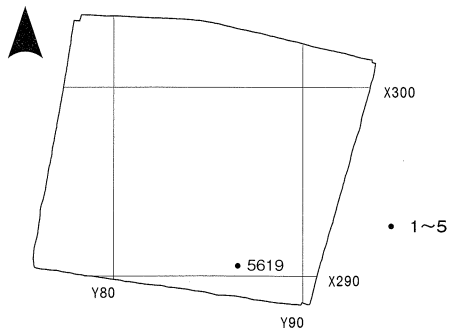
B8地区　　珠洲



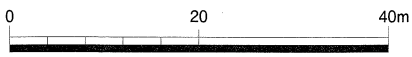
B8地区　　八尾



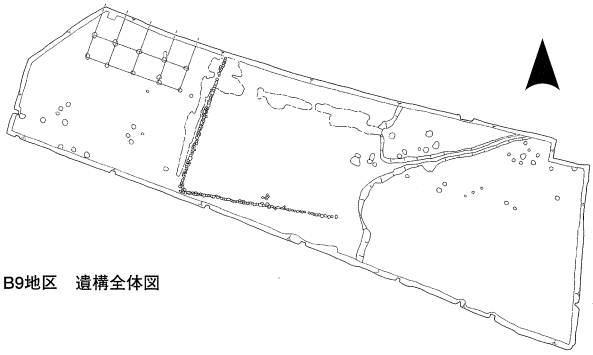
B8地区　　八尾　甕



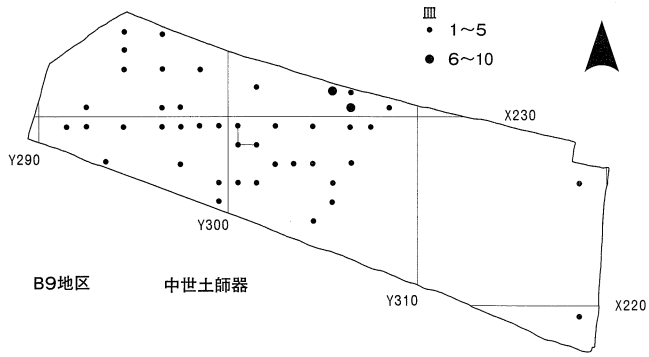
B8地区　　青磁



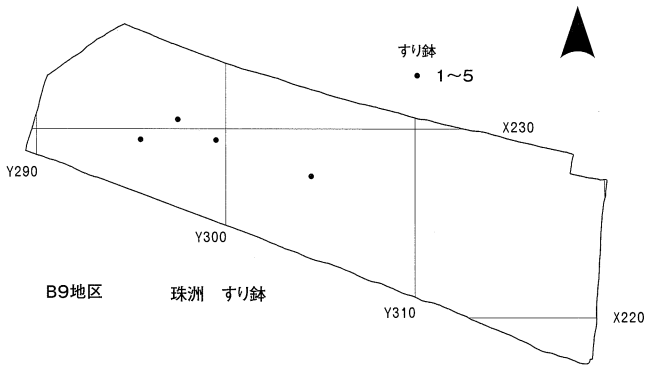
第19図　任海宮田遺跡B8地区中世出土遺物分布図



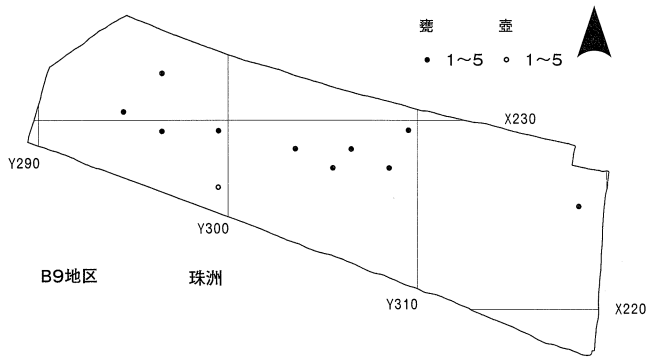
B9地区　遺構全体図



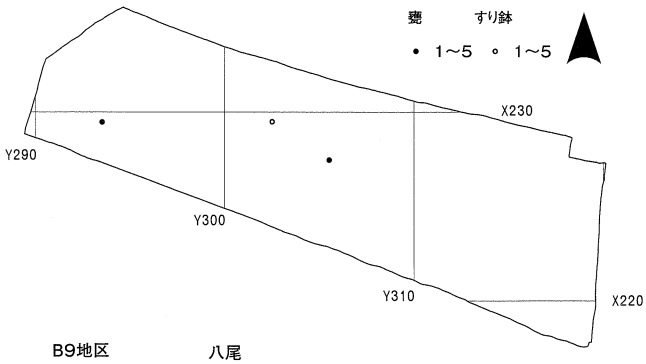
B9地区　中世土師器



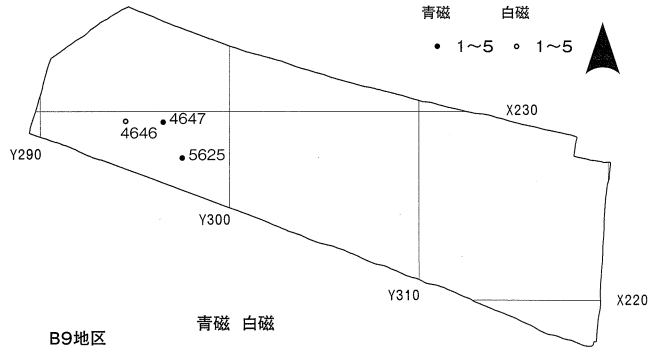
B9地区　珠洲　すり鉢



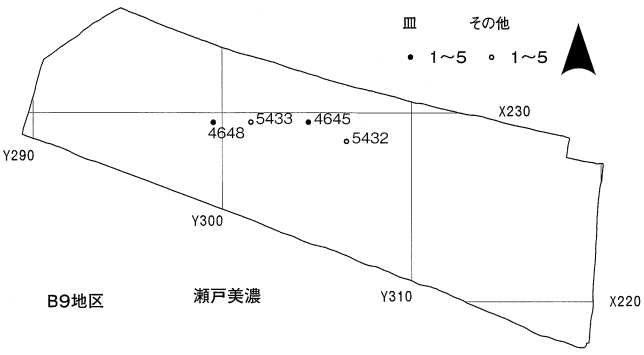
B9地区　珠洲



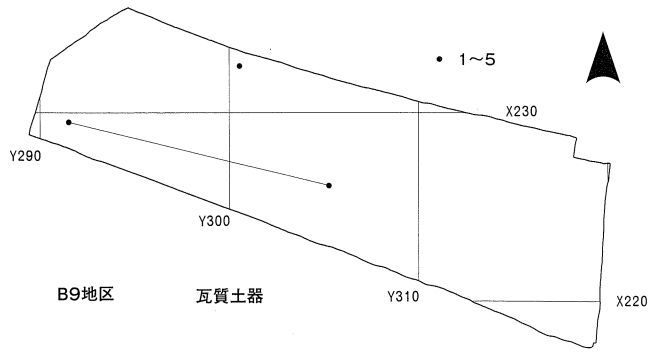
B9地区　八尾



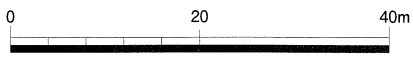
B9地区　青磁　白磁



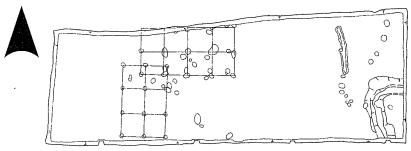
B9地区　瀬戸美濃



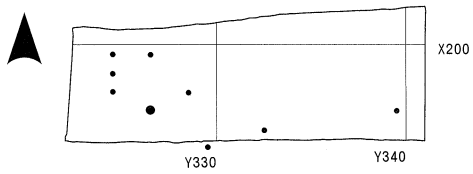
B9地区　瓦質土器



第20図　任海宮田遺跡B9地区中世出土遺物分布図

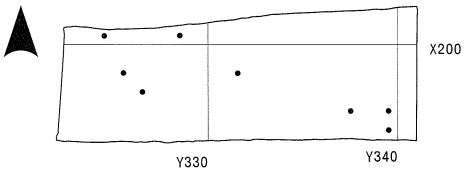


B10地区　遺構全体図



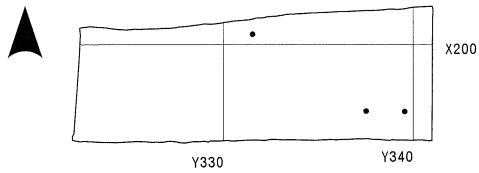
皿
• 1～5
● 6～10

B10地区　中世土師器



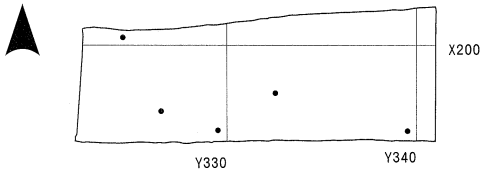
すり鉢
• 1～5

B10地区　珠洲



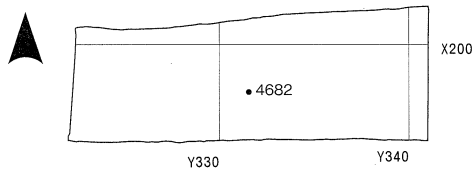
壺
• 1～5

B10地区　珠洲



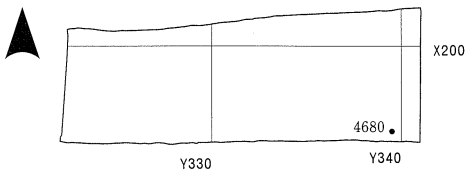
甕
• 1～5

B10地区　珠洲



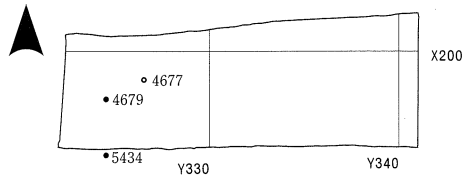
• 1～5

B10地区　青磁



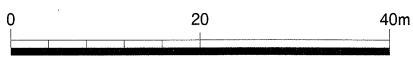
• 1～5

B10地区　白磁

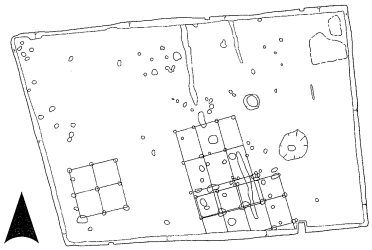


碗　その他
• 1～5　◦ 1～5

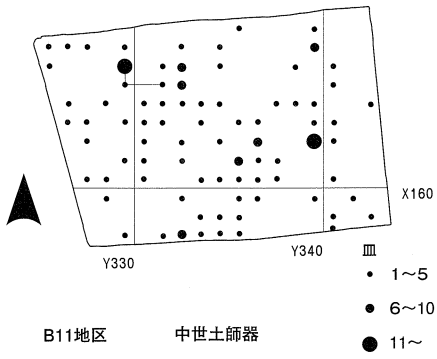
B10地区　瀬戸美濃



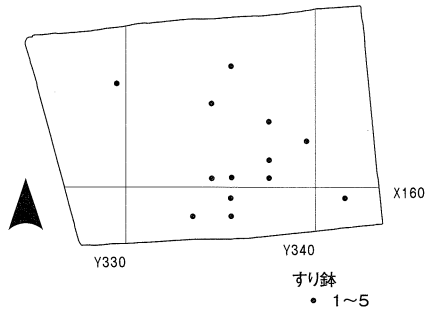
第21図　任海宮田遺跡B10地区中世出土遺物分布図



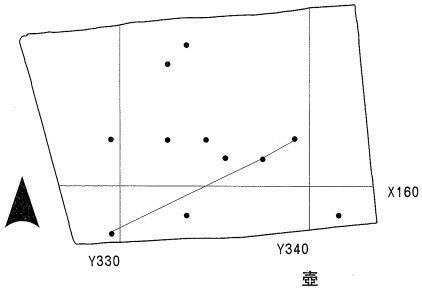
B11地区　遺構全体図



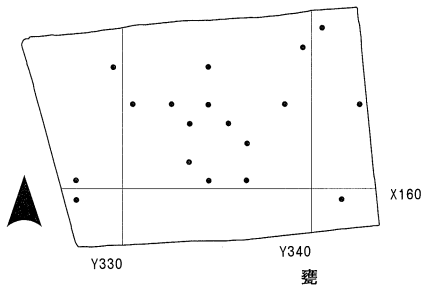
B11地区　中世土師器



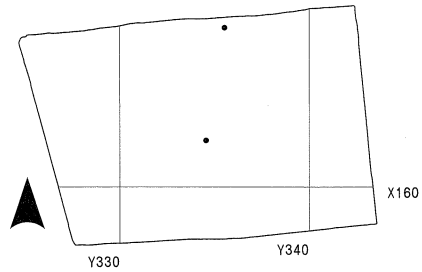
B11地区　珠洲



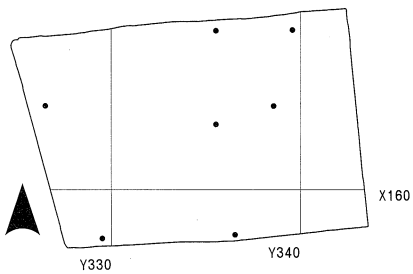
B11地区　珠洲



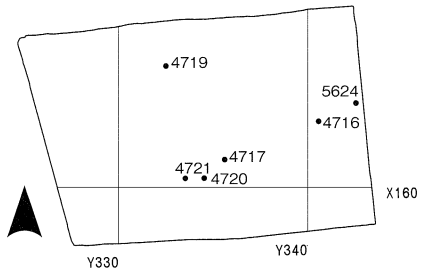
B11地区　珠洲



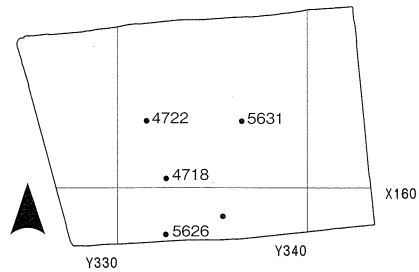
B11地区　八尾すり鉢



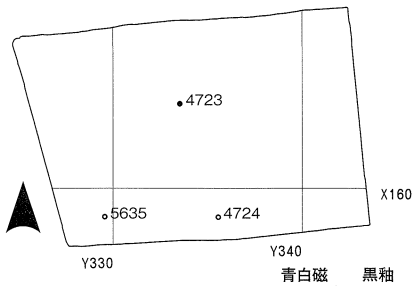
B11地区　八尾



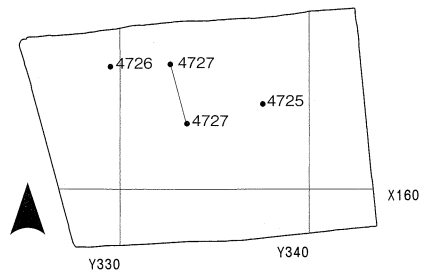
B11地区　青磁



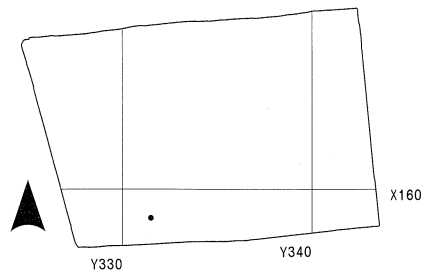
B11地区　白磁



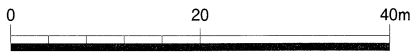
B11地区　青白磁　黒釉



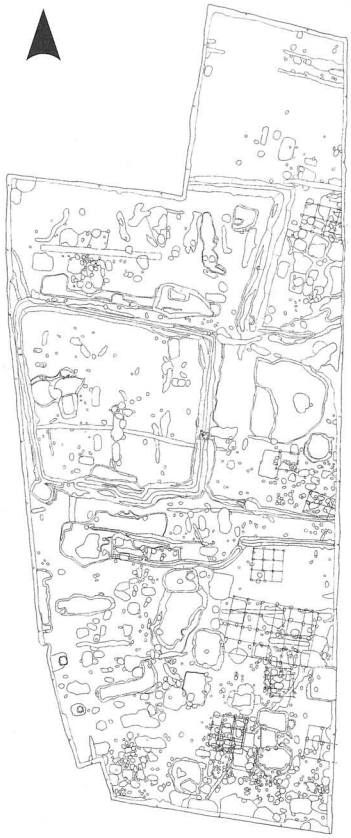
B11地区　瀬戸美濃



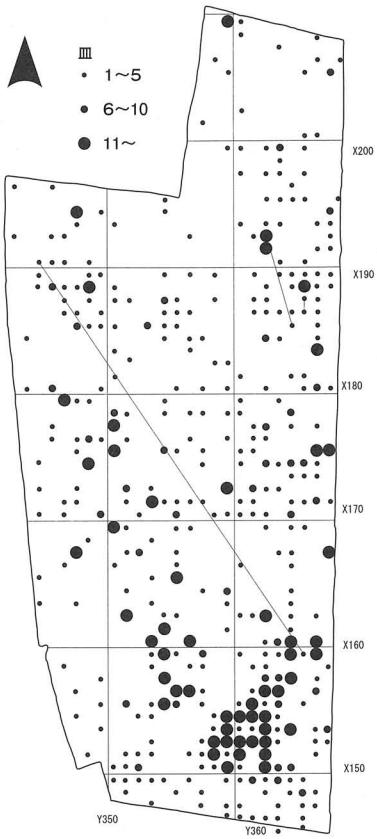
B11地区　瓦質土器



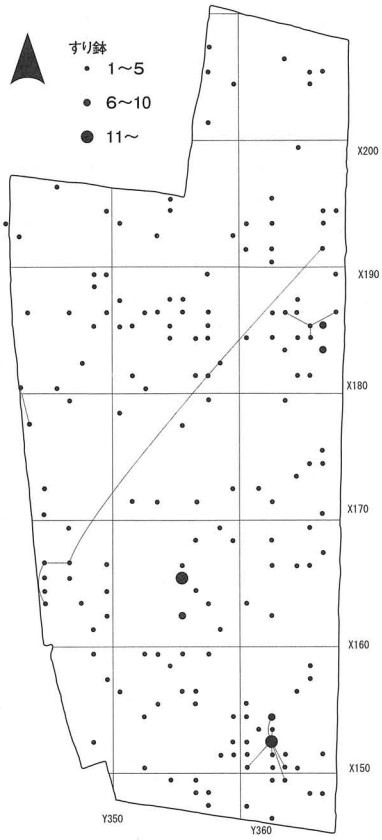
第22図　任海宮田遺跡B11地区中世出土遺物分布図



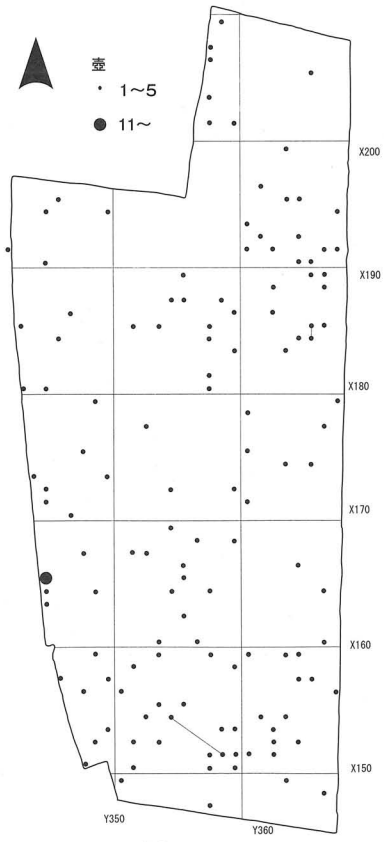
B12地区　遺構全体図



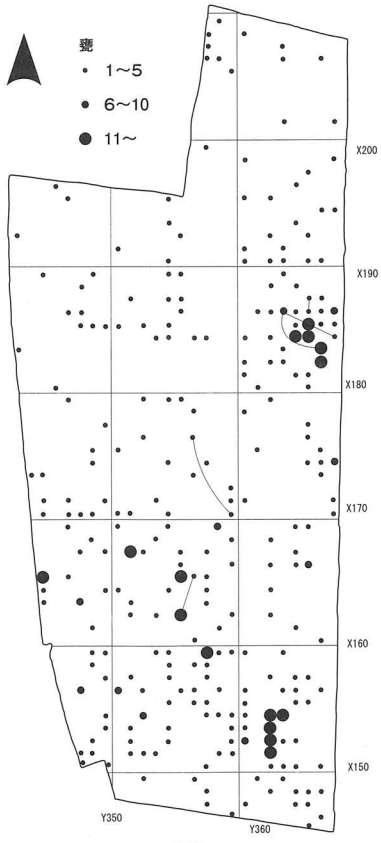
B12地区　中世土師器



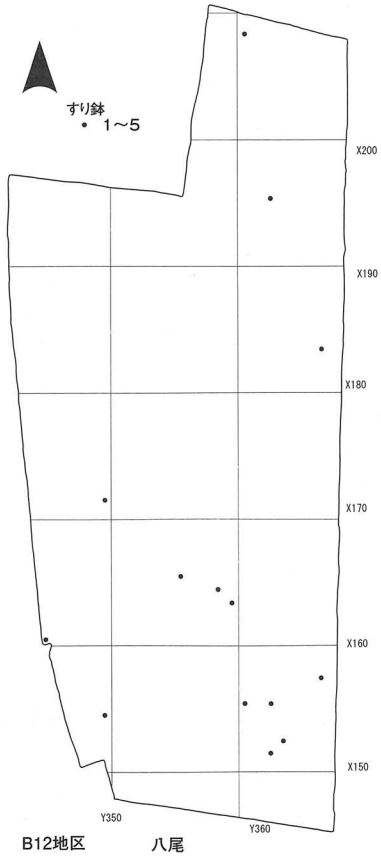
B12地区　珠洲



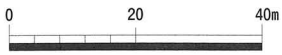
B12地区　珠洲



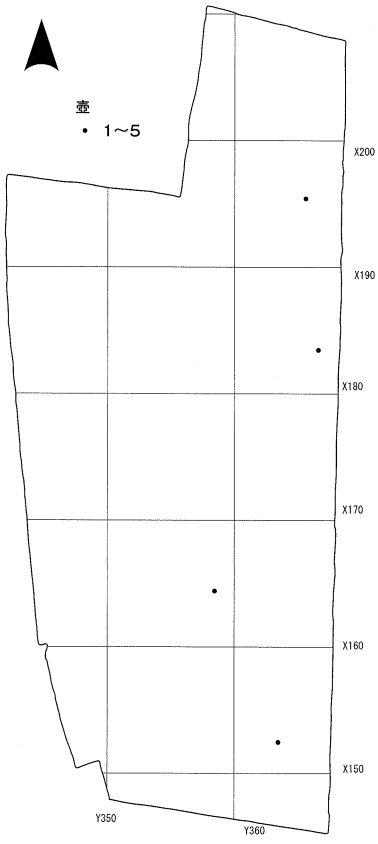
B12地区　珠洲



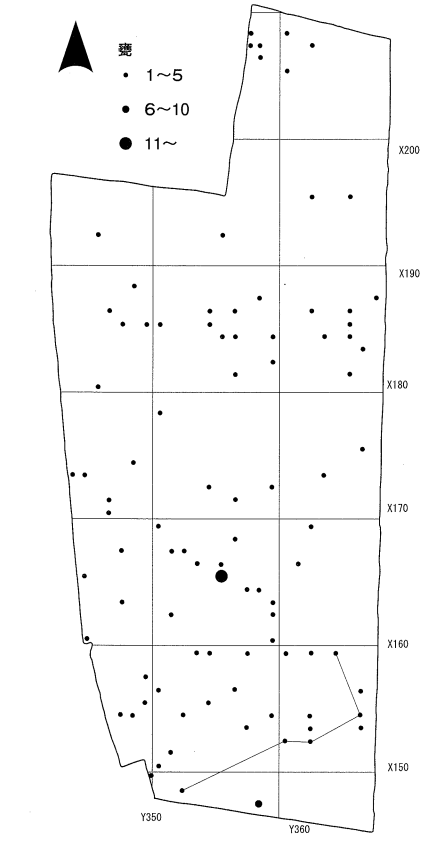
B12地区　八尾



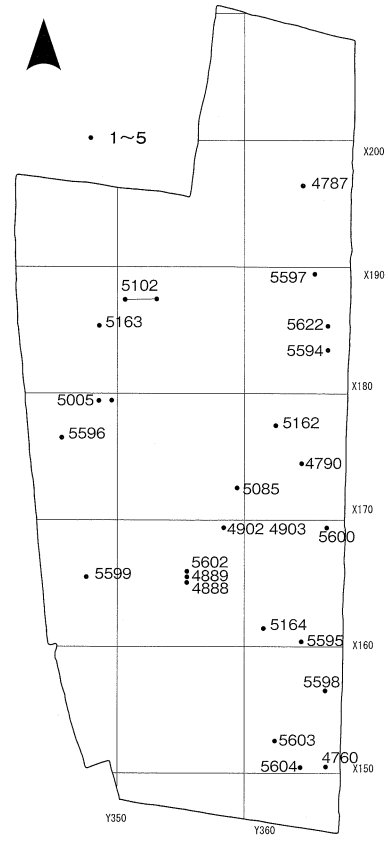
第23図　任海宮田遺跡B12地区中世出土遺物分布図(1)



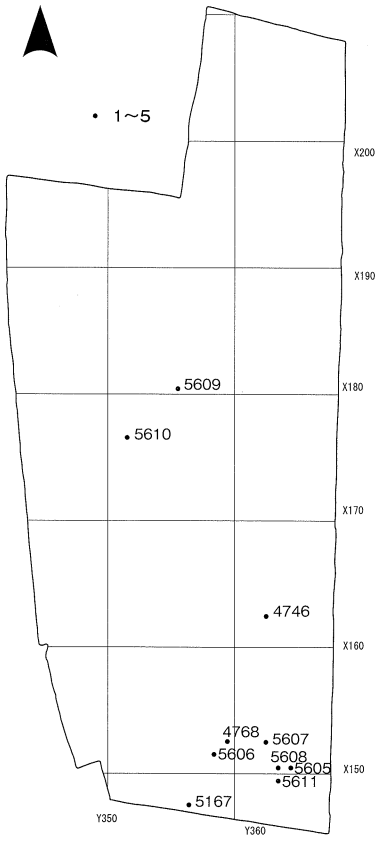
B12地区　八尾



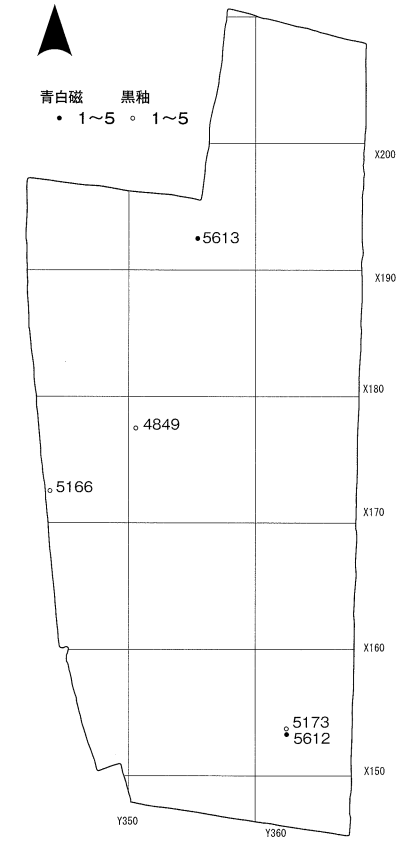
B12地区　八尾



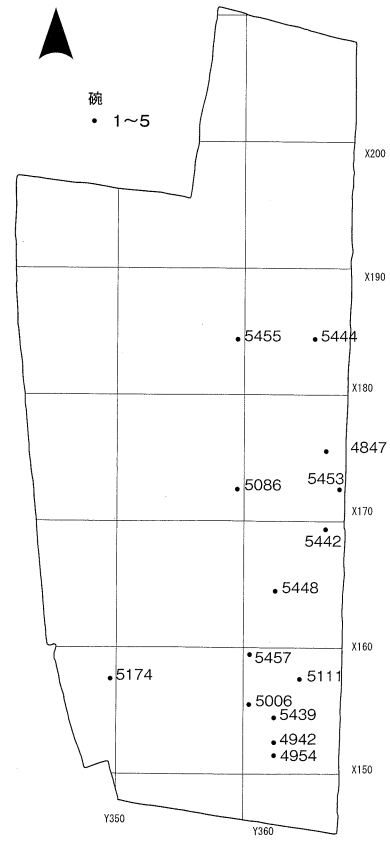
B12地区　青磁



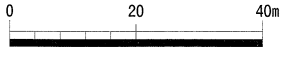
B12地区　白磁



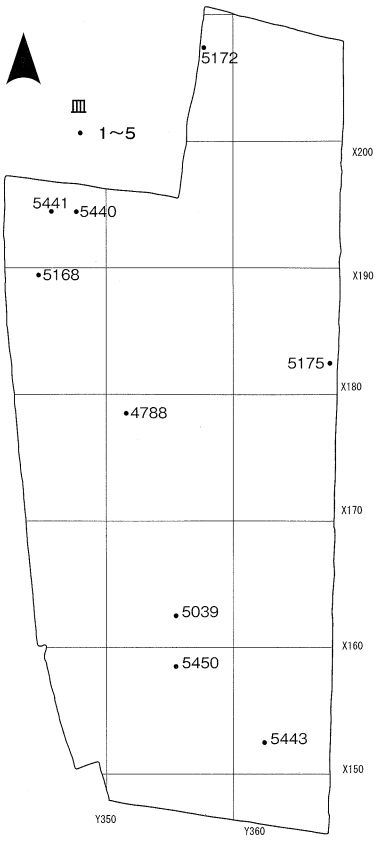
B12地区　青白磁　黒釉



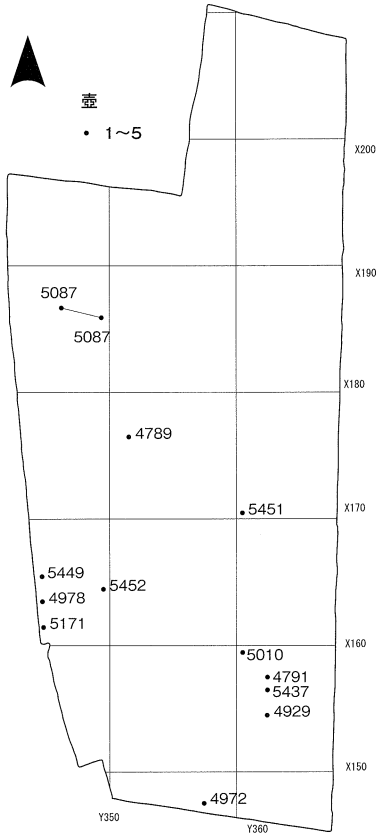
B12地区　瀬戸美濃　碗



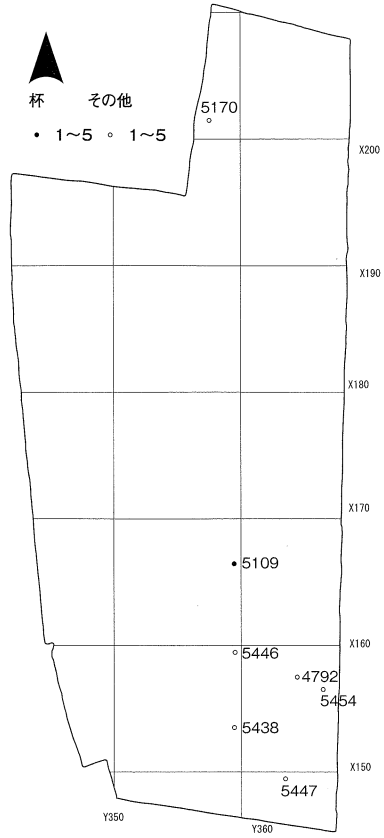
第24図　任海宮田遺跡B12地区中世出土遺物分布図(2)



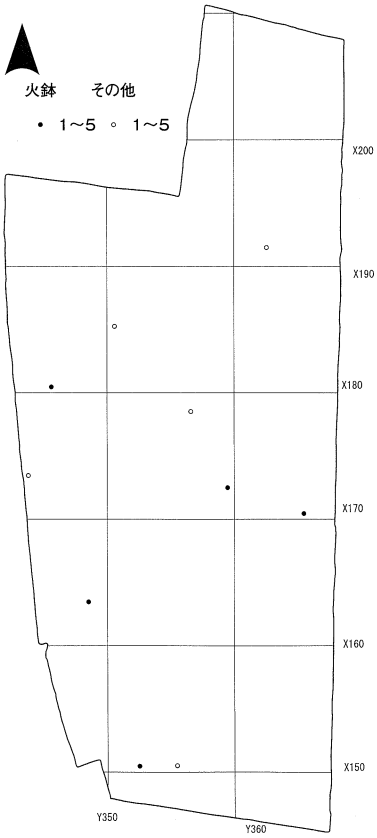
B12地区　瀬戸美濃



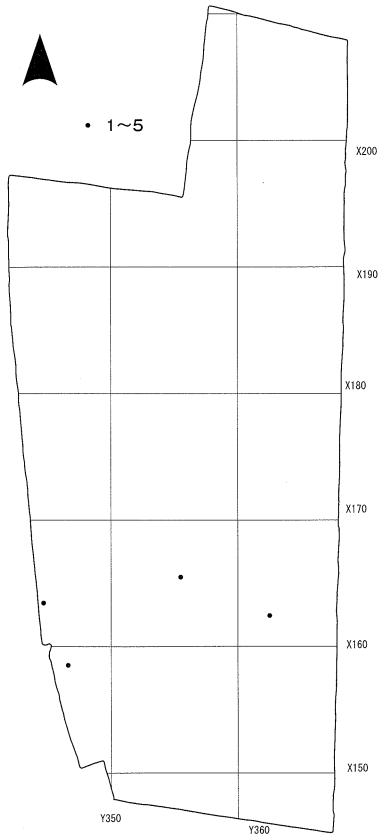
B12地区　瀬戸美濃



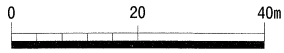
B12地区　瀬戸美濃



B12地区　瓦質土器

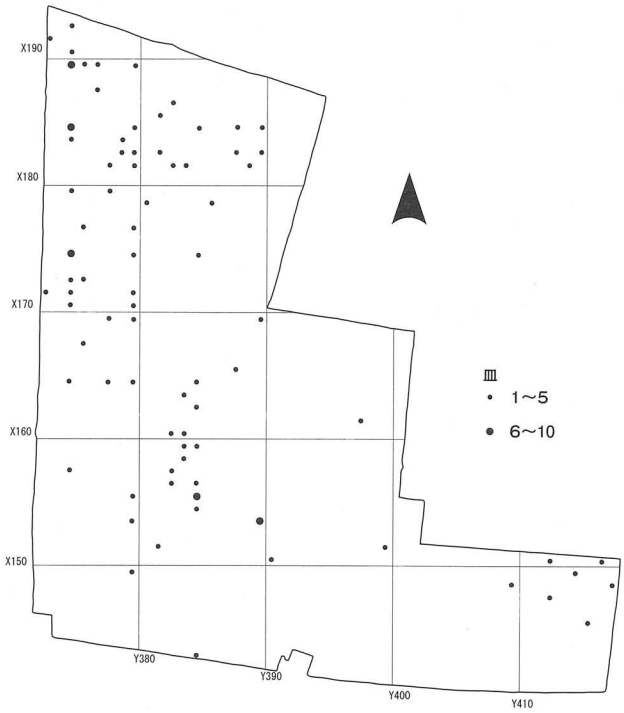


B12地区　土製品

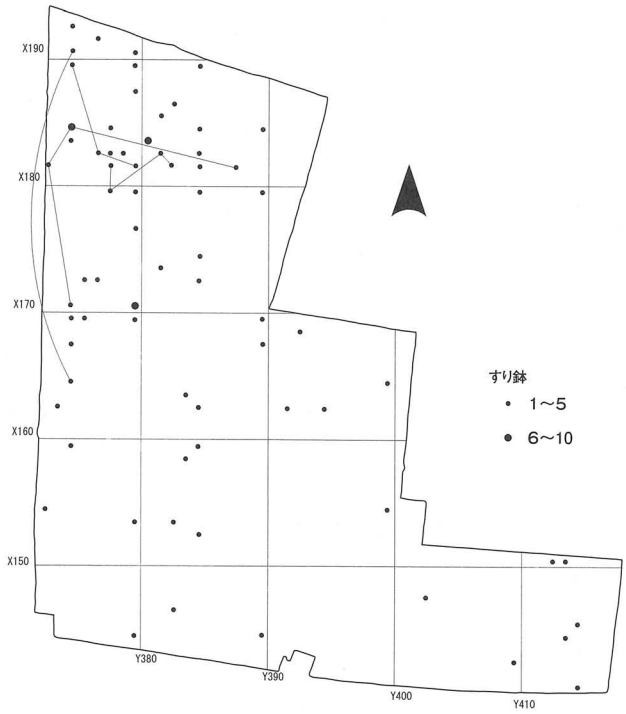


第25図　任海宮田遺跡B12地区中世出土遺物分布図(3)

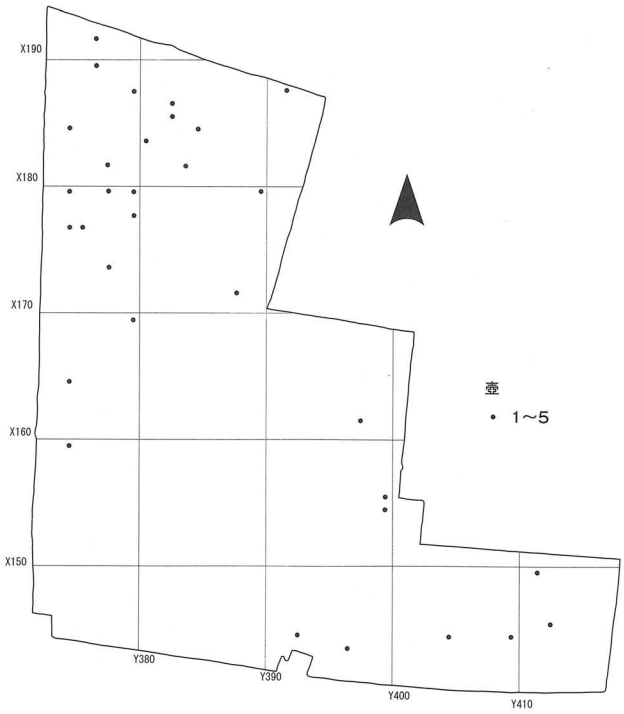
B13地区　遺構全体図



B13地区　中世土師器



B13地区　珠洲

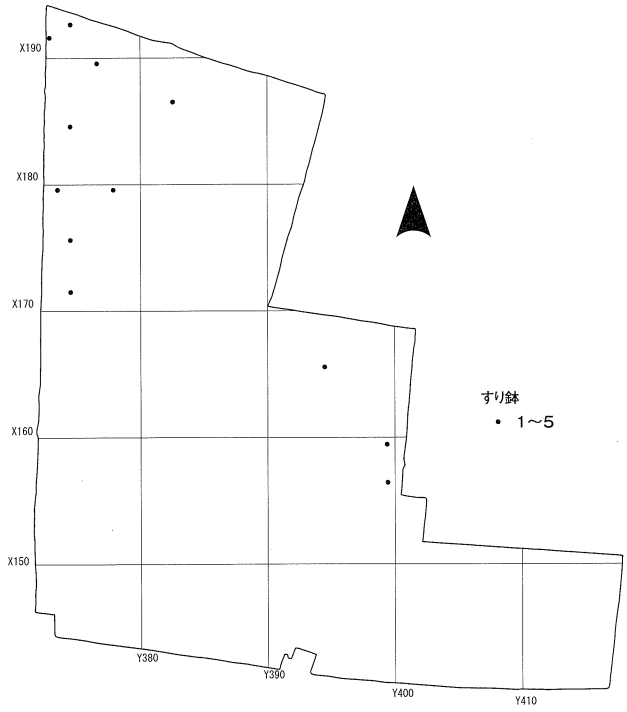


B13地区　珠洲

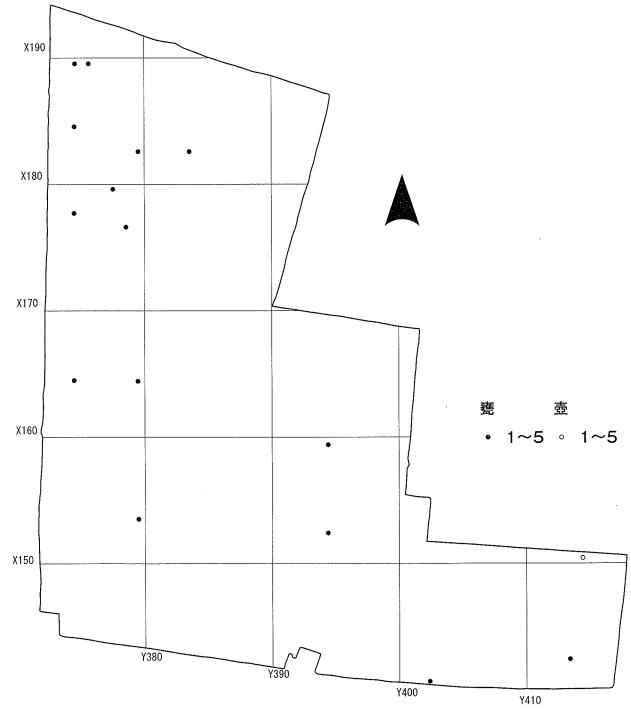
0　20　40m

第26図　任海宮田遺跡B13地区中世出土遺物分布図(1)

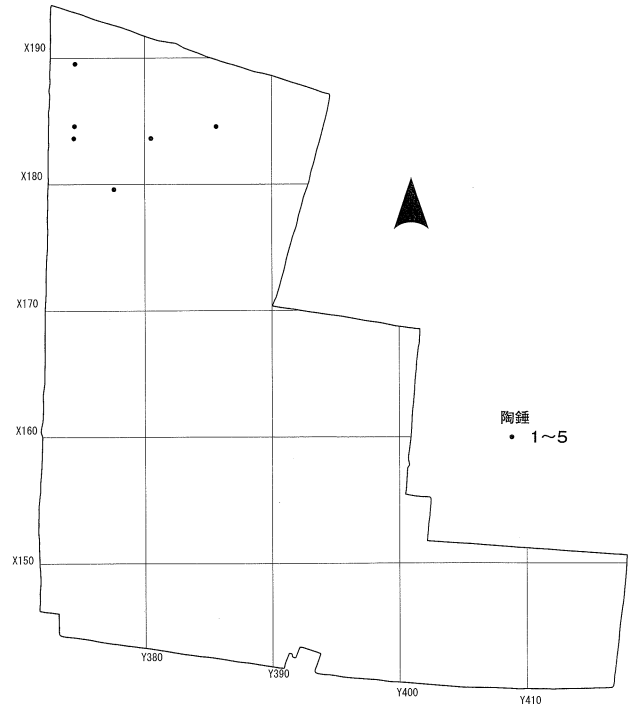
B13地区　珠洲



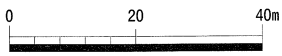
B13地区　八尾



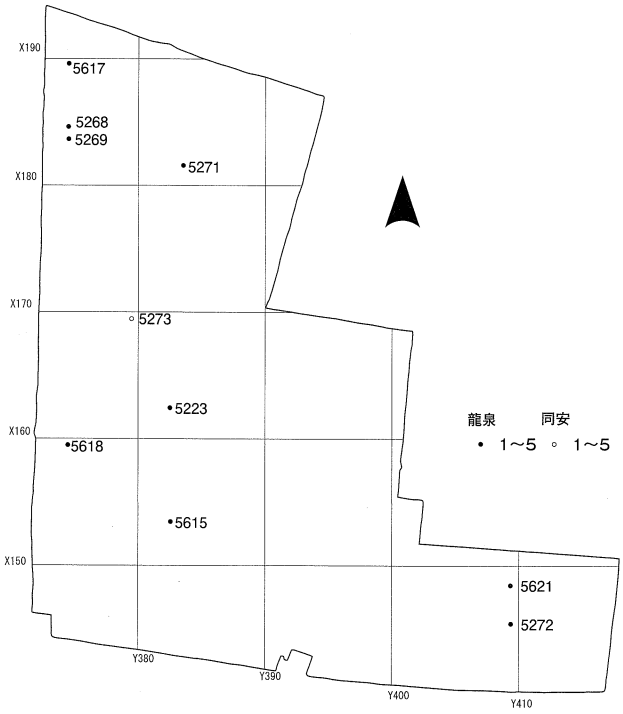
B13地区　八尾



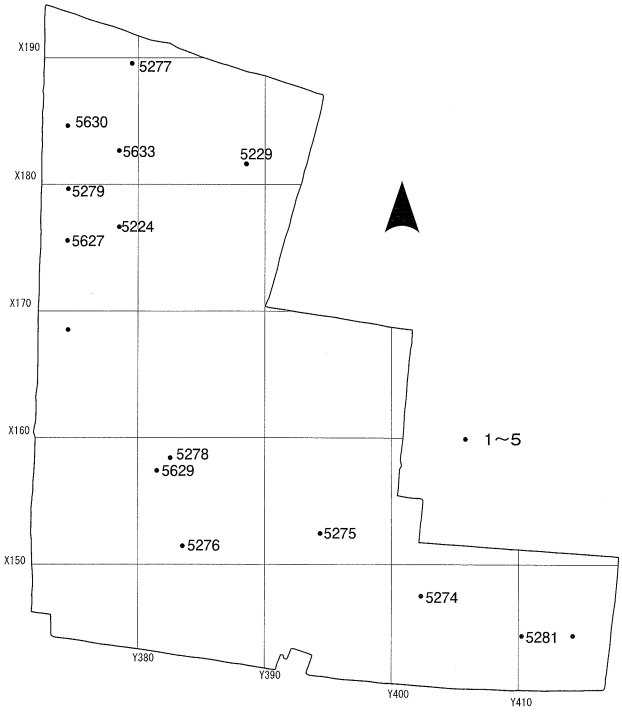
B13地区　八尾



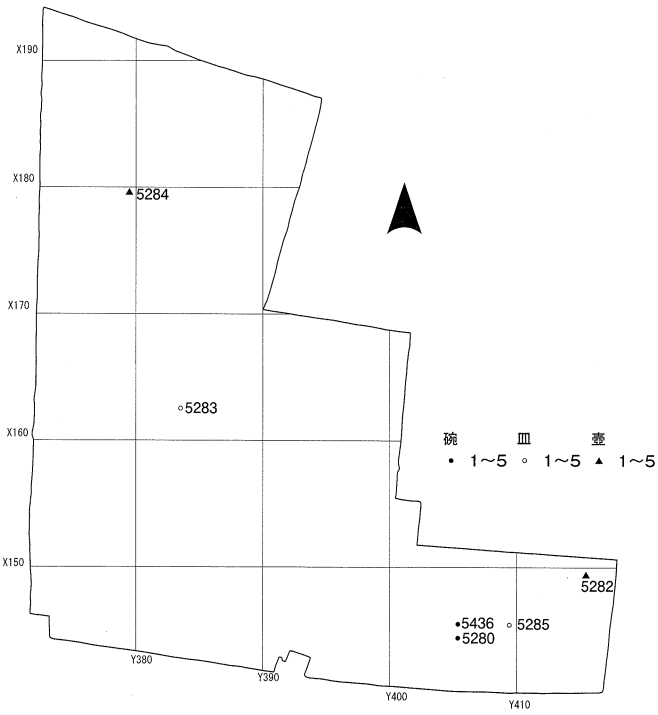
第27図　任海宮田遺跡B13地区中世出土遺物分布図(2)



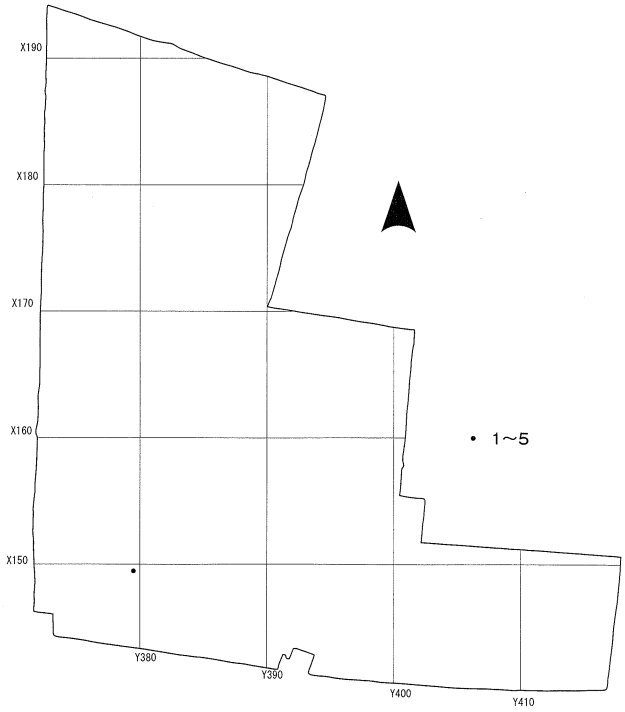
B13地区　青磁



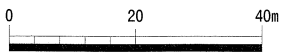
B13地区　白磁



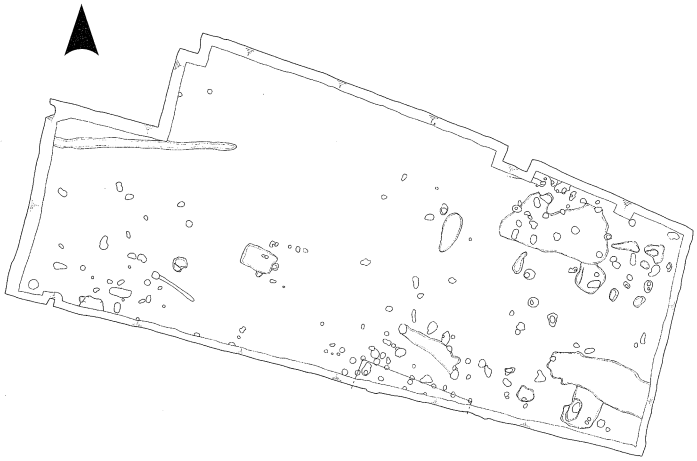
B13地区　瀬戸美濃



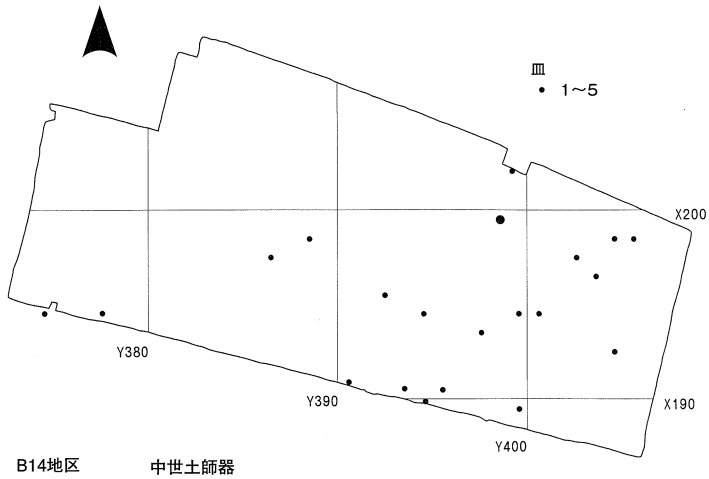
B13地区　瓦質土器



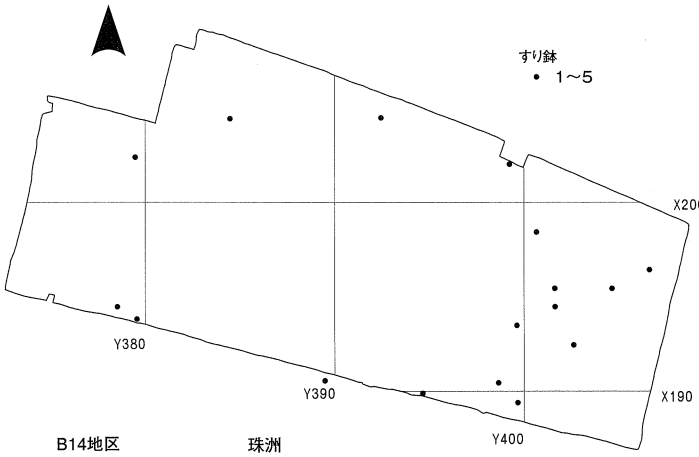
第28図　任海宮田遺跡B13地区中世出土遺物分布図(3)



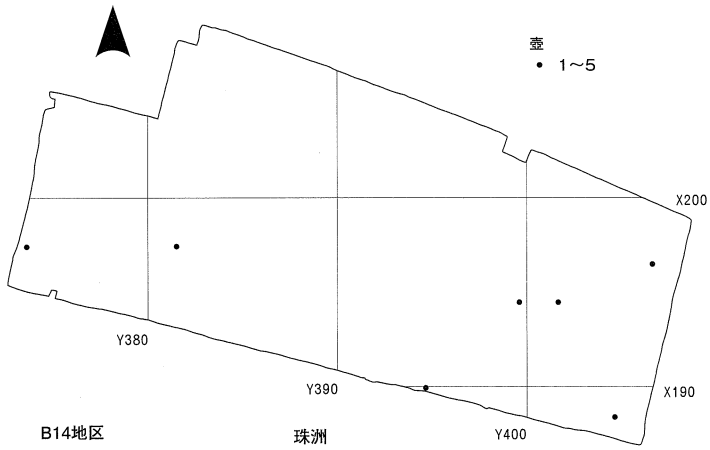
B14地区　遺構全体図



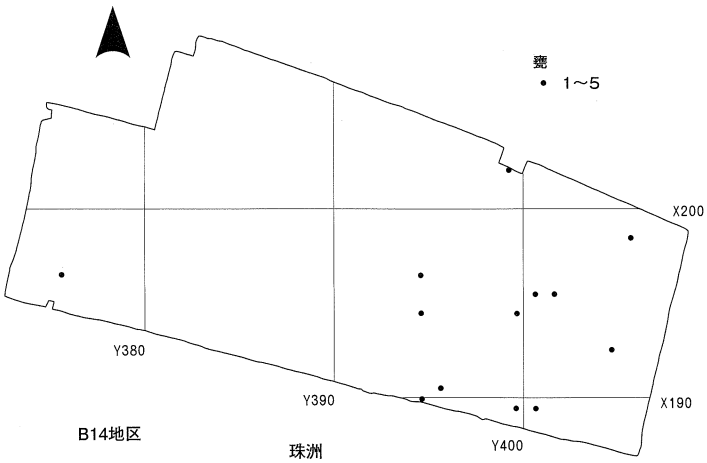
B14地区　中世土師器



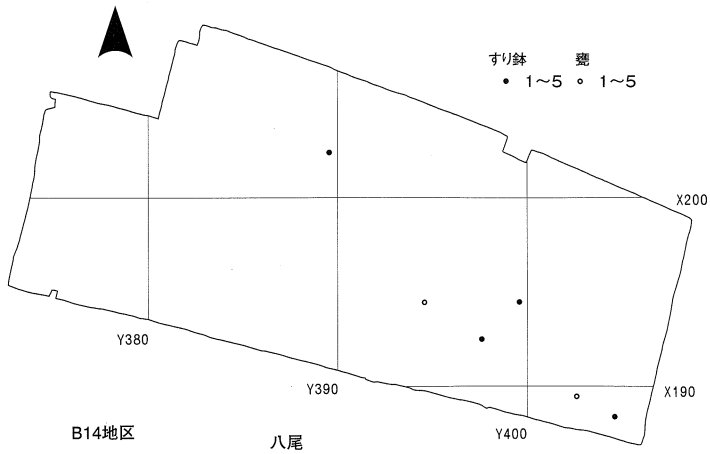
B14地区　珠洲



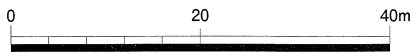
B14地区　珠洲



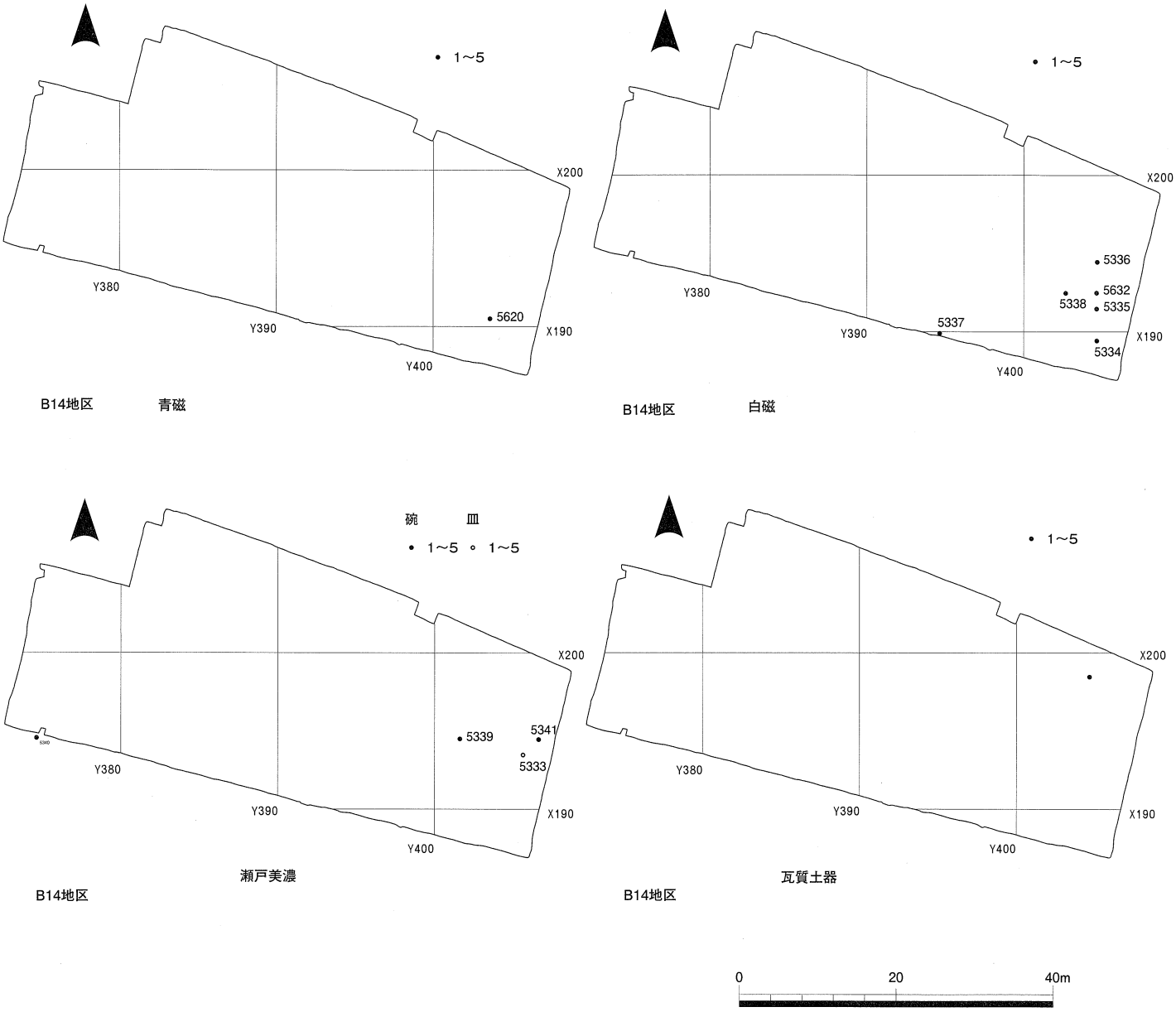
B14地区　珠洲



B14地区　八尾



第29図　任海宮田遺跡B14地区中世出土遺物分布図（1）



第30図　任海宮田遺跡B14地区中世出土遺物分布図(2)

第Ⅲ章　結語

任海宮田遺跡は扇状地に位置し、この周辺一帯は利水に不便な地域であったためか弥生時代から古墳時代にかけて非常に遺跡の希薄な地域である。周辺では扇状地の扇端部寄りに立地する友杉遺跡で、弥生時代後期後半の竪穴住居が１棟確認されている。また背後の台地上では古墳時代中期の福居古墳、古墳時代後期の伊豆宮古墳などが認められ、集落の出現が古墳時代以前に遡る可能性もあるが、現時点では、この地域一帯で集落数が顕著に増加したのは古代以降と考えられる。

任海宮田遺跡における古代の耕地開発を目的とする集落は８世紀前半頃から形成され始め、本格的に竪穴住居や掘立柱建物が増加するのは８世紀後半以降となる。また、周辺では吉倉Ｂ遺跡や南中田Ｄ遺跡などの集落が奈良・平安時代に形成され10世紀前半まで存続するものが多く、この地域周辺が古代に活発に開発されたことが窺える。そして古代の集落が10世紀前半頃に一端途絶した後、中世集落が12世紀中頃に形成され始め、12世紀末～13世紀初頭に活発化し、15世紀頃まで存続する。

〈古代〉

当地区で検出された古代の建物群は、８世紀後半以降の建物群であり、掘立柱建物12棟、礎石建物１棟、竪穴住居36棟で構成される。これらの建物は位置関係や遺物の出土傾向から東西２グループに大別できる。西側建物群はＢ１・Ｂ２・Ｂ６地区で検出された建物で、掘立柱建物、礎石建物、竪穴住居で構成される。一方東側建物群はＢ12・Ｂ13地区で検出された建物で、竪穴住居だけで構成された建物群である。それらは更に、建物の配置から西側建物群で３群、東側建物群で２群に分離することが可能であり、Ｂ地区の建物群は全体で、５群に細分することができる。それらの建物群は、西側建物群で４時期、東側建物群で３時期の建物変遷が窺え、Ｂ地区全体では５時期（８世紀後半～10世紀前半）の遺構変遷が想定できる。

各建物群は、①竪穴住居と掘立柱建物が混在するもの。②竪穴住居のみで構成されるもの。③掘立柱建物のみで構成されるものの３タイプが認められる。①については、建物群３のⅢ期からⅤ期まで認められる。①のものは竪穴住居数棟に１棟程度の掘立柱建物で構成される。このタイプは他の建物群では確認されず、建物群３が土師器焼成遺構の存在や鉄滓、製塩土器の分布状況から、手工業生産に従事していた集団の可能性が高く、その様な集団の建物群に特徴的な建物構成の可能性がある。②については建物群２・４・５で認められる。竪穴住居は、１辺３ｍ前後の小型竪穴住居で、収容人数の低さや構造の簡素さから、冬期を除く農繁期のみの一時的住居棟の可能性が高く、居住者については使役等で駆り出された徴発労働者などが想定される。それら①②タイプの上位に位置するのが、恐らく③タイプの建物群の居住者であろう。③タイプの建物群は、建物群１のⅢ・Ⅳ期と建物群３のⅡ期が該当し、建物構造や配置、遺物の出土傾向から耕地開発を目的とする集落のなかでも、有力者の居住した中心施設と考えられる。両建物群では、須恵器・土師器の供膳具の出土量が、貯蔵具や煮炊具に比べ高い比率を示す。また、建物群１では多量の樽型土錘が出土しており、魚網の管理などを担っていた可能性が高い。時期的には洛北産緑釉陶器や灰釉陶器Ｋ14が出土した建物群３の掘立柱建物２棟がⅡ期の中核域のひとつを形成する。Ⅲ・Ⅳ期の中心施設は、建物群１の灰釉陶器（Ｋ90～Ｏ53）が多量に出土した大型掘立柱建物２棟と考えられる。両者を経営した集団が、建物群３から継続的に移動したのかどうか判然としないが、Ⅲ・Ⅳ期の墨書土器の文字が、建物群１では「平」と書かれたものが多数を占めるのに対して、建物群３では「成」と書かれたものが大半であり、両者で異なるこ

とや、3群の北側（C地区）で「成」が広範囲に分布していることから、別集団であった可能性が示唆される。また、吉倉B遺跡で同時期の大型掘立柱建物が存在することや、東地区でⅡ・Ⅲ・Ⅳ期の墨書土器「縄足」・「貳」・「城長」などの文字群が出土していることから、建物群1や3のような開発を管理・指導した有力者層の居住域が複数存在し、扇状地の開発を複数の勢力が割拠して進めたものと考えられる。墨書土器の内容や、その他の遺物の分布状況、大型掘立柱建物の構造および掘立柱建物の配置などから、B地区の遺跡の性格としては在地有力者層主導型の8世紀後半から10世紀前半までの扇状地における開発拠点集落と考えられる。特に大型掘立柱建物を確認した建物群1は9世紀後半から10世紀初頭の開発拠点における中核域のひとつと考えられる。

〈中世〉

中世の集落では遺構や遺物が12世紀中頃～16世紀以降のものが確認されており、集落の変遷をⅠ期～Ⅶ期の7時期に分けた。建物はⅠ期～Ⅵ期まで存続し、計124棟が確認されている。集落は配置からB1～B8地区までの西地区とB9～B14地区の東地区に大別でき、建物群は自然流路や谷状地形などの土地条件により、更に細分することが可能であり、各微高地上に形成されたことが窺える。

当地区では総柱建物からなる集落が、西・東地区でⅠ期に開始され、Ⅱ期以降は側柱建物も加わって建物群を構成する。特にB4地区では最大面積の建物がⅠ～Ⅳ期を通じて検出され、経営の中心的な役割を担っていた可能性が高い。Ⅰ期～Ⅲ期までの集落景観は、有力層が居住したB4地区建物群の周辺に、それよりも規模の劣る建物群が随伴するように展開したものと考えられる。また西地区では側柱の小型建物が徐々に増加し、大型建物を中心に、中型・小型建物が付随している。一方、東地区では小型建物がなく、大型・中型の総柱建物で集落が構成される傾向にある。竪穴状土坑はⅠ～Ⅲ期では、建物群の2～3割に付随する。建物密度はⅠ～Ⅲ期にかけて西地区の方が高く、50㎡以上の建物数も多い。Ⅱ・Ⅲ期を通じて東西両地区において展開した集落はⅣ期を転換期として規模を縮小していく。Ⅳ期は、東西地区共に4割ほどが側柱建物で占められ、建物密度も同様の傾向を示し、中型・小型建物のみの構成となる。特に東地区ではほとんどが小型建物となり、景観が一変する。続くⅤ期は建物構造・密度ともに東西地区に大きな隔たりがなくなる。また、Ⅵ期に至ると西地区の集落は断絶し、東地区のみとなる。東地区ではSD133・158による区画が継続して作られる。区画外に小型建物が散在し、建物や溝周辺に大型土坑が作られていく。区画の内側には建物が認められず、遺構や遺物も希薄である。こうしたあり方から、日常的な居住空間とは考えにくい。

Ⅶ期は東地区のB12地区に不整形の土坑などが認められるのみである。Ⅶ期以降は居住域として積極的に利用されず、耕地化が進んだものと考えられる。他の地区も含め近世の遺物が出土することから、調査区域外に居住域が移動し存続していた可能性がある。

以上、B地区の調査について簡単にまとめた。任海宮田遺跡は古代～中世を通じて、耕地や水産資源を求め、扇状地の開発を進めた開発経営拠点としての性格の強い集落である。古代集落では幸い、その中核域と末端の建物群を比較することができた。今後残りのC地区の調査では、末端の建物群を更に幅広く検討することが可能である。また、中世集落では、時期毎に集落景観に違いがあることが窺えた。この様な様相が周辺集落でも一般的な傾向であるのかどうか、遺物の組成も含め更に検討する必要がある。

（武田　健次郎）

胎土分類１

１．須恵器Ⅰ群表面　２．須恵器Ⅰ群断面　３．須恵器Ⅱ群表面　４．須恵器Ⅱ群断面
５．須恵器Ⅲ群表面　６．須恵器Ⅲ群断面　７．須恵器Ⅳ群表面　８．須恵器Ⅳ群断面
９．須恵器Ⅴ群表面　10．須恵器Ⅴ群断面　11．須恵器Ⅵ群表面　12．須恵器Ⅵ群断面

写真 2

1

3

5

2

4

6

7

9

11

8

10

12

胎土分類 2

1．須恵器Ⅶ群表面　2．須恵器Ⅶ群断面　3．土師器Ⅰ群表面　4．土師器Ⅰ群断面
5．土師器Ⅱ群表面　6．土師器Ⅱ群断面　7．土師器Ⅲ群表面　8．土師器Ⅲ群断面
9．土師器Ⅳ群表面　10．土師器Ⅳ群断面　11．土師器Ⅴ群表面　12．土師器Ⅴ群断面

2007（平成19年）年３月１日　印刷
2007（平成19年）年３月16日　発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第34集

任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ

－ 公害防除特別土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ －

（第二分冊）

編集・発行　財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887　富山市五福4384番１号
TEL.　076－442－4229

印　　刷　富山スガキ株式会社
〒939-8585　富山県富山市塚原23－1
TEL.　076－429－3553